

0. はじめに

「本原稿の作成・掲載意図」

本原稿作成の狙いは、インフラについて「自分の頭で考える・考察する」きっかけを読者に提供することである。文量も多く読むのに骨が折れる原稿である。興味のある方に読んでいただき技術者として自己研鑽のきっかけの1つになれば作成者にはこの上ない喜びである。

「インフラと地域の関わり考察にあたっての見方」

インフラとは地域や社会を支える下部構造である。計画・整備した当時の時代背景や社会条件と相互に関係しあいながら、整備され・存在しその機能を発揮してきた。それらは、今現場で施設を自分の目で見たからといって、必ずしもその整備に至る苦労、地域の期待、整備の結果・波及効果まで知ることはできない。それを知ることが本原稿の目的の1つである。

整理・考察にあたっては図 0-1 を念頭に置く。図 0-1 は元々河川構造物を念頭に作成した図であるが、河川構造物に限らずインフラ一般にあてはめると考える。インフラとそれを取りまく関連施設は、立地している地域の自然・社会と時代ごとの要請に応じ構築された施設・構造物群の蓄積で構成されるストックインフラ群のシステムと捉えることができる。インフラ群のシステムを構成する施設群および各施設は、(調査を含む)計画→設計→施工→点検・評価にもとづく維持・強化(予防保全)と更新(事後保全)の選択→計画修正→・・・という マネジメントサイクルを繰り返しているはずである(図 0-1 灰色網掛け内)。このマネジメントサイクルは、様々な周辺要因と相互作用を及ぼし合いつつ展開し、ストックインフラを形成する(図 0-1 の灰色網掛けが積み重なっていること・左下矢印でストックを表現)。図 0-1 の上下方向の両矢印は自然史、つまり地形・地質等の自然条件・境界条件、気温・降雨等気候や洪水流・流砂等の環境・外力との相互作用を表現しており、工学の対象である。図 0-1 の左右方向の両矢印を社会史との相互作用と表現している。社会史とは、隣接諸科学の方法・視点・成果を多面的にとりいれ、人間とその社会を深層から全体的・具体的に分析するもの(デジタル大辞泉)であり、時代毎の社会要請・経済状況、地域経済や地域開発等との相互作用と言い換えることができる。

構造物の寿命・耐用年数は 50 年、100 年と言われるがローマの水道橋や街道は現在も構造物として残っている。構造物が有する機能の寿命は、社会ニーズがあれば、1000 年以上続く。1000 年単位の時間を考えると、寿命を左右するのは、L2 地震、L2 洪水等の自然災害だけでなく、戦争・内乱等人為的な災害も含まれるが、これらは計画・設計として見込まない。人類の歴史の中で培った英知を働かせて賢い事後保全として対応するのだろう。工学技術者は、メンテナンスだけでなく、インフラマネジメントを考える

ことが重要であり、そのために従来から扱っている自然史との相互作用に加えて、社会史との相互作用も考えなくてはならない。時間軸では過去も知らないといけないし、検討対象は自然現象だけではいけない。本原稿では自然史からの考察に加えて、社会史からの考察も意識する。

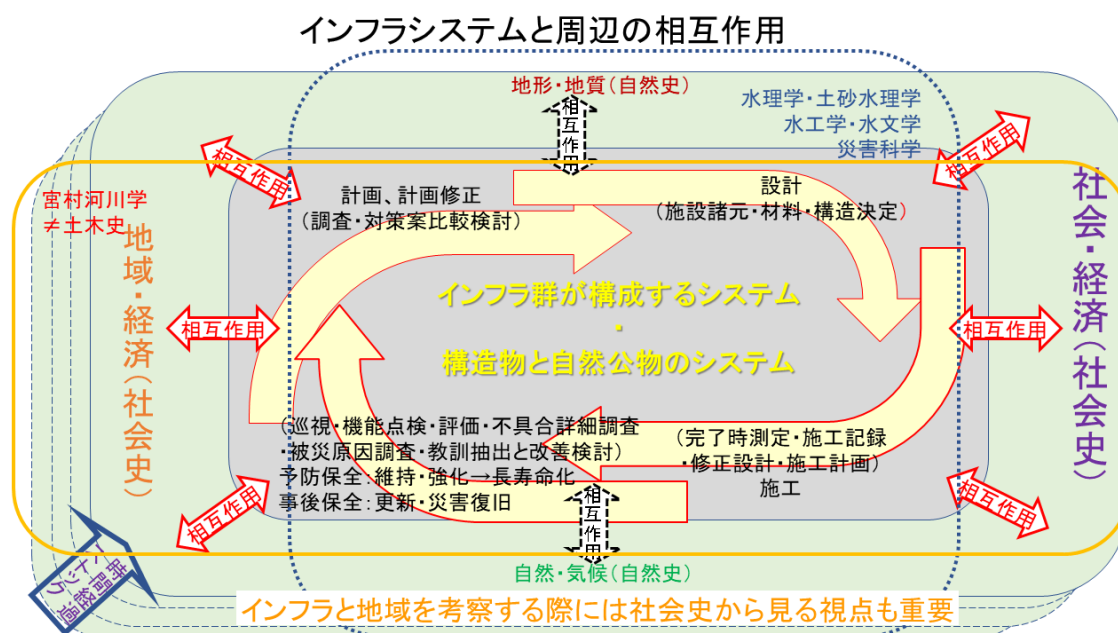


図 0-1 インフラシステムと周辺の相互作用

「既存のインフラ解説コンテンツとの比較」

インフラ解説の対象として、過去のものとしては土木遺産がとりあげられることが多い。土木学会の土木遺産 HP¹²⁾は簡潔に紹介している。毎月発行される土木学会誌では「見どころ土木遺産」という2ページ程度のコーナーがあり、良質な解説・紹介を読むことができる（学会員は過去の記事について Web 閲覧可能）³⁾。各支部が土木遺産紹介 HP を作成している場合も多く^{4)~11)}、土木遺産としての価値や地域にとっての意義について、施設管理者や支部がわかりやすく解説するホームページ⁴⁾⁶⁾⁹⁾やポスターを作成・掲載しているところもある⁷⁾。

コンサルタント協会は機関誌に丁寧な解説記事を掲載し、HP にポータルサイトがつくられている¹²⁾。雑誌「建設マネジメント技術」の紙面講座には、2006 年 1 月から 2014 年 3 月までその施設・事業が持つ意義等について丁寧にわかりやすく解説された記事がある¹³⁾。

コントラクター目線からは、「鹿島の軌跡」¹⁴⁾や大林組の 70 年史等社史¹⁵⁾や大林芳五

郎伝¹⁵⁾にその施設と整備工事について社会背景との関係や人物伝も含めて詳しく解説されており読み応えがある。

関西地区のインフラについては、坂下さんが個人のライフワークとして「見て歩いて考える 関西地区の公共事業・土木遺産探訪」という書籍・HP¹⁶⁾に、その施設整備が持つ技術的意義と社会的意義について丁寧に考察を加えてまとめられている。

本原稿は、坂下さんのコンセプト「見て歩いて考える」に近い「考える」部分を重視している。ただだけではわからないその施設の整備が当該地域において持つ意味等について、文献調査等により調べて、考察したことを掲載する。

<既存インフラ（土木遺産等）の詳細な解説ホームページ例>

- 1) 土木学会土木遺産 HP, (詳細な解説が掲載されているものは限られる。引用元は書籍“日本の土木遺産 近代化を支えた技術を見に行く”), <https://committees.jsce.or.jp/heritage/>
- 2) 土木学会 日本の近代土木遺産 (改訂版), (2008 年 9 月 5 日更新までの都道府県リストがある。解説は書籍.), [https://www.jsce.or.jp/committee/hsce/2800/index2\(2800\).htm](https://www.jsce.or.jp/committee/hsce/2800/index2(2800).htm)
- 3) 土木学会誌, 見どころ土木遺産, (2024 年 9 月号時点で第 239 回。良質な解説が読める.)
- 4) 公益社団法人土木学会北海道支部認定選奨土木遺産, (詳細な解説あり), https://www.jsce.or.jp/branch/hokkaido/_contents/heritage/heritage.htm
- 5) 公益社団法人土木学会東北支部選奨土木遺産とは, (全国版と同じ解説。簡潔な説明のみ), <https://www.jsce.or.jp/branch/tohoku/legacy/index.html>
- 6) 関東の土木遺産, (比較的詳しい解説ページがある), https://www.jsce.or.jp/branch/kanto/04_isan/4_3.html
- 7) 土木学会中部支部選奨土木遺産, (施設ごとのポスターがあり, 簡潔だが充実している解説), <https://www.jsce.or.jp/branch/chubu/isan/isan.html>
- 8) 土木学会関西支部アーカイブス土木遺産, (令和 5 年と 2 年は解説ある。それ以前の年が見つけにくい (全国版へのリンクはあるが, それだと詳細な解説は無い場合が多い)), <https://www.jsce-kansai.net/?p=4253>
- 9) 土木学会中国支部 中国地方の選奨土木遺産, (個別解説ページがあり, 比較的詳細な解説), <https://committees.jsce.or.jp/chugoku/dobokuisan>
- 10) 土木学会四国支部, (全国版の四国パート以外見つけられなかった)
- 11) 公益財団法人土木学会西部支部 九州の近代土木遺産, (簡潔なものが多い。最近選奨されたものは評価情報が掲載されている), https://www.jsce.or.jp/branch/seibu/05_heritage/index.html
- 12) コンサルタント協会, (詳しい解説が掲載されている。土木学会選奨に限っていな

- い。世界の土木遺産も掲載されている), <https://www.jcca.or.jp/dobokuisan/>
- 13) 雑誌 建設マネジメント技術 紙面講座 2006.1～2014.3 まで, (土木学会選奨に限らず時代・地域にとって重要な施設を丁寧に解説。検索しづらいのがもったいない), <https://kenmane.kensetsu-plaza.com/category/backnumber.php?ckbn=f>
- 14) 鹿島の軌跡, (学会選奨遺産施設に限らない鹿島にとってエポックメイキング的な工事について時代背景や人物伝も含めて語られている。コントラクター目線からの解説である点が魅力。), <https://www.kajima.co.jp/gallery/kiseki/list.html>
- 15) 大林組, 大林組 70 年略史, 大林芳五郎傳ほか, (大林組にとって重要な工事について時代背景や人物伝も含めて語られている。コントラクター目線からの解説である点が魅力。), <https://www.obayashi.co.jp/company/history/index.html>
- 16) 関西の公共事業・土木遺産探訪, (学会選奨に限定せず関西地域の重要な施設や事業についてその意義等について詳細に解説。副題に「見て歩いて考える」とあるように工法や実現までの経緯等について整理考察されており充実している。), <http://dobokuisan.starfree.jp/index.html>

※ () は本原稿作成者の感想。

「原稿作成者の経歴」

本原稿における引用，整理・まとめ・作図等はすべて作成者である諏訪の責任で行う．原稿作成者の経歴を以下に示しておく．

氏名 諏訪義雄 昭和 42 年 1 月新潟県三条市で生まれ昭和 60 年 3 月まで在住

昭和 60 年 4 月 北海道大学入学

平成元年 3 月 北海道大学工学部土木工学科卒業

平成元年 4 月 旧建設省 採用

平成元～5.3 土木研究所河川研究室研究員

平成 5.4～6.7 沖縄総合事務局北部ダム事務所調査設計第 1 課調査係長

平成 6.7～8.3 河川局開発課直轄技術第 1 係長

平成 8.4～9.3 関東地方建設局荒川下流工事事務所調査課長

平成 9.4～11.3 滋賀県琵琶湖環境部水政課参事

平成 11.4～14.3 土木研究所・国総研河川研究室 主任研究員・主任研究官

平成 14.4～15.3 国土交通省河川局河川計画課河川情報対策室 課長補佐

平成 15.4～17.3 " " 防災課 課長補佐

平成 17.4～18.7 土木研究所水災害研究グループ主任研究員

平成 18.7～20.3 国土交通省北海道開発局留萌開発建設部留萌ダム建設事業所長

平成 20.4～28.7 " 国土技術政策総合研究所河川研究部海岸研究室長

平成 28.7～30.3 " " " 河川研究室長

平成 30.4～令和 3.3 " " " 河川構造物管理研究官

令和 3.4～5.3 国立研究開発法人土木研究所水工研究グループ長

令和 5.4～6.3 " " 河川総括研究監

令和 6.3 退官

令和 6.7～現在（一財）建設業技術者センター企画調査室長

平成 28.7～令和 3.6 土木学会水工学委員会河川部会副部会長

令和 3.6～令和 5.6 " " 河川部会長

専門分野：河川工学（河川構造物・土砂水理），海岸工学，防災減災 等

博士（工学） R2.3 中央大学

1.	大阪と日本のインフラ	承久の乱後～日清戦争・下関条約前	
1.	9	承久の乱後～鎌倉幕府滅亡	御成敗式目, 元寇, 鎌倉仏教 1
	1.	9.	1 御成敗式目, 地頭請・下地中分 1
		1.	9. 2 元寇 4
			1.9.2.1 文永の役 (1274・文永 11) まで 4
			1.9.2.2 文永の役 (1274・文永 11) 11
			1.9.2.3 文永の役 元軍撤退理由, 後の神風観 21
			1.9.2.4 弘安の役 (1281・弘安 4) までの経緯 24
			1.9.2.5 弘安の役 (1281・弘安 4) 27
			1.9.2.6 弘安の役 (1281・弘安 4) 以後の動向 42
		1.	9. 3 北条氏滅亡と両統迭立 54
		1.	9. 4 鎌倉新仏教 59
		1.	9. 5 諸産業の発達, 文学, 文化 64
1.	10	建武の新政・室町幕府・南北朝～応仁の乱～戦国時代	 70
		1.	10. 1 建武の新政・室町幕府・南北朝～嘉吉の乱 70
		1.	10. 2 日明貿易・勘合貿易 78
		1.	10. 3 応仁の乱, 室町幕府の税制・経済, 室町時代の宗教・文化・ 83
1.	11	戦国時代～江戸時代	 97
		1.	11. 1 織豊時代 97
		1.	11. 2 文禄の役・慶長の役 111
		1.	11. 3 明の海禁政策変遷, 南蛮貿易, 朱印船 126
		1.	11. 4 石見銀山 145
1.	12	大坂御坊・石山本願寺～江戸時代の大坂	 160
		1.	12. 1 大坂御坊・石山本願寺と石山合戦 160
		1.	12. 2 豊臣時代, 徳川時代の大坂 173
		1.	12. 3 航路開拓と河村瑞賢 181
		1.	12. 4 三大市場, 干鰯・鰯粕 191
		1.	12. 5 新田開発, 大和川付替 200
		1.	12. 6 町人文化, 東大寺大仏の再建 219
1.	13	明治以降の大坂	 230
		1.	13. 1 開市・開港～1894 (明治 27) 日清戦争前 230

1. 9 承久の乱後～鎌倉幕府滅亡 御成敗式目, 元寇, 鎌倉仏教

1. 9. 1 御成敗式目, 地頭請・下地中分

○御成敗式目

1221 (承久 3) 年, 承久の乱に勝利した幕府側は, 上皇方の所領 3000 余か所 (西国に多かった) を没収¹⁾し, その地に新たに地頭を置いた. 恩賞地を与えられた多数の東国武士が西国に移住し, 幕府の勢力は弱体であった西国でも強化¹⁾された. 京都に進軍した泰時・時房はそのまま都にとどまり, 朝廷の監視や洛中警固, 西国御家人の統制などに携わる. これが六波羅探題の起源となる.

総じて幕府の勢力は朝廷をしのぎ, 内にあつては執権政治の確立を促したが, 他面, 貴族・社寺一般に対する幕府の政策は寛容・温微であり, 彼らの荘園領主としての地位は, ほとんど打撃を被ることなく保障された¹⁾. 乱後の幕府は, むしろ在地領主, 荘園領主双方の調停者としての機能を強めた¹⁾.

六波羅探題は, 朝廷との交渉・西国御家人の統率・京都と近辺の治安維持・西国の裁判などにあたる²⁾幕府の機関である. 幕府は荘園領主 (貴族・寺社) と在地領主 (武士) との対立を調停する権力として安定し, 僧兵の強訴に対する収拾策などでは, 従来院政が行っていた機能を吸収¹⁾した.

1232 (貞永元) 年の御成敗式目は, そうした時代背景の下に制定された武家法典だったといえる¹⁾. 幕府側の所領・支配権が拡大した結果, 全国各地に進出した地頭御家人が, 本所 (荘園領主), 西国農民など異質の世界の人々との接触で, 多くの紛糾・種々のトラブルにまきこまれるようになった³⁾. 御成敗式目は, それら进行处理し, 幕府の御家人支配を安定させることを目的³⁾として制定された. 御成敗式目は, 公家法, 本所法と並立する武家法の最初の成文法典³⁾である. 式目は, 律令や公家法, 本所法を否定するものではないが, 御家人をおもな対象とする幕府支配圏においてはこれらを排除し, 武家法の自覚的独立を闡明にしたものである³⁾といえる. 立法を主導した泰時の意図は, 法の周知, 裁判の公正, 公家法に対する武家法の独自性の確立などにあつたと思われる³⁾. 法の効力範囲については, あくまで幕府の政治的領域たる東国および幕府管轄の裁判であつた³⁾. しかし, 式目は短期間に全国的に有名な法となり, 裁判でしばしば引用適用されたのはもちろん, 相続法や年紀法は社会的に生きた規範としての効力をさえもつようになり, 立法者の意図にはかかわりなく, 他の幕府法よりはるかに卓絶した効力を空間的にも時間的にも発揮するように³⁾なつた.

○地頭請・下地中分

1232 (貞永元) 年の御成敗式目は, 紛争処理の基本的な考え方を全国に周知したが, それでも地頭と荘園領主 (本家, 領家) の間の紛争は起こつた. 地頭は, その権限を利用して年貢の不法抑留を企てることが多く, 領主側との紛争が絶えなかつた⁴⁾. その年貢抑留の表面上の理由は, 水損, 風損, 干損などの天災による収益の減少であるが, 荘

園領主はそのたびに地頭と紛争を起こし、幕府への訴訟によって解決を図った⁴⁾。

そこでこの紛争解決の煩わしさから免れるためにとられた方法の一つが、地頭請である⁴⁾。地頭請とは、荘園領主・国司と地頭との契約により、地頭が毎年一定の年貢を領主に納入することを条件に、その地の支配を任される制度⁴⁾である。その土地を地頭請所という⁴⁾。毎年一定の年貢とは、豊凶にかかわらず定額年貢の貢納を請け負う⁴⁾ことである。成立の形態は、(1) 武家（将軍家、北条氏）の口入によるもの、(2) 寄進地系荘園における下司職が転化・継承されたもの、(3) 荘園領主・国司との紛争解決のため当事者間での私的契約にもとづいて成立したもの、などに分類できる⁴⁾。(1) (2) は鎌倉初期、主として東国・北陸地方に成立した事例が多く、(3) は鎌倉中期以降、比較的西国地方に成立した事例が多い⁴⁾。鎌倉中期になると、地頭の年貢抑留がひどくなり、荘園領主と地頭の相論が多発⁴⁾した。地頭請は、こうした地頭の動きを一定限度でくいとめるために、荘園領主側から提起された⁴⁾。反面、これによって領主の荘園現地に対する実態把握の努力は放棄され、地頭の下地支配が強化されるきっかけにもなった⁴⁾。これによって地頭は荘園・公領の事実上の支配権を合法的に掌握し、種々の公事課役（雑税）を自由に賦課して在地への支配を強化していった⁴⁾。さらに、契約している請料の滞納・未済なども多く⁴⁾、下地中分に進むことになり、荘園体制は動揺し地頭領主制が促進された⁴⁾。その結果地頭の封建領主化と荘園制の解体が促進されたとみなされている⁴⁾。請所地頭の権限は一様ではなく、定額年貢貢納の代償として下地管理・検断・検注の諸権限を掌握しているものもあるが、力関係によって地頭の権限がいちじるしく制約されている例もあり、荘園領主・国司側の申立てによって請負契約が解除されたものもある⁴⁾。幕府は口入型地頭請は終始保護を加えたが、(3) の私契約型地頭請については、一貫した保護政策を欠き、紛争にさいしては当事者間の話し合いにゆだねられた例が多い⁴⁾。

13 世紀になると地頭や有力名主らによる荘域内外の開発の進行、農業生産以外の山野河海の利用の発展（狩倉・伐木・漁労など）によって、新たな得分が生まれたが、これにともない地頭らの領主的支配は、従来からの年貢・公事抑留にとどまらず、田畠・山野などの領有のいっそうの拡大にむかった⁵⁾。これも、承久の乱後の新補地頭らの荘園侵略に加えて地頭と領家間の紛争頻発の背景となった。その紛争解決のために、地頭請とともに、ややこれにおくれかつ並行して実施されたのが下地中分である⁵⁾。その方法は、争論対象地全体を分割し、それぞれ一方を両方で領有し、相互にこれを侵さないように境界線をひき、地頭方、領家方などと称した⁵⁾。その際田畠・山野などの地目や地形を考慮するのみならず、居住する農民まで二分することもあり、また本来両者の得分（上分）の量に応じて分割する建前から、1/3 と 2/3、2/5 と 3/5 などの不均等分割も少なくなかった⁵⁾。その手続としては当事者相互の和解によるもの（和与中分）と領家方から申請をうけた幕府が、一方的に中分命令を下す例とがあった⁵⁾。

いずれにせよ、その結果、正式に中分絵図や分文が作成され、幕府の承認をえて、相

互に一円支配を行うことになった⁵⁾。なお、14世紀中ごろ以降、室町幕府が半済法実施にともない下地分割を認めたのは、基本的には鎌倉幕府のこのような領家と地頭との領主的対立に対する調停者的妥協策の踏襲と考えられる⁵⁾。

下地中分は、鎌倉中期以降急速に増加し、地頭請とともに地頭の荘園支配権を強化し、荘園制の崩壊を促した⁵⁾。

1. 9. 2 元寇

1.9.2.1 文永の役(1274・文永9)まで

○モンゴル帝国とフビライ・ハン

チンギス・ハンが1206年に建国したモンゴル帝国は領土を広げ、中央アジア遠征への参加命令に従わなかった西夏への懲罰遠征の途上で、1227年に病没する⁶⁾。1229年に2代目皇帝に即位したオゴデイは、1232年に金朝を完全に滅ぼした⁶⁾。モンゴル帝国が金を圧迫している中、崔氏武臣政権下の高麗は、1224年に金の年号を止め、金から独立した。同年に派遣されたモンゴル使臣が高麗領内で殺害される事件が起こり、高麗とモンゴル帝国の国交は断絶する⁷⁾。1231年から、先年の使者の殺害を詰問し降伏・臣従を促す国書がモンゴル側から来牒し、モンゴル軍の侵入が始まる⁷⁾。崔氏は国王を連れて1232年に都を開京から江華島に移して、3年間も徹底抗戦を行ったため、国土と国民はモンゴル軍に蹂躪され、荒廃した⁷⁾。1239年にモンゴルは高麗に入朝を命じたが、高麗側はこれに応じなかった⁷⁾。1247年に再びモンゴル軍が侵入した。この年からモンゴルは継続して侵攻し、高麗は徹底的に抗戦するものの、1258年に北部の和州以北を占領され双城総管府が置かれた⁷⁾。結局、1259年に崔氏政権は打倒され、高麗はモンゴル帝国に降伏、太子(王子)を人質としてモンゴル宮廷に差し出し、高麗王族がモンゴルのカアンの侍衛組織であるケシクの要員に加わるようになった⁷⁾。こうして30年近くに及ぶ高麗の抵抗は終わった⁷⁾。

翌1260(文応元)年、モンゴル帝国の第5代皇帝に即位したフビライ・ハンは、これまでの高麗への武力征圧策を懐柔策へと方針を変更する⁸⁾。高麗への懐柔策の採用は、日本侵攻に高麗を協力させるためだったとされる⁸⁾。フビライが日本に使節を派遣する契機となったのは、1265(文永2年)年、高麗人であるモンゴル帝国の官吏・趙彝等が日本との通交を進言したことが発端である⁸⁾。趙彝は「日本は高麗の隣国であり、典章(制度や法律)・政治に賛美するに足るものがあります。また、漢・唐の時代以来、あるいは使いを派遣して中国と通じてきました」と述べたという⁸⁾。趙彝は日本に近い朝鮮半島南部の慶尚道咸安出身であったため、日本の情報を持っていたともいわれる⁸⁾。フビライは趙彝の進言を受け入れ、早速日本へ使節を派遣することにした⁸⁾。

マルコ・ポーロの『東方見聞録』では、日本は大洋(オケアノス)上の東の島国として紹介されており、フビライが日本へ関心を抱いたのは、日本の富のことを聞かされ興

味を持ったからだとしている⁸⁾。また、南宋遺臣の鄭思肖も「元賊は、その豊かさを聞き、（使節を派遣したもの）倭主が来臣しないのを怒り、土の民力をつくし、舟艦を用意して、これに往きて攻める」と述べており、フビライが日本の豊かさを聞いたことを日本招諭の発端としている⁸⁾。一方、フビライの重臣・劉宣は「至元初（1264）年に高麗の趙開（趙彝か）が日本と通交し南宋を牽制するように建言する」と述べており、招諭の発端として南宋包囲網を敷くことも目的の一つであったことがわかる⁸⁾。ただし、フビライは日本へ使節を派遣するのと同時期に「朕、宋（南宋）と日本とを討たんと欲するのみ」と明言し、高麗の造船により軍船が整えば「或いは南宋、或いは日本、命に逆らえば征討す」と述べるなど、南宋征服と同様に日本征服の意志を表明している⁸⁾。

○第一回使節

フビライは使節の派遣を決定すると、1266（文永3）年付けで日本宛て国書である「大蒙古国皇帝奉書」を作成させ、正使・兵部侍郎のヒズル（黒的）と副使・礼部侍郎の殷弘ら使節団を日本へ派遣した。使節団は高麗を経由して、そこから高麗人に日本へ案内させる予定であった⁸⁾。11月、ヒズル（黒的）ら使節団は高麗に到着し、高麗国王・元宗に日本との仲介を命じ、高麗人の枢密院副使・宋君斐と侍御史・金賛らが案内役に任ぜられた⁸⁾。しかし、高麗側は、モンゴル帝国による日本侵攻の軍事費の負担を恐れていた⁸⁾。そのため、翌年、宋君斐ら高麗人は、ヒズル（黒的）ら使節団を朝鮮半島東南岸の巨済島まで案内すると、対馬を臨み、海の荒れ方を見せて航海が危険であること、貿易で知っている対馬の日本人はかたくなで荒々しく礼儀を知らないことなどを理由に、日本への進出は利とならず、通使は不要であると訴えた⁸⁾。これを受けて使節は、高麗の官吏と共にフビライの下に帰朝した⁸⁾。

しかし、報告を受けたフビライは予め「風浪の陰阻を理由に引き返すことはないように」と日本側への国書の手交を高麗国王・元宗に厳命していたことや、元宗が「（フビライの）聖恩は天大にして、誓って功を立てて恩にむくいたい」と絶対的忠誠を誓いながら、フビライの命令に反して使節団を日本へ渡海させなかったことに憤慨した⁸⁾。怒ったフビライは、今度は高麗が自ら責任をもって日本へ使節を派遣するよう命じ、日本側から要領を得た返答を得てくることを元宗に約束させた⁸⁾。命令に逆らうことのできない元宗はこの命令に従い、元宗の側近であった起居舎人・潘阜らを日本へ派遣する⁸⁾。

○第二回使節

1268（文永5）年正月、高麗の使節団が大宰府に到来。大宰府の鎮西奉行・少貳資能は大蒙古国皇帝奉書（日本側呼称：蒙古国牒状）と高麗国王書状、使節団代表の潘阜の添え状の3通を受け取り、鎌倉へ送達する⁸⁾。鎌倉幕府では、この年の3月に北条時宗が八代執権に就任したばかりであった⁸⁾。当時の国政は、外交は朝廷の担当であったため、幕府は朝廷に国書を回送した⁸⁾。朝廷と幕府の仲介職である関東申次の西園寺実氏は幕府から国書を受け取ると、院政を布く後嵯峨上皇に「異国のこと」として提出した⁸⁾。蒙古国書への対応を巡る朝廷の評定は連日続けられた⁸⁾。

蒙古国牒状	現代語訳
上天眷命 大蒙古國皇帝奉書 日本國王、朕惟自古小國之君 境土相接、尚務講信修睦、況我 祖宗受天明命、奄有區夏、遐方異 域、畏威懷德者、不可悉數、朕即 位之初、以高麗無辜之民久瘁 鋒鏑、即令罷兵還其疆域、反其 旄倪、高麗君臣、感戴來朝、義雖 君臣、而歡若父子、計 王之君臣、亦已知之、高麗朕之 東藩也、日本密迕高麗、開國以 來、亦時通中國、至於朕躬、而無 一乘之使以通和好、尚恐 王國知之未審、故特遣使持書 布告朕意、冀自今以往、通問結 好、以相親睦、且聖人以四海爲 家、不相通好、豈一家之理哉、至 用兵、夫孰所好 王其圖之、不宣 至元三年八月 日	天の慈しみを受ける 大蒙古国皇帝は書を 日本国王に奉ず。朕（フビライ・ハン）が思う に、いにしえより小国の君主は 国境が相接していれば、通信し親睦を修めるよう 努めるものである。まして我が 祖宗（チンギス・ハン）は明らかな天命を受け、区 夏（天下）を悉く領有し、遠方の異国にして 我が威を畏れ、徳に懷く者はその数を知らぬ程で ある。朕が即位した 当初、高麗の罪無き民が鋒鏑（戦争）に疲れたの で 命を發し出兵を止めさせ、高麗の領土を還し老人 や子供をその地に帰らせた。 高麗の君臣は感謝し敬い來朝した。義は君臣なり というが その歡びは父子のようである。 この事は王（日本国王）の君臣も知っていること だろう。高麗は朕の 東藩である。日本は高麗にごく近い。また開国以 來 時には中国と通交している。だが朕の代に至って いまだ一度も誼みを通じようという使者がない。 思うに、 王国（日本）はこの事をいまだよく知らないの ではないか。ゆえに特使を遣わして国書を持参させ 朕の志を布告させる。願わくは、これ以降、通交 を通して誼みを結び もって互いに親睦を深めたい。聖人（皇帝）は四 海（天下）をもって 家となすものである。互いに誼みを通じないとい うのは一家の理と言えるだろうか。 兵を用いることは誰が好もうか。 王は、其の点を考慮されよ。不宣。 至元三（1266）年八月 日
- 宗性筆『調伏異朝怨敵抄』蒙古国牒状、東大寺尊勝院文書	

幕府では蒙古人が凶心を挟んで本朝（日本）を窺っており、近日牒使を派遣してきたとして、蒙古軍の襲来に備えて用心するよう御家人らに通達した⁸⁾。鎌倉には南宋より禅僧が渡来しており、これらの南宋僧侶による進言や、大陸におけるモンゴル帝国の暴虐などの報告もあったとされる⁸⁾。

日本側からの反応が無かったため、太宰府到来から7か月後に使節団は高麗へ帰還しており、高麗は遣使の失敗の旨をフビライに報告している⁸⁾。同1268（文永5）年5月、フビライは使節団の帰還を待たずして「朕、宋（南宋）と日本とを討たんと欲するのみ」

と日本征服の意思を表明し、高麗に戦艦 1,000 艘の造船を命じている⁸⁾。また同年 10 月には、フビライは高麗に厳命した軍兵 10,000 と戦艦 1,000 艘の軍備が整えば「或いは南宋、或いは日本、命に逆らえば征討す」と述べ、さらにモンゴル帝国の官吏を高麗に派遣して朝鮮半島の黒山島より日本侵攻ルートを調査させた⁸⁾。

このフビライが最初に送った大蒙古国皇帝奉書は、「上天」・「大蒙古国皇帝（フビライ・ハン）」・「祖宗（チンギス・ハン）」といった特定の語を一文字高く記述する台頭形式で、対して「日本国王」はそれら特定の語より一文字下げて記述しており、間接的に日本国王を臣下とする関係を望んでいることを示唆するもので、それが入れられなければ、武力を用いることを仄めかすなど恫喝を含んだものであった⁸⁾。

この大蒙古国皇帝奉書の内容については諸説あるが、末尾の「不宣」という語は、友人に対して用いられるものであり、モンゴル帝国皇帝が他国の君主に与える文書としては前例のないほど鄭重なものとする見解がある一方、高圧的であるという見解もあり、歴史小説家・陳舜臣は、冒頭の「朕が思うに、いにしえより小国の君主は国境が相接していれば…」の「小国」は日本を指し、最後に「兵を用いることは誰も好まない」と武力で脅すなど、歴代中国王朝国書と比較しても格段に無礼としている⁸⁾。

○第三回使節

1269（文永 6）年 2 月、フビライは再び正使・ヒズル（黒的）、副使・殷弘ら使節団を日本へ派遣、高麗人の起居舎人・潘阜らの案内で総勢 75 名の使節団が対馬に上陸した⁸⁾。使節らは日本側から拒まれたため対馬から先には進めず、日本側と喧嘩になった際に対馬島人の塔二郎と弥二郎という 2 名を捕らえて、これらと共に帰還した⁸⁾。

フビライは、使節団が日本人を連れて帰ってきたことに大いに喜び、塔二郎と弥二郎に「汝の国は、中国に朝貢し来朝しなくなってから久しい。今、朕は汝の国の来朝を欲している。汝に脅し迫るつもりはない。ただ名を後世に残さんと欲しているのだ」と述べた⁸⁾。フビライは塔二郎と弥二郎に、多くの宝物を下賜し、フビライの宮殿を観覧させた⁸⁾。宮殿を目の当たりにした二人は「臣ら、かつて天堂・仏刹ありと聞いていましたが、まさにこのことをいうのでしょうか」と感嘆した⁸⁾。これを聞いたフビライは喜び、二人を首都・燕京（後の大都）の万寿山の玉殿や諸々の城も観覧させたという⁸⁾。

○第四回使節

1269（文永 6）年 9 月、捕えた対馬島人の塔二郎と弥二郎らを首都・燕京（後の大都）から護送する名目で使者として高麗人の金有成・高柔らの使節が大宰府守護所に到来した。今度の使節はフビライ本人の国書でなく、モンゴル帝国の中央機関・中書省からの国書と高麗国書を携えて到来した⁸⁾。

2 度目の国書がモンゴル帝国の中央機関・中書省からの中書省牒だったことについて、フビライが「皇帝」の国書では日本側からの返書は得にくいと判断し、皇帝本人からの国書よりも下部機関である「中書省」からの国書にすれば日本側が返書し易いと考えたのではないかとされる⁸⁾。この中書省牒は日本に明確に服属を要求する内容だった⁸⁾。

この中書省牒に対して、朝廷の評定では、モンゴル帝国の服属の要求を拒否することに決し、さらに拒否の返書を出すこととした⁸⁾。早速、文書博士・菅原長成が返書文を起草し、中書省牒に対して返書「太政官牒案」草案を作成した⁸⁾。草案の内容は以下のように、モンゴル帝国に対して日本の独立性を主張した内容だった⁸⁾。

事情を案ずるに、蒙古の号は今まで聞いたことがない。(中略) そもそも貴国はかつて我が国と人物の往来は無かった。

本朝(日本)は貴国に対して、何ら好悪の情は無い。ところが由緒を顧みずに、我が国に凶器を用いようとしている。(中略) 聖人や仏教の教えでは救済を常とし、殺生を悪業とする。(貴国は) どうして帝徳仁義の境地と(国書で) 称していながら、かえって民衆を殺傷する源を開こうというのか。

およそ天照皇太神(天照大神)の天統を耀かしてより、今日の日本皇帝(龜山天皇)の日嗣を受けるに至るまで(中略) ゆえに皇帝の国土を昔から神国と号すのである。知をもって競えるものでなく、力をもって争うことも出来ぬ唯一無二の存在である。よく考えよ。

また、高麗国王・元宗にも返書案を作成しており、捕えられていた塔二郎と弥二郎の送還に便宜を図ってくれた高麗側に慰労と感謝を述べた内容であった⁸⁾。しかし、幕府は評定により「返牒遣わさるべからずの旨」を決し、朝廷に返書しないことを上奏した⁸⁾。朝廷が幕府の提案を受け入れたため、モンゴル帝国からの使節は返書を得ることに失敗し帰還した⁸⁾。

○三別抄の援助要請

1271(文永8)年9月、高麗に反乱を起していた三別抄から、軍事的援助を乞う使者が到来⁸⁾した。この時、三別抄は自らを高麗王朝と称していた⁸⁾。

受け手側の朝廷はすでに高麗からもたらされた国書に対して、今回もたらされた高麗王朝を名乗る書状がモンゴル帝国を非難し珍島への遷都を告げ、さらにはモンゴル帝国と対抗するため数万の軍勢の援助を日本側に乞う内容であったため、非常に不可解に感じられ、この書状に対しての評定では様々な意見が述べられた⁸⁾。なお、三別抄の使者に対しての日本側の対応内容史料がなく、その後の詳細は詳らかではない⁸⁾。

一方で三別抄は、同年にモンゴル帝国に対して「駐屯する(蒙古)諸軍を退けて欲しい。そうすれば、然るのち帰順する。しかし、蒙古の將軍・ヒンドゥ(忻都)が要請に従おうとしない。今(フビライに)お願いする。(我らが)全羅道を得てそこで居住できるのであれば、直ちに朝廷に隷属する」と懇願している⁸⁾。

1273(文永10)年4月、元は高麗軍を主力とする軍船160艘、12,000人(高麗軍6千、屯田軍2千、漢軍2千、武衛軍2千)の軍をもって、結局三別抄を平定した⁸⁾。

○第五回使節

1271(文永8)年9月、三別抄からの使者が到来した直後に、元使である女真人の趙良弼らがモンゴル帝国への服属を命じる国書を携えて5度目の使節として100人余りを引き連れて到来した⁸⁾。フビライは、趙良弼らが帰還するまでとして、日本に近い高

麗の金州にクルムチ（忽林赤）、王国昌、洪茶丘の軍勢を集結させるなど、今回の使節派遣は軍勢力を伴うものであった⁸⁾。

博多湾の今津に上陸した趙良弼は、日本に滞在していた南宋人と三別抄から妨害を受けながらも大宰府西守護所に到着した⁸⁾。日本側が大宰府以東への訪問を拒否したため、趙良弼はやむなく国書の写しを手渡し、11月末の回答期限を過ぎた場合は武力行使も辞さないとした⁸⁾。これに対して朝廷は評定を行い、前回に文書博士・菅原長成が作成した返書『太政官牒案』草案を少々手直しの上で返書を渡すということで一旦は決定を見たが、その後も使節団に関する評定が続いた⁸⁾。一方、大宰府では、ひとまず先に返書の代わりとして、日本の使節がフビライのもとへと派遣されることになった⁸⁾。趙良弼もまた日本使とともに帰還の途に就いた⁸⁾。

同年11月、フビライは国号を新たに「大元」と定める⁸⁾。

○日本使の大都訪問

1272（文永9）年、12人の日本使（『元史』日本伝では26人）が1月に高麗を経由し、元の首都・大都を訪問する⁸⁾。元側は日本使の意図を元の軍備の偵察だと判断し、フビライへの謁見は許さなかった⁸⁾。趙良弼から高麗の金州に駐屯する元軍が日本側を警戒させていると報告があったため、元の丞相・アントン（安童）は日本使に対し、その軍は三別抄に備えたものだと言明するようフビライに進言し、フビライはこれを採用している⁸⁾。大都を後にした日本使は、4月に再び高麗を経由して帰国した⁸⁾。

○第六回使節

1272（文永9）年4月又は12月、元使・女真人の趙良弼らは、日本が元陣営に加わることを恐れる三別抄の妨害を受けながらも、6度目の使節として再び日本に到来した⁸⁾。

『元朝名臣事略』野斎李公撰墓碑によれば、趙良弼ら使節団が到来すると、日本の「国主」はフビライ宛に返書し和を議そうとしたが、日本が元の陣営に加わることを警戒した南宋より派遣された渡宋禅僧・瓊林が帰国して趙良弼らを妨害したため、趙らは返書を得ることができなかったという⁸⁾。また、『賛皇復鼎記』にも、南宋は自国と近い日本が元の陣営に加わることを恐れて、瓊林を遣わして妨害したとある⁸⁾。さらに趙良弼らは大宰府より日本の国都（京都）に入ることができなかったことから、遂に元に帰還した⁸⁾。6月に帰還した趙良弼は、日本の君臣の爵号、州郡の名称とその数、風俗と産物をフビライに報告した⁸⁾。

フビライは、途中で引き返すなど日本に未到着のものも含む合計6回、日本へ使節を派遣したが、服属させる目的が達成できなかったため、武力侵攻を決断する⁸⁾。これに対して趙良弼は、日本侵攻の無益をフビライに説き「臣は日本に居ること一年有余、日本の民俗を見たところ、荒々しく獐猛にして殺を嗜み、父子の親（孝行）、上下の礼を知りません。その地は山水が多く、田畑を耕すのに利がありません。その人（日本人）を得ても役さず、その地を得ても富を加えません。まして舟師（軍船）が海を渡るには、

海風に定期性がなく、禍害を測ることもできません。これでは有用の民力をもって、無窮の巨壑（底の知れない深い谷）を埋めるようなものです。臣が思うに（日本を）討つことなきがよいでしょう」と述べ、日本侵攻に反対した⁸⁾。これを受けて、フビライは、一旦は趙良弼の諫言に従った⁸⁾。

○第一次日本侵攻計画

しかし、フビライは翌 1273（文永 10）年には前言を翻し、日本侵攻を計画し侵攻準備を開始した⁸⁾。この時点で、元は南宋との 5 年に及ぶ襄陽・樊城の戦いで勝利し、南宋は元に対抗する国力を失っていた⁸⁾。また朝鮮半島の三別抄も元に滅ぼされており、軍事作戦を対日本に専念させることが可能となったのである⁸⁾。

1274（文永 11）年 1 月、フビライは昭勇大將軍・洪茶丘を高麗に派遣し、高麗に戦艦 300 艘の建造を開始させた⁸⁾。洪茶丘は監督造船軍民総管に任命され、造船の総指揮に当たり、工匠・人夫 30,500 人余りを動員した⁸⁾。洪茶丘の督促により高麗の民は「期限急迫して、疾きこと雷電の如し。民、甚だ之に苦しむ」といった様相であったという⁸⁾。同年 5 月、元から派遣された日本侵攻の主力軍 15,000 人が高麗に到着する⁸⁾。

同月、フビライは娘の公主・クトゥルクケルミシュ（忽都魯揭里迷失）を高麗国王・元宗の子の王世子・諶（後の忠烈王）に嫁がせ、日本侵攻を前にして元と高麗の関係をより強固にする⁸⁾。その直後の 7 月には元宗が死去し、8 月に諶が新たに第 25 代高麗国王・忠烈王として即位した⁸⁾。

6 月、高麗は元に使者を派遣し、戦艦 300 艘の造船を完了させ、軍船大小 900 艘を揃えて高麗の金州に泊めたことを報告する⁸⁾。8 月、日本侵攻軍の総司令官にしてモンゴル人の都元帥・クトゥン（忽敦）が高麗に着任した⁸⁾。

○異国警固体制

執権・北条時宗は、このようなモンゴル帝国の襲来の動きに対して以下のような防衛体制を敷いた⁸⁾。

1271（文永 8）年、北条時宗は鎮西に所領を持つ東国御家人に鎮西に赴くように命じ、守護の指揮のもと蒙古襲来に備えさせ、さらに鎮西の悪党の鎮圧を命じた⁸⁾。当時の御家人は本拠地の所領を中心に遠隔地にも所領を持っている場合があり、そのため、モンゴル帝国が襲来すれば戦場となる鎮西に所領を持つ東国御家人に異国警固をさせることを目的として鎮西への下向を命じたのであった⁸⁾。これがきっかけとなり、鎮西に赴いた東国御家人は漸次九州に土着していく⁸⁾。九州に土着した東国御家人には肥前の小城に所領を持つ千葉氏などがおり、下向した千葉頼胤は肥前千葉氏の祖となる⁸⁾。

1272（文永 9）年、北条時宗は異国警固番役を設置する⁸⁾。鎮西奉行・少式資能、大友頼泰の二名を中心として、元軍の襲来が予想される筑前・肥前の要害の警護および博多津の沿岸を警固する番役の総指揮に当たさせた⁸⁾。

同年2月、北条時宗は後嵯峨上皇没直後の二月騒動で庶兄・北条時輔等を肅清し幕府の統制を強化した⁸⁾。

なお、『高麗史』によると、日本側が高麗に船を派遣して、諜報活動を行っていたと思われる記述があり、以下のような事件があった⁸⁾。

同年7月、高麗の金州において、慶尚道安撫使・曹子一と諜報活動を行っていたと思われる日本船とが通じていた⁸⁾。曹子一は元に発覚することを恐れて、密かに日本船を退去させたが、高麗軍民総管・洪茶丘はこれを聞き、直ちに曹子一を捕らえると、フビライに「高麗が日本と通じています」と奏上した⁸⁾。高麗国王・元宗は張暉を派遣してフビライに対して曹子一の無実を訴え解放を求めたものの、結局、曹子一は洪茶丘の厳しい取調べの末に処刑された⁸⁾。

1273（文永10）年11月、幕命を受けた少貳資能は、戦時に備えて豊前・筑前・肥前・壱岐・対馬の御家人領の把握のため、御家人領に対して名字や身のほど・領主の人名を列記する等した証文を持参し大宰府に到るよう、これらの地域に動員令を発した⁸⁾。

1.9.2.2 文永の役（1274・文永11）

1274（文永11）年10月3日、モンゴル人の都元帥・クドゥン（忽敦）を総司令官として、漢人の左副元帥・劉復亨と高麗人の右副元帥・洪茶丘を副将とする蒙古・漢軍15,000～25,000人の主力軍と都督使・金方慶らが率いる高麗軍5,300～8,000、水夫を含む総計27,000～40,000人を乗せた726～900艘の軍船が、女真人の軍勢の到着を待って朝鮮半島の合浦（現在の大韓民国馬山）を出航した⁸⁾。なお、726～900艘の軍船の構成は、大型戦艦の千料舟126～300艘、上陸用快速船艇のバートル（抜都魯：モンゴル語で「勇猛なる」の意）軽疾舟300艘、補給用小船の汲水小舟300艘から成っていた⁸⁾。

○対馬侵攻

10月5日、元軍は対馬の小茂田浜に襲来⁸⁾した。『八幡愚童訓』によると、対馬守護代・宗資国は通訳を通して元軍に来着の事情を尋ねさせたところ、元軍は船から散々に矢を放ってきた。そのうち7,8艘の大型船より1,000人ほどの元軍が上陸したため、宗資国は80余騎で陣を構え矢で応戦し、対馬勢は多くの元兵と元軍の將軍と思しき人物を射倒し、宗資国自らも4人射倒するなど奮戦したものの、宗資国以下の対馬勢は戦死し、元軍は佐須浦を焼き払ったという⁸⁾。同日、元軍の襲来を伝達するため、対馬勢の小太郎・兵衛次郎らは対馬を脱出し、博多へ出航している⁸⁾。

『高麗史』金方慶伝によると、元軍は対馬に入ると島人を多く殺害した⁸⁾。また、高麗軍司令官・金方慶の墓碑『金方慶墓誌銘』にも「日本に討ち入りし、俘馘（捕虜）が甚だ多く越す」とあり、多くの被害を島人に与えた⁸⁾。

○壱岐侵攻

10月14日、対馬に続き、元軍は壱岐島の西側に上陸。壱岐守護代・平景隆は100余騎で応戦したものの圧倒的兵力差の前に敗れ、翌15日、景隆は樋詰城で自害する⁸⁾。

対馬、壱岐を侵した後、元軍は肥前沿岸へと向かった⁸⁾。

○肥前沿岸襲来

10月16-17日、元軍は肥前沿岸の松浦郡および平戸島・鷹島・能古島の松浦党の領地に襲来⁸⁾した。

松浦党の肥前の御家人・佐志房と佐志直（嫡男）・佐志留（二男）・佐志勇（三男）父子や同国御家人・石志兼・石志二郎父子らが応戦したものの松浦党の基地は壊滅した⁸⁾。この戦闘で佐志房および息子の直・留・勇はみな戦死した⁸⁾。

室町時代の日澄によれば、松浦党は数百人が伐たれ、あるいは捕虜となり、肥前沿岸の惨状は壱岐や対馬のようであったという⁸⁾。

○日本側の迎撃態勢

対馬・壱岐の状況が大宰府に伝わり、大宰府から京都や鎌倉へ向けて急報を発するとともに九州の御家人が大宰府に集結しつつあった⁸⁾。

ところが、薩摩や日向、大隅など南九州の御家人たちは博多に向かうに際して、九州一の難所と言われる筑後川の神代浮橋を渡らなければならず、元軍の上陸までに博多に到着することは難しかった⁸⁾。これに対して、筑後の神代良忠は一計を案じて神代浮橋の通行の便を図り、南九州の諸軍を速やかに博多に動員した⁸⁾。後に神代良忠は、元軍を撃退するのに貢献したとして執権・北条時宗から感状を与えられ称された⁸⁾。

こうして集結した九州の御家人ら日本側の様子を『八幡愚童訓』では、鎮西奉行の少弐氏や大友氏を始め、紀伊一類、臼杵氏、戸澤氏、松浦党、菊池氏、原田氏、大矢野氏、兒玉氏、竹崎氏已下、神社仏寺の司まで馳せ集まったとしている⁸⁾。

○博多湾上陸

10月20日、元軍は博多湾のうちの早良郡に襲来⁸⁾した。なお、元軍の上陸地点については諸説ある⁸⁾。捕虜とした元兵の証言によれば、10月20日に早良郡の百道原へ上陸したのは、この年の3月13日に元本国を出発した元軍の主力部隊である蒙古・漢軍であった⁸⁾。『金鋼集』によると、両軍の戦闘は、朝8時頃の開戦で、戦闘が終結したのが夕暮れの18時頃であった⁸⁾。

○赤坂の戦い

早良郡から上陸した元軍は、早良郡の百道原より約3km東の赤坂を占領し陣を布いた⁸⁾。博多の西部に位置する赤坂は丘陵となっており、古代には大津城が築かれ、近世に至っては福岡城が築かれるなど博多攻防の戦略上の重要拠点であった⁸⁾。

一方、日本軍は総大将・少弐景資の下、博多の息の浜に集結して、そこで元軍を迎撃しようとして待ち受けていた⁸⁾。日本側が博多で元軍を迎え撃つ作戦を立てた理由は、元軍が陣を布く赤坂は馬の足場が悪く、騎射を基本戦法とする日本の戦法で戦うには不向きであるため、元軍が博多に攻めてくるのを待って、一斉に騎射を加えようという判断か

らであった⁸⁾。ところが、肥後の御家人・菊池武房の軍勢が、赤坂の松林のなかに陣を布いた元軍を襲撃し、上陸地点の早良郡のうちにある亀原へと元軍を敗走させた⁸⁾。なお肥後の御家人・竹崎季長一党は元軍との会敵を求めて西へ移動中に、赤坂での戦闘で勝利した菊池武房勢 100 余騎と遭遇している⁸⁾。

赤坂の戦いで敗走した元軍の大勢は、小高い丘である亀原山がある亀原へと向かい、小勢は別府の塚原に逃れた⁸⁾。塚原に逃れた一部の元軍は、亀原の元軍本隊に合流しようとして早良郡にある鳥飼潟を通過して逃げようとしたが、肥後の御家人・竹崎季長ら日本軍がそれを追撃した⁸⁾。しかし、竹崎季長は馬が干潟に足を取られて転倒したため、元軍小勢を取り逃がしてしまったという⁸⁾。

○鳥飼潟の戦い

亀原一帯に陣を布いていた元軍は、銅鑼や太鼓を早鐘のように打ち鳴らしてひしめき合っていた⁸⁾。これを見て先駆けを行おうとする竹崎季長に対して、郎党・藤源太資光は「味方は続いて参りましょう。お待ちになって、戦功の証人を立ててから御合戦をなされよ」と諫言したものの、竹崎季長はそれを振り切り「弓箭の道は先駆けを以って賞とす。ただ駆けよ」と叫んで、元軍に先駆けを行った⁸⁾。元軍も亀原から鳥飼潟に向けて前進し、鳥飼潟の塩屋の松の下で竹崎季長主従と衝突した⁸⁾。

竹崎季長主従は、元軍の矢を受けて竹崎季長、三井資長、若党以下三騎が負傷するなど危機的状況に陥ったが、後続の肥前の御家人・白石通泰率いる 100 余騎が到着し、元軍に突撃を敢行したため、元軍は亀原山の陣地へと引き退いた⁸⁾。

同じく鳥飼潟に駆け付けた肥前の御家人・福田兼重の文書によると、早良郡から元軍が上陸したことを受けて、早良郡に馳せ向かうよう武士らに下知が下り、早良郡へと馳せ向かった福田兼重ら日本軍は、鳥飼潟で元軍と遭遇して衝突した⁸⁾。豊後の御家人・都甲惟親は鳥飼潟の戦いにおいて奮戦⁸⁾する。後にその功績により豊後守護・大友頼泰から書下を与えられた⁸⁾。これら武士団の奮戦により、元軍は鳥飼潟において日本軍に敗れ、同じく早良郡のうちにある百道原へと敗走した⁸⁾。

○百道原・姪浜の戦い

鳥飼潟の戦いで敗れた元軍を追って、日本軍は百道原まで追撃をかけた。追撃に参加した福田兼重は百道原において大勢の元軍の中に馳せ入り、元軍と矢戦となり、鎧の胸板・草摺などに三本の矢を受けて負傷したという⁸⁾。

『財津氏系譜』によると、この百道原の戦いにおいて、豊後の御家人・日田永基らが奮戦し百道原の戦いで元軍を破り、さらに百道原の西の姪浜の戦いの両所で1日に2度、元軍を大いに破ったという⁸⁾。なお、『日田記』によると百道原と姪浜における戦闘は「筑前国早良郡二軍ヲ出シ、姪ノ浜、百路原両処ニ於テ、一日二度ノ合戦ニ討勝テ、異賊ヲ斬ル事夥シ」といった戦況であった⁸⁾。

また、『武藤系図』少弐景資伝では、百道原における矢戦の際に元軍の左副都元帥・劉復亨と思われる蒙古軍大将が矢で射止められたとしており、中華民国期に編纂された

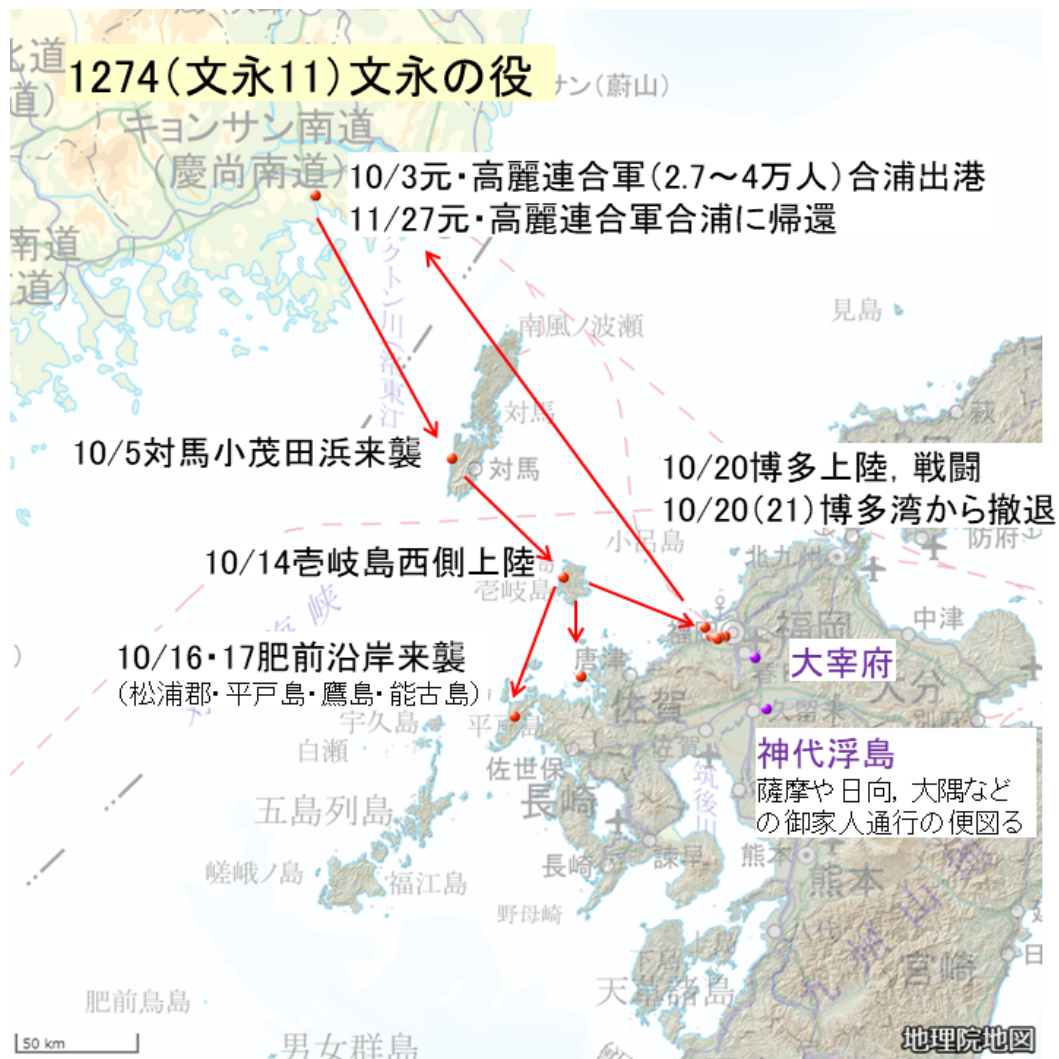


図 1.9-2 元寇 1274 (文永 11) 文永の役 広域図

『新元史』劉復亨伝にも百道原で少式景資により劉復亨が射倒されたため、元軍は撤退したと編者・柯劭忞は述べている⁸⁾。これらの史料から、元側の史料『高麗史』の「劉復亨, 流矢に中り先に舟に登る」とは、百道原の戦いでの負傷だったとも考えられる⁸⁾。

○鳥飼潟の戦いについて

この鳥飼潟の戦いには、日本軍の総大将少式景資や大友頼泰が参加していたものとみられ、この戦闘に参加した武士も豊後、肥前、肥後、筑後等九州各地からの武士の参戦が確認されることから、鳥飼潟の戦いは日本軍が総力を挙げた文永の役における一大決戦であったという見解がある⁸⁾。

なお、文永の役の戦闘で、現存している当時の古文書で記録があるのは、この鳥飼潟の戦いのみであり、合戦に参加した竹崎季長が描かせた『蒙古襲来絵詞』詞四に記載されている赤坂の戦いとこの鳥飼潟の戦いが、文永の役の主戦闘だったとみられる⁸⁾。

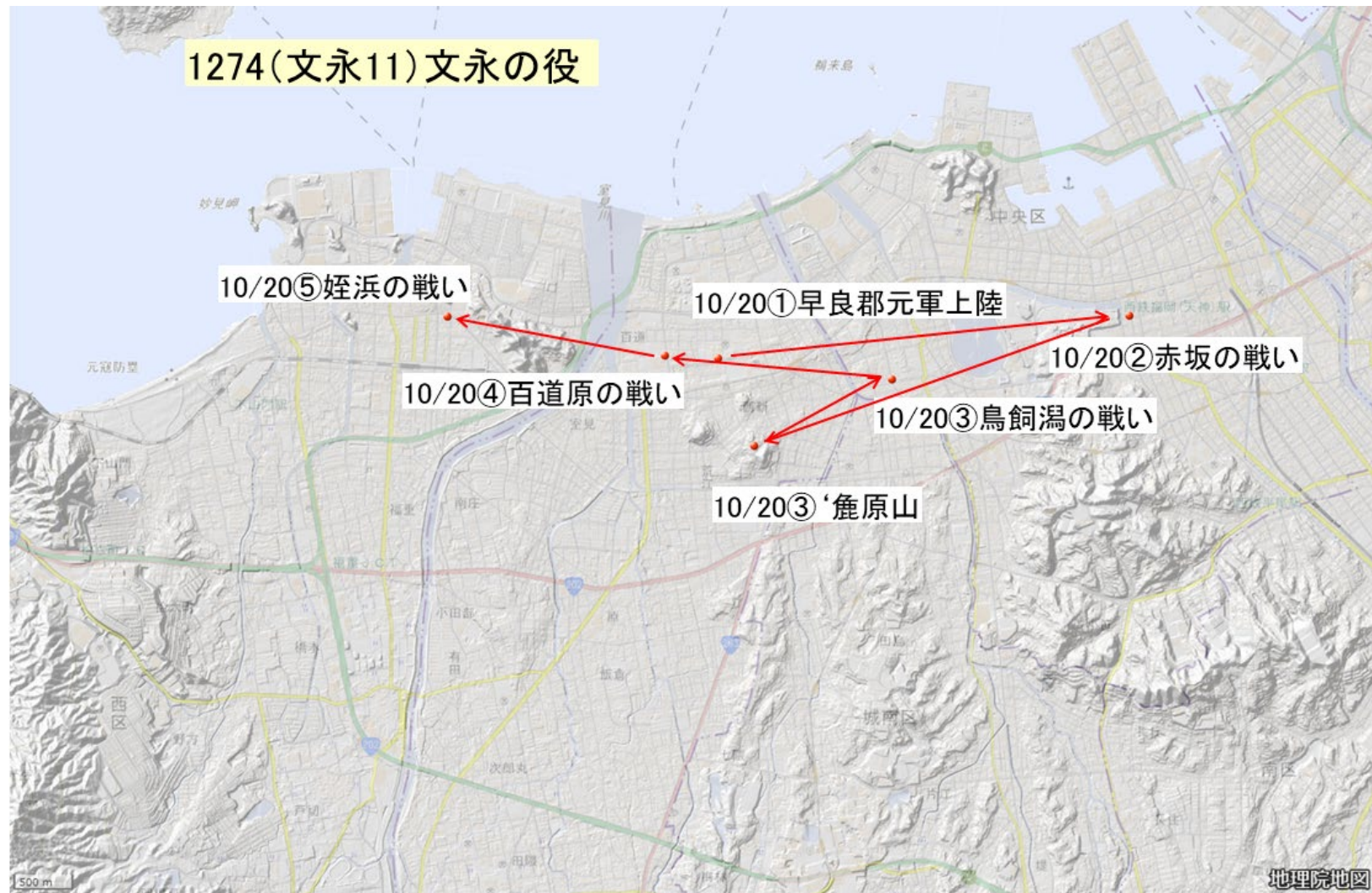


図 1.9-3 元寇 1274 (文永 11) 文永の役 10/20 博多の戦闘経過

表 1.9-1 1274 (文永 11) 年「文永の役」前後の日本、モンゴル・元の動き

日本	モンゴル帝国・元
1221 承久の乱 1232 御成敗式目 1246 宮騒動、1247 法治合戦 → 北条得宗家の専制体制 1268 3月北条時宗第8代執権に就任 1268 大宰府第2回使節の国書を鎌倉に送達。幕府は朝廷に回送。 1269 朝廷第4回使節国書に対し返書「太政官牒案」草案作成 → 幕府の返書しない上奏を受入れ回答せず。 1271 第5回使節国書への回答作成（第4回使節返書「太政官牒案」草案 微修正） 1271 鎮西に所領を持つ東国御家人に鎮西に赴くように命じる 1272 2月騒動（庶兄・北条時輔等を肅清し幕府の統制を強化） 1272 異国警固番役設置	1206 チンギス・ハン モンゴル帝国建国 1231 モンゴル帝国 高麗への侵攻開始 1232 モンゴル帝国 金朝を滅ぼす 1259 高麗モンゴル帝国の属国となる 1260 フビライ・ハン 第5代皇帝即位 1264 大都に遷都 1266-1267 第1回使節（日本宛国書作成するも日本未到達） 1268 第2回使節（高麗使節団大宰府到着。国書手渡す。） 1269 第3回使節（正使黒昶ら使節団を派遣。対馬から先に進めず。対馬島人2名と 帰還。） 1269 第4回使節（対馬島人2名と高麗人使節が国書（元・高麗）とともに大宰府守 護所到来。） 1271 （元に反乱中の）三別抄から援助要請（1273 三別抄平定） 1271 第5回使節（女真人趙良弼らが服属を命じる国書を携えて大宰府到来） 1271 11月フビライ、国号を大元に改める 1272 12人の日本使節団が元の首都大都訪問（4月帰国） 1272 第6回使節（女真人趙良弼らが12月日本到来） 1273 襄陽・樊城の戦い（1268-）に元勝利。南宋は国力失う。
1274 文永の役 10/5 対馬小茂田浜 10/14 壱岐島市西側上陸 10/16・17 肥前沿岸来襲 10/20 博多上陸・戦闘 → 10/21 未明 博多から撤退	1274 文永の役 10/3 元・高麗連合軍（2.7~4万人）合浦出港 10/5 対馬侵攻、10/14 壱岐島侵攻、10/16・17 肥前沿岸来襲、10/20 博多上陸・戦闘、 10/21 未明・博多撤退 11/27 合浦帰還（人的損害は13,500余人）
1275 第7回使節団を鎌倉に連行し、龍ノ口刑場において斬首 1276 3月石築地（元寇防塁）約20kmの築造開始 1276 3月幕府は高麗出兵を行うことを明言し、博多に軍勢や船舶を集結 1279 6月第8回使節団の服属要求国書を確認し、使節団を博多で斬首。	1275 2月第7回使節（モンゴル人礼部侍郎・杜世忠正使）派遣。長門国室津来着。 1276 1月南宋の第7代皇帝・恭帝は元に降伏し、南宋の首都・臨安を無血開城 1279 3月崖山の戦い・南宋滅亡 1279 第8回使節（周福・欒忠を元使、渡宋日本僧・曉房・靈果ら使節団） 1279 8月高麗に使節団処刑の報が伝わる 1280 頃 日本侵攻軍の司令部・日本行省（征東行省）を設置

一 『八幡愚童訓』による戦況

八幡神の靈驗・神徳を説いた寺社縁起であり、文永の役を詳述した数少ない日本側の文書である『八幡愚童訓』によると、武士が幕府に提出した文書などにより再構成された上述の戦況とは異なる、「日本の武士は蒙古軍に対し手ひどく敗北し、内陸深くまで押し込められたものの、夜間に現れた神の軍勢が一夜にして蒙古の船団を追い払った」という物語が語られている⁸⁾。「日本兵は一騎打ちで負け神風で奇跡的に勝った」という通俗史観の根拠となっているが、信憑性はきわめて低いと考えられている⁸⁾。

上陸し馬に乗り旗を揚げて攻めかかって来た元軍に対して、鎮西奉行・少貳資能の孫・少貳資時がしきたりに則って音の出る鎬矢を放ったが、元軍はこれを馬鹿にして笑い、太鼓を叩き銅鑼を打って関の声を発したため、日本の馬は驚き跳ね狂ったとしている⁸⁾。また、元軍の弓は短い、鏃に毒を塗って雨の如く矢を射たため、元軍に立ち向かう術がなかったとしている⁸⁾。元軍に突撃を試みた者は、元軍の中に包み込まれ左右より取り囲まれて皆殺された⁸⁾。元兵はよく奮戦した武士の遺体の腹を裂き、肝をとって食べ、また、射殺した軍馬も食べたという⁸⁾。

『八幡愚童訓』は、この時の元軍の様子を「鎧が軽く、馬によく乗り、力強く、豪盛勇猛」で、「大将は高い所に上がって、退く時は逃鼓を打ち、攻める時は攻鼓を打ち、それに従って振舞った」としている⁸⁾。また、退く時は「てつはう」を用いて、爆発した火焰によって追撃を妨害した⁸⁾。「てつはう」は爆発時、轟音を発したため、肝を潰し討たれる者が多かったとしている⁸⁾。また、武士が名乗りを上げての一騎打ちや少人数での先駆けを試みたため、集団で戦う元軍相手に駆け入った武士で一人として討ち取られない者はなかったとしている⁸⁾。その中でも勇んで戦いに臨んだ松浦党の手勢は多くが討ち取られ、原田一類も沢田に追い込まれて全滅し、青屋勢二三百騎もほとんど討ち死にしたという⁸⁾。肥後の御家人・竹崎季長や天草城主・大矢野種保兄弟は元軍船に攻めかかり、よく奮戦したものの、この所に至って形勢は不利となっていた⁸⁾。また、肥前の御家人・白石通泰の手勢も同様に形勢は不利となっていた⁸⁾。元軍は勝ちに乗じて今津、佐原、百道、赤坂まで乱入して、赤坂の松原の中に陣を布いた。これほど形勢が不利になると思っていなかった武士たちは妻子眷属を隠しておかなかったために、妻子眷属らが数千人も元軍に捕らえられたという⁸⁾。

元軍に戦を挑もうという武士が一人もいなくなった頃、肥後の御家人・菊池武房は手勢 100 騎を二手に分けて、元軍が陣を布く赤坂の松原の陣に襲撃をかけ散々に駆け散らしたが、菊池武房の手勢は多くが討ち取られて、菊池武房のみが討ちとられた死体の中から這い出して、討ち取った元兵の首を多数つけて帰陣した⁸⁾。

大将の少貳景資を始め、大矢野種保兄弟、竹崎季長、白石通泰らが散々に防戦に努めたが、元軍は日本軍を破りに破り、佐原、筥崎、宇佐まで乱入したため、妻子や老人らが幾万人も元軍の捕虜となったという⁸⁾。日本軍は太宰府手前の水城に籠って防戦しようと逃げ支度を始め、逃亡するものが続出する中、敗走する日本軍を追う左副都元帥・

劉復亨と思われる人物を見止めた少貳景資が弓の名手である馬廻に命を下して劉復亨を射倒すなどして奮戦したものの、結局、日本軍は博多・筥崎を放棄して内陸奥深くの水城へと敗走したとしている⁸⁾。ところが10月21日の朝になると、元軍は博多湾から撤退し姿を消していたという⁸⁾。

元軍の撤退理由については、日本軍が逃げ去った夕日過ぎ頃、八幡神の化身と思われる白装束30人ほどが出火した筥崎宮より飛び出して、矢先を揃えて元軍に矢を射掛けた⁸⁾。恐れ慄いた元軍は松原の陣を放棄し、海に逃げ出したところ、海から不可思議な火が燃え巡り、その中から八幡神を顕現したと思われる兵船2艘が突如現れて元軍に襲い掛かり元軍を皆討ち取り、たまたま沖に逃れた軍船は大風に吹きつけられて敗走した、としている⁸⁾。

そして「もし、この時に日本の軍兵が一騎なりとも控えていたならば、八幡大菩薩の御戦とは言われずに、武士達が我が高名にて追い返したと申したはずだろう」としながら「元軍がひどく恐れ、あるいは潰れ、あるいは逃亡したのは、偏に神軍の威徳が嚴重であったからで、思いがけないことがいよいよ顕然と顕われ給ったものだと、伏し拝み貴はない人はなかった」と結んでいる⁸⁾。

ー『元史』による戦況

『元史』では、文永の役に関する記述は僅かにしか記載がない⁸⁾。

『元史』日本伝によると「冬十月、元軍は日本に入り、これを破った。しかし元軍は整わず、また矢が尽きたため、ただ四境を虜掠して帰還した」としている⁸⁾。

また、『元史』左副都元帥・劉復亨伝では「(劉復亨は) 征東左副都元帥に遷り、軍4万、戦船900艘を統率し日本を征す。倭兵10万と遇い、これを戦い敗った」とのみ記載し、劉復亨が戦場で負傷し戦線を離脱していたことには触れていない⁸⁾。

『元史』右副都元帥・洪茶丘伝では「都元帥・クドゥン(忽敦)等と舟師2万を領し、日本を征す。対馬・壱岐・宜蛮(平戸島か)などの島を抜く」とあり、文永の役における元軍の戦果を対馬、壱岐などの諸島を制圧し抜いたことのみを記しており、博多湾上陸以後の状況については触れられていない⁸⁾。

その他、『元史』世祖本紀では文永の役の元軍の軍容について「鳳州経略使・ヒンドゥ(忻都)、高麗軍民総管・洪茶丘等の将が屯田軍及び女直軍(女真族の軍)、並びに水軍、合せて15,000人、戦船大小合せて900艘をもって日本を征す」と記している⁸⁾。

ー『高麗史』による戦況

『高麗史』金方慶伝によると、元軍は三郎浦に船を捨てて、道を分かれて多くの日本人を殺害しながら進軍した⁸⁾。高麗軍三翼軍のうち都督使・金方慶直属の中軍が日本兵に衝かれるに至り、剣を左右に交えた白兵戦となったが、金方慶は少しも退かず、一本の矢を引き抜き厲声大喝すると、日本兵は辟易して逃げ出した⁸⁾。高麗軍中軍諸将の朴

之亮・金忻・趙卞・李唐公・金天祿・辛奕等が力戦し日本兵を大いに敗った⁸⁾。戦場には死体が麻の如く散っていた⁸⁾。元軍の総司令官である都元帥・クドゥン（忽敦）は「蒙古人は戦いに慣れているといえども、高麗軍中軍の働きに比べて何をもって加えることができるだろう」と高麗軍中軍の奮戦に感心した⁸⁾。

その後、高麗軍は元軍諸軍と共に協力して日本軍と終日、激戦を展開した。ところが、元軍は激戦により損害が激しく軍が疲弊し、左副都元帥・劉復亨が流れ矢を受け負傷して船へと退避する等苦戦を強いられた。やがて、日が暮れたのを機に、戦闘を解した⁸⁾。

○元・高麗連合軍軍議と撤退

一元・高麗連合軍軍議

『高麗史』金方慶伝によると、この夜に自陣に帰還した後の軍議と思われる部分が載っており、高麗軍司令官である都督使・金方慶と元軍総司令官である都元帥・クドゥン（忽敦）や右副都元帥・洪茶丘との間で、以下のようなやり取りがあった⁸⁾。

金方慶「兵法に『千里の県軍、その鋒当たるべからず』とあり、本国よりも遠く離れ敵地に入った軍は、却って志気が上がり戦闘能力が高まるものである。我が軍は少なしと雖も既に敵地に入っており、自ずから戦うことになる。これは秦の孟明視の『焚船』や漢の韓信の『背水の陣』の故事に沿うものである。再度戦わせて頂きたい」⁸⁾

クドゥン「孫子の兵法に『小敵の堅は、大敵の擒なり』とあって、少数の兵が力量を顧みずに頑強に戦っても、多数の兵力の前には結局捕虜にしかならないものである。疲弊した兵士を用い、日増しに増える敵軍と相対させるのは、完璧な策とは言えない。撤退すべきである」⁸⁾

一元・高麗連合軍撤退

このような議論があり、また左副都元帥・劉復亨が戦闘で負傷したこともあって、軍は撤退することになったという⁸⁾。当時の艦船では、博多-高麗間の北上は南風の晴れた昼でなければ危険であり、この季節では天気待ちで1か月掛かることもあった（朝鮮通信使の頃でも夜間の玄界灘渡海は避けていた）⁸⁾。このような条件の下、元軍は夜間の撤退を強行し海上で暴風雨に遭遇したため、多くの軍船が崖に接触して沈没し、高麗軍左軍使・金佺が溺死するなど多くの被害を出した⁸⁾。

『金剛集』によると、10月21日の午前6時頃に元軍は悉く博多湾から撤退した⁸⁾。同書では元軍の撤退理由として、夜間に日本側に300余騎の軍勢が現れたことを撤退理由としている⁸⁾。

元軍が慌てて撤退していった様子を、日本側の史料『金剛仏子叡尊感身学正記』は「十月五日、蒙古人が対馬に着く。二十日、博多に着き、即退散に畢わる」と記している⁸⁾。

『安国論私抄』に記載されている両軍の戦闘による損害は、元軍の捕虜27人、首級39個、その他の元軍の損害を数知れずとする一方、すべての日本人の損害については戦死者195人、下郎は数を知れずとある⁸⁾。また、『金剛集』によれば、両軍ともに戦闘

による戦死者が多数あったという⁸⁾。その他、元軍側では都元帥に次ぐ高級将校の管軍万戸・某が日本軍に投降している⁸⁾。

一元・高麗連合軍帰還と元側の評価

11月27日、元軍は朝鮮半島の合浦まで帰還した。

『呉文正集』によれば、後年、文永の役についてフビライとその重臣・劉宣の会話の中で「(文永の役に) 兵を率いて征伐しても、功を収められなかった⁸⁾。有用の兵を駆り立てて無用の土地を取ろうというのは、貴重な珠を用いて雀を射落とそうとするようなもので、すでに策を失っている」と評しており、文永の役に対する元側の作戦失敗の認識が窺える⁸⁾。

『元史』には日本侵攻の困難性について「たとえ風に遇わず、彼の国の岸に至っても、倭国は地広く、徒衆が多い。彼の兵は四集し、我が軍に後援はない。万が一戦闘が不利となり、救兵を発しようと思っても、ただちに海を飛んで渡ることはできない」とあり、軍議における戦況認識にあるように、日本側が大軍を擁しており、集団で四方より元軍に攻撃を仕掛けてくること、戦況が不利になった場合、渡海が困難なため元軍の下に援軍が直ちに到着できないことを日本侵攻の困難理由に挙げている⁸⁾。

『高麗史』表では「十月、金方慶、元の元帥のクドゥン（忽敦）・洪茶丘等と与に日本を攻める。壹岐に至って戦い敗れ、軍の還らざる者は一萬三千五百餘人」と文永の役を総評している⁸⁾。

また、南宋遺臣の鄭思肖は文永の役・弘安の役を評し「まずフビライはシリバイ（失里伯）を遣わし、高麗を経て倭を攻める。人船ともに海に墜ちる（文永の役）。辛巳（1281年）六月、韃兵（モンゴル兵）は明州を経て海を渉る。倭口に至るが、大風雨に遭い、人と船が海に墜ちる。再び大敗し、すなわち帰る（弘安の役）」としている⁸⁾。

○元・高麗連合軍撤退後の状況

『金剛集』によれば、元軍が撤退した後の志賀島に元軍船1艘が座礁し、乗船していた約130人の元兵が斬首又は捕虜となった⁸⁾。『八幡愚童訓』の記述では、志賀島に座礁した兵船の大將は入水自殺し、他の元兵たちは武器を捨てて船から投降し生け捕られ、水木岸にて220人程が斬殺されたという⁸⁾。また、『金剛集』によると、元軍船100艘余りが至るところに打ち寄せられており、元軍の杜肺子・白徳義・羨六郎・劉保兒の4名が捕虜となったという⁸⁾。元軍船100余艘の漂倒は、『皇年代略記』によると10月30日に大宰府より京都へ報告された。さらに『安国論私抄』によると、11月24日に聞いた情報として「蒙古の船破れて浦々に打ち挙がる」とし、座礁した船数は、確認できたものだけで、対馬1艘、壱岐130艘、小呂島2艘、志賀島2艘、宗像2艘、カラチシマ3艘、アキノ郡7艘であった⁸⁾。

公家の広橋兼仲の日記『勘仲記』によれば、乗船していた元軍が大風に遭う様子を伝聞として「賊船数万艘が海上に浮かんでいたが、俄かに逆風（南風）が吹き来たり、本

国に吹き帰った」と記している⁸⁾。元軍の遭遇した大風については『薩摩旧記』にも、「神風が荒れ吹き、異賊は命を失い、乗船が或いは海底に沈み、或いは浦に寄せられる」という記述がある⁸⁾。また『歴代皇紀』では、10月20日に日本側の兵船300余艘が追撃したところ、沖合で漂流する元軍船200余艘を発見したことが記されており、『安国論私抄』では、11月9日にユキノセという津に暴風雨により死んだと思しき元兵150人が漂着したという⁸⁾。

元軍の捕虜については、『勘仲記』(11月6日条)に陸上に乗り上げた軍船に乗船していた元兵50余人が鎮西東方奉行・大友頼泰の手勢に捕えられ、京都に連行されてくるという伝聞を載せている⁸⁾。

関東の鎌倉政権の下に元軍が対馬に襲来した知らせが届いたのは、日本側が防衛に成功し元軍が撤退した後であった。元軍撤退後に元軍の対馬襲来の知らせが関東に届いた理由は、大宰府と鎌倉間が飛脚でも早くも12日半ほどは掛かったためである⁸⁾。『勘仲記』(10月29日条)によると、幕府では対馬での元軍が「興盛」である知らせを受けて、鎌倉から北条時定や北条時輔などを総司令官として元軍討伐に派遣するか議論があり、議論が未だ決していないという幕府の対応の伝聞を載せている⁸⁾。

また、11月に入ってもなお未だ執権・北条時宗の下に元軍の博多湾上陸および撤退の報が伝わっていなかったため、時宗は元軍の本州上陸に備えて中国・九州の守護に対して国中の地頭・御家人ならびに本所・領家一円(公家や寺社の支配する荘園等)の住人で幕府と直接の御恩奉公関係にない武士階層(非御家人)を率いて、防御体制の構築を命じる動員令を発している⁸⁾。このように幕府が元軍の襲来によって動員令を発したことで、それまでの本所・領家一円地への介入を極力回避してきた幕府の方針は転換され、本所・領家一円地への幕府の影響力は増大した⁸⁾。

11月6日、京都に勝報がもたらされる⁸⁾。『帝王編年記』には鎮西からの戦勝の報が載っており、それによれば「去月(十月)二十日、蒙古と武士が合戦し、賊船一艘を取り、この賊船を留める。志賀島において、この賊船を押し留めて、その他の蒙古軍を追い返した」と報じたという⁸⁾。また、『五檀法日記』にも同日の飛脚からの知らせが載っており「去月(十月)十九日と二十日に合戦があり、二十日に蒙古軍兵船は退散した」と飛脚は報じたという⁸⁾。

幕府は戦勝の報に接すると論功行賞を行い、文永の役で功績のあった御家人120人余りに褒賞を与えた⁸⁾。

1.9.2.3 文永の役 元軍撤退理由、後の神風観

○元・高麗の損害・状況

文永の役で元軍が被った人的損害は13,500余人にも上った⁸⁾。さらに人的被害だけでなく多くの衣甲・弓箭などの武具も棄てて失った⁸⁾。僅かに収拾できた衣甲・弓箭は府庫に保管されたが、使用に堪えられるものではなかった⁸⁾。

また、文永の役において船舶・兵士・兵糧などを抛出した高麗は、国力を極度に悪化させ疲弊した⁸⁾。

高麗からフビライの下へ派遣された金方慶、印公秀は、その上表の中で、三別抄の乱を鎮圧するための大軍に多くの兵糧を費やしたこと、加えて民は日本征討（文永の役）によって損傷した船舶を修造するために、働きざかりの男たちはことごとく工役に赴き、日本征討に加わった兵士たちは、戦闘による負傷と帰還中の暴風雨により多くの負傷者・溺死者を出すなどしたために、今では耕作する者は僅かに老人と子供のみであること、さらに日照りと長雨が続いて稲は実らず民は木の実や草葉を採って飢えを凌ぐ者があるなど、「民の疲弊はこの時より甚だしい時はなかった」といった高麗の疲弊した様子を伝えている⁸⁾。そして、再び日本征討の軍を挙げるならば、小邦（高麗）は船舶・兵糧などの抛出には耐えられないとフビライに訴えている⁸⁾。

○神風と元軍撤退理由

元軍は戦況を優位に進めた後、陸を捨てて船に引き揚げて一夜を明かそうとしたその夜に暴風雨を受けて日本側が勝利したという言説が教科書等に記載されているが、通常、上陸作戦を決行した場合、まず橋頭堡を確保しなければならず、戦況を優位に進めながら陸地を放棄して、再び上陸作戦を決行するなどは戦術的に有り得ないとされる⁸⁾。また、元側の史料『高麗史』の記載によると、元軍は日本軍との戦闘で苦戦を強いられたため軍議により撤退を決定し、日本からの撤退途上で暴風雨に遭遇したとなっている⁸⁾。ただ、この撤退途上に元軍が遭遇した暴風雨については、気象学的には11月下旬には台風の渡来はなく、あったとしても単なる強風であった可能性が高いとされる⁸⁾。

元軍が苦戦し撤退した様子は『高麗史』の記載の他、日本側の史料でも同様の記載が確認できる⁸⁾。文永の役当時の鎮西からもたらされた飛脚の報告が載っている日本側の史料『帝王編年記』によれば「去月（十月）二十日、蒙古と武士が合戦し、賊船一艘を取り、この賊船を留める。志賀島において、この賊船を押し留めて、その他の蒙古軍を追い返した」と報じたとあり、同じく飛脚の報が載っている『五檀法日記』においても「去月（十月）十九日と二十日に合戦があり、二十日に蒙古軍兵船は退散した」とあり、交戦した武士らが中央政権に対して軍事的に元軍を撃退したことを報告している⁸⁾。また、他の史料と日にちに差異はあるが『関東評定衆伝』でも「（文永十一年）十月五日、蒙古異賊が対馬に攻め寄せ来着。少貳資能代官・藤馬允（宗資国）を討つ。同24日、大宰府に攻め寄せ来たり官軍（日本軍）と合戦し、異賊（元軍）は敗北した」と明確に日本軍の勝利と元軍の敗北が確認できる⁸⁾。

○鎌倉期の神風観

文永の役において元軍は神風で壊滅し日本側が勝利したという言説が流布した背景として、当時の日本国内では元寇を日本の神と異賊の争いとする観念が共有されており、

神社や寺による折伏・祈祷や歌詠みは日本の神の力を強める（天人相関思想）と信心されていた⁸⁾。そのため、元軍を撃退できた要因は折伏・祈祷による神力・神風であると神社等は宣伝し、幕府に対して恩賞を求めた⁸⁾。

例えば、公家の広橋兼仲は、その日記『勘仲記』の中で「逆風の事は、神明のご加護」と神に感謝している⁸⁾。また、1276（建治2）年の官宣旨の文言の中にも「蒙古の凶賊等が鎮西に来着し合戦をしたのだが、神風が荒れ吹き、異賊は命を失い、船を棄て或いは海底に沈み、或いは入江や浦に寄せられた。これは即ち霊神の征伐、観音の加護に違いない」とあり、当時から元軍を襲った暴風雨を神風とする認識が存在していたことが窺える⁸⁾。

また、敵国調伏や加持祈祷によって日本の神や仏も戦闘に動員され元軍を撃退できたとする観念は、各社による「神々による軍忠状」という形で現れ、戦後も幕府に対して各社による恩賞の要求も激しかった⁸⁾。元寇における神々の活躍例を挙げると以下のようなものが見受けられる⁸⁾。

寺社縁起『八幡愚童訓』によると、日本軍が水城へ敗走した後、松原に陣を布く元軍に八幡神の化身30人ほどが矢を射掛け、恐れ慄いた元軍は海に逃げ、さらに海から炎が燃え巡り、その中から現れた八幡神を顕現したと思われる兵船2艘が突如現れて元軍を皆討ちとり、辛うじて沖に逃れた者には大風が吹き付けられて元軍は敗走したという⁸⁾。同様の話は『一代要記』にもあり、大宰府軍（日本軍）が敗北した後、神威を顕現したと思われる兵船2艘が現れて元軍と戦い、これを退散させたとしている⁸⁾。

また、肥前国武雄社では、戦後の論功行賞から漏れたため、幕府に以下のように文永・弘安の役における勲功を訴えている⁸⁾。『武雄神社文書』によれば、文永の役の際の10月20日の夜、武雄社の神殿から鎬矢が元軍船目掛けて飛び、結果、元軍は逃げていったとしており、また、弘安の役に際しても、上宮から紫の幡が元軍船の方に飛び去って、大風を起こしたという⁸⁾。

幕府は、こういった各社による軍忠状に対して神領興行令と呼ばれる徳政令を各社に対して3度も発布し、恩賞に当てた⁸⁾。

○戦前・戦後の神風観

1910（明治43）年の『尋常小学日本歴史』に初めて文永の役の記述が登場して以来、戦前の教科書における文永の役の記述は、武士の奮戦により元軍を撃退したことが記載されており、大風の記述はなかった⁸⁾。しかしその後、第二次世界大戦が勃発し日本の戦局が悪化する中での1943（昭和18）年の国定教科書において、国民の国防意識を高めるために大風の記述が初めて登場した。それ以来、戦後初の教科書である『くにのあゆみ』以降も大風の記述は継承され、代わって武士の奮戦の記述が削除される⁸⁾。

戦後の教科書において、文永の役における武士の奮戦の記述が削除された背景としては、執筆者の間で武士道を軍国主義と結び付ける風潮があり、何らかの政治的指示があ

ったためか執筆者が過剰に自粛したのではないかとの見解がある⁸⁾。また、戦時中や現代の教科書においても文永の役において元軍は神風で壊滅したという言説が依然として改められなかった背景としては、戦時中は「神国思想の原点」ゆえに批判が憚られたことによるという見解がある⁸⁾。この観念は戦時中の神風特別攻撃隊などにまで到ったとされる⁸⁾。戦後は敗戦により日本の軍事的勝利をためらう風潮が生まれたことにより、文永の役における日本の勝因を自然現象ゆえによるものであるという傾向で収まってしまったのではないかとの見解がある⁸⁾。

また、文永の役は大風で勝利したという戦後の常識は、寺社縁起『八幡愚童訓』における記述がベースになっているといわれている⁸⁾。

1.9.2.4 弘安の役（1281・弘安4）までの経緯

○第一次高麗征伐計画

元・高麗連合軍の侵攻を撃退した鎌倉幕府は、高麗へ侵攻して逆襲することを計画した⁸⁾。高麗出兵計画は再度の元の襲来に備えるための石築地（元寇防塁）の築造と同時に進められ、高麗出兵に動員される者を除いた鎮西の者が石築地の築造に当たることになっていた⁸⁾。

幕府は1276（建治2）年3月に高麗出兵を行うことを明言し、少式経資が中心となって鎮西諸国などに動員令を掛けて博多に軍勢や船舶を集結させた。

船の漕ぎ手である梶取や水手は鎮西諸国を中心に召集され、不足の場合は山陰・山陽・南海各道からも召集するよう御家人に命じた⁸⁾。幕府は動員催促した武士に水手、梶取りなどの年齢や動員数、兵具、船数などを注進させ、逃亡者には厳罰を科すなどして着々と出兵準備を進めたが、突然出兵計画は中止となった⁸⁾。詳細は不明ながら、同時に進められていた石築地の築造に多大な費用と人員を要したことと、兵船の不備不足などの理由により計画は実行されなかったとされる⁸⁾。

幕府は異国警固番役を強化し、引き続き九州の御家人に元軍の再襲来に備えて九州沿岸の警固に当たらせた。異国警固番役は3か月交代、春夏秋冬で分け、春は筑前・肥後国、夏は肥前・豊前国、秋は豊後・筑後国、冬は日向・大隅・薩摩国といった九州の御家人が異国警固番役を担当した⁸⁾。

○第七回使節

1275（建治元）年2月、フビライは日本再侵攻の準備を進めるとともに日本を服属させるため、モンゴル人の礼部侍郎・杜世忠を正使、唐人の兵部侍郎・何文著を副使とする使節団を派遣した⁸⁾。通訳には高麗人の徐賛、その他にウイグル人の刑議官・チェドゥ・ウッディーン（徹都魯丁）、果の3名が同行した⁸⁾。

使節団は長門国室津に来着するが、執権・北条時宗は使節団を鎌倉に連行すると、龍ノ口刑場（江ノ島付近）において、杜世忠以下5名を斬首に処した⁸⁾。

これは使者が日本の国情を詳細に記録・偵察した、間諜（スパイ）としての性質を強く帯びていたためと言われる⁸⁾。斬首に処される際、杜世忠は次の辞世の句を残した⁸⁾。

出門妻子贈寒衣 問我西行幾日歸 來時儻佩黃金印 莫見蘇秦不下機 ⁸⁾
門を出ずるに妻子は寒衣を贈りたり、我に問う西に行き幾日にして帰ると、来たる時もし黄金の印を佩びたれば、蘇秦（中国戦国時代の弁論家）を見て機を下らざるなかりしを ⁸⁾
家の門を出る際に私の妻子は、寒さを凌ぐ衣服を贈ってくれた。そして私に西に出かけて何日ほどで帰ってくるのかと問う。私が帰宅した時に、使節の目的を達して、もし（恩賞として）黄金の印綬を帯びていたならば、蘇秦の妻でさえ機織りの手を休めて出迎えたであろう ⁸⁾

○第二次日本侵攻計画（1275 年～）

一方でフビライは使節派遣と並行して、再び日本侵攻の準備に取り掛かった⁸⁾。1275（建治元）年 9 月、フビライは、高麗から直ちに日本へ渡ることができる航路があることを知ると、元使を高麗へ派遣して調査させた⁸⁾。同年 10 月、再度の日本侵攻計画のために、高麗において戦艦の修造を開始⁸⁾した。同年 11 月、文永の役で多くの矢を喪失していたため、高麗の慶尚道・全羅道の民に矢の羽や鏃の増産に取り掛からせた⁸⁾。

フビライは、南宋攻略を断行している真っ只中、再度の日本侵攻を計画し、その是非を重臣・王磐に尋ねた⁸⁾。王磐は以下のように返答したという⁸⁾。

王磐「今まさに南宋を討ち、我らは全力を用い、一挙にこれ（南宋）をとるべきです。もし、また東夷（日本）に兵力を分ければ、無駄に月日を費やす恐れがあり、結局、功は成り難くなります。南宋が滅ぶのを待って、やがてこれ（日本侵攻）を考えるも未だ遅くはないでしょう」⁸⁾

1276（建治 2）年 1 月、元と南宋の戦争が最終段階に入ると、フビライは南宋と日本との二正面作戦を行うことを避けて、高麗に日本侵攻用の戦艦の造船と矢の増産を停止させた⁸⁾。同月、南宋の第 7 代皇帝・恭帝は元に降伏し、南宋の首都・臨安を無血開城する。これにより事実上、南宋は滅亡した。なお、張世傑・陸秀夫ら一部の者は第 8 代皇帝・端宗や第 9 代皇帝・祥興帝を擁して、1279（弘安 2）年まで元に抵抗を続けた⁸⁾。

同年、南宋を滅ぼしたフビライは早速、日本侵攻の是非を南宋の旧臣らに尋ねた⁸⁾。これに対して、南宋の旧臣・范文虎、夏貴、呂文煥、陳奕らは皆「伐つべし」と答えたという⁸⁾。しかし、フビライの重臣・耶律希亮は以下のように反対した⁸⁾。

耶律希亮「宋と遼、金と攻戦し、まさに 300 年経っています。干戈（戦争）はようやく収まり、人は肩を休めるようになりました。数年を待って日本遠征の兵を起こすも未だ遅くはないでしょう」⁸⁾

フビライは南宋の旧臣らの進言を退けて、耶律希亮の意見を採用した。こうして、日本侵攻計画は当分の間、延期された⁸⁾。

○第八回使節

耶律希亮の進言による日本侵攻計画延期から 3 年が経過した 1279（弘安 2）年、再び

フビライは日本侵攻を計画する⁸⁾。

南宋の旧臣・范文虎は、ひとまず日本へ再び使節を派遣し、もう一度、日本が従うか否かを見極めてから出兵することを提案したため、フビライはその提案を受け入れた⁸⁾。こうして、杜世忠ら使節団が斬首に処されたことを知らないまま、周福、欒忠を元使として、渡宋していた日本僧・曉房靈杲、通訳・陳光ら使節団を再度日本へ派遣した⁸⁾。

今回の使節団は南宋の旧臣という范文虎の立場を利用して、日本と友好関係にあった南宋の旧臣から日本に元への服属を勧めるという形をとった⁸⁾。

大宋國牒状として日本側に手渡された牒状の内容は「宋朝（南宋）はすでに蒙古に討ち取られ、（次は）日本も危うい。よって宋朝（南宋）自ら日本に（元に服属するよう）告知」する内容であった⁸⁾。

同年6月、日本側は周福らが手渡した牒状が前回と同様、日本への服属要求であることを確認すると、博多において周福ら使節団一行を斬首に処した⁸⁾。

○第二次日本侵攻計画（1279年～）

フビライは杜世忠ら使節団の帰還を待つ一方、出兵準備を開始する⁸⁾。

1279（弘安2）年2月、フビライは揚州、湖南、贛州、泉州四省において日本侵攻用の戦艦600艘の造船を命じる⁸⁾。そのうち、200艘の建造をアラブ系イスラム教徒である色目人・蒲寿庚に命じた⁸⁾。

同年5月、さらにフビライは済州島から軍船建造の木材3,000隻分を供出させるとともに、6月には900艘の造船を高麗に命じた⁸⁾。

しかし、建造は思うようには進まず、200艘の建造を命じられた蒲寿庚はフビライに「海船を200艘造るよう詔がありましたが、いま完成している船は50艘です。民は実に艱苦しています」と造船により民が疲弊していることを上奏した⁸⁾。これを受けて、フビライは蒲寿庚に命じた200艘の建造を中止させている⁸⁾。

このように造船により江南地方の民が疲弊する中、フビライの日本侵攻を諫言する者が相次いだ⁸⁾。賈居貞は民の疲弊が乱を招くことを危惧して、フビライに日本侵攻を止めるよう諫言したが、聞き入れられなかった⁸⁾。徐世隆もフビライに対して、丁寧に日本侵攻を諫めたが同様であった⁸⁾。重臣のアンギル（昂吉児）もまた以下のようにフビライに諫言した⁸⁾。

昂吉児「臣（昂吉児）、軍兵は士気を主と為すと聞きます。上下が同じものを欲すれば勝つのです。しかしこの者ら（日本侵攻軍）は連年の外夷への外征に使役し、しばしば出血を強いており、ここで士気のことを考えなければ、天下は騒然とし、一たび徴発を行えば、上下は怨むでしょう。それは同じ欲する所を考えてはいないからです。兵を止め、民を休ませてください」⁸⁾

しかし、アンギル（昂吉児）の諫言もフビライに聞き入れられることはなかった⁸⁾。老臣の王磐も賈居貞、アンギル（昂吉児）とは違った立場で以下のように諫言した⁸⁾。

王磐「日本小夷、海道は険しくして遠い。これに勝っても、即ち武功とはなりません。勝たなければ、即ち威厳を損じます。臣が思うに征伐を為してはなりません」⁸⁾

この諫言に対してフビライは激怒したが、国を憂う王磐の気持ちを汲み取り、翌日には王磐の下に遣いをやり慰撫したという⁸⁾。

同年8月、逃げ出した水夫より杜世忠らの処刑が高麗に報じられ、高麗はただちにフビライへ報告の使者を派遣した⁸⁾。元に使節団の処刑が伝わると、東征都元帥であるヒンドゥ（忻都）・洪茶丘はただちに自ら兵を率いて日本へ出兵する事を願い出たが、朝廷における評定の結果、下手に動かずにしばらく様子を見ることとなった⁸⁾。

1280（弘安3）年頃、フビライは日本侵攻軍の司令部・日本行省（征東行省）を設置する⁸⁾。

1281（弘安4）年2月、フビライは侵攻に先立って首都・大都に日本侵攻軍の司令官であるアラカン（阿剌罕）、范文虎、ヒンドゥ（忻都）、洪茶丘ら諸将を召集し以下のよう演説した⁸⁾。

フビライ「そもその始めは、彼の国（日本）の使者が来たことにより、こちらの朝廷からもまた使者を遣わし往かしたのだ。しかし、彼の方では我が使者を留めて還さなかった。ゆえに卿らをして、此のたびの遠征を行わせることとした。朕が漢人から言を聞いたところ『人の家国を取るのは、百姓と土地を得たいがためである』と。もし、日本の百姓を尽く殺せば、いたずらに土地を得ても、日本の土地は何に用い得ようか。また、もう一つ朕が実に憂えていることがある。それは、卿らが仲良く協力しないことのみを恐れているのだ。仮にもし彼の国人が卿らのもとに至って、卿らと協議することがあるならば、まさに心を合わせ、考えをそろえて、回答が一つの口から出るように答えるようにせよ」⁸⁾

○無学祖元による進言

1281（弘安4）年、弘安の役の一月前に元軍の再来を予知した南宋からの渡来僧・無学祖元は、北条時宗に「莫煩惱」（煩い悩む莫かれ）と書を与え、さらに「驀直去」と伝え、「驀直」に前へ向かい、回顧するなかれと伝えた⁸⁾。これはのち「驀直前進」という故事成語になった⁸⁾。無学祖元によれば、時宗は禅の大悟によって精神を支えたといわれる⁸⁾。なお無学祖元はまだ南宋温州の能仁寺にいた頃の1275年に元軍が同地に侵入し包囲されるが、「臨刃偈」を詠み、元軍も黙って去ったと伝わる⁸⁾。

1.9.2.5 弘安の役（1281・弘安4）

1281（弘安4）年、元・高麗軍を主力とした東路軍約40,000～56,989人・軍船900艘と旧南宋軍を主力とした江南軍約100,000人および江南軍水夫（人数不詳）・軍船3,500艘、3軍の合計、約140,000～156,989人および江南軍水夫（人数不詳）・軍船4,400艘の軍が日本に向けて出航した⁸⁾。日本へ派遣された艦隊は史上例をみない世界史上最大規

模の艦隊であった⁸⁾。なお、『元史』阿剌罕伝によると、モンゴル人を主力とした蒙古軍約 400,000 人が動員されたとしている⁸⁾。

元の官吏・王惲は、この日本侵攻軍の威勢を「隋・唐以来、出師の盛なること、未だこれを見ざるなり」とその記事『汎海小録』の中で評している⁸⁾。

また、高麗人の定慧寺の禅僧・冲止は、東路軍の威容を前にして以下のような漢詩を詠み、フビライと東路軍を讃えた⁸⁾。

「皇帝（フビライ）が天下を統御するに、功績は堯（中国神話の君主）を超えた。徳は寛大で断折を包容し、広い恩沢は隅々にまで及んだ。車は千途の轍と共にし、書は天下の文章と共にした。ただ醜い島夷（日本）だけが残し、鼎魚のように群れをなして生きていた。ただ大海を隔てていてを頼りにして、（元と）領域を分けることを図った。日本は苞茅（朝貢）にかつて入ったことがなく、班瑞（朝貢）もまた聞いたことがない。そこで帝がこれに怒って、時に我が君（忠烈王）に命じた。千隻の龍鵠（軍艦か）の船と 10 万の勇敢な軍兵で扶桑（日本）の野において罪を問い、合浦の水辺で軍を興した。鼓声が大海に鳴り響き、旗は長い雲を揺さぶった」⁸⁾

さらに、冲止は元軍の戦勝と戦勝後の天下太平の世を想像し、次のように詠んでいる。

「元軍は一瞬のうちに日本軍を打ち破り、勝報は朝夕のうちに伝わるだろう。玉帛で修貢を争い、戦争で紛争を解決する。元帥は宝玉と酒器を賜わり、兵卒は田畑へ帰れるだろう。三尺の快剣は剣箱に、百斤の良弓は弓囊に。四方に歌声が響き、世相の音楽に満ち溢れる。辺境の警備で、戦争を告げる狼煙が収まり、辺方に風塵（騒乱）の気が絶たれるのだ。聖なる天子（フビライ）を拝見し、万歳まで南薰太平歌を奏しよう」⁸⁾

また、江南軍について、弘安の役の後にフビライの重臣・劉宣は「南方の新附の旧軍（江南軍）は、十余年の間に老い病んで逃亡し出征で傷つき、それまでの精鋭軍は海東の日本で敗北し、（弘安の役の後に）新たに招集された軍兵はみな武芸や戦争に慣れていないものばかり、これでは敵（日本）を制圧しようとしてもきつと失敗に帰すだろう」と述べており、弘安の役の江南軍については精鋭軍という元側の認識があり、これを失ったために新たな軍勢で日本征服するのは難しいと述べている⁸⁾。

東路軍と江南軍は 6 月 15 日までに壱岐島で合流し両軍で大宰府を攻める計画を立てていた⁸⁾。まず先に東路軍が出発した⁸⁾。

○東路軍の出航

5 月 3 日、東征都元帥・ヒンドゥ（忻都）・洪茶丘率いるモンゴル人、漢人等から成る蒙古・漢軍 30,000 人と征日本都元帥・金方慶率いる高麗軍約 10,000 人（実数 9,960 人）の東路軍 900 艘が、高麗国王・忠烈王の閲兵を受けた後、朝鮮半島の合浦を出航した⁸⁾。

○対馬侵攻

5 月 21 日、東路軍は対馬沖に到着し、対馬の世界村大明浦に上陸⁸⁾した。上陸した東路軍は日本側の激しい抵抗を受け、郎将の康彦、康師子等が戦死した⁸⁾。

○壱岐侵攻

5月26日、東路軍は壱岐に襲来⁸⁾した。なお、東路軍は壱岐の忽魯勿塔に向かう途中、暴風雨に遭遇し兵士113人、水夫36人の行方不明者を出す事態に遭遇している⁸⁾。

○長門襲来

東路軍の一部は山陽道の長門にも襲来する⁸⁾。広橋兼仲の日記『勘仲記』(6月14日条)に、東路軍の軍船と思われる軍船300が山陽道の長門の浦に来着したことが大宰府からの飛脚によって京都に伝えられたと記載している⁸⁾。また、壬生顕衡の日記『弘安四年日記抄』(6月15日条)にも「異國賊船襲来長門」とあり、長門に元軍が現れたことが確認できるが、長門襲来の実態に関しては史料が少なく不明な点が多い⁸⁾。

○博多湾進入

東路軍は捕えた対馬の島人から、大宰府の西六十里の地点にいた日本軍が東路軍の襲来に備えて移動したという情報を得た⁸⁾。東路軍は移動した日本軍の間隙を衝いて上陸し、一気に大宰府を占領する計画を立てると共に、直接フビライに伺いを立てて、軍事のことは東路軍諸将自らが判断して実行するよう軍事作戦の了承を得た⁸⁾。こうして当初の計画とは異なり、江南軍を待たずに東路軍単独で手薄とされる大宰府西方面からの上陸を開始することに決定した⁸⁾。

対馬・壱岐を占領した東路軍は博多湾に現れ、博多湾岸から北九州へ上陸を行おうとした⁸⁾。しかし日本側はすでに防衛体制を整えて博多湾岸に約20kmにも及ぶ石築地(元寇防塁)を築いており、東路軍は博多湾岸からの上陸を断念した⁸⁾。日本軍の中には伊予の御家人・河野通有など、武勇を示すために石築地を背に陣を張って東路軍を迎え撃った者さえもいた⁸⁾。後に河野通有は「河野の後築地」と呼ばれ称賛された⁸⁾。

この石築地は、最も頑強な部分で高さ3m、幅2m以上ともされており、日本側が守備する内陸方面からは騎乗しながら駆け上がれるように土を盛っており、元軍側の浜辺方面には乱杭や逆茂木などの上陸妨害物を設置していた。『予章記』によれば、海上から見た博多湾は「危峰の江に臨むが如し」外観であったという⁸⁾。

○志賀島の戦い

6月6日、博多湾沿岸からの上陸を断念した東路軍は陸繋島である志賀島に上陸し、これを占領⁸⁾した。志賀島周辺を軍船の停泊地とした⁸⁾。

東路軍の管軍上百戸・張成の墓碑によると、この日の夜半、日本軍の一部の武士たちが東路軍の軍船に夜襲を行い、張成らは軍船から応戦した⁸⁾。やがて夜が明けると日本軍は引き揚げていった⁸⁾。

6月8日午前10時頃、日本軍は軍勢を二手に分け、海路と海の中道伝いの陸路の両面から志賀島の東路軍に対して総攻撃を敢行した⁸⁾。

海の中道を通して陸路から東路軍に攻めいった日本軍に対して、張成らは弩兵を率い

て軍船から降りて応戦⁸⁾した。志賀島の東路軍は日本軍に 300 人ほどの損害を与えたが、日本軍の攻勢に抗しきれず潰走する⁸⁾。東路軍の司令官で東征都元帥の洪茶丘は馬を捨てて敗走していたが、日本軍の追撃を受け危うく討ち死にする寸前まで追い込まれた⁸⁾。しかし、管軍万戸の王某の軍勢が洪茶丘を追撃していた日本軍の側面に攻撃を仕掛け、日本兵を 50 人ほど討ち取ったため追撃していた日本軍は退き、洪茶丘は僅かに逃れることができたという⁸⁾。

海路から東路軍を攻撃した伊予の御家人・河野通有は元兵の石弓によって負傷しながらも太刀を持って元軍船に斬り込み、元軍将校を生け捕るという手柄を立てた⁸⁾。また、海上からの攻撃には肥後の御家人・竹崎季長や肥前御家人の福田兼重・福田兼光父子らも参加し活躍した⁸⁾。

6 月 9 日、東路軍の張成らは防御に徹して陣を固め、攻め寄せる日本軍に対抗するなどして奮戦した⁸⁾。しかし、この日の戦闘も日本軍が勝利し、東路軍は敗戦を重ねた⁸⁾。

この志賀島の戦いで大敗した東路軍は志賀島を放棄して壱岐島へと後退し、江南軍の到着を待つことにした⁸⁾。

○東路軍軍議

ところが壱岐島の東路軍は連戦の戦況不利に加えて、江南軍が壱岐島で合流する期限である 6 月 15 日を過ぎても現れず、さらに東路軍内で疫病が蔓延して 3,000 余人もの死者を出すなどして進退極まった⁸⁾。高麗国王・忠烈王に仕えた密直・郭預は、この時の東路軍の様子を「暑さと不潔な空気が人々を燻し、海上を満たした（元兵の）屍は怨恨の塊と化す」と漢詩に詠んでいる⁸⁾。

この時の高麗軍司令官の征日本軍万戸・金周鼎の墓碑『金周鼎墓誌銘』によると、東路軍内では、互いに助け合うこともできないほど疲弊していたが、その中で金周鼎は病人を率先して保護したという⁸⁾。また、『金方慶墓誌銘』によれば、疫病が蔓延し、東路軍はこれ以上の日本軍との連戦を続行するのは難しい状況であったという⁸⁾。東路軍の中では、撤退すべきとの声も上がった⁸⁾。

このような状況に至り、戦況の不利を悟った東路軍司令官である東征都元帥・ヒンドゥ（忻都）、洪茶丘らは撤退の是非について征日本都元帥・金方慶と以下のように何度か議論した⁸⁾。

ヒンドゥ、洪茶丘「皇帝（フビライ）の命令では『江南軍をして、東路軍と必ず 6 月 15 日までに壱岐島に合流させよ』とおっしゃった。未だに江南軍は壱岐島に到着していない。我が軍（東路軍）は、先に日本に到着して数戦し、船は腐れ兵糧は尽きた。このような事態に到って、いったいどうしたものだ。」⁸⁾

この時、金方慶は黙ったまま反論しなかった⁸⁾。10 日余り後、同じような議論が繰り返された時、今度は以下のように反論した⁸⁾。

金方慶「皇帝の命令を奉じて、3 か月の兵糧を用意した。今、後 1 か月の兵糧が尚あ

る。江南軍が来るのを待って、両軍合わせて攻めれば、必ず日本軍を滅ぼすことができるだろう。」⁸⁾

ヒンドウ（忻都）、洪茶丘は敢えて反論せず、江南軍を待ってから反撃に出るという金方慶の主張が通った⁸⁾。

○江南軍の出航

一方、江南軍は、当初の作戦計画と異なって東路軍が待つ壱岐島を目指さず、平戸島を目指した⁸⁾。江南軍が平戸島を目指した理由は、嵐で元朝領内に遭難した日本の船の船頭に地図を描かせたところ、平戸島が大宰府に近く周囲が海で囲まれ、軍船を停泊させるのに便利であり、かつ日本軍が防備を固めておらず、ここから東路軍と合流して大宰府目指して攻め込むと有利という情報を得ていたためである⁸⁾。

6月中旬頃、元軍総司令官の日本行省左丞相・アラカン（阿剌罕）と同右丞・范文虎、同左丞・李庭率いる江南軍は、総司令官のアラカン（阿剌罕）が病気のため総司令官をアタカイ（阿塔海）に交代したこともあり、東路軍より遅れて慶元（明州）・定海等から出航した⁸⁾。

総司令官のアタカイ（阿塔海）は乗船し渡航した気配がないため、実質の江南軍総司令官は右丞・范文虎であったとみられる⁸⁾。江南軍の先鋒部隊は寿春副万户・呉安民が務めた⁸⁾。

江南軍の航路については、直接、江南地方から平戸島に向かった部隊とは別に、江南地方から出航後、邢タルグタイ（邢答剌忽台）の部隊のように朝鮮半島西南の済州島を経て平戸島に向かった部隊もあった⁸⁾。

江南軍の正確な出航時期は不明⁸⁾である。唯一確認できるのは管軍万户・ギラダイ（吉刺歹）率いる軍船が6月18日に、唯一確認できるのは管軍万户・ギラダイ（吉刺歹）率いる軍船が6月18日に江南軍全軍と共に、唯一確認できるのは管軍万户・ギラダイ（吉刺歹）率いる軍船が6月18日に江南軍全軍と共に出航したかは明らかではない⁸⁾。

○江南軍の先遣部隊

先立って江南軍は、東路軍に向けて平戸島沖での合流を促す先遣隊を派遣し、壱岐島で先遣隊が東路軍と合流した⁸⁾。江南軍の先遣隊かは不明であるが、広橋兼仲の日記『勘仲記』（6月24日条）によると対馬に宋朝船（南宋型の船）300余艘が現れたことが伝聞として記載されている⁸⁾。また、壬生顕衡の日記『弘安四年日記抄』（6月27日条）にも「異國又襲来」とあり、詳細は不明ながら元軍と日本軍との間で合戦があったという早馬による報告があったことが記されている⁸⁾。

○江南軍の平戸島・鷹島到着

6月下旬、慶元（明州）・定海等から出航した江南軍主力は7昼夜かけて平戸島と鷹島に到着した⁸⁾。平戸島に上陸した都元帥・張禧率いる4,000人の軍勢は壘を築き陣地

を構築して日本軍の襲来に備えると共に、艦船を風浪に備えて五十歩の間隔で平戸島周辺に停泊させた⁸⁾。

○壱岐島の戦い

6月29日、一方、日本軍は壱岐島の東路軍に対して松浦党、彼杵、高木、龍造寺氏などの数万の軍勢で総攻撃を開始した⁸⁾。この戦闘で薩摩の御家人・島津長久や比志島時範、松浦党の肥前の御家人・山代栄や舩原三郎らが奮戦し活躍した⁸⁾。山代栄はこの時の活躍により、肥前守護・北条時定から書下を与えられている⁸⁾。

7月2日、肥前の御家人・龍造寺家清ら日本軍は壱岐島の瀬戸浦から上陸を開始⁸⁾した。瀬戸浦において東路軍と激戦が展開された⁸⁾。龍造寺家清率いる龍造寺氏は、一門の龍造寺季時が戦死するなど損害を被りながらも、瀬戸浦の戦いにおいて奮戦⁸⁾する。龍造寺家清は、その功績により肥前守護・北条時定から書下を与えられた⁸⁾。一方、東路軍の管軍上百戸・張成を称える墓碑文にも6月29日と7月2日に壱岐島に日本軍が攻め寄せ、張成ら東路軍が奮戦した様子が記されている⁸⁾。

壱岐島の戦いの結果、東路軍は日本軍の攻勢による苦戦と江南軍が平戸島に到着した知らせに接したことにより壱岐島を放棄して、江南軍と合流するため平戸島に向けて移動した⁸⁾。一方、日本軍はこの壱岐島の戦いで東路軍を壱岐島から駆逐したものの、前の鎮西奉行・少弐資能が負傷し（資能はこの時の傷がもとで後に死去）、少弐経資の息子・少弐資時が壱岐島前の海上において戦死するなどの損害を出している⁸⁾。

京都の官務・壬生顕衡の日記『弘安四年日記抄』（7月12日条）によると、壱岐島の戦いにより（元軍が壱岐島を放棄したため）元軍が退散し撤退したという風聞が日本側にあったことが確認できる⁸⁾。

○東路軍・江南軍合流

7月中旬-7月27日、平戸島周辺に停泊していた江南軍は、平戸島を都元帥・張禧の軍勢4,000人に守らせ、続いて鷹島へと主力を移動させた⁸⁾。新たな計画である「平戸島で合流し、大宰府目指して進撃する」計画を実行に移すための行動と思われる⁸⁾。

東路軍が鷹島に到着し、江南軍と合流が完了する⁸⁾。

壱岐島の戦いにより元軍が撤退したという風聞に接していた京都の官務・壬生顕衡は、その日記『弘安四年日記抄』で、元軍が平戸島方面から再度襲来したという飛脚の情報に接して「怖畏無きに非ざるか、返す返すも驚き」と恐怖と驚きの念をもって日記を記している⁸⁾。

○鷹島沖海戦

7月27日、鷹島沖に停泊した元軍艦船隊に対して、集結した日本軍の軍船が攻撃を仕掛けて海戦となった⁸⁾。戦闘は日中から夜明けに掛けて長時間続き、夜明けとともに

日本軍は引き揚げていった⁸⁾。

この鷹島沖海戦については日本側に史料は残っておらず、戦闘の詳細については詳らかではない⁸⁾。元軍はこれまでの戦闘により招討使・クトカス（忽都哈思）が戦死するなどの損害を出していた⁸⁾。そのためか、元軍は合流して計画通り大宰府目指して進撃しようとしていたものの、九州本土への上陸を開始することを躊躇して鷹島で進軍を停止した⁸⁾。また『張氏墓誌銘』によると、鷹島は潮の満ち引きが激しく軍船が進むことができない状況だったという⁸⁾。鷹島に留まった元軍は、鷹島に駐兵して土城を築くなどして塁を築いて日本軍の鷹島上陸に備えた⁸⁾。また、元軍艦船隊は船を縛って砦と成し、これを池州総把・マハマド（馬馬）に守備させた⁸⁾。

一方、日本側は六波羅探題から派遣された後の引付衆・宇都宮貞綱率いる 60,000 余騎ともいわれる大軍が北九州の戦場に向けて進撃中であった⁸⁾。なお、この軍勢の先陣が中国地方の長府に到着した頃には、元軍は壊滅しており戦闘には間に合わなかった⁸⁾。

さらに幕府は、同年 6 月 28 日には九州および中国地方の因幡、伯耆、出雲、石見の 4 か国における、幕府の権限の直接及ばない荘園領主が治める荘園の年貢を兵糧米として徴収することを朝廷に申し入れ、さらなる戦時動員体制を敷いた⁸⁾。

○台風

7 月 30 日夜半、台風が襲来し、元軍の軍船の多くが沈没、損壊するなどして大損害を被った⁸⁾。東路軍が日本を目指して出航してから約 3 か月、博多湾に侵入して戦闘が始まってから約 2 か月後のことであった⁸⁾。なお、北九州に上陸する台風は平年 3.2 回ほどであり、約 3 か月もの間、海上に停滞していた元軍にとっては、偶発的な台風ではなかった⁸⁾。

一元軍の損害状況

『張氏墓誌銘』によれば、台風により荒れた波の様子は「山の如し」であったといい、軍船同士が激突して沈み、元兵は叫びながら溺死する者が無数であったという⁸⁾。また、元朝の文人・周密の『癸辛雜識』によると、元軍の軍船は、台風により艦船同士が衝突し砕け、約 4,000 隻の軍船のうち残存艦船は 200 隻であったという⁸⁾。

ただし、後述のように、江淮戦艦数百艘や諸将によっては台風の被害を免れており、また、東路軍の高麗船 900 艘の台風による損害も軽微であったことから『癸辛雜識』の残存艦船 200 隻というのは誇張である可能性もある⁸⁾。

一元軍諸将等の状況

『元史』等の史料には台風を受けた元軍将校たちの様子が次のように記されている⁸⁾。

江南軍の日本行省左丞・李庭は台風により自身の乗船する軍船が沈没し、壊れた船体の破片に挟まりながらも、岸に辿り着いた⁸⁾。江南軍の 1 千余人の兵を率いた管軍総管・楚鼎も船が壊れ、三昼夜漂流した末に江南軍総司令官の右丞・范文虎と合流している⁸⁾。

池州総把・マハマド（馬馬）の妻・張氏は、モンゴル軍の通例として夫に従軍してい

たが、台風の際、マハマド（馬馬）が軍務に服している中、一人船中にあって夫の総把印を守り、決して逃げ出さず、船が壊れることになって、折れたマストにしがみついて岸に達することができたという⁸⁾。

将校の中には実際に溺死した者もいた⁸⁾。大元に人質に出されていた高麗国王・高宗の息子の王緯の子で東路軍の左副都元帥・アラテムル（阿剌帖木児）は台風を受けて溺死している⁸⁾。

また、『金周鼎墓誌銘』によると、東路軍の征日本軍万戸・金周鼎は、漂流する兵ら 400 人余りを救助する等したため、兵らは益々、金周鼎の下に附して帰還したという⁸⁾。一江南軍における被害を免れた部隊

范文虎や李庭率いる軍船が大損害を被ったのとは対照的に、一方で台風の被害を受けなかった部隊もあった⁸⁾。

平戸島に在陣していた江南軍の都元帥・張禧の軍勢は、艦船同士距離を空けて停泊させるなど風浪対策を施していたため、被害を受けなかった⁸⁾。また、『元史』囊加歹伝によると江南軍の都元帥・ナンギャダイ（囊加歹）率いる戦艦群は、「未だ至らずして帰った」とだけあり台風の被害は確認されない⁸⁾。東路軍の管軍万戸・イエスデル（也速解児）率いる江淮戦艦数百艘も台風の被害を受けず、後に全軍撤退した⁸⁾。イエスデル（也速解児）は、その功績により帰還後、フビライから恩賞を与えられている⁸⁾。

このように諸将によって台風の被害が異なることから、約 4,400 艘の大船団は平戸島・鷹島周辺だけでなく、海域広く散開していたものと思われる⁸⁾。

一東路軍の損害状況

東路軍も台風により損害を受けたが、江南軍に比べると損害は軽微であった⁸⁾。

その理由を弘安の役から 11 年後の第三次日本侵攻の是非に関する評議の際、中書省右丞の丁なる者が、フビライに対して「江南の戦船は大きな船はとても大きいものの、（台風により）接触すればすぐに壊れた。これは（第二次日本侵攻の）利を失する所以である。高麗をして船を造らせて、再び日本に遠征し、日本を取ることがよろしい」と発言しており、高麗で造船された軍船に比べて、江南船は脆弱であったとしている⁸⁾。また、元朝の官吏・王惲もまた「唯だ句麗（高麗）の船は堅く全きを得、遂に師（軍）を西還す」と述べており、高麗船が頑丈だったことが分かる⁸⁾。それを裏付けるように、捕虜、戦死、病死、溺死を除く高麗兵と東路軍水夫の生還者は 7 割を超えていた⁸⁾。

なお、考古学においても、多くの元軍船が沈んだ鷹島沖海底で見つかっている陶磁器などの元軍の遺物は、ほとんどが江南地方で作られていたことが判明しており、高麗産の遺物は発見されておらず、高麗船が頑丈だったとする諸史料を裏付けている⁸⁾。

元軍は、台風の翌日、首都・大都に状況を伝えるため、マハマド（馬馬）を急遽派遣した⁸⁾。

○元軍軍議と撤退

閏7月5日、江南軍総司令官の右丞・范文虎と都元帥・張禧ら諸将との間で、戦闘を続行するか帰還するか以下のような議論があった⁸⁾。

張禧「士卒の溺死する者は半ばに及んでいます。死を免れた者は、皆壮士ばかりです。もはや、士卒たちは帰還できるという心境にはないでしょう。それに乗じて、食糧は敵から奪いながら、もって進んで戦いましょう」⁸⁾

范文虎「帰朝した際に罪に問われた時は、私がこれに当たる。公（張禧）は私と共に罪に問われることはあるまい」⁸⁾

このような議論の末、結局は范文虎の主張が通り、元軍は撤退することになったという⁸⁾。張禧は軍船を失っていた范文虎に頑丈な船を与えて撤退させることにした⁸⁾。その他の諸将も頑丈な船から兵卒を無理矢理降ろして乗りこむと、鷹島の西の浦より兵卒10余万を見捨てて逃亡した⁸⁾。平戸島に在陣する張禧は軍船から軍馬70頭を降ろして、これを平戸島に棄てるとその軍勢4,000人を軍船に収容して帰還した⁸⁾。帰朝後、范文虎等は敗戦により罰せられたが、張禧は部下の将兵を見捨てなかったことから罰せられることはなかった⁸⁾。

この時の元軍諸将の逃亡の様子を『蒙古襲来絵詞』の閏7月5日の記事の肥前国御家人・某の言葉の中に「鷹島の西の浦より、（台風で）破れ残った船に賊徒が数多混み乗っているのを払い除けて、然るべき者（諸将）どもと思われる者を乗せて、早や逃げ帰った」とある⁸⁾。

なお、元軍のうち、宋王朝の皇室の子孫で夫の楊將軍の日本侵攻に従軍していた趙時妙の墓碑によると、趙時妙は台風により夫と離れ離れとなった⁸⁾。そのため、趙時妙は東西不明となり船で彷徨っていたが、目前に青い鳥が現れ、前を導いたため、これについていくと、7日を経て東呉（江南地方）に至り帰還できたという⁸⁾。

○御厨海上合戦

閏7月5日、日本軍は伊万里湾海上の元軍に対して総攻撃を開始⁸⁾した。

午後6時頃、御厨海上において肥後の御家人・竹崎季長らが元軍の軍船に攻撃を仕掛け、筑後の地頭・香西度景らは元軍の軍船3艘の内の大船1艘を追い掛け乗り移り元兵の首を挙げ、香西度景の舎弟・香西広度は元兵との格闘の末に元兵と共に海中に没した⁸⁾。また、肥前の御家人で黒尾社大宮司・藤原資門も御厨の千崎で元軍の軍船に乗り移り、負傷しながらも元兵一人を生け捕り、元兵一人の首を取る等して奮戦した⁸⁾。

日本軍は、この御厨海上合戦で元軍の軍船を伊万里湾からほぼ一掃した⁸⁾。

弘安4年閏7月5日の「御厨海上合戦」については、長く伊万里湾合戦＝肥前国鷹島合戦とされてきて、疑われることがなかった⁸⁾。しかし竹崎季長ら博多湾岸にいた武士は、閏7月5日払暁＝夜明けに関東御使合田遠俊・安東重綱らと軍議し、その昼に博多湾・生の松原を行進し、船に乗った⁸⁾。合戦は閏7月5日酉の刻（夕方6時）で、肥後・

筑前・薩摩国御家人らが戦った⁸⁾。そして翌6日払暁＝夜明けに季長らは御使合田の仮館にて合戦の成果を報告した⁸⁾。生の松原から伊万里湾までの140キロ以上をわずか1日で船で往復して、合戦することはあり得ない⁸⁾。博多湾上に浮かぶ能古島も志賀島も御厨（権門に海産物を貢上する庄園）であったから、合戦場である「御厨海上」とは博多湾を指し、攻撃目標は5月下旬以来、志賀島を拠点としていた東路軍（高麗・旧北宋軍・蒙古軍）となる⁸⁾。伊万里湾・鷹島で合戦が行われたのは2日後の閏7月7日で、肥前国・豊後国・薩摩国（一部）らの御家人が鷹島を拠点としていた江南軍（旧南宋軍）と戦い、勝利した⁸⁾。一部の連絡隊を除けば、東路軍が志賀島を放棄して、鷹島に向かったことはなく、志賀島を対大宰府の重要拠点として死守しながら、江南軍の到着を待ち続けていた⁸⁾。

○鷹島掃討戦

御厨海上合戦で元軍の軍船をほぼ殲滅した日本軍は、次に鷹島に籠る元軍10余万と鷹島に残る元軍の軍船の殲滅を目指した⁸⁾。一方、台風の後、鷹島には日本軍の襲来に備えて塁を築いて防備を固めた元軍の兵士10余万が籠っていたが、台風の襲来で既に大損害を被っていたため諸将らは、軍議を開き最終的に撤退に決する⁸⁾。諸将は損傷していない船から兵卒を無理矢理下ろすと、乗船して兵卒を見捨て本国へと逃走した⁸⁾。その後鷹島では管軍百戸の張なる者を指揮官として、張総官と称してその命に従い、木を伐って船を建造して撤退することにした⁸⁾。

閏7月7日、日本軍は鷹島への総攻撃を開始⁸⁾した。

文永の役でも活躍した豊後の御家人・都甲惟親・都甲惟遠父子らの手勢は鷹島の東浜から上陸し、東浜で元軍と戦闘状態に入り奮戦した⁸⁾。上陸した日本軍と元軍とで鷹島の船原中川原でも戦闘があり、肥前の御家人で黒尾社大宮司・藤原資門は戦傷を受けながらも、元兵を2人生け捕るなどした⁸⁾。また、鷹島陸上の戦闘では、西牟田永家や薩摩の御家人・島津長久、比志島時範らも奮戦し活躍した⁸⁾。

一方、海上でも残存する元軍の軍船と日本軍とで戦闘があり、肥前の御家人・福田兼重らが元軍の軍船を焼き払った⁸⁾。

これら福田兼重・都甲惟親父子ら日本軍による鷹島総攻撃により10余万の元軍は壊滅し、日本軍は20,000～30,000人の元の兵士を捕虜とした⁸⁾。現在においても鷹島掃討戦の激しさを物語るものとして、鷹島には首除、首崎、血崎、血浦、刀の元、胴代、死浦、地獄谷、遠矢の原、前生死岩、後生死岩、供養の元、伊野利（祈り）の浜などの地名が代々伝わっている⁸⁾。

高麗国王・忠烈王に仕えた密直・郭預は、鷹島掃討戦後の情景を「悲しいかな、10万の江南人。孤島（鷹島）に拠って赤身で立ちつくす。今や（鷹島掃討戦で死んだ）怨恨の骸骨は山ほど高く、夜を徹して天に向かって死んだ魂が泣く」と漢詩に詠んでいる⁸⁾。一方で郭預は、兵卒を見捨てた将校については「当時の将軍がもし生きて帰るなら、

1281(弘安4)弘安の役

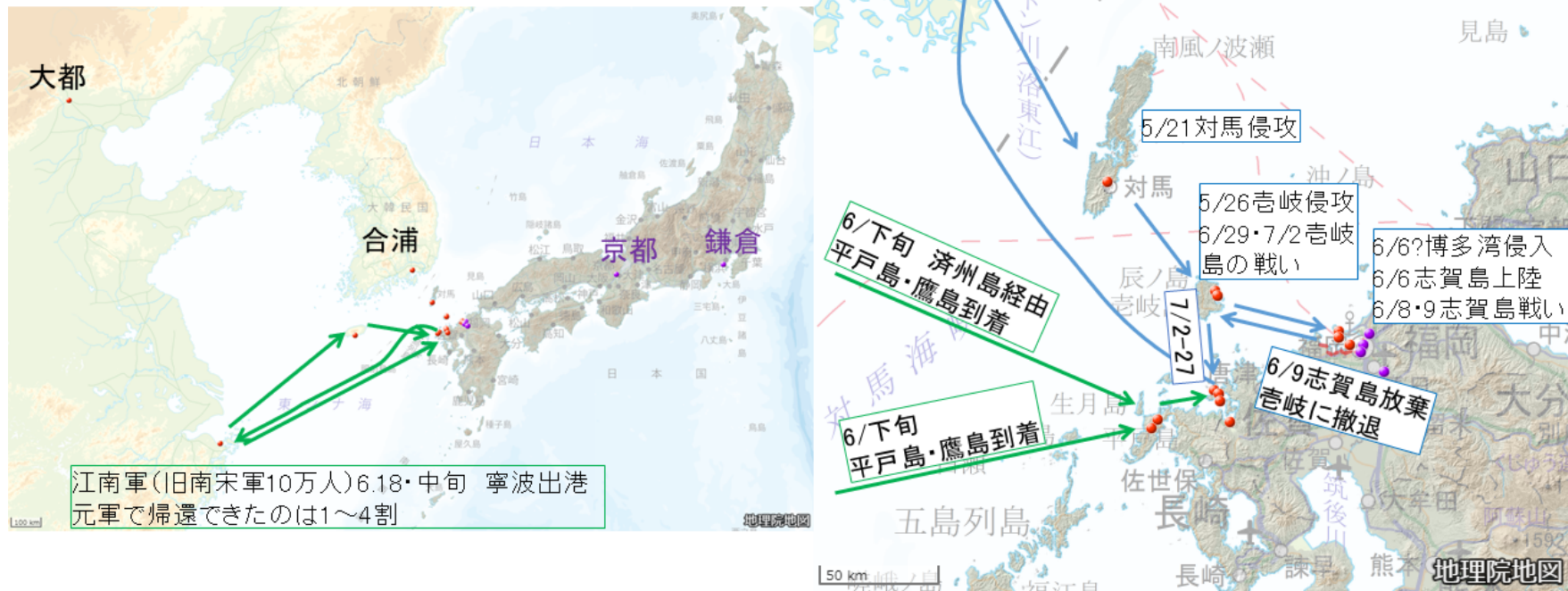


図 1.9-4 元寇 1281 (弘安 4) 弘安の役 広域図

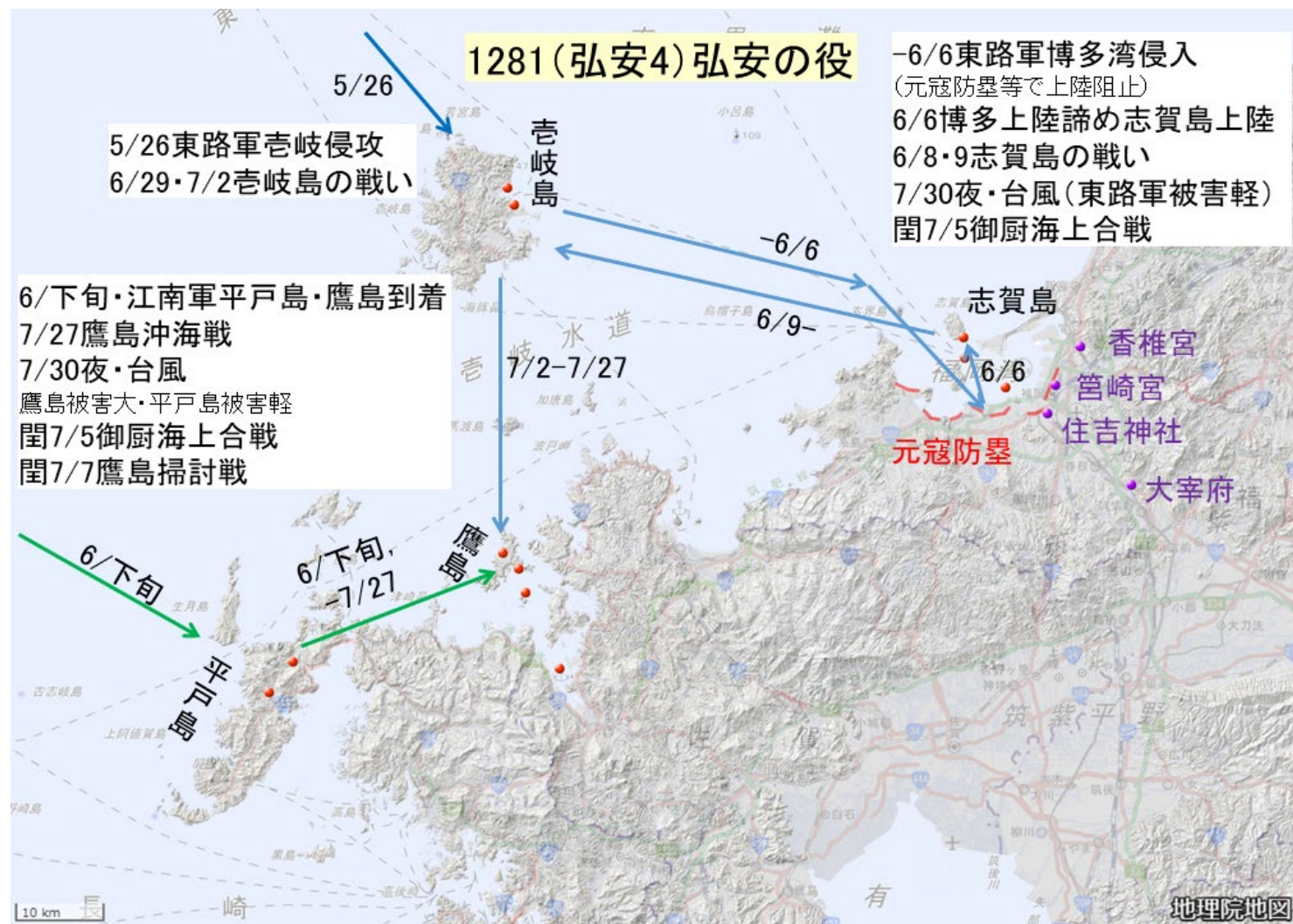


図 1.9-5 元寇 1281 (弘安4) 弘安の役 九州戦闘経緯

表 1.9-2 1281 (弘安 4) 年「弘安の役」とその後の日本、元の動き

日本	元
1281 弘安の役 5/21 東路軍対馬侵攻, 5/26 東路軍壱岐島侵攻, 6/6?東路軍博多湾侵入, 6/6 志賀島上陸, 6/8・9 志賀島の戦い 6/29・7/2 壱岐島の戦い, 7/27 鷹島沖海戦 7/30 夜 台風 閏 7/5 御厨海上合戦 閏 7/7 鷹島掃討戦	1281 弘安の役 5/3 東路軍 (蒙・漢・麗 4 万人) 合浦出港, 5/21 対馬・5/26 壱岐島侵攻 6. 18・中旬 江南軍 (旧南宋軍 10 万人) 寧波出港, 6. 下旬・平戸島・鷹島到着 7/30 夜 台風 閏 7/5 范文虎 10 万余の兵を見捨てて撤退, 張禧軍勢 4,000 人を軍船に收容して帰還。 閏 7/5 御厨海上合戦, 閏 7/7 鷹島掃討戦 元軍で帰還できたものは 1~4 割。高麗兵及び東路軍水夫の帰還者は 26,989 人のうち, 19,397 人。
弘安の役後 高麗出兵を計画するも中止。 1283 元側の動向を察知し, 造船を担った江南地方に間者を送り情報収集 1283 翌年 (1284) 春元大軍襲来情報を得て, 九州の各守護に用心を厳命 1284 4 月北条時宗死去 7 月北条貞時第 9 代執権に就任 1285 11 月弘安合戦 (霜月騒動) 北条得宗家専制の完成 1293 鎮西探題設置 (北条一門が任じられる) 1297 永仁の徳政令 1317 文保の和談 1318 2 月花園天皇讓位により後醍醐天皇に踐祚	1282. 9 軍船の建造を開始 (再度の日本侵攻を計画) 1283. 1 日本侵攻の司令部・日本行省を再設置 1283. 8 第 9 回使節 (提挙・王君治と補陀禅寺の長老・如智) 派遣。日本未到達。 1284. 5 日本行省を廃止し, 再び日本侵攻計画を中止 (チャンパ王国対応) 1284. 10 日本侵攻用の船と水夫の募集を開始。 1284. 10 第 10 回使節 (正使・王積翁と補陀禅寺の長老・如智ら) を日本に派遣。日本派遣を恐れた水夫らが船中において王積翁を殺害し日本に到達せず。 1285 4 月・海戦訓練実施 10 月・日本侵攻の司令部・日本行省を再設置。 1285 11 月・第三次日本侵攻の作戦計画発表。 1286 1 月突如日本侵攻計画中止。 1292. 7 第 11 回使節 (交易により来航した日本の商船に日本宛の書状を託す) 1292 第 12 回使節 (漂着日本人の護送を機に日本側に服属を迫る国書を渡すよう命じられた高麗国王が派遣) 1294. 1 フビライ死去 → 大元朝第 2 代皇帝・テムルは日本侵攻の進言を退ける

これを思えば、憂鬱が増すことを無くすことはできないだろう」とし、いにしえの楚の項羽が漢の劉邦に敗戦した際、帰還することを恥じて烏江で自害したことを例に「悲壮かな、万古の英雄（項羽）は烏江にて、また東方に帰還することを恥じて功業を捨つ」と詠み、項羽と比較して逃げ帰った将校らを非難している⁸⁾。

『元史』によると、『10万の衆（鷹島に置き去りにされた兵士）、還ることの得る者、三人のみ」とあり、後に元に帰還できた者は、捕虜となっていた旧南宋人の兵卒・于闐と莫青、呉万五の3人のみであったという⁸⁾。他方、『高麗史』では、鷹島に取り残された江南軍の管軍把総・沈聡ら十一人が高麗に逃げ帰っていることが確認できる⁸⁾。

南宋遺臣の鄭思肖は、日本に向けて出航した元軍が鷹島の戦いで壊滅するまでの様子を以下のように詠んでいる⁸⁾。

「辛巳6月の半ば、元賊は四明より海に出る。大船7千隻、7月半ば頃、倭国の白骨山（鷹島）に至る。土城を築き、駐兵して対壘する。晦日（30日）に大風雨がおこり、雹の大きさは拳の如し。船は大浪のために掀播し、沈壊してしまう。韃（蒙古）軍は半ば海に没し、船はわずか400餘隻のみ廻る。20万人は白骨山の上に置き去りにされ、海を渡って帰る船がなく、倭人のためにことごとく殺される。山の上に素より居る人なく、ただ巨蛇が多いのみ。伝えるところによれば、唐の東征軍士はみなこの山に隕命したという。ゆえに白骨山という。または枯髑山ともいう」⁸⁾

戦闘はこの鷹島掃討戦をもって終了し、弘安の役は日本軍の勝利で幕を閉じた⁸⁾。

○元・高麗連合軍の損害

閏7月9日、日本軍は捕虜20,000～30,000人を八角島（博多か）に連行する⁸⁾。

『元史』によると、日本軍はモンゴル人と高麗人、および漢人の捕虜は殺害したが、交流のあった旧南宋人の捕虜は命を助け、奴隸としたという⁸⁾。他方、『高麗史』では命を助けられた捕虜は、工匠および農事に知識のある者となっている⁸⁾。この時に処刑された者や奴隸とされた者の他に、すぐには処分の沙汰を下されず、各々に預けられた捕虜も多数おり、捕虜の処分はその後にも継続して行われた⁸⁾。幕府は捕虜が逃げ出さないように、昼夜問わず往来の船の監視を御家人に命じている⁸⁾。なお、近年、大阪府和泉市内の寺所蔵の『大般若波羅蜜多經』経典の修正に弘安の役で投降した捕虜が1286（弘安9）年4月上旬に携わっていたことがわかった⁸⁾。同書によると「大唐国江西路瑞州軍人何三於」とあり、修正に携わっていたのは江南軍所属の旧南宋軍人であった⁸⁾。

また、九州からの使者により戦勝の報が京都にも続々と伝わり、京都の官務・壬生顯衡の日記『弘安四年日記抄』（閏7月12日条）には、台風により元軍が崩壊し元兵2,000人が降伏したこと、その2日後の公家・広橋兼仲の日記『勘仲記』（閏7月14日条）には台風を受けて元軍船の多くが漂没し、元兵の誅戮ならびに捕虜が数千人に及んだこと、さらにその7日後の『弘安四年日記抄』（閏7月21日条）には残留していた元軍の殲滅が完了したことが記載されている⁸⁾。

元軍のうち帰還できた兵士は、『元史』の中でも、全軍の1～4割と格差が見受けられる。元軍140,000～156,989人のうちの1～4割とした場合、帰還者の数はおよそ14,000～62,796人⁸⁾である。また、『高麗史』によると、高麗兵および東路軍水夫の帰還者は26,989人のうち、19,397人⁸⁾としている。

この戦いによって元軍の海軍戦力の2/3以上が失われ、残った軍船も、相当数が破損された⁸⁾。

○マルコ・ポーロ『東方見聞録』の弘安の役

マルコ・ポーロの『東方見聞録』には以下のようにマルコ・ポーロが伝聞として聞いた弘安の役に関する記述がある⁸⁾。

…さて、フビライ・ハンはこの島の豊かさを聞かされてこれを征服しようと思い、二人の將軍に多数の船と騎兵と歩兵をつけて派遣した。將軍の一人はアバタン（アラカン（阿剌罕））、もう一人はジョンサインチン（ファン・ウェン・フー、范文虎）といい、二人とも賢く勇敢であった。彼らはサルコン（泉州）とキンセー（杭州）の港から大洋に乗り出し、長い航海の末にこの島に至った。上陸するとすぐに平野と村落を占領したが、城や町は奪うことができなかった。さて、そこで不幸が彼らを襲う。凄まじい北風が吹いてこの島を荒らし回ったのである。島にはほとんど港というものがなく、風は極めて強かったので、大カアンの船団はひとたまりもなかった。彼らはこのまま留まれば船がすべて失われてしまうと考え、島を離れた。しかし、少しばかり戻ったところに小島（鷹島）があり、船団はいやおうもなくこの小島にぶつかって破壊されてしまった。軍隊の大部分は滅び、わずかに3万人ほどが生き残ってこの小島に難を避けた。彼らには食糧も援軍もなく、もはや命はないものと諦めざるをえなかった。というのも、何艘かの船がいちはやく彼らの国に帰ったのだが、いっこうに戻って来る気配がなかったからである。実は司令官である二人の將軍が互いに憎み合い、そねみ合っていたのである。一人の將軍は嵐を逃れたのだが、小島に残された同僚の將軍の救援には赴こうとしなかった。大風は長く続かなかったので、吹き止んでしまえば戻ることは十分可能だったにもかかわらず、彼は戻ろうとせず、自分の国に帰ってしまった。大カアンの軍隊が残されたこの小島には人の住めるようなところではなく、彼ら以外に生き物の姿はなかった。さて、逃げ帰った者たちと小島に残された者たちがどうなったか、次にお話してみよう。

さて、すでに申し上げたように、小島に残された3万の兵士たちはどのようにして脱出してよいかわからず、もはや命はないものと諦めざるをえなかった。ジパング（日本）の王は、敵の一部が運命に見放されて小島に残され、他はちりぢりに逃げ去ったと聞くとおおいに喜び、ジパング中の船をこぞって小島に赴くと四方八方から攻め寄せた。タタール人（モンゴル人）たちは、戦いに慣れていないジパングの人々が船に警戒の兵を残さず、みな上陸してしまったのを見た。思慮に富んだタタール人たちは一気に動き出し、逃げると見せかけて敵の船に殺到すると、すぐさま乗り込んでしまった。船を守る兵がいなかったので極めて容易なことであった。さて、タタール人たちは船を奪うと、すぐさま本島に向けて出立した。彼らは上陸し、ジパング王の旗をなびかせて進んだ。首都を守る人々はこれに気付かず、てっきり味方が帰って来たのだと思って中に入れてしまった。それでタタール人たちは入城し、すぐさま城郭を占領し、住民たちをすべて外に追い払ったのである。もちろん美しい女たちだけは手元に留めた。さて、大カアンの軍隊はこうして首都を占領したのであったが、これを知ったジパングの王と軍隊とは大いに悲しみ、残された何艘かの船に乗って本島に戻ると、兵を集めて首都を囲んだ。一人として出ることも入ることもできなかった。中に籠もったタタール人たちは7か月の間持ちこたえた。その間、ことの次第をいかに大カアンに知らせるか、夜となく昼となく努めたのだが、結局、知らせることはできなかった。もはや持ちこたえられなくなって、命を

助けるかわりに一生ジパングの島から出ないという条件で降伏した。これは 1268 年に起こったことである（文永の役は 1274 年、弘安の役は 1281 年）。大カアンは逃げ帰った将軍の首を刎ねた。もう一方の将軍に対しても、武人にあるまじき振る舞いとして、処刑の命令を出した。

さて、私は今一つ、次のような驚異についてお話しするのを忘れるところであった。それは、戦いの初め、大カアンの軍隊がジパングに上陸して平野を占領した時のことであった。一つの塔を落とすと、中にいた人々は降伏を肯じなかった。その首を刎ねたのであったが、どうしても八人だけは首を切り落とすことができなかった。その八人は、うまく隠れて外からは見えなかったが、腕の肉と皮膚の間に石を埋め込んでいた。その石には魔術が施れ、決して刃物では殺されぬという効能を帯びる。これを聞いたタタール人の将軍たちはその八人を棒で殴り殺し、その死骸から石を取り出すと大事にしまったのであった。

1.9.2.6 弘安の役（1281・弘安 4）以後の動向

○第二次高麗征伐計画

元軍に大勝した鎌倉幕府は、直ちに高麗出兵計画を発表した⁸⁾。『東大寺文書』によると、幕府は少弐経資か大友頼泰を大將軍として、三ヵ国の御家人を主力に大和・山城の諸寺の悪徒（僧兵）をも動員して高麗への出兵を計画した⁸⁾。しかし第二次高麗出兵計画は突然中止となった⁸⁾。詳細は不明ながら、御家人の困窮などの理由により実行されなかったともいわれる⁸⁾。

一方、フビライも日本の反撃を警戒し、高麗の金州等に鎮辺万戸府を設置し日本軍の襲来に備えた⁸⁾。

○第三次日本侵攻計画（1282 年～）

第二次侵攻（弘安の役）で敗北した元は、翌年の 1282（弘安 5）年 1 月に一旦は日本侵攻の司令部・日本行省を廃止したものの、フビライは日本侵攻を諦めきれず再度日本侵攻を計画した⁸⁾。

同年 7 月、フビライの再侵攻の意向を知った高麗国王・忠烈王は、150 艘の軍船を建造して日本侵攻を助けた旨をフビライに上奏する⁸⁾。

同年 9 月、第二次日本侵攻（弘安の役）で大半の軍船を失っていた元は、平灤、高麗、耽羅、揚州、隆興、泉州において新たに大小 3,000 艘の軍船の建造を開始した⁸⁾。しかし、こうした大造船事業は大量の木材を必要としたため、平灤では山は禿山となり、寺や墳墓からも木を伐採しなければならない状況であったという⁸⁾。また、平灤の五台山造寺や南城の新寺の建立も造船に木材を集中させるために中止となった⁸⁾。このような軍船の不足から、民間から商船を徴発し、日本侵攻用の軍船へと転用した⁸⁾。

1283（弘安 6）年 1 月、日本侵攻の司令部・日本行省を再設置⁸⁾する。アタカイ（阿塔海）を日本行省丞相に任命して日本再侵攻の総司令官として、チェリク・テムル（徹里帖木児）を右丞、劉国傑を左丞に任命し、兵を募り造船の指揮を執らせ日本侵攻を急いだ⁸⁾。この出兵計画には、兵員の不足から、重犯罪者の囚人部隊も動員する計画であったという⁸⁾。また、第二次日本侵攻（弘安の役）で軍船の大量喪失とともに多くの海

事技術者も失ったため、海事技術者の養成が急務となっていた⁸⁾。そのため、アタカイ（阿塔海）は都元帥・張林，招討使・張瑄，管軍総管・朱清など軍官に水練を行うよう命じて出征に備えさせた⁸⁾。また，右丞・チェリク・テムル（徹里帖木児）と管軍万戸 35 人が中心となって水練を施した兵士の中には蒙古軍 2,000 人や深馬赤軍 10,000 人などの元朝精鋭部隊も含まれ，そのうち 500 人には水練の他に海上戦闘での訓練を施している⁸⁾。日本侵攻は江南地方から徴発した軍勢を主力に，この年の 8 月に実行することが予定された⁸⁾。

一方，日本側はこうした元側の動向を察知し，元朝領内の造船を担った江南地方に間者を送り込み，情報収集に努めていた⁸⁾。江南地方で日本側の間者が捕らえられたことが元側の史料『元史』において確認できる⁸⁾。

このような急激な日本侵攻準備は，元に大きな負担をもたらすものであった⁸⁾。日本侵攻用の軍船の造船を担った江南地方では盗賊が蜂起し，元は軍隊を派遣するなどして鎮圧に苦心した⁸⁾。また，江南地方の盗賊の続発は，元朝領内の遠近を問わず広がりを見せ，騒然としたという⁸⁾。このような状況の中でフビライに日本侵攻計画を中止，あるいは延期するよう諫言する者も現れた⁸⁾。『元史』崔彥伝には，日本侵攻計画の延期を訴えた御史中丞・崔彥とフビライとの間で以下のようなやりとりがあったとされる⁸⁾。

崔彥「江南地方で相次いで盗賊が起こっています。およそ 200 余所においてです。皆，かつては水手として拘束され，海船を造り，人民の生活は安んずることができなかったため，激情して盗賊として変を為しています。日本の役は暫く止めるべきです。また，江南地方四省の軍需は，民力を量って，土地の産物が無い所の者には労働を強いるべきではありません。およそ労働に対して物価を給して民に与えるのは，必ず実をもってしなければなりません。水手を召募するのは，その労働を欲する土地に従わなければならないのです。そして，民の気力がやや回復して，我が力がほぼ備わるのをうかがい，2，3 年後に東征（日本侵攻）しても未だ遅くはないでしょう」⁸⁾

崔彥の諫言を退けて，フビライは次のように言った⁸⁾。

フビライ「汝の言う所は弓を射るようなものだ。弓を引く姿は見るに堪えるが，矢を發すれば見るに堪えぬ」⁸⁾

淮西宣慰使・アンギル（昂吉児）もまた，民が疲弊していることを上奏して，フビライに日本侵攻を取り止めるよう諫言した⁸⁾。これらの諫言を退けたフビライであったが，考えを改めて同年 5 月には日本侵攻計画を一旦取り止めた⁸⁾。高麗は侵攻計画が中止となったことを受けると，造船，徴兵を停止させた⁸⁾。

○第三次日本侵攻計画（1283 年～）

一旦白紙となった当初の出兵予定の 1283（弘安 6）年 8 月の頃，再び出兵計画が持ち上がった⁸⁾。

同年 8 月、民間から日本侵攻用に徴発していた民間船 500 艘を民が困窮したため返還

し、代わりにモンゴル人の大船主・アバチ（阿八赤）が所有する船を徴発して修理を行い、日本行省丞相・アタカイ（阿塔海）の日本侵攻用の艦船群に組み入れた⁸⁾。

同年 9 月、江南地方の広東で大規模な盗賊の蜂起が起こった⁸⁾。元朝はただちに兵 10,000 でこれを鎮圧⁸⁾した。

同年 10 月、続いて江南地方の福建で宋王朝の復興をスローガンに黄華率いる 100,000 人ともいわれる群衆が蜂起⁸⁾した。反乱軍は自らを頭陀軍と称して宋朝の年号を用いた⁸⁾。元はただちに 22,000 の軍勢を鎮圧に派遣した⁸⁾。この反乱には日本行省左丞・劉国傑が日本侵攻部隊を率いて鎮圧に乗り出している⁸⁾。

1284（弘安 7）2 月、フビライは、このような国内情勢の不安定化のなかで高麗における造船を停止させた⁸⁾。さらに敵対関係にあったベトナム南方のチャンパ王国との情勢が思わしくないため、第三次日本侵攻計画の総司令官・アタカイ（阿塔海）に命じて、日本侵攻部隊のうちから 15,000 の兵と軍船 200 艘をチャンパ王国に派遣した⁸⁾。

このように元の国内情勢やチャンパ王国との敵対関係による不安定化のため、同年 5 月、フビライは日本行省を廃止し、再び日本侵攻計画を中止した⁸⁾。

この間、日本側は明年（1284 年）春に元の大軍が襲来するという情報を得て、九州の各守護に用心するよう厳命していた⁸⁾。

○第九回使節

フビライは第三次日本侵攻計画（1283 年～）を推進する一方で、九回目となる使節団を日本に派遣する⁸⁾。

1283（弘安 6）年 8 月、フビライの命を受けた提挙・王君治と補陀禅寺の長老・如智は日本に向けて出航した⁸⁾。ところが、黒水洋を経たところで台風に遭遇し、結局、使節団は日本に辿り着くことはできなかった⁸⁾。

なお、王君治らが託されたフビライの国書の内容は次の通りであった。

「天命を受けた皇帝（フビライ）が命を發して日本国王に諭す。むかし、彼国（日本）はよく遣使し、参内して天子に拝謁した。これに対して、朕もまた使を遣わしてこれに相報いた。すでに互いに約束を交わしており、汝の心にそれを置き忘れてはいないであろう。この頃、彼国は我が信使を執って返さなかったため、朕は舟師を發して咎めさせた。いにしえは兵を交わして、使者はその間を往来する。彼国は一語も交わさずして、固く我が軍を拒む。よって彼国はすでに敵国となり、さらに遣使するべき理ではないが、ここに補陀禅寺の長老・如智らが陳奏し『もしまた軍を興して討伐すれば、多くの生靈が被害を受ける。彼国の中にも仏教文学の感化があり、大小強弱の理を知っているはずだ。臣らが皇帝の命を齎し宣諭すれば、即ち必ずや多くの生靈を救う。彼国はまさに自省し、懇心して帰附するだろう』という。今、長老・如智と提挙・王君治を遣わし、詔を奉じて彼国に往かせた。善なるものは和好のほかになく、悪なるものは戦争のほかはない。果たしてこれを思慮して帰順すれば、即ち去使とともに来朝するべし。ゆえに彼

者に諭し、朕はその福か禍の変化を天命に任せる。ここに詔を示し、我が意をすべて知り、考慮されよ」⁸⁾

○第三次日本侵攻計画（1284 年～）

フビライは前回の日本侵攻計画を取り止めてから 1 年も経たず、再び日本侵攻準備を開始した⁸⁾。

1284（弘安 7）年 10 月、フビライは日本侵攻用の船と水夫の募集を開始した⁸⁾。

1285（弘安 8）年 4 月、江淮地方に日本侵攻用の兵糧と軍船を運び、そこで海戦訓練を実施する⁸⁾。同年 6 月、フビライは実体は不明なものの、「迎風船」なる軍船の建造を女真族に命じる⁸⁾。同年 10 月、日本侵攻の司令部・日本行省を再設置⁸⁾する。アタカイ（阿塔海）を日本行省左丞相、劉国傑・陳巖を左丞、洪茶丘を右丞に任命し、日本侵攻部隊の指揮を執らせた⁸⁾。さらに水夫の募集方法も航海に従事する者を通して、水夫を千人集めたものには千戸の軍職、百人集めたものには百戸の軍職を与える事にした⁸⁾。また、囚人を赦免する代わりにその顔に入墨をあてて水夫とし、南宋の時代に私塩を販売して航海技術のある者も水夫とするなどした⁸⁾。

同年 11 月、第三次日本侵攻の作戦計画が発表される⁸⁾。今回は、第二次日本侵攻（弘安の役）の反省から、来年の三月から八月までに、朝鮮半島の合浦に全軍を集結させてから日本侵攻を行うという計画であった⁸⁾。兵糧は江淮地方より米百万石を徴発し、高麗と東京（遼陽）に各々、十万石貯蔵させた⁸⁾。この作戦に高麗が課された軍役は兵 10,000、軍船 650 艘であった⁸⁾。

同年 12 月、軍籍条例を施行⁸⁾する。日本侵攻の兵士として全国から壮士および有力者を選抜し日本侵攻部隊に充てた⁸⁾。さらに五衛軍を各自、家に帰らせて装備を整えさせ、翌年正月一日に元の首都・大都に集結するよう命じた⁸⁾。また、江淮行省では軍船 1,000 艘に水上戦闘の訓練を施した⁸⁾。さらに最新鋭の投石器である回回砲の砲手として 50 人が軍に加えられた⁸⁾。

1286（弘安 9）年 1 月、ところが計画は一変し、突如日本侵攻計画は中止となった⁸⁾。その理由は、日本侵攻計画が元の軍民に重い負担を強いるものであり困窮が極度に達していたこと、さらに外征であるベトナムの陳朝大越国とチャンパ王国との戦況が思わしくなかったためである⁸⁾。

フビライが第三次日本侵攻計画を中止したのは、以下のようなフビライと礼部尚書劉宣とのやりとりがあったためである⁸⁾。

劉宣は、かつて隋が高句麗に侵攻してたびたび敗北した例を引用し「たとえ風に遇わず、彼の国の岸に至っても、倭国は地広く、徒衆が多い。彼の兵は四集し、我が軍に後援はない。万が一戦闘が不利となり、救兵を発しようと思っても、ただちに海を飛んで渡ることはできない」と述べ、かつての隋の高句麗侵攻以上に日本侵攻が困難であるとして、フビライに日本侵攻をとりやめるよう諫言した⁸⁾。

これに対して、フビライは「日本は孤遠の島夷なり．重ねて民力を困するを以て，日本を征するをやむ」と述べて，日本侵攻計画を取りやめた⁸⁾．この知らせが江浙の軍民に伝わると，軍民は歓声を上げ，その歓声は雷のようであったという⁸⁾．

日本侵攻を諦めたフビライは「日本は今までに我が国をかつて侵略したことはない．今は交趾（ベトナム北部の国。陳朝大越国）が我が国の辺境を犯している．日本のことは置いておき，専ら交趾を事とするがよい」と，日本から陳朝大越国に目を転じた⁸⁾．

南宋遺臣の鄭思肖はチャンパ王国が元朝に背いた理由について「弘安の役で元軍が敗れた後，日本がチャンパ王国へ使者を送り，元朝と戦わずに属国でいることを責めた．チャンパ王国は元朝に背くことを決めた」としている⁸⁾．

○第十回使節

また第三次日本侵攻計画（1284 年～）の推進と同時期に，フビライは前回の使節団派遣から約 1 年を経て再び日本に服属を迫る使節団を派遣していた⁸⁾．

1284（弘安 7）年 10 月，フビライは正使・王積翁と補陀禅寺の長老・如智ら使節団を日本に派遣した⁸⁾．補陀禅寺の長老・如智が使節団に選ばれたのは，日本が仏教を厚く信仰しており，僧侶ならば日本を服属させ得ると考えられたためであった⁸⁾．

ところが，使節団が対馬に至った際に，日本に向かうことを恐れた水夫らが船中において王積翁を殺害してしまったため，今回の使節団も日本側と接触する前に失敗した⁸⁾．

○元の内乱と外征

ーナヤン・カダアンの乱

1287（弘安 10）年，遼陽行省を中心にフビライ政権の支柱の一つである東方三王家の首班・ナヤン（乃顔）が反乱を起こした⁸⁾．

このナヤンの反乱に関しては，フビライの日本侵攻計画によって，東方三王家の領民にまで造船などの出兵準備で動員がなされ大きな負担となっていたこと，さらにこの日本出兵準備によりフビライの中央権力が東方三王家の支配領域に深く介入したことへの反発があったとも考えられる⁸⁾．

フビライの親征によりナヤンの反乱は一旦鎮圧され，東方三王家の当主たちは軒並み異動されたが，今度はこの戦後処理に不満を持ったカチウン家の王族・カダアン（哈丹）が蜂起⁸⁾した．1290 年代にはカダアン軍が高麗に侵入し，いくつかの城塞を占拠し，一部は高麗の首都・開城より南の忠州にまで侵入した⁸⁾．カダアンら反乱軍も元からの援軍もあって鎮圧されたが，ナヤンの反乱の時には，フビライに敵対する中央アジアのカイドゥ（海都）もカラコルムを目指して進撃しており，1287 年から 1291 年にかけて，元の東部全域から北部，また高麗内外では騒乱が続いた⁸⁾．

一陳朝大越国侵攻

また、モンゴル帝国第4代皇帝・モンケ（蒙哥）の時代に服属していたベトナム北部の陳朝大越国でも、元によるベトナム南部のチャンパ王国侵攻に対しての過剰な物資徴発に抗議して太上皇・陳聖宗が中心となって反乱を起こした⁸⁾。これに対してフビライは、軍船500艘、92,000の兵（元軍7万、新附軍1千、雲南軍6千、黎兵（海南島の黎族兵）1万5千）を派遣した⁸⁾。両軍激しい消耗戦となり、最後に元軍は雲南へ撤退中に襲撃を受けて壊滅的な損害を受けている（白藤江の戦い）⁸⁾。

これらの内乱、南方での軍事的な失敗などもあって日本侵攻計画は当分の間は浮上しなかった⁸⁾。フビライはナヤン（乃顔）の反乱を境に東南アジア・インド洋方面への軍事的政策を、経済・通商を重視した和平路線へ転換したとも言われており、陳朝大越国やチャンパ王国、また1290年代に侵攻があったジャワ島のマジャパヒト王国でも交戦後ほどなくして服属関係の修復や朝貢関係の再締結の使節が交わされている⁸⁾。これらの戦役後も中国沿岸部から東南アジア方面への商船の往来は活発化し、フビライ治世末期には南方への元からの軍事的脅威はほぼ解消した⁸⁾。

○第十一回使節

1292（正応5）年7月、フビライの重臣であった江淮行中書省参知政事・燕公楠が、交易により来航した日本の商船に日本宛の書状を託し、その日本船によって日本側に書状がもたらされた⁸⁾。なお、書状の内容は史料として残っておらず、またフビライの命によるものかは詳らかではない⁸⁾。

○第十二回使節

1292（正応5）年、フビライから漂着した日本人の護送を機に日本側に服属を迫る国書を渡すよう命じられた高麗国王・忠烈王は、高麗人の太僕尹・金有成を正使に書状官・郭鱗らを日本へ派遣した⁸⁾。

日本に到着した金有成らは日本側によって鎌倉へ連行され、その後の様子は詳らかではない⁸⁾。なお、その後、高麗を訪れた日本僧の情報によれば「（金）有成、丁未（1307年）七月五日、病卒」とあり、金有成が使節として日本に到着して以来、15年近く日本で生存していたことがわかる⁸⁾。

○第三次日本侵攻計画（フビライ晩年）

フビライは5年にわたる内乱が鎮まると、再び日本侵攻を考え始めた⁸⁾。

1292（正応5）年、中書省右丞の丁なる者がフビライに対して「江南の戦船は大きな船はとても大きいものの、（台風により）接触すればすぐに壊れた。これは（第二次日本侵攻の）利を失する所以である。高麗をして船を造らせて、再び日本に遠征し、日本を取ることがよろしい」と進言した⁸⁾。これを受けてフビライは近臣らに日本侵攻の是

非を問うたという⁸⁾。それに対して、洪茶丘の弟・洪君祥は「軍事は重大なことです。先に遣使し、これ（日本侵攻の是非）を高麗に問い、然る後に之を行うべきです」と進言したため、フビライはそれを了承した⁸⁾。

高麗に遣わされた洪君祥は、7年間、元に勾留されていた漂着した日本人の護送を高麗に命じるとともに（第十二回使節）、日本侵攻の是非を高麗国王・忠烈王に問うた⁸⁾。忠烈王は「臣（忠烈王）は、既に不庭の俗（日本）に隣接しています。願わくば、当に自ら（日本を）致討し、僅かながら功労を立てます」と答えて、日本侵攻に積極的姿勢をフビライに示した⁸⁾。それを受けて、フビライは再び、戦艦の造船を高麗に命じる⁸⁾。ところが、この頃には相次ぐ造船により、すでに高麗では木材がほとんど尽きていたため、造船できるような状況では無かったという⁸⁾。

1294（永仁2）年1月、大元朝初代皇帝・フビライが没する。フビライが死去したことに伴い、高麗での造船は停止し、幾度も持ち上がっては消えた日本侵攻計画はようやく中止となった⁸⁾。

1298（永仁6）年、フビライの後を継いだ大元朝第2代皇帝・テムル（鐵穆耳）に対して、江浙省平章政事・イエスタル（也速答兒）が日本を征すことを願ったが、テムル（鐵穆耳）は「今は其の時に非ず。朕、おもむろに之を思わん」と述べてイエスタル（也速答兒）の進言を退けた。以後、元で日本侵攻計画が持ち上がることは無かった⁸⁾。

○第十三回使節

1299（正安元）年、テムル（鐵穆耳）は、補陀禪寺の僧・一山一寧を正使として国書を託して日本へ派遣する⁸⁾。この一団が元が日本へ派遣した最後の使節団となった⁸⁾。

一山一寧らが博多に至ると鎌倉幕府9代執権・北条貞時の命により、一山一寧らは鎌倉に連行され伊豆の修禅寺に留め置かれた⁸⁾。後に一山一寧は徳の高い高僧であったことなどから日本側に厚遇をもって迎えられ、後に建長寺の住持や後宇多上皇の招きにより京都の南禅寺3世を務めるなどして1317（文保元）年に日本で死去した⁸⁾。

○影響

一元・高麗側の状況と影響

浙江大学教授・王勇によれば、弘安の役で大敗を喫した元は、その海軍力のほとんどを失い、海防の弛緩を招いた⁸⁾。他方、日本では幕府の弱体化と御家人の窮乏が急速に進む中で浪人武士が多く現れ、それらの中から九州や瀬戸内海沿岸を根拠地に漁民や商人も加えて武装商船商団が生まれ、敗戦で海防力が弱体化していた元や朝鮮半島の沿岸部へ武力を背景に進出していったとする⁸⁾。

1292（正応5）年、日本の商船が貿易を求めて四明（現在の寧波）にやってきたが、検査により船内から武具が見つかり、日本人が武具を隠し持っていたことが発覚した⁸⁾。日本人による略奪の意図を恐れた元朝政府は都元帥府を設置して、総司令官・カラダイ

(哈刺鯨)に海防を固めさせた⁸⁾。

1304(嘉元2)年、江南に度重なって襲来するようになった日本武装商船に警戒し、千戸所を定海に設けて海防を強化させ、市舶司を廃して元の商人が海外に出ることを禁ずる禁海令を發布した⁸⁾。王勇は、このように、元が倭寇と日本人の復讐を恐れたため、閉関主義へと態度を変化させ日本との通交を回避するようになったとする⁸⁾。

また、高麗においても、二度に及ぶ日本侵攻(文永・弘安の役)及び第三次日本侵攻計画による造船で国内の木材が殆ど尽き、海軍力が弱体化したため、その後相次ぐ倭寇の襲来に苦戦を強いられる重要な原因となった⁸⁾。

一 日本脅威論の形成

浙江大学教授・王勇は弘安の役での敗戦とその後の日本武装商船の活動によって中国における対日本観は大きく変化し、凶暴で勇猛な日本人像および日本脅威論が形成されていったと指摘している⁸⁾。

例えば、南宋遺臣の鄭思肖は「倭人は狼、死を懼れない。たとえ十人が百人に遇っても、立ち向かって戦う。勝たなければみな死ぬまで戦う。戦死しなければ、帰ってもまた倭王の手によって殺される。倭の婦人もはなはだ気性が烈しく、犯すべからず。(中略)倭刀はきわめて鋭い。地形は高険にして入りがたく、戦守の計を為すべし」と述べ、また元朝の文人・呉萊は「今の倭奴は昔(白村江の戦い時)の倭奴とは同じではない。昔は至って弱いと雖も、なお敢えて中国の兵を拒まんとする。いわんや今は陰を恃んで、その強さは、まさに昔の十倍に当たる。さきに慶元より航海して来たり、艨艟数千、戈矛劍戟、畢く具えている。(中略)その重貨を出し、公然と貿易する。その欲望を満たされなければ、城郭を燔して居民を略奪する。海道 of 兵は、猝かに対応できない。(中略)士気を喪い国体を弱めるのは、これより大きなことはない。しかし、その地を取っても国に益することはなく、またその人を掠しても兵を強めることはない」と述べ、日本征服は無益としている⁸⁾。

また、明の時代の鄭舜功が著した日本研究書である『日本一鑑』では、元寇について「兵を喪い、以って恥を為すに足る」と評すなど、後の時代にも元寇の記憶は批判的に受け止められていたことが窺える⁸⁾。

元寇の敗戦を通してのこういった日本軍将兵の勇猛果敢さや渡海侵攻の困難性の記憶は、後の王朝による日本征討論を抑える抑止力ともなった⁸⁾。元の後に興った明による日本征討論が、初代皇帝・朱元璋(洪武帝)、第3代皇帝・永楽帝、第12代皇帝・嘉靖帝の時の計3回に渡って議論された⁸⁾。

そのうち、朱元璋は軍事恫喝を含んで、明への朝貢と倭寇の鎮圧を日本の懷良親王に要求した⁸⁾。ところが懷良親王は、もし明軍が日本に侵攻すれば対抗する旨の返書を送って朱元璋の要求を受け付けなかった⁸⁾。この返書に激怒した朱元璋であったが、フビライの日本侵攻の敗北を鑑みて日本征討を思い止まったという⁸⁾。

一日本側の状況と影響

文永の役後、幕府は石築地の建設や輪番制の異国警固番役の設置など博多湾の防備を強化したが、この戦いで日本側が物質的に得たものは無く、恩賞は御家人たちを不満にしたとされる⁸⁾。竹崎季長は鎌倉まで赴いて直接幕府へ訴え出て、恩賞を得ている⁸⁾。

弘安の役後、幕府は元軍の再度の襲来に備えて御家人の統制を進めたが、この戦争に対しても十分な恩賞給与がなされなかった⁸⁾。また、九州北部周辺へ動員された異国警固番役も鎌倉時代末期まで継続されたため、戦費で窮迫した御家人達は借金に苦しむようになった⁸⁾。幕府は徳政令を發布して御家人の困窮に対応しようとしたが、御家人の不満は解消されなかった⁸⁾。また、鎌倉幕府が女性の所領知行を制限・禁止する方針を明確にしていくことになったのは、元寇に対する異国警護体制の維持と関係しているとする見方もある⁸⁾。これは中世後期以降の父系嫡系単独相続や近世近代の家父長制における女性の無権利状態が成立していく背景として無視し得ないと考えられている⁸⁾。

貨幣経済の浸透や百姓階層の分化とそれに伴う村落社会の形成といった13世紀半ばから進行していた日本社会の変動は、元寇の影響によってますます加速の度合いを強めた⁸⁾。借金が棒引きされた御家人も、後に商人が徳政令を警戒し御家人との取引・融資等を極端に渋るようになったため、結果的に資金繰りに行き詰まり没落の色合いを見せるようになった。そして、御家人階層の没落傾向に対して新興階層である悪党の活動が活発化していき、御家人らの中にも鎌倉幕府に不信感を抱くものが次々と登場するようになった。これらの動きはやがて大きな流れとなり、最終的には鎌倉幕府滅亡の遠因の一つとなったのである⁸⁾。

○軍事

かつては元軍の集団戦術、いわゆる組織戦闘に対して、当時の日本側は一騎討ちを基本とした戦い方をしていたと言われていた⁸⁾。また元軍は『八幡愚童訓』によれば毒矢・てつはう（鉄火砲）など、日本側が装備しない武器を活用したことにより、各地で日本軍は圧倒されたと言われていた⁸⁾。しかし、現在の研究では双方共に被害を出していることが判明しており、実際は日本側も集団戦術を取っていたと考えられている⁸⁾。

一集団戦法・一騎討ち

『八幡愚童訓』に記されているように、多くの書籍で元軍の集団戦法の前に一騎討ち戦法を用いる日本軍は敗退したと書かれている⁸⁾。しかし、『八幡愚童訓』は後世に記された宗教書であり、八幡神の化身の登場によって元軍を破ったことを強調しており、そのために日本軍が戦闘で一騎討ちなど稚劣な戦闘法で敗北したかのような記述になっているとの見解がある⁸⁾。

一騎討ちに関しては、元寇に参戦した肥後国御家人・竹崎季長が描かせた『蒙古襲来絵詞』絵五に描かれているように、陸戦においては日本の武士たちが騎兵を密集した一

団となって集団で戦闘が行われている様子が描かれており、一騎討ちを挑む武士は全く描かれていない⁸⁾。また、文永の役の元軍の博多湾上陸に際しては、日本軍の総大将・少貳景資は、赤坂から博多に進出してくる元軍を待ち受けるよう全軍に指示し、元軍が進出してきた後、元軍に集団で一斉に騎射攻撃を加える作戦を立てていた⁸⁾。このように、特別な場合を除いて一騎討ちは行われておらず、一騎討ちは武士の通常の戦闘方法ではない⁸⁾。武士団ごとにまとまって戦っていたと考えられている⁸⁾。

また、元朝の官吏・王恽は、元寇の際の武士の様子をその記事『汎海小録』において「兵杖には弓刀甲あり、しかして戈矛無し。騎兵は結束す。殊に精甲は往往黄金を以て之を為り、珠琲をめぐらした者甚々多し、刀は長くて極めて犀なるものを製り、洞物に銃し、過。但だ、弓は木を以て之を為り、矢は長しと雖えども、遠くあたわず。人は則ち勇敢にして、死をみることを畏れず」と記しており、武士が騎兵を結束させて集団で戦っていたことを指摘している⁸⁾。

『元史』においても、日本の特性について「たとえ風に遇わず、彼の国の岸に至っても、倭国は地広く、徒衆が多い。彼の兵は四集し、我が軍に後援はない。万が一戦闘が不利となり、救兵を発しようと思っても、ただちに海を飛んで渡ることはできない」とあり、一騎討ち戦法ではなく、日本が大軍を擁しており、上陸した場合四方から元軍に攻撃を仕掛けてくることを元朝政府が警戒している様子が記されている⁸⁾。

てつほう

正式には震天雷（中国語版）や鉄火砲と呼ばれる手榴弾にあたる炸裂弾である。容器には鉄製と陶器製があり、容器の中に爆発力の強い火薬を詰めて使う⁸⁾。使用法は導火線に火を付けて使用する⁸⁾。形状は球型で直径 16-20 cm、総重量は 4-10 kg（約 60%が容器の重量、残りが火薬）ある⁸⁾。

2001（平成 13）年、長崎県の鷹島海底から「てつほう」の実物が 2 つほど発見され、引き揚げられた⁸⁾。一つは半球状、もう一つは直径 4cm の孔が空いた直径 14cm の素焼物の容器で重さは約 4kg あった⁸⁾。なお、この「てつほう」には鉄錆の痕跡もあったことから、鉄片を容器の中に入れ、爆発時に鉄片が周囲に撒き散り殺傷力を増したとも考えられる⁸⁾。歴史学者・帆船学者の山形欣哉によると、「てつほう」の使用法や戦場でどれだけ効果があったかは不明な点が多いとしている⁸⁾。理由としては、「てつほう」は約 4kg もあり、手投げする場合、腕力があるものでも 2, 30m しか飛ばすことができず、長弓を主力武器とする武士団との戦闘では近づくまでに不利となる点を挙げている⁸⁾。

「てつほう」をより遠くに飛ばす手段として、襄陽・樊城の戦いの攻城で用いられた回回砲（トレビュシェット）や投石器がある⁸⁾。しかし、山形欣哉は投石器を使用する場合、多くの人数を必要とし連続発射ができないなどの問題点もあったとしている⁸⁾。例えば、後の明王朝の時代ではあるが、「砲」と呼ばれる投石器は、一番軽い 1.2kg の弾を 80m 飛ばすのに 41 人（1 人は指揮官）も要した⁸⁾。したがって、組立式にし日本に

上陸して組み立てたとしても、連続発射はできなかったものとみられ、投石機を使用したとしても「てつはう」が有効に機能したとは考えられず、投石器を目指して武士団が突進した場合、対抗手段がないとしている⁸⁾。

一和弓と蒙古弓

和弓の第一の特徴は、弓が約 2.2m もあり世界最大の長弓であったことにある⁸⁾。長弓であることは矢を引く長さ（矢尺）を伸ばし弓矢の威力が増大することを意味し、現存している鎌倉時代の矢から 80-90cm 前後の矢尺を引いたと推測される⁸⁾。

第二の特徴は弓を握る位置にある⁸⁾。日本以外の弓では握りの位置が弓の中央であるのに対して、和弓は上から 2/3 の中央より下の方を握るようになっており、短下長上という構造になっていた⁸⁾。これは弥生時代には確認できる日本独特の弓の特徴であった⁸⁾。中央より下方を握ることで以下の利点があった⁸⁾。同一の弓でも弓力（弓が矢を放つ力）が増大すること⁸⁾。短下長上という構造上、矢の角度が仰角となり、結果、射程をより長くできた⁸⁾。さらに弓幹の振動がこの握りの近辺では少なく、操作しやすいことなどが挙げられる⁸⁾。

第三の特徴としては「弓返り」といわれるものがある⁸⁾。これは、矢が発射された直後に、弓を握る左手の中で、弓が反時計回りにほぼ 1 回転することをいう⁸⁾。これも日本独特のものであり、鎌倉期～南北朝期の射術の進歩、弓の改良によって新しく起こった現象である⁸⁾。この「弓返り」により、弓の復元力（弓が矢を発射する前の本来の形状に戻ろうとする力）は速さを増し、矢はさらに加速され威力を増した⁸⁾。ただし、実戦では矢の連射性を重視したため、復元に手間が掛かる「弓返り」はさせなかった⁸⁾。

一方、蒙古弓は、長さが 1.5m～0.6m で短弓である⁸⁾。弓は牛の角と腱と木を組み合わせて作られている⁸⁾。弓全体の芯となっているのは木であり、弓の弦側には圧縮に強い牛の角を加工したものを張り付け、その反対側には伸張に対して強度のある腱を張り付けてある⁸⁾。そして、弓全体を接着力強化のため樹皮で巻き、また湿気予防のために塗料が塗られた⁸⁾。また、弓は弦を外すと反対側に大きく反る形に作られており、矢の速度および飛距離が増すよう工夫されている⁸⁾。矢の先には鏃が付けられ、その形状には各種ある。弓の弦は鹿（アンテロープ）の首の皮で作られ、丈夫にできている⁸⁾。

なお、和弓と蒙古弓についてそれぞれ言及されている史料もあり、日本側の史料『八幡愚童訓』によると「蒙古か矢、みしかしといへとも、矢のねに毒をぬりたれば、ちともあたる処、とくに氣にまく…」とあり、一方、元側の史料の『汎海小録』によれば和弓について「弓（和弓）は木によって作られ、矢は長いが遠くには届かない」とある⁸⁾。

一騎馬兵

文永の役で元側が馬を戦場で使用したことは『蒙古襲来絵詞』や『八幡愚童訓』からも窺え、『高麗史』にも高麗南部に日本侵攻に用いる軍馬のための糧秣を配給するアウルク（奥魯）が設置されていることから、軍馬が文永の役で使用されたことは間違い

ないが、正確な軍馬の数は不明⁸⁾。

『蒙古襲来絵詞』絵八の鹿原に陣を布く元軍の騎乗率は約 17%で『八幡愚童訓』でも元軍の左副都元帥劉復亨と思われる人物の共廻りの記述に「十四五騎うちつれ、徒人七八十人あひ具して…」とあり、騎乗率を約 15～17%ほどとしている⁸⁾。なお、室町時代に日朝が著した日蓮の『立正安国論』の注釈書『安国論私抄』（文明 11 年、1478 年擱筆）第一巻「蒙古詞事」（の「文永十一年蒙古責日本之地事」）には「或記云」として、文永の役での日本軍の捕虜となった元兵の証言によれば、元軍の構成は軍船の総数が 240 艘で、1 艘につき兵 300 人、水夫 70 人、軍馬 5 匹であったとしている⁸⁾。

また、対する日本軍は、陸戦においては騎兵を密集させた集団で戦っていた⁸⁾。そのことは、フビライに仕えた王惲が日本軍の様子を「騎兵は結束す」と記していることや『蒙古襲来絵詞』絵五に騎兵を密集させて突撃する日本軍の様子が描かれていることから窺える⁸⁾。

なお、両軍が使用した軍馬は、日本在来馬とモンゴルのモウコウマともに体高としては 120～140cm ほどであり、体格に差は無かった⁸⁾。

一元軍船

・文永の役の元軍船

元軍が撤退中に暴風雨を受けた文永の役においては、高麗は軍船を建造するのに「蛮様」（南宋様式）の船（竜骨を持ち、隔壁構造の船）にしたのでは建設費がかさみ期限には間に合わないで、高麗様式の船を造船したとされており、軍船の準備が整っているで日本を征服しようとの忠烈王によるフビライへの進言は実態とまったく異なることであったことが記されている⁸⁾。

・弘安の役の元軍船

弘安の役において台風により元軍船が沈没した理由として、船の建造が、服属させた高麗人や南宋人に造らせたことにあるという粗製乱造説がある⁸⁾。彼らはモンゴル人支配に不満を募らせていたという前提の下、造船が急務であったこともあり、突貫工事的に手抜きによって建造されていたのではないかという説である⁸⁾。しかし、手抜きを裏付ける史料は無く、むしろ元朝の官吏・王惲の記事『汎海小録』や『高麗史』には高麗船が頑丈だったことが指摘されており、実際に高麗船での生還者は多かった⁸⁾。

また、長崎県松浦市の海底遺跡「鷹島神崎遺跡」で発見された元軍沈没船の琉球大学と松浦市教委による調査の結果、元軍船の船底は二重構造となっており、頑丈に造られていたことが判明した。調査を主導した琉球大学教授・池田栄史によると、船底に内側から木材を張って二重に補強することで水が入り込まないように工夫していたとみられ、当時の貿易船では見られない頑丈な構造であった⁸⁾。これらの新発見の結果、池田栄史は「（元軍船は）丁寧な組み方をしており、粗製乱造ではなかったのでは」と粗製乱造説に否定的見解を示した⁸⁾。なお、発見された元軍船の全長は、25～27m ほどと推

定されている⁸⁾。また、船体とは別に発見されていた最も大きい碇の一部から推定できる最大級の元軍船は 40m に達するという見解もある⁸⁾。

1. 9. 3 北条氏滅亡と両統迭立

○北条氏滅亡

泰時の孫時頼（第 5 代執権：1246（寛元 4）年 3 月 23 日 - 1256（康元元）年 11 月 2 日）のころから、北条氏の家督である得宗と、その家臣である御内人による得宗専制政治が始まった¹⁰⁾。得宗で執権である時頼は、1246 年（寛元 4）陰謀を理由に前將軍九条頼経を京都に追い、翌 1247（宝治 1）年には頼経に心を寄せていた有力御家人三浦氏を滅ぼした¹⁰⁾。さらに 1252 年（建長 4）には頼経の子の將軍頼嗣をも京都に追い、後嵯峨上皇の皇子宗尊親王を鎌倉に迎えた¹⁰⁾。こうして摂家將軍に代わり宮將軍が登場したが、將軍はますます名目化した¹⁰⁾。

表 1.9-3 年表

年	事項
1221	承久の乱 → 幕府の優越確定
1231	モンゴル帝国（後の元）高麗侵攻を開始
1232	御成敗式目
1246	陰謀を理由に前將軍九条頼経を京都に追い（宮騒動）、当時京都で権勢を振るっていた頼経の父の前摂政道家を失脚させただけでなく、これを契機に朝廷の政務への干渉を強め、治天の君（政治の実権を握る上皇、ときには天皇）や天皇を選定する権限までも掌握
1247	執権北条氏が（九条頼経に心を寄せていた）三浦氏を滅ぼす（法治合戦）
1252	頼経の子の將軍頼嗣をも京都に追い、後嵯峨上皇の皇子宗尊親王を鎌倉に迎える（摂家將軍に代わり宮將軍が登場→將軍・鎌倉殿のいっそうの名目化、北条得宗家専制が進行）
1258	高麗、崔氏滅亡を機に元の属国となる
1264	モンゴル帝国第 5 代皇帝フビライ・ハン 大都（北京）に遷都
1268	高麗使潘阜一行が蒙古の国書をもたらした
1271	9 月、元使である女真人の趙良弼らがモンゴル帝国への服属を命じる国書を携えて 5 度目の使節として 100 人余りを引き連れて到来。 11 月、フビライ・ハン 国号を大元に改める。
1274	3 月 6 日、第 91 代後宇多天皇（大覚寺統：第 90 代龜山天皇系）即位 元寇 文永の役 10 月 3 日蒙古・高麗の兵 28,000 からなる征日本軍が合浦出発。10 月 5 日対馬上陸。10 月 14 日壱岐が襲われる。10 月 20 日元軍が博多湾西部今津一百道原に上陸。倉原、鳥飼、別府、赤坂（いずれも福岡市内）と激戦が展開。同夜、蒙古軍は撤退を開始したが、さいわいにもいわゆる「神風」なる大暴風雨が吹き荒れ、蒙古の兵船は壊滅的打撃を受けた。未帰還者 1 万 3500 余人といわれている。 役後、幕府は同役の論功行賞を行い、蒙古の再襲に備えて防備体制（異国警固番役）を強化した。博多湾沿岸の防備は、九州内各国がそれぞれ分担して順次番役を勤めるという制規が定められ、金沢実政が防衛の指揮をとるため幕府より差し遣わされた。また長門の警備も強化され、これには長門、周防、安芸（のち備後も加わる）の勢をもって防衛すべき旨が定められた。
1275	4 月、蒙古使者杜世忠・何文著が長門、室津に到着。使者一行は鎌倉へ送られ竜口にて斬首された。龜山上皇の血統（大覚寺統）に天皇が続くことを不満に思った後深草上皇（持明院統）が太上天皇の尊号辞退と出家の意向を示すと、幕府の斡旋により、後深草上皇の皇子で 2 歳年上の熙仁親王（第 92 代伏見天皇）を皇太子とする。→両統迭立の始まり
1276	3 月、博多湾沿岸の香椎から今津に至る 20 キロメートルの地帯に石築地（元寇防塁）を築くことなども始められた。この課役は、御家人だけでなく、所領の広さに応じて一般荘園公領にも賦課された。
1279	2 月、元、崖山の戦いで南宋を滅ぼして中国を統一。 6 月にも、再度蒙古よりの使節一行が博多に到着したが、今回は鎌倉に上らずともなく博多において斬らせるなど、幕府は厳しい態度を示した。

1281	元寇 弘安の役 5月3日蒙・漢・麗合同軍4万の東路軍が合浦を出発。対馬・壱岐を経て、一部は長門を侵攻。主力は6月6日、志賀島（福岡市）に来襲し、同海上および陸上の一部で交戦。東路軍が九州本土への上陸拠点とした志賀島も、日本軍の猛攻にあい上陸侵攻を阻まれ、壱岐から肥前の鷹島へと退いた。 6月18日、旧南宋軍10万の江南軍が、慶元（寧波）を出発。平戸島付近で東路軍と合流し、一挙に博多湾に押し入るべく、7月27日鷹島に移動した。これを探知した日本軍は、大挙して鷹島の敵船に猛攻を開始した。ところが7月30日夜から暴風が吹き荒れ、翌閏7月1日、蒙古軍はほぼ壊滅した。主将范文虎は士卒10余万を捨てて帰還し、残された士卒らは日本軍によりことごとく殺害、捕虜とされたという。元軍の帰らざる者は約10万、高麗軍の帰らざる者7000余人と高麗の記録は伝えている。
1284	4月第8代執権北条時宗死去。7月第9代執権に北条貞時がつく。
1285	11月弘安合戦（霜月騒動）。御家人の期待をになった安達泰盛をはじめ、多数の御家人が滅ぼされ、ここに御家人に対する得宗の専制が確立
1286	後宇多天皇の第一皇子の邦治（第94代後二条天皇）が親王宣下を受ける。
1287	11月27日後宇多天皇、幕府からの要請により21歳で皇太子・熙仁親王（第92代伏見天皇・持明院統）に譲位。
1293	鎮西探題設置（北条一門が任じられる）。
1294	フビライ死去
1297	永仁の徳政令
1298	父・伏見天皇からの譲位により、第93代後伏見天皇（持明院統）が11歳で即位。伏見上皇が院政。
1301	2代続けて持明院統が天皇となったため、勢力を巻き返した大覚寺統や幕府の圧力を受け、1月、大覚寺統の後宇多上皇の第一皇子・第94代後二条天皇に譲位。後宇多上皇の院政。この際、新たに上皇となった後伏見はまだ14歳で皇子がなく、次の皇太子には異母弟の富仁親王（後の第95代・花園天皇）がなった。
1308	8月、第94代後二条天皇、病を得て、同25日在位7年にして二条高倉皇居で崩御。翌26日に第95代花園天皇（持明院統）が12歳で踐祚。 その時点で大覚寺統の嫡流を継ぐべき皇子の邦良親王（後の光厳天皇）がわずか9歳だったことから、大覚寺統と持明院統とが交互に皇位継承していくという幕府裁定の両統迭立原則が崩壊することになった。その調整策の結果、後二条天皇の異母弟である 後の第96代後醍醐天皇（持明院統）が皇太子に。
1317	幕府は皇位の問題は両統の協議によるべきことを申出た（文保の和談）
1318	2月26日、花園天皇の譲位を受けて第96代後醍醐天皇（持明院統）が31歳で踐祚。
1321	後宇多法皇は院政を停止して、後醍醐天皇の親政が開始される。
1333	新田義貞の鎌倉攻めで北条得宗家滅ぼされる

頼朝追放と同時に、幕府は、当時京都で権勢を振るっていた前摂政九条道家（頼朝の父）を失脚させ、さらにこれを契機に朝廷の政治への干渉を強め、ついには治天の君（政治の実権を握る上皇、ときには天皇）や天皇を選定する権限までも掌握した¹⁰⁾。1274（文永11）年、1281（弘安4）年の再度の蒙古襲来（元寇）にあたり、幕府は防衛を全面的に指導し、朝廷が保持してきた外交権を奪って独断的に強硬な外交政策を行い、また前例を破って本所領から兵糧米を徴発し、非御家人までも動員するに至った¹⁰⁾。

時頼・時宗の時代の得宗専制は、主として朝廷・貴族・社寺に向けられたが、他方では御家人の支持を得るため、1249（建長1）年には引付を設けて裁判の公正、迅速を図るなど、御家人保護の政策がとられた¹⁰⁾。しかしその反面、評定衆や引付衆には北条氏一門から選任される者が増え、また得宗が私邸に一部の要人や御内人を集めて行う「寄合」が、しだいに評定衆の評議にかわる実質的な政治審議機関となり、公的な執権よりも、私的な得宗のほうが重要となっていった¹⁰⁾。

地方でも蒙古襲来を契機に1293（永仁1）年鎮西探題が置かれ、北条一門がこれに任じられたのをはじめ、畿内近国や九州を中心として、北条一門による守護職占取が進められた¹⁰⁾。このような得宗専制の強化に伴い、御家人の不満は強まったが、1285（弘安

8) 年には御家人の期待を担った安達泰盛が内管領平頼綱と対立し、滅ぼされる事件（霜月騒動）が起こり、執権貞時の時代には、御家人に対する得宗の専制が確立した¹⁰⁾。

貨幣経済の発達によって御家人が困窮し、所領を喪失する傾向は、泰時のころから問題になっていたが、蒙古襲来による戦費の負担は、御家人の窮乏に拍車をかけた¹⁰⁾。1297（永仁 5）年幕府は徳政令を出して御家人の所領の売買・質入れを禁じ、すでに売却・質入れしていた所領を無償で取り戻させた¹⁰⁾。この法令は、困窮した御家人の救済を図る反面、御家人の所領処分権を制限しようとするものであり、得宗専制強化の一環であった¹⁰⁾。しかしこのような政策も御家人を救済できず、得宗専制に対する御家人の反発に加えて、惣領制の解体、守護の強大化、悪党の横行などによって、幕府の支配は動揺した¹⁰⁾。

惣領制とは、平安、鎌倉時代、主として武家社会において、惣領（嫡子）が庶子を統制支配した武士団の結合形態をいう¹¹⁾。武家社会では、分割相続が一般的で、惣領、庶子とも家子郎党などのかかえて所領の経営を行っていた¹¹⁾。そこで惣領の統制下から独立してゆく庶子もあったが、概して惣領家は社会的経済的に一族に対し優越していた¹¹⁾。平安時代末期以降兵乱が継起するに至り、惣領を支柱として軍事的経済的に一族結合が強化され、鎌倉時代にいたると、幕府はこのような武士団結合を御家人制度に取込み、惣領を通じてその一族庶子を支配する体制を法制化した¹¹⁾。ここに惣領は一族を率いて軍事に参加し、平時にも幕府役は惣領を通じてつとめる仕組みとなり、他方幕府の安堵も惣領に対して行われることとなった¹¹⁾。鎌倉時代後期には社会の変化に伴って惣領制は弛緩し、庶子の独立化、分割相続による所領細分化が進んだため、南北朝時代以降、長子単独相続が多くなり、惣領制は解体していった¹¹⁾。

治天の君や天皇の選定に関する幕府の干渉は、持明院統・大覚寺統の対立を激化させた¹⁰⁾。大覚寺統の後醍醐天皇は、幕府の干渉に不満を抱き、幕府打倒の計画を進めた¹⁰⁾。1324（正中 1）年には計画が漏れて失敗し（正中の変）、1331（元弘 1）年にも計画が漏れ、天皇は隠岐に流された（元弘の変）¹⁰⁾。しかし各地で討幕の兵がおこり、1333年 5 月にはまず足利高氏（のち足利尊氏）らが六波羅探題を攻略し、さらに新田義貞らによって鎌倉幕府も落とされ、ここに北条氏は滅亡した¹⁰⁾。

○両統迭立

両統迭立とは、鎌倉時代後半、後深草天皇系（持明院統）と亀山天皇系（大覚寺統）の両統から交互に皇位につくとされた皇位継承の原則¹²⁾をいう。

後嵯峨法皇は第 3 子後深草上皇よりも第 7 子亀山天皇を愛し、後深草の皇子熙仁親王を退けて亀山の皇子世仁親王を皇太子に立てたが、承久の乱（1221）後鎌倉幕府が皇位継承問題に干渉することが多く、それを顧慮した後嵯峨法皇は死に際して後深草、亀山のいずれを「治天の君」（天皇家の惣領）とすべきかの決定を幕府の指示にゆだねた¹²⁾。

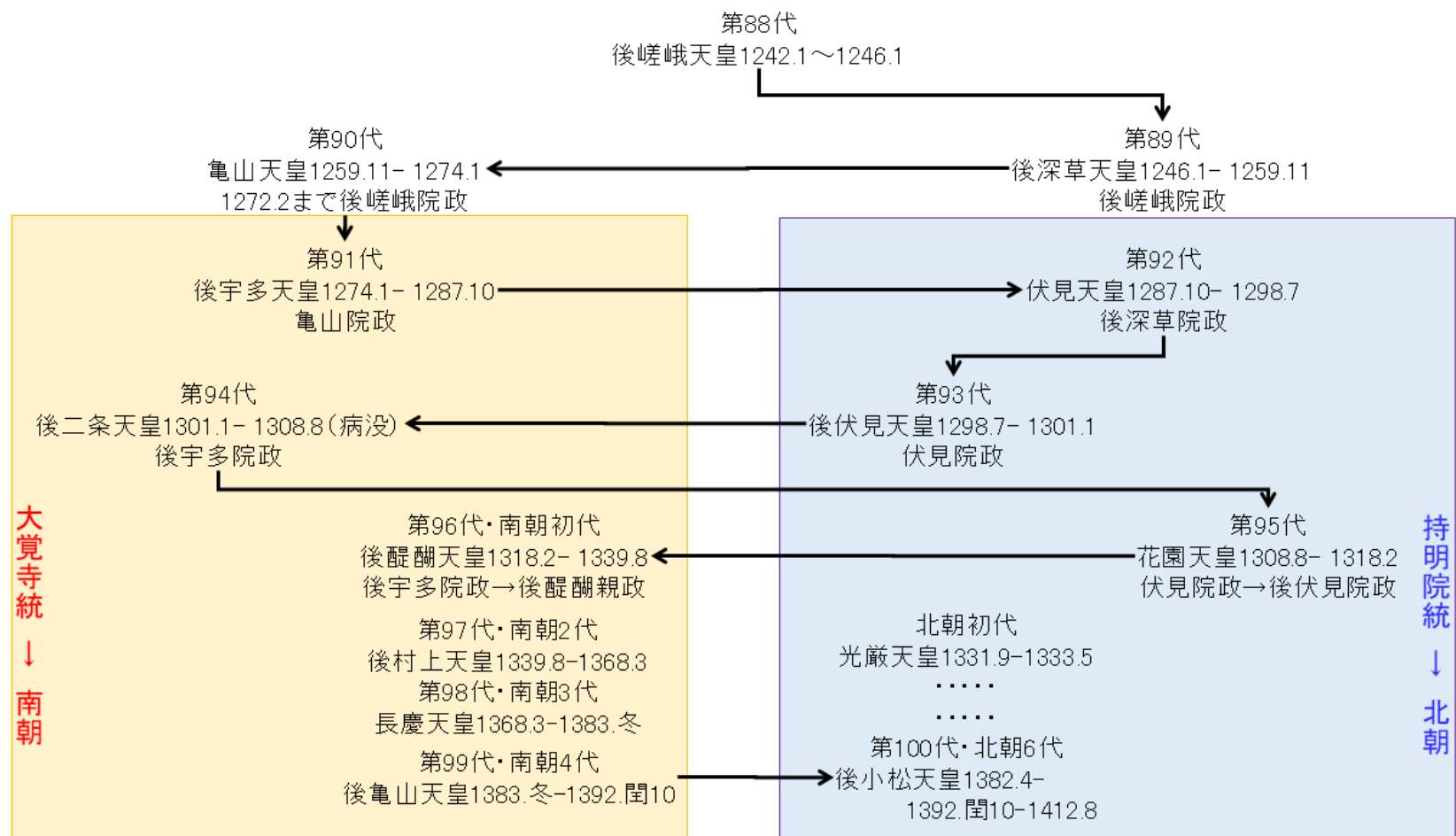


図 1.9-6 両統迭立

治天の君	天皇	鎌倉幕府執権	できごと
後嵯峨 治天:1246.1-1272.2	第86代・後堀河天皇1221.7-1232.10	第3代・北条泰時1224.6-1242.6	承久の乱1221
	第87代・四条天皇1232.10-1242.1	第4代・北条経時1242.6-1246.3	御成敗式目1232
	第88代・後嵯峨天皇1242.1~1246.1	第5代・北条時頼1246.3-1256.11	宮騒動1246
	第89代・後深草天皇(持明院統)1246.1-1259.11	第6代・北条長時1256.11-1264.7	法治合戦1247
亀山(大覚寺統)治天:1274.1-1287.10	第90代・亀山天皇(大覚寺統)1259.11-1274.1	第7代・北条政村1264.8-1268.3	
後深草(持明院統)治天:1287.10-1298.7	第91代・後宇多天皇(大覚寺統)1274.1-1287.10	第8代・北条時宗1268.3-1284.4	
伏見(持明院統)治天:1298.7-1301.1	第92代・伏見天皇(持明院統)1287.10-1298.7	第9代・北条貞時1284.7-1301.8	文永の役1274
後宇多(大覚寺統)治天:1301.1-1308.8	第93代・後伏見天皇(持明院統)1298.7-1301.1	第10代・北条師時1301.8-1311.9	弘安の役1281
伏見(持明院統)治天:1308.8-1313.10	第94代・後二条天皇(大覚寺統)1301.1-1308.8 病没	第11代・北条宗宣1311.10-1312.5	弘安合戦・霜月騒動1285
後伏見(持明院統)治天:1313.10-1318.2	第95代・花園天皇(持明院統)1308.8-1318.2	第12代・北条熙時1312.6-1315.7	永仁の徳政令1297
後宇多(大覚寺統)治天:1318.2-1321.12	第96代・後醍醐天皇(大覚寺統)1318.2-1339.8	第13代・北条基時1315.7-1316.7	
後醍醐(大覚寺統)治天:1321.12-1339.8		第14代・北条高時1316.7-1326.2	文保の和談1317
		第15代・北条貞顕1326.3.16-同.3.26	
		第16代・北条守時1326.4-1333.5	
		第17代・北条貞将1333.5.22?	北条氏滅亡1333

図 1.9-7 両統迭立 治天の君・天皇，執権

しかし幕府は逆に法皇の内意を問い、法皇の中宮であった大宮院の証言により亀山天皇の親政と決定された¹²⁾。一方、皇室領荘園のうち長講堂領が持明院統に伝領されたほかは、八条院領、室町院領などの帰属があいまいなままに残され、その帰属をめぐって両統の間に対立が生じ、天皇家を分裂させることとなった¹²⁾。

亀山天皇は皇子世仁親王（後宇多天皇）に位を譲ったが、その際後深草上皇の意をおもんばかった幕府の執権北条時宗の斡旋によって、後深草の皇子熙仁親王が亀山天皇の猶子として皇太子に立った¹²⁾。これが両統迭立の端緒となった¹²⁾。

しかし、この原則は明確に規定されたものではなく、その後も皇位継承をめぐって対立が続いたうえ、室町院領などの皇室領荘園をめぐる争いなどから、両統の対立はしだいに深まっていった¹²⁾。大覚寺統の後二条天皇の死（1308）後、持明院統の後伏見上皇の弟富仁親王が踐祚（花園天皇）し、後二条天皇の弟尊治親王（後醍醐天皇）が皇太子となったが、このとき、持明院統の皇位は後伏見系に、大覚寺統の皇位は後二条系にそれぞれ将来は伝えられるべきことが定められ、そのため持明院統が後伏見系と花園系に、大覚寺統が後二条系と後醍醐系にそれぞれ再分裂する可能性が生じた¹²⁾。

こうした事態を憂慮するとともに両統の抗争に巻き込まれることを嫌った幕府は、1317（文保 1）年に使者を上京させて両統の協議による皇位継承ルールの画定を促した（文保の和談）¹²⁾。しかし協議は難航し、幕府から提出された 10 年交代の両統迭立を軸とする妥協案も、細部について合意をみず、明確な決着がつかぬままに翌年花園天皇は幕府の意を受けて尊治親王に譲位した¹²⁾。

後醍醐天皇は 3 年後に親政を実現し、積極的な政治行動を展開して、やがて幕府との間に軋轢を生じた¹²⁾。一方この間に持明院統はしだいに幕府に接近していった¹²⁾。元弘の変（1331）で後醍醐天皇が捕らえられると、後伏見天皇の皇子量仁親王が六波羅探題に擁立されて踐祚（光厳天皇）し、光厳天皇は建武新政政府成立によって退位したが、やがて足利尊氏の離反で建武政府が倒壊すると、持明院統は足利氏に擁立され（北朝）、大覚寺統（南朝）と完全に対立するに至り、両統の対立は南北両朝の対立に移行した¹²⁾。1392 年（明德 3・元中 9）の両朝合一に際しては、ふたたび両統迭立とすることが条件とされたが、実際にはこの条件は守られず、持明院統のみが皇位を継承した¹²⁾。

1. 9. 4 鎌倉新仏教

鎌倉仏教は平安時代末期から鎌倉時代にかけて新たに広まった日本仏教の宗派を総称して使用される¹³⁾。奈良、平安時代の旧仏教の鎌倉時代における復興も含めて鎌倉時代の仏教全体を総称して使用される場合もあり明確な規定はない¹³⁾。

そのため新しく広まった仏教の宗派のみを区別して、「鎌倉新仏教」と呼称する場合があり、その場合は、法然（浄土宗）・親鸞（浄土真宗）・栄西（臨済宗）・道元（曹洞宗）・日蓮（日蓮宗）・一遍（時宗）によってはじめられた 6 宗を指す¹³⁾。

平安時代までの仏教の特徴はあくまで天皇や貴族が中心であり地位が高い人だけの仏教であったが、鎌倉新仏教の特徴は「信仰のしやすさ」があり、かつ 1052 年を末法元年として捉える「末法思想」を背景に、実際に地震、飢饉、疫病が多発し、二度の元寇の脅威があり、50 回もの元号改元（そのうち災異改元が 30 回）を行うほど、人々が苦しめられていた時代を背景として、庶民、武家にまで広く広まった¹³⁾。各宗派の特徴は、大きく念仏・題目・座禅の 3 つに分けられる¹³⁾。

「鎌倉新仏教」の語をめぐっては後述のように研究者によって様々な見解が存在する¹³⁾。鎌倉時代にあつては、国家的事業として東大寺をはじめ南都（奈良）の諸寺の再建がなされる一方、12 世紀中ごろから 13 世紀にかけて、新興の武士や農民たちの求めに応じて、日本仏教の新しい宗派である浄土宗、浄土真宗、時宗、日蓮宗、臨済宗、曹洞宗の宗祖が活躍した（このうち、浄土宗の開宗は厳密に言えば、平安時代末期のことであるが「鎌倉新仏教」に含めて考えられる）¹³⁾。

この 6 宗はいずれも、開祖は比叡山延暦寺など天台宗に学んだ経験をもち、前 4 者はいわゆる「旧仏教」のなかから生まれ、後 2 者は中国から新たに輸入された仏教である。

「鎌倉新仏教」6 宗は教説も成立の事情も異なるが、「旧仏教」の要求するようきびしい戒律や学問、寄進を必要とせず（ただし、禅宗は戒律を重視）、ただ、信仰によって在家（在俗生活）のままで救いにあずかることができると説く点で一致していた¹³⁾。

これに対し、「旧仏教」（南都六宗、天台宗および真言宗）側も奈良時代に唐僧鑑真が日本に伝えた戒律の護持と普及に尽力する一方、社会事業に貢献するなど多方面での刷新運動を展開した¹³⁾。

そして、「新仏教」のみならず「旧仏教」においても重要な役割を担ったのが、官僧（天皇から得度を許され、国立戒壇において授戒をうけた仏僧）の制約から解放された遁世僧（官僧の世界から離脱して仏道修行に努める仏僧）の存在であった¹³⁾。

「鎌倉新仏教」とは、一般には次の 6 宗を示している¹³⁾。すなわち、他力本願を旨とする浄土系諸宗（浄土宗、浄土真宗、時宗）、天台宗系の法華宗（日蓮宗）、不立文字を旨とする禅宗系の臨済宗と曹洞宗である¹³⁾。

「鎮護国家」の思想のもと、律令国家によって保護された奈良時代の南都六宗（奈良仏教）が仏教研究者集団としての性格をもち、また、平安仏教においては、学問的能力を必要とした顕教にしても、きびしい修行と超人的能力を前提とする密教にしても、貴族仏教としての性格を免れなかったのに対して、上記の 6 宗は主として新たに台頭してきた武士階級や一般庶民へと広がっていった¹³⁾。

国風文化期に隆盛した浄土教にしても、平安時代にあつては、阿弥陀堂建立の盛行にみられるように経済力の裏づけあつてのものであったが、それに対し鎌倉仏教は、概して、「易行…厳しい修行ではない」、「選択…救済方法を一つ選ぶ」、「専修…ひたすらに打ち込む」の諸特徴を有するといわれ、特に念仏を重んじる浄土系の浄土宗・浄土真宗・

表 1.9-4 鎌倉新仏教 6 宗の概要

宗派	開祖		教理の特色等	支持層
浄土宗	法然(源空) 1133-1212	1175 立教開宗	難しい教義を知ること、苦しい修行も、造寺・造塔・造仏も必要ない。ただひたすらに「南無阿弥陀仏」を唱えることが大切だと説く。 承安 5 年（1175）叡山を下りて東山吉水の吉水草庵に住み、念仏の教えをひろめた。この年が、浄土宗の立教開宗の年とされる。	京の公家、武士、庶民
浄土真宗 (真宗・一向宗)	親鸞 1173-1262	1224 立教開宗	師である法然の教えを継承、展開、深化させる。一念発起（一度信心をおこして念仏を唱えれば、ただちに往生が決定する）や悪人正機説を説く。 開宗宣言に相当する主著「教行信証」の初稿本は、関東在住の元仁元年(1224)頃に成る。	地方武士や農民、とくに 下層民
時宗 (時衆・遊行宗)	一遍(智真) 1239-1289	1274 立教開宗	賦算（念仏を記した札を配り、受けとった者を往生させる）→男女の区別や浄・不浄、信心の有無さえ問わず、万人は念仏を唱えれば救われると説く。 文永 11 年(1274)一遍が熊野本宮証誠殿に参籠し、権現の夢告により感得した「六十万入願」に基づき、「南無阿弥陀仏は絶対の教えであり、念仏を称えて極楽に往生する人は白い蓮華のように清らかである」と、その身そのままに往生するという教えを説いた。 時宗ではこのときを一遍の成道とし、時宗の開宗の年としている。	全国の武士・農民
法華宗 (日蓮宗)	日蓮 1222-1282	1253 立教開宗	法華経こそが唯一の釈迦の教えであり、その他の経典は未完成もしくは誤りの法であるとして、題目（「南無妙法蓮華経」）唱和により救われると説く。辻説法で布教した。 建長 5 年(1253)清澄寺に帰山。4/28 朝、日の出に向かい「南無妙法蓮華経」と題目を唱える（立教開宗）。	下級武士、商工業者
臨済宗	栄西 1141-1215	1191 栄西帰国 1202 建仁寺建立	坐禅を組みながら、師の与える問題を 1 つ 1 つ解決しながら（公案問答）、悟りに到達すると説く。政治に通じ、幕府の保護と統制を受ける。 文治 3 年(1187)再入宋、建久 2 年(1191)虚庵懷敞より臨済宗黄龍派の嗣法の印可を受け「明菴」の号を授かる。同年帰国。九州の福慧光寺、千光寺などで布教を開始。また、帰国の際に茶の種を持ち帰り肥前靈仙寺にて栽培を始める。建仁 2 年(1202)鎌倉幕府 2 代将軍・源頼家の外護により京都に建仁寺を建立。	公家、京・鎌倉の上級武士、地方有力武士
曹洞宗	道元 1200-1253	1227 道元帰国 1244 大仏寺(後の永平寺)開山	ただひたすら坐禅を組むこと（只管打坐）で悟りにいたることを主眼とし、世俗に交わらずに厳しい修行をおこない、政治権力に接近しないことを説く。 貞応 2 年(1223)明全とともに入宋、天童寺の長翁如浄の法を嗣いで安貞元年(1227)に帰国。しばらく建仁寺に寓居し、のち深草に移り、天福元年(1233)興聖寺を開創、さらに寛元 2 年(1244)には越前大仏寺（後の永平寺）開山となる。	地方の中小武士・農民

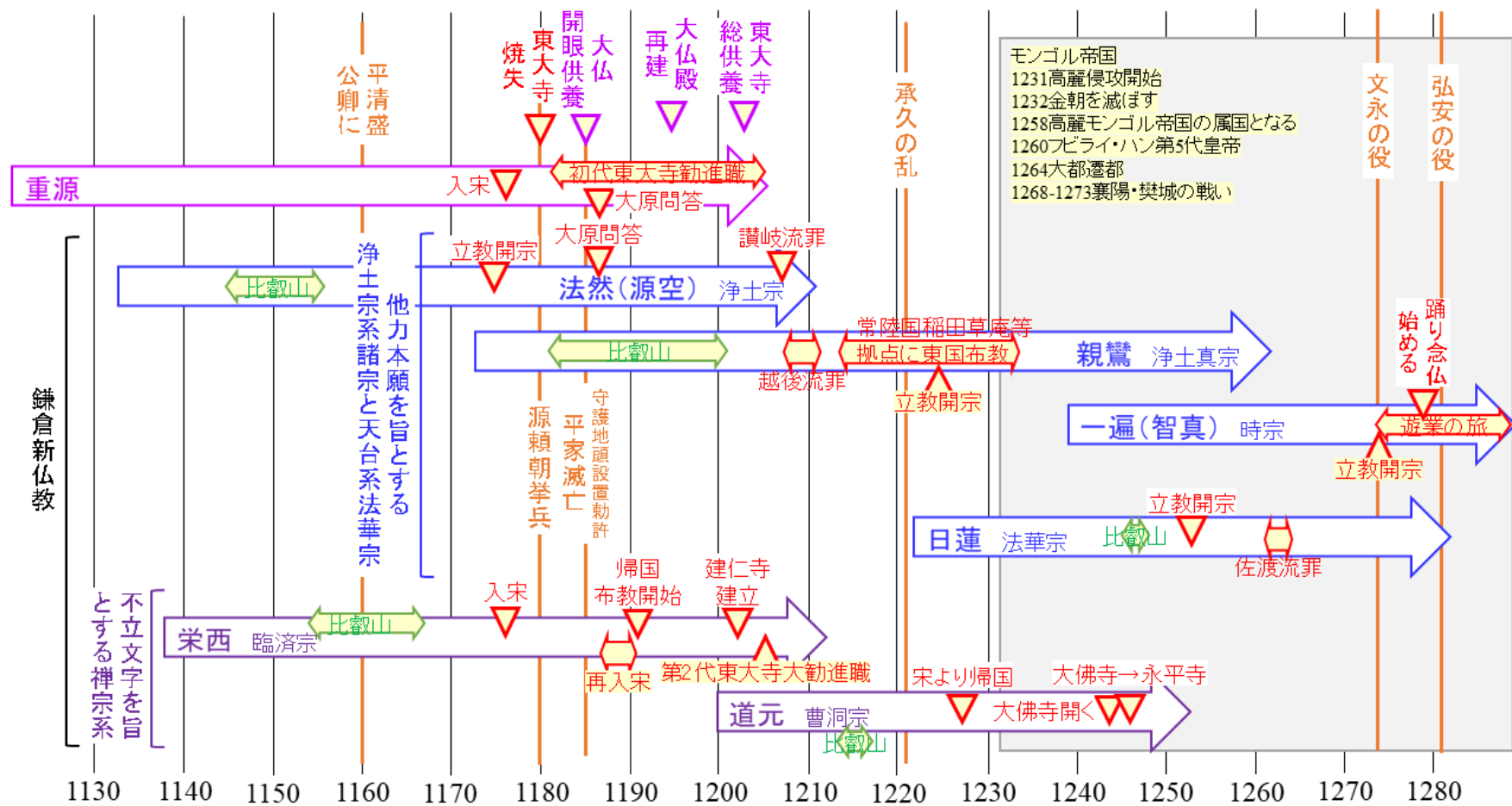


図 1.9-8 重源と鎌倉新仏教 6 宗の宗祖

時宗に顕著にみられる。浄土系諸門はみずからを「他力易行門」と称し、禅宗（臨済宗、曹洞宗）の実践する坐禅を「自力」のわざであり、「難行」であると批判したが、悟りに到達する方法として一つを選び、それに打ち込むあり方においては、禅宗もまた鎌倉時代に成立した他の「新仏教」諸派に共通する要素をもっていた¹³⁾。

12世紀からの大転換期にあつて、人びとは相次ぐ戦乱と飢饉に末法の世の到来を実感し、あたらしい救いを仏教に求めた¹³⁾。こうした要望にこたえたのが、信心や修行のあり方に着目した念仏と題目、および禅の教えであつた¹³⁾。これらは、庶民や新興武士階級にも受容できる仏教のあり方だったのである¹³⁾。そして、民衆の生活に奥深く浸透していった点で、鎌倉仏教（「鎌倉新仏教」）は、大陸から伝わった仏教の「日本化」を示す現象として説明される¹³⁾。

鎌倉新仏教の初期、浄土宗開祖法然と臨済宗を日本に伝えた栄西と同時期に活躍したのが重源である。重源は、1121（保安2）年、左馬允紀季重の子¹⁴⁾として誕生する。1133（長承2）年、醍醐寺に入つて出家、同寺の金剛王院源運に学ぶ¹⁴⁾。自らの生涯の事跡を記した『南無阿弥陀仏作善集』によれば、青年期には四国や大峯を修行して歩いたが、のちに下醍醐に栢杜堂を建て、上醍醐の一乗院や慈心院塔に結縁するなど、前半生の活動の拠点は醍醐寺にあつた¹⁴⁾。1167（仁安2）年入宋、栄西とともに天台山に登り、浄土五祖像を請来する¹⁴⁾。宋国に渡ること3度という¹⁴⁾。入宋中、浄土教の知識を得るほか、阿育王山の舍利殿を建てた建築法を体得したといわれる¹⁴⁾。近来、重源の入宋を疑う説もある¹⁴⁾。

東大寺は1180（治承4）年、平重衡の南都焼討によって伽藍の大部分を焼失¹⁵⁾する。大仏殿は数日にわたって燃え続け、大仏（盧舎那仏像）もほとんどが熔け落ちた¹⁵⁾。1181（養和元）年、重源は被害状況を視察に來た後白河法皇の使者である藤原行隆に東大寺再建を進言し、それに賛意を示した行隆の推挙を受けて東大寺勸進職に就いた¹⁵⁾。この時重源はすでに61歳¹⁴⁾であつた。この人選には自薦、他薦の諸説があつて一定しないが、背後には醍醐寺時代の村上源氏師房一族との人脈や、後白河天皇の乳母子の醍醐寺座主勝賢とのつながりがあつたとみられる¹⁴⁾。こののち自ら洛中を廻つて造営費用調達のための勸進活動を開始、宋人の陳和卿を起用して大仏の鑄造を始め、1184（元暦元）年に完成、1185（文治元）年開眼供養を遂げる¹⁴⁾。

次いで大仏殿の再建に取り組み、翌年には後白河法皇から周防国を東大寺造営料国に賜り、巨木を見付けると様々な技術を駆使して東大寺まで運搬、のちに天竺様（大仏様）と呼ばれる新たな様式で1195（建久6）年大仏殿を再建した¹⁴⁾。この功をもって大和尚位に叙せられる¹⁴⁾。1191（建久2）年には法然を東大寺に招き、南都諸宗の学匠に浄土三部經の講義を開いたという¹⁴⁾。

この後も大仏殿の脇侍や四天王像、戒壇院、鎮守八幡宮、南大門を造立、1203（建仁3）年に総供養を迎える¹⁴⁾。この間造営料を求めて周防国阿弥陀寺、播磨国浄土寺、伊賀国新大仏寺などを経営し、造像や建築に運慶・快慶に代表される南都仏師や陳和卿ら

の宋人技術者を登用した¹⁴⁾。東大寺造営の傍ら、諸国に造った別所は、東大寺、高野山、渡辺（難波）、播磨、備中、周防、伊賀の7つにおよぶ¹⁴⁾。さらに、備前の船坂山を開き、播磨の魚住泊の修築、摂津渡辺橋・長柄橋などの架橋、河内狭山池の改修、湯屋の勧進を行うなど、西大寺の叡尊、極楽寺の忍性に劣らず社会救済事業に尽くした¹⁴⁾。

1206（建永元）年、東塔造営の最中に死去¹⁴⁾した。不屈の精神と進取の気性、数多の人々を結衆させる優れた統率力を持ち、東大寺再建に捧げた後半生だった¹⁴⁾。生前阿弥陀仏の名を同朋の人々に付し、自らは南無阿弥陀仏と名乗る¹⁴⁾。

重源が迅速に東大寺再建を成功させた背後には、次の条件が具備されていた¹⁴⁾。

- (1) 醍醐寺以来の遊行による各地での庶民勧進の実績が、大勧進重源の素地を形成した¹⁴⁾。
- (2) 入宋3度の経験が、大仏様（天竺様）の建築様式をはじめとして、陳和卿による鑄造技術、宋風の絵画・彫刻・工芸などの迅速な導入を可能にした¹⁴⁾。
- (3) 再建事業の母体として東大寺、播磨、周防など各地に別所を設け、重源特有の三角五輪塔（大日如来）を中心に、阿弥陀如来像を造り、堂宇を建てて不断念仏、迎講などを行い、人々に阿弥陀名号を付し、同朋衆としての一体化を図った¹⁴⁾。また別所には必ず湯屋を設け、付近の難所には道を開き、橋を架けるなど、労務管理、荘園経営、社会事業などの総合施策を成功させた¹⁴⁾。
- (4) 各種小勧進網の要所に腹心の同朋衆を配し、重源自身が大勧進としてその頂点に位していたがゆえに、土木、建築、美術工芸、日宋貿易などのさまざまな再建集団を円滑に統御しえた¹⁴⁾。

なお重源が83歳（1203年）ころに著した「南無阿弥陀仏作善集」には、この間の事跡が詳細に記されている¹⁴⁾。重源の後任の第2代東大寺大勧進職には栄西が就いた。

1. 9. 5 諸産業の発達、文学、文化

○諸産業の発達

鎌倉中・後期には農業生産が大いに向上した¹⁶⁾。荘園の複雑な支配関係は、灌漑用水の円滑な利用を妨げたが、水車や用水池の利用も盛んになった¹⁶⁾。それらは名主・地頭の指導によるものであったが、多くの農民も参加した¹⁶⁾。苧敷（苗草）、草木灰などの肥料も利用され、牛馬を耕作に使用することも多くなった¹⁶⁾。農業技術の改良で農業生産は向上し、生産地帯では米・麦の二毛作が行われるようになった¹⁶⁾。農業生産の発達は農民の地位を向上させ、下人の独立、作人の名主への成長、名主の領主化がみられ、荘園制の基盤を動揺させた¹⁶⁾。

農村では農業のかたわら手工業製品を納め、手工業のために領主に労役を提供する農民もいた¹⁶⁾。高度の手工業技術者は、貴族・寺社の保護下に座をつくっていたが、農業生産が発達すると、農村でも専門の手工業者が現れ、一般庶民の需要にも応じるように

なった¹⁶⁾。とくに鍛冶・鋳物師が活躍し、農具や日用品を民間に提供した¹⁶⁾。農業や手工業の発達につれ、荘園の中心、交通の要地では定期市が開かれ、在地領主や名主が年貢米を銭にかえたり、物々交換を行ったりした¹⁶⁾。行商人によって、中央の製品は地方にももたらされた¹⁶⁾。都市では常設の小売店舗として店が現れ、専門商品別の店も増えた¹⁶⁾。京都や鎌倉では町という商業地域が生まれた¹⁶⁾。物資輸送もしだいに発達し、馬借、車借など専門の運搬業者が現れた¹⁶⁾。得宗被官や律宗の僧侶によって港湾施設が整備され、また淀川などの河川や港湾には問丸が発達した¹⁶⁾。彼らは、最初は荘園領主のために運送、保管、委託販売にあたったが、しだいに領主から離れた独立の運送仲介業者となり、一般商品を扱うようになった¹⁶⁾。宋との貿易によって、宋銭が広く流通し、貨幣の使用が増すと、年貢は地方の市で銭にかえ、中央の荘園領主に送られることが多くなり、代金決済の方法として為替も始まった¹⁶⁾。借上という金融業者も現れ、民間の相互扶助的な金融としては頼母子（無尽）が行われた¹⁶⁾。

○文学

一源平合戦と文学・歴史

武士の台頭に対する貴族側の対応は、とくに文学において顕著にみられる¹⁶⁾。武士と合戦を主題とする「保元物語」「平治物語」「平家物語」などの軍記物語の成立は、その一例である¹⁶⁾。とくに「平家物語」はそれらの白眉であり、興りと亡びの交錯する変革期の歴史を躍動的に描き、新興の武士に対する共感をも示している¹⁶⁾。「平家物語」は琵琶法師の語りによって、文字を読めぬ階層にまで享受され、感動を与えた¹⁶⁾。

慈円の「愚管抄」も源平合戦への反省から出発している¹⁶⁾。現実を末法・乱世と認識した彼は、乱世に至る歴史の理法としての「道理」を追究した¹⁶⁾。同書は歴史哲学を述べるとともに、政治のあり方に及んでいる¹⁶⁾。幕府の成立を「道理」として是認する彼は、力づくで幕府を倒そうとするのを誤りだとし、公家・武家が協力して天皇を助けるのを政治の理想としている¹⁶⁾。慈円は「鏡もの」のように、歴史を観照・賛美する立場を捨て、乱世における生き方を求める実践的立場にたっている¹⁶⁾。

貴族社会の内紛や公武の対立を主導的に克服しようとした後鳥羽上皇は、『新古今和歌集』編纂の中心となった¹⁶⁾。それは貴族文化の原点である延喜（『古今和歌集』の時代）への回帰を目ざしており、上皇の政治方針と対応するものであったが、上皇の理想主義的情熱や、波瀾の世を生きる歌人たちの緊張は、歌壇の停滞を打破している¹⁶⁾。

一方丈記、徒然草

方丈記は、鴨長明（法名蓮胤）著の鎌倉時代前期の随筆¹⁷⁾である。1212（建暦2）年成立、1巻¹⁷⁾である。長明が、晩年日野（京都市伏見区）に構えた方丈（約3m四方）の庵での閑居生活のさまと心境を記す。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶ泡は、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためし無し」で始まる格調高い文章は、和漢混淆文の完成された形として高く評価されている¹⁾

7)。「枕草子」や「徒然草」と異なり、構想を慶滋保胤の「池亭記」(982 成立)にならい、短編ながら整然とした構造をもつ¹⁷⁾。人と住家の無常を述べた序章に続き、その例証として長明が体験した災厄、すなわち安元 3 (1177) 年の大火、治承 4 (1180) 年の辻風(竜巻)、同年の福原遷都、養和年間(1181-82)の飢饉、元暦 2 (1185) 年の大地震を挙げる¹⁷⁾。さらに俗世の居住は他を顧慮しなければならず心の休まることのないものであるといい、零落一方の自分の境涯を回顧して、遁世の後に仮のものとして構えた日野の外山の草庵で、かえって心の赴くままにすごせる現在の閑居のさまをよしとするが、末尾では一転して、その閑居に執着すること自体が往生のさまたげではないかと、みずからの遁世の実質を問いつめたまま、それに答えることなく「不請の阿弥陀仏」を二、三遍となえるというかたちで全編の叙述を終える¹⁷⁾。「徒然草」とともに広く読まれ、後代文学に与えた影響は大である¹⁷⁾。

上記の梗概は「大福光寺本」を代表とする広本(叙述の豊富な本)によったが、ほかに五大災厄などの叙述を欠く略本(「長享本」「延徳本」「真名本」)がある¹⁷⁾。通説は広本を長明の自作、略本を後人の改作とするが、略本を草稿本、広本を改稿本とする考えも根強い¹⁷⁾。また、前半の五大災厄のリアルな描写を記録文学として高く評価するもの、そこに古代貴族社会の崩壊を見つめる長明のまなざしを読みとるもの、末尾の文章を厳しい自己凝視と解して評価する説、その部分を閑居賛美のための周到な韜晦とする説、さらには「心さらに答ふる事なし」とみずからの問いかけに対して黙した点に維摩経の不二法門品の方法を見だし、「方丈記」を長明が到達した高度の宗教的境地を表明した作品と見るなど、諸説がある¹⁷⁾。

徒然草は吉田兼好著の鎌倉時代末期の随筆¹⁸⁾である。上下 2 巻、244 段からなる¹⁸⁾。1317 (文保 1) 年から 1331 (元弘 1) 年の間に成立¹⁸⁾したといわれる。その間、幾つかのまとまった段が少しずつ執筆され、それが編集されて現在見るような形態になったと考えられる¹⁸⁾。それらを通じて一貫した筋はなく、連歌的ともいうべき配列方法がとられている¹⁸⁾。形式は「枕草子」を模倣しているが、内容は、作者の見聞談、感想、実用知識、有職の心得など多彩であり、仏教の厭世思想を根底にもち、人生論的色彩を濃くしている¹⁸⁾。序段「つれづれなるままに日暮し硯に向かひて、心に映り行くよしなしごとをそこはかとなく書き付くれば、あやしうこそ物狂ほしけれ」は、書名の拠る所で、作者の執筆時の状況が示されている¹⁸⁾。作品の特色をいえば、まず文章表現が卓抜な点で、話題によって漢文訓読体と和文体とを使い分け、厳粛な場面、滑稽な場面等々に応じて、柔軟に語り口を変えている¹⁸⁾。しかも簡潔を旨とし、冗長に流れることがない¹⁷⁾。第 2 に、人間への独自の親近感、信頼感がある¹⁸⁾。美意識では都人の側に立つが、粗野な田舎人がすべて悪いとはきめつけない¹⁸⁾。しかも他人の言を多く引き、それに共感することでさりげなく自己主張に代えている¹⁸⁾。第 3 に、利己的ともいえるほど人それぞれの生き方の自由を認めている¹⁸⁾。そしてそこで説かれている生活の知恵は、きわめて現実的である¹⁸⁾。この随筆は貴族男子の読物として書かれたらしいが、戦乱の時期

を通じて歌人、知識人たちにも愛読された¹⁸⁾。江戸時代には町人の知恵のよりどころとなり、多くの版本が刊行された¹⁸⁾。「つれづれ」の名を付した作品に、井原西鶴の「西鶴俗つれづれ」などがある¹⁸⁾。

○武士の文化

武士の生活は質素であったが、実際上の必要と美を競う気持ちから、刀剣、弓矢、甲冑などの武具には工夫が凝らされた¹⁶⁾。武士は武芸に励み、狩猟、流鏑馬、犬追物、笠懸などの武技が盛んであった¹⁶⁾。平安時代以来、「武者の習」という武士の生活倫理が形成されたが、その中核は、親への孝をはじめとする家族倫理と、主君との結合における主従倫理とであった¹⁶⁾。婚姻形態は基本的には嫁入り婚であるが、女性の地位は比較的高く、所領の相続権をも持っていた。武士は合戦に加わるだけでなく、狩猟・漁労を行い、殺生を業とするだけに、罪障感に襲われ、救済を求め、仏教を深く信仰し、氏寺も多く建てられた¹⁶⁾。法然、高弁、一遍をはじめ武士出身の僧侶も多かった¹⁶⁾。

幕府は剛健な武士の気風の維持に努める一方、貴族文化を積極的に摂取し武士独自の文化をもつくっていった¹⁶⁾。北条泰時が制定した「御成敗式目」は最初の武家法典であり、「武者の習」に基づいてつくられている¹⁶⁾。

北条時頼のころ得宗専制が成立し、幕府の政治的地位が向上した結果、幕府の指導者の間には治者の自覚が生まれ、文化への関心が高まり、武家文化は著しく向上した¹⁶⁾。時頼が宋の蘭溪道隆を招き、建長寺を建て、その子時宗は無学祖元を招き円覚寺を建てるなど、幕府は臨済禅に保護を与えた¹⁶⁾。幕府は単に禅という宗教にだけ関心をもっていたのではなく、禅に伴うさまざまな宋元文化を受容し、公家文化に対抗して武家古典文化をつくろうとしていたのであり、禅とともに禅宗様建築、頂相（禅宗の肖像画）、水墨画、儒学なども伝えられている¹⁶⁾。浄土宗も関東に伝わり、念仏僧によって鎌倉大仏（阿弥陀像）がつくられたが、幕府はこれを援助し、造営費を得るため、元に貿易船を派遣した¹⁶⁾。律宗では叡尊の弟子忍性が40年間鎌倉で布教し、北条氏に帰依され、社会事業にも努めた¹⁶⁾。これら諸宗は優れた土木技術を伴っており、その点でも幕府に有用であった¹⁶⁾。念仏僧は大仏をつくり、和賀江島を築き、律僧は橋を架け、道をつくった¹⁶⁾。和賀江島が修築され、鎌倉に大船が入港できるようになると、鎌倉と九州とは水路で結ばれ、鎌倉は中国文化の輸入において、京都に先んじることとなった¹⁶⁾。

幕府の歴史である『吾妻鏡』も編纂され、金沢実時が金沢文庫を建てて和漢の書を集めるなど、学問・文学に関心をもつ武士は少なくなかった¹⁶⁾。

○神祇崇拜の思想

蒙古襲来に対する勝利のゆえもあって、鎌倉後期には神国思想が盛んになった¹⁶⁾。伊勢神宮、とくに外宮（豊受大神宮）の神官を中心に伊勢（度会）神道が形成され、従来教義をもたなかった神祇信仰は、ここに理論をもつようになった¹⁶⁾。また藤原氏一門の

総力をあげて制作された絵巻物『春日権現霊驗記』では、藤原氏の氏神である春日神社の神威が説かれた¹⁶⁾。『日本書紀』、とくに神代巻の研究も進められ、卜部兼方の『釈日本紀』に集大成された¹⁶⁾。

神国思想は、従来の本地垂迹説とは逆に仏に対する神の優位を説いている¹⁶⁾。また念仏系新仏教にみられる神祇不拝の傾向に対して、神祇崇拝を強調し、神威によって幕府や悪党に対抗することを主張するなど、朝廷側の皇権回復の動きに連なるような政治性をも備えている¹⁶⁾。

○芸能・娯楽・俗信

都市の祭りは華麗の度を加えた¹⁶⁾。村落でも名主を中心とする座の神事が行われ、さらに多くの村人も加わるようになり、都市の祭りが農村にも受け入れられた¹⁶⁾。芸能の主流を形成したのは、身分的に賤視された人々である¹⁶⁾。琵琶法師は琵琶にあわせ『平家物語』などの語物を語った¹⁶⁾。白拍子は歌舞を演じた¹⁶⁾。鎌倉後期にはそのなかから曲舞がおこり、能楽の形成に影響を与えた¹⁶⁾。田楽や猿楽も盛んで座をつくって上演し、のち能・狂言に発展した¹⁶⁾。貴族が独占していた遊戯も庶民に広まり、大陸から伝わっていた囲碁、将棋、双六も盛んになった¹⁶⁾。とくに双六は貴族から庶民まで行われ、賭博化したため、幕府や朝廷はしばしば禁令を出した¹⁶⁾。また民間では印地打（石打）がおこったが、争闘となって禁止されることもあった¹⁶⁾。出産は坐産で、妊婦が腹帯を巻く習慣もあり、宮参りも行われた¹⁶⁾。育児には乳母、里子、子守など、他人の助力を借りることもあった¹⁶⁾。成人の儀にあたり、武士などでは烏帽子親をたてる習俗が普及した¹⁶⁾。葬制については、民間では死体遺棄に近いことも行われたようで、葬地と離れて別に祭地を設け、そこで供養を行う風習があったと思われる¹⁶⁾。

参考文献

- 1) コトバンク 承久の乱, 承久の乱(ジョウキュウノラン)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.3 閲覧
- 2) コトバンク 六波羅探題, 六波羅探題(ロクハラタンダイ)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.5 閲覧
- 3) コトバンク 御成敗式目, 御成敗式目(ゴセイバイシキモク)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.5 閲覧
- 4) コトバンク 地頭請, 地頭請(じとううけ)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.5 閲覧
- 5) コトバンク 下地中分, 下地中分(シタジチュウブン)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.5 閲覧
- 6) Wikipedia モンゴル帝国, モンゴル帝国 - Wikipedia, 2025.5 閲覧

- 7) Wikipedia 高麗, 高麗 - Wikipedia, 2025.5 閲覧
- 8) Wikipedia 元寇, 元寇 - Wikipedia, 2025.5 閲覧
- 9) コトバンク 元寇, 元寇(ゲンコウ)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.5 閲覧
- 10) コトバンク 鎌倉幕府, 鎌倉幕府(カマクラバクフ)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.5 閲覧
- 11) コトバンク 惣領制, 惣領制(ソウリョウセイ)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.5 閲覧
- 12) コトバンク 両統迭立, 両統迭立(リョウトウテツリツ)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.5 閲覧
- 13) Wikipedia 鎌倉仏教, 鎌倉仏教 - Wikipedia, 2025.5 閲覧
- 14) コトバンク 重源, 重源(チョウゲン)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.5 閲覧
- 15) Wikipedia 重源, 重源 - Wikipedia, 2025.5 閲覧.
- 16) コトバンク 鎌倉時代, 鎌倉時代(カマクラジダイ)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.5 閲覧
- 17) コトバンク 方丈記, 方丈記(ホウジョウキ)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 18) コトバンク 徒然草, 徒然草(ツレズレグサ)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧

1. 10 建武の新政・室町幕府・南北朝～応仁の乱～戦国時代

1. 10. 1 建武の新政・室町幕府・南北朝～嘉吉の乱

一 正中の変，元寇の乱

後醍醐天皇は1321（元亨元）年12月，親政を開始し政道刷新に旺盛な意欲をみせた¹⁾。天皇の卓越した指導力は公家社会の矚目するところとなり，日野俊基ら儒臣との宋学研究は，大義名分の上から討幕を理由づけたと思われる¹⁾。また天皇は一代主と定められていたため，両統迭立の原則を示し続ける幕府の存在は厚い障壁となっていた¹⁾。一方幕府も内紛と寺社勢力の敵対に苦しみ，各地では悪党が跳梁するなど，幕府の専制支配にも破綻が顕著となった¹⁾。

この機をとらえた後醍醐天皇は日野資朝ら近臣とはかつて反幕勢力を糾合して，討幕計画を進めた¹⁾。1324（正中元）年9月23日の北野祭を期して挙兵する手はずであったが，同志の密告により事前に発覚，同月19日土岐頼有，多治見国長は六波羅軍に囲まれて自害した¹⁾。資朝は佐渡配流¹⁾されたが，後醍醐天皇は事件に無関係の旨の告文を幕府にいれて事なきを得た¹⁾。これを正中の変という。

後醍醐天皇は正中の変で倒幕を計画して失敗したが，幕府の内部事情も手伝って苦境をのりきり，なおも政権の座にとどまっていた²⁾。後醍醐天皇の討幕の決意は固く，政権の奪回に懸命な持明院側から1326（嘉暦元）年に病没した邦良皇太子のあとに量仁親王（後伏見上皇の皇子）が立つに及んで，再度の討幕計画が具体化した²⁾。天皇は意欲的に施政につとめ政権担当者としての権力を強化する一方，尊雲法親王（護良親王）を天台座主に据え，聖尋僧正や円観を重用することなどによって天台・真言両宗系の僧兵を掌握することにつとめた²⁾。たびたびの南都北嶺への行幸も同じ目的のためである²⁾。また天皇による祈願寺の設定も討幕計画の成就を祈念したものとされる²⁾。

しかし1331（元弘元／元徳3）年4月この企ても天皇の身の安泰を憂慮した重臣吉田定房の通報するところとなり，幕府の使者長崎高貞，南条高直は六波羅探題を指揮して直ちに首謀者の逮捕を開始して，日野俊基・文観・円観・仲円・智教・遊雅を検挙した²⁾。このとき幕府の追及は直接天皇におよばなかったが，同年8月天皇と数人の公卿が突如宮廷を脱出，山城の笠置城にたてこもった²⁾。これに対して幕府は同年9月，承久の乱の例に倣って大軍を派遣したため笠置は落城，逃げのびようとした天皇一行も捕らえられ六波羅探題に引き渡された²⁾。こうして元弘の乱はたやすく鎮圧された²⁾。

一方この間に量仁は神器のないまま践祚しており（光厳天皇），政治の体制としては当時の慣例にならって父後伏見上皇が院政を開始していた²⁾。こののち後醍醐天皇は先帝と称された²⁾。同天皇が出奔とともに携えた神璽と宝剣は六波羅探題に接收され厳重な検知を経たうえで光厳天皇のもとへ渡った²⁾。

このたびの幕府の処分は正中の変のときに比べて大規模かつ厳しいものであった²⁾。天皇と皇子たちの配流はもとより，幕府は与同者たる僧俗を執拗に追及し，1332（元弘2／正慶元）年4月に二条道平，花山院師賢，万里小路藤房，文観，円観ら20余名を斬

首や遠流などに処した²⁾。天皇が隠岐へ流されたのは1332（元弘2／正慶元）年3月であったが、幕府との戦いは護良親王や楠木正成らによって根強く続けられた²⁾。正成の河内・和泉あたりでのゲリラ戦は有名だが、護良親王による挙兵の呼び掛けは九州に及ぶほど広域性をもった²⁾。

1333（元弘3／正慶2年）年閏2月天皇が隠岐を脱して伯耆船上山に拠り、討幕の大号令を天下に発すると、それまで形勢を觀望していた反幕分子は討幕へとしだいに傾いてゆき、幕府軍の武将として進軍してきた足利尊氏が天皇に通じて討幕側に転ずるに及んで、いっせいに討幕行動へとふみきった²⁾。幕府は反幕という点で共通する様々の階層からなる討幕勢力の総攻撃をうけ、1333（元弘3／正慶2年）年5月まさに一朝のうちに潰滅した²⁾。元弘の乱は鎌倉幕府の支配体制の矛盾を相乗的に激化させ、幕府の倒壊をもたらした点にその歴史的特質をもっている²⁾。

ー建武の新政

幕府滅亡により、1333（元弘3／正慶2年）年6月、後醍醐天皇は伯耆から帰京し新政に着手³⁾する。中央に記録所・恩賞方・雑訴決断所・武者所・窪所の諸機関を設置し、諸国には国司と守護を併置したが、守護の職権を削減し、武士に対する指揮命令権を国司に移管³⁾した。大内裏の造営や造幣を計画し、また王朝国家の体制であった官職の譜代相伝化を否定する人事を断行、家格・門閥をもたない楠木・名和・結城氏など一部の腹心を専制支配の手足として重用した³⁾。

新政の中心は論功行賞と土地関係の訴訟の処理におかれ、その結果、貴族階級の利益擁護の線の強いことに武士階級は不満を抱いた。また皇居造営などによる課税の増大は農民の不満もまねいた³⁾。後醍醐天皇は天皇にすべての権限が集中する独裁体制の樹立をめざしたが、現実には個別所領安堵法の撤回、決裁権をもつ雑訴決断所の設置、地方統治機関である陸奥・鎌倉両將軍府の設置など、構想の修正・後退を余儀なくされた³⁾。家格や慣例を無視した人事も貴族層の不満をかい、所領政策の失敗や恩賞の不公平は武士層の動揺と反発を招き、地方では反乱が続発³⁾した。

武家政治復活をのぞむ武士層の信望を集めていた足利尊氏が、1335（建武2）年7月におこった中先代の乱鎮定のため東下して後醍醐から離反するに及び、新政はわずか3年たらずで崩壊³⁾する。このころの世相は二条河原落書に示されるような不安な状態にあり、政治も朝令暮改の状態で、1336（延元元／建武3）年後醍醐天皇の吉野還幸から動乱の南北朝時代となる³⁾。

ー足利尊氏

足利尊氏は、1331（元弘元／元徳3）年8月、元弘の乱で後醍醐天皇が笠置で挙兵した時、大仏貞直とともに幕府軍を率いて上洛し、元弘の変を平定後、鎌倉に帰った⁴⁾。1333（元弘3／正慶2年）年2月、後醍醐天皇が隠岐を脱出して、名和長年と船上山にこもるや、幕府軍を率いて再度西上⁴⁾した。途中、三河で一門の長老吉良貞義に北条氏討伐の決意を打ち明け、船上山への征途を偽装しつつ丹波に至り、4月、篠村八幡の社

前で源氏再興の旗をあげた⁴⁾。5月、赤松則村、千種忠顕らと京都に侵攻し六波羅探題を滅ぼし、奉行所を置いて、全国各地から上洛する武將を傘下に加えた⁴⁾。

後醍醐天皇は帰京後ただちに尊氏の昇殿を許し、鎮守府將軍とし、さらに諱（尊治）の一字を与えて、北条氏討伐戦における尊氏の戦功を賞揚した⁴⁾。尊氏は、武蔵など3か国の国務と守護職、さらに30か所に及ぶ所領を与えられたものの、征夷大將軍に任命されなかったことを不満とし、建武政権のいかなる機関にも参加せず、奉行所を強化し、独自の政権構想を固めつつあった⁴⁾。そのため、護良親王との反目がしだいに深まり、1334（建武元）年11月には、天皇に護良親王の逮捕を強要し、親王の身柄を鎌倉の弟直義のもとへ送り、ついに幽閉した⁴⁾。翌1335（建武2）年6月、北条時行が信濃（長野県）に挙兵し、鎌倉へ侵攻するや、尊氏は時行の乱を鎮圧するため東下したが、このときにも征夷大將軍の地位を許されなかった⁴⁾。8月には、時行軍を撃破して鎌倉を奪回したものの、直義の諫言を受け入れて帰洛せず、11月、逆に、直義の名をもって、新田義貞誅伐の檄文を諸將に送って軍勢催促を要請した⁴⁾。義貞誅伐を名目として、建武政権への反意を表明したものである⁴⁾。後醍醐天皇は、新田義貞と陸奥の北畠顕家らに尊氏誅伐を命令した⁴⁾。尊氏は箱根竹の下合戦に義貞軍を破り、1336年（延元元／建武3）1月には入京し、天皇を叡山へと逐った⁴⁾。

しかし、尊氏の背後から入京した顕家軍との合戦に敗れ、九州へと敗走した⁴⁾。この途中、味方武將の動揺を鎮めるため、元弘以来の没収地を返付すると発表し、朝敵という汚名を逃れるために、光厳上皇の院宣を獲得した⁴⁾。さらに、一門の細川、今川氏や、小早川、大内氏などの有力武將を中国、四国の各地に派遣して、反撃の際の拠点づくりを怠らなかった⁴⁾。同年3月、尊氏は多々良浜で菊池軍を破ったのち、勢力を急速に回復し、5月楠木正成を将とする建武政府軍を兵庫湊川に破り、6月には入京を果たし、京都近郊の合戦において政府軍をほぼ壊滅させた⁴⁾。

8月、光明天皇を擁立した尊氏は、「この世は、夢のごとくにて候」と、遁世を祈願し、今世の果報を直義に賜りたいとの自筆願文を清水寺に納めたが、混沌とした内乱期社会が、武士の棟梁としての尊氏を隠遁させるはずもなく、彼の願望は終生を通じての夢でしかありえなかった⁴⁾。11月に、神器を光明天皇に引き渡した後醍醐天皇は、翌月、吉野に逃れて南朝を建てたが、この間尊氏は、「建武式目十七カ条」を制定して、室町幕府の施政方針を確立した⁴⁾。

1337（延元2／建武4）年3月、高師泰に越前金ヶ崎城を攻略させた尊氏は、翌1338（延元3／暦応元）年5月、北畠顕家を堺の石津浜に敗死させ、閏7月には、北国で勢力を挽回しつつあった新田義貞をも越前藤島で戦死させた⁴⁾。そして8月、尊氏は、待望久しかった征夷大將軍に任命された⁴⁾。元弘以来の戦没者の遺霊を弔い、天下の泰平を祈願するために、諸国に安国寺と利生塔を建立し始めたのも、この年のことである⁴⁾。1339（延元4／暦応2）年8月、後醍醐天皇が吉野で死去したことを知った尊氏は、直義とともに天皇のために盛大な法要を営み、さらに天竜寺を創建して、その菩提を弔つ

ている⁴⁾。

1347（正平2／貞和3）年から翌1348（正平3／貞和4）年にかけて、室町幕府軍と楠木正行らを中心とする南軍との攻防戦が展開されたが、この過程において、尊氏の執事高師直の勢力が急速に伸張し、政務を統轄して声望の高かった直義との対立が激化した⁴⁾。

尊氏は、師直の強請によって直義を退け、義詮を鎌倉から呼び寄せて、直義のもっていた諸権限を義詮に与えた⁴⁾。尊氏の庶子で、直義の養子となっていた直冬も九州へと逐われた⁴⁾。

1350（正平5／観応元）年10月、直義は大和に赴き、南朝へ降伏して師直誅伐の軍をおこした⁴⁾。翌1351（正平6／観応2）年2月には、直義党の勢力は尊氏・師直派を圧倒し、ついに師直・師泰らは直義党の上杉能憲によって殺害された。尊氏は直義党の処置を怒り、諸将も2派に分かれて対立するに至った⁴⁾。

こうして、直義と師直との対立抗争に端を発した観応の擾乱は、ついに尊氏・義詮派と直義・直冬党との全面的な対立へと発展し、8月、直義は北国へと逃走した⁴⁾。直義は北国から関東へと逃れたが、尊氏は直義討伐軍を率いて追撃し、1352（正平7／文和元）年1月には鎌倉へ入り、翌月、直義を毒殺した⁴⁾。

尊氏は以後1年有半を関東で過ごす、それは、新田義興の挙兵によって混乱した東国の政情を回復せんがための日々であった⁴⁾。

尊氏が鎌倉より京都に帰ったのは翌1353（正平8／文和2）年9月のことであった⁴⁾。1355（正平10／文和4）年正月から3月にかけての直冬党の京都進攻を退けたのち、尊氏・義詮派はその勢力をようやく確立し、翌1356（正平11／延文元）年1月には越前の斯波高経も復帰し、室町幕府は、観応の擾乱による痛手を回復するに至った⁴⁾。

1358（正平13／延文3）年、尊氏は九州への遠征を計画した⁴⁾。それは、菊池氏に擁立された懐良親王の南軍が、博多に攻め入るなどして勢力を強化しつつある状況を一举に打開せんがためであった⁴⁾。しかし病を得て、この計画を果たすまもなく、この年4月30日、京都二条万里小路邸で死去した⁴⁾。

一室町幕府

鎌倉幕府打倒に軍功のあった尊氏は、建武政府の要路から締め出され、北条氏残党鎮圧に際しても征夷大將軍補任を拒否されたことから、1335（建武2）年11月、在地領主制を展開しつつあった諸国武士の輿望を担って建武政府に反旗を翻した⁵⁾。

鎌倉から上洛した尊氏は、いったん敗れて筑前に退去するが、その間に東国、畿内、西国の急進派武士の大半を勢力下に組み入れ、翌年5月湊川で楠木正成を、次いで千種忠顕、名和長年ら官方の有力者を撃破し、畿内を制圧して同年11月「建武式目」を制定、事実上幕府を発足させた⁵⁾。尊氏の將軍任官は1338（延元3／暦応1）年8月だが、法的には1336（延元元／建武3）年8月の光明天皇即位、光厳院政開始をもって幕府開創の要件は満たされている⁵⁾。

同式目にもうたっているとおり、施政発足に当たって鎌倉幕府の諸制度と吏僚が継承

されたほか、前幕府倒壊の一因となった畿内近国の急進的在地武士や供御人、神人など非農業的商人集団をも懐柔すべく、政庁を京都に定めた⁵⁾。幕府開創期の権力構造における最大の特徴は、尊氏が侍所、恩賞方、政所を管轄して主従制的な支配権を掌握する一方、弟の足利直義が評定、引付、安堵方、問注所などを管轄して統治権的支配権を掌握し、兄弟で二元的政治を行った点である⁵⁾。直義の背後には王朝の本所、荘園領主の利害があり、尊氏や執事高師直のもとには荘園制と対決を余儀なくされた急進的在地領主層の期待が集中し、この両者間に権力抗争を生じて、1349（正平 4／貞和 5）年-1352（正平 7／文和元）年に及ぶ観応の擾乱という紛争を招いた⁵⁾。

その過程で師直、直義らは殺害され、2代将軍義詮の親裁権が強化されることになった⁵⁾。擾乱で没落した旧直義党は多く南朝方に加わったため、1355（正平 10／文和 4）年までの間、京都は3度南軍に占拠され、また仁木義長、細川清氏ら足利一門の有力守護が相次ぎ反乱を起こすなど、1358（正平 13／延文 3）年の尊氏死去前後の幕政は混乱を極めたが、1362（正平 17／貞治元）年、斯波高経、1367（正平 22／貞治 6）年、細川頼之が主導して幕府を安定に導き、内乱も北軍優勢裡に小康状態を迎えた⁵⁾。

1368 年（正平 23／応安元）年、頼之が制定した半済令は中小荘園領主を切り捨てる一方、有力権門と在地領主（国人）、守護権力の権益を一定度保護し、室町期を通ずる土地政策の基本となった⁵⁾。この前後、寺社公家などの本所領に関する裁判権は朝廷から漸次幕府に移行し、検非違使庁が握っていた京都市中の刑事警察権は幕府侍所に移され、段銭などの臨時財産税も守護にその徴収権が付与されるなど、頼之の執政は幕府権力確立の上できわめて重大な役割と画期を有している⁵⁾。

3代将軍足利義満の親政が始まる南北朝末期は、細川、山名、土岐、大内らの有力守護を巧みな懐柔と挑発によって弾圧し、1392（元中 9／明德 3）年には南朝の神器を接收して内乱を終息させ、将軍権力は比類ないまでに強化された⁵⁾。義満は従一位、内大臣、左大臣、准三后を歴任し、王朝の支配権をほとんど篡奪し、義満の意志による伝奏奉書を発給させて形式的にも公武両権力の頂点に立つ専制君主となり、1401（応永 8）年の対明外交開始に当たって国書に「日本国王」と自署したのである（日明貿易）⁵⁾。こうして義満、義持、義教の3代の間に幕府は極盛期をむかえ、朝廷はわずかに祭祀、改元と一部寺社の人事権を掌握するにすぎない一権門に凋落する⁵⁾。

○足利義満

室町幕府は、3代将軍足利義満の時代に、諸課題を整理するとともに、日明（勘合）貿易等新たな施策を展開する。足利義満は、父が2代将軍義詮、母は石清水神官善法寺通清の娘の紀良子⁶⁾である。母は順徳天皇の玄孫に当たり、その姉妹、仲子崇賢門院は後円融天皇の生母である⁶⁾。すなわち義満は、母系で順徳5世の裔であるとともに後円融の従兄弟という、二重の意味で皇族の縁戚であった⁶⁾。

義満生誕のころに、観応の擾乱の余波はようやく終息に向かっていたが、新たに幕府

内に権臣の争いが起こり、1361（正平 16・康安 1）年、幕府の執事細川清氏が離反して南朝に投じ、南朝軍とともに京都を急襲すると、将軍義詮は近江に走り、4 歳の義満は建仁寺に隠れたのち、播磨に逃れて守護赤松則祐の庇護を受けた⁶⁾。

1367（正平 22・貞治 6）年、義詮は四国の大守護細川頼之を迎えて管領とし、10 歳の義満をこれに託して病没⁶⁾する。ここに義満は足利の家督を継ぎ、翌年元服して征夷大將軍の宣下を受けたが、幕政はなお管領頼之の主宰にゆだね、義満みずから政務を見るのは 1372（文中元・応安 5）年からである⁶⁾。これより朝官しきりに進められて 1380（天授 6・康暦 2）年に従一位、翌年父祖の例を超えて内大臣、ついで左大臣・院別当となり、1383（弘和 3・永徳 3）年には源氏の長者となり、武家で初めての准三宮を与えられた⁶⁾。義満は公武を統一する支配者の道を歩みはじめた⁶⁾。

義満はまた永和のころ京都の北小路室町の地に壮麗な新邸を造営して、ここに移り、1381（弘和元／永徳元）年後円融天皇の行幸を仰いで新邸の善美を内外に誇示した⁶⁾。新邸は四季の花木や諸家から召し上げた名木で飾られて花御所と呼ばれ、義満は室町殿と呼ばれた⁶⁾。政権の呼称としての室町幕府の名はここに由来する⁶⁾。

義満の治政で特筆すべき最初の事業は、父祖 2 代にわたって進められた王朝・本所権力を幕府に吸収する作業の総仕上げであって、1384（元中元・至徳元）年以降、幕府の侍所が洛中所領裁判における判決の執行を担当し、1393（明德 4）年洛中の土倉・酒屋等の金融業者に対する社寺・貴族の私的支配を排除して、幕府の課税権を確立するなど、京都市政権吸収工作の進展によって、これを察することができる⁶⁾。

第 2 の、そして義満にとって最も困難だった事業は、幕府創業以来、将軍の統制に服さず分権を志向する大守護を弾圧して、将軍権力の確立に大きな成功を収めたことである⁶⁾。まず 1387（元中 4・嘉慶元）年、伊勢・尾張・美濃 3 国の守護土岐頼康が没すると、同氏の内紛に乗じて頼康の嗣子康行を討ち、伊勢・尾張を没収（土岐氏の乱）⁶⁾する。ついで山陰の大守護山名氏の勢力削減を策して、同氏の一族氏清・満幸を弾圧し、1391（元中 8・明德 2）年に氏清らが兵を起こすのを待って、これを京郊内野に滅ぼし（明徳の乱）⁶⁾た。次に九州探題として赴任後 20 年の努力によってようやく九州統一に成功した今川貞世（了俊）が、やがて周防・長門の守護で北九州に進出した大内義弘と覇を競い、ことに朝鮮との通交貿易の窓口として探題独自の権力の樹立を目ざすと見るや、1395（応永 2）年にわかに貞世の探題職を罷免した⁶⁾。さらに、大内義弘が今川の失脚後いっそう朝鮮との関係を深めて九州探題をしのぐ大勢力となったばかりか、明徳に滅びた山名に代わって和泉・紀伊の守護職も併せて中央政治への影響力を確保する段階に達すると、1399（応永 6）年義弘を和泉の堺城に討って、大内氏の伸張に強い一撃を加えたのであった（応永の乱）⁶⁾。

義満の第 3 の事業は南朝の合併による王朝の統一である⁶⁾。1392（元中 9／明徳 3）年義満は、後醍醐天皇以来 4 代にわたって吉野の山中に皇位の正統を唱えて、北朝＝幕府に抵抗しつづけてきた南朝に和平の申入れを行った⁶⁾。南帝後龜山天皇は讓国の儀を

もって神器を北朝の後小松天皇に渡す、今後皇位は大覚寺統（南朝）・持明院統（北朝）交互とするなどの条件が義満側から示され、後龜山はこれをいれて帰京し、神器は後小松に渡された⁶⁾。57年間に及ぶ南北両朝分裂の歴史はここにその幕をとじた⁶⁾。

1393（明德4）年に後円融が没すると上皇の王権を吸収して事実上の院政を開く⁶⁾。1394（応永元）年義満は將軍職を長子義持に譲って太政大臣に昇り、翌年出家して道有（のち道義）と号し、なお依然として政務を見た⁶⁾。そして1397（応永4）年洛北の北山に3層金箔の舍利殿（金閣）以下多数の殿舎より成る北山第を造営⁶⁾して、ここを政庁に兼ねて公武貴族社交の場とした（鹿苑寺）⁶⁾。公家の官職任免に伴う拝賀奏慶や門跡の院務始の礼を北山第で行うよう強制、自らの参内出仕はすべて上皇の儀礼に準じ、伝奏を秘書として「国王御教書」すなわち伝奏奉書を発給して形式上も公武両勢力の頂点に立った⁶⁾。やがて妻の日野康子（北山院）に天皇の母なみの、また愛児義嗣に親王なみの待遇を与えるなど、天皇家と一体化の道を推し進めた⁶⁾。

義満が天下統一事業の最後に行ったのは日明通交の開始であった⁶⁾。すでに明は建国以来たびたび使節を日本に送って倭寇の鎮圧を求め、臣従を促したが、ついに1401（応永8）年-04（応永11）年の間、数次にわたる日明国使の往復の末、明帝は義満を日本国王と認めて、暦と印を与え、義満はこれを受けて明の正朔を奉ずる冊封関係およびこの関係を前提とする日明公貿易（勘合貿易）の制度が成立した⁶⁾。

義満はまた禅宗寺院統制のために五山制度を整備し（五山・十刹・諸山）、義堂周信、春屋妙葩らの禅僧を重用したほか、自身和歌、連歌、楽、書に秀で、猿楽を好んで世阿弥を愛し、中国渡来の文物を愛玩するなど、文化の面でも傑出した指導者であった⁶⁾。

北山第で顕密高僧による巡祈祷、土御門邸での陰陽道祭という月例の七日七夜の国王の祭祀を制度化し、天皇の神道祭祀の形骸化を図りつつ、自ら「百王説」を廷臣らに質して篡奪正当化の瀬踏みを試みている。かくて1406（応永13）年末には通陽門院の病没を足掛りに正妻日野康子を准母とすることに成功し、1408（応永15）年には次男義嗣を皇位候補として北山第行幸を仰ぎ、義嗣の親王元服を行うが、自らの上皇位が目前に迫った同年5月、急死⁶⁾した。

○足利義持

足利義持は、室町幕府第4代將軍⁷⁾である。義持は、義満の嫡子で、母は三宝院坊官安芸法眼の娘慶子である⁷⁾。1394（応永元）年12月わずか9歳で元服して將軍に任官、正五位下に叙し、2年後参議、1406（応永13）年には権大納言兼右大将に上る⁷⁾。しかしこの間父義満が依然として政務全般を掌握していたので、將軍位は傀儡に過ぎなかった⁷⁾。また父に叱責されて伝奏日野重光に救解を頼んだこともあり、義満との反目は深刻で、これが後年の施策に反映したとされる⁷⁾。

1408（応永15）年5月義満の死により親政を始め、宿老斯波義将、畠山満家らがこれを助けた⁷⁾。

重要な政策としては、亡父義満に贈られた上皇の尊号を拒否して皇位篡奪路線を否定したこと、明への屈従を嫌って断交したことなどがある⁷⁾。また亡父の政庁である北山第を破却、移建して三条坊門第に移った⁷⁾。

1412（応永 19）年には北朝の称光天皇を擁立したが、これが両朝和約に違反するとして飛騨・伊勢両国司らが蜂起、また 1416（応永 23）年には関東に上杉禅秀の乱が起こるがいずれも短期に鎮圧され、義持の治世 20 年間は室町期中まれな安定期だったといえる⁷⁾。

親政後は内大臣に上り、1423（応永 30）年 3 月将軍を嫡子義量に譲るが、政務はとり続け、「室町殿」と称された⁷⁾。2 年後の 1425（応永 32）年、義量が夭折し、将軍位は空位となった⁷⁾。このころ甲斐、常陸の紛争を機に幕閣では関東出兵が議されたが、宿老は「遠国融和策」を主張して出兵に反対、鎌倉公方足利持氏も幕府に譲歩して大事には至らなかった⁷⁾。晩年は護持僧三宝院満済が宿老会議の座長となり、重事は宿老の合議により決定された⁷⁾。義持の治政下に地方では守護領国制が進展し、大名、国人の諸家では家臣団の力が強化された⁷⁾。

晩年赤松満祐の播磨守護職を取り上げ溺愛する赤松持貞に譲らせようと画策して満祐の怒りを買う事件などあったが、1428（応永 35）年正月 18 日 43 歳で死去した⁷⁾。腫物の傷がもとで義持が重態に陥ると、宿老らは義持自らによる後嗣指定を望んだが、嫡子のない義持はこれを拒否、ついに前代未聞のくじ(神判)による跡目決定となり、その結果同母弟の義教が選ばれた⁷⁾。これは当主の遺言よりも家老の意向が優先するという時代思潮を反映したものである⁷⁾。

○足利義教

足利義教は、室町幕府第 6 代将軍である。義満の子で、母は三宝院坊官安芸法眼の娘慶子であり、義持の同母弟となる⁸⁾。

1403（応永 10）年 6 月青蓮院に入室、1408（応永 15）年 3 月得度して義円の法名を称す⁸⁾。1411（応永 18）年 7 月受戒、次いで大僧正に上り、准後の宣下を受ける⁸⁾。1419（応永 26）年 11 月より翌々1421（応永 28）年 4 月まで天台座主⁸⁾であった。

1428（応永 35）年 1 月、義持が嗣子なく急死するに当たり、宿老たちは遺言による後継指名を望んだが、義持は拒否⁸⁾した。護持僧満済との協議でくじによる選出を決した⁸⁾。これは家督決定には一族内者の合意を不可欠とする当時の通念に従ったもので、くじの結果義円が後嗣と決定、同 1428（正長元）年 3 月還俗して義宣と名乗った⁸⁾。のちの義教である⁸⁾。

聖界にあっては准后大僧正という最高位にあったが、還俗後は次第昇進を要すとの意見が通り、まず従五位下左馬頭に叙任、翌 1429（正長 2）年 3 月元服し、将軍宣下を受けた⁸⁾。1431（永享 3）年 12 月三条坊門第（下御所）から義満のいた北小路室町（上御所）に移った⁸⁾。1432（永享 4）年 8 月左大臣、淳和・奨学両院別当を兼ね、源氏長者

に補された⁸⁾。1432（永享4）年、義持時代に中止した勘合貿易を再開し、財政の資としたことは著名⁸⁾である。

称光天皇没（1428（正長元））後は伏見宮貞成の子を迎えて後花園天皇に擁立するなど幕権の威を示したが、性酷薄で残忍を極め、廷臣や諸将を小過を以て大量に処分したので「万人恐怖」「悪御所」と呼ばれて恐れられた⁸⁾。

義教は朝廷にも積極的に介入した⁸⁾。称光天皇が没したあと、男子がなかったため伏見宮貞成親王の子を立てて天皇とした（後花園天皇）が、これは義教のはからいであった⁸⁾。南朝の後胤については極力僧侶にしむけ、または討伐して絶滅を図った⁸⁾。廷臣に対しても意に反する者には処罰をもって臨み、1434（永享6）年までに処罰された廷臣は60名に及んでいる⁸⁾。ことに宮廷内に勢力を強めた裏松家への弾圧は厳しく、室裏松重光女宗子を廃して、正親町三条公雅女尹子に代え、宗子の兄義資も処罰された⁸⁾。

また寺社統制にも力を入れ、1433（永享5）年、幕府の意に従わなかった延暦寺衆徒を叡山に攻め殺した⁸⁾。1435（永享7）年2月には嗽訴を繰り返す山門を弾圧、中堂は炎上した⁸⁾。

治世のはじめは宿老たちの意向に従い合議制を守ったが、同時に義教は専制政治を目ざし、1428（正長元）年引付制度を復活して管領の権限を抑制した⁸⁾。また三管領のうち畠山持国を代えて弟持永とし、今川・京極・富樫など諸家の当主に近習者を立て、権力集中を図った⁸⁾。守護家の家督にも積極的に介入し、衆議に名を借りて細川氏を除くほとんどの宿老家の手入れを行った⁸⁾。1439（永享11）年2月、関東に地方政権的性格をもち幕府に反抗を続けてきた足利持氏を自殺せしめ（永享の乱）、1440（永享12）年5月丹後守護一色義貫、伊勢守護土岐持頼を誅殺し、丹後守護には近臣一色教親をあてた⁸⁾。1441（永享13）年1月には畠山持国を追放⁸⁾した。次は赤松家とうわさされる中で、1441（嘉吉元）年6月24日先手を打つことで將軍の魔手を逃れんとした赤松満祐により自邸に招かれ、宴席中に斬殺された（嘉吉の乱）⁸⁾。

1. 10. 2 日明貿易・勘合貿易

一明の建国、李氏朝鮮、琉球、外交関係

室町時代の外交・国際関係は、1368年に朱元璋が明を建国し太祖洪武帝となることによって新しい局面に入った⁵⁾。すなわち、明帝は周辺諸国家に対し招撫入貢を促すための使者を送ったが、その一環として日本にも1369（正平24・応安2）年明使がきて、当時九州に勢力をもっていた南朝側の懷良親王に倭寇鎮圧と入貢を求めた⁵⁾。

このころ朝鮮半島から中国沿岸にかけての倭寇が活発だったため、明も高麗もその抑止を強く求めていた⁵⁾。1372（文中元・応安5）年明使がふたたび博多に来着、今度は幕府に国書を呈した⁵⁾。義満は使者を送ったが臣礼をとらなかったため拒否された⁵⁾。

その後今川了俊は倭寇が捕らえてきた民衆を高麗に返送するなど、独自の動きをとったため、義満は懷良・了俊の外交行動を抑え、外交権の独占を急がなくてはならなかつ

た⁵⁾。また明が皇帝に臣従し冊封を奉じた場合のみこれを受け付け、商人レベルの交易に対しては海禁政策をとっていることを知ったため、義満は国内統合が一段落した 1401（応永 8）年明帝に対し臣礼をとって使者を送った⁵⁾。1404（応永 11）年には明側からも永楽帝の勘合と「日本国王之印」が届けられ、以後いわゆる勘合貿易が行われるようになった⁵⁾。貿易品としては日本からは硫黄、刀剣、扇などを出し、明からは銭貨、生糸、薬種などを入れた⁵⁾。

また朝鮮半島でも、倭寇鎮圧にも力を発揮した李成桂が 1392 年に高麗を倒して李朝を開いたのに応じ、義満は使者を送って国交を開いたが、朝鮮は明とは違って、互いの間に上下関係はなかった⁵⁾。1419（応永 26）年、朝鮮は対馬を倭寇の根拠地とみて襲撃することがあったが、まもなく誤解に基づくことを認識し、以後、対馬の宗氏や大内、小早川など西国の守護・国人とも個別に通交関係をもった⁵⁾。

このころ琉球ではしだいに統合が進み、中山・南山・北山の三勢力が形成されていたが、1429（永享元）年中山の尚巴志が北山、南山を倒して全島の統一に成功し、「日域を以て唇齒、大明を以て輔車」という両属関係を保った⁵⁾。同時にその商人は広く南海方面にまで進出し、日明間の中継貿易に活躍した⁵⁾。

日本では対明勘合貿易は義持の代で一時中止、義教の代に復活したが、遣使の回数は概して少なかった⁵⁾。そのうえ 16 世紀後半にはその主導権が大内、細川などの大名の手に移っていったのに対し、琉球の場合は遣使回数もはるかに多かった⁵⁾。

一日明貿易

日明貿易とは、15 世紀から 17 世紀にかけて、日本と中国の明との間で行われた貿易⁹⁾である。勘合貿易と俗称されている勘合船による貿易と、倭寇などによって行われた密貿易とがある⁹⁾。足利義満が明との通交開始に成功したのは、15 世紀の初め博多商人肥富が明から帰って通交の利を義満に説いたのが原因であったという⁹⁾。

遣明船は 150 年間に 19 回ほど派遣されたが、1404（応永 11）年以後は明の礼部で発行した渡航証明書の勘合を所持することを義務づけられた⁹⁾。1 回の渡航船は 3～9 隻、3 年に 1 度くらいの割合で渡航した⁹⁾。乗員は 1 船 150～200 人くらいだが、内訳は外交使節としての官員と船の運行にあたる水夫とが合わせて 40～90 人くらいで、他は従商人であった⁹⁾。使船としての性格とともに貿易船の性格の強いものであったことを示している⁹⁾。遣明船の貿易には、進上品とそれに対する頒賜という形で行われる進貢貿易と、乗員が行う公貿易および私貿易の 3 種類があった⁹⁾。

進貢貿易では、日本国王（足利将軍）から馬、刀剣、硫黄、鎧、瑪瑙、硯、金屏風、扇、槍等を献上し、羅、紗、綵絹等の高級織物と白金、銅銭、工芸品などを頒賜された⁹⁾。銅銭は義満時代の頒賜品に多く、日本の貨幣経済に大きな影響があった⁹⁾。

しかし、応仁以後になると中国で得た銅銭を私貿易によって中国商品に替えて持ち帰ることが多くなり、16 世紀の初めには、日本から逆に中国銭を持ち出して中国商品を

購入して帰るようになった⁹⁾。

公貿易は、遣明船の搭載貨物について明の政府と取引するもので、刀剣、硫黄、銅、蘇木、扇、蒔絵漆器、屏風、硯等が輸出され、対貨として銅銭、絹、布等が支払われた⁹⁾。刀剣の数量は莫大で、1度に3万余が取引されたこともあった⁹⁾。

私貿易は、遣明船の乗員が所持した私的な貨物について行われる貿易で、寧波の牙行（特権商人）との間の牙行貿易、北京の貿易場である会同館の貿易、北京から寧波へ帰る途中の沿道で行われる貿易の3種があった⁹⁾。輸出品も輸入品もだいたい公貿易にならったものであったが、投機的な色彩が強く、したがってその利益も大きかった⁹⁾。

遣明船の派遣が途絶してからは、倭寇の密貿易によって多くの中国の物資が日本にもたらされた⁹⁾。倭寇の構成員は大部分が中国人で、日本人が占める割合は1〜3割程度であったというが、王直などは根拠地を日本の五島におき、大船団でしばしば中国大陸沿岸におもむいて密貿易を行った⁹⁾。

鄭若曾の「籌海図編」の「倭好」は日本人が欲した商品すなわち輸入品を示したものであるが、生糸、糸綿、布、綿紬、錦繡、紅線、水銀、針、鉄鍊、鉄鍋、磁器、古文銭、古名画、古名字、古書、薬材、氈毼、馬背氈、粉、小食蘿、漆器、醋をあげている⁹⁾。

これに対し、日本から輸出したのは銀である⁹⁾。当時東アジアの経済を支配していたのは銀であるが、戦国時代における日本国内の銀生産の急増がこれに対応したのである⁹⁾。ポルトガル船の日本来航の目的の一つは日本銀の獲得であった⁹⁾。

一 勘合貿易

1401（応永8）年5月、足利義満は、祖阿を正使、博多商人肥富を副使とする使節を明に派遣し、正式の通交を開くよう求めた¹⁰⁾。このとき義満は、明の皇帝に金1000両、馬10匹など多くの物を献じ、漂流者（実際は倭寇に捕らえられた人）を送還した¹⁰⁾。この使節は翌年明使を伴って帰国、明の国書をもたらしした¹⁰⁾。

ついで1403（応永10）年天竜寺の堅中圭密が正使となって入明、その翌1404（応永11）年の帰国に明使が同行し、初めて永楽帝の勘合と「日本国王之印」と刻した金印を義満に与えた¹⁰⁾。こうして1410（応永17）年まで毎年のように遣明船もしくは明船の渡航があり、明船もまた日本で貿易を行った¹⁰⁾。

その後4代将軍足利義持が明と断交したが、20年余の中断ののち、6代将軍義教の代に復活¹⁰⁾した。1432（永享4）年、明の帰化僧竜室道淵を正使とする5隻の遣明船が送られた¹⁰⁾。翌年その帰国に5隻の明船が同行、宣徳の勘合をもたらししたが、明船の来航はこれが最後となった¹⁰⁾。

遣明船の経営は幕府、山名、大内、細川、斯波などの守護大名、天竜寺、相国寺、大乘院などの寺院が行った¹⁰⁾。その利益が莫大なため、1434（永享6）年に6隻、1451（宝徳3）年に9隻と船数が増加、人数、貿易品ともに増加していったので、明はこれを制限する政策に転じ、以後は10年1貢、船数3、人数300と定めた¹⁰⁾。

表 1.10-1 勘合貿易遣明船（年表）¹¹⁾に加筆

出発年代（和暦／中国暦）	入明都年代	正使名	渡航船	備考
1401（応永 8／建文 3）	1401	祖阿	幕府船	
1403（応永 10／永楽 1）	1403	堅中圭密	幕府船	上京人員 300 人余.
1404（応永 11／永楽 2）	1404	明室梵亮	幕府船	
1405（応永 12／永楽 3）	1405	（源通賢）	幕府船	
1406（応永 13／永楽 4）	1407	堅中圭密	幕府船	上京人員 73 人.
1408（応永 15／永楽 6）	1408	堅中圭密	幕府船	上京人員 100 人余.
不明	1408		幕府船	
1408（応永 15）5 月 足利義満死去. → 4 代将軍, 義持親政を始める.				
不明	1410	堅中圭密	幕府船	
1428（応永 35）年正月義持後嗣指定を拒否したまま死去. → 1429（正長 2）年 6 代将軍足利義教将軍宣下を受ける				
1432（永享 4／宣徳 7）	1433	竜室道淵	幕府船・相国寺船・山名船・大名寺院十三家船・三十三間堂船	船数 5, 上京人員 220 人.
1434（永享 6／宣徳 9）	1435	忽中中誓	幕府船・相国寺船・大乘院船・山名船・三十三間堂船	船数 6
1451（宝徳 3／景泰 2）	1453	東洋允澎	天竜寺船・伊勢法楽舎船・九州探題船（聖福寺造営船）・大友船・大内船・大和多武峰船	船数 9, 渡航人員 1200 人, 上京人員 350 人余
1465（寛正 6／成化 1）	1468	天與清啓	幕府船・細川船・大内船	船数 3
1467（応仁元）-1477（文明 9） 応仁の乱				
1476（文明 8／成化 12）	1477	竺芳妙茂	幕府船・相国寺勝鬘院船	船数 3, 渡航人員 300 人
1483（文明 15／成化 19）	1484	子璞周瑋	幕府船・内裏船	船数 3, 上京人員, 300 人?
1493（明応 2／弘治 6）	1495	堯夫寿莫	大内船・細川船	船数 3, 上京人員, 300 人?
1506（永正 3／正徳 1）	1511	了庵桂悟	大内船・細川船	船数 3, 渡航人員 600 人, 上京人員 50 人（南京）
不明	1523?	宗設謙道	大内船 ※寧波の乱(1523)	船数 3, 渡航人員 300 人余
1520（永正 17／正徳 15）	1523	鸞岡瑞佐	細川船 ※寧波の乱(1523)	船数 1, 渡航人員 100 人余
1538（天文 7／嘉靖 17）	1540	湖心碩鼎	大内船	船数 3, 渡航人員 456 人, 上京人員 50 人
1547（天文 16／嘉靖 26）	1549	策彦周良	大内船	船数 4, 渡航人員 637 人, 上京人員 50 人

このため次の遣明船は幕府船、細川船、大内船の3隻となり、その後7回の遣明船派遣では、大内氏と細川氏がその経営を激しく争った¹⁰⁾。1523（大永3）年にはついに寧波で両者が衝突、焼討ち、殺傷事件を起こした（寧波の乱）¹⁰⁾。1547年（天文16）大内氏は4隻の遣明船を送ったが、これが最後の勘合船（遣明船）となった¹⁰⁾。

遣明船に積み込まれた貨物は寧波で陸揚げされ、国王進貢物、使臣自進物、付搭物の三つに分けられた¹⁰⁾。

国王進貢物は将軍から明皇帝への献上物で、馬、硫黄、瑪瑙、太刀、屏風、扇、鎗などからなる¹⁰⁾。これに対し皇帝からは絹織物、銀、銅銭などが頒賜されたので、実態は朝貢を名目とした貿易であったと評価できる（のち銅銭の頒賜はなくなる）¹⁰⁾。使臣の自進物も皇帝に献上され、ほぼ同様の扱いを受けた¹⁰⁾。

付搭物は将軍、船を経営する大名や寺院、船に搭乗した客商や従商が積み込んだ商品であるが、その大部分は客商、従商の商品で、それらは公貿易と私貿易の二つの方法で取引された¹⁰⁾。

公貿易は北京で明政府が価格を決定し、明政府との間で取引を行うもので、日本からは硫黄、蘇木、銅、刀剣類、扇などが輸出され、明からは絹織物、生糸、銅銭、陶磁器、書籍、薬材、砂糖などが輸入された¹⁰⁾。この際、日本側商品の価格は鈔（不換紙幣）で決定され、そのうえで銅銭と絹布が支給されることになっていた¹⁰⁾。しかし明の貿易縮小策や鈔価の著しい下落のため、日本側はこの取引に不満が強く、貨物の一部を持ち帰ったこともある¹⁰⁾。このため公貿易の割合はしだいに低下し、明側の買入れも刀剣類と硫黄に限られるようになり、逆に私貿易の比率が増した¹⁰⁾。

私貿易は寧波、北京会同館、および寧波―北京間の沿道で、商人との間で行われた¹⁰⁾。日本からの輸出品、明からの輸入品も公貿易とほぼ同様のものであった¹⁰⁾。

寧波での私貿易は牙行（明政府の許可を得た商人）に商品の販売、購入を委託して行われ、また寧波―北京間の道中で、各地の価格差を利用した売買も行われた¹⁰⁾。公貿易で支給された銅銭は初期にはそのまま持ち帰っていたが、のちには私貿易によってそれを生糸、絹などにかえるようになり、さらには日本から銅銭を持って行って商品を購入するようになった¹⁰⁾。

1432（永享4）年、1453（享徳2）年の二度入明した貿易商人の楠葉西忍は、生糸が最も利益の多い輸入商品で、明での購入価格の20倍で売れたこと、銅を持って行き、明州・雲州糸に替えると4,5倍に売れたこと等の体験談を大乘院尋尊に語っている¹⁰⁾。

また日本からの輸出品である蘇木や胡椒は南海の産物で、おもに琉球船で日本に輸入され、再輸出されたものであった¹⁰⁾。

遣明船の経営者は自己の付搭物の貿易による利益のほかに、商人が輸入した貿易品の国内価格の10分の1の抽分銭をとる権利をもっていた¹⁰⁾。

1476（文明8）年、1483年（文明15）の場合、堺商人は抽分銭の納入額を出航前にあらかじめ1隻につき3000～4000貫文で請け負う方法をとっている¹⁰⁾。これは貿易の利

益が莫大であったことを示すもので、遣明船1隻の純利益は1万貫から2万貫ほどと推定されている¹⁰⁾。

応仁の乱(1467(応仁元)年から1477(文明9)年)以後には、だいたい10年に1度渡航、船数3、人員300に縮小された¹⁰⁾。勘合船は、名義上は足利將軍の派遣すべきものであったが、実際の経営者は有力守護大名や大寺院で、博多や堺の商人がそれらと結びついて活躍した¹⁰⁾。表面上は幕府、寺社、大名の船であっても、堺、博多商人の請負によるものが多くなり、幕府などは名義料を徴収するにすぎなくなった¹⁰⁾。応仁の乱後、大内氏と細川氏が貿易の利権を争ったが、やがて大内氏が独占した¹⁰⁾。大内氏は天文年間(1532～55)に滅亡するまで貿易の利益を収め、巨富を蓄積した¹⁰⁾。

1. 10. 3 応仁の乱、室町幕府の税制・経済、室町時代の宗教・文化

○足利義勝、足利義政

1441(嘉吉元)年6月の嘉吉の乱後、義教の子義勝が宿老に擁立されて8歳で家督を継いだ¹²⁾。義勝が幼少であったので管領細川持之が輔佐した¹²⁾。同年9月赤松満祐を播磨で討ったが、この幕府内部の分裂に乗じて京都を中心とした徳政一揆が起こり、閏9月に徳政令を發布して危機を乗り切ろうとした¹²⁾。義勝は翌1442(嘉吉2)年元服して征夷大將軍の宣下を受けたが、1443(嘉吉3)年7月21日病死した¹²⁾。

義勝死後、同母弟の三春丸がわずか8歳の幼少で細川持賢、畠山持国、山名持豊ら宿老に擁立されて家督を継ぐ¹³⁾。1446(文安3)年後花園天皇から義成と命名¹³⁾され、1449(宝徳元)年15歳で元服¹³⁾、征夷大將軍となる¹³⁾。1453年(享徳2)義政と改名¹³⁾し、1460(寛正1)年左大臣、1464(寛正5)年准三宮となる¹³⁾。

義政が家督を相続した直後は、幕府の主導権は畠山持国、細川勝元、山名持豊らの宿老が握り、嘉吉の乱(1441)以来の危機的な状況を乗り切ろうとする宿老中心の政治体制であった¹³⁾。義政時代の初期には奉公衆の充実を図るため將軍直轄軍を整備するなど、將軍権力の強化に意を注いだ¹³⁾。しかし、この期における政治的、社会的矛盾の激化は幕府支配体制の根本を揺さぶり始めていた¹³⁾。中央政界では幕府権力を支える守護家内部に内紛が噴出し、家督をめぐる抗争が続発し始める¹³⁾。この内紛は管領家である畠山、斯波の両家にも及び、重大な情勢となっていく¹³⁾。そもそもこのような争いは領国内の国人が領国内における自己の主導権を確立しようとして起こすことが多く、地方においても国人相互の対立があらわになり、自立的動きをみせ始めてきていることを示している¹³⁾。また各地に民衆が徳政を求めて蜂起し、徳政一揆が頻発していた¹³⁾。徳政一揆とは、室町から戦国時代にかけて、徳政の發布を求めて蜂起した土一揆¹⁴⁾である。特に応仁・文明の乱前後に高揚¹⁴⁾した。畿内およびその周辺地帯に頻発し、酒屋・土倉・寺院を襲っては徳政を要求¹⁴⁾した。一揆の主体は地侍・名主百姓で、ときに馬借も加わった¹⁴⁾。近江・畿内一帯に及んだ1428(正長元)年の正長の土一揆をはじめ、1441(嘉吉元)年の嘉吉の土一揆、1454(享徳3)年、1457(長祿元)年の一揆も大規模

で、徳政を勝ち取った¹⁴⁾。

義政は、征夷大將軍就任のとき判始の儀式を行ったが、実際に御判御教書を発給するのは1455（康正元）年頃からである¹³⁾。執政当初は父義教の大名抑圧策の反動で畠山、斯波ら有力守護家に家督紛争が頻発し、関東も上杉氏と公方の反目で戦乱状態となり、幕府の統制は全く緩んでいた¹³⁾。政務の主導権は生母重子、乳母今参局らに握られ、1455（康正元）年に日野富子と結婚したのは富子の兄勝光や、蔭涼軒（季瓊）真藁、政所執事伊勢貞親らが幕政に容喙、義政は政務に意欲を失って社寺巡礼や別荘の造営に憂き身をやつす始末であった¹³⁾。

1459（長祿3）年以後、寛正の大飢饉とよばれる飢饉が起こり、疫病と飢餓が蔓延していた¹³⁾。中央、地方の区別なく政治的社会的混乱が深まりつつあるとき、義政はこのような状況をも顧みず、猿樂、遊山、酒宴などの遊興に身をゆだね、そのためにあらゆる機会をつかんで収奪を強行した¹³⁾。1461（寛正2）年には大飢饉の最中に梅津山荘の建築を行い、後花園天皇から詩をもって諷諫されている¹³⁾。

1457（長祿元）年ころよりは伊勢氏の支持によって將軍勢力が強まり、伊勢貞親主導による守護大名抑制政策が行われたが、その過程で畠山・斯波家内の相続争いが利用され、応仁・文明の乱の一因となった¹³⁾。義政は政治力がなく、頼みの伊勢貞親が1466（文正元）年大名らの反発により失脚すると、政治収拾は困難となり応仁の乱に突入した¹³⁾。これより先1464（寛正5）年義政は僧籍にあった弟義尋を還俗させて義視と改名、継嗣に定めたが、翌年室日野富子に実子義尚が生まれたことから継嗣争いが起こったことと、幕閣における細川勝元と山名持豊（宗全）の対立とが、1467年（応仁1）年の大乱を決定的にした¹³⁾。山名持豊は義視をむかえて、義政・勝元と対抗した¹³⁾。京都での戦乱は1477（文明9）年一応収まったが、戦乱はしだいに地方に広がり全国的規模となった¹³⁾。

この間義政は1473（文明5）年末には嫡子義尚に將軍を譲るが、実権は理財の才に優れた妻富子が握り、夫婦の仲も冷え切った¹³⁾。1483（文明15）年京都東山に山荘を営んでここに移り住み、東山殿と称された¹³⁾。1485（文明17）年月翁周鏡を戒師として剃髪、1489（延徳1）年山荘内にいわゆる銀閣を建てた¹³⁾。同年近江に六角氏征伐のため出陣していた子義尚に先立たれ、政務をみることとなったが、後を追うように翌年1月7日没した¹³⁾。

○応仁の乱の遠因とその後の影響

義満以来、守護大名の統制手段として、大名家の惣領決定に將軍が介入することが行われだし、とくに義教・義政の介入は度々で、それが大名家の内訌を招いた⁵⁾。畠山持国の後継をめぐる養子政長と実子義就の争いも、義政の介入によってかえって激化した⁵⁾。また、細川勝元が山名持豊を牽制するために赤松政則に赤松家を再興させようと考え、義政がそれを支持したため、細川対山名の対立も激化した⁵⁾。これに將軍家の継嗣

として義政が弟義視を選んだあと、夫人日野富子が義尚を生んだことから、曲折はあったものの、結局、義政・義尚・細川勝元・畠山政長、対、義視・山名持豊・畠山義就という形で東西両軍に分かれ、さらに斯波家なども分裂し、多数の守護大名・国人がこれに加わる応仁・文明の乱となった⁵⁾。

1467（応仁1）年から1477（文明9）年に至る応仁の乱は、京都を焼け野原に化すとともに、地方では守護代・国人が残存する荘園を最終的に侵食し、また下剋上によって守護を倒し、戦国大名への道を歩みだした⁵⁾。大乱終結後数年を経ず、義政は東山山荘の造営を開始し、ここに移った⁵⁾。日野富子は夫との不和から別に住んで京都七口関からの関銭徴収を強化し、米投機、金銭貸付などに力を入れた⁵⁾。この間、なお戦いを続ける畠山義就・政長に対し、義政・富子が適切な対応を欠いたことから、1485年には山城国一揆が蜂起して両軍を撤退させ、以後南山城地方に10年余にわたる国一揆の自治が実現した⁵⁾。この事件は応仁・文明の乱によって失墜した幕府の権威をいっそう傷つけたもので、この直後から、加賀の一向一揆蜂起による守護富樫政親の自殺、東方における伊勢長氏（北条早雲）の伊豆韮山奪取などの戦国期入りを象徴する事件が続く⁵⁾。

○室町幕府の財政

室町幕府には幕府料所あるいは単に御料所とよばれる直轄領があり、将軍の直臣たちが管理していた⁵⁾。ただしその実態は荘園と異ならず、所領の数はともかく、収入額を過大視することはできない⁵⁾。むしろ、京都市中の商工業者を支配下に置き、これに財源を求めたのが室町幕府の大きな特徴である⁵⁾。とくに酒屋、土倉からは納銭方を通じて多額の役銭が徴収され、その額は14世紀末の段階で年額6000貫といわれている⁵⁾。比較的手近にあって確実に徴収できる酒屋・土倉役は将軍の日常生活をまかなう有力な財源であった⁵⁾。

酒屋・土倉からの徴税権奪取は義満が実現している。南北朝合体は実質的には南朝の消滅であり、これにより中央・地方における武士の分裂抗争も名分的拠り所を失い、室町幕府の安定が進展した⁵⁾。地方では守護による国人の被官化が進み、将軍を頂点とする封建的主従制が貫徹していったことにより、統合が強まった⁵⁾。3代将軍義満は1394（応永元）年将軍職を9歳の子の義持に譲って太政大臣となり、翌1395（応永2）年太政大臣も辞して出家した⁵⁾。これは、武家の頂点に立つと共に、太政大臣として公家の最高の地位を占め、さらに法皇に準ずる国政全般の頂点的立場に立とうとする意図に出たものであった⁵⁾。したがって、義満は出家してもなお政権を掌握し続け、1399（応永6）年には、非一族守護の中で大きな力をもつ大内義弘を挑発して討つと共に、比叡山が京都市中の酒屋土倉に対して保持していた倉役賦課権を没収する等して、寺社勢力にも威圧を加え、武家、公家、寺社諸支配層に君臨する権力を集中した⁵⁾。

また、恒常的なものではないが、15世紀以降の日明貿易による利益も大きな比重を占めていたものと考えられる⁵⁾。御所を造営したり、大規模な仏神事を修したりする際

には、諸国や特定の国に段銭や国役が賦課されたり、守護出銭と称して守護に対して頭割りで賦課がなされることがあった⁵⁾。予算制度のない室町幕府にあっては、このような臨時的な収入も忘れてはならない⁵⁾。

○室町時代の経済と社会

室町時代は経済的には発展の顕著な時期である⁵⁾。農業では、用排水技術・肥培技術の進歩と品種の改良・多様化等により耕地の安定と集約的利用が進んだ⁵⁾。土地生産力の上昇の半面、荘園領主権の弱化から、農民層の手元に残される剰余部分を加地子として売買することが行われ、加地子収取権を集積する加地子名主層が成長した⁵⁾。加地子名主層は「百姓」身分に属する有力農民で、惣とよぶ村落共同体結合の指導層となり、惣村の地域連合を発展させ、自治的権利を強めると共に、しばしば荘園領主に対する年貢・夫役の減免を求める闘争や、幕府に対し徳政令を求める土一揆の先頭に立った⁵⁾。

そうした生産力の向上と農民闘争によって、農民の手によって販売される農産物や農産加工品の量が増し、とくに苧麻、荏胡麻等をはじめとする農産物・農産加工品の商品化が進んだ⁵⁾。またそれに伴い定期市が各地に発生し、その主要なものは町場化した⁵⁾。敦賀、小浜、大津、坂本、淀、尼崎、兵庫、堺など京都・奈良の外港的性格をもつ港津、また博多、尾道、安濃津、大湊、品川、三国湊、蒲原津なども、列島沿岸航路の発展により都市的繁栄を遂げた⁵⁾。農村内部における社会分業は、鍛冶、紺染め、番匠等を主とするにとどまるが、製塩、窯業、製紙、製材など地域の条件に即した特産物生産は各地で進んだ⁵⁾。

中央都市京都は、伝統的な首都という性格に加え、幕府の開設、守護在京制、五山禅院の相次ぐ創建等の事情から人口増加が著しく、全国各地から送り込まれてくる物産のほか、織物、工芸品、焼物、刀剣武具等をはじめとする高級商品の生産が盛んで、多くの職人を分化発展させた⁵⁾。また洛中洛外の酒屋(醸造業者)は少なくとも300を超え、多くは土倉という保管業・金融業を兼営した⁵⁾。土倉は第三者からも合銭とよぶ投資資金を多額に預ったが、庶民よりもむしろ年貢米・荘園支配権を担保としてとれる公家・武家に貸し付けた⁵⁾。室町時代の経済面における特徴の一つは、貨幣流通が急激に発展し、地方の年貢物も和市とよぶ取引相場によって現地で換算され、銭で納められるようになったこと、中央支配層の経済が貨幣経済化することによって金融関係、為替取引など信用経済が発展したことがあげられる⁵⁾。

この間、室町時代を通じて、荘園制の解体がますます進んだ⁵⁾。南北朝時代以来、本所領とよばれる武家側地頭設置の荘園では半済が行われ分割が進んだ⁵⁾。それを免れた寺社本所一円地でも請負代官制の一般化によって、荘園領主が直接支配力を現地に及ぼすことは不可能になり、一定の年貢を受け取るだけのケースが多くなった⁵⁾。なお、本所領とは、中世、特に室町幕府法で使用された用語で、公家領(天皇家領を含む)の荘園・国衙領のことである¹⁹⁾。公領は多く守護領に転化した⁵⁾。しかも応仁・文明の乱に

よって、残存していた荘園の大半も地方領主の手によって侵食され、中央領主の権利は不知行状態に陥った⁵⁾。これにかわって守護領国制と国人の領域支配が進行し、土地の領有形態は荘園制的「職」の領有から一円的な領域支配へと転換していった⁵⁾。

○半済

年貢公事などに対して半納の意味をもつ半済は鎌倉時代からみられるが、興味ある事実は、15世紀から16世紀初頭にかけて山城国や和泉国の百姓層による年貢減免(半納)動向を意味する半済である¹⁵⁾。山城の場合、土一揆を自己の軍事力として組織しようとした香西元長が、土民への半済給付や京の下京への地子銭免除を行ったが、これらを背景に百姓層は年貢の半済(半納)を要求していった¹⁵⁾。和泉国日根荘の百姓も、守護、荘園領主九条家に対し半済(半納)を要求している¹⁵⁾。

南北朝～室町時代には幕府の土地政策の一つとして制度化された半済が現れる¹⁵⁾。それは南北朝内乱期に、国衙領、本所領の年貢半分を軍勢の兵糧料所として武士に与えたことから発生した制度で、内乱終了後も継承され恒常化した¹⁵⁾。観応の擾乱が終わった1352(正平7/文和元)年7月、足利尊氏が内乱の激しかった近江・美濃・尾張の本所領年貢について1年に限り実施したのが制度的な初めとなる¹⁵⁾。本所領年貢の半分为兵糧料所として割分し、1年間を限って軍勢に預け置くよう守護に命じた¹⁵⁾。翌8月には伊勢、志摩、伊賀、和泉、河内の5ヵ国を加えて対象地域を8ヵ国に拡大した¹⁵⁾。

この兵糧料所の設定が制度的な半済の出発点だった¹⁵⁾。8月令の特徴は、既に下地の折半が現実の問題となっていたこと、寺社一円領が本所領と区別されていたこと等である¹⁵⁾。次いで出された1355(正平10/文和4)年8月の半済令は、戦乱諸国での半済実施と所務の本所進止、および静謐国における半済の停止を内容とするものだった¹⁵⁾。1357(正平12/延文2)年9月にも事実上の半済令が出された¹⁵⁾。この延文半済令の特徴は、戦功の恩賞や軍勢の懇望等から臨時に宛て行っていた寺社本所領の下地半分为雑掌に返付し、残り半分は後の判断に任せること、および寺社一円領と禁裏仙洞勅役料所の全面返付等である¹⁵⁾。内乱期における幕府の荘園(土地)政策の根幹であった半済は、幕府、本所勢力、在地領主層の拮抗の場の上に成立したものであり、観応以来の政策の振幅も、その重大さゆえのことであった¹⁵⁾。

1368(正平23/応安元)年に至り幕府の半済政策は確立する¹⁵⁾。この応安半済令は、まず半済除外地として禁裏仙洞御料所、寺社一円仏神領、殿下渡領(勸学院領以下約150ヵ所の氏長者渡荘)、および足利義詮以来の本所一円知行地、月卿雲客(公卿と殿上人)知行下の地頭職等を掲げ、部分的に荘園制を保障する¹⁵⁾。そして上記以外の諸国本所領を雑掌と半済給人で均分した¹⁵⁾。対象国が限定されず全国的に拡大されたこと、戦乱という条件が撤廃されたこと、土地そのものの均分だったことなどが注目される¹⁵⁾。かくて本所領の半分は、法的にも幕府-守護-在地領主層の進止下に組み込まれた¹⁵⁾。

室町幕府は半済の期間・範囲の限定に努めたが、諸国の守護は半済を強行、本所領そ

のものの支配を推進した¹⁵⁾。この半済の制は本所領に打撃を与え、守護大名の分国の成立を推進した¹⁵⁾。

○段銭

段銭とは、中世、朝廷や幕府が臨時に賦課した税の一種¹⁶⁾である。田の面積一段別に銭何文宛と算定したのでこの名がある¹⁶⁾。即位、讓位、大嘗会などの朝廷公事、伊勢神宮や興福寺などの大寺社修造、将軍・幕府関係など諸種の国家的行事の費用調達のために諸国あるいは1～数ヵ国に課した公事で、田地1段別何文（升）というように賦課した¹⁶⁾。荘園も公領も平均に課せられたので一国平均役ともいう¹⁶⁾。

賦課主体は、南北朝前期までは王朝権力であったが、1370年代以降は賦課も免除もともに室町幕府の握るところとなった¹⁶⁾。賦課基準となったのは、鎌倉時代王朝権力と幕府によって作成された大田文記載回数だったと思われる¹⁶⁾。この事実は室町幕府下でいっそう明白となり、「国の大田文を召し出し、寺社本所領並びに地頭御家人等分領、悉く公田段別何十文を宛て」という方式が定着する¹⁶⁾。

大田文公田を対象に諸種の段銭が賦課され、幕府による国家的行事が遂行された¹⁶⁾。段銭奉行が置かれ制度的にも整えられた¹⁶⁾。暦応年間（1338-42）から1518年（永正15）に至る間に二百数度の幕府関係段銭の事例が検証されているが、15世紀後半以降の内容的特徴は、幕府御所の修造、将軍自身の公事（宣下、拝賀、仏事など）のためのものの頻度が増加したことである¹⁶⁾。

幕府段銭の徴収権を与えられていた守護は、15世紀中葉に至るまでに守護独自の段銭を成立させ、原則として領域全体に賦課していく¹⁶⁾。これは国方段銭、要脚段銭などと称され、恒常化していった¹⁶⁾。個々の領主（所領）側からみれば、一定額の段銭を守護に納入することとなったのである¹⁶⁾。惣国への段銭賦課を形成した守護は、所領の段銭部分を知行制的に編成し、免除を給付と同質化させ、守護被官関係の形成やその補強の有力なテコとしていった¹⁶⁾。賦課基準は幕府段銭と同じく大田文公田数であった¹⁶⁾。春秋2季の段銭などと称し年2回の賦課もみられた¹⁶⁾。

一方守護段銭などを負担あるいは給付された個々の領主層、および当初より幕府段銭の納入を守護の介在なしに直接納入する京済の特権を得ていた将軍近習、奉公衆などの御家人層も、自己の所領に領主段銭を形成していった¹⁶⁾。守護段銭の恒常化と個々の領主による領主段銭の恒常的賦課は同時進行であったろう¹⁶⁾。これを所領内の百姓層からみれば、年貢公事のほかに段銭が加徴されたのである¹⁶⁾。守護的支配秩序の中で一定の位置を保障された本所領においても荘園領主による段銭賦課が行われており、事態に変りはなかった¹⁶⁾。なお大和国にみられる興福寺の段銭は、守護段銭と考えてよい¹⁶⁾。

このように臨時公事から出発した段銭は、中世の国家、領主諸階層によって在地への恒常的加徴となり、剰余のある部分を領主的収取に組み入れていく媒介となったのである¹⁶⁾。戦国大名はこうした段銭課徴を継承改変させて、自己の収取体系を確立させてい

く¹⁶⁾。すなわち機械的な段別賦課ではなく、田地の基準貫高（1反500目が多い）を設定しつつ田品別の貫高を確定し、その貫高との一定の比率にたって段銭を賦課し、重要な財政的基盤としていったのである¹⁶⁾。

○室町幕府の終末

1467（応仁元）年に始まり、前後11年に及ぶいわゆる応仁の乱以降幕府の滅亡に至る時期を、幕府の権威が失われ、全国に戦乱が続いたとの意味で戦国時代とよんでいる⁵⁾。しかし義政から9代義尚の時期にはまだ将軍の守護に対する影響力は残っていた⁵⁾。有名な東山の山荘（後の慈照寺、銀閣はその一部）が造営されたのはこの時期で、多くの守護が将軍の命によって造営費用を助成している⁵⁾。

幕府の意義を将軍と守護との関係においてみるならば、むしろ10代義材（後の義尹・義植）が細川政元に追われ、政元に擁立された義高（後の義澄）が将軍となった1494（明応3）年頃を画期とすべきであるとの意見も出されている⁵⁾。京都を追われた義尹は、西日本において細川氏と勢力を二分していた大内氏を頼り、1508（永正5）年には再度将軍職に復する⁵⁾。しかし1521（大永元）年細川高国の専横を怒って出奔し、その後には幼少の義晴が12代将軍となった⁵⁾。これ以降13代義輝、14代義栄の時期にかけて、将軍職とは名ばかりで、実権は細川氏、ついで細川氏の家臣三好氏・松永氏らに握られていたと説かれることが多いが、越前の朝倉氏、越後の上杉氏など将軍の権威を慕ってよしみを通ずる大名もいたことは、室町幕府のなんたるかを考えるうえで興味深いことである⁵⁾。

ことに15代義昭は、初め織田信長に擁されて将軍職につくが、信長と不和になると、毛利・朝倉・武田・石山本願寺など反織田勢力の結集に努め、衰えたりとはいえその政治力は無視することはできなかった⁵⁾。しかし1573（天正元）年義昭は京都を追われ、室町幕府は名実ともに滅びた⁵⁾。

○室町時代の宗教・文化

宗教の面では、伝統的に公家と結び付いてきた南都北嶺勢力を抑えるという意味もあって、南禅・天龍・建仁・東福・万寿寺の京都五山（相国寺の創建により南禅寺は五山の上とされた）に幕府の特別な保護が加えられ、多くの所領が寄進された⁵⁾。五山禅僧は詩文・漢籍に通じ（五山文学）、幕府と結び付いて政治・外交にも関与する一方、幕府も僧録制度を設けて、禅院・禅僧の管轄を強化した⁵⁾。春屋妙葩が初めて僧録（五山・十刹以下の禅宗寺院の管理と、その人事をつかさどった僧職）に任じ、以後代々相国寺の鹿苑院住持がこれを兼ねる、習わしとなった⁵⁾。

五山禅院が力をもつようになると、真言、天台宗などの地方寺院も禅宗に改宗するものが続き、禅宗は地方に大きく発展した⁵⁾。他方、民衆の間では時宗が広い支持を集めたが、室町中期に蓮如が出て、近江、越前などで布教したことから、応仁以降になる

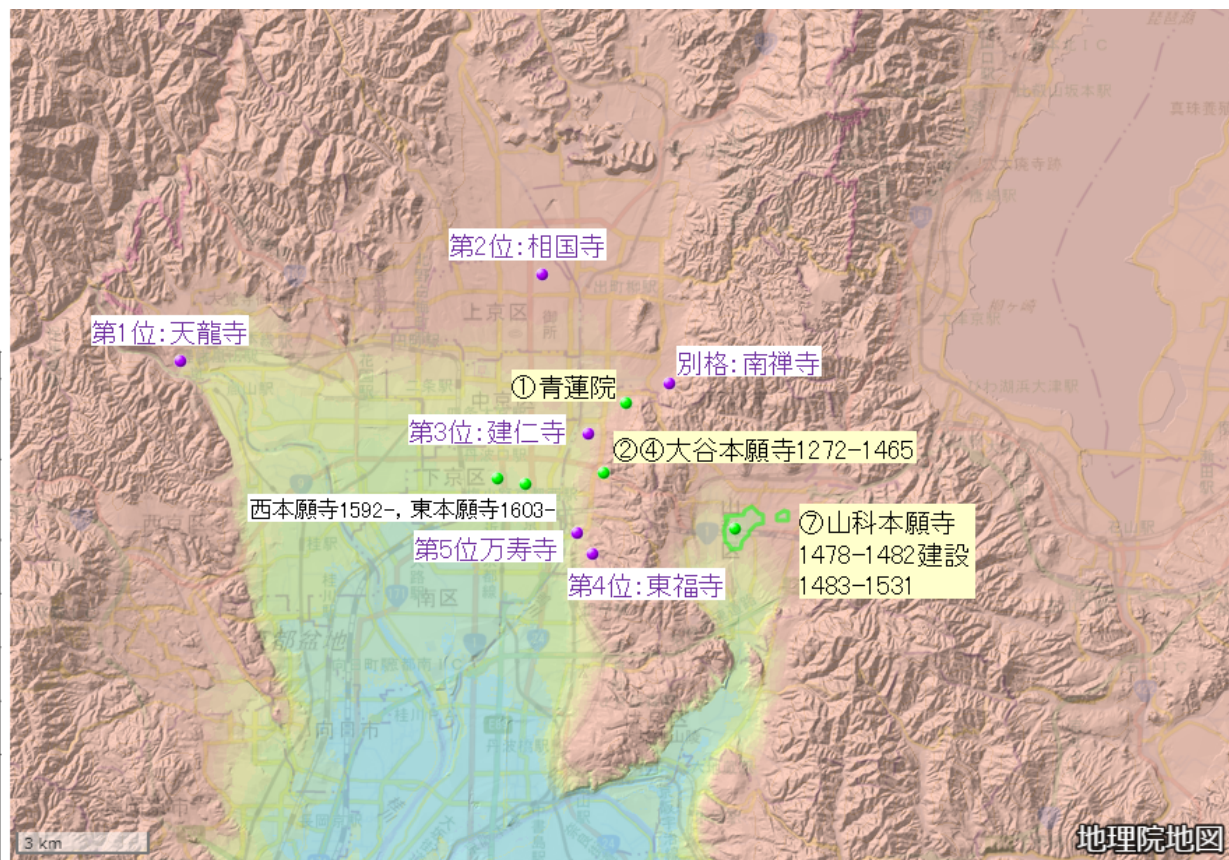
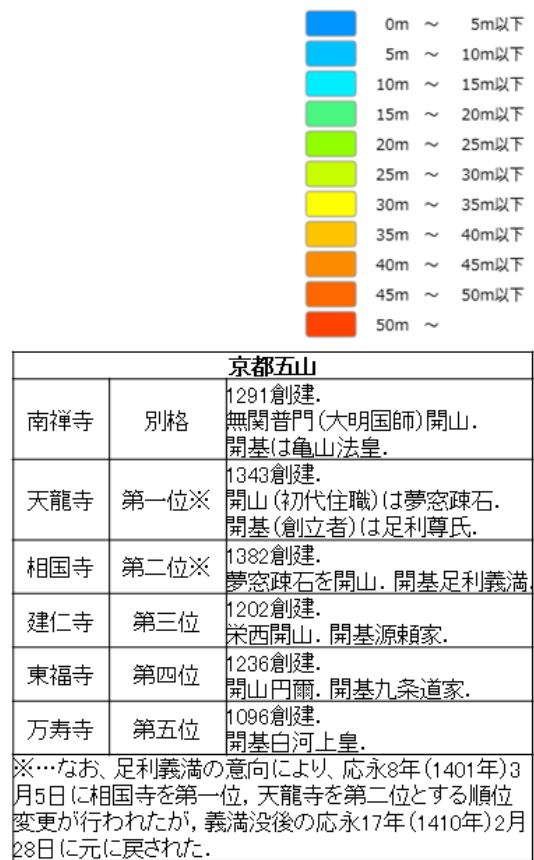


図 1.10-1 京都五山と本願寺関係



図 1.10-2 蓮如上人の動向

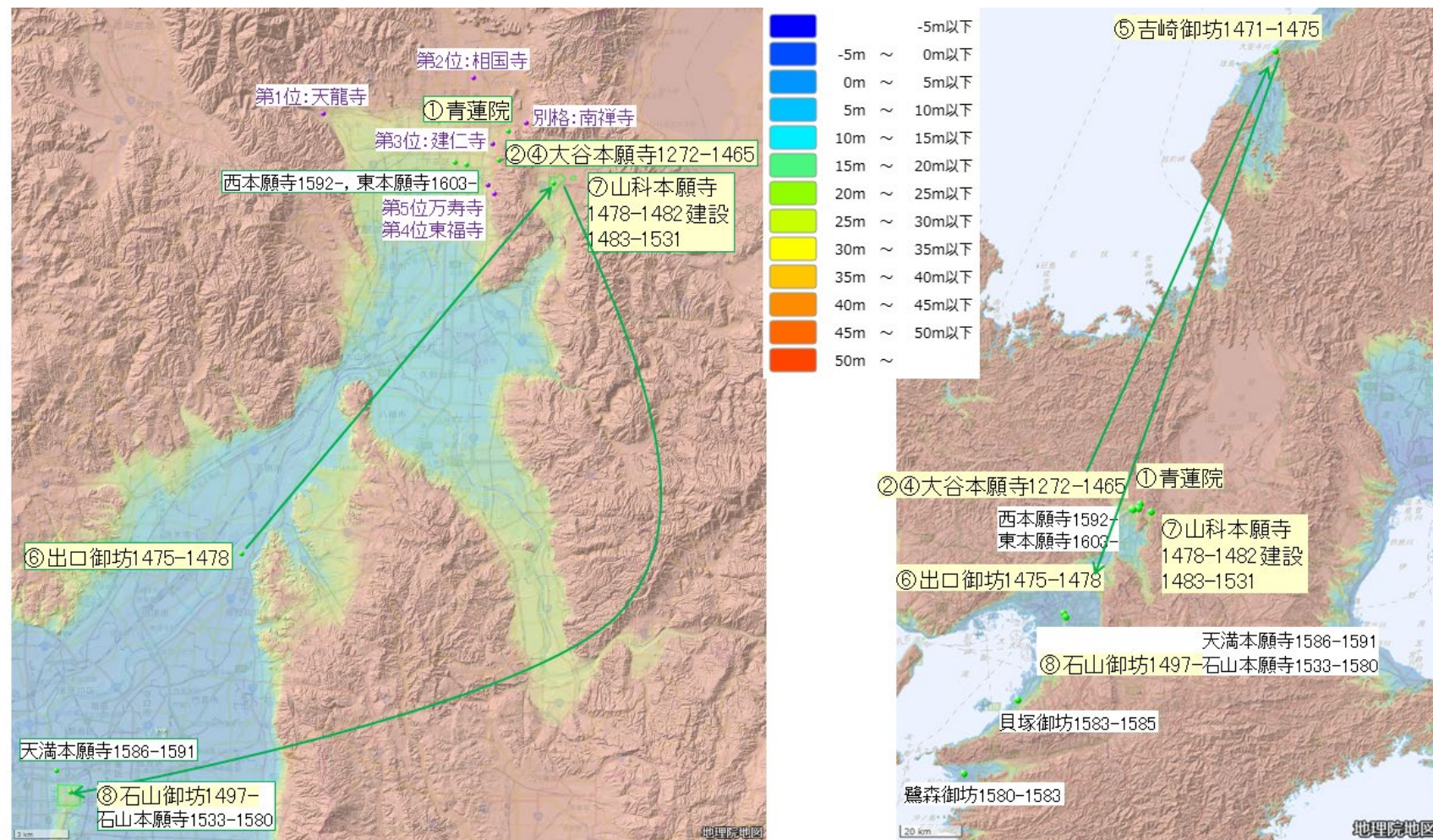


図 1.10-3 蓮如上人の動向 近畿，大阪・京都

表 1.10-2 本願寺の変遷（東西分裂まで）¹⁸⁾より作成

1272 文永 9	覚信尼（親鸞の末娘）、親鸞墓所を「大谷」から「吉水の北の辺」に改葬し「大谷廟堂」建立
1321 元亨元	第3世・覚如が大谷廟堂を寺院化し、「本願寺」成立。大谷本願寺
1457 長祿元	蓮如が本願寺を継承し第8世となる。
1465 寛正 6	大谷本願寺、延暦寺西塔の衆徒によって破却される（寛正の法難）
1471 文明 3	蓮如、京都から近江に難をさけ、越前吉崎御坊に移り布教。
1475 文明 7	8月21日、蓮如吉崎を退去。河内出口御坊（現在の光善寺）を拠点に積極的な布教を開始。
1483 文明 15	8月22日、「本願寺」（「山科本願寺」）落成。1479文明11年1月造営に着手。
1489 延徳元	蓮如の退隠に伴い、実如が本願寺を継承し第9世となる
1497 明応 6	蓮如、隠居所として大坂石山に「大坂御坊」（後の大坂本願寺）を建立。
1516 永正 13	本願寺、後柏原天皇の勅願寺となる。
1525 大永 5	実如が示寂し、証如が本願寺第10世を継ぐ
1532 天文元	8月24日山科本願寺焼失（法華一揆）。寺基を大坂石山の「大坂御坊」へ移し、「大坂本願寺」（「石山本願寺」）と号する。
1554 天文 23	証如が示寂し、顕如が第11世を継ぐ
1559 永祿 2	顕如、門跡に列せられる
1570 元亀元	織田信長が、浄土真宗門徒の本拠地・西国への要衝環濠城塞都市石山から退去を命じたことを起因に、約10年にわたる「石山合戦」が始まる。
1580 天正 8	3月、正親町天皇の勅使・近衛前久の仲介による講和を受け入れ、教如（顕如長男）は徹底抗戦を主張し、顕如から義絶されるが、なお「石山本願寺」に籠城。 た顕如は、信長との和議に応じる。顕如ら穏健派は石山本願寺から紀伊鷺森（鷺森本願寺）へ退隠。8月2日、近衛前久の退去説得に応じた教如は、「石山本願寺」を信長に明け渡す。その直後に「石山本願寺」に火が放たれ灰燼と化す。強硬姿勢を緩めぬ教如は、その後も強硬派への支持を募る。
1583 天正 11	宗祖真影を奉じて、和泉の貝塚にある石山本願寺の末寺であった寺（後の願泉寺）に移る。（「貝塚本願寺」）
1585 天正 13	5月豊臣秀吉から大坂天満に寺地寄進を得る。8月阿弥陀堂建てる。
1586 天正 14	8月十間四面の御影堂が落成（大坂天満本願寺）
1591 天正 19	豊臣秀吉から京都七条堀川へ再び寺地の寄進を受け、8月、御影堂を天満から移築。
1592 文祿元	7月、阿弥陀堂を新築し「本願寺」が完成。11月24日、顕如の入滅にともない、教如が本願寺を継承。
	穏健派と顕如の室如春尼（教如の実母）は、顕如の「留守職譲状」を秀吉に示し、遺言通り三男・准如への継職を直訴。教如は、石山合戦で籠城した元強硬派を側近に置き、顕如と共に鷺森に退去した元穏健派は重用しなかったため、教団内の対立に発展。
1593 文祿 2	閏9月12日、豊臣秀吉が教如を大坂に呼び、10年後に弟の准如に本願寺宗主を譲る旨の命を下す。教如はこの命に従おうとしたが、周辺の強硬派坊官たちが、秀吉に異義を申し立て、譲り状の真贋を言い立てたため秀吉の怒りを買い、「今すぐ退隠せよ」との命が下される。 閏9月16日、准如が本願寺宗主を継承し、第12世となる事が決定。
	教如は本願寺北東の一角に退隠、「裏方」と称せられる。引退後も教如は精力的に布教活動に勤しみ、なお本願寺を名乗り文書発給や新しい末寺を創建。後の本願寺分立の芽は着々と育っていた。
1602 慶長 7	教如、「本願寺」のすぐ東の烏丸六条に四町四方の寺領が寄進され、隠居所から堂舎を移し、本拠とする。
1603 慶長 8	上野廐橋（群馬県前橋市）の妙安寺より「親鸞上人木像」を迎え、本願寺（東本願寺）を開く。
	七条堀川本願寺は、「西本願寺」と通称されるようになる。七条堀川の本願寺の東にあるため、烏丸六条本願寺は後に「東本願寺」と通称されるようになる。

と、浄土真宗（一向宗）が北陸・東海地方などを中心に民衆の間に広まり、その門徒はしばしば一向一揆を起こすようになった⁵⁾。

文化の面では、建築、庭園、水墨画などに禅風が強い影響をもたらした⁵⁾。これは北山・東山文化の諸面にうかがうことができる⁵⁾。龍安寺の庭園に代表される枯山水は、簡素で象徴性に富み、その代表的なものの一つである⁵⁾。しかし、室町時代の文化のもう一つの重要な特徴は、鎌倉時代までと違って文化が宗教を離れ、生活文化的傾向を強めてきたことである⁵⁾。この時代到大流行した田楽や猿楽の能は、もともと神事として演ぜられたものであるが、とくに猿楽は、観阿弥・世阿弥以降しだいに独立的な演劇として発達した⁵⁾。また猿楽の能の合間に演ぜられる狂言は機知と風刺に富んだ娯楽劇となった⁵⁾。卑賤の芸能といわれる各種の下級芸能も、発生的には宗教と無縁でないが、みな娯楽性を強めるようになった⁵⁾。また書院造の建築様式の発達と不可分の立花、茶はいっそう端的な生活文化というべきものである⁵⁾。さらにこの時代には和風料理の基本型が確立し、衣服の面では従来は下着にほかならなかった小袖が表着となり、女性の服装は総じて軽快で生活しやすい型を追求するようになった⁵⁾。

これと並んで室町文化のもう一つの特徴というべきものは、文化の創造・享受の仕方の集団性ということである⁵⁾。南北朝時代以来盛んだった連歌は多数の人々が寄合の席で自由に参加できるもので、二条河原落書に「在々所々ノ歌連歌点者ニナラヌ人ソナキ」といわれるように自由で大衆的な方式で楽しまれた⁵⁾。勧進能の形をとった猿楽の上演も、賀茂川原に栈敷を設け貴賤の別なく観覧できるという開放性をもっていた⁵⁾。さらに茶会にしても、しばしば闘茶という形で人々が茶の品種の当て比べをするといった集団遊戯性をもっていた⁵⁾。猿楽能、連歌、茶などはいずれも発展過程で芸術として洗練され高められてゆくが、その発生過程では集団性・大衆性を特徴としている⁵⁾。それらはこの時代の村落共同体・都市共同体である惣の寄合などを社会的基盤として形成されたものといえるであろう⁵⁾。

○蓮如上人と石山御坊

蓮如上人は、室町時代の僧で、浄土真宗本願寺第8世宗主で、中興の祖と称される。本願寺第7世存如（1396（応永3）—1457（長祿元））の長子として生まれたが、生母は不詳¹⁷⁾である。6歳のとき母に別れ、衰微した本願寺で困窮のうちに成長し、15歳にして一宗再興の志願をたてたという¹⁷⁾。17歳で、青蓮院で得度して修学に励み、また父を助けて聖教書写などを行い、1449（宝徳元）年35歳のとき、父とともに北陸から関東・東北を巡化¹⁷⁾した。

父存如が1457（長祿元）年に没すると、異母弟との争いののち本願寺第8世を継職した¹⁷⁾。その直後から近江を中心に活発に布教を開始したため叡山の反感を受け、1465（寛正6）年には京都東山の太谷にあった本願寺を破却された（寛正の法難）¹⁷⁾。

1471（文明3）年、越前の吉崎に道場（吉崎御坊）を開いて住するや、1～2年のうち

に門徒が群集し、寺内町が形成された¹⁷⁾。それには、消息形式で教義を平易に説いた『御文』(『御文章』)とよばれる伝道文書や、『正信偈和讃』の開板などの、独創的教化活動が大きな力となっていた¹⁷⁾。

吉崎坊舎が大きな勢力となると、加賀・越前の争乱に巻き込まれ、1475(文明7)年には吉崎を退去し畿内に戻ったが、この間に一向一揆の勃発をみた¹⁷⁾。1483(文明15)年には山城の山科に本願寺を造営し、北陸・東海・畿内に多くの門末を擁する本願寺教団の再興を成し遂げた¹⁷⁾。1489(延徳元)年退隠し、五男の実如(1458(長祿2)—1525(大永5))に本願寺住持職を譲ったのち、摂津石山に坊舎を造営して住した¹⁷⁾。後の石山本願寺の地である¹⁷⁾。

13男14女という多数の子女を各地に配して本願寺の藩屏とし、また本尊などの下付によって地方有力寺院を傘下に吸収するなどの方法によって本願寺教団を統制した¹⁷⁾。また教義的には、阿弥陀仏の本願を信ずることが浄土に往生する正しい因であり、名号を称えるのは弥陀の救済に対する報恩の念仏であるとする「信心正因称名報恩」を説いて親鸞の教義を明確化し、あわせて内心には深く他力の信心を蓄え、世間に処するには王法を守って国憲に従うべきとする「王法為本信心内心」を強調し、真宗的倫理観を確立した¹⁷⁾。

参考文献

- 1) コトバンク 正中の変, 正中の変(ショウチュウノヘン)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 2) コトバンク 元弘の乱, 元弘の乱(げんこうのらん)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 3) コトバンク 建武の新政, 建武の新政(ケンムノシンセイ)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 4) コトバンク 足利尊氏, 足利尊氏(アシカガタカウジ)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 5) コトバンク 室町幕府, 室町幕府(ムロマチバクフ)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 6) コトバンク 足利義満, 足利義満(アシカガヨシミツ)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 7) コトバンク 足利義持, 足利義持(アシカガヨシモチ)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 8) コトバンク 足利義教, 足利義教(アシカガヨシノリ)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 9) コトバンク 日明貿易, 日明貿易(ニチミンボウエキ)とは? 意味や使い方 - コトバンク

- ンク, 2025.6 閲覧
- 10) コトバンク 勘合貿易, 勘合貿易(カンゴウボウエキ)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
 - 11) コトバンク 勘合貿易遣明船, 勘合貿易遣明船(かんごうぼうえきけんみんせんねんびょう)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
 - 12) コトバンク 足利義勝, 足利義勝(アシカガヨシカツ)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
 - 13) コトバンク 足利義政, 足利義政(アシカガヨシマサ)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
 - 14) コトバンク 徳政一揆, 徳政一揆(トクセイイッキ)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
 - 15) コトバンク 半済, 半済(ハンゼイ)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
 - 16) コトバンク 段銭, 段銭(タンセン)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
 - 17) コトバンク 蓮如, 蓮如(レンニョ)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
 - 18) Wikipedia 本願寺の歴史, 本願寺の歴史 - Wikipedia, 2025.7 閲覧
 - 19) コトバンク 本所領, 本所領(ほんじょりょう)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.7 閲覧

1. 1.1 戦国時代～江戸時代

1. 1.1. 1 織豊時代

○織田信長

織田信長は、尾張守護代織田大和守家の清洲城主織田家三奉行のひとり織田信秀の子として生まれた。父の信秀は傑出した武将で尾張勝幡城に拠り、津島の経済力や天王社の信仰を背景に一族間に優越し、美濃・三河を攻略、信長を那古野城に置き、斎藤利政（道三）の女をめとらせた¹⁾。しかし一族との対立、今川氏との対決という課題を残して1551（天文20）年急逝したので信長は孤立し、家臣団は動揺した¹⁾。だが親族衆と連携しつつ敵対する一族を各個に撃破した信長は、1555（弘治元）年清須城を奪い、1557（弘治3）年老臣に擁立された弟信行を殺し、1559（永禄2）年岩倉城の織田信賢を追って尾張を統一¹⁾した。1560（永禄3）年5月西上する今川義元を桶狭間の戦でたおし、1562（永禄5）年岡崎の徳川家康と同盟して態勢を安定させた¹⁾。

1565（永禄8）年墨俣に砦を築き美濃への攻撃を強め、1567（永禄10）年ついに斎藤竜興を追って美濃を征服し、井之口を岐阜と改称して拠点とし「天下布武」の印判使用を開始した¹⁾。そして1568（永禄11）年足利義昭を擁して上洛、三好三人衆を追って幕府を再興、実質的な畿内支配を実現した¹⁾。

将軍のため二条城を造営する一方、殿中掟・事書五箇条を定めて将軍権力を牽制し、1570（元亀元）年浅井・朝倉軍を近江姉川の戦に破り、ついで河内に進出したところ石山の本願寺顕如が決起して浅井・朝倉軍に呼応したため退却し、天皇の権威をかりて講和した¹⁾。ついで将軍の失政を責め、1573（天正元）年ついに幕府を倒し、宿敵浅井・朝倉両氏を滅ぼし、翌年伊勢長島の一方向一揆を鎮圧、1575（天正3）年には三河長篠の戦に武田勝頼の精鋭を破って鉄砲隊の威力を示し、また丹波・丹後の征服を開始、8月越前の一方向一揆を鎮定し、柴田勝家ら直属部将を分封、国掟を与えて専制支配の姿勢を明らかにした¹⁾。濃尾両国を嫡子信忠に譲り、1576（天正4）年近江に安土城を築き、1577（天正5）年羽柴秀吉に西国征伐を命じた¹⁾。

一方足利義昭の策謀により本願寺顕如・上杉謙信・毛利輝元らが信長を敵として連合し、松永久秀・荒木村重らの部将も背いた¹⁾。しかし信長は1577（天正5）年紀伊雑賀を圧迫し、翌年鉄甲船によって毛利水軍を破り、また上杉謙信も1578（天正6）年病没、荒木一族も翌年鎮圧されたので石山城の顕如は1580（天正8）年ついに屈服し、加賀の一方向一揆も柴田勝家により平定された¹⁾。

信長は宿老の佐久間信盛や林秀貞を追放して専制的体制を誇示し、翌1581（天正9）年京都で盛大な馬揃を挙行、行幸を仰ぎ、整備された軍容を天下に示した¹⁾。そして翌1582（天正10）年木曾義昌の来属を機に甲斐・信濃に侵入、武田勝頼を田野に敗死させ、信濃・甲斐・上野に部将を分封して国掟を与えた¹⁾。ついで神戸信孝らに四国征伐を命じ、6月中国征伐の指示を与えるため上洛し本能寺に宿泊したところを明智光秀に急襲されて2日朝自殺、信忠も二条城で敗死した（本能寺の変）¹⁾。

○豊臣秀吉

羽柴秀吉は、1582（天正 10）年備中に出兵し、清水宗治の拠る高松城に迫って水攻めにし、毛利勢と対決すべく、信長の出馬を待ったが、信長はその西下の途中、明智光秀のために本能寺の変で横死した²⁾。秀吉は変報に接するや、急遽毛利氏と講和することに成功し、宗治の切腹を見届け、すさまじい強行軍で姫路城に帰着し、軍勢を整えて亡君の弔合戦に挑み、光秀を山崎の戦いで破った²⁾。本能寺の変後わずか 11 日目のことである²⁾。

信長死後の事態の收拾策を織田家の重臣が協議した清洲会議において、秀吉は丹羽長秀・池田恒興などを味方につけ宿老柴田勝家の主張を抑え、実質的な信長後継者としての道を踏み出す²⁾。

1583（天正 11）年、秀吉打倒を策する信長の三男信孝、滝川一益に対し、その機先を制して美濃・伊勢に出兵して攻め、ついでこれに呼応して越前より近江に出兵してきた勝家を賤ヶ岳の戦いで破り、越前に攻め入って北庄城の柴田氏を滅ぼし、さらに加賀・越中を平定し、ついで信長の次男信雄に働きかけて信孝を自殺させるとともに、一益を降して尾張・伊勢を支配下に入れる²⁾。中国の雄毛利氏もまた好を通じてくる²⁾。このように信長の後を受けて全国覇者となる確固たる道を歩むなかで、それにふさわしい城として、商品流通・水陸交通の要地でもある大坂に築城の工を起こした²⁾。

翌 1584（天正 12）年、信雄・徳川家康の連合軍と争った小牧・長久手の戦いでは、軍事的には手痛い打撃を受けたものの、政治的手段を弄して信雄を懐柔し、有利な条件で和議を結び、1585（天正 13）年、信雄・家康に呼応して蜂起した紀伊根来・雑賀の一揆を討伐し、ついで四国征伐を行って長宗我部氏を降した²⁾。そして家康に対しては、実妹（旭姫）を嫁がせるなどの種々の方策をとって上洛を促し、1586（天正 14）年、家康を臣従させた²⁾。

この間、1584（天正 12）年 11 月、従三位・権大納言となり、1585（天正 13）年 3 月、正二位・内大臣となり、同年 7 月、摂家間で関白職をめぐって争っていたのに乗じ、近衛龍山の猶子として関白・従一位となり、古代的な権威を借りて身分制社会の頂点にたち、1586（天正 14）年 12 月には太政大臣となり、豊臣の姓を賜った²⁾。

関白となった秀吉は、1588（天正 16）年、関白政権の政庁として京都内野に新築なった聚楽第に後陽成天皇の行幸を仰ぎ、徳川家康をはじめとする列席の諸大名に天皇への忠誠とともに秀吉への忠誠を誓わせ、朝廷の伝統的権威を背景にして天下に号令することを示した²⁾。国内平定においても、まず勅諭をかざして停戦や講和を命じ、これに応じないときには勅命に背くとして征伐した²⁾。

1587（天正 15）年には九州征伐を行って島津氏を降し、九州の国割りを行うとともに、博多・長崎を直轄化し、キリシタン禁令を発し、貿易の独占を図った²⁾。1590（天正 18）年、小田原征伐を行って北条氏を滅ぼし、さらに奥州を平定して、ここに天下統一を成し遂げた²⁾。

この統一事業に並行して、秀吉は連年のごとく検地を実施してきたが、文禄年間(1592～1596)にもっとも盛んに行い全国的に及ぼした²⁾。天正の石直しとも、太閤検地ともいい、中世の複雑に重層した土地関係を整理し、一地一作人制を確立し石高制を実施し、兵農分離を促進した²⁾。太閤検地と並ぶ秀吉の重要施策に刀狩がある²⁾。農民から武器を没収することは、1576(天正4)年に柴田勝家が加賀国で行った例があるが、秀吉はまず1585(天正13)年になお根強い力をもっていた寺院の武装を解除するため、高野山、多武峰などの刀狩を行い、ついで西日本を平定した時機をねらって、1588(天正16)年には全国的に刀狩令を出した²⁾。

諸国の百姓が刀・脇差・弓・鎗・鉄炮その他の武器をもつことを禁じ、これを没収することを命じたこの法令は、農村の武器廃絶令ではなく百姓の武具所持禁令というべきもので、身分制的な規制であって、兵農分離の促進を意図したものであった²⁾。

なお、この刀狩と同時に、海賊禁止令を出している²⁾。ついで小田原征伐の翌年、3か条の定書を出し、侍身分の者が町人や百姓になること、百姓が町人や職人になることを禁じ、武士・百姓・町人・職人の身分の固定化を図った²⁾。江戸時代の士農工商の身分秩序は実にこの定書に濫觴している²⁾。

天下統一を成し遂げた翌1591(天正19)年、側室淀殿との間にもうけた愛児鶴丸を喪った秀吉は、血縁による政権の維持を図るため、関白職を甥の秀次に譲り、自らは太閤と称し、豊臣政権の総力をあげて国内統一の延長線上に朝鮮出兵を敢行していく²⁾。当時「唐入り」と称されたごとく、まず朝鮮を従え明国を服属させるという「仮道入明」を目的としたものであるが、秀吉がこの計画を明らかにしたのは、関白任官の直後にあたる1585(天正13)年9月であった²⁾。その動機については諸説があり、中国・朝鮮との貿易回復をねらったもの、「佳名を三国にのこす」考えから出たもの、などといわれているが、唐入りは国内統一の過程のなかで標榜され、戦争意欲をあおり領主層の領土拡張の欲望を大陸に向け放出させることに大きな意味をもたされてきた以上、天下統一が唐入りに連ならざるをえなかった²⁾。

出兵にあたり秀吉は、これを支える物質的基盤を調査するため、1591(天正19)年全国に御前帳を作成して提出することを命じて、国ごとの石高の把握をなし、1592(文禄元)年、関白秀次により人掃令が出され、全国の家数・人数の調査が行われた²⁾。そして秀吉は全国の諸大名に朝鮮出兵の軍令を下して征明軍16万人を編成し、自らも肥前名護屋の本陣に赴いて、総指揮にあたった²⁾。

小西行長・加藤清正を先鋒とする大軍は釜山に上陸し、わずか20日のうちに朝鮮の首都を陥落させ、この緒戦の勝利に気をよくした秀吉は、日本、中国、朝鮮にまたがる三国国割り計画を打ち出し、秀吉自身は、まず北京に入り、ついで寧波に居所を定め、進んで天竺を征服するという遠大な構想をも吐露している²⁾。これはまさに大局的判断を欠いた空想にすぎないものであったが、これをまじめに考えていたところに秀吉の悲劇があった²⁾。

やがて明の大軍の到着、朝鮮兵の立ち直り、義兵民の蜂起などによって、戦局は進展せず、明との和議交渉に入ったが、互いの思惑は相いれるはずもなく、やがて決裂し、1596（慶長元）年ふたたび朝鮮出兵となるが、戦意も盛り上がりせず、秀吉の病死によって撤兵命令が出されるまで、延々と戦争が続けられた²⁾。これを文禄・慶長の役というが、これは豊臣政権にとって大きな痛手となり命取りとなった²⁾。

しかも、政権内部においても、太閤と関白秀次との間に統治権的なあり方からの矛盾が顕在化し、これは淀殿所生の秀頼の継嗣問題とも絡んで、秀次事件へと発展し、秀次を切腹させることで秀頼の将来の安泰を図ったが、諸大名に豊臣家の行く末と政権の維持を依頼しなければならない状況を招いた²⁾。五奉行・五大老の制が整備されるのは秀吉晩年に至ってのことで、1598（慶長3）年の春に盛大に醍醐の花見を行ったのが最後の豪遊となり、死期の迫るのを悟った秀吉は、8月5日五大老に幼い秀頼の将来のことをせつせつと訴えた遺言状を認め、同18日に波瀾に富んだ62歳の生涯を閉じた²⁾。

○織豊政権

織豊政権とは、16世紀後半、約1世紀にわたった戦国動乱を終息させた織田信長、その後を継いで天下統一を成し遂げた豊臣秀吉によってつくられた近世統一権力である³⁾。わずかに30年余りの短い期間であるが、日本の歴史のうえではきわめて重要な画期的な時代にあたり、ためにこの時期を一つの時代区分とし、安土桃山時代、あるいは織豊時代という³⁾。時期区分としては、いちおう安土桃山時代の時代区分を、信長が足利義昭を擁して岐阜から上洛した1568年（永禄11）より江戸幕府が開設し名実ともに徳川氏の覇権が確立した1603年（慶長8）とし、織田政権前期、織田政権後期、豊臣政権前期、豊臣政権後期の4期に分けるのが適当であろう³⁾。

織田政権前期は、1568（永禄11）年の信長入京より、1573年（天正元）年將軍足利義昭の京都追放＝室町幕府の滅亡まで³⁾になる。この時期は幕府と織田政権の二重権力の時期といえる。義昭の將軍宣下により室町幕府の機能は正式に再興されたが、信長の意図は義昭を利用して独自の支配体制を構築することにあつた³⁾。信長が義昭から副將軍か管領かに就くよう勧められたが辞退したということや、朝廷からの官位辞退のこと、あるいは義昭から畿内において望みしだいに知行を与えようとの申し出を断り、かわりに和泉の堺、近江の天津・草津に代官を置いたということなどは、信長が義昭との主従関係に入ることや、官位体系において下位にたつことを避けようとしたことを物語るものであり、信長が畿内先進地域の掌握に努め独自の権力基盤を固めようとしていたことを示していよう³⁾。

上洛した翌年1569（永禄12）年の正月には「殿中掟」を定め、信長は將軍義昭の行動に制約を加え、1570（元亀元）年正月には義昭に対しては3か条からなる「条書」を示して、將軍権力の信長への委任を強要し、諸大名に対しては、禁中の御修理や武家御用のため、天下静謐のため、上洛して朝廷・幕府に参礼すべき旨の「触書」を発して、

信長権力の位置と威勢を示した³⁾。そして上洛命令に従わなければ公武の命に背くという名目のもとに、越前朝倉氏討伐などを行い、これに味方した近江浅井氏を攻め、一向一揆を攻撃し、比叡山延暦寺を焼打ちにした³⁾。1572（元亀3）年9月には反信長勢力の陰で糸を引く將軍義昭に対し、「異見」17か条を示して徹底的に批判し、両者の関係は悪化の一途をたどる³⁾。やがて義昭は公然と信長に敵対行動に出たため、信長は1573（天正元）年宇治の槇島城に義昭を攻め、河内若江に追放して室町幕府に最後のとどめを刺した³⁾。

織田政権後期は、1573（天正元）年より、本能寺の変で信長が横死する1582（天正10）年までで、名実ともに統一権力となった時期である³⁾。全国制覇を目ざし、越前朝倉氏・近江浅井氏を滅ぼし、松永久秀などを討つと同時に、一向一揆との全面対決を通じて信長権力の深化を図った³⁾。1574（天正2）年の伊勢長島の一揆攻略では2万人を焼殺し、翌1575（天正3）年には越前の一向一揆を壊滅し、府中の町は死体で「一円あき所なく候」という皆殺しを行った³⁾。さらに一揆勢力の本拠である石山本願寺を攻撃し、これに通じる毛利氏などに対戦し、各個撃破を行い、1580（天正8）年には正親町天皇の勅命による和平工作によって本願寺を信長の軍門に下らせ、ここに畿内を完全に掌握する³⁾。さらに全国統一を目ざして東西に転戦する構えをみせ、1582（天正10）年には甲斐の武田氏を滅ぼし、ついで西国の雄毛利勢との対戦にあたるべく西下の途上、本能寺で家臣の明智光秀のために殺され、政権は未完成のまま瓦解した³⁾。

この間、信長は1575（天正3）年これまで辞退し続けてきた官職を受け、権大納言・右近衛大将となり、また家督を長子信忠に譲って尾張・美濃の両国を与え、翌1576（天正4）年には安土築城に着手して本拠を岐阜より安土に移し、統一権力としての仕事に専念する体制をとる³⁾。

豊臣政権前期は、本能寺の変の直後、山崎の戦いで主君の仇明智光秀を討ち、信長の後継者としての地歩を固めた1582（天正10）年から、小田原征伐、ついで奥州の鎮定により全国制覇を果たした1591（天正19）年まで³⁾があたり、このうち1585（天正13）年に秀吉が関白に就任し、また豊臣姓の勅許も得て身分制社会の頂点にたち、古代的権威を借りて統一政権を推進していこうとしたことが、さらに一つのくぎりになる³⁾。1583（天正11）年、秀吉は織田家の宿老柴田勝家を賤ヶ岳の戦いで滅ぼして織田政権の後継者としての地位を内外に示すとともに、大坂城を築いてここを本拠として各地に進出する体制を固め、さらに小牧・長久手の戦いを経て東海の雄徳川家康を臣従させ、四国征伐、九州征伐、小田原征伐を行って全国統一を達成した³⁾。

そして征服地を拡大するごとに、奉行人を派遣して検地を実施した³⁾。初めのころは織田政権の段階のように指出検地であったが、領地の拡大につれ検地の規準が整備されて検地が行われ、1590（天正18）、1591（天正19）年には関東・東北・南九州へと全国的になり、とくに東北検地では厳罰主義をもって臨んでいる³⁾。この太閤検地の全国的施行により石高制の原則を確立し、1588（天正16）年には刀狩令、1591（天正19）年

には身分統制令を出して兵農分離を推進した³⁾。またこの時期には、1587（天正 15）年のキリシタン禁令、1588（天正 16）年の海賊取締令など、江戸幕府の鎖国政策につながる重要な政策も打ち出されている³⁾。

豊臣政権後期は、秀吉が全国統一を達成して関白の地位を甥の豊臣秀次に譲り、自らは太閤となった 1591（天正 19）年から、秀吉の死去、関ヶ原の戦いを経て、徳川家康が將軍宣下を受けて名実ともに徳川氏の覇権が確立した 1603（慶長 8）年まで³⁾となる。このうち、関白秀次を高野山に追放し自殺させた 1595（文禄 4）年、政権の主宰者秀吉が死去した 1598（慶長 3）年が、さらに一つのくぎりになる³⁾。なお、秀吉死後の豊臣政権は、1600（慶長 5）年の関ヶ原の戦いまでは、秀吉死去の直前の 1598（慶長 3）年 7 月ごろ嗣子秀頼を推戴する政治的機構として制度的に成立した、五大老・五奉行の合議体制によって継承された³⁾。また、関ヶ原の戦いでの勝利により、家康は事実上の覇権を確立したが、その権限は依然豊臣氏の五大老としての権限の延長線上にあった³⁾。

この時期は政権の矛盾が顕在化した時期で、全国統一の過程で新たに大名間の対立が生じ、太閤秀吉と関白秀次の機能分化の不首尾は政権を根底から揺るがせ、朝鮮出兵（文禄・慶長の役）の実施・挫折がこれに拍車をかけた³⁾。朝鮮出兵の原因は諸説あるが、このような対外侵略の形でしか政権内部の矛盾を処理する方法がなかったところに、豊臣政権の特質があったともいわれている³⁾。

○検地・刀狩

武力的な統一と並行して種々の政策が実施されたが、とくに重要なものは検地と刀狩である⁴⁾。検地はすでに戦国大名の間でも行われていたが、信長は京都入りと同時に検地に着手し、近江国に指出すなわち土地台帳の提出を命じたのをはじめ、征服地に次々と実施した⁴⁾。信長段階ではまだ役人を派遣し条目を設けて行うに至らず、秀吉も初めは指出方法をとったが、その後、征服が行われるとただちに奉行人を派遣して検地を実施し、または検地実施を前提として知行地の給付を行い、統一の進行と並行して全国的規模に拡大した⁴⁾。太閤検地がこれである⁴⁾。

検地に反抗する者には徹底的に弾圧する方針がとられ、1590（天正 18）年の奥州検地では、万一非協力者があれば城主でも 1 人残らず撫で切りにし、百姓においては 1 郷でも 2 郷でもことごとく撫で切りにし、山の奥や海も櫓櫓の続くまで入念に調査すべきことを命じ、その徹底を期している⁴⁾。太閤検地のもっとも整備された姿は 1594（文禄 3）年の検地条目にみることができる⁴⁾。太閤検地による石盛（反当り平均収穫率）、耕地ごとの年貢負担者の確定により、石高制が確定して全国の耕地面積、収穫高が確実に掌握できるようになり、また「一職」支配と「作合」否定、すなわち一地一作人の原則に基づいて中間搾取が否定されたことにより、小農民の自立が促された⁴⁾。検地帳に登録された百姓はその土地に緊縛され、移動することが禁じられた⁴⁾。

一方、1588年（天正16）、秀吉は刀狩令を發布し、百姓がいつさいの武器を所持することを禁じ、農民の武装反抗を未然に防止し、農民の身分的固定化を図った⁴⁾。いわば検地と刀狩とは表裏一体のもので、武士と農民を明確に分離するための重要な施策であった⁴⁾。こうした封建的身分秩序は1591（天正19）年8月の身分法令によっていっそう徹底された⁴⁾。この法令は3か条からなり、侍、中間、小者などが新たに百姓、町人となること、百姓が田畠を捨てて商業、賃仕事につくこと、出奔者を抱えることを禁止した。武士と百姓、町人の身分的な支配関係はこのときから固定的となるのである⁴⁾。

○楽市・楽座の実施、関所の廃止

中世の荘園的土地体制の衰退、太閤検地による荘園制の崩壊という過程のなかで、商人も荘園の狭い枠を脱して、領国経済から全国経済へとその活躍圏を拡大しつつあった⁴⁾。織豊政権は商品流通の拡大を図るため、中世の特権的、閉鎖的商工業組織である座を解体し、流通の障害要因であった関所の撤廃を行い、新たな流通体系を整備する必要があった⁴⁾。すでに戦国大名は自己領国の経済的繁栄のために楽市・楽座を行っていたが、信長は1568（永禄11）年岐阜の城下である加納の町において、ついで1577（天正5）年安土の城下町において楽市・楽座を実施した⁴⁾。ことに安土における掟は13か条からなり、座の特権を否定し、諸種の課税を免除して商人の来住を勧め、治安の維持を約したもので、その後の諸大名の城下町における掟の規範となった⁴⁾。

また各所に乱立する関所、不十分な交通路、無秩序に流通している貨幣、これらも商品経済の発達に対して大きな障害となっていたので、信長は1569（永禄12）年その支配圏内にある国々の関所を廃止し、その勢力拡大とともに関所を撤廃し、また交通路については1574（天正2）年信長の管内に属する道路の幅を広げるなどその整備に努めた⁴⁾。そしてこの関所の撤廃、道路の改修などは秀吉によって全国的に推し進められ、全国の都市と商業を活気づけた⁴⁾。これはさらに諸産業の発達を促進したが、なかでも注目すべきは鉱山の隆盛がみられたことである⁴⁾。石見銀山、佐渡金山をはじめとして、各地の鉱山では採掘技術の進歩により産出額が飛躍的に増大し、また新鉱山の発見が各地でみられたのも、この時代に入ってからのことである⁴⁾。

○貨幣経済の発達

商業の発展と金銀採掘の増大は、必然的に金・銀貨の鑄造、流通を促した。当時、明から輸入された良質の貨幣と並んで民間の私鑄銭や欠損・焼損銭などの悪銭が流通し、貨幣の受け渡しに混乱を生ずるもととなっていたので、信長は1569（永禄12）年撰銭令を出して良銭と悪銭との交換比率を定め、流通の円滑化を図った⁴⁾。しかし信長の時代にはまだ新しい貨幣の鑄造をみなかったが、秀吉は金・銀貨の鑄造を行い、ここに貨幣の統一がなされた⁴⁾。なかでも1588（天正16）年の天正大判・小判は、贈答用のものではあったがきわめて良質の金貨であった⁴⁾。

○新たな経済統制

これら信長、秀吉による関所の撤廃、交通路の整備、貨幣の統一という一連の政策により、全国的市場形成への方向が著しく促進されたが、商品経済の自由な発達には、一面では、石高制に基づく統一的封建的知行体系を動揺させるものでもあったから、信長や秀吉は商業の自由な発達を抑制し、商人を自己の統制下に置かんとする政策を並行してとった⁴⁾。信長が足利義昭を擁して上洛したとき、義昭よりその勲功の賞として摂津、和泉、近江などの諸国において領地を加増しようという申し出があったのを辞退し、そのかわりに、和泉の堺と近江の大津、草津に代官を置くことを望んだこと、また秀吉が堺、博多、長崎、大津などを直轄領としたことは、これら主要商業都市をその統制下に置くためであった⁴⁾。

信長の楽市楽座令にしても、これを、社寺、公家など古代権力から商工業者を解放し、封建領主直属の仲間の結成へと推進した進歩的政策であるとする見方が一般的であったが、最近では、織田政権の新しい領国支配のための城下町集住政策であり、城下町以外については座特権を認めていた事実も知られるようになり、また関所にしても全廃したのではなく、京都七口にある皇室領の関所は存続を認めていたことも明らかにされている⁴⁾。要するに信長、秀吉の座政策に代表される一連の経済政策も、狭隘な中世市場を解放し商工業を促進するとともに、これを新たな統制下に置くうえでの枢要な施策であったといえよう⁴⁾。

○貿易・外交

16世紀中葉以来ポルトガル船の来航が盛んで、マカオ経由のポルトガル船により中国やインド産の生糸、絹織物などがわが国にもたらされた⁴⁾。主として長崎、あるいは平戸や口之津に入港した⁴⁾。倭寇勢力の衰微によって日中貿易の空白期に直面していた九州の諸大名はこれに大きな関心を示したが、ポルトガル船の貿易はキリスト教宣教師の布教活動と密接に結び付いていたので、その経済的利益を図るため、一般的に布教に対しても好意的な態度をとり、自らキリシタンに改宗する者もあった⁴⁾。信長も対寺院政策の一環としてキリスト教を保護し、秀吉も初めは宣教師を好遇し、またこの時代に海外貿易は一段と盛んになったが、その後キリスト教は禁止し、海外貿易は奨励するという政策をとる。1587（天正15）年の宣教師追放令がこれである⁴⁾。

秀吉は翌1588（天正16）年薩摩の島津氏に命じ琉球王の来朝を促したのをはじめとし、インド、呂宋（ルソン）、高山国（台湾）などに国書を送って入貢を促すとともに、朱印船貿易の制を始め、長崎、堺、京都の豪商に南方への渡海朱印状を与えた⁴⁾。これは秀吉による海外貿易体制の意図を表したものであり、秀吉が宣教師追放とともに、事実上の宣教師領となっていた長崎を直轄領としたのも、海外貿易の利益を独占する体制を確立するための一施策であったというべきである⁴⁾。同年秀吉が、ポルトガル船が長

崎に積載してきた生糸9万斤を日本人商人に先駆けて独占的に購入したのは、のちに鎖国体制下で行われた糸割符貿易の先駆的形態とみなされている⁴⁾。

1592（文禄元）年から1598（慶長3）年にかけて二度にわたり大規模な侵略が行われた⁴⁾。秀吉の朝鮮出兵（文禄・慶長の役）は豊臣政権の総力を投入して企てられたもので、朝鮮を広範囲にわたって荒し、多数の朝鮮人捕虜を連行し、また国内には過大な軍役の負担を強いるものであった⁴⁾。その動機については諸説があつて一定しないが、朝鮮、中国との貿易再開の希望がいれられなかったためともいわれ、少なくとも外国貿易による利潤獲得が一つの目的にあつたことは否めないであろう⁴⁾。

○風俗・生活

風俗にも新しい息吹が感じられ、衣食住にも江戸時代の原型をみることができる⁴⁾。室町時代後半期に発生し武家の礼装となった素襖が、この時代にさらに簡略化されて肩衣袴となり、また庶民には羽織が用いられるようになる⁴⁾。この時代、身分の上下なく等しく一般に用いられたのは小袖であった⁴⁾。木綿の国内生産の発達、南蛮貿易による大量の生糸の輸入、あるいは染色技術の発達と相まって、表着としての小袖の色彩感覚は著しく多様性をおび、帯の装飾性を増加させ、女装では華麗な文様の色鮮やかな打掛という小袖が花形であった⁴⁾。織物では西陣織、染物では辻が花染の発達をみた⁴⁾。

食生活でとくに注目されるのは、従来の蒸してつくる強米から鍋や釜で炊く姫飯が普及し、また朝夕2食から3食制への変化もみられるようになった⁴⁾。公家、武士階級的主食は半白米または黒米（玄米）で、町人、農民は、米は特別のときで、麦、粟、稗を主として食し、また雑菜飯といって雑穀類に菜を炊き込んだものを常用とした⁴⁾。

兵農分離は農民と商人、職人をも分離すると同時に、町と農村との地域的分離をももたらし、町に住む武士や町人のうち、町人の住居は『洛中洛外図屏風』などにみられるように、ほとんど平屋建ての店舗住宅で、大部分は長屋であり、屋根は押さえ石を置く板葺きであったが、貨幣経済の発達に伴い、やがて大きな進展を遂げていくのである⁴⁾。

○文化

長い間の戦国争乱の状態から急速に統一が達成され、また海外発展も著しくなる中で、上下共に自由闊達な気風がみなぎり、新鮮で豪華な文化が生まれた⁴⁾。これまでの文化に多大な影響を与えてきた仏教的な色彩がほとんど影を潜め、これに代わり世俗的色彩が濃くなり、ヨーロッパ文化の影響が初めて現れ、前代と比較しておおらかで明るい躍動的な文化が創造された⁴⁾。建築と絵画はこの時代の文化の最も代表的なものだった⁴⁾。

○建築と絵画

建築は城郭建築と住宅建築が主として発達した⁴⁾。彫刻は建築の装飾としての発達を遂げ、欄間や破風飾りや木鼻などに花鳥などを透彫り、薄肉彫りにすることが盛んに行

われ、建築をより豪華、雄大なものとした⁴⁾。城郭は単に軍事的施設というにとどまらず、封建支配者の富と権威を象徴するものとして、天守閣をもつ壮大な城郭が営まれた。城郭建築のもっとも有名なものに、信長が築いた安土城（1576）、秀吉築城になる大坂城（1583）、聚楽第（1585）、伏見（桃山）城（1594）などがある⁴⁾。これらはいずれも現存しないが、その遺構といわれるものが諸所に残っていて、昔日の盛大なありさまをしのぶことができる⁴⁾。安土城については新たにその指図といわれるものが発見され、その特殊な形態と豪華さが注目されている⁴⁾。また聚楽第の遺構としては西本願寺飛雲閣、大徳寺唐門が知られ、西本願寺白書院・唐門などは伏見城の遺構といわれる⁴⁾。

住宅建築としては、前代以来の書院造が発達し、武家や公家の邸宅ばかりでなく、のちには豪商や豪農の間にも取り入れられて、日本住宅の基本型となった⁴⁾。また茶道の発達、普及に伴って、豪華な書院造に対して簡素清雅を旨とする数寄屋造が創成された⁴⁾。現存の茶室建築としては妙喜庵の待庵、西芳寺の湘南亭、高台寺の時雨亭などがある⁴⁾。そのほか神社建築として、本殿と拝殿とを合の間に結合した権現造が出現していることも注目される⁴⁾。仙台の大崎八幡がその代表的なもので、この様式は江戸時代に東照宮建築として普及定着する⁴⁾。

絵画は建築装飾画である障壁画が中心であり、もっともよく当代美術の特色を示している⁴⁾。この時代の建築が雄大、壮麗なものであったから、これを装飾すべき絵画もおのずから豪壮にして華麗なものとなり、これまでの水墨障壁画のほかに、紙面に金箔を張り、その上に濃厚な岩絵の具をもって描く金碧障壁画が盛んに行われた⁴⁾。これは濃絵(だみえ)といわれるもので、当代に突如として興ったものである⁴⁾。狩野永徳、狩野山楽、海北友松のごとき名筆が現れ、大徳寺聚光院、南禅寺、大覚寺、妙心寺天球院、そのほか京都の寺院などに、花鳥や猛禽などを画題とした多くの作品を遺している⁴⁾。水墨障壁画は前代以来の宋元画の余韻を伝えてはいるが、しかも当代の新しい風格を保っており、長谷川等伯、雲谷等顔、曾我直庵らが活躍した⁴⁾。また、京都のありさまを写實的に描いた洛中洛外図、職人を題材とした職人尽図、西欧人の風俗を描いた南蛮屏風など、初期風俗画とよばれるものが発達した⁴⁾。

工芸の分野では蒔絵、染織などが発達したほか、陶磁器も盛んになった⁴⁾。ことに陶器は二度にわたる朝鮮出兵の帰途に諸将が連れ帰った朝鮮人陶工によって発達が促され、唐津焼などが興った⁴⁾。また茶の湯の普及発達に伴って、京都の楽焼や美濃の志野、黄瀬戸、あるいは信楽焼などが発達した⁴⁾。

○茶の湯・芸能

戦国時代以来、大名や豪商に喜ばれた茶の湯は、信長や秀吉がこれを愛好したことによって普及し、堺町人の津田宗及、今井宗久、博多町人の神谷宗湛ら多くの茶人を輩出した⁴⁾。ことに堺の千利休は従来の趣味的な茶の湯を生活芸術としての茶道に高めて佗茶を確立した。能楽もこの時代に一段と普及し、また新しい時代の庶民の楽しみとして

浄瑠璃と阿国歌舞伎が発生して迎えられた⁴⁾。阿国の歌舞伎踊りは舞踊に劇的要素を取り入れ、新しい楽器である三味線を伴奏としたところに新味があり、江戸歌舞伎の源流となった⁴⁾。

○鉄砲伝来と火縄銃国産化

1543（天文 12）年、九州種子島に漂着したポルトガル人によって初めて欧州の鉄砲が伝来した⁵⁾。欧州側史料では 1542 年のことという⁵⁾。このとき伝えられた鉄砲はエスピンガルダと呼ばれた南欧系の先込め式火縄銃で、口径 18mm 前後、最大射程 200m、有効射程 40～50m くらいのものであった⁵⁾。「鉄砲記」によれば、時の島主種子島時堯は鉄砲の威力に驚き、2000 金を投じて鉄砲 2 挺を譲りうけ、自ら日夜射撃の練習に励み、百発百中の腕前になり、また家臣らに命じて火薬の製法を学ばせ、鉄砲製作を研究させ、ついに鉄砲の国産化に成功したという⁵⁾。のちに鉄砲は発祥の地にちなんで種子島とも呼ばれた⁵⁾。時堯に国産化を命じられた刀鍛冶金兵衛清定は、苦心の末、外見は寸分違わぬ火縄銃を作ったが、銃身の底を塞ぐ尾栓の作り方がどうしてもわからなかった¹⁶⁾。それが「ねじ」だった¹⁶⁾。その当時、日本人は「ねじ」の存在すら知らなかった¹⁶⁾。その翌年（1544 年）種子島熊野浦に再びポルトガル人が来航し、その商人の中に一人の鐵匠がいた¹⁶⁾。時堯公はこれを天の助けと思い、金兵衛清定に銃身の底を塞ぐ「ねじ」の作り方を学ばせた¹⁶⁾。それからしばらくして、金兵衛清定はねじを巻いてはめ込む方法（「めねじ」の作り方）を修得し、遂に国産火縄銃を完成させることが出来た¹⁶⁾。

種子島の技術は紀州根来の杉坊妙算や堺の橋屋又三郎によって畿内へ伝えられ、さらに日本各地に広まっていった⁵⁾。また島津義久、将軍足利義晴らを経て近江の国友へ伝えられ、国友鉄砲鍛冶の起源ともなった。当時豊後に来た明の使節鄭舜功はその見聞記「日本一鑑」に鉄砲生産地として種子島のほかに坊津、平戸、豊後、和泉などを記している⁵⁾。このように新来の兵器鉄砲は数年のうちに急速に各地の戦国大名らに採用され、戦国の主要兵器となっていた⁵⁾。

天文末期（1554 年）ごろ足利将軍家には種子島、豊後などの各地から舶来、国産の鉄砲が集められ、また火薬の製法など鉄砲に関する多くの最新知識・技術が集積されていた⁵⁾。これらの知識・技術は将軍家を媒介として越後長尾氏や上野横瀬氏らに伝えられるなど、当時将軍家是一種の技術センター的役割を果たしていた⁵⁾。

また堺は室町末期には商品流通、国際貿易の拠点としての地位を確立しており、いち早く鉄砲生産を工場制的段階にまで高めて堺筒として大量生産し、商品化に成功して日本における兵器廠となった⁵⁾。諸国の大名、武将らは競って堺から鉄砲、弾薬など入手して、軍備の強化を図った⁵⁾。

そして根来、雑賀では僧兵、地侍らが大量の鉄砲を装備して、傭兵として畿内諸国で活躍した⁵⁾。鉄砲の普及は従来の戦闘形態に変化をもたらし、城郭と武器を鉄砲戦に耐

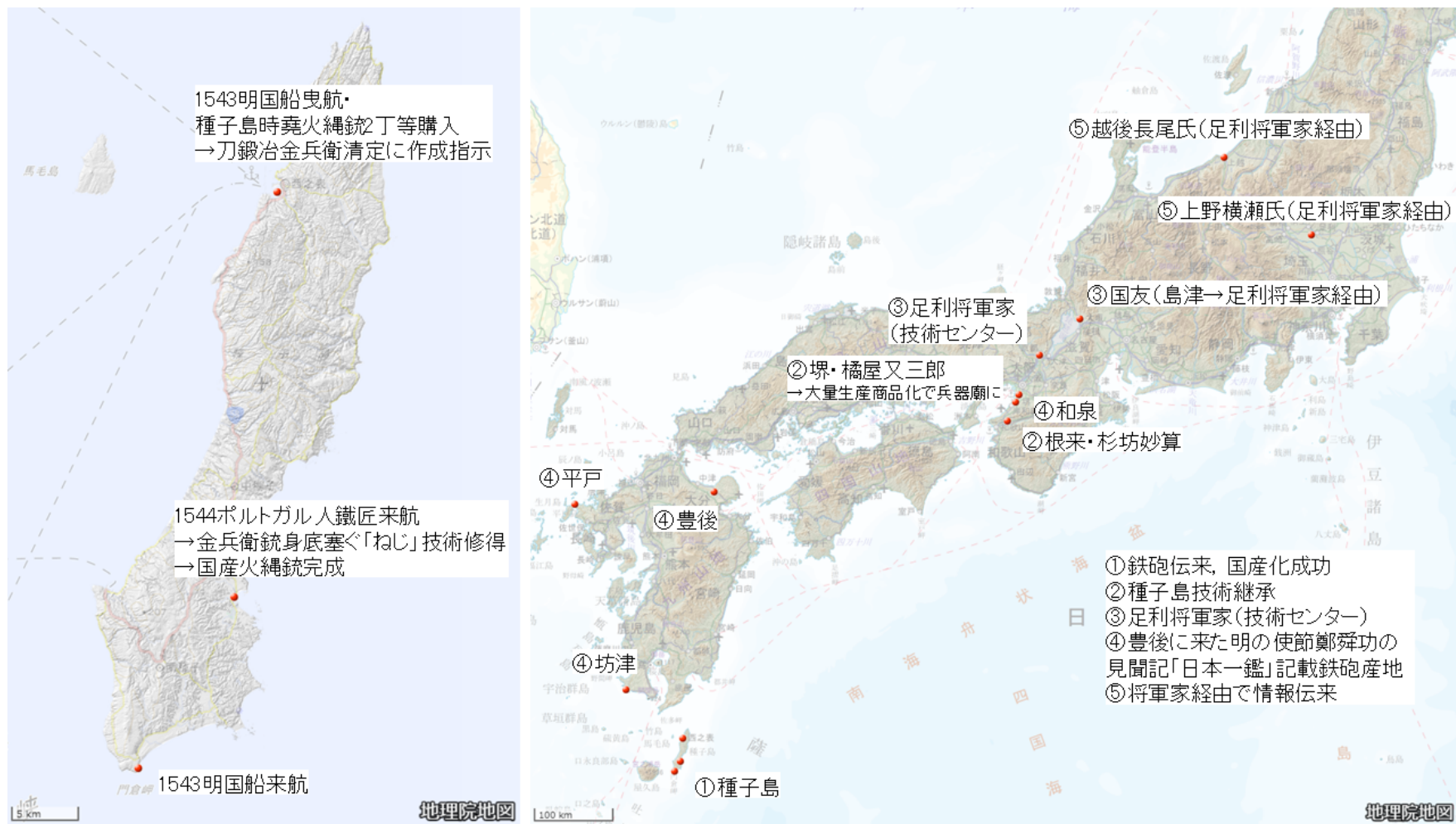


図 1.11-1 鉄砲伝来と国産化, 普及

えうるものに変えた⁵⁾。最も早くから鉄砲に注目し、鉄砲戦を軍事技術的に体系化し確立したのは織田信長である⁵⁾。1575（天正3）年信長は長篠の戦で3000の鉄砲隊をもって無敵の武田騎馬隊を撃破したが、この勝利の背後には堺の資金と鉄砲があったであろう⁵⁾。こうして戦国乱世は、鉄砲の出現によって信長、秀吉、家康と急速に天下統一の歩みを速めることになった⁵⁾。鉄砲が技術的に最も頂点を極めたのは、稲富一夢斎が活躍した大坂の陣の頃であった⁵⁾。

火薬の問題は従来あまり注意が払われていないが、再検討すべき問題が多い⁵⁾。例えば火薬の主要成分である硝石は、慶長の役以前の段階ですでに国産されていたようである⁵⁾。1589（天正17）年北条氏忠は下野国尻内郷に塩硝年貢の上納を命じている⁵⁾。

○堺の発展

現在の堺市周辺には、大規模な四ッ池弥生遺跡や、仁徳陵を中心とする百舌鳥古墳群、無数の陶器古窯址群、奈良時代の僧行基の出生地と伝える家原寺などがあり、古くから開かれた地であったことがわかる⁶⁾。堺という地名は、仮名では1045（寛徳2）年藤原定頼の歌集に「さか井」とあらわされているのが初見で、1081（永保元）年の「藤原為房卿記」には「和泉堺之小堂」と見える⁶⁾。この小堂は、平安時代にさかんになった熊野参詣路に設けられた九十九王子の一つであって、摂津、和泉、河内の3国の国境に当たっていたので、堺の名称がつけられた⁶⁾。

中世初期には荘園となり、北荘（摂津）、南荘（和泉）と二つの集落に分けられており、南北両荘をあわせては堺荘と呼ばれていた⁶⁾。一漁港にすぎなかった堺は、南北朝時代から背後に摂・河・泉をひかえ畿内と瀬戸内海を結ぶ港として、軍事的・政治的な要地となり、急速に都市的発展をとげた⁶⁾。文化の面でも1364（正平19／貞治3）年「論語集解」や、1369（正平24／応安2）年「五灯会元」などの刊行も行われた⁶⁾。また鎌倉時代の桜井神社拝殿や法道寺食堂、南北朝時代の法道寺多宝塔、日部神社の正平24年の銘をもつ石灯籠などからも、その発展の姿がうかがえる⁶⁾。1399（応永6）年、堺を中心として大内義弘が室町幕府と戦った応永の乱では、焼失した民家1万戸と記されていることから、その繁栄ぶりをうかがうことができる⁶⁾。このように経済的に富裕な町であったため、東寺、四天王寺、相国寺、住吉神社の所領となり、あるいは大内、山名、細川などの守護大名の支配地、さらに幕府の直轄地となるなど、しきりに領主勢力の交替をみた⁶⁾。応仁の乱後、畠山氏や細川氏の一族間の権力争い、ついで三好・松永の争いなどのため堺は幾度か大軍を送迎し、市内にもたびたび陣所が構えられた⁶⁾。

1465（寛正6）年兵庫を出発した遣明船は、細川氏と大内氏が対立することになったので、大内氏の勢力下であった瀬戸内海をさけ、四国の南を迂回して1469（文明元）年堺に帰着した⁶⁾。以後、堺は遣明船の発着港となり、一躍大陸貿易港へと発展し、博多と並んで明、朝鮮、琉球（沖縄）などとの海外貿易を独占した⁶⁾。とくに堺商人は遣明船の請負額を高め、独占的にその権利をにぎり、この貿易によってもたらされる莫大な

利益のほか、出入船舶の関税や商業の利益、さらには金融業を営んだ土倉、納屋、問丸などの存在で、堺の商業資本的な富の増殖は著しいものがあった⁹⁾。堺の商人を中心とする町民たちは、領主が弱体化したことを利用し、その経済的な富を基盤として、納屋貸十人衆を代表とする地下請を行い、町内の公事訴訟の決裁も十人衆が行うというような自治的な団結組織をつくり、都市自立の態勢を強化した⁹⁾。この自治的共同体組織を指導したのは納屋衆あるいは会合衆と呼ばれる門閥的な豪商たちであった⁹⁾。町民たちは市街を兵火から守るため、南、北、東に濠をめぐらして町を囲み、傭兵隊を置き一種の要塞都市をつくりあげた⁹⁾。そして16世紀の半ばごろには、日本の都市史上では珍しい自由都市的な発展をとげ、その勢力が頂点に達したのは、1560年代（永禄年間）であった⁹⁾。

当時日本にいたキリスト教（イエズス会）の宣教師は、日本全国で堺の町より安全なところはない、町は堅固で西の方は海にのぞんでいて、他の側は深い濠で囲まれて常に水がみちている、ベネチアのように執政官によって治められ、共和国のようである、などと手紙に書いている⁹⁾。このように急速に発展した商品経済の伸張と南蛮貿易の発展によって、堺は一段と経済的繁栄をきたした⁹⁾。

この繁栄のもとで、文化、芸能、技術の面でも、「古今集」の秘義を宗祇から伝えられた「堺伝授」の牡丹花肖柏や、能楽喜多流の祖喜多七大夫、隆達節をはじめた高三隆達などが活躍した⁹⁾。また車屋道晰による謡曲車屋本の出版、阿佐井野宗瑞による「医書大全」10冊の出版をはじめとして、天文版論語、年代記などの自費出版も堺の商人たちによって行われている⁹⁾。また、北向道陳、武野紹鷗、津田宗達、千宗易（利休）、津田宗及、今井宗久、山上宗二などは茶道史上に不朽の名をとどめている⁹⁾。さらに堺鉄砲、織物、医術など技術の面も高度の発達をとげた⁹⁾。

1568（永禄11）年織田信長は待望の入洛を果たすと、堺に矢銭（屋銭）2万貫を要求してきた⁹⁾。会合衆たちは、これを拒絶し信長と一戦を構える準備をした⁹⁾。ところが堺がたのみにしていた三好三人衆が信長にやぶれて四国へ退去したこともあって、ついに信長の武力的圧力によって自治の伝統も打ちやぶられ、1569（永禄12）年には信長の直轄地となり代官を迎えるようになった⁹⁾。

信長に屈服した堺は、以後近世武家政権の直轄地となり、堺奉行（政所）によって支配された⁹⁾。堺は荘園制下に遠隔地商業の中心地となり、海外貿易によって発展し、輸入品を原材料とした高級衣料、薬品、雑貨や鉄砲、包丁などの武具・金具を特産品としていた⁹⁾。また、紀州街道や高野街道、奈良へ至る長尾街道や竹之内街道も堺から放射状に伸びていた⁹⁾。このような伝統的手工業技術の高さと、海陸交通の要衝としての位置が、武家統一政権を支える軍事的・経済的基盤となったのである⁹⁾。秀吉が1586（天正14）年自治都市の象徴であった環濠を埋めさせたのは有名であるが、1615（元和元）年大坂夏の陣後の復興時に、この濠も復元された⁹⁾。この新しい都市建設は、北庄、中

筋，舢松，湊村（堺回り 4 ヲ村）の一部を新たに編入し，北庄，中筋，舢松の村民を居住させて農人町を設定し，その外側に濠をめぐらしたのである⁶⁾。

堺の中心部は東西に走る大小路と南北の大道筋によって区分され，これらと並行して走る道筋の向かいあった長方形の両側町 179 によって構成されていた⁶⁾。この詳細は「元禄二年堺大絵図」によって知ることができる⁶⁾。各町は大きく南北両郷（後に南北両組）に分けられて運営され，各惣会所において惣年寄 5 名，惣代 3 名，職事 3 名が任務にあたっていた⁶⁾。初期の惣年寄は糸割符年寄を兼ねる門閥特権商人であったが，貿易体制の変化，生糸貿易の衰退によって 17 世紀後期には新興町人勢力と交替した⁶⁾。1704（宝永元）年の大和川の付け替えは河口に膨大な土砂を運び，新田を形成するとともに船舶の入津を困難とさせ，堺の衰退を決定的にした⁶⁾。18 世紀の末，堺奉行贅正寿は堺港の浚渫に成果をあげたが，堺の繁栄は戻らず，むしろ周辺泉北農村の発展のほうが著しかった⁶⁾。

1. 1 1. 2 文禄の役・慶長の役

一日朝関係前史

隣国である日本と朝鮮半島との間は歴史的に関わりが深く，戦争や侵略の経験も相互に持った⁷⁾。秀吉が生きていた当時から大部分は認識されており，現在では以下の外交および軍事的出来事が前史として両国に存在していたことが分かっている⁷⁾。

663 年に，唐・新羅連合軍と大和朝廷・百済連合軍が衝突した白村江の戦いがあり，大和・百済側が敗北した⁷⁾。これ以後，大和朝廷は朝鮮半島への直接介入をやめてしまい，（何度か計画は持ち上がったものの）日本側からは数万に及ぶ大規模な出兵は文禄の役まで約千年間も途絶えることになった⁷⁾。しかし一方で交易は断続的に続けられた⁷⁾。他方，812 年から 906 年までの間，小規模な海賊による新羅の入寇が繰り返され，997 年から 1001 年にかけての高麗海賊による入寇があった⁷⁾。1019 年には，高麗（及び傘下の女真族）による刀伊の入寇があった⁷⁾。

1224 年から 5 回に渡って，高麗の金州（現慶尚南道金海市）や巨済島などに初めて倭人の海賊が襲来，後に倭寇と呼ばれる海賊の活動が始まった⁷⁾。

高麗は大宰府に海賊取締りを要請し，少貳職にあった武藤資頼は大使の目の前で海賊 90 名を処刑させた⁷⁾。その後，モンゴル軍の侵攻を受けた高麗は元に降伏⁷⁾する。珍島や済州島に逃げた三別抄が 1271 年に日本に救援を求めるが，無視された⁷⁾。

1274 年と 1281 年に元率いる軍勢（モンゴル人，南宋人，高麗人）が日本の九州北部に侵攻する，いわゆる元寇があった⁷⁾。北条時宗の鎌倉幕府が二度に渡って撃退するが，対馬・壱岐では虐殺や童女・童子をさらって奴婢とするなどの蛮行があった⁷⁾。

その後，日本は動乱期を迎えて南北朝時代の 1350 年頃から倭寇（庚寅倭寇）が活発化したという前後関係から，倭寇は元寇への報復であったという主張は安土桃山や江戸

時代にすでに語られていたようだが、現代の歴史学では倭寇と海賊衆の実態から考えればその指摘は正しくないというのが定説である⁷⁾。

むしろ承久の乱で敗者を支持して厳しい立場となった西国武士団が海に活路を求めたのを始まりとし、室町幕府の内紛（観応の擾乱）によっても同様のことが起きて、九州探題今川了俊が南朝勢力を降したときにも、さらに船団で海外に脱出する者が増えたと考えられていて、江戸末期の『日本防考略』でも倭寇をして「日本あふれ」と定義していた⁷⁾。

倭寇の襲来におびえる高麗では、軍備が荒廃して満足に戦えず、倭人（投化倭人）を巨済島や南海県などに住まわせ、時に食料を供給することで鎮撫しようとしたが、倭寇はそこを新たな出撃地とただけで海賊活動はやめず、この政策は完全に失敗した⁷⁾。

倭寇は府庫の米だけでなく奴婢の獲得を狙うようになり、逃亡した禾尺・才人といった高麗賤民なども倭寇の側に合流した⁷⁾。

1375 年には家臣団を連れて投降した倭人の藤経光を誘殺しようとして失敗し、逆に激しい報復を受けた⁷⁾。以後、倭寇は暴虐の度をむしろ高めて「倭寇猖獗」と呼ばれる前期倭寇の最盛期を迎えた⁷⁾。

1380 年には朝鮮で鎮浦大捷と撃退が称賛される倭寇 500 隻の大襲撃があった⁷⁾。高麗は海賊取締を要請したが日本の北朝に無視されたため、1389 年、対馬に軍を差し向ける康応の外寇を行ったといわれている⁷⁾。

高麗が滅び朝鮮に代わると、太祖李成桂は日本に禁寇を要求した⁷⁾。1392 年、南北朝合一を果たして動乱を治めたばかりの足利義満は日本側として初めてこれに応じ、今川了俊に倭寇取締が命じられた⁷⁾。了俊はさらに守護大名大内義弘に命じて倭寇鎮圧の功績を上げた⁷⁾。朝鮮側がいう 1396 年の壱岐・対馬征伐は日本側に記録がないが、いずれにしても、日朝の取締強化によって前期倭寇は減退の傾向を見せていた⁷⁾。

しかし 1419 年、太宗上王と世宗が応永の外寇（己亥東征）の際に壱岐・対馬を慶尚道管轄下だと主張、保有船の 3 分の 1 以上を超える 227 隻 1 万 7 千余の大軍勢で、壱岐・対馬を侵略した⁷⁾。ちょうどこの頃、明の永楽帝との関係がこじれていた時期で、將軍足利義持は明が朝鮮と連合して攻めてきたのかと驚き、京都では三度目の蒙古襲来という噂が広がって大きな衝撃が広がった⁷⁾。幸い、この外寇は宗貞盛の僅かな手勢によって撃退され、台風を恐れて撤退した⁷⁾。結局、これが朝鮮側からの最後の日本侵攻となった⁷⁾。

前期倭寇は、明の海禁、勘合貿易が始まるなどしたことで 1444 年頃にほぼ終息した。他方、日朝貿易の増加は、通交統制となって、1510 年に恒居倭人（朝鮮居留日本人）の反乱である三浦の乱という副産物を生んだ⁷⁾。

後期倭寇は、1511 年にポルトガルがマラッカを滅ぼして東アジアでの交易を始め、1523 年に寧波の乱が起きるなどして、勘合貿易が途絶えて、明王朝の海禁政策を逃れた中国人が増える状況で、再び活発化した⁷⁾。歴史学者村井章介らの研究などを基にす

れば、16世紀初頭の1501年から1525年頃には、明、李朝、日本、琉球、東南アジア諸国の環シナ海地域においては、それまでの勘合貿易などの朝貢形式の明王朝主導の貿易ではなく、海禁政策に反する非合法的な中国人倭寇商人の活動や、堺や博多の豪商などを中心にしたネットワークが構築されてシフトしていったという⁷⁾。

後期倭寇は禁制を破った中国人や南蛮人なども混在した集団となったことで、襲撃の主な標的は朝鮮半島からもっぱら中国沿岸に移った⁷⁾。

しかし朝鮮でも1544年に後期倭寇による蛇梁倭変が起これ、通交統制がさらに厳しくなると天皇と大内氏・少弐氏の使節以外の日朝通交が禁止された⁷⁾。これに困った宗氏が偽使を用いて朝鮮と締結したのが、1547年の丁未約条である⁷⁾。この時、対馬宗氏が朝鮮に駿馬を求め、朝鮮が日本に服属している旨を明朝に伝えたとの報告を行った⁷⁾。これに対して朝鮮の司憲府大司憲林百齡は激怒しているが、日朝間の立場は明と対馬の宗氏とを介して複雑に絡み合っており、後の文禄の役の原因の一つともなる⁷⁾。

嘉靖帝の時代の武力による海禁政策の厳格な施行で、かえって海外に拠点を持つ後期倭寇の活動は過激化して最盛期となった⁷⁾。王直などの中国人大頭目が率いる倭寇が、五島列島などを根城に活躍したのはこの頃である⁷⁾。1554年6月には済州島で唐人と倭人の同乗する船が朝鮮水軍と衝突する事件が起き、1555年には乙卯の倭変があり、倭寇が明の南京や朝鮮の全羅道を侵した⁷⁾。また1555年には達梁倭変があり、1557年に丁巳約条が締結された⁷⁾。

後期倭寇はポルトガル人貿易と競合し、明の取締強化と、群雄割拠した戦国大名が勢力圏を広げて日本側の根拠地を追われたことで、衰退⁷⁾する。1588年、秀吉の海賊停止令発布によって終息した⁷⁾。

－中朝関係前史

モンゴルの高麗侵攻以来、元朝の属領となっていた高麗は王統がモンゴル貴族化していたが、恭愍王の代になって紅巾の乱で中国が混乱したことで元の統治が弱まり、自立を目指すようになった⁷⁾。王は元の皇后を出した奇氏（奇皇后）の勢力を肅清して独立を図ったが、倭寇と紅巾軍に悩まされて国内外は混乱した⁷⁾。成立間もない明の冊封を受けようとしたのが理由で、恭愍王は親元派に暗殺された⁷⁾。高麗は一時的に北元との関係を復活させるが、この内乱を制した武人の李成桂が、1392年に禅譲を受けて主君恭讓王から王位を継ぎ、明の洪武帝から「朝鮮」の国号と権知高麗国事の号を賜って、朝鮮を創始するに至った⁷⁾。一方で、2年後に旧主を含む高麗の王統は皆殺しにされた⁷⁾。

朝鮮でも日本と同様に、1401年に明の建文帝から第3代の太宗が誥命と金印を下賜され、中国で靖難の変があつて、1403年に永楽帝が改めて太宗を「朝鮮国王」として封じて、正式に冊封体制に入った⁷⁾。しかし朝鮮は、日本よりも交流が密で、年に3回の朝貢使節を送るという1年3貢を行った⁷⁾。これら4節には望闕札を執り行うこととな

っており、朝鮮王と王世子は明製の官服である冕服を着て、王城漢城より明の皇帝に向けて遥拝儀礼を行って、百官と共に万歳三唱した⁷⁾。

このように、明の蕃王である朝鮮国王の臣下としての立場は明確であり、後に秀吉が明遠征を先導せよなどと唆したことは全く受け入れられない要求であった⁷⁾。

1591年5月、秀吉の国書を受けた朝鮮（後述）では、宗主国である明に奏聞するべきかどうか議論になった⁷⁾。東人派の間では情勢の不明の内に奏聞するのは混乱させるだけで、波風を立てると否定的で、奏聞の代わりに聖節使に任命した金応南に事情を説明させることにした⁷⁾。ところが明では、すでに4月に琉球を訪れた商人陳申が通報し、それが福建と浙江の巡撫という地方官僚を介して正式な報告として上げられていた⁷⁾。しかも内容は日本が明侵攻を計画し朝鮮がその先導役となるというものであって、明は朝鮮が日本と共謀しているのではないかと疑念を抱いていた⁷⁾。遼東巡撫に兵を派して国境の警備を固めさせるとともに、朝鮮の情勢を内偵させた⁷⁾。

明は8月に来訪した金応南の説明に満足し、朝鮮節使を慰労して銀2万両を送った⁷⁾。ところが、入れ替わり遼東都司から征明嚮導の真偽を詰問する文書が、同じ頃に朝鮮朝廷に届いて彼らは驚愕した⁷⁾。慌てた朝鮮朝廷では、柳成龍と崔嵬が作成した朝鮮国王名義の陳倭情報奏文を韓応寅に持たせて急派した⁷⁾。その間も9月には薩摩の在日明国人の医師許儀俊の「すでに朝鮮は日本に服属して征明嚮導に協力しようとしている」という追いうちとなる報告が明にあり、また琉球王国からも使者が来て奏聞された⁷⁾。鄭廻や蘇八といった帰化中国人の複数の情報筋からも、朝鮮が日本に服属したという内容が明には届けられていた⁷⁾。

1592年正月頃に明の朝廷に陳奏文が提出され、改めて日朝交渉の経緯を詳しく説明したが、朝鮮通信使を日本に送った事実はひた隠しにされ、中国人による通報などは朝鮮に対する誣告であると非難するばかりで、日本の出兵計画を大それたことで虚偽だと片づけていた⁷⁾。このため結果的に明が「征明嚮導」の疑念を払拭するには至らず、戦役が起こった後も、明の猜疑心は消えなかった⁷⁾。むしろ（朝鮮がないと言っていた）朝鮮出兵が現実のものとなったことで明側の疑念は深まったのであった⁷⁾。遼東の明将らは朝鮮朝廷を難詰し、指揮権の統一にも反対して、朝鮮民衆の日本軍協力を疑い、朝鮮に対しては一定の距離を置いた⁷⁾。

一朝鮮の内情

権威の後ろ盾を明に求めた李成桂は、軍師であった鄭道伝の進言により、国内を、仏教を崇めた高麗時代とは一転して、朱子学を国教とすることで道德秩序のある儒教国家として繁栄させようとした⁷⁾。しかし鄭自身が王子の序列争いに巻き込まれて斬首されるなど朝鮮王朝の動乱は収まらなかった⁷⁾。兄達を蹴落として王位を奪った李芳遠の後を継いだ世宗以後の君主は平和に腐心して儒学思想を極端に信奉するようになったが、かえって人臣の間に家長的名分主義や排他主義が蔓延しかつ争いは止まなかった⁷⁾。官人となるためには誰もが儒学を学ばねばならなかったが、書院ごとに儒生は徒党をなし

て、官人になってからも先輩につき従って政權掌握を目指すようになって、士禍と党争が始まったからである⁷⁾。勲旧派（中央貴族層）と士林派（新興両班層）との争いの次は、士林派から分裂した東人派（改革）と西人派（保守）の争いがあり、東西両派の争い時に文禄の役が始まったが、東人派はさらに南人派と北人派に分裂するなど、戦時下にもかかわらず一向に党派争いは収まらず、団結することはなかった⁷⁾。結果としては朝廷の秩序はしばしば乱され、王や后、王子、外戚、中央と地方の両班が、絶え間ない勢力争いに明け暮れて、陰謀や粛清を数世紀に渡って続けたことで、国力は浪費され、人臣には混乱が生じ、国家は衰退をきたした⁷⁾。

このような内紛を繰り返した李氏王朝から民心が離れていた、日本側に協力する民がいたほどであったという内容の記述は、ルイス・フロイスの著作にも見られる⁷⁾。当時の朝鮮王である宣祖（李昖）は、儒学の発展と講学には非常に熱心であったが、極端に権威主義的で、しばしば逆鱗に触れて家臣に厳罰を降す気まぐれな王で、政治に飽き、徳がなく、人民に好かれていなかっただけでなく、いくつもの致命的な判断の誤りを犯した⁷⁾。このため朝鮮の史料においてすら、宣祖実録（25年5月の条）には「人心恨叛し、倭と同心」と認め、宣祖が「賊兵の数、半ばが我が国人というが、然るか」と臣下に尋ねたと記述されており、王都を捨てて逃亡する王には、民事を忘れて後宮を厚くすることを第一として金公諒（寵姫仁嬪金氏の兄）を重用したと非難が集まり、投石する百姓が絶えずに衛兵もこれを止めることができなかったという。また、金誠一の『鶴峯集』にも「倭奴幾ばくもなし、半ばは叛民、極めて寒心すべし」という記述があった⁷⁾。

『壬辰戦乱史』の著者である李炯錫によれば、朝鮮が「分党政治と紀綱の紊乱、社会制度の弊害と道義観の墮落、朝臣の無能と実践力の微弱性、輕武思想と安逸な姑息性、事大思想と他力依存性、国防政策の貧困」などの弱点を露呈していたことが侵略を受ける間接的要因となったと総括する⁷⁾。また、当時の朝鮮半島の人口は日本の1/4に過ぎなかったことも留意したい⁷⁾。

一 秀吉の唐国平定構想

秀吉は、日本の統一を完成させるよりもかなり前から海外侵攻計画を抱いていた⁷⁾。これは秀吉が仕えた織田信長の支那征服構想を継ぐものだったと広く信じられているが、実はこの説は根拠に乏しい⁷⁾。信長の夢に従って朝鮮に近い筑前守を請うて拝命したというのも俗説である⁷⁾。『朝鮮通交大紀』に現れる明との貿易を開こうと通交の斡旋を朝鮮に仲介を依頼した者（右武衛殿）を信長であるとするのは人物誤認であって、これを基に信長の遺策を秀吉が受け継いだという説がかつてあったが、それは辻褄が合わないものであり、信長の影響については想像の域を出ない⁷⁾。

1577（天正5）年10月、信長から播磨征伐を命じられた秀吉が「中国征伐の後は九州を退治し、更には進んで朝鮮を従へ、明を征伐する許可を請うた」という有名な逸話は、堀正意が『朝鮮征伐記』に載せて江戸時代から広く信じられており、原典を確認できないので史実とは明言できないが、何らかの由来があった可能性はある⁷⁾。

しかしながら秀吉本人が海外進出の構想を抱いていたことを示す史料は、1585（天正13）年以降のものに存在し、史学的には1585（天正13）年が外征計画を抱いた初めてであろうとされる⁷⁾。関白就任直後の同年9月3日、子飼いの直臣一柳市介（直盛の兄）の書状で「日本国ことは申すにおよばず、唐国まで仰せつけられ候心に候か」という記述がそれである⁷⁾。

1586（天正14）年3月には、『日本西教史』によると、イエズス会準管区長ガスパー・コエリョに対して、国内平定後は日本を弟秀長に譲り、唐国の征服に移るつもりであるから、そのために新たに2,000隻の船の建造させる、としたうえで、堅固なポルトガルの大型軍艦を2隻欲しいから、売却を斡旋してくれまいかと依頼し、征服が上手く行けば中国でもキリスト教の布教を許可すると言ったという記録がある⁷⁾。

同年4月、毛利輝元への朱印状14カ条のなかの「高麗御渡海事」という箇所を外征の計画を披露し、6月の対馬宗義調への帰順を促す書状でも九州のことが終わり次第、高麗征伐を決行すると予告した⁷⁾。また8月5日の安国寺恵瓊と黒田孝高への朱印状でも、九州征伐の後の「唐国」についても沙汰があったと記述があった⁷⁾。

1587（天正15）年になると登場頻度は増え、話も徐々に具体化した⁷⁾。九州征伐の後、泰平寺で相良家家臣で連歌師の深水宗方に謁見した際、秀吉は「もはや日本もすでに統一した⁷⁾。この上兵を用いるならば高麗琉球ならん」と述べて和歌を所望。宗方はこれに答えて、「草も木もなびきさみだれの 天のめぐみは高麗百済まで」と詠んで、大いに気に入られたという出来事があった⁷⁾。5月9日、秀吉夫妻に仕える「こほ」という女性への書状において、「かうらい国へ御人しゆつか（はし）かのくにもせひはい申つけ候まま」と記し、九州平定の延長として高麗（朝鮮）平定の意向もあることを示している⁷⁾。6月1日付で本願寺顕如に宛てた朱印状の中にも「我朝之覚候間高麗国王可参内候旨被仰遣候」と記している⁷⁾。

妙満寺文書（5月29日付）によれば、秀吉は北政所に宛てた手紙で、壱岐対馬に人質を求めて出仕を命じただけでなく、朝鮮に入貢を求めて書状を出したこと、唐国まで手に入れようと思うと述べていた⁷⁾。小早川文書によれば、10月14日付の肥後国人一揆後の佐々成政の処罰について、「唐南蛮国迄も従へんと欲するによって、九州の如きは五畿内同前に平定さねばらぬ」と秀吉が述べたという⁷⁾。

秀吉の唐国平定計画は、長期的に順を追って進められており、しかも日本統一の過程と手段や方法が同一であって、諸国王を諸大名と同列に扱ったことに特色と一貫性があった⁷⁾。明への入朝要求はことごとく無視されたことから、その道中の朝鮮は前段階となった⁷⁾。九州征伐の後に日朝交渉は始まっていて、鶴松の誕生や小田原征伐、大仏建立などで中断はあったが、以後はもはや遠征は単なる構想ではなかった⁷⁾。

1592（天正20）年6月、すでに朝鮮を併呑せんが勢いであったとき、毛利家文書および鍋島家文書には「処女のごとき大明国を誅伐すべきは、山の卵を圧するが如くあるべ

きものなり。只に大明国のみにあらず、況やまた天竺南蛮もかくの如くあるべし」との秀吉の大気炎が残されているが、それは誇大妄想等ではなくて計画があったのである⁷⁾。
ー 証明嚮導

1587（天正 15）年 5 月初旬、薩摩川内に在陣中に（すでに秀吉に帰順していた）宗義調の使者として佐須景満と家臣の柳川調信、柚谷康広の 3 名が来て、秀吉に拝謁を願い出た⁷⁾。彼らは秀吉が前年に予告した朝鮮出兵（高麗征伐）を何とか取り止めてもらい、貢物と人質を出させることでことを済ませることはできないかと請願に来たのである⁷⁾。しかし、九州征伐を成し遂げたばかりの秀吉は、次は琉球、朝鮮だと考えており、聞き入れなかったばかりか、朝鮮国王自らが入朝することを要求し、それが無い場合は征伐するとした⁷⁾。そして彼ら宗氏を朝鮮との交渉役に命じて、入朝を斡旋させる任務を与えた⁷⁾。6 月 7 日、帰路の箱崎で宗義調と宗義智の親子に謁見して、直にその旨を重ねて厳命した⁷⁾。このように宗氏に強い態度に出た背景としては、琉球が島津に従属したように、朝鮮も対馬に従属していると秀吉が誤解していたためである⁷⁾。ルイス・フロイスも「朝鮮は年毎の貢物として米一万俵を対馬国主に納めていた」と書いていて、このような認識は秀吉に留まらず、当時の一般的なものであったことが分かっている⁷⁾。ところが実際にはこの米というのは朝鮮側から倭寇防止のために下賜される歳賜米のことで、量も僅か 100 石に過ぎず、対馬・宗氏は朝鮮貿易に経済を依存していて、逆に従属的な立場であり、対外的には嘘を吐いていたに過ぎなかった⁷⁾。前述のように偽使を用いて苦勞して朝鮮との関係を修復したところだった。秀吉の難題への対応を苦慮した彼らは形式的にでも双方を満足させねばならず、折衷案がないかと模索した⁷⁾。

9 月、宗氏は柚谷康広を日本国王の偽使（橘康広）として渡海させ、秀吉の日本統一を告げた上で、新国王秀吉を祝賀する通信使の派遣を朝鮮側に要請した⁷⁾。これは通信使を朝鮮国王入朝の代わりとして事態を収めようという配慮だったが、朝鮮側は書簡の文言が傲慢であると主張し、朱子学に凝り固まった宣祖も「これまでの国王を廃して新王を立てた日本は篡奪の国であり」大義を論して返せと命じた⁷⁾。それを受けた大臣らは「化外の国には礼儀に従って」接する必要はないとして、水路迷昧を理由に要請を断った⁷⁾。日本側には記録はないが朝鮮側の記録によると、報告を受けた秀吉は激怒し、交渉失敗は裏切りの結果であるとして柚谷康広を一族共々処刑したといわれる⁷⁾。

期限を越えても 1 年間進展なかったので、1589（天正 17）年 3 月、秀吉は朝鮮国王遅参を責め、入朝の斡旋を再び宗義智へ命じた⁷⁾。6 月、義智は博多聖福寺の外交僧景轍玄蘇を正使として自らは副使となり、家臣の柳川調信や博多豪商島井宗室など 25 名を連れて朝鮮へ渡った⁷⁾。漢城府で朝鮮国王に拝謁した一行は、重ねて通信使の派遣を要請し、宗義智は自らが水先案内人を務めるとまで申し出た⁷⁾。ところが朝鮮側は先に誠意を見せろと数年前に倭寇が起こした事件を持ち出して、対馬へ逃亡したと疑われる朝鮮人の叛民・沙乙背同（サウルベドン）なる人物の引き渡しを要求した⁷⁾。義智もこれに応えてすぐに柳川調信を対馬に帰し、沙乙背同と数名の倭寇を捕縛して連行させたの

で、断る理由がなくなった朝鮮側はついに通信使の派遣に応じた。返礼に宗義智は孔雀と火縄銃を献上した⁷⁾。

1590（天正18）年3月に漢城府を発した通信使は、正使に西人派の黄允吉、副使に東人派の金誠一、書状官許箴（許筠の兄）ほか管楽衆50余名という構成で、4月29日に釜山から対馬に渡って滞在1ヶ月した⁷⁾。このとき金誠一が宴席に轎（駕籠のこと）に乗って後からやってきた宗義智を無礼と怒ったので、謝罪に轎夫を斬首にするという事件があった⁷⁾。京都に到着したのは7月下旬で、大徳寺を宿とした⁷⁾。しかし秀吉は小田原征伐と奥州仕置のために9月1日まで不在で、凱旋後もしばらく放置された⁷⁾。

11月7日になってようやく秀吉は聚楽第で引見したが、義智とその舅小西行長が共謀して通信使は服属使節であると偽って説明して、秀吉は、朝鮮は日本に帰服したものだと思い込んでいたようである⁷⁾。それで秀吉は定められた儀礼もほとんど行わずに、国書と贈物（入貢）を受け取っただけで満足し、中座して赤子の鶴松を抱いて再び現れて、使者の前で小便を漏らした我が子を笑い、終始上機嫌だった⁷⁾。対等な国からの祝賀の使節のつもりだった通信使一同は侮辱と受け取り憤慨したが、正使と副使にはそれぞれ銀400両、その他の随員にまでも褒美の品々が分け与えられ、功が労われた⁷⁾。もちろん返答の用意もなく、儀礼に反すると通信使が抗議した後で、僧録西笑承兌が起草し、堺で逗留していた一行に国書が届けられた⁷⁾。

その内容は、秀吉自らは「日輪の子」とであるという感生帝説を披露して帝王に相応しい人物であると主張したうえで、大明国を征服して日本の風俗や文化を未来永劫に中国に植え付けるという大抱負を述べ、先駆けて「入朝」した朝鮮を評価して安堵を約する一方で、「征明嚮導」つまり明遠征軍を先導することを命じ、応じるならば盟約はより強固になるとするものだった⁷⁾。そして全ては「只佳名を三国に顕さんのみ」と秀吉個人の功名心を誇示してもいた⁷⁾。文章を一読した通信使は属国扱いに驚愕して宗義智と玄蘇に抗議した⁷⁾。玄蘇は秀吉の本意とは異なる嘘の説明で誤魔化していたので、それを信じた金誠一は誤字であると考えた「閣下」「方物」「入朝」の文字の書き換えを要求して食い下がったが、もはや一刻も早く帰還すべきと考えていた黄允吉はそのまま出立した⁷⁾。1591（天正19）年1月に対馬に到着、2月に朝鮮に帰国し、玄蘇と柳川調信が同行した⁷⁾。

一 仮途入明

1591（天正19）年3月、通信使は朝鮮国王に報告した⁷⁾。しかし、彼らが来日中に朝鮮朝廷では政変があって西人派の鄭澈が失脚して東人派の柳成龍が左議政となっていた⁷⁾。黄允吉が「必ず兵禍あらん」と戦争が切迫している事実を警告したが、対抗心をむき出しの金誠一が大げさであると横やりを入れ、全否定して口論になった⁷⁾。柳成龍が同じ東人派の金誠一を擁護して彼の意見が正しいことになり、黄允吉の報告は無視された⁷⁾。通信使に同行した軍官黄進はこれを聞いて激怒し、「金誠一斬るべし」といきり立ったが周囲に止められた⁷⁾。人事の変更と若干の警戒の処置は取られたが、対日戦争

の準備はほとんど行われなかった⁷⁾。「倭軍」の能力を根拠なく軽視し、そもそも外寇がないとたかを括る国内世論で、労役を拒否する上奏が出されるほどだった⁷⁾。

玄蘇と柳川調信が東平館に滞在中、宣慰使（接待役）呉億齡らは日本の情勢を聞き出そうと宴席を設けた⁷⁾。すると（秀吉ではなく宗氏の意向を汲む）玄蘇は「中国（明）は久しく日本との国交を断ち、朝貢を通じていない⁷⁾。秀吉はこのことに心中で憤辱を抱き、戦争を起こそうとしている⁷⁾。朝鮮がまず（このことを）奏聞して朝貢の道を開いてくれるならば、きっと何事もないだろう⁷⁾。そして、日本六十六州の民もまた、戦争の労苦を免れることができる」と主張した⁷⁾。しかし、これは朱子学の正義に合わないため、金誠一は大義に背くと批判し、口論となった⁷⁾。玄蘇は「昔、高麗が元の兵を先導して日本を攻撃した⁷⁾。日本がこの怨みを朝鮮に報いようとするのは当然のことだ」と熱くなって反撥したので、朝鮮側はこれに対して何も言い返さなかった⁷⁾。5月、朝鮮朝廷は「日本は朋友の国で、大明は君父である」として仮途入明の要求を拒否し、宗氏が別に要求した斉浦と監浦の開港も拒否した⁷⁾。玄蘇と調信は国書を手に対馬に戻った⁷⁾。

同年6月、玄蘇の復命を受けてすぐに宗義智は再び渡海し、釜山の辺将に対して「日本は大明と国交を通じたい⁷⁾。もし朝鮮がこの事を（明に）奏聞してくれるならとても幸いであるが、もしそうしなければ、両国は平和は破られるだろう」と警告を發し、再交渉を要望した⁷⁾。辺将はこれを上奏したが、朝鮮朝廷では先の玄蘇らの言動を咎め、秀吉の国書の傲慢無礼さを憤激していたところだったので、何の返事も与えなかった。義智は10日間待ったが、断念して不満足のまま去った⁷⁾。これ以降、日本との通信は途絶えた。釜山浦の倭館に常時滞在していた日本人もだんだんと帰国し、ほとんど無人となったため、朝鮮ではこのことを不審に思っていた⁷⁾。

一朝鮮半島経由の理由

秀吉が唐国平定計画を目指しながら直接に明に向かわず、その第一歩として当初より朝鮮に圧力をかけ、帰服か軍の通過を許すかの選択を強要しようとした理由の一つとして、日本の航法が江戸時代になっても「地乗り航法（沿岸航法）」であったことが説明として挙げられる⁷⁾。「山あて」と呼ばれる周囲の景色の重なり具合から自分の位置を知る方法が主流であったため、船団が沿岸を目視できる範囲から離れることは危険で、濫りに大洋を横断することはできなかった⁷⁾。このため日本水軍は、九州北部の肥前名護屋（現唐津市と玄海町）などから出航して、壱岐（勝本）→対馬南部（厳原）→対馬北部（大浦）→釜山と順次進んで海峡を横断し、朝鮮半島南部沿岸を西回りで北上する必要があったのである。最短ルートから外れた済州島は無視された⁷⁾。

一準備

1591（天正19）年1月20日、秀吉は（明の）遠征準備を始動した⁷⁾。常陸以西、四国、九州、日本海の海沿い諸国大名に号令を發して、10万石に付き大船2艘を準備するように命じ、港町は家百軒につき10人の水主を出すこと、自分の蔵入地（筑前・摂

津・河内・和泉に集中) には 10 万石に付き大船 3 艘, 中船 5 艘を造ること, 建設費は半額を奉行より支出し, 残額は竣工の上で交付するとした⁷⁾. また水主は 2 人扶持とし, 残される妻子にも給金を与えることを約束し, 船頭は給米を与えて厚遇するとした. また船等は摂津, 播磨, 和泉に翌年までに集合することを命じた⁷⁾. また大船の大きさは長さ 18 間 (33 メートル) で幅 6 間 (11 メートル) と定められていた⁷⁾.

同年末にかけて軍用軍資金として通貨を大量に生産させた⁷⁾. 金貨は花紋があるため太閤花降金と称し, 銀貨は花降銀とも石見銀とも呼ばれた. 糧米は 48 万人分が集積され, 秣も相応に準備された⁷⁾. 各地の街道や橋の整備修復も命じられた⁷⁾.

また朝鮮の地図が作製され, 八道を五色で塗り分け, 慶尚道を白国, 全羅道を赤国, 忠清道・京畿道を青国, 江原道・平安道を黄国, 咸鏡道を黒国, 黄海道を緑国と命名し, 諸将に配られた⁷⁾.

一名護屋城築造

1591 (天正 19) 年 8 月 23 日, 秀吉が「唐入り」と称する征明遠征の不退転の決意が, 改めて諸大名に発表された⁷⁾. 宇喜多秀家が真っ先に賛成したといわれ, 五大老のうち徳川家康は関東にいて不在であったが, 他の大老, 奉行は秀吉の怒りを恐れて不承不承の賛意を示した⁷⁾. このために秀家は, 後に秀吉の名代として総大将を任じられることになる⁷⁾. 決行は翌年春に予定され, (秀吉は帰順したと考えていた) 朝鮮を經由して明国境に向かうというこの遠征のために, 国を挙げて出師の準備をさらに急ぐように促された⁷⁾. 12 月 27 日には秀吉は関白職を内大臣豊臣秀次に譲って, 自らは太閤と称して外征に専心するようになった⁷⁾.

秀吉は遠征軍の宿营地として名護屋城築造を指示した⁷⁾. 黒田孝高に縄張りを命じて, 浅野長政を総奉行とし九州の諸大名に普請を分担させた⁷⁾. また, 壱岐を領する松浦隆信にも勝本に前哨基地となる風本城の築城を命じた⁷⁾.

名護屋城の建設予定地は, 波多氏の領土でフロイスが「あらゆる人手を欠いた荒地」と評した場所であったが, 完成した名護屋城には全国より大名衆が集結し, 「野も山も空いたところがない」と水戸の平塚滝俊が書状に記したほど活況を呈し, 唐入りの期間は日本の政治経済の中心となった⁷⁾.

一最後通牒

年明けて 1592 (天正 20) 年正月, 総 21 軍 (隊) に分けられた約 30 万よりなる征明軍の編成が始まった⁷⁾. 2 月に渡海し半島を伝って明に攻め込む予定で, 4 軍までを先発させることまで決まったが, 速い展開に焦った小西行長と宗義智がまず朝鮮帰服の様子を確かめるべきだと進言して, 計画は急遽, 停止を強いられた⁷⁾. これは彼らが朝鮮通信使が来たことだけをもって朝鮮が入朝した (帰服した) と嘘をついてことを進めていたことを, 秀吉が度外視して明征服を実行に移そうとしていたので, 不安になったためだった⁷⁾.

行長は嘘を取り繕うために帰服した朝鮮が変心したと新たな嘘で説明し、征明軍に道と城を貸すのを拒否していると言ったようである⁷⁾。朝鮮交渉の不首尾に面目を失った行長であるが、責任は朝鮮側に転嫁し、平伏して最後の交渉と相手が従わぬ場合には、自らが先鋒を務めることを願い出た⁷⁾。1月18日、秀吉はそれを許し、両名に3月末までに様子を見極めて復命するように指示⁷⁾。もし朝鮮が従わないのならば、4月1日になったら（まず朝鮮から）「御退治あるべし」と出征開始の号令が出された。これによって征明軍は征朝鮮軍となった⁷⁾。

秀吉が配下の将に伝達した文書に「高麗国の御使」として両名が派遣されたことは確認できるが、1月から3月末までの間、再び玄蘇を派遣した以外は特に行動した様子はなく、行長と義智は朝鮮には赴かなかった⁷⁾。それはすでに無駄であると分かっていたからに他ならない⁷⁾。結局、仮途入明の要求なども平和のためなどではなく、欺瞞を重ねた結果に過ぎなかった⁷⁾。

2月27日、京都で秀吉は東国勢の到着を待っていて家康の手勢が少ないのを怒り不機嫌となったというが、これが俗説としても出陣の延期が続いて人々は不安がっていたようだ⁷⁾。秀吉が吉日である3月1日出陣の儀をするつもりだったが、眼病を患って延期した⁷⁾。3月13日、「高麗へ罷り渡る人数の事」の軍令が発表され、日本軍の先駆衆が9隊に再編成される陣立てが新たに示された⁷⁾。ようやく26日早朝、秀吉は御所に参内して後陽成天皇に朝鮮出兵を上奏して、京を出立した⁷⁾。この間も第一軍（隊）は3月12日に壱岐から対馬へ移動し、後続も渡海を開始。23日からは第一軍は対馬の北端の豊崎に移動して待機していた⁷⁾。

他方、最後通牒の役目を担った玄蘇は改めて朝鮮国王が入朝して服属するか、さもなくば朝鮮が征明軍の通過を許可するように協力を交渉していたが、朝鮮側の返事は要領を得なかった⁷⁾。すでに期日が過ぎた4月7日、玄蘇は対馬へ帰還して朝鮮側の拒絶の意志を伝えた⁷⁾。

道中、緩々と厳島神社に参拝して、毛利氏の接待を受けていた秀吉の大行列が名護屋城に着陣したのは、すでに戦端が切られた後の4月25日であった⁷⁾。

一文禄の役

1592（文禄元）年3月、秀吉は約16万の兵力を9軍に編成し、朝鮮に渡海させた⁸⁾。4月12日、釜山に上陸した宗義智と小西行長の第一軍は、「仮道入明」の最後通牒を朝鮮側に示したが返事なく、釜山城を落とした⁸⁾。ここに第一次朝鮮侵略（文禄の役）が始まる⁸⁾。

このあと、加藤清正、黒田長政らの軍も侵入し、5月3日、朝鮮の都漢城は陥落し、朝鮮国王は平安道に向けて逃亡した⁸⁾。その報告を受けた秀吉は、やがて明を征服したのち、後陽成天皇を北京に移し、日本の天皇は周仁親王か智仁親王とし、養子秀次を中国の関白にして、日本の関白は羽柴秀保（大和大納言）、秀次弟、秀長養子）か宇喜多秀

家を任じ、秀吉自身は日明貿易の港であった寧波に入り、朝鮮は羽柴秀勝（岐阜宰相、秀次弟、秀吉養子）か宇喜多秀家に与えるなどの大陸経略構想を5月18日に示した⁸⁾。

このときすでに、漢城を落とした日本の兵力は、京畿道—宇喜多秀家、忠清道—福島正則、全羅道—小早川隆景、慶尚道—毛利輝元、黄海道—黒田長政、平安道—小西行長、江原道—森吉成、咸鏡道—加藤清正を部将として朝鮮全域に入った⁸⁾。その目的は、朝鮮全域を明征服の足場として固め、釜山から義州までの道筋と秀吉出陣の際の宿所を確保することにあった⁸⁾。そのために、朝鮮農民を農耕につかせて兵糧米をとり、日本軍に反抗する者を処罰する占領政策がとられた⁸⁾。咸鏡道の場合、鍋島直茂は朝鮮農民を人質にとって牢に入れ兵糧米をとっている⁸⁾。

このような侵略行為に対し、朝鮮民衆は両班層に率いられ、義兵を組織して民族的決起を行った⁸⁾。慶尚道の郭再祐の義兵、全羅道の高敬命の義兵は日本軍の侵略の直後に決起したものであり、侵略が奥地へ進むにつれ、義兵の決起は朝鮮全域に広まった⁸⁾。また李舜臣の朝鮮水軍は日本水軍を破って日本の補給路を断ち、明からもいち早く救援軍が朝鮮に入った⁸⁾。

1593（文禄2）年1月、明軍は平壤の小西行長らの日本軍を破って漢城に向けて南下した⁸⁾。これに対し日本軍は、漢城の北方にある碧蹄館で明軍を破り、ここに朝鮮を除外して、日明間で講和交渉の機運が持ち上がった⁸⁾。1593（文禄2）年6月、秀吉は名護屋において明使節に、朝鮮南四道の日本割譲、勘合貿易の復活など7か条の要求を示した⁸⁾。

それとは別に小西行長は、明側から外交にあたっていた沈惟敬と画策し、偽作した秀吉の降表（表とは明皇帝に奉る文書）を家臣内藤如安に持たせて明皇帝のもとへ派遣していた⁸⁾。如安は、釜山周辺に駐屯する日本軍の撤兵、日本は朝鮮と和解し明の宗属国となり、冊封のほか貢市を求めないと誓った⁸⁾。この結果、1596（慶長元）年、明皇帝から「茲ニ特ニ爾ヲ封ジテ日本国王ト為ス」という誥勅が秀吉のもとにもたらされるに至った⁸⁾。

一 慶長の役

自分の要求がまったく無視されたことを怒った秀吉は、翌1597（慶長2）年再び兵を朝鮮に出し、第二次侵略（慶長の役）を起こした⁸⁾。第二次侵略の目的は証明でなく、朝鮮南四道の実力奪取にあった⁸⁾。それゆえ、残虐行為も惨を極め、朝鮮民衆の虐殺、鼻切り、捕虜の日本強制連行などが行われた⁸⁾。

しかし、明・朝鮮側の抵抗も強く、朝鮮南部に侵入した日本軍はほとんど海岸線に釘づけとなった⁸⁾。このときの戦いとしては、南原城の戦い、蔚山の籠城、泗川の戦い、順天の戦い、露梁津の海戦などが知られている⁸⁾。

その間、1598（慶長3）年8月秀吉の死去により、日本軍は朝鮮からの撤退を始めるようになり、同年11月、島津勢の撤退を最後に、7年間にわたる戦争は終わった⁸⁾。

一戦役の影響 日本国内情勢への影響

休戦を挟んで6年に及んだ戦争は、日本・明・朝鮮の三国に重大な影響を及ぼした⁷⁾。留守中の大名領地に太閤検地が行われ、豊臣政権の統治力と官僚的な集団が強化された⁷⁾。しかし戦後にはこの戦争に過大な兵役を課せられた西国大名が疲弊し、家臣団が分裂し内乱が勃発する大名も出る等、かえって豊臣政権の基盤を危うくする結果となった⁷⁾。また、出兵に必要な武器・弾薬・兵糧・戦夫の多くは大名の負担であり、その負担は直接出陣していない領内の家臣や百姓に転嫁された上、実際の戦夫として百姓の動員が行われた⁷⁾。このため、農村では動員に抵抗する動きが発生し、また一度動員されて朝鮮半島に送られた戦夫の中にも逃亡して秘かに日本に逃げ帰るものもいた⁷⁾。

1593（文禄2）年に西生浦倭城にいた加藤清正が1通の書付を見つけた。それは領国・肥後の百姓から清正に随行している人夫に充てて記されたもので、「今なら集団で肥後に逃げ帰っても代官の改めもないあり様なので逃げ帰るのなら今だ」という内容で、百姓の抵抗が留守の代官まで巻き込むものになっていることを示すものだった⁷⁾。帰国した清正は夫役の免除などを行って民心の安定を図るものの、豊臣政権の分裂の影響で有名無実となり、財政難の克服と農村再建が重くのしかかることになるが、出陣した大名が多かれ少なかれ直面した問題であった⁷⁾。

一方で、諸大名中最大の石高を持ちながら、九州への出陣止まりで朝鮮へ出兵しなかった徳川家康が隠然たる力を持つようになった。西国大名が出兵で疲弊した一方で損耗を免れたことが、徳川家康が後に天下を取る要因の一つとなった⁷⁾。五大老の筆頭となった家康は秀吉死後の和平交渉でも主導権を握り、実質的な政権運営者へとの上がってゆく⁷⁾。この官僚集団と家康の急成長は、豊臣政権存続を図る官僚集団（主に石田三成）と次期政権を狙う家康との対立に発展し、1600（慶長5）年の関ヶ原の戦いに至った⁷⁾。戦いに圧勝した家康は日本国内で不動の地位を得、1603（慶長8）年に朝廷より征夷大將軍に任ぜられ徳川幕府を創設した⁷⁾。さらに家康は1614（慶長19）年-1515（慶長20）年に大坂の陣で豊臣氏を滅亡させることで徳川氏による国内覇権を確立、江戸時代が始まった⁷⁾。

また、出兵に参加した大名たちによって連れてこられたり、大名と雇用関係を結んだりして自ら来日した朝鮮人から様々な技能が伝えられた⁷⁾。朝鮮人儒学者との学問や書画文芸での交流、そして陶工が大陸式の磁器の製法、瓦の装飾などを伝えたことで日本の文化に新たな一面を加えた⁷⁾。その一方、多くの朝鮮人捕虜が戦役で失われた国内の労働力を補うために使役され、また奴隷として海外に売られたこともあった⁷⁾。

慣れない異国の戦争は後の台湾出兵・日清戦争と同様に戦死者以上の戦病死を発生させた⁷⁾。1593（文禄2）年二月五日付島津義久や吉川広家に宛てた秀吉朱印状には、これまで動員した船頭・水夫の大半が病死したため、浦々から15歳から60歳までの水夫を動員することを命じている⁷⁾。同年四月十二日付渡海諸将宛秀吉朱印状にも病が蔓延しているので医師20人を派遣するとある⁷⁾。陸でも同年七月二十一日付伊達政宗書状

には腫気という病を得た者は十人中九人が亡くなったとし、また同月二十四日付書状には水の違いで多くの者が病死したとある⁷⁾。ルイス・フロイスの調査によれば、文禄の役で渡海した十五万人の内、死亡者は五万人、その殆どは過労死・餓死・凍死・病死であった⁷⁾。大名に限っても豊臣秀勝・加藤光泰・戸田勝隆・長谷川秀一・五島純玄・島津久保が渡海先で、もしくは渡海先で病を得て帰国後に病死している⁷⁾。

一 明への影響

朝鮮への援兵を、同時期に行われた寧夏の唃廝囉の乱、播州の楊応龍の乱の2つの反乱の鎮圧と合わせて、「万暦の三大征」と呼んでいる⁷⁾。『明史』王徳完伝によると「寧夏用兵（唃廝囉の乱）、費八十余万、朝鮮之役七百八十余万、播州之役（楊応龍の乱）二百余万」、『明史』陳増伝には「寧夏用兵（唃廝囉の乱）、費帑金二百余萬。其冬、朝鮮用兵、首尾八年、費帑金七百余萬。二十七年、播州用兵（楊応龍の乱）、又費帑金二三百萬」とあり、数字に違いはあるが、万暦の三大征の中でもこの戦役が唃廝囉の乱と楊応龍の乱とは比較にならないほど財政上に大きな負担であったと認識されていたことが窺える⁷⁾。これらの膨大な軍事費の支出および戦死者を出したことで皇帝万暦帝の奢侈は明の国力を食い潰し、17世紀前半の女真の強大化に耐え切れないほどの、明の急速な弱体化の重要な原因となったと考えられている⁷⁾。

一 朝鮮半島への影響

朝鮮半島では不平両班や被差別階級、困窮した農民、盗賊による反乱、蜂起が起きた⁷⁾。および朝鮮軍によるその鎮圧、また朝鮮王朝内部の政争による粛清や処刑などが行われ、朝鮮社会の矛盾が噴出した⁷⁾。

朝鮮は極端に中央集権化が進み階級差別と過酷な搾取によって農民が毎年春には必ず飢える（「春窮」）ほどで、国土の開発も怠っていた⁷⁾。また、流通経済が未発達で民衆の生活は自給自足が基本であり銀などの貨幣による取引が成立せず朝鮮民衆とは物々交換などで食料の調達を行わなければならなかった⁷⁾。戦争が開始されると、朝鮮・明軍・日本軍が食料の現地調達を行った⁷⁾。食料不足と治安悪化のために農民が耕作を放棄することで流民となった⁷⁾。

明軍の兵糧供給は朝鮮側が提供したため、朝鮮政府は過酷な食料調達を行った⁷⁾。このため明軍の略奪と合わせて日本軍が侵攻していない平安道も荒廃して人口が激減している⁷⁾。また朝鮮軍より明軍に優先的に食料供給が行われたことから、朝鮮軍の戦意低下は少なからぬものがあつた⁷⁾。朝鮮に駐屯した明軍による朝鮮民衆に対する無秩序な略奪なども横行し、朝鮮の民衆は日本を一番の侵略者としながらも、抑圧してきた朝鮮王朝に反乱を起し、明軍も第二の侵略者であるとして憎んだ⁷⁾。そのため、豊臣軍の首都漢城府に到着より以前に逃亡するために朝鮮王を乗せた馬車が城門から出発より前に、朝鮮の民らが宮殿の中に侵入朝鮮王の財産を入れてあつた倉庫を略奪した⁷⁾。それだけでなく、景福宮、昌徳宮、昌慶宮など三つの宮殿と6つの政府建築物など大小官庁に放火した⁷⁾。特に身分差別に苦しんだ朝鮮の下層民は混乱に乗じて、不満を持っ

ていた朝鮮王朝の官庁や身分を示す書類の所蔵倉庫を焼き払ったためとされる⁷⁾。民衆の放火によって煙と炎が空に上り、1ヶ月経っても火災が続いたほどだった⁷⁾。当時、漢城の王宮と官庁が放火された状況を証言した大司諫の李暨は「民衆の心を見れば賊の刃よりも残酷だから、とても恐ろしい」との記録している⁷⁾。李暨は隋の煬帝と唐の太宗の故事を引用しながら、中国の大軍も高句麗に侵攻したが勝てなかった反面に、朝鮮が日本軍の攻勢に無残にやられたことは民心が乱れて離反して久しいし、諸将がうわさだけ聞いても逃走したせいで進撃できなかったためと指摘し、支配層と民衆間の乖離や綱紀の緩みを嘆いている⁷⁾。

戦功の証明として、はなそぎも行われたが、当初は日本の国内戦同様に非戦闘員である民衆は保護の対象であり殺戮は禁止されていた⁷⁾。慶長の役においては鼻の数で戦功が計られ、老若男女を問わず非戦闘員も対象とされたとされる⁷⁾。削がれた鼻は軍目付が諸大名から受け取り、塩漬けにした上で日本に送られ、のちに耳塚にて弔われたとされる⁷⁾。朝鮮軍に投降し捕えられた日本の将兵(降倭)は当初すぐに処刑されていたが、降倭を利用することを目的として1591年10月に降倭を勝手に殺すことを禁じる命令が出された⁷⁾。以後、降倭のうち砲術や剣術などの技能を有する者は訓練都監や軍器寺に配属され、降倭からの技能習得が図られた⁷⁾。これにより日本の火縄銃の技術が朝鮮に伝わることとなった⁷⁾。また特殊技能のない降倭は北方の国境警備兵や水軍の船の漕ぎ手とされた。降倭の中には朝鮮王朝に忠誠を誓って日本軍と戦うなどして、朝鮮姓を賜り優遇されて朝鮮に定着する者もいた⁷⁾。

戦役以後、朝鮮では日本に対する敵意が生まれ、平和な貿易関係を望む対馬の宗氏も朝鮮王朝に強く警戒され、日本使節の上京は禁じられ、貿易に訪れた日本人も釜山に設けられた倭館に行動を制限された⁷⁾。一方、朝鮮の両班階層(支配層)の間では明の援軍のおかげにより朝鮮は滅亡を免れたのだという意識(「再造之恩」)が強調され、明への恩義を重視する思想が広まり、属国としての立場が強くなった⁷⁾。これは中国との間での朝鮮外交の針路に多大な影響を与えることとなった⁷⁾。

また、文化面でも朝鮮半島に多大な影響をもたらした⁷⁾。唐辛子が文禄・慶長の役の日本軍によって朝鮮半島にももたらされ、キムチ等の韓国・朝鮮料理の礎を築いた⁷⁾。また軍事面では、多くの火器の製造・運用技術が日本人から伝わり、刀剣類についても日本刀を原型とした倭刀等の派生武具が作られた⁷⁾。現在でも多くの城郭跡が朝鮮半島各地に残され日本人による統治の足跡を残している⁷⁾。文禄・慶長の役は現在の朝鮮半島国家(朝鮮民主主義人民共和国、大韓民国)における反日感情の原点とされる⁷⁾。

一朝鮮と後金・清への服属

朝鮮と明が文禄・慶長の役によって国力を疲弊させると、女真族のヌルハチが台頭し、1616年までに明からの独立し、アイシン国(金国・後金)を建国した⁷⁾。1619年の明とアイシン国の戦争であるサルフの戦いで、金は明に勝利する⁷⁾。朝鮮は援軍を明に送っ

ていたが、金に降伏し「朝鮮は戦う意志は無く、明の強制的な要請によって援軍を送った」と弁明した⁷⁾。ヌルハチはこれを許し、後金は朝鮮侵攻を行わなかった⁷⁾。

しかしその後、朝鮮でクーデターが起き、反金・親明政策をとるようになる⁷⁾。1624年の仁祖に対する李适の反乱が起き、すぐ鎮圧されたが、後金に逃げ込んだ反逆者が朝鮮侵攻を進言、ホンタイジが1627年に朝鮮に侵攻する（丁卯胡乱）⁷⁾。後金軍が漢城に到達すると、仁祖は降伏し、後金を兄、朝鮮を弟とする兄弟国としての盟約、朝鮮は王族を人質として差し出すことなどが合意された⁷⁾。しかし、朝鮮には反後金感情が強く残った⁷⁾。

1636年に後金が清と国号を変更し、朝鮮に対して清への服従と朝貢、及び明へ派遣する兵3万を要求してきた際に朝鮮はこれを断り、清は12万の軍で朝鮮に侵入した（丙子の乱）⁷⁾。朝鮮側は45日で降伏し、朝鮮は以後、清の属国となった⁷⁾。仁祖はホンタイジに対し三跪九叩頭の礼をし、清皇帝を公認する誓いをした（大清皇帝功德碑）⁷⁾。清への服属は日本が日清戦争で清に勝利し、朝鮮が清の冊封体制から離脱する1895年まで続いた⁷⁾。

1. 1. 3 明の海禁政策変遷、南蛮貿易、朱印船

一 明の海禁政策

海禁とは、中国明清時代に行われた領民の海上利用を規制する政策のことである⁹⁾。海賊禁圧や密貿易防止を目的とし、海外貿易等の外洋航海、時には沿岸漁業や沿岸貿易（国内海運）が規制された。本来は下海通蕃の禁と呼び、海禁は略称であった⁹⁾。またこれを「領民の私的な海外渡航や海上貿易を禁止する政策」と捉え、江戸幕府の行った国家による対外交流独占政策（鎖国政策）や李氏朝鮮の同様の政策、あるいは元朝の行った商人の出海禁止政策（「元の海禁」）もまた、海禁と位置付けられることもある⁹⁾。

元代末に海賊船が往来し闘争殺傷が繰り返されたことから、泉州に向かう貿易品は全て剽窃に関係するとまで云われ、南洋の海上貿易は危険を極めていた。こうしたことから明代に入ると太祖洪武帝が国令として海禁策を發布し、事実上の貿易禁止となる海上利用制限政策をとった⁹⁾。

海賊禁圧や密貿易防止を目的として明代に幾度も發布された海禁は、海外貿易、沿岸漁業及び沿岸貿易（国内海運）を規制する政策でもあり、中国国内に止まらず南洋を含めた周辺諸国の社会・経済に影響を与えた⁹⁾。

中国人にも出発地の役人の発行した証明書の携行を義務づけ、それに違反した者は辺境地方に追放するという厳格なものだったため、一旦海外に出ると中国に戻らず周辺地域に移住しそこから中国へ密貿易する武装集団の倭寇が生まれた⁹⁾。

明代において海洋政策とされたが、永楽帝の時代になると鄭和南洋派遣（1405年）等の積極的な対外拡大政策を執り、明との交易利益を諸国に説いたことから諸国が訪明するようになると、禁を犯して出海する中国人海商、周辺地域で明の移民船と称された移

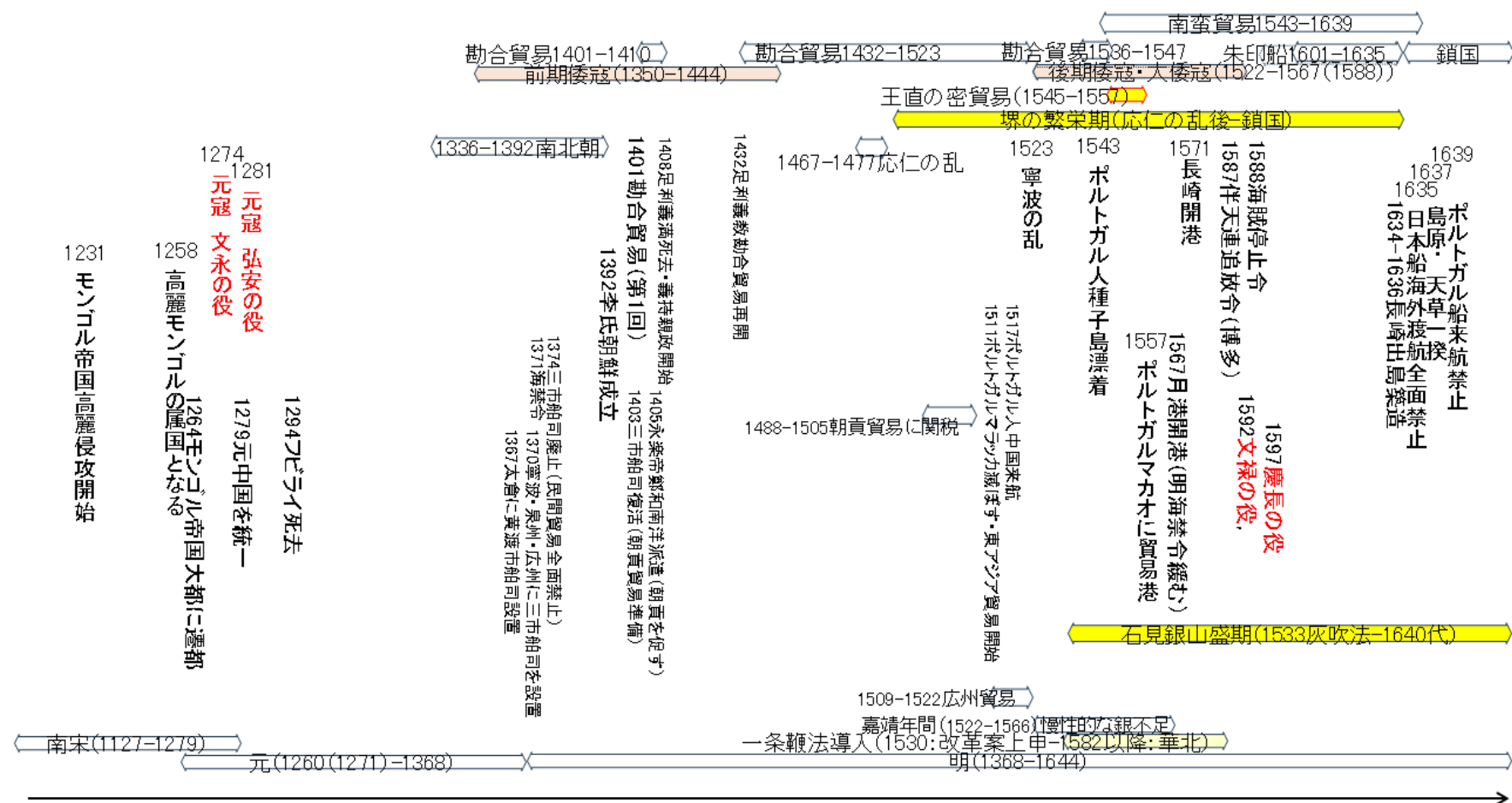


図 1.11-2 元寇～前期倭寇，勘合貿易～後期倭寇（大倭寇）～南蛮貿易・朱印船貿易

ポルトガル・スペイン	明海禁政策	日本
	1367 黄渡市舶司設置 1368 明建国 1370 三市舶司の設置 1371 海禁令 1374 三市舶司の廃止 1381 海禁令 1384 湯和の東南経略 1387 島嶼部住民の強制移住 1390 海禁令 1394 蕃香・蕃貨の使用の禁止 1397 海禁令 1399 靖難の変 1402, 1404 海禁令 1405-1431 鄭和の南海遠征 1431 海禁令1433 海禁令 1449 海禁令, 土木の変 1452, 1459 海禁令 1509 広州開港 1522 ポルトガル船砲撃駆逐事件, 広州の開鎖 1523 寧波の乱, 海禁令 1524 海禁令 1529 海禁令, 広東貿易再開 1533 海禁令 1547 朱紱, 浙江巡撫に着任 1549 朱紱解任, 自殺 1567 月港開港 1592 月港閉鎖, 文禄の役 1593 月港開港 1597 慶長の役 1644 明滅亡	1392 足利義満南北朝合一 1401-1410 足利義満勘合貿易 1410-1432 足利義持親政による勘合貿易中断 1432 足利義教勘合貿易再開 1467-1477 応仁の乱 応仁の乱後 兵庫港にかわり堺が遣明船の発着港となる 1469 1465兵庫を出港した遣明船が大内氏支配の瀬戸内海 避け高知回りで堺に入港 1523 寧波の乱 (勘合貿易1536まで停止) 1526 石見銀山開山 1533 灰吹法石見銀山に伝わり銀産出量増加 1543 種子島にポルトガル人来航 (鉄砲伝来) 1545 王直博多来航 1557 王直投降 1547 最後の遣明船 (勘合貿易) 1568 織田信長上洛 1587 伴天連追放令 1588海賊停止令 1591前後から スペイン船が平戸・薩摩領内に来航 1600 関ヶ原の戦い 1606 スペイン船浦賀来航 (1592) 1601-1635 朱印船貿易 1624 フィリピン (スペイン) との通行関係断つ 1635 日本船海外渡航全面禁止 1637 島原・天草一揆 1639 ポルトガル船来航禁止
1498 ポルトガルのバスコ・ダ・ガマがインドカリカット到達 1510 ポルトガルがゴアを支配下に入れる 1511 ポルトガルがマラッカ滅ぼし東アジア貿易開始 1517 ポルトガル人中国来航 1529 サラゴサ条約 (ポルトガルにスペインのフィリピン領有を 認めさせる) 1543 ポルトガル人種子島来航 1557 ポルトガル, マカオを租借し貿易港 1565 マニラ・アカプルコガレオン (マニラーアカプルコ間貿易 船-1815, アカプルコからの船はメキシコ銀で決済), セブ島に スペイン植民基地 1570 スペインマニラ征服, 1571 マニラ市設置 1591前後から スペイン船が平戸・薩摩領内に来航 1606 スペイン船浦賀来航 17世紀初頭 オランダ, イギリス商人が日本貿易参加 1613 イギリス東インド会社平戸に商館設置 (1623前後閉鎖) 1622 オランダ台湾西方澎湖諸島占領 1624-1662 オランダ台湾統治 (鄭成功の攻撃で駆逐) 1626-1642 スペイン台湾北部占領 (オランダが駆逐)		

図 1.11-3 明の海禁政策, ポルトガル・スペインの進出, 日本の貿易関係

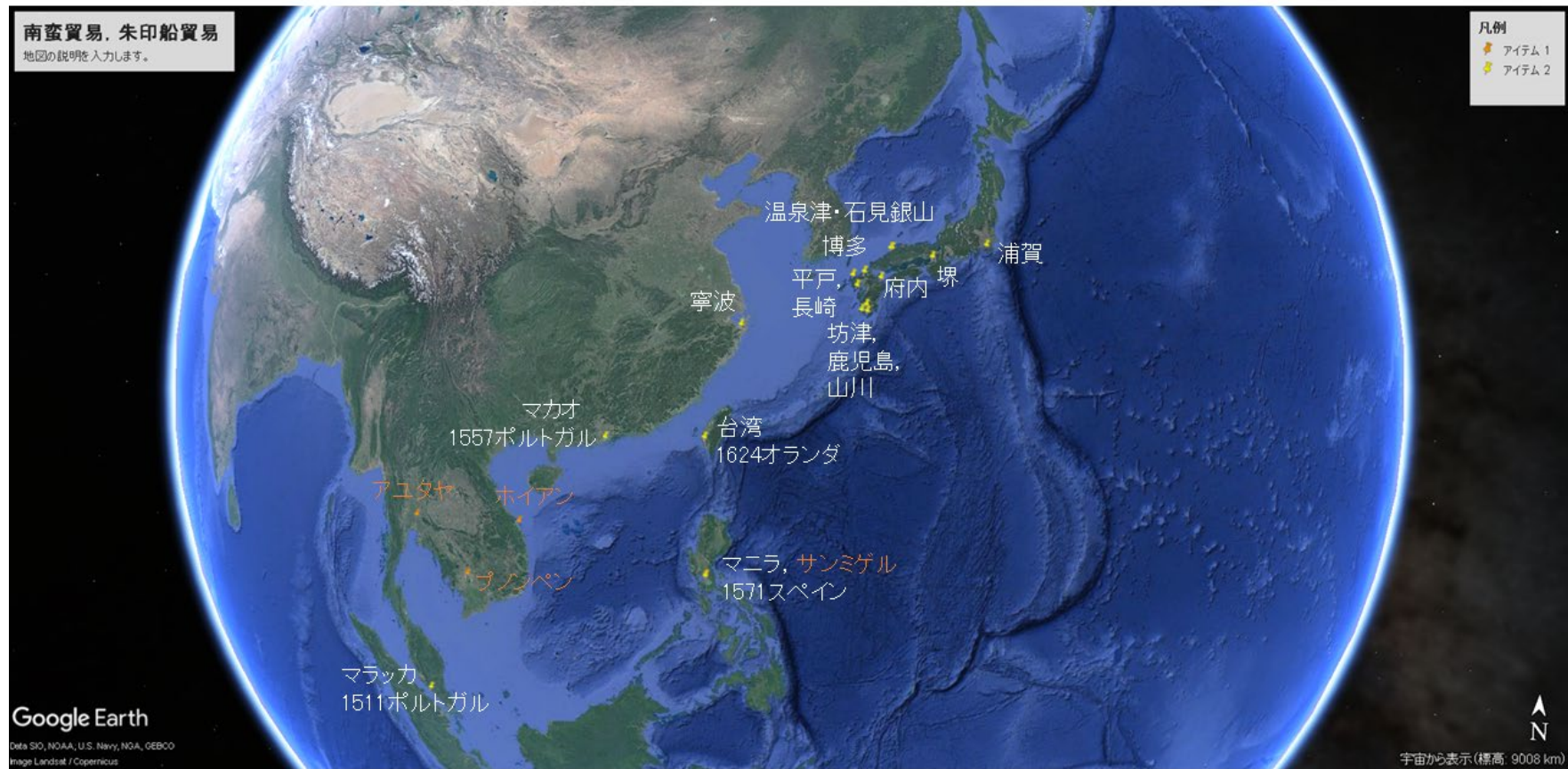


図 1.11-4 南蛮貿易, 朱印船貿易 広域図



図 1.11-5 南蛮貿易, 朱印船貿易 日本

民活動も増加し、それに伴い海禁の発令頻度も増した⁹⁾。

大航海時代の始まりとともにアジア地域に進出したポルトガル等の外圧や沿岸部の有力郷紳と結託した倭寇から、明朝内部からも海禁緩和を嘆願する胡宗憲等も現れ、明代後期には海禁の存廃論争が行われた⁹⁾。

清代にも初期に海外貿易のみならず沿岸海運、沿岸漁業も対象とした厳格な海禁政策が採られた⁹⁾。これは鄭氏政権孤立を目的としたもので、沿岸部への民衆の立ち入りを禁じた遷界令と合わせて厳格な海禁を行うものであったが、密貿易は絶えることがなく、効果は限定的なものに止まった⁹⁾。その一方で海禁政策は国内における銀・銅の不足を招き、経済に混乱を引き起こした⁹⁾。鄭氏政権降服後に海禁は停止されるが、米の海上積み出しを禁じる米禁や南洋海禁（東南アジア渡航の禁止）など、限定的な海禁は行われた⁹⁾。

沿海部の海防や秩序構築を目指した海禁は、明・清両王朝の建国期には一定の役割を果たした⁹⁾。一方で東南アジアの陶磁器産業のように海禁により発展の契機を攫んだ事例も存在し、琉球王朝のように朝貢貿易を許された国家にとっては独占的な貿易を通じて恩恵をもたらすものとなった⁹⁾。

一海禁の確立

元末の反乱集団の中から台頭した朱元璋（洪武帝）は元朝を北へ逐い、1368年に明国を建国する。しかし元末明初の中国沿岸部では前期倭寇が活発に活動しており、『明史』『明実録』に記録されているところによれば洪武元年（西暦1368年）から洪武7年（同1374年）までの間、倭寇の襲撃は23回を数える⁹⁾。さらに「張士誠・方国珍の残党」と呼ばれた沿海部の非農民も倭寇と結んで入寇したため、明朝は倭寇と沿岸部住民の断絶を図って1371年に海禁令を發布し、官民間わず私の出海を禁じた⁹⁾。

海禁は海賊防止と密貿易の取り締まりの二つの機能を兼ね備えた政策であるが、洪武帝が海禁令を発した直接の目的は倭寇の禁圧にあり、当初は密貿易の取り締まり、つまり貿易統制を行う政策ではなかった⁹⁾。貿易統制は市舶司制度と違禁下海律の管轄下にあり、その統制下で民間貿易は認められていた⁹⁾。明朝は建国の前年に太倉に黄渡市舶司を、1370年にそれを発展解消して寧波・泉州・広州に三市舶司を設置し、貿易を奨励しながら関税徴収を行っていた⁹⁾。

しかし倭寇跳梁の収まらぬ中で海禁違反者と違禁下海律違反者の判別は困難であり、貨幣経済の浸食から国内経済を防衛する必要性や交易の利を餌に周辺諸国を朝貢貿易に参加させる狙いもあり、明朝は1374年に三市舶司を廃止して民間貿易を全面的に禁止した⁹⁾。これによって海禁は違禁下海律と一体化して貿易統制の機能も兼ね備え、密貿易の取り締まりを通じて朝貢貿易を補完する政策となって「海禁—朝貢体制」あるいは「海禁＝朝貢システム」と呼ばれている⁹⁾。

洪武帝は各地に水寨を設置して兵船を巡回させ、あるいは島嶼部住民の本土への強制移住を行い、時には漁民の出漁まで禁じ、後に「国初、寸板も下海を許さず」と評される厳格な海禁を行った⁹⁾。沿岸貿易（国内海運）に関しても許可証の所得や航路の厳守などの制約が加えられ、それさえも時には地方官憲によって禁止された⁹⁾。しかし貿易や海運に従事して生計を立てていた沿海部の非農民達にとって海禁は生業を圧迫する政策であり、長い海岸線の監視が困難なこともあって海禁は徹底されず、明朝はその治世を通じて海禁令を繰り返し発せざるを得なかった⁹⁾。

「海禁＝朝貢システム」が最も有効に機能したのは永楽帝の時代である⁹⁾。対外積極策を採った永楽帝は1403年に三市舶司を復活させて朝貢国の入朝に備え、1405年から鄭和艦隊を南海に派遣するなど諸外国に盛んに使者を発して入朝を促し、また東南アジアの中国人海賊の討伐を行った⁹⁾。これにより、洪武期に17ヶ国であった朝貢国は永楽期には60ヶ国にまで急増し、在外華人にも影響を及ぼし彼等の帰国や恭順、あるいは朝貢国による強制送還を引き出した⁹⁾。こうした情勢は中国沿海部住民に出海を躊躇わせるものとなり、しばらくの間「海禁＝朝貢システム」は安定を見せ、海禁令が発せられることはなかった⁹⁾。

一海禁の弛緩

しかし永楽帝が没し、明朝の政策が財政緊縮・対外消極的に転ずると海禁にはころびが出始める⁹⁾。土木の変に象徴されるモンゴルの脅威に北辺防備へ注力を迫られる中、国家財政を圧迫された明朝は北辺を除く朝貢貿易に関し「厚往薄来」から経費削減へ政策の転換を余儀なくされる⁹⁾。

朝貢国は貿易の規模や貢期（入朝頻度）、附搭貨物買取価格を抑制され、さらに弘治年間（1488年-1505年）からは関税まで徴収された⁹⁾。こうした明朝の姿勢は朝貢国の離反を招き、15世紀末時点で入朝を続ける国は日本・朝鮮・琉球等わずか6ヶ国にまで減少していた⁹⁾。1509年からは、広州に外国商船の来航が認められたことから朝貢貿易はさらに衰退していった⁹⁾。洪武期に民間貿易が禁止されてこのかた、在外華人が安全に貿易を行うためには朝貢貿易への参加が必要不可欠であり、朝貢貿易は少なからず彼等により支えられていた⁹⁾。しかし明朝が関税収入目当てに広州を開港すると、煩雑な制約を受けずに合法的に貿易を行う道が開かれ、在外華人は朝貢貿易から撤退していった⁹⁾。

朝貢貿易の衰退とともに密貿易が盛んになっていった⁹⁾。15世紀半ばより海禁を犯し出海する者は増加していたが、15世紀後半より郷紳層が参加を始め、組織化も進んでいた⁹⁾。また出海者の行動も凶暴化を始め、密貿易に止まらず海賊行為も行う者も出現していた⁹⁾。16世紀に入ると中国沿海部では商品経済が急速に発展し、商品作物の栽培や手工業が盛んになり、生産された商品の多くは密貿易を通して海外へ輸出された⁹⁾。

海禁と違禁下海律が一体化してしばらくの間、洪武・永楽両帝の取り締まりによって前期倭寇が鎮静化したこともあり、海禁の主眼は密貿易の取り締まりに置かれていた⁹⁾。しかし海禁が弛緩する中、武装した出海者が密貿易に止まらず時に海賊行為も働くようになると海禁の海防機能の強化が必要とされた⁹⁾。海禁の法的根拠であった違禁下海律は、本来は民間貿易容認下における海商の守るべき手続きと違反時の罰則を定めた法令であり、倭寇等の海賊を取り締まる法令としては必ずしも適切なものではなかった⁹⁾。

明朝は罰則強化などの違禁下海律の修正を進め、弘治 15 年（1500 年）に編纂された問刑条例（明律の修正条例）にその集大成というべき一条が収録される。そこでは商人に止まらず全ての者を対象とし、極刑をもって海賊行為・外国との貿易を同時に禁じ、また出海者との貿易や代理人を通じた貿易も禁じている⁹⁾。これは 15 世紀の中国沿海部の状況、つまり多くの社会的階層に属する者が出海し、時には密貿易、時には海賊行為を働く密貿易と海賊行為が不可分な状況に対応した政策であり、また在地に居ながらにして代理人を通じて密貿易を行っていた郷紳層の動向にも目を配ったものだった⁹⁾。明朝は違禁下海律の再編と同時に海禁令を繰り返して密貿易の抑制を図るが、沿海部では武器・兵船の老朽化や兵員・軍糧の欠乏等から取締りを行える状態ではなく、官兵の綱紀は乱れ、大商・郷紳等と結託して密貿易に便宜を図る等海禁は弛緩していった⁹⁾。

一後期倭寇

嘉靖年間（1522 年 - 1566 年）に入ると広州における外国商船受け入れや日明勘合貿易が中断し、密貿易は益々盛んになっていった⁹⁾。1522 年に屯門島を不法占領していたポルトガル船が明軍に駆逐されると明朝は広州貿易を禁止する⁹⁾。この措置は 1529 年に解かれて貿易が再開されるが、来港商船は新たに貢期と勘合の遵守を求められたため目的地を福建・浙江へ移して密貿易に参加した⁹⁾。

また 1523 年に寧波の乱が起こると日明勘合貿易は停止、1536 年に再開されるが貢期に大幅な制限を加えられ、それも 1551 年に大内氏が滅亡すると途絶える⁹⁾。明朝は寧波の乱を契機に海禁の引き締めを行い、違反者を倭寇とみなして取り締まるが出海する者は増加の一途を辿った⁹⁾。

明代中期に商品経済が発達する中、物流を海運に支えられながら地域間分業は進み、また貿易を通して海外諸国との経済的連関は強まっていた⁹⁾。しかし広州貿易と日明勘合貿易の中断に加え、嘉靖年間に「不許寸板下海」を合言葉に沿岸交易にも規制が加えられると、沿海部住民は生活を圧迫され、出海、密貿易へと追いやられた⁹⁾。

さらに 16 世紀中頃には、石見銀山などの鉱山開発の進行や灰吹法の導入により日本における銀生産量が急増する。明国国内では嘉靖年間には慢性的な銀不足に陥っており、安価な日本銀は中国人海商のみならずヨーロッパ人も惹きつけ、日明貿易への参加を促した⁹⁾。日明貿易における利潤は通常 10 倍程度であったと推定されているがこの時期には 100 倍に上ったともされ、沿海部住民は家業を棄て密貿易に走り、漁船は交易品を

積んで沖合で密貿易船と接触、大商は様々な口実を設けては大船を建造して出海し、郷紳達は密貿易船に自身の旗を掲げて政治力を楯に官憲の干渉を防いだ⁹⁾。

多くの社会的階層に属する者が参加して密貿易は急速に大規模化し、王直や徐海ら頭目が束ねる大勢力も出現した⁹⁾。舟山諸島双嶼港や章州月港などの中国東南沿海部各地には密貿易拠点が出現し、博多商人やポルトガル人等も来航する国際貿易港となった⁹⁾。

明朝はこれらの者達を倭寇（後期倭寇）と見なしていたがその大半は中国人だった⁹⁾。彼等は密貿易に止まらず武装して官兵に抵抗し、時に各地を襲撃して回った⁹⁾。沿海部住民のうち直接密貿易に関わらない者も物資の提供・貨物の運搬等各種サービスを通じてその恩恵を受けており、倭寇に通じて行動を共にした⁹⁾。

こうした事態に明朝は1547年に朱紘を浙江巡撫に任命し厳格な海禁を実施させた⁹⁾。朱紘は双嶼港を襲撃して壊滅させ、李光頭や許棟を逮捕処刑する等海上肅清を断行し、東南沿海地区を閉鎖した⁹⁾。しかし海商・郷紳等と気脈を通ずる中央官僚の弾劾を受けて1549年に罷免され、自殺に追い込まれる⁹⁾。朱紘失脚後、強圧的な取り締まりに対する民衆の反発は嘉靖大倭寇という形で現れ、後期倭寇は最盛期を迎え、各地で猛威を奮った⁹⁾。

一海禁の緩和

洪武帝が海禁を導入した直接の目的は倭寇禁圧にあり、それは嘉靖年間においても変わっていなかった⁹⁾。しかし諸外国との貿易を希求する出海者を倭寇・海寇として扱ったため、海禁はその目論みとは裏腹に倭寇跳梁の原因となっていた⁹⁾。嘉靖年間にもこうした認識を持つ識者は存在し、沿海部を中心に海禁廃止を求める開洋論が唱えられて海禁継続派と盛んに論争が繰り広げられた⁹⁾。海禁廃止派が貿易を認めることで密貿易を抑制しようとしたのに対し、海禁継続派はより厳格な海禁を行うことで沿海部に秩序を再構築しようと主張したが、海禁継続派には洪武帝以来の祖法の墨守を重視する者の他に一部の沿海部郷紳層が加わっていた⁹⁾。

地方官憲に影響力を持つ郷紳達にとって海禁は貿易の障壁ではなく、むしろ競争相手を排除し独占的な貿易を通じて巨利をもたらしてくれる政策だったのである⁹⁾。しかし朱紘の徹底的な取り締まりは彼等にも打撃を与え、郷紳達は朱紘を失脚させ自殺へと追い込む⁹⁾。朱紘失脚後には敢えて海禁を主張するものも絶えて開洋論が優勢となり、1567年に福建巡撫塗沢民が月港開港を上奏すると明朝は海禁を緩和し章州月港から商人の出海を認めた⁹⁾。これは海禁の完全な廃止ではなかったが、明将戚繼光らの活躍や豊臣秀吉の海賊停止令等の影響と相俟って後期倭寇は沈静化していった⁹⁾。

月港開港により、中国人海商は呂宋等東洋21港、暹羅・旧港・柬埔寨等西洋22港の東南アジア43港と台湾2港への渡航が認められた。出国に際しては文引と呼ばれる海外渡航許可証の所得が義務付けられ、新たに設置された海防館が出入国の監督に当たった⁹⁾。文引には姓名・本貫・積荷・渡航先が記載され、渡航先毎に年間発給枚数が定め

られていた⁹⁾。乗員数も船の大きさに応じて上限があり、出港時期と帰港期限も定められ国外での越冬は許されなかった⁹⁾。

数種類に及ぶ関税や文引発給手数料なども徴収されたが月港から出国する者は年々増加し、開港初年度に銀 3000 両であった税収入は 1582 年には 2 万両に達していた⁹⁾。出国先は呂宋が最も多く、スペイン側の記録によると 1575 年には 12 - 15 隻、1599 年には 30 隻が来航しており、これらは主にメキシコ銀を持ち帰った⁹⁾。1592 年の朝鮮出兵により一時停止されるが翌年からまた再開された⁹⁾。

明代には日本や琉球への渡航は認められることはなかった⁹⁾。しかし禁令を犯しても対日貿易を続ける者は絶えず、徳川幕府が朱印状を与えて中国船を招致したこともあって長崎来港中国船は年間 70-80 隻に及んだ⁹⁾。後に清朝が海禁を敷いて弱体化を図る鄭氏勢力も、元はこの対日密貿易を行う海商勢力の一部であった⁹⁾。

ところで、明初より実施されてきた海禁政策ではあるが、「下海通蕃の禁」「海禁」という用語・概念の形成は 16 世紀のことである⁹⁾。16 世紀の海禁存廃論争の中で論者達は当時の沿海部の状況を「下海通蕃」、それを禁ずる弘治間刑条例に示される政策を「下海通蕃の禁」と呼び表し、その略称として「海禁」という用語・概念を形成していった⁹⁾。そのため海禁という用語は海禁政策を導入した洪武期あるいは「海禁＝朝貢体制」が有効に機能していた永楽期というよりも、後期倭寇が跳梁していた 16 世紀の政策を反映している⁹⁾。

論者達が私的に呼び交わしていた「海禁」という用語は、1587 年に刊行された『万曆会典』に「海禁」の一項が立てられたことによって国家公認の政策用語となる⁹⁾。この項は弘治間刑条例を元とし、月港開港に対応して号票（文引）携帯者を海禁の対象外とする例外規定が付け加えられている⁹⁾。この海禁政策は明末まで続いた⁹⁾。

○南蛮貿易，朱印船，ウィリアム・アダムス（三浦按針）

ー南蛮貿易初期

南蛮貿易とは、16 世紀なかばから 17 世紀にかけて、日本とポルトガル、スペインの貿易船との間に行われた交易をいう¹⁰⁾。15 世紀末から 16 世紀にかけ、ポルトガル、スペイン両国は大航海時代の全盛期を迎え、ポルトガル人はインド西岸のゴアに、スペイン人はメキシコに根拠地を置き、貿易とカトリック布教を目的としてアジアでも覇を競った¹⁰⁾。この趨勢のもとに、1543 年（天文 12）ポルトガル人が薩南の種子島に漂着し、日ポ交渉の端緒が開かれた¹⁰⁾。

ポルトガル人は 1557（弘治 3）年、中国人からマカオ居住の許可を得、同地をゴア、マラッカと日本とを結ぶ定期航路の中継地および貿易拠点として発展させ、さらに 1578（天正 6）年には広東市場での交易権を得て日本貿易拡大のための足固めをした¹⁰⁾。彼らの日本貿易が年々盛んになった理由の一つは、当時の明政府が海禁政策をとっていたことで、このため当時途絶していた日明間の貿易を肩代りし、かつ両国間の貿易を中継

する形で進展した¹⁰⁾。ポルトガル商船が日本にもたらした商品は中国およびインドシナ産の生糸、絹織物、綿糸、金、麝香および武器等であり、日本からは銀をはじめ硫黄、蒔絵・扇子等の工芸品を持ち帰った¹⁰⁾。

マカオ在住の住民たちは、1568（永禄 11）年以後に主要貿易品の生糸に関してアルマサンと称する一種の貿易組合を結成し、日本への輸送量を原則として 1600 ピコ（16 万斤、1 ピコ＝100 斤、1 斤＝600g）とし、定期船ナウの船長（カピタン・モール）との間に積荷についての契約を結んだ¹⁰⁾。マカオから派遣された代行人（フェートル）は日本商人と交渉して、パンカードと呼ばれる一括方式によって売買価格を決定し生糸を売却した¹⁰⁾。

九州の諸大名は鉄砲や硝石等の武器弾薬を入手して貿易の利を得ようとし、キリシタン宣教師にキリスト教の布教を許すなどして自領内へのポルトガル商船誘致に努めた¹⁰⁾。とくに肥前大村の領主大村純忠はみずからキリスト教に改宗し、イエズス会の要請をいれて、1570 年（元亀 1）長崎港を開いた¹⁰⁾。翌年ポルトガル商船がはじめて長崎に入港し、同地は一寒村から貿易都市として発展していく¹⁰⁾。

ポルトガル王室は、多年国家に勲功のあった貴族に、恩賞としてカピタン・モールという地位を与えて東洋における植民地を統轄させ、さらに交易船団を監督させて、そこからあがる利益を収得させた¹⁰⁾。日本貿易においても、カピタン・モールが、毎年、官許船で渡来した¹⁰⁾。航海に要する資金は、おもにマカオの有力商人や元老院、各種団体からの出資を集積したもので、日本での利潤は出資額に応じて配分された¹⁰⁾。

渡日の経路は、まずゴアを出帆し、マラッカを経、マカオに寄り、それまで舶載してきたヨーロッパの銀貨やオリーブ油、ぶどう酒や南海産の香料、薬種などを、日本向けの生糸をはじめ、金、絹織物などの高価な商品に積み換え、南方からの季節風によって、6、7 月ごろ長崎に入港、取引ののち、晩秋・初冬の季節風でマカオに戻った¹⁰⁾。

船はナウ（500～1000 トン）とよばれる大型帆船で、満載してきた商品の代価はすべて日本の銀で支払われた¹⁰⁾。その額は毎年 50 万～60 万ドゥカード（国際通貨として用いられたスペイン銀貨の単位で、日本の銀 10 匁前後に換算）に達し、100%以上の純益があがるのもまれではなかった¹⁰⁾。日本からの輸出品の大半はこの銀であって、中国における莫大な銀の需要に応じた¹⁰⁾。以下、小麦、漆器、船材、銅、鉄などをあげうる¹⁰⁾。

中国産の生糸は、終始、日本への輸出品の首位にあったが、17 世紀の初頭、江戸幕府は、糸割符制度を設け、輸入生糸の価格統制を実施した¹⁰⁾。

糸割符は、白糸割符ともいい、江戸幕府によって輸入白糸（中国産の生糸）を統制した貿易仕法¹¹⁾である。それまでポルトガル船が日本貿易を独占し（南蛮貿易）、多額の日本銀が流出していたが、徳川家康が将軍となって幕府を開くや、直ちに主要輸入品である白糸貿易の統制に乗りだし、1604（慶長 9）年、堺、京都、長崎の 3 都市の頭人クラスの町人を糸割符年寄に任命した¹¹⁾。この年寄を中心に富裕な町人層が仲間を組織し（三ヵ所糸割符仲間という）、白糸値段について糸割符年寄を中心にポルトガル商人と

協議して決定した¹¹⁾。糸割符仲間はその白糸を独占的に一括購入し、国内の糸商人や織屋その他貿易商人に売却した¹¹⁾。その間購入価格と販売価格との差益（糸割符増銀）について、一定の高率利潤を確保し、仲間全員にそれぞれの持株に応じて分配した¹¹⁾。このシステムが糸割符制度である¹¹⁾。

3ヵ所の都市の配分は題糸 120 丸が堺、100 丸がそれぞれ京都、長崎と定められた¹¹⁾。この題糸とは輸入生糸の総量 320 分の 120 が堺、320 分の 100 が夫々京都、長崎に案分される定めをいった¹¹⁾。なお当初は白糸以外の諸貨物は自由売買に委ねられていたが、白糸が主要輸入品だったことから、万事他の絹織物等が値段の標準とされていた¹¹⁾。

このように幕府は糸割符制度を利用して、長崎のポルトガル船貿易を長崎奉行（当初は長崎代官）の管理下におき、場合に応じて将軍や幕府の要人の必要とする貿易品を優先的に先買する特権を確保した¹¹⁾。また一部例外的にイエズス会の教会分や、僅少ではあるがポルトガル商人の手もとにも白糸を保留していた¹¹⁾。この糸割符制度で問題になるのは、白糸の販路が糸割符仲間によって短期間に保証されることは、ポルトガル商人も異存はなかったが、糸価の決定をめぐって価格を抑制されることは好まなかったのもので、この両者間に紛争が生じがちなことだった¹¹⁾。1609（慶長 14）年のマードレ・デ・デウス号事件もその一つである¹¹⁾。しかし幕府は 1611（慶長 16）年強硬な態度で糸割符制度のもとでのポルトガル船との貿易を再開する一方、当時日本からの朱印船貿易を盛んにし、また中国船の来航を優遇し、オランダ船、イギリス船も来航して平戸に商館を設置する等、ポルトガル船の貿易独占は打破されていった¹¹⁾。

ーマードレ・デ・デウス号事件

マードレ・デ・デウス号事件は、ノサ・セニョーラ・ダ・グラサ号事件とも呼ばれ、1610（慶長 15）年に起きた日本人によるポルトガル貿易船の爆沈事件¹²⁾である。

事件の発端は、1608（慶長 13）年 10 月 23 日に肥前日野江藩主の有馬晴信が占城（チャンパ）に派遣した朱印船がマカオに越冬寄港中に、日本人船員が取引をめぐって騒擾事件を起こし、それをマカオのカピタン・モール（総司令官）であったアンドレ・ペソアが鎮圧し、このために日本人側に多数の死者が出たことだった¹²⁾。

翌 1609（慶長 14）年 5 月 28 日、ペソアが日本航海の司令官として長崎に来着した¹²⁾。ペソアはマカオでの騒擾事件に関する調書を長崎奉行の長谷川左兵衛藤広に対して提出し、自身が駿府に赴いて大御所の徳川家康に陳弁する申し出をした¹²⁾。この件がポルトガル船貿易の途絶につながることを危惧した藤広は、マカオでの事件の真相は伏せてペソアの書記のマテオ・レイタンを代理人として駿府に遣わせるよう説得した¹²⁾。しかし、レイタンの出発後に家康による商品の先買権行使に不満を抱いたポルトガル商人たちが取引関係の改善と藤広の非を訴えるためペソアが直接駿府に赴くことを決議した¹²⁾。これはイエズス会士の勧告により実現しなかったが、このことで藤広とペソアの関係は悪化した¹²⁾。また、藤広は従来の慣行を破って取引方法を変更したり、持ち込ん

だ品を一方的に購入したりしたため、貿易を阻害されたポルトガル商人の反感を買っていた¹²⁾。そのため、ペソアはレイタンに自由貿易の保証を得ることも命じていたが失敗¹²⁾した。オランダ人の対日貿易参加阻止もかなわず、日本船のマカオ寄港を禁じる同年7月25日付の朱印状を家康から下付されたにとどまった¹²⁾。

藤広は、マカオでの事件に対する報復を考えていた晴信を教唆し、ペソアの捕縛と商船捕獲とを家康に請願させた¹²⁾。晴信に伽羅木購入を委託していた家康は、報復行為によってポルトガル船貿易が断絶することを当初は懸念していたが、ポルトガルと同君連合を組んでいたスペイン商人のマニラ船がポルトガル船に積載されていた生糸などを補完することを保証し、またオランダ船の継続的な来航も期待できるようになったため、晴信に許可を出した¹²⁾。

駿府からペソアに召喚の命が伝えられたが、身の危険を感じたペソアは要請を拒否して船に籠もり、積荷を載せたまま出港の準備を始めた¹²⁾。長崎に到着した晴信は、1609（慶長14）年12月12日に、藤広の支援を得て兵船30艘と1,200人の兵を動員した¹²⁾。日本側はマカオの事件について、責任は船長のみであり、船員（ダ・グラサ号）にはないと判断した¹²⁾。そこで日本側は二人の家臣、林田作右衛門と鬼ノ池九郎右衛門に船長を処罰するよう命じた¹²⁾。林田作右衛門と鬼ノ池九郎右衛門は刀を着物の下に隠した簡単な短刀に持ち替えさせ、船長の身柄を確保するため外交使節団を派遣した¹²⁾。しかし、日本側の船が射程圏内に入っただけで船長が発砲し、大砲で日本船を沈没させるか燃やしたため使者たちはそれ以上近づくことができなかった¹²⁾。12月15日、日本側は外交使節団を派遣することを諦め、6隻の武装した小型船でダ・グラサ号を攻撃し拿捕することにした¹²⁾。戦闘末のポルトガル兵の手に持っていた火薬に日本側の銃弾が当たり甲板に落ち、帆に火がついて船は燃え始めた¹²⁾。船は炎上し、ペソアは火薬庫に火を放つよう命じ船を爆破させて自沈した¹²⁾。戦闘により日本側は久野右衛門と16人の兵士、ポルトガル側は戦闘と沈没で204人の兵士が死亡した¹²⁾。

この戦闘の際、藤広の弟・長谷川忠兵衛は、小船2艘を並べ井楼を組んで1艘の船とし、ダ・グラサ号に漕ぎ寄せて乗り移り、船主按針を討ち取ったという。この事件により、ポルトガル船の長崎来航が2年間中断した¹²⁾。ポルトガルの貿易船は1607（慶長12）年と1608（慶長13）年にも欠航していたため、ポルトガル船からの生糸は、1612（慶長17）年までの5年間日本へ輸入されることはなかった¹²⁾。

またそれまで家康の信任が厚かった通詞のジョアン・ロドリゲス神父が、藤広と長崎代官であった村山等安の中傷によって、1610（慶長15）年にマカオに追放された¹²⁾。このことで幕府は長崎貿易におけるポルトガル商人の仲介者を失ったが、マカオ市は貿易再開のため、1611（慶長16）年にポルトガルの艦隊司令官のドン・ヌーノ・ソウト＝マヨールをゴアのインド副王ルイ・ロウレンソ・デ・タヴォラの使節として派遣した¹²⁾。ソウト＝マヨールらは6月19日に薩摩に上陸し、島津氏の援助により駿府に到着¹²⁾した。7月1日に家康に謁見し、江戸で将軍徳川秀忠にも謁見した¹²⁾。インド副王とマカ

オ市参事会の書簡を差し出し、マカオでの騒擾事件に対するポルトガル側の措置について弁解し、同時にダ・グラサ号爆沈に対する損害賠償と藤広の長崎奉行罷免を要求した¹²⁾。幕府側は、事件の責任は全てペソアにあったとして取り合わなかったが、ポルトガルとの貿易再開は許可し、「売買法度以下、如前規可無相違者也」という朱印状を与えた¹²⁾。家康は追放されたロドリゲスに代わって、イギリス人のウィリアム・アダムスを重用した¹²⁾。ロドリゲスを失ったことにより、イエズス会とキリシタン界は、幕府に対する有力な窓口を失った¹²⁾。

一 南蛮貿易後期

17世紀に入ると、長らく来航を停止していた中国のジャンク（戎克、独特の帆船）が日本貿易を再開し、朱印船貿易に代表される日本人自身の海外進出も盛んになった¹⁰⁾。さらに1600（慶長5）年、オランダ船リーフデ号の漂着を契機として、オランダ、イギリスなどプロテスタント諸国が日本市場に参加するに至ったことは、南蛮貿易にとり大いなる脅威であり、その存在価値を低下せしめた¹⁰⁾。イギリス、オランダ両国は、ポルトガルの対日独占貿易態勢を打破しようとして、カトリック宣教師を媒介とする「侵略的野心」を幕府に鼓吹する一方、南海においては、その機動力をもってポルトガル船を襲撃し、略奪した¹⁰⁾。このために、マカオ市では、ゴアからの補給や資金源をしばしば断たれ、貿易資産として、日本の商人からの多額の借財を余儀なくされた¹⁰⁾。その商利息や糸割符制度に起因する純益減少のために、ポルトガル商人のなかには、債務履行に窮する者が続出し、南蛮貿易の衰微に拍車がかかった¹⁰⁾。

1614（慶長19）年のいわゆる大追放（高山右近ら多数の信者や宣教師をマニラ、マカオに追放）によって、キリシタンの勢力は急速に弱まるであろうとの幕府の推測に反し、国外から日本に潜入する宣教師は後を絶たなかった¹⁰⁾。この潜入を助ける役割を果たしていた南蛮船の来航は、幕府の嫌悪するところであり、1624（寛永元）年まずスペイン人の対日貿易が断たれ、さらに翌年以降、貿易のために渡来するポルトガル人に対する取締りが行われた¹⁰⁾。日本貿易の存続を死活の問題としてとらえるマカオ市当局者の懸命の努力もむなしく、ポルトガル人は、1634（寛永11）年以降、長崎湾の出島に隔離され、一般日本人との接触も遮断されて、厳しい監視下に置かれた¹⁰⁾。さらに1633（寛永10）年から1636（寛永13）年までの間、幕府は鎖国令を発し、貿易に関する取締りをいっそう厳重にした¹⁰⁾。1637（寛永14）年の島原・天草一揆を機に、幕府はついに、ポルトガル船による貿易の利を捨てて、キリシタンの根絶を図ることを決意し、1639（寛永16）年、ポルトガル人の来航を、死罪をもって禁ずるに至った¹⁰⁾。翌1640（寛永17）年、貿易の再開を嘆願する目的で来日したポルトガル使節の一行は、下級船員を除いて、ことごとく処刑され、ここに1世紀にわたった南蛮貿易は終焉を迎えた¹⁰⁾。

ーウィリアム・アダムス（三浦按針）

ウィリアム・アダムス（三浦按針）は、江戸時代初期に徳川家康に外交顧問および通訳として仕えたイギリス人の航海士、水先案内人、貿易家¹⁵⁾である。英国国教会（聖公会）の信徒¹⁵⁾である。日本に初めて来たイギリス人で、サムライの称号を得た最初の欧州人である¹⁵⁾。日本で英学を教えるとともに、徳川家康の要請から西洋式帆船（ガレオン船）を建造し、日本の造船史上で特筆すべき業績を上げたといわれる¹⁵⁾。また、日本とオランダ、イギリス両国との国交樹立の懸け橋となった人物であり、サツマイモを日本に伝えた人物としても知られる¹⁵⁾。

大航海の時代が進展する雰囲気胸を踊らせたアダムスは、航海を共にしたオランダ人船員たちと交流を深める中で、ロッテルダムから極東を目指す航海のためにベテランの航海士を探しているという噂を聞きつけ、弟のトマスらと共に、1598年にロッテルダムに渡りオランダの東洋遠征隊に志願する¹⁵⁾。航海は5隻からなる船団で行われることになっていた¹⁵⁾。5隻は、ホープ号（"希望"の意・旗艦）、リーフデ号（"愛"の意）、ヘローフ号（"信仰"の意・ロッテルダムに帰還した唯一の船）、トラウ号（"忠誠"の意）、ブライデ・ボートスハップ号（"良い予兆"あるいは"陽気な使者"の意）¹⁵⁾である。

司令官のジャック・マフによってアダムスはホープ号の航海士（主任航海長）として採用された¹⁵⁾。当時のイギリスはスペインやポルトガルとは敵対していたが、オランダとは友好的で、イギリス人がオランダの船艦のリーダーになることは不思議ではない状況だった¹⁵⁾。こうして1598年6月24日、船団はロッテルダム港を出航した¹⁵⁾。

しかし航海は惨憺たる有様で、マゼラン海峡を抜けるまでにはウィリアムとトマスの兄弟はリーフデ号に配置転換されていたが、トマスが最初乗船していたトラウ号はポルトガルに、ブライデ・ボートスハップ号はスペインに拿捕され、1隻はぐれたヘローフ号は続行を断念してロッテルダムに引き返した¹⁵⁾。生き残った2隻で太平洋を横断する途中、ホープ号も沈没してしまい、極東に到達するという目的を果たしたのはリーフデ号ただ1隻となった¹⁵⁾。その上、食糧補給のために寄港した先々で赤痢や壊血病が蔓延し、インディオの襲撃に晒されたために次々と船員を失っていき、トマスもインディオに殺害されてしまう¹⁵⁾。こうして出航時に110人だった乗組員は、日本漂着までには24人に減っていた¹⁵⁾。

関ヶ原の戦いの約半年前の1600（慶長5）年3月16日、リーフデ号は豊後国臼杵の黒島に漂着した¹⁵⁾。自力では上陸できなかった乗組員は、臼杵城主・太田一吉の出した小舟でようやく日本の土を踏んだ¹⁵⁾。一吉は長崎奉行の寺沢広高に通報した¹⁵⁾。広高はアダムスらを拘束し、船内に積まれていた大砲や火縄銃、弾薬といった武器を没収したのち、大坂城の豊臣秀頼に指示を仰いだ¹⁵⁾。この間にイエズス会の宣教師たちが訪れ、オランダ人やイギリス人の彼らを即刻処刑するように要求した¹⁵⁾。

結局、五大老首座の徳川家康が指示し、重体で身動きの取れない船長ヤコブ・クワッケルナックに代わり、アダムスとヤン＝ヨーステン・ファン・ローデンスタイン、メル

キオール・ファン・サントフォールトラを大坂に護送させ、併せて船も回航させた¹⁵⁾。当時、オランダとイギリスはスペインやポルトガルとは覇権を争うプロテスタントの国で、カトリックの国ではなかったことから、イエズス会の宣教師たちは、アダムスらによって家康に対して、カトリックに対して誤った教理を吹き込まれるのを恐れ、彼らとの交流に反対し、アダムス以下、リーフデ号の乗組員であるイギリス人やオランダ人を処刑するように家康に申し出た¹⁵⁾。また、イエズス会は一人の神父を派遣してアダムスに日本を去るよう説得交渉などを行った¹⁵⁾。さらに最終手段として、プロテスタントからカトリックへと改宗するように迫ったが、これも失敗に終わった¹⁵⁾。

1600（慶長 5）年 3 月 30 日、家康は初めて彼らを引見する¹⁵⁾。イエズス会士の注進でリーフデ号を海賊船だと思い込んでいた家康だったが、路程や航海の目的、オランダやイングランドなどプロテスタント国とポルトガル・スペインらカトリック国との紛争を臆せず説明するアダムスとヤン＝ヨーステンを気に入って誤解を解いた¹⁵⁾。同時に、アダムスらに対するカトリック宣教師とポルトガル人らの敵意は、折りあるごとに家康の心に疑惑の種をまくこととなった¹⁵⁾。しばらくアダムスら乗組員たちを投獄したものの、執拗に処刑を要求するカトリック宣教師らを黙殺した家康は、幾度かにわたって引見を繰り返した後に釈放し、城地である江戸に招いた¹⁵⁾。

江戸でのアダムスは帰国を願い出たが、叶うことはなかった¹⁵⁾。代わりに家康は米や俸給を与えて慰留し、外国使節との対面や外交交渉に際して通訳を任せたり、助言を求めたりした¹⁵⁾。またこの時期に、外交についてだけでなく、幾何学や数学、航海術などの英学を家康以下の側近に授けた¹⁵⁾。やがて江戸湾に係留されていたリーフデ号が沈没すると、船大工としての経験を買われて、西洋式の帆船を建造することを要請される¹⁵⁾。永らく造船の現場から遠ざかっていたアダムスは、当初は固辞したものの受け入れざるを得なくなり、伊東に日本で初めての造船ドックを設けて 80t の帆船を建造した¹⁵⁾。これが 1604（慶長 9）年に完成すると、気をよくした家康は大型船の建造を指示、1607（慶長 12）年には 120t の船舶（ガレオン船）であるサン・ブエナ・ベントゥーラを完成させる¹⁵⁾。この功績を賞した家康は、さらなる慰留の意味もあってアダムスを 250 石取りの旗本に取り立て、相模国逸見に采地も与えた¹⁵⁾。また、三浦按針（"按針"の名は、彼の職業である水先案内人の意。姓の"三浦"は領地のある三浦郡にちなむ）の名乗りを与えられ、異国人でありながら日本の武士として生きるという数奇な境遇を得たのである¹⁵⁾。のち、この所領は息子のジョゼフが相続し、三浦按針の名乗りのジョゼフに継承されている¹⁵⁾。

1609（慶長 14）年、オランダとの交易を希望した家康の求めに応じてオランダ国王使節が来日する¹⁵⁾。家康のいる駿府城で外交顧問であるアダムスの協力のもとで日本とオランダとの国交が結ばれオランダの通商が許されると、アダムスはオランダ東インド会社日本支店となる肥前国松浦郡平戸島のオランダ商館設置に携わった¹⁵⁾。家康は、アダムスを顧問にしたことによって、それまで以上に遠い海の彼方の国々へと視野を拡大

していった¹⁵⁾。スペインが誇る無敵艦隊がイギリスに敗れたことで世界の覇権地図が大きく塗り替えられたことや、イギリスやオランダが新たに東洋を目指して進出していること、加えて、キリスト教にもカトリックだけでなくプロテスタントの存在があることなど、家康は当時の世界情勢をかなり正確に理解していた¹⁵⁾。

1611（慶長 16）年、スペイン使節が来日して諸港を測量するが、このことはこれまでカトリック教会からの挑発に耐え続けたアダムスにとって反撃の機会となった¹⁵⁾。スペイン使節が港を計測する目的を家康から訪ねられたアダムスは、「エスパーニャ（スペイン）は、まず托鉢修道士たちを派遣し、彼らの後で兵士たちを送り込みます¹⁵⁾。このようなやり方で外国を支配下に入れていきます¹⁵⁾。そのために各港にどの船が入港できるか知るためです。」と、すべてのカトリックの宣教師を国外に追放すべきであると答えた¹⁵⁾。

同 1611（慶長 16）年、イギリス東インド会社はアダムスがイギリス本国に送った書簡によって日本の事情を知り、イングランド国王ジェームズ 1 世の許可を得てアダムスを仲介人として日本との通商関係を結ぶ計画を立て、イギリス艦隊司令官ジョン・セーリス（英国国教会信徒）を日本に派遣することとなった¹⁵⁾。これを受けて、同年 4 月 18 日にセーリスは、ジェームズ 1 世の国書を持ってイギリス東インド会社のクローブ号を指揮してロンドンを出航し、マダガスカルやバンテン（バンタム／ジャワ）に寄港して貿易を行ったのち、1613（慶長 18）年 6 月 11 日に平戸に来航する¹⁵⁾。クローブ号は日本に初めて来航したイギリスの商船である¹⁵⁾。アダムスは、セーリスらイギリス使節一行に付き添い、駿府城での家康らとの謁見を実現させると、その後、使節は家康から貿易を許可する朱印状を取りつけることに成功し、イギリスは日本との通商許可を得られた¹⁵⁾。同年、セーリスは上記オランダ商館の近くでアンドレア李旦の屋敷を借りて邸宅とすると、ここにイギリス商館（イギリス東インド会社日本支店）を設置した¹⁵⁾。商館長にはリチャード・コックス（英国国教会信徒）を任命し、6 人の部下を付け、アダムスも商館員として採用され、顧問を務めた¹⁵⁾。その後、商館はイギリスに正式に買い取られ、イギリス人商館員や日本人使用人も増員された¹⁵⁾。

1614（慶長 19）年のクローブ号帰還の際には、一緒に帰国できる許可が日英両方から出たが、同船司令官のジョン・セーリスと馬が合わず、帰国を見送った¹⁵⁾。セーリスは何事も日本式を強要するアダムスが気に入らず、アダムスはセーリスを生意気で無礼な青二才として嫌っていた¹⁵⁾。一行が去ったあとは、それまで手伝っていたオランダ商館より安い賃金だったが、母国イギリス商館の仕事を手伝った¹⁵⁾。

平戸イギリス商館長のリチャード・コックスは、平戸と東南アジア間の交易ルートを構築しようとしていたが、コックスは 1614（慶長 19）年 7 月に平戸で 200 トンほどの平底帆船（中国のジャンク船）を 2 千テールで買い入れると、イギリス商館員のアダムスに改造させて、「シー・アドヴェンチャー」と命名した¹⁵⁾。遠洋航海用に改造されたシー・アドヴェンチャー号の船長にアダムスが就いたほか、東インド会社の代表として

リチャード・ウィッカムとエドワード・セーリス、また日本人の乗務員が 60 名ほど、さらに日本人商人を何名か乗せて、1614（慶長 19）年 11 月 17 日にタイ（当時・シャム）を目指して平戸の河内浦を出航した¹⁵⁾。

わずか 2 日をして暴風雨に遭って女島（長崎南西部の海食崖の島）の南方で航行が困難となり、漏水もひどく水の汲み出しも難儀だった¹⁵⁾。同月 22 日には、船は奄美大島の北西にある笠利湾の港に一旦停泊したが、船の補修に向かない地であることがわかり、改めて琉球の那覇を目指すこととなった¹⁵⁾。同年 11 月 27 日にシー・アドヴェンチャー号は那覇に到着した¹⁵⁾。那覇に入港したアダムスらは、琉球王の尚寧王の許可を得て積荷を陸揚げし、船体の修理にとりかかったが、資材の供給遅い上、ようやく資材が届いても質のよいものでなかった¹⁵⁾。北の季節風の時期が過ぎてしまうと、タイへは向えなくなる状況であったが、1615（慶長 20／元和元）年 2 月になっても出航できず、季節風の時期が過ぎていた中、同月 21 日に首里から尚寧王の使者が来て、3 か月後には中国から貿易船がくる予定であり、港に別の外国の船が停泊していることが分かると、商いに支障が出るため、アダムスらに奄美大島へ移動するように伝えたが、それでも修理が捗らない状況であった¹⁵⁾。尚寧王からは首里での饗宴に出席するよう誘いもあったが、船の修復が終わらない中で誘いを断った¹⁵⁾。そうしている間に、大坂冬の陣で豊臣側が敗北し、徳川側が勝利した情報がアダムスに入ってきた¹⁵⁾。同年 5 月 12 日（旧暦 4 月 15 日）アダムスらは、日本に帰帆するため、物資を船に詰めこみ 13 日に那覇を出航する予定であったが、大坂冬の陣の情報を得たことから、出航をしばらく見送り薩摩から那覇にきた奉行らから情報収集することにした¹⁵⁾。

同年 5 月 21 日に、シー・アドヴェンチャー号はおよそ 5 ヶ月ぶりに日本に向けて出帆し、1615（元和元）年 6 月 10 日（旧暦 5 月 15 日）に平戸に帰港した¹⁵⁾。この航海は、わずかな小麦と龍涎香（クジラの腸内に発生する結石から成る香）を積んで日本に帰っただけで、商業的には失敗に終わった¹⁵⁾。しかし、この時、アダムスはサツマイモの根菜を日本に持ち帰り、それがコックスにより平戸のイギリス商館の庭に植え付けられた¹⁵⁾。サツマイモは同時期に薩摩藩にも伝わったとされるが、このアダムスによる平戸への移入も日本に初めてサツマイモが伝来した起源ともされている¹⁵⁾。

平戸には、国内最初の甘藷畑跡である「コックスの甘藷畑跡」が残っている¹⁵⁾。

なお、シャムへの第一回航海は失敗に終わったが、1615（元和元）年 12 月 7 日より翌 1616（元和 2）年 7 月 22 日まで、シー・アドヴェンチャー号による同じく平戸発の第二回シャム航海は成功した。まだ、三年一か月（1613（慶長 18）年 11 月より 1616（元和 2）年 12 月まで）の会社勤務を決算した後、別のジャンク船を自分で買い取り、「ギフト・オヴ・ゴッド」号に改名、1617（元和 3）年 3 月 23 日より 8 月 11 日まで平戸発で交趾に航海した。

家康に信頼された按針だったが、1616（元和2）年4月に家康が死去、跡を継いだ徳川秀忠をはじめ江戸幕府の幕臣たちが海外貿易を幕府に一元化する目的で貿易を長崎と平戸の二港のみに制限すると、幾度も幕府に方針の転換を説いたが相手にされず、また秀忠との目通りも叶わず、按針の立場は不遇となった¹⁵⁾。以降の按針の役目は天文官のみとなったが、幕府や次期将軍候補の徳川家光らに警戒された¹⁵⁾。按針は憂鬱な状態のまま、1620（元和6）年4月24日に平戸で死去した（満55歳没）¹⁵⁾。

1623（元和9）年のアンボイナ事件（オランダ領東インド（現インドネシア）モルッカ諸島アンボイナ島にあるイギリス東インド会社商館をオランダが襲い、商館員を全員殺害した事件）により、東南アジアや東アジアにおけるオランダの覇権が強まり、イギリスはそこから撤退せざるを得なくなり、日英関係も断絶することとなった¹⁵⁾。オランダとの貿易を重視していた江戸ではあったが、1646（正保3）年にはイギリスの鉄鋼一族の探検家ロバート・ダドリーが著書『海事辞典』の中で江戸の地図を発表している¹⁵⁾。

一 朱印船

「御朱印船」ともいう¹³⁾。朱印船とは近世初頭において政府から「異国渡海御朱印状」といわれる外国向け（正しくは南洋諸地域向け）の渡航証明書、あるいは船籍証明書を与えられて渡航した船舶をいう¹³⁾。この場合、上記の朱印状を発行した日本の政府と、その効力を認めようとする相手国の政府との間に、相互にこの「朱印状」についての了解、承認、あるいは協定の成立が前提となっていた¹³⁾。

朱印船制度は1592（文禄元）年豊臣秀吉によって創設されたといわれていたが、その後の研究で1592（文禄元）年ではないが、1592（文禄元）-1595（文禄4）年の間に成立したとされた¹³⁾。しかし秀吉の朱印のある朱印状は今日1通も見られず、秀吉が創設したことを傍証する当時の記録、文書も存在しないことから、この制度は徳川家康によって1601（慶長6）年の創設であるとする学説が有力となった¹³⁾。

江戸幕府では朱印船制度の創設は1601（慶長6）年としている（「通航一覧」）。それに家康とフィリピン長官との間に、また安南国（ベトナム）王との間に、朱印船制度の協定が成立したのも1601（慶長6）年であり、今日残存する最古の家康の「異国渡海朱印状」は1602（慶長7）年のもので、以後年々の朱印状が前田育徳会や相国寺その他に残存している¹³⁾。

1601（慶長6）年以前の南方諸地域への渡航船は、史料では「渡唐船」と呼ばれ、私貿易船として海賊船と区別されていたが、「朱印船」とは呼ばれてはいなかった¹³⁾。朱印船は1601（慶長6）年以後鎖国政策の展開した1635（寛永12）年までつづけられ、その渡航総船数は350～360艘とされ、年平均約10余艘が従事し、そのなかに西南大名、幕吏、内外の豪商などが朱印船主として活躍していた¹³⁾。

朱印船の渡航が詳細に知られるのは1604（慶長9）年より1616（元和2）年までの期間で、以心崇伝の「異国御朱印帳」「異国渡海御朱印帳」に、年度別・地域別に記録さ

れている¹³⁾。朱印船の渡航地は安南国の東京（トンキン）、交趾（コーチ）国のツアーン、フェフォ、柬埔寨（カンボジア）国のプノンペン、暹羅（シャム）国（タイ）のアカタヤ、呂宋（フィリピン）のマニラ郊外のディラオやサン・ミゲルなどである¹³⁾。

1615（元和元）-1626（寛永3）年代の主流をなした朱印船主は、長崎の末次平蔵、船本弥平次、荒木宗太郎、糸屋随右衛門、京都の角倉了以・与一、茶屋四郎次郎、伏見屋、堺の伊与屋などである¹³⁾。朱印船を経営する場合、船主は幕府より朱印状の交付を受け、船舶や資本銀や商品を準備し、船長や船員を雇い入れ、ついで貿易を希望する商人を募集して客商とし、船賃をとって同乗させた¹³⁾。船の規模は茶屋船の場合、乗員は300人余、船の長さ45m、幅8.1mであった¹³⁾。

家康は当初は積極的に朱印船貿易を奨励したが、1609（慶長14）年ごろより諸大名の活動を抑制するようになった¹³⁾。大坂の陣（1614（慶長19）・1615（慶長20・元和元））以後は幕府の貿易統制が厳しくなり、将軍や幕府と懇意な直轄都市の豪商に限られた¹³⁾。

また南方諸地域でも日本の朱印船の経済力をおそれて排除するようになり、各地で彼我の間にトラブルが生じていたし、日本の禁教政策の強化や武器輸出の禁制の徹底化などのこともあって、1631（寛永8）年奉書船制度による貿易の制限に改められたが、1635（寛永12）年奉書船の海外渡航は全面的に禁止された¹³⁾。

1. 1 1. 4 石見銀山

ー石見銀山の歴史

文献史料によると、石見銀山は1527（大永7）年に発見され、それ以後本格的に開発が開始された¹⁴⁾。14世紀初め頃に地表に露出した自然銀を採掘したとの伝承もあるが、明確ではない¹⁴⁾。銀鉱山の開発を開始したのは、当時、日本最大の貿易港であった博多の豪商神屋寿禎である¹⁴⁾。寿禎は、中国・朝鮮への主要な輸出品であった銅を入手するために、石見地方の東隣に当たる出雲地方に向けて日本海の沿岸を航行していた際に、南の山に霊光を発見して銀山の存在を知ったとされている¹⁴⁾。

開発当初、寿禎は銀山から直線距離にして約6km西方に当たる鞆ヶ浦の港へと銀鉱石を搬出し、本拠地であった博多へと船で送り出した¹⁴⁾。これによって、鞆ヶ浦には多くの家屋が建ち並び、繁栄したと伝えられている¹⁴⁾。また、文献によれば、この頃、石見銀山近隣の日本海沿岸には中国や朝鮮の船が来航したことが知られる¹⁴⁾。

神屋寿禎が銀山を開発した16世紀前半において、石見地方を守護職として支配していたのは戦国大名大内氏であった¹⁴⁾。大内氏は、石見地方の西に接する周防・長門地方を中心に勢力を誇った日本国内でも有数の大名であった¹⁴⁾。また、大内氏は博多を拠点として中国・朝鮮と貿易を行ったことでも知られる富裕な大名であった¹⁴⁾。神屋寿禎は大内氏の保護の下に活躍した豪商であり、中国貿易とも深く関わっていた¹⁴⁾。

1533（天文2）年に神屋寿禎は博多から石見銀山へと技術者を送り込み、朝鮮から伝来したとされる灰吹法の技術を用いて現地で銀精錬を行わせるようになった¹⁴⁾。この

ことによって銀の生産量が飛躍的に増大し、1530年代後半には、生産した銀の一部を成す大内氏への毎年の献上銀が16kgから80kgへと急増したことが記録されている¹⁴⁾。大内氏は石見銀山とその周辺の地域に代官を派遣して支配していたが、さらにその外側の地域には、大内氏の指揮下にはあるものの、自立性の強い封建領主たちが存在した¹⁴⁾。彼等は、しばしば独自の政治的・軍事的行動を起こす存在でもあった¹⁴⁾。1530年代末から1540年代にかけて、彼等は大内氏の銀山支配をたびたび脅かした¹⁴⁾。石見銀山の中心にある山吹城をはじめ、その周辺にある矢滝城・矢筈城・石見城などは、彼らの動きから銀山を守備するための軍事施設であった¹⁴⁾。

石見銀山は、16世紀の日本において銀製錬及び精錬の技術的先進地であった¹⁴⁾。記録によると、既に1540年代には石見銀山に技術力の高い製錬及び精錬技術者の職人組織があり、国内の他の鉱山で採取された鉱石の鑑定が行われていたことが知られる¹⁴⁾。

1550年代に内紛によって大内氏が滅亡すると、石見地方の東方の出雲地方を本拠地とする戦国大名尼子氏が石見銀山に侵入し、大内氏に代わって銀山の支配権を掌握した¹⁴⁾。尼子氏の支配は約5年間継続したが、1562（永禄5）年には石見地方の南に隣接する安芸地方の大名毛利氏が争乱状態にあった石見地方を軍事的に制圧し、石見銀山の支配権を確立した¹⁴⁾。このような戦国大名の石見銀山を巡る争奪の過程において、銀山の支配権を奪取するのに重要な軍事的役割を果たしたのが矢筈城や山吹城であり、これらの城を巡って激しい攻防が繰り返された¹⁴⁾。この戦闘の結果、1561（永禄4）年には毛利軍が銀山地区に侵入し、これを手中に収めた¹⁴⁾。

銀山を制圧すると、毛利氏は1562（永禄5）年に天皇・室町幕府等に対して石見銀山を寄進し、生産した銀の一部を献上すると共に、自らも生産した銀の多くを軍事費として用いた¹⁴⁾。毛利氏は、石見地方を制圧した後に、石見銀山から西へ直線距離にして約9kmの位置に当たる温泉津や沖泊に家臣を置き、石見銀山とその周辺地域の支配を行った¹⁴⁾。これを契機として、16世紀後半には銀山から中継地である西田の町を經由して温泉津・沖泊に至る街道が整備され、銀の搬出のみならず、銀山で必要とされる消費物資・生産用物資の搬入が行われるようになった¹⁴⁾。温泉津は温泉地であると共に、日本海沿岸の船舶交通の寄港地としても有名な場所だった¹⁴⁾。16世紀後半には既に集落が存在し、17世紀初頭には宿泊施設・商業施設を含む繁華な町に発展していた¹⁴⁾。

沖泊の港は温泉津港の北側に当たり、16世紀後半には鞆ヶ浦に代わって銀の搬出港となっていた。この頃、温泉津では大量の米が陸揚げされ、伝馬を使って銀山へと運ばれた¹⁴⁾。沖泊港の南側に位置する岬の先端には、1570（元亀元）年に城が築かれた¹⁴⁾。この城は沖泊を含め温泉津湾の全体を守備し、銀山の物資搬出入を維持する上での軍事的機能を果たした¹⁴⁾。

1580年代になると、戦国大名毛利氏は戦乱の日本を統一する事業を推進していた豊臣氏の支配下に入った¹⁴⁾。これにより、石見銀山は毛利氏の支配を基礎としつつ、豊臣氏の支配を受けることになった¹⁴⁾。1590年代末頃の銀山及び温泉津付近の地域では、

採掘・製錬及び精錬・店舗営業・輸送・漁業などの諸活動に対する課税が銀で行われ、地域社会に滞留する銀を毛利氏が吸収する課税制度が確立していた¹⁴⁾。その課税量は、1600（慶長5）年に年間銀約3,680kgに達した¹⁴⁾。

豊臣氏の最有力大名であった徳川家康は1600（慶長5）年に内戦に勝利し、政権を掌握した後に国内の金銀鉱山を接収した¹⁴⁾。その結果、石見銀山の支配権も豊臣氏及び毛利氏から徳川氏（＝江戸幕府）へと移行した¹⁴⁾。徳川家康は鉱山支配に有能な大久保長安を奉行として重用し、石見銀山の支配に当たさせた¹⁴⁾。この頃開発され、盛んに銀を産出した代表的な間歩が大久保間歩、釜屋間歩、本間歩などである¹⁴⁾。従来、銀山には複数の山師が存在し、彼等は自らの資本を用いて銀生産のための経営を行い、その対価として銀山の支配者に対して上納銀を納めていた¹⁴⁾。17世紀、江戸幕府による支配の時代になると、石見銀山では、山師の民間資本単独による経営と、これに加えて奉行所（後の代官所）から公的資本が投入される経営との2種類の経営が行われた¹⁴⁾。

この導入された後者の方法により生産量がさらに増加した¹⁴⁾。例えば、1600（慶長5）～1602（慶長7）年頃、徳川氏から釜屋間歩を中心として経営を請け負っていた山師安原伝兵衛は、年間13,500kgにも上る上納を一人で行い、徳川家康に褒賞された¹⁴⁾。最盛期頃の石見銀山とその周辺の様子は、1619（元和5）年に作成された古絵図にも描かれている¹⁴⁾。銀山は柵に囲まれ、出入口には番所が設けられるなど、厳しく監視が行われていた¹⁴⁾。また、山吹城とその山麓に存在した銀蔵を中心として、谷筋に沿って街路・町並みが展開し、繁華な場所を形成していたことが知られる¹⁴⁾。一説には、各地から人々が集住して人口が数万人にも達したと推定されている¹⁴⁾。このような多くの人口を養うために、温泉津においては大量の米穀をはじめとする食料のほか燃料や製錬材料などが陸揚げされ、街道を経て銀山へと搬入された¹⁴⁾。温泉津は、銀山における消費と生産を支える重要な港町としての役割を果たした¹⁴⁾。

17世紀初めには、オランダ人・イギリス人が日本に来航し、彼らを交えて対外貿易はますます盛んとなった¹⁴⁾。同時に、日本国内の戦乱が終息するのに伴って、各領国に中心的な城下町が整備され、経済活動が活況を呈することにより銀の需要はますます増大した¹⁴⁾。一方、石見銀山とその周辺地域の政治的秩序は安定し、山吹城をはじめ銀山の周囲に存在した山城は順次撤去されていった¹⁴⁾。

銀山の繁栄は銀山柵内の東側に当たる大森地区の建設へと発展し、17世紀中頃には銀山を囲っていた柵が撤去された¹⁴⁾。大森地区の整備とともに、支配の中心地も山吹城の麓に当たる銀山地区から大森地区へと移動して行った¹⁴⁾。当時、銀山とその周辺の支配は、中央の江戸幕府から派遣された代官によって行われた¹⁴⁾。代官の中には18世紀前半の井戸平左衛門のように甘藷の栽培を奨励し、領内の人々を飢饉から救った人物もいた¹⁴⁾。彼は、後に大森地区にある井戸神社に祀られ、今日においても地域の人々に広く敬われている¹⁴⁾。代官の下には、宗岡・阿部・河島家など地域で成長した役人がおり、現在でも武家屋敷が残っている¹⁴⁾。

石見銀山における銀生産は、1620～1640 年代頃を最盛期としてその後は減少に向かう¹⁴⁾。坑道が深くなるのに従って作業困難となり、出水対策などで投資がかさみ採算が悪化した¹⁴⁾。そのため、1691（元禄 4）年には坑道総数 92 のうち 63 が休山したのをはじめ、1729（享保 14）年には坑道総数 129 のうちの 74 が、1823（文政 6）年には坑道総数 279 のうちの 247 がそれぞれ休山状態にあるなど、石見銀山は衰退の一途を辿るようになった¹⁴⁾。17 世紀後半には年間平均 1,000～2,000kg の銀生産を維持していたが、19 世紀半ばには 100kg 台にまで減少し、これに代わって徐々に銅の生産が増加するようになってくる¹⁴⁾。

銀鉱石の採掘は、経営者である山師に契約雇用された鉱夫らによって行われた¹⁴⁾。また、鉱山労働者の保護施策として、鉱山病で生活ができない者に対する米の支給や、保養薬としての味噌の支給、その子どもに対する養育米の支給などがあった¹⁴⁾。こうした施策は鉱山労働という特殊な状況の中で生まれたものであったが、その後の社会保障制度の先駆けと言えるものでもあった¹⁴⁾。

大森地区の町並みは 1800（寛政 12）年の大火でかなりの部分が焼失したが、行政命令によって防火の工夫を施しつつ、街路に沿って町家が建ち並ぶ旧来の景観を取り戻した¹⁴⁾。街路に沿って銀山経営・金融業などを営んだ富裕な商人の屋敷をはじめ、中小の商人・職人の屋敷、武家屋敷などが建ち並び、その背後には寺院が配置されるなど、大森地区は多様な身分・職種の人々が混在して成り立っていた¹⁴⁾。

1866（慶応 2）年、石見地方の西の地方の大名であった毛利氏が江戸幕府に反抗し、石見地方に軍事侵攻して石見銀山に進駐した¹⁴⁾。その後、1868（明治元）年に江戸幕府が倒れると、1869（明治 2）年に石見銀山は新政府によって個人経営者へと払い下げられた¹⁴⁾。1887（明治 20）年には私企業である藤田組が経営を開始し、石見銀山は大森鉱山と呼ばれるようになった¹⁴⁾。1895（明治 28）年には清水谷に西洋の技術を導入して製錬所が建設されたが、1 年半余りで閉鎖された¹⁴⁾。代わって要害山の西麓に当たる柑子谷に製錬所が建設され、銅を主力に金・銀の製錬及び精錬が開始された¹⁴⁾。しかし、第一次世界大戦後の銅価格の下落と安価な輸入銅の影響により、1923（大正 12）年には休山に追い込まれた¹⁴⁾。その後、1942（昭和 17）年の第二次世界大戦下の金属需要により再開が試みられたが、1943（昭和 18）年の台風被害により中止された¹⁴⁾。

一 国際的分野において果たした役割

朝鮮王国の記録によれば、15 世紀後半から 16 世紀初頭の石見銀山の開発以前に、日本は既に東アジアにおける銅・鉄を中心とする金属資源の供給国であった。この供給経路に乗って、石見銀山の銀が東アジアへと搬出されて行った¹⁴⁾。

1526（大永 6）年に石見銀山が本格的に開発され、銀が増産されると、1530 年代末頃には朝鮮王国との交易手段として銀が大量に用いられるようになった¹⁴⁾。朝鮮王国にもたらされた銀は、同王国と直接行う公貿易において綿布と交換された¹⁴⁾。戦国時代の

大内・尼子時代(～1562) ・1526銀山発見 ・1533灰吹法導入 ・銀山→鞆ヶ浦→博多 ・山吹城・矢滝城・矢筈城・石見城で防御
毛利時代(1562～1600) ・アクセス港を鞆ヶ浦→温泉津・沖泊 ・銀山-西田-温泉津・沖泊間の道路整備
徳川時代1 ・大久保間歩・釜屋間歩・本間歩を開発 ・山師経営に奉行所(代官)経営が加わる. ・銀生産最盛期は1620代～1640代
徳川時代2 ・大森地区に拡大. ・17C中頃(大森と従来銀山地域間)柵撤去. ・1650以降, 銀生産量は減少に向かう
明治・大正・昭和 ・1869(M2) 民間払下げ. ・1887(M20) 藤田組経営開始. ・1895(M28) 清水谷精錬所. 1年半で閉鎖 ・替わって柑子谷精錬所建設し, 銅を主力に製錬・精錬するも1923(T12)に休山
平成以降 ・2007(平成19) 世界遺産登録

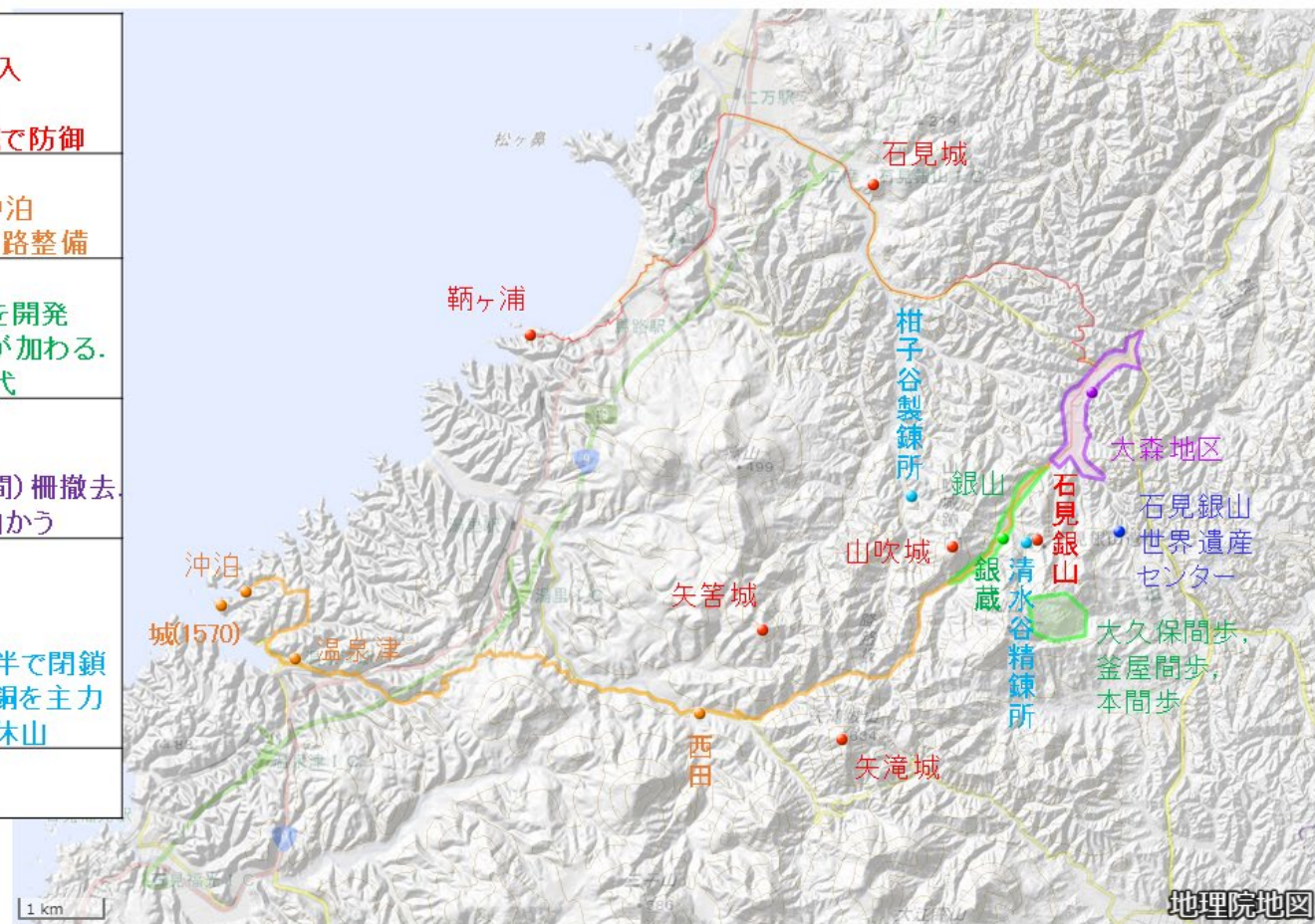


図 1.11-6 石見銀山 発展の推移

国内技術移転

1526 (大永6): 石見銀山発見 1533 (天文2): 灰吹法導入
 1542 (天文11): 生野銀山 (石見銀山から) 灰吹法導入
 1595 (文禄4): 佐渡金銀山に石見の鉱山経営者が移住

国際貿易で銀決済

・明、朝鮮

1421: 明, 南京から北京に遷都 (経済圏拡大)
 1442: 明, 北京に銀を管理する太倉銀庫設置
 1530代末から: 朝鮮との交易に銀使用.
 1540代: 福建省・広東省・浙江省の船が日本へ来航
 1530-1540代の太田氏の貿易 (博多-朝鮮, 明) は石見銀山が支える. 大量の銀が東アジアに.
 1530-: 一条鞭法導入開始. 1582-: 華北にも導入
 1567: 月港開港 (明が海禁令解除 (指定港と交易海禁, 日本は月港なし))

・ポルトガル

1511: マラッカを支配 1517: 中国来航
 1543: 種子島に来航 (鉄砲伝来)
 1557: マカオ租借 (日明との中継貿易拠点)
 1571: 長崎開港・イエズス会に寄進.

・スペイン

1565: マニラ・アカブルコガレオン開拓
 1571: マニラ市設置 (南蛮貿易拠点)
 1591前後: 平戸・薩摩領内に来航

・イギリス

1613-1623: 東インド会社が平戸に商館設置
 1607-1616: 家康ウィリアム・アダムス (三浦按針) 重用

・オランダ

1600: オランダ船リーフデ号漂着 (ウィリアム・アダムス来日).
 1609: オランダ国王使節来日
 1622: 台湾西方澎湖諸島占領
 1624-1662: 台湾統治

・朱印船貿易

1601 (1592)-1635: 朱印船



図 1.11-7 石見銀山 (国際関係)

日本においては、綿布は軍用品として需要が高かった¹⁴⁾。一方、朝鮮王国内に持ち込まれた銀は中国から輸入される唐物など高級品との交換にも用いられ、中国北東部の遼東を経て中国へと流入していった¹⁴⁾。当時、日本から朝鮮王国に流入する銀の量は膨大で、1542（天文 11）年には日本国王使が一回に約 1,350kg もの銀を持ち込んで交易を求めている¹⁴⁾。この銀の量は、東アジアを除く当時の世界の年間銀産出量の推計が 90,200kg であったことと比較しても、相当の量であることがわかる¹⁴⁾。その当時、日本国内において本格的に稼働していた銀鉱山は石見銀山だけであったから、朝鮮王国に持ち込まれた銀のほとんどは石見銀であったことが窺える¹⁴⁾。

1540 年代になると、中国の福建省・広東省・浙江省の船が日本へと来航し、日本銀が中国南部へと流出するようになった¹⁴⁾。中国船の来航に伴い、香辛料を求めて 1510（永正 7）年にはゴア、1511（永正 8）年にはマラッカへと到達していたポルトガル人が、1543（天文 12）年に日本の種子島へと到達した¹⁴⁾。さらに、1549（天文 18）年にはイエズス会の宣教師であったフランシスコ・ザビエルが日本に到達し、東アジアの東端の地においてキリスト教の布教を開始した¹⁴⁾。

1552（天文 21）年、インドのゴアに滞在していたザビエルは、ポルトガルのシモン・ロドリゲス神父に宛てて、スペイン人が日本のことを「銀の島」と呼んでいると書き送っている¹⁴⁾。当時、品質の良かった石見銀は銀山が所在する佐摩村の名にちなんで「ソーマ銀」と呼ばれ、東アジアの交易においては最も信用度が高かった¹⁴⁾。実際に、16 世紀半ばから後半にかけて、欧州で作成された「バルトロメウ・ヴェリュ世界図」、「フェルナン・ファズ・ドラード日本図」、「オルテリウス＝ティセラ日本図」などの東アジア地図の中には、記入されている数少ない地名として、石見銀山を「銀鉱山王国」又は「銀鉱山」と図示したのが見られる¹⁴⁾。当時の西欧人が日本を「銀王国」と見なした背景には、石見銀山から産出する大量で良質の銀が存在したことが窺える¹⁴⁾。

16 世紀の対中国貿易では私的な貿易が禁止されていたが、東シナ海域では密貿易集団である倭寇を中心に中国や琉球の商人が活躍し、これに新たにスペイン・ポルトガルの商人が参入することとなった¹⁴⁾。中国における銀需要は既に 15 世紀から高まっており、中国国内では慢性的に銀の価値が高くなっていた¹⁴⁾。

その背景には、15 世紀前半に江南地域から土地税の銀納化が進展したこと、官俸・軍俸の銀支給が開始されたこと、これに伴って 1442（嘉吉 2）年には北京に全国の銀収益を管理する太倉銀庫ができたこと、1421（応永 28）年の南京から北京への遷都の後に中国の北部地域と南部地域の経済が一体化し、遠隔地取引が発達展開することにより、決済手段として銀が用いられるようになったこと、などの情勢があった¹⁴⁾。このように、銀を基軸として政治・経済体制が整備されることにより、中国国内の銀需要は急速に増大した¹⁴⁾。しかし、中国国内における銀生産は一般に低調であった¹⁴⁾。このような事情の下に、16 世紀には石見銀山の開発が契機となり、日本の銀が大量に中国へと吸収されることとなった¹⁴⁾。

16 世紀半ばまでの中国では、貿易を独占するために、政府が海禁政策をとって貿易活動を制限していた¹⁴⁾。銀の流通を介して著しく盛んとなった交易活動に対して、1550～1560 年代にかけて中国が海禁政策を強化すると、日本人や中国人のみならずスペイン人やポルトガル人の一部も加わって構成された倭寇の海賊活動が最盛期を迎える¹⁴⁾。その結果、1567（永禄 10）年に中国明朝は展海令を発し、海禁令を解除するに至った¹⁴⁾。その結果、さらに多くの銀を吸収した中国においては、広大な領域内における遠隔地取引、税制、強大な官僚制など、政治・経済の体制が銀本位制によって支えられることになり、これが明朝（1368～1644）から清朝（1644～1912）へと引き継がれていくこととなった¹⁴⁾。

16～17 世紀初頭の東シナ海を舞台とする交易において、日本は中国の生糸・絹織物・銅銭・陶磁器など高度に発達した手工業製品を輸入し、中国・朝鮮に対して銀・金・銅・硫黄などの鉱業産品を輸出した¹⁴⁾。また、東シナ海域では東南アジアの香木・香料・胡椒・砂糖などが取引されるなど、交易圏が東アジアから東南アジアへと拡がりを見せていた¹⁴⁾。大量の銀の流通は、金に対する銀の価値を相対的に低下させるとともに、銀高であった中国と他の東アジア諸国との間における金銀比価の平準化をもたらした¹⁴⁾。

また、このような 16 世紀後半の東アジアにおける交易の発展は、アメリカ大陸から太平洋を越えてもたらされる新たな銀流入の経路をも形成した¹⁴⁾。以上のように、16 世紀における石見銀山の開発と石見銀の流出は、日本～朝鮮～中国、日本～中国の間に「銀の道」を形成する契機となり、東アジアにおける銀という経済的価値の交流と共有をもたらしたのみならず、異なった東西の文明を結びつける宗教や芸術などの文化的な価値の交流をも促した¹⁴⁾。

一国内において果たした役割

15～16 世紀における日本最大の対東アジア貿易港は、九州の北端にあつて東シナ海と日本海へと通ずる博多であった¹⁴⁾。戦国大名の大内氏は、博多を中心に中国の明王朝や朝鮮王国との貿易を展開した¹⁴⁾。16 世紀前半期においては、石見銀山とその周辺地域は大内氏によって支配されていた¹⁴⁾。

博多の貿易商人であった神屋寿禎は 1526（大永 6）年に石見銀山を「発見」すると、その銀鉱石を銀山から全長約 7.5km の街道を経て鞆ヶ浦の港へと運び、博多に向けて搬出した¹⁴⁾。その背景には、石見銀山と博多を含み、本州西部から九州北部に至る広い範囲の領土を支配した大内氏の勢力があった¹⁴⁾。1530～1540 年代における大内氏の対外貿易は、この石見銀山産出の銀によって支えられ、大量の石見銀が東アジアへと流出していった¹⁴⁾。

石見銀山から東アジアへの銀流出が契機となって、1543（天文 12）年にはポルトガル人が日本に鉄砲をもたらした¹⁴⁾。それ以後、日本は銀を用いて火薬の原料である硝石を輸入する一方、短期間のうちに鉄砲製作技術を習得して国内生産に成功した¹⁴⁾。このこ

とが戦術に変化をもたらし、諸大名が割拠して内乱状態にあった日本国内の政治的統一への動きを加速させた¹⁴⁾。

また、1549（天文 18）年にはフランシスコ・ザビエルがキリスト教布教のために初めて日本を訪れた¹⁴⁾。それ以後、半世紀以上にわたってイエズス会の宣教師らが布教のために日本を訪れ、キリスト教が日本国内に急速に広まっていった¹⁴⁾。これらのことは、日本人がそれまで持っていた南アジアから東アジアを中心とする仏教的世界観に変化をもたらすこととなった¹⁴⁾。

16 世紀前半に石見銀山を支配した大内氏は、内紛の末 1557（弘治 3）年に滅亡する¹⁴⁾。大内氏に代わって混乱する石見地方を平定・継承したのは、石見の隣国において戦国大名として成長をとげつつあった毛利氏であった¹⁴⁾。毛利氏は 1562（永禄 5）年に石見銀山を含む石見地方の全域を平定し、温泉津の港とこれに通じる街道を銀の搬出路として整備した¹⁴⁾。これ以後、毛利氏は急速に本州西部に当たる中国地方を平定して成長を遂げた¹⁴⁾。

1570 年代、内乱期の日本にあって最も優勢な大名であった織田信長は、天下統一を目指して、首都があった京都地方に軍事的に進出し、さらに西方に勢力を拡げていた¹⁴⁾。信長は、新兵器の鉄砲を積極的に導入する一方、統一事業を阻む一部の仏教勢力に対抗するためにキリスト教の布教を容認した¹⁴⁾。石見産の銀を戦費として用いた毛利氏はこの仏教勢力と提携し、織田信長と 10 年にわたって軍事的に対抗した¹⁴⁾。このように、石見銀山の支配権は、戦国大名の実力形成と領国支配の拡大においてとりわけ重要な役割を担っていた¹⁴⁾。

また石見銀山をはじめ国内鉱山の銀生産が増加した同時期において、九州地方ではスペイン・ポルトガルの船が多く来航して交易活動が活発になっていた¹⁴⁾。この地方では、大友・有馬・大村など交易活動に熱心な大名らがキリスト教に改宗し、1582（天正 10）～1590（天正 18）年には 4 人の少年使節を欧州に派遣してローマ教皇に拝謁させるなど直接交流も行われた¹⁴⁾。

1582（天正 10）年に織田信長が死んで後、毛利氏は、信長の遺臣で天下統一を目指した豊臣秀吉に政治的に従属し、統一事業に参画した¹⁴⁾。豊臣秀吉は全国の主要鉱山を手中に収めたが、石見銀山については、毛利氏の支配を通じて共同支配を行った¹⁴⁾。また秀吉は、経済力があつた貿易港堺などの主要都市や鉄砲の生産地を支配し、大量の鉄砲を用いて統一戦争を推進した¹⁴⁾。豊臣政権は土地所有制度・税制・軍役を整備し、石見銀山や後発の金銀山から産出される豊富な金銀に裏付けられた経済力のみならず、支配下の諸大名の軍勢力も加えて国内平定を進め、1590（天正 18）年には日本国内の戦乱を収束することに成功した¹⁴⁾。

既に 1542（天文 11）年に石見銀山に次いで開発が始まった生野銀山へ、石見から鉱夫・製錬及び精錬技術者などが移住して開発に携わっていた¹⁴⁾。石見銀山の技術が石見銀山の東約 200km の距離に位置する生野銀山へと伝播し、16 世紀後半における生野銀

山の発展をもたらす端緒となった¹⁴⁾。その後も、日本国内の政治的統一が進むのに伴って、石見銀山の技術が各地の金銀山へ一層伝播していった¹⁴⁾。1595（文禄4）年には佐渡金銀山に石見の鉱山経営者が移住し、技術の移転が行われた¹⁴⁾。佐渡は日本海に浮かぶ島で、17～19世紀の日本において最も多くの金銀を産出した鉱山の島であった¹⁴⁾。

17世紀の初頭、豊臣政権下の最有力大名であった徳川家康は同政権に代わって新政権である江戸幕府を樹立し、国内政策の多くを継承するとともに、さらにそれらを整備拡充していった¹⁴⁾。その一環として、江戸幕府は石見銀山をはじめ日本国内の金銀鉱山の多くを支配下に置いた¹⁴⁾。これに伴い、鉱山経営者・技術者の国内での交流はますます盛んとなった¹⁴⁾。例えば、佐渡金銀山には石見銀山の地役人が往来するとともに、石見の山師らが移動して開発に携わり、それ以後、佐渡金銀山は江戸幕府を経済的に支える主要な鉱山として発展した¹⁴⁾。

このような鉱山開発によって、江戸幕府は金銀を大量に入手することとなり、これを背景に日本史上初の統一的貨幣制度を整備した¹⁴⁾。この貨幣制度は、約2世紀にわたり世界経済と国内経済の関係が大きく制約された時代において安定した国内支配体制を支える重要な基盤となった¹⁴⁾。多額の戦費を必要とする天下統一事業をはじめ、それに続く国内諸制度の整備、高額決済手段としての銀を必要とする対外貿易や隔地間取引の活発化は、石見銀山の開発に先導された日本国内鉱山の開発と大量の金銀生産に裏付けられたものであった¹⁴⁾。

このような政治・経済的な動向は新興の大名・商人など多くの富裕層を生み出し、彼らを保護者として、西洋文化の影響をも受けて絢爛豪華な独特の文化を開花させた¹⁴⁾。城郭建築や御殿建築をはじめ、金銀彩色の障壁画・歌舞伎・茶の湯など日本文化を代表するものとして今日の世界に広く知られている有形無形の文化遺産は、それ以前の時代における文化的蓄積と東西の文化交流を踏まえて、16世紀後半から17世紀初めにかけて生み出されたものである¹⁴⁾。

一 鉱山技術と生産方法

16～17世紀に石見銀山が銀生産を飛躍的に増大させ、その産銀が東アジアのみならず世界においても大きな役割を果たすようになった背景には、石見銀山固有の良質な銀鉱床の存在と、日本の自然環境及び歴史的風土に根ざした日本的な鉱山技術及び生産体制があった¹⁴⁾。

1) 鉱床の特徴

南北に細長く島嶼が弧状に連続する日本列島では、活発な火山活動により様々な鉱床が形成された¹⁴⁾。石見銀山には福石鉱床と永久鉱床の2つがあった¹⁴⁾。初期に開発された仙ノ山頂部の福石鉱床は、細脈が多数分布し、高品位の銀を含有する鉱染鉱床であった¹⁴⁾。また、仙ノ山の低位に位置する永久鉱床は、銅鉱物を含有する板状の鉱脈鉱床であった¹⁴⁾。

2)採掘技術の変遷

鉱山の生産技術は、採鉱・採鉱・選鉱・製錬・精錬の5つの工程から成り立っている¹⁴⁾。石見銀山における初期の採掘は、世界中の初期の鉱山に認められるように、地表に露出した自然銀の採取から始まった¹⁴⁾。その後、16世紀前半には近くの銅鉱山の技術者を招いて露頭掘りが始まり、さらに露頭から地下に延びる鉱脈をそのまま掘り進む段階を経て、17世紀初頭には鉱脈の走行に直交して坑道を掘り、そこから鉱脈を追跡する技術にまで到達した¹⁴⁾。この段階では、正確な測量技術を必要としたほか、土留め・照明・排水・通気の技術が欠かせず、唐箕と呼ぶ農機具を転用した送風装置や、揚水ポンプが導入された¹⁴⁾。

採掘作業は、必要最小限の労働集約的な作業空間を確保して行われた¹⁴⁾。また、18世紀の文書によると、一つの坑道では鉱石を掘る1〜6名の「銀掘」、運搬役である1〜3名の「手子」が一つの小集団を組んで作業を行っており、極めて小規模な組織の下に採掘作業が行われていたことが窺える¹⁴⁾。

3)選鉱技術と鉱石の特徴

選鉱から精錬に至る作業は、採掘地点や坑道出口近くに設けた吹屋と呼ぶ作業場で行われた¹⁴⁾。採掘した鉱石の選鉱は、粗選別した鉱石を箆で水洗いした後によく乾燥させ、「要石」と呼ぶ平らな石の上で、手作業で丁寧に粉砕し、それを「ゆり鉢」に入れて水中でゆすって鉱石と銀成分を含まない通常の石とに比重選鉱した¹⁴⁾。

石見銀山の福石鉱床は軟い鉱染鉱石であり、比重選鉱により容易に銀の品位を高めることが可能であったため、開発初期の銀の増産に大きく貢献した¹⁴⁾。

4)製錬及び精錬の技術と資材

酸化鉱の福石鉱床と硫化鉱の永久鉱床では、製錬及び精錬の工程が異なった¹⁴⁾。銅を含まない酸化鉱では、鉛と銀の合金を作り、灰吹きによって鉛を分離して銀を回収した¹⁴⁾。硫化鉱の場合には、焙焼脱硫の後に溶解して硫化銅混合物を作り、鉛・銀合金と銅を分離した上で灰吹きを行った¹⁴⁾。

製錬の過程で使用する炉は、地表面をわずかに掘りくぼめて地床とし、その上に粘土を貼って構築する伝統的な方法によって造られたものである¹⁴⁾。規模は径が数10cm程度のものから約1mにも及ぶものがあり、平面形には方形と円形の2種類があった¹⁴⁾。

製錬及び精錬では、炉を構築するための粘土、燃料となる多量の木炭、送風装置・製錬道具となる木製品・鉄製品などが必要であった¹⁴⁾。また、銀を溶融して濃縮する段階の造滓材として、マンガンや方鉛鉱などを用いた¹⁴⁾。これらの資材は、すべて石見銀山及びその周辺の地域から入手することができた¹⁴⁾。特に鉄製の道具類は、銀山の南方に位置する砂鉄を利用した国内有数の鉄生産地から豊富に受給できた¹⁴⁾。

採掘の過程では、銀を含まない石屑、比重選鉱の揺り滓の細かな石、製錬段階で排出される鉱滓などが発生した¹⁴⁾。これらの鉱業廃棄物は、その形状及び性質に合わせて、

作業場周辺の道の舗装材や作業施設の土地を嵩上げするための整地材料として再利用された¹⁴⁾。

石見銀山では、銀を回収する最終段階の精錬において灰吹法が用いられた¹⁴⁾。記録によると、灰吹法は1533（天文2）年に博多の貿易商人であった神屋寿禎とともに博多から現地に赴いた2人の技術者、宗丹と慶寿によって開始されたとされている¹⁴⁾。日本における銀精錬の開始は銅精錬とともに7世紀にまで遡るが、当時の精錬技術の詳細については未だ明らかになっていない¹⁴⁾。銅精錬にはその最終段階に鉛を使って銅混合物から銀を抜き取る行程があることから、銀精錬の場合においても鉛を使った精錬法が実施されていた可能性が高い¹⁴⁾。

石見銀山では、このような日本在来の伝統的技術を前提として、16世紀の朝鮮半島に系譜がある技術を導入して灰吹法が成立した¹⁴⁾。この技法は、鉄鍋に入れた骨灰を使って含銀鉛から銀を抽出するというものである¹⁴⁾。灰吹法はこの地の生産条件を踏まえて応用的な技術にまで洗練されたものと考えられ、このことによって石見銀山における大量の銀生産が可能となったのである¹⁴⁾。石見銀山で確立された独特の灰吹法技術は国内の他の金山や銀山に伝えられ、日本における金銀の大増産を導いた¹⁴⁾。したがって、石見銀山はこのような日本の金銀大増産の先駆的な役割を果たした鉱山であるといえる¹⁴⁾。灰吹法が石見銀山において採用された事実は、鉄鍋が据えられた炉跡などの遺構をはじめ、骨灰の入った鉄鍋及び鉄製火箸などの遺物の出土により明らかとなった¹⁴⁾。また、精錬途中で形成される銀鉛合金や、製品である灰吹銀などの実物についても、科学的調査によって証明されている¹⁴⁾。同時に、これらの調査により、炉内の温度管理や炉に投入される材料の調合などが緻密かつ適確に行われていたことが判明しており、豊かな経験に基づく高度な技術が存在したことが明らかとなっている¹⁴⁾。

因みに、銀精錬法にはメキシコや南米で採用された水銀アマルガム法がある¹⁴⁾。石見銀山においても、江戸時代初頭（17世紀初頭）に水銀アマルガム法を試行したと見られる記録が残っている¹⁴⁾。しかし、この方法は、日本国内において水銀が高価かつ稀少であった反面、鉛・灰・木炭など灰吹法に必要な材料の入手が容易であったことから定着しなかった¹⁴⁾。その結果、16世紀に石見銀山から始まった灰吹法が17～19世紀半ばの日本における精錬の基盤技術として存続することとなった¹⁴⁾。

このような製錬及び精錬に関する一連の作業は、坑道近くの平坦地に建てられた建物で行われた¹⁴⁾。仙ノ山では1,000ヶ所もの平坦地が確認されており、発掘調査によって、これらの作業場が職住一体の下に機能していたことが明らかとなっている¹⁴⁾。坑道とそれに近接して造成された作業場は、山師と呼ばれる鉱山経営者から成る小集団毎に経営された¹⁴⁾。16世紀代においては、山師たちは戦国大名の庇護の下に運上金を納めることによって経営を保証された¹⁴⁾。こうして、彼らが行う小規模な経営体が集積され、大量の銀生産が可能となった¹⁴⁾。

江戸幕府の成立後においては、銀山経営は幕府の直接支配を受けることとなり、幕府が経営する坑道も生まれた¹⁴⁾。しかし、その他の坑道経営は依然として山師たちによって行われた¹⁴⁾。

石見銀山は、17世紀初頭のも最盛期を過ぎると良鉱が乏しくなり、坑道が深く長くなって作業も困難となり、操業を停止する坑道が急増した¹⁴⁾。坑道が深くなるにつれて付属する作業の負担が大きくなったが、近年まで地元で歌い継がれた「石見銀山巻き上げ節」や「鉱山唄」と呼ばれる独特の歌は、坑内における厳しい排水作業の様子を伝えている¹⁴⁾。また、地元では、銀山の鉱石が枯渇することがないように祈って歌った「さんや」と呼ばれる山唄が残され、祝いの席などで歌い継がれている¹⁴⁾。

石見銀山の特徴は、製錬及び精錬作業に用いる燃料供給機構にも見ることができる¹⁴⁾。それは、地の利を生かした効率的で循環型の性質を持っていたことにある¹⁴⁾。銀の製錬及び精錬過程においては、大量の木炭を必要とする¹⁴⁾。石見銀山では、銀山柵内での土石流災害を防止するために製炭が禁止され、代わって御囲村と称する周囲の村々から木炭を供給する体制が作られた¹⁴⁾。このように、銀の製錬及び精錬に必要な燃料である木炭の原料樹木については、伐採場所が政策的に管理されていた¹⁴⁾。我が国の湿潤で温暖な気候に恵まれて、これらの樹木は再生を繰り返し、資源が枯渇することはなかった¹⁴⁾。

以上のように、近代化以前の石見銀山における鉱山技術と生産方法は、わが国の自然環境の中で、人力に依拠した小規模開発に支えられたものであった¹⁴⁾。しかも、それは環境負荷の少ない循環型の生産方法でもあった¹⁴⁾。こうした鉱山開発の在り方は、大規模な畜力・動力を用いた労働節約型生産形態の西欧型鉱山開発とは対照的である¹⁴⁾。その点において、石見銀山は東アジアにおける循環型開発の鉱山を代表する遺跡であると言える¹⁴⁾。

既に18世紀の石見銀山では銀生産が減少し、これに代わって銅の生産が盛んになっていた¹⁴⁾。明治時代に入ると、日本各地の鉱山では欧米の技術者を雇用して西欧的な鉱業技術が導入されるようになった¹⁴⁾。石見銀山においても、1887（明治20）年から民間会社の近代技術による再開発が始まった¹⁴⁾。新しい鉱業技術は、それ以前の日本の伝統的技術の到達点を基礎として受け継がれたものであった¹⁴⁾。

鉱石の採掘も旧来の坑道開発の延長線上において行われ、1895（明治28）年頃の採掘は地下150mから300mにも達した。これに伴い、大量の地下水や湯が沸き出して、一時操業が困難な状況となったが、発電所建設や電動式ポンプの導入により克服された¹⁴⁾。

一 鉱害問題と労働環境

石見銀山は、他の鉱山に比べて鉱害問題がほとんど発生しなかった鉱山として特筆される¹⁴⁾。その最大の理由は、石見銀山を形成する主要な鉱石鉱床が硫化物をほとんど含まなかったという点にある¹⁴⁾。

鉾害に関する唯一の事例は、明治時代に在来の技術における製錬が行われた地点で発生した煙害による賠償問題である¹⁴⁾。石見銀山の中でも、仙ノ山の山麓付近にある永久鉾床は硫化鉾物を含んでいたことから、この鉾床の開発が本格化した江戸時代後期には硫化鉾物を製錬する焙焼作業の過程で亜硫酸ガスが発生し、煙害の発生があったものと推測される¹⁴⁾。しかし、このことが今日の環境保全に悪影響を与えている可能性は全くない¹⁴⁾。

また、石見銀山ではおよそ 400 年にわたって鉾山開発が継続されたにも拘わらず、大規模な環境破壊が発生しなかったことも注目される¹⁴⁾。坑道の規模や経営の在り方からも明らかなように、比較的小規模な開発行為が集積され、環境に与える影響が小さく、常緑樹と広葉樹を含む二次林の樹勢の回復力にも恵まれて、操業が停止した後の自然環境の再生が容易であった¹⁴⁾。

とりわけ江戸時代には製炭を禁止することによって森林資源の利用が強く規制され、森林伐採による土石流などの発生を極力防止する制度が採られていたことが自然の回復を助けた¹⁴⁾。

狭くて暗い坑道掘りが進むと、坑道内においては崩圧・不通気・湧水・滞留油煙・粉塵などの問題が発生した。中でも鉾山労働者を悩ませたのは、坑内作業によって生ずる「気絶」や「ヨロケ」などと呼ばれる塵肺などの特有の疾患である¹⁴⁾。石見銀山においても、このような鉾山病が深刻な問題として認識されていた¹⁴⁾。そのため、代官所は医師を招聘して鉾山病の解説書を作成し、6 条から成る対応策を提示している¹⁴⁾。これによって、坑内環境の改善や製錬時における鉛の飛散対策が図られ、鉾山病に有効とされたウメの栽培が行われた¹⁴⁾。

石見銀山で作成された解説書は、幕府が経営する国内各地の諸銀銅鉾山へと伝えられ、鉾山病対策の手本とされた¹⁴⁾。

参考文献

- 1) コトバンク 織田信長, 織田信長(オダノブナガ)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 2) コトバンク 豊臣秀吉, 豊臣秀吉(トヨトミヒデヨシ)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 3) コトバンク 織豊政権, 織豊政権(しょくほうせいけん)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 4) コトバンク 安土桃山時代, 安土桃山時代(アヅチモモヤマジダイ)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 5) コトバンク 鉄砲, 鉄砲(テッポウ)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 6) コトバンク 堺, 堺(サカイ)とは? 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧

- 7) Wikipedia 文禄・慶長の役, [文禄・慶長の役 - Wikipedia](#), 2025.6 閲覧
- 8) コトバンク 文禄・慶長の役, [文禄慶長の役\(ぶんろくけいちょうのえき\)とは? 意味や使い方 - コトバンク](#), 2025.6 閲覧
- 9) Wikipedia 海禁, [海禁 - Wikipedia](#), 2025.6 閲覧
- 10) コトバンク 南蛮貿易, [南蛮貿易\(ナンバンボウエキ\)とは? 意味や使い方 - コトバンク](#), 2025.6 閲覧
- 11) コトバンク 糸割符, [糸割符\(イトワッパ\)とは? 意味や使い方 - コトバンク](#), 2025.6 閲覧
- 12) Wikipedia ノサ・セニョーラ・ダ・グラサ号事件, [ノサ・セニョーラ・ダ・グラサ号事件 - Wikipedia](#), 2025.6 閲覧
- 13) コトバンク 朱印船, [朱印船\(シュインセン\)とは? 意味や使い方 - コトバンク](#), 2025.6 閲覧
- 14) 島根県, [島根県：石見銀山の歴史（トップ / 暮らし / 文化・スポーツ / 文化財 / 世界遺産『石見銀山遺跡とその文化的景観』 / 旧ページ / 世界遺産『石見銀山遺跡とその文化的景観』の概要）](#), 2025.6 閲覧
- 15) Wikipedia ウィリアム・アダムス, [ウィリアム・アダムス - Wikipedia](#), 2025.6 閲覧
- 16) ふるさと種子島 鉄砲伝来記, [鉄砲伝来記 - ふるさと種子島](#), 2025.7 閲覧

1. 1 2 大阪御坊・石山本願寺～江戸時代の大阪

○概要

図 1.12-1 は、1496（明応 6）年の大坂御坊建立以降の大坂の推移を、横軸に時間を採り図示したものである。時代は、大まかに、大阪御坊・石山本願寺時代、豊臣時代、徳川時代、明治以降の 4 つに区分できる。

1. 1 2. 1 大坂御坊・石山本願寺と石山合戦

浄土真宗の第 8 代宗主蓮如は、1496（明応 5）年現在の大坂城がある場所に、後に大坂本願寺(石山本願寺)となる大坂坊舎(石山御坊)建立に着手した¹⁾。その頃、上町台地の突端にあった小坂（おさか）という地名が、「おおさか」の語源と言われている¹⁾。その後、御坊周辺は寺内町として栄え、現在の大阪の基盤が誕生した¹⁾。

大坂御坊が建立された当時、本願寺は山科にあったが、1532（天文元）年の法華一揆で山科本願寺が焼失し、大阪御坊が石山本願寺となる。法華一揆とは、1532（天文元）-1536（天文 5）年に日蓮宗の京都町衆信者（町衆）が中心となって起こした一揆²⁾で、一向一揆との対比で名付けられた呼称²⁾である。戦国時代の京都の町屋地域は「題目の巷」といわれたほど、日蓮宗が町衆社会に盛行し、洛中には二十一本山と呼ばれた日蓮宗の大寺が栄えた²⁾。おりしも洛東の山科にあった本願寺は畿内の門徒に指令して一向一揆を起こし、この一揆は堺や奈良に放火し、ついで京都乱入の勢いを示した²⁾。このとき京都の日蓮宗町衆信徒は武装して法華一揆を起こし、一向一揆を撃退して逆に山科本願寺を焼打ちし、ついで畿内各地で一向一揆や土一揆と戦った²⁾。実力で都市の自衛に成功した法華一揆は、有力町衆を中心に団結し、年貢や地子銭の免除や半済をかちとり、また町の検断権の一部も掌握して町衆の自治運動を高めた²⁾。山科本願寺の焼打ちは、本願寺の率いる一向一揆勢と対立した細川晴元が一向宗徒討伐のため法華一揆の力を利用²⁾したものであった。

だが 1536 年（天文 5）山門を中心とする荘園領主や守護勢力と衝突し、京都日蓮宗二十一本山すべてが焼打ちされた（天文法華の乱）²⁾。ここに京都日蓮宗の黄金時代は終わり、また法華一揆も終息した²⁾。残徒の多くは泉州堺に逃れ、室町幕府は日蓮宗寺院の再興を禁止した²⁾。洛内還住の勅許が下されたのは 1542（天文 11）年のことである²⁾。天文法華の乱とは、1536（天文 5）年、山門（延暦寺）衆徒と六角氏を中心とする軍勢が京都町衆の法華宗徒を攻撃し、京都から追放した事件³⁾である。一大勢力となった京都の法華宗は、1536（天文 5）年 3 月の比叡山僧侶と一法華宗徒との宗論をきっかけに山門（比叡山）と対立、山門は法華宗攻撃を決議し、幕府・朝廷に訴え、園城寺・興福寺・東寺・高野山・根来寺など諸国寺院、また越前国朝倉氏らに合力を求めた³⁾。7 月に山門・六角氏・園城寺らの軍勢が出動、法華宗側は大敗し、法華宗二十一本山は滅亡、宗徒は京都を追放され³⁾た。

一第 10 世宗主証如

法華一揆（1532（天文元）年）当時の本願寺宗主は、第 10 世の証如である。証如は、9 世実如（蓮如の第 8 子・5 男）の次男円如と慶寿院（鎮永、願正寺住持蓮淳の 4 女）の子で、1525（大永 5）年、父方の祖父である本願寺第 9 世宗主・実如の死去により、10 歳で継承し、本願寺第 10 世宗主となった⁴⁾。母方の祖父である蓮淳の後見を受けた⁴⁾。1527（大永 7）年、当時の本願寺教団と中央権力との親睦を深め安泰を図るため、青蓮院で後奈良天皇の弟尊鎮法親王を師として得度⁴⁾した。翌 1528（享禄元）年には前関白九条尚経の猶子となり、さらに朝廷から直叙法眼に任じられた⁴⁾。

1531（享禄 4）年、本願寺教団内部で対立（享禄の錯乱）が起こるが、証如はこれを抑えて法主の指導力強化に努めた⁴⁾。この享禄の錯乱とも呼ばれる本願寺の内紛によって、蓮如から加賀支配の指導的地位を任せられていた松岡寺蓮綱、本泉寺蓮悟などの一門四ヶ寺は没落し、証如の影響力は加賀にも及ぶこととなった⁴⁾。翌 1532（享禄 5）年 5 月、畠山義堯と三好元長が木沢長政を攻撃、畿内の有力者である細川晴元は木沢長政を支援するため、同年 6 月に証如へ援軍を要請した⁴⁾。晴元からの要請を受けた証如は、蓮淳の意向もあって門徒を動員し、自身も山科本願寺から摂津大坂に移動した⁴⁾。その後、本願寺勢は畠山義堯を滅ぼし、河内国で滞陣中の三好元長を襲撃する⁴⁾。更に三好元長を堺まで追い立てて敗死させたものの、蜂起した門徒は暴走を続けて大和国へ乱入し、興福寺の塔頭などへも襲撃を行った⁴⁾。本願寺勢と晴元勢との戦闘も各地で発生し、目的以上の破壊力を保持した一向一揆を恐れた晴元は、7 月に本願寺と決別して京都の日蓮宗教団や六角定頼、室町幕府将軍の足利義晴と手を結び、証如と敵対した⁴⁾。証如は室町幕府から謀反人と認定され、天文に改元後の 8 月 24 日には当時の本願寺の本拠地であった山科本願寺が六角勢と法華宗徒によって攻撃され焼亡した（山科本願寺の戦い）⁴⁾。山科本願寺を追われた証如は、居所を大坂御坊へ移して大坂本願寺とし、新たな教団の本拠地とした⁴⁾。

一方で、細川晴元との争いは 1535（天文 4）年 11 月まで続いた⁴⁾。本願寺勢は内衆下間頼秀を中心に各地の坊主衆や門徒衆で構成され激しい合戦を行った⁴⁾。1535（天文 4）年 9 月に入ると、後奈良天皇の意向などもあり和睦交渉が進展、同年 11 月末から翌 1536（天文 5）年 11 月にかけて本願寺と対立していた諸勢力と和議が結ばれた⁴⁾。証如は義晴からも赦免され、自身の地位も保持することができたが、敵対した勢力へ多額の賠償金を支払わなければならなかった⁴⁾。また、享禄の錯乱以降、軍事面を主導した下間頼秀、頼盛兄弟も追放された⁴⁾。その後は晴元の養女（三条公頼の三女・如春尼、長姉は晴元に、次姉は武田信玄に嫁ぐ）を長男・顕如と婚約させて晴元と協調関係を結ぶなど、朝廷や室町幕府とも親密な関係を築いて中央との関係修復に努め、本願寺の体制強化を進めた⁴⁾。

また、享禄の錯乱以降の戦争を教訓として、各地の坊主衆や門徒衆の軍事動員はみだりにおこなわず、畿内の政治対立には距離を置くようになった⁴⁾。本寺となった大坂御

坊の整備も進み、1542（天文 11）年に阿弥陀堂が新造された以降、種々の建物が建てられた⁴⁾。1543（天文 12）年 1 月には、長男である顕如が誕生する⁴⁾。1546（天文 15）年 5 月にも女子が誕生、法名は顕妙であり本徳寺教什室となった⁴⁾。

1546（天文 15）年には金沢に尾山御坊を築いて同地方における門徒の統制を強化したが、これは朝倉氏との対立もあって、証如の時代には必ずしも十分に達成されなかった⁴⁾。また、加賀一向一揆の調停という形で北陸地方の門徒集団への介入を深める⁴⁾。

証如は、1554（天文 23）年 8 月 13 日、39 歳にて示寂した⁴⁾。本願寺は 12 歳の顕如が第 11 世となり継承する⁴⁾。顕如の得度は、証如の死の前日に行われた⁴⁾。

一 証如後見人 蓮淳

10 歳で宗主となった証如を後見した蓮淳は、1464（寛正 5）年に生まれ、本願寺第 8 世法主蓮如の 6 男⁵⁾である。1469（文明元）年、新築したばかりの近江大津近松の顕証寺（後の光応寺）に入り、2 年後の 1471（文明 3）年に父が越前吉崎へ下向した時は顕証寺に留められた⁵⁾。やがて顕証寺住持になるが時期は不明で、1483（文明 15）年または 1490（延徳 2）年以後とされ、住持就任は兄の第 9 世法主実如の命と推測されている⁵⁾。明応年間に伊勢長島に願証寺を創建、1496（明応 5）年には赤野井坊舎を再興して堅田本法院を兼帯する⁵⁾。後に弟の実賢（蓮如 9 男）や実順（蓮如 11 男）・実真親子らの早世によって空座となった称徳寺（堅田御坊）や河内顕証寺の住持も兼任した⁵⁾。北陸地方に拠点があった他の兄弟と違って畿内を拠点にしていた事、実如の同母弟であった事から自然と実如の相談役となり、その後継者として予定されていた円如を婿とした⁵⁾。円如は若くして没したものの、娘・慶寿院は第 10 世法主証如を生んでいる⁵⁾。

1499（明応 8）年に父が亡くなると、父の遺言を遵守する『兄弟中申定条々』に他の兄弟達と共に連署したが（他に蓮綱・蓮誓・実如・蓮悟）、翌 1500（明応 9）年 6 月に異母兄蓮誓と図って山科本願寺の親鸞御影を加賀に移そうと計画したとされ、実如支持派の強硬な反対で失敗した⁵⁾。一方で本願寺の改革にも関与しており、1518（永正 15）年に実如が發布した一揆の禁止をはじめとする 3 か条の戒めについては、翌 1519（永正 16）年に蓮誓が病気治療のため上洛した際に戒めを順守する北陸門徒の誓約書を持参し、実如が誓約書を検分した上で蓮淳および円如が相談して戒めが法令化された⁵⁾。1525（大永 5）年の実如の死の際には共通の孫にあたる証如を託され、実円（実如の子）・蓮悟・蓮慶（蓮綱の子）・顕誓（蓮誓の長男）と共に証如の後見人に選ばれた⁵⁾。

主に近江・伊勢・河内の教団発展に努力し、多くの有力寺院の住持を兼任する蓮淳は幼少の法主証如の後見人として本願寺内部で大きな発言権を持ち、指導的な役割を果たした。各地の戦国大名に対抗して教団の統率力を高めた事は評価されるものの、後に驕りから顕証寺と布教地域が重複していた教団内の有力寺院である堅田本福寺住持明宗に 3 度（1518 年・1527 年・1532 年）も無実の罪を着せて破門するなどの専横を見せるようになった（破門は本来法主にしか許されていなかったが、蓮淳は証如の後見人とし

ての職務代行を利用して破門を行った)。この横暴ぶりに対して一族や地方の門徒が激しく反発するようになり、永正の一揆(九頭竜川の戦い等)で越前から加賀へ逐われて来た藤島超勝寺・和田本覚寺(大一揆)と、加賀の国主権限も認められていた賀州三ヶ寺(若松本泉寺・波佐谷松岡寺・山田光教寺・小一揆)間の加賀国内での諍いでは、蓮淳の娘婿である超勝寺の実頭方へ介入し下間頼秀・下間頼盛兄弟を派兵するなど大小一揆のきっかけを作ったのみならず、この内紛で対立した実の兄弟(蓮如の諸子息)やその家族の処刑・追放を行った⁵⁾。ただし大小一揆の過程において蓮淳は主体的な立場だったか、または下間頼秀兄弟の権力に屈従した消極的な立場だったか見解が分かれ、井上鋭夫は前者、谷下一夢は後者の説を唱えている⁵⁾。

また、この乱に関連して1532(天文元)年に細川晴元の要請で木沢長政への援軍として一向一揆を差し向け、畠山義堯や三好元長を討ち取った⁵⁾。だが、一向一揆の暴走で晴元と決裂、8月24日に晴元派の山村正次が率いる法華一揆の軍勢によって山科本願寺を焼き討ち(山科本願寺の戦い)にされた際に理由は不明だが証如を置き去りにして退去、次男実恵がいる願証寺に戻った⁵⁾。この行動も見解が分かれ、井上は焼失の責任を問われて非難的になったと推測、谷下はそれを否定している⁵⁾。焼き討ち前の8月12日に法華一揆が蓮淳の近松願証寺を焼き払い、14日に蓮淳の配下が近江衆を討ち取ったことが山科本願寺の戦いに影響したともいわれ、いずれにしても山科本願寺焼失が退去の要因になったとされている⁵⁾。なお、1535(天文4)年4月に実恵を伴い山科から移転した石山本願寺へ向かい、下間頼慶と共に六角氏との和睦を推進し1536(天文5)年に成立させたが、同年5月に実恵に先立たれている⁵⁾。

晩年の1539(天文8)年には河内願証寺の住持を長男実淳に譲り、隠居号として光応寺を名乗ったが、3年後の1542(天文11)年1月7日に妻妙蓮が死去、6月28日に実淳も51歳で先立った為にやむなく8月には河内願証寺に再び戻り、同寺の住持にも復帰することとなった⁵⁾。

1550(天文19)年8月18日没(享年87)⁵⁾。河内願証寺住持の職は孫で実恵の四男である証淳が継いだ⁵⁾。死に際して蓮淳はかつて大小一揆で罰した実悟(蓮如10男)や願誓を赦し、破門を解くように遺言している⁵⁾。

証如の祖父・蓮淳に対する信頼は絶対的であり、蓮淳も証如が没する4年前まで長寿を保ったことから、証如の法主時代の本願寺は事実上蓮淳によって統治されていたとまで言われている⁵⁾。

一第11世宗主 願如

1554(天文23)年8月12日、第10世宗主証如が重体となり、急遽、12歳の嫡男願如(第11世宗主)の得度が行われることになった⁶⁾。願如は父・証如が九条家の猶子となったことを先例として前関白・九条植通の猶子となった⁶⁾。そもそも、本願寺の次期法主となる嫡男は、代々天台宗の青蓮院で得度することになっていた⁶⁾。しかし、証如

が重体のうえ、この時には青蓮院に門跡が欠けていたこともあって顕如は証如を師として本願寺で得度している⁶⁾。翌13日、証如の死により本願寺を継職し、祖母・鎮永尼の補佐を受けて教団を運営した⁶⁾。

1557（弘治3）年4月17日、六角定頼の猶子（実父は三条公頼）の如春尼と結婚した⁶⁾。如春尼の実の姉は武田信玄の正室・三条夫人であり、信玄と顕如は義兄弟にあたる⁶⁾。政略結婚とはいえ、二人の夫婦仲は結婚30年を超えても良かった⁶⁾。

1559（永禄2）年、正親町天皇の綸旨により本願寺は門跡となる⁶⁾。本願寺は証如・顕如と2代にわたって摂関家である九条家の猶子となって門跡に相応しい格式を得たとして門跡への昇格を求めていた⁶⁾。折しも青蓮院門跡である尊朝法親王が幼少で門跡の職務を行い得なかったため、青蓮院の異論が出されないまま本願寺の要求が認められたと考えられている⁶⁾。1560（永禄3）年冬には院家として三河国本宗寺、伊勢国願証寺、河内国願証寺が勅許され、続いて摂津国教行寺、山城国順興寺、近江国慈敬寺、越中国勝興寺、大和国常楽寺が許されている⁶⁾。また、坊官には下間氏を任命した⁶⁾。1561（永禄4）年には僧正に任じられている⁶⁾。

顕如の時代、本願寺教団は、証如の時代以来進めてきた門徒による一向一揆の掌握に務める一方、管領家であった細川京兆家や京の公家との縁戚関係を深めており、経済的・軍事的な要衝である大坂本願寺（石山本願寺）を拠点として、主に畿内を中心に本願寺派の寺を配置し、大名に匹敵する権力を有するようになり、教団は最盛期を迎えた⁶⁾。

しかし、本願寺は武家の封建関係の外でこのような権力を握っていたことから、延暦寺や堺の町衆などと同様に、1568（永禄11）年に将軍・足利義昭を奉じて上洛し、義昭を通じて影響力を強めていた織田信長による圧迫を受けるようになり、顕如は信長と敵対する⁶⁾。

1570（元亀元）年に本願寺と織田氏は交戦状態に入った⁶⁾。一連の抗争は石山合戦と呼ばれる⁶⁾。その後、元亀年間（1570～1572）に将軍・義昭と信長は反目し、義昭は甲斐国の武田氏をはじめ越前国の朝倉氏、近江国の浅井氏ら反織田勢力とともに信長包囲網を構築した⁶⁾。本願寺も信長包囲網の一角を担い、顕如は自ら石山本願寺に籠城し、雑賀衆などの友好を結ぶ土豪勢力と協力する、地方の門徒組織を動員して長島一向一揆などの一向一揆を起こし信長に対抗した⁶⁾。

しかし、1573（元亀4）年4月には武田信玄の死を契機に包囲網が破綻⁶⁾する。朝倉・浅井・足利などの同盟勢力は次々と織田氏によって滅ぼされ、木津川口の戦いなどで抵抗を続けた本願寺も最終的には抗戦継続を諦め、朝廷を和平の仲介役として1580（天正8）年に信長と和睦⁶⁾する。顕如自身は本願寺を退去すると紀伊国鷲森御坊に移り、ここを新たな本山とした⁶⁾。一方で嫡男の教如は本願寺に籠って抵抗を続けたが結局は退去を余儀なくされ、教如の退出後に本願寺は失火によって焼失した⁶⁾。

1582（天正 10）年の本能寺の変後、信長に代わって畿内の実権を握った羽柴秀吉と早急に好を通じた⁶⁾。秀吉は本願寺とその門徒が持つ経済力や技術力を利用して、大坂本願寺とその寺内町をもとにして大坂城と大坂城下町を築いて整備した⁶⁾。

1583（天正 11）年閏正月 22 日に顕如は鷺森御坊を出発すると、有馬温泉湯治を行った。2 月 10 日に有馬温泉を出立するとそのまま、京都、宇治、奈良、吉野の名所めぐり⁶⁾、2 月 24 日に堺に着くと、25 日に鷺森御坊に到着している⁶⁾。その間、顕如は参拝する寺社に寄進を行っている（清水寺：1000 疋、北野天満宮：1000 疋、石清水八幡宮：1000 疋、東大寺の大仏：300 疋、春日大社：2000 疋、大神神社：200 疋、長谷寺：300 疋）⁶⁾。7 月には和泉国の貝塚道場を新たな本山とし、貝塚願泉寺と名を改めている⁶⁾。

1585（天正 13）年 8 月には秀吉より大坂城の郊外である天満の地に所領を与えられ、天満本願寺を建立して新たな本山としている⁶⁾。ここはルイス・フロイスによると「秀吉の宮殿の前方にある孤立した低地」で、さらに「住居に壁をめぐらしたり堀を作る」ことを禁じられており、本願寺は豊臣政権の強い統制下に置かれていたことがわかる⁶⁾。この年顕如は大僧正に任じられた⁶⁾。翌 1586（天正 14）年には准三宮の宣下を受ける⁶⁾。秀吉から九州平定に同行するよう命じられ、暫時下関滞在を余儀なくされた⁶⁾。

1589（天正 17）年には一騒動あった⁶⁾。聚楽第の壁に政道批判の落書が書かれ、その容疑者が本願寺寺内町に逃げ込んだという情報と、秀吉から追われていた斯波義銀・細川昭元・尾藤知宣らの浪人がやはり天満に潜伏しているという情報を相次いで入手した豊臣政権は、同年 3 月に石田三成に命じて寺内町の取締強化とこれらの者を匿ったと断定された 2 町の破壊を骨子とする厳しい寺内成敗を行わせたのである⁶⁾。肝心の斯波義銀らはついに発見されなかったものの、彼らを匿った罪で天満の町人 63 名が京都六条河原で磔となったほか、顕如も 2 月 29 日に秀吉から浪人の逃亡を見逃したことを理由に叱責を蒙り（『言経卿記』）、3 月 8 日にはさらに容疑者隠匿に関与したとして蓮如の孫にあたる願得寺顕悟が自害を命じられた⁶⁾。こうしてかつて本願寺が持っていた強大な領主権力は顕如一代のもとで完全に失われていったのである⁶⁾。

1591（天正 19）年には秀吉から京都七条堀川の地に寺地を与えられたことで久しぶりに京都に本願寺が作られることになり、この地での本願寺教団の再興を期して早速本願寺（現・西本願寺）が建立された⁶⁾。翌 1592（天正 20）年 11 月 24 日、50 歳にて示寂⁶⁾した。

顕如が没すると、大坂本願寺退去時に信長への対応をめぐって和睦派の顕如と意見を異にした強硬派の長男教如が跡を継いだ。顕如の正室で教如の母である如春尼や教如に反感を持っている顕如の側近衆などが秀吉に働きかけた結果、教如に替えて三男の准如が 12 世宗主に立てられることになった⁶⁾。教団内部での対立が進行する中、教如は徳川家康に接近し、関ヶ原の戦い後に家康により本願寺の東に新たな寺地が寄進されたことを受けて、教如と彼を支持する勢力は 1602（慶長 7）年に独立して東本願寺を設立した⁶⁾。本願寺は准如の西本願寺と教如の東本願寺とに分裂することになった⁶⁾。

○豊臣時代 大坂城

敵から攻められにくく、見晴らしがよい「上町台地」に、織田信長も着目し、「そもそも大坂はおよそ日本一の境地なり」と唱えた¹⁾。上町台地は大和川と淀川による水運も良く、国際交流の歴史も深いため、ここを手に入れることはわが国はもちろん世界を手に入れることと同じ意味と考えられた¹⁾。

長岡京遷都までは、瀬戸内海航路の発着港であった難波津が、大阪御坊・石山本願寺の地内町となったことで再び瀬戸内海航路との結節点になったものと推察される。

○石山合戦

石山合戦は、1570（元亀元）年9月12日から1580（天正8）年8月2日にかけて行われた、浄土真宗本願寺勢力と織田信長との戦い²⁾である。本願寺法主の顕如が石山本願寺に籠って戦った²⁾。

広義では、1570（元亀元）年9月12日の石山挙兵から1580（天正8）年8月2日の教如退去までの10年間を指すが、1580（天正8）年閏3月7日に本願寺は大坂退去の誓紙を信長に届けて戦闘行為を休止したことから、閏3月7日を終わりとすることもあ²⁾る。戦国時代最大の宗教的武装勢力である本願寺勢力と、天下布武を目指す織田信長との軍事的・政治的決戦であり、石山合戦の終結と同時に各地の一向一揆はその勢いを著しく失った²⁾。また、江戸時代に本願寺勢力が分裂する遠因ともなった²⁾。

「本願寺勢力」という言い方は、本願寺派とすると現在の浄土真宗本願寺派（西本願寺系）と混交するためである²⁾。また、浄土真宗全体が本願寺側についた訳ではない点にも注意する必要がある²⁾。以下の文中においては単に本願寺と記す²⁾。また、「石山本願寺」という呼称についても、近年「石山本願寺」の名称が登場したのは江戸時代以降で、石山合戦当時には「大坂本願寺」と呼ばれていたとする説があり、これを支持する研究者の間では「石山戦争」「石山合戦」の呼称は当時の史実と合致しないとして「大坂本願寺戦争」などの名称を用いる者がいる²⁾。

一発端

大坂石山本願寺はもともと、本願寺の第8世法主・蓮如が隠居先として選んだ場所であり、大坂御坊と呼ばれていた²⁾。畿内において、本願寺は京都山科を本拠としていたが、一向一揆を背景として本願寺の影響力が強くなると、その武力を恐れた細川晴元は日蓮宗徒の法華一揆らと結託し、1532（天文元）年8月に山科本願寺を焼き討ちした（山科本願寺の戦い、天文の錯乱）²⁾。

これにより、山科は廃墟となり、本願寺は本拠を新たに定めなければならなくなった²⁾。本願寺は当時、加賀に大きな勢力を持っていたが、加賀は信者の往来には不便であり、京都からも遠かった²⁾。また、山科焼失の前年に大小一揆と呼ばれる本願寺一門内

の内戦を加賀で起こしており、現地の門徒の間には本願寺への不信感があった⁷⁾。そこで、10 世法主・証如は京都に近く、交通の便の良い大坂御坊を本拠とし、すでに礎石があって守りやすい石山を防戦の要とした⁷⁾。こうして、石山本願寺は本願寺の本拠として発展した⁷⁾。

細川晴元は大坂御坊の発展も恐れ、たびたび石山を攻撃したが、石山は小高い山や川が多く守りに適した場所であり、山科を教訓として本願寺が軍備を進めていたために、まったく戦果を挙げられなかった⁷⁾。晴元以外の時の権力者も石山の武力を恐れ、同盟を結ぶなどして本願寺との戦火を避けた結果、本願寺の勢力は年々増大し、11 世法主の顕如が門跡（門跡は皇族・貴族が僧籍に入り住職となる際の呼称）になるなど、中央権力との結びつきが強くなった⁷⁾。

そんな中、1568（永禄 11）年 10 月に織田信長が足利義昭を擁して、上洛に成功した⁷⁾。足利義昭は室町幕府の第 13 代将軍・足利義輝の弟であり、義昭が信長の武力と共に京都に入ったことで、将軍の地位は第 14 代将軍・足利義栄から義昭に渡ることが確実になった⁷⁾。信長は上洛してすぐに畿内をほぼ制圧した⁷⁾。信長は将軍家の名目で、教行寺など畿内の本願寺系末寺に矢銭を要求し、応じない場合には取り潰しなどの措置をおこなった⁷⁾。本願寺には「京都御所再建費用」の名目で矢銭 5000 貫を請求し、顕如はこれを支払った⁷⁾。

1569（永禄 12）年半ばから、信長と義昭との仲はだんだんと険悪になって行った⁷⁾。この年の 9 月、信長は三好氏征伐を決行する⁷⁾。当時、義昭によって京都を追われ、石山本願寺を頼っていた近衛前久は、顕如に三好氏支援を進言した⁷⁾。ただし、前久は朝廷内・幕府内での対立関係からくる義昭や二条晴良の排除が目的であり、織田氏と直接の利害関係はなかったようである⁷⁾。その証拠に信長が義昭を追放した後、前久は京都に帰還し、一転して信長派の中心人物となっている⁷⁾。

一 淀川堤の戦い

1570（元亀元）年 9 月 12 日、顕如は「信長が本願寺を破却すると言ってきた」として本願寺門徒に檄を飛ばし、三好三人衆攻略のために摂津福島に陣を敷いていた織田軍を突如攻撃した⁷⁾。そのまま本願寺軍は石山を出て、14 日に淀川堤で信長軍と直接激突した⁷⁾。この戦いは織田軍優勢のうちに終わり、本願寺軍は石山に戻り籠城の構えを見せた⁷⁾。織田軍は志賀の陣で既に四面楚歌の状態であるため、石山に監視のための軍を置くと、朝廷に働きかけて本願寺軍に矛を収めるよう勅書を出すなど、本願寺との戦闘を避けた⁷⁾。そのため、石山本願寺の第一次挙兵は、実は 1 月もたたないうちに実質的には終わったのである⁷⁾。

石山挙兵とほぼ同時に長島願証寺で一向一揆が発生（長島一向一揆）し、尾張の古木江城を落として守っていた信長の弟信興を自害に追い込むなど、公然と信長に敵対するようになった⁷⁾。1571（元亀 2）年 5 月に信長は長島殲滅を図るが失敗し、多数の兵を

失った⁷⁾。この年の一向一揆に対する戦果は、9月に一向一揆の籠る志村城・金ヶ森城を降伏させたに留まる⁷⁾。

また、1572（元亀3）年に信長が京都に自身の屋敷を建てた際には、3月に顕如から万里江山の一軸と白天目の茶碗を贈呈されている⁷⁾。7月には家臣に一向宗禁令を出すなど緊迫したが、これは武田信玄の仲介という形で和議を結んでいる（信玄の妻と顕如の妻は姉妹である）⁷⁾。1573（元亀4年/天正元）年に信長は再度長島を攻めたがまたも失敗した⁷⁾。11月には白天目の茶碗を贈られたことに対する謝礼をしている⁷⁾。

但し、兵力を出して戦火を交えてはいないものの、いわゆる情報戦は非常に盛んであった⁷⁾。顕如は遅くとも1572（元亀3）年末ごろまでには、武田信玄や毛利輝元などと密かに同盟を結んでおり、信長を東西から挟撃しようと画策している⁷⁾。足利義昭もこの流れに乗って信玄に上洛を促すなどしている⁷⁾。当然、信長もそれを牽制するために、朝廷外交や上杉謙信への友好工作などを行っている⁷⁾。したがって1573（天正元）年末までは、石山本願寺と信長は互いに牽制しつつも戦火を交えない、いわば冷戦よりややましな程度で推移していたと思われる⁷⁾。

一長島・越前一揆殲滅

1573（天正元）年、信長は朝倉義景と浅井長政を相次いで滅ぼし、義景の領国であった越前には、義景の元家臣前波吉継を守護代に任じて統治させた⁷⁾。

しかし、吉継は粗暴な振る舞いが多くなり、翌1574（天正2）年の1月に富田長繁ら国人領主と結んだ一向一揆によって殺された⁷⁾。さらに一向一揆と結んだ国人領主も次々と一揆により織田方の役人を排斥し、越前は加賀一向一揆と同じく一向一揆のもちたる国となった（越前一向一揆）⁷⁾。これにより、信長はせっかく得た越前を一向宗に奪われることになった⁷⁾。これを知った顕如は、はじめ七里頼周を派遣し、その後に下間頼照を越前守護に任じた⁷⁾。こうして、本願寺と信長の和議は決裂し、4月2日に石山本願寺は織田家に対し再挙兵した⁷⁾。本願寺は長島・越前・石山の3拠点で信長と戦っていたが、それぞれが政治的に半ば独立しているという弱点があった⁷⁾。信長はそれを最大限に活用して各個撃破にでた⁷⁾。7月、信長は大動員令を発して長島を陸上・海上から包囲し、散発的に攻撃を加えるとともに補給路を封鎖して兵糧攻めにした⁷⁾。長島・屋長島・中江の3個所に籠った一揆勢はこれに耐え切れず、9月29日には降伏開城した⁷⁾。しかし、信長はこれを許さず、長島から出る者を根切に処した⁷⁾。この時、降伏を許されなかった長島の一揆勢が捨て身の反撃を行ったため、信長は残る屋長島・中江の2個所を柵で囲んで一揆勢を焼き殺した⁷⁾。指導者であった願証寺の顕忍（佐堯）は自害した⁷⁾。

1575（天正3）年には、信長は本願寺と結託した高屋城主・三好康長を降伏させ、甲斐・信濃の武田勝頼を長篠の戦いで破り、兵を十分に休めた後で動員令を発し、8月12日に越前に向けて進発した⁷⁾。一方越前では、下間頼照ら本願寺から派遣された坊官ら

が重税を課した事などにより、越前で一揆をおこした民衆との関係は悪化し、坊官の専横に反発し一揆が起こるという一揆内一揆まで起きた⁷⁾。

こうした一向宗内部の混乱に乗り織田軍は連戦連勝で瞬く間に越前を制圧し、さらに加賀の南部まで攻め込んだ⁷⁾。9月には信長は北の庄に戻り、さらに岐阜へと戻って石山を牽制した⁷⁾。

本願寺3拠点の2つが撃破され、特に長島では徹底的な根切を行ったことを知った石山本願寺は、顕如が信長に対して自らの行為を詫び、さらに条書と誓紙を納めることで信長と再度和議を結んだ⁷⁾。しかし、前回の和議とは異なり、信長が「今後の対応を見て赦免するかを決める」とするなど、著しく信長に有利な状態での和議となった（実際には信長はまだ上杉・武田・毛利に挟まれており、信長にとっても和議は軍事上悪い話ではなかった）⁷⁾。

一方で中国地方ではこの年に毛利氏は織田方へと寝返った備中の三村氏を備中兵乱で滅ぼし、備前と美作でも宇喜多直家と同盟して天神山城の戦いを後援し浦上宗景・三浦貞広を失領させ、大きく東へと勢力圏を拡大した⁷⁾。これによって毛利氏の軍勢は陸路で播磨まで侵攻する事が可能になり、海路でも瀬戸内海の制海権を確保して対織田を視野に入れた大坂の本願寺との連携が模索され始める⁷⁾。

一 天王寺合戦、第一次木津川口海戦

1576（天正4）年春、顕如は毛利輝元に庇護されていた将軍・足利義昭と与して、三たび挙兵した⁷⁾。4月14日、信長は明智光秀らに命じて石山本願寺を三方から包囲した⁷⁾。しかし、包囲後も本願寺は楼岸（現大阪市中央区）や木津（同浪速区）から海上を経由して弾薬・兵糧を補給しており、織田軍が木津を攻めると、本願寺軍は逆に1万を超える軍勢をもって木津の織田軍を蹴散らし、天王寺砦付近まで攻め入った（この時に包囲軍の主将であった塙直政が戦死している）⁷⁾。危機に陥った光秀は砦に立て籠もり、信長に救援を要請した⁷⁾。

この敗報を聞いた信長は、すぐさま諸国へ陣触れを発したが、突然のことであるために兵の集結が遅かった⁷⁾。そのため信長は痺れを切らし、3000ばかりの兵を連れて天王寺を包囲している15000余の本願寺軍に攻めかかった⁷⁾。また、包囲を突破して砦に入ると、すぐさま光秀はじめとする砦内の兵等と合流して討って出た⁷⁾。そのため、籠城策を取るものと思いついていた本願寺軍は浮き足立って敗走し、石山本願寺に退却した（天王寺合戦）⁷⁾。その後、信長は石山本願寺の四方に付城を住吉の浜手に要害を設け、塙直政の後任の司令官に佐久間信盛を任命して本願寺を完全包囲下に置いた⁷⁾。

経済的に封鎖された本願寺は、毛利輝元に援助を要請した⁷⁾。輝元は要請に応じ、7月15日に村上水軍など毛利水軍の船700から800艘（実際は600艘程度と言われる）が兵糧・弾薬を運ぶために大坂の海上に現れた⁷⁾。織田軍はすぐさま、配下の真鍋氏、沼野氏、宮崎氏などで構成する水軍300余艘で木津川河口を封じたが、毛利水軍は数の

利を生かして焙烙・火矢で織田軍の船を焼き払い、大勝して本願寺に兵糧・弾薬を届けた（第一次木津川口海戦）⁷⁾。信長は仕方なく、三方の監視のみを強化して一旦兵を引いた⁷⁾。

－紀州征伐

1577（天正5）年2月2日、紀伊の雑賀衆の中でも本願寺へ非協力的であった雑賀三緘衆と根来寺の杉の坊が、信長方に内応した⁷⁾。これを受けて、2月13日に信長は準備を整えた上で京都を出て、対抗する雑賀勢の籠る和泉・紀伊に攻め入った（紀州征伐）⁷⁾。織田信長の軍は貝塚にいた雑賀衆を攻撃したのち佐野に進み、自軍を信達で山手・浜手の二手に分け、紀伊に攻め入った⁷⁾。3月1日に雑賀衆の頭目の1人で有力な門徒でもある鈴木孫一の居城を包囲し攻め立てた⁷⁾。

しかし、この攻勢で周辺一帯が荒れ果て、戦線も膠着状態に陥ったことから、事態を憂慮した雑賀衆が翌日に大坂での事に配慮を加えることを条件に降伏を申し入れたため、信長はこれを受け入れて兵を引いた⁷⁾。

－第二次木津川口海戦

木津川での敗戦後、信長は九鬼水軍の長である九鬼嘉隆に、大砲を装備した黒船を建造するよう命じ、滝川一益にも白船を一艘建造させた⁷⁾。九鬼嘉隆らの船団は伊勢大湊を出発し、大坂へ向かった⁷⁾。雑賀衆はこれを迎え討つべく、淡輪（現大阪府岬町）周辺の海上でこの船団を取り囲み、鉄砲や火矢で攻撃した⁷⁾。

しかし、嘉隆はこれに応戦し、大砲も使って敵船の多くを撃沈し、7月17日に船団は堺に着岸し、翌日から石山本願寺への海路を封鎖した⁷⁾。

11月6日、毛利水軍は600余艘を繰り出して、再び木津川河口に現れた⁷⁾。信長軍は九鬼嘉隆の大船を中心として立ち向かったが、毛利水軍はまたも焙烙火矢で攻撃を繰り返した⁷⁾。しかし、嘉隆は淡輪での戦いと同様に、大船を相手の大將が乗っていると思われる舟に近づけては大砲を打ち込んで撃沈するという方法で相手を打ち崩し、ついには毛利水軍の舟数百艘を木津沖に追い返すことに成功した（第二次木津川口海戦）⁷⁾。

－講和

1578（天正6）年10月、摂津における石山本願寺討伐の要であった荒木村重の離反によって（有岡城の戦い）、信長の対石山本願寺戦略に重大な狂いを見せた⁷⁾。時を同じくして、三木合戦で羽柴秀吉が三木城を攻めていたが、毛利氏が摂津に上陸して三木城に兵糧を運び込む恐れも出てきた⁷⁾。これを機に信長は朝廷を動かして、本願寺や毛利氏との和解を試みた⁷⁾。

11月4日、信長が朝廷を動かした結果、本願寺に対して信長と講和するように正親町天皇の勅命が下され、勧修寺晴豊と庭田重保が勅使として本願寺に派遣された⁷⁾。信

長としては村重を再三説得するための時間稼ぎであったが、本願寺は信長との和睦は飲めるが、毛利輝元とは「近年の芳志」があるとして、本願寺単独での和睦を拒否した⁷⁾。そのため、信長は本願寺のみならず毛利氏とも和睦する方針を取り、輝元に対しても勅使の派遣を計画した⁷⁾。

しかし、その直後の11月6日、織田水軍が第二次木津川口海戦において毛利水軍に大勝し、11月24日に茨木城が開城すると、信長は朝廷へ使者を急遽飛ばし、毛利氏への勅使派遣を中止させ、和平交渉を取りやめた⁷⁾。その後、信長は村重攻略を進め、また村重の反乱自体が周辺の織田方武将の呼応を伴わなかったため、反乱自体は長期にわたったものの、本願寺攻略への影響は最小限に留まった⁷⁾。

第二次木津川口海戦での毛利水軍敗退を受けて、本願寺は将来の弾薬や食料の欠乏を恐れ始めたほか、1579（天正7）年10月には有岡城が陥落し、三木城の情勢もすこぶる悪くなっていたこともあって、12月には恒久的な和議を検討するようになり、朝廷に先年の和解話のやり直しの希望を密かに伝えた⁷⁾。その動きを期待していた信長側でも再度、朝廷に講和の仲介を働きかけていた⁷⁾。

1580（天正8）年1月、三木城が落城した⁷⁾。輝元や武田勝頼の苦戦、上杉氏の没落、有岡城や三木城における虐殺などによって、本願寺内には厭戦気分が高まっていた⁷⁾。そのような状況の中で、3月1日、朝廷は勅使として勧修寺晴豊と庭田重保、さらには近衛前久を本願寺に遣わし、本願寺側との妥協点を探った⁷⁾。このとき、信長は佐久間信盛と松井友閑を目付として、勅使に従わせた⁷⁾。また、前久は開戦の経緯を知る人物であり、信長から本願寺との講和交渉で期待されていた⁷⁾。

そして、勅使らが年寄衆の意向を質し、本願寺は和議を推し進めることで合意した⁷⁾。以上の経緯から「勅命講和」という方式での和議を提案したのは信長側であったが、実際の講和申し入れは本願寺側からあったものといえる⁷⁾。

3月17日、信長が本願寺を惣赦免するとの血判起請文を作成し、勅使に提出した。これは、顕如の大坂退去や、尼崎城や花熊城を明け渡すなど、本願寺への事実上の降伏勧告であった⁷⁾。

閏3月5日、顕如が信長の出した起請文を受諾し、勅命講和となった⁷⁾。顕如が講和に応じた理由としては、このまま戦い続けたとしても、有岡城や三木城と同様の虐殺が起こりうることを懸念したことを、末寺や門徒らに伝えている⁷⁾。こうして、信長と本願寺は3度目の講和を果たした⁷⁾。条件は顕如ら門徒の大坂退城など⁷⁾。

この他、『信長公記』には、退城の期限は7月20日だったと書かれている⁷⁾。また、講和条約に署名したのは、顕如の3人の側近である下間頼廉・下間頼龍・下間仲孝だった⁷⁾。

4月9日、顕如は石山本願寺を嫡子で新門跡の教如に渡し、紀伊鷺森御坊に退去した⁷⁾。しかし、雑賀や淡路の門徒は石山に届けられる兵糧で妻子を養っていたため、この地を離れるとたちまち窮乏してしまうと不安を募らせ、信長に抵抗を続けるべきと教如

に具申し、教如もこれに同調した⁷⁾。故に、顕如が石山を去った後も、石山は信長に抵抗する教如勢が占拠し続けた（大坂拘様）⁷⁾。

覚

- 一 惣赦免事
 - 一 天王寺北城先近衛殿人数入替、大坂退城候刻、大子塚をも引取、今度使衆を可入置事
 - 一 人質為気仕可遣之事
 - 一 往還末寺如先々事
 - 一 加州二郡（江沼・能美）、大坂退城以後、於無如在者可返付事
 - 一 月切者七月盆前可究事
 - 一 花熊・尼崎、大坂退城之刻可渡事
- 三月十七日 朱印（信長）
（「本願寺史」本願寺史料研究所編纂 浄土真宗本願寺派＜西本願寺＞発行）

7月2日、顕如は3人の使者を遣わして信長に御礼を行い、信長もそれに合わせて顕如に御礼を行った⁷⁾。これと前後して、荒木村重が花隈城の戦いに敗れ去るなどの情勢悪化や、近衛前久の再度の説得工作によって、石山の受け渡しを教如派も受け入れて、8月2日に雑賀に退去し、石山は信長のものとなった⁷⁾。

しかし、石山本願寺は引き渡し直後に出火し、三日三晩燃え続けた火は寺を完全に焼き尽くした⁷⁾。『信長公記』では、松明の火が風で燃え移ったとされている⁷⁾。『多門院日記』には、「退去を快しとしなかった教如方が火を付けた」と噂されたとある⁷⁾。

8月、佐久間信盛は信長から折檻状を突きつけられて織田家から追放されたが、理由の1つに石山本願寺を包囲するだけで積極的に戦を仕掛けなかったことを挙げている⁷⁾。また、信長と石山本願寺の交渉の影には、森成利（森蘭丸）の母の妙向尼がいた⁷⁾。妙向尼は和睦成立に奔走し、本願寺の危機を救った⁷⁾。森成利を通じて情報を得た妙向尼は、信長と面会し、直談判をして信長の石山本願寺の追撃を断念させた⁷⁾。信長は当時、本願寺との和睦に際して「金山城下に浄土真宗の寺院を建立、子息（妙向尼の子）の一人を出家」させることを条件に和睦を提示した⁷⁾。

一 戦後の影響

顕如の退去後、教如が講和に反して石山を占拠したため、本願寺は顕如と教如の2派に分かれ、顕如は誓約違反を問われることになってしまった⁷⁾。結局、教如も石山を出ることで内紛には決着がつき、1582（天正10）年6月の本能寺の変の信長の死の直後に顕如と教如は朝廷の仲介により和解するが、顕如は内紛の核となった教如を廃嫡し、三男の准如を嫡子と定めた⁷⁾。

1592（文禄元）年 11 月、顕如が死没すると、豊臣秀吉の命で教如が本願寺を継いだ⁷⁾。だが、如春（顕如の妻、教如・准如らの母）らが顕如の遺志にもとづき、秀吉に働きかけたため、翌年に教如は隠居させられ、弟の准如が跡を継いだ⁷⁾。

しかし、教如はその後も大坂の大谷本願寺（難波御堂、現在の真宗大谷派難波別院）を本拠地として、各地の門徒へ本尊の下付などの法主としての活動を続けたため、この時点で本願寺は准如を支持する派と教如を支持する派に事実上分裂した⁷⁾。

1602（慶長 7）年、教如は以前より昵懇だった徳川家康による土地の寄進を受け、京都の七条烏丸に東本願寺を建てたために、本願寺は東西に分かれることとなった⁷⁾。

序文で述べているが、石山合戦は当時最大の宗教一揆でもあったため、それが終結したことで各地の宗教一揆は激減することになった⁷⁾。

講和条件の「如在無きに於いては（＝従順でいるならば）加賀江沼・能美 2 郡を本願寺に返付する」という条項については、実現されることはなかった⁷⁾。というのは、教如が抗戦を呼びかけたため、加賀一向一揆と信長の重臣・柴田勝家の交戦は続いたからである⁷⁾。信長と顕如は停戦を命じたものの戦闘は続き、1580（天正 8）年 11 月 17 日に柴田勝家に諸将を討ち取られ、1582（天正 10）年 3 月には白山麓鳥越城の一揆が鎮圧されて「百姓の持ちたる国」は終焉を迎えた⁷⁾。

1. 1 2. 2 豊臣時代、徳川時代の大坂

○豊臣時代

信長の意思を継ぎ、大坂を拠点に天下統一を成し遂げたのが豊臣秀吉¹⁾である。石山本願寺跡に大坂城を築城し城下町大坂を築いた¹⁾。

1583（天正 11）年から羽柴（豊臣）秀吉によって築城が開始され、大坂は羽柴家（豊臣氏）の本拠地となった⁸⁾。同年、秀吉は、加藤清正、片桐且元、細川忠興を採石奉行として小豆島へ派遣した（後年、豊臣秀頼は、同城修理のため、1599（慶長 4）年、黒田孝高を同島に派遣している）⁸⁾。

豊臣大坂城普請は四期に区分され、第一期（1583（天正 11）年から 1585（天正 13）年に本丸を、第二期（1586（天正 14）年から 1588（天正 16）年に二の丸を、第三期（1594（文禄 3）年から 1596（文禄 5／慶長元）年）に総構（三の丸）を、第四期（1598（慶長 3）年）に馬出曲輪と大名屋敷を整備した⁸⁾。

文禄・慶長の役間の 1596（文禄 5／慶長元）年に行われた和議交渉に際して、明使饗応のため本丸御殿は大改修が行われた⁸⁾。本丸南の表御殿には「千畳敷」と称される大規模な殿舎が、またこれまで別個の御殿だった表御殿と詰の丸の奥御殿を繋ぐ「千畳敷の大廊下」も建てられた⁸⁾。これらの建築は慶長伏見地震で倒壊したとも言われたが、実際にはその後も存続している⁸⁾。

また慶長9年には秀頼が「二階作の千畳敷」を新造したとあるが、これが殿舎を指すのか廊下を指すのかは不明である。なお表御殿のある本丸南側と奥御殿のある詰の丸との地表差は3メートル以上ある⁸⁾。何れにしても「千畳敷」「千畳敷の大廊下」も大坂の陣まで残り、『大坂冬の陣図屏風』『大坂夏の陣図屏風』双方に描かれている⁸⁾。

一般には大坂城が豊臣政権の本拠地と解されるが、実際には1585（天正13）年には秀吉は関白に任ぜられ、翌1586（天正14）年には関白としての政庁・居館として京都に聚楽第を建設して1587（天正15）年の九州征伐からの帰還後はここに移り住み、更に関白を退いた後は京都の南郊に伏見城を築城して死ぬまで伏見において政務を執った⁸⁾。ただし諸大名による年賀の挨拶は、基本的に大坂城で受けていた⁸⁾。

1598（慶長3）年に豊臣秀吉が死去、1600（慶長5）年の関ヶ原の戦いで石田三成方の西軍が敗れた結果、徳川家康によって東軍への恩賞という形でその所領が分配されたため、220万石の大大名から摂河泉65万7千400石の一大名に転落した豊臣氏であったが、遺児の豊臣秀頼は依然として豪華絢爛たる大坂城を居城としていた⁸⁾。

秀吉は、東横堀川、西横堀川、阿波堀川などを堀り、海運・水運の拠点大坂を築いた¹⁾。また、各地から商人を移住させ木綿、油、薬種、金属加工業などの産業の集中を図り、さらに、海外交易にも力を入れ、東南アジアへも商人が雄飛¹⁾した。

しかし、1614（慶長19）年に勃発した大坂冬の陣において、講和条件として大坂城は惣構・三の丸・二の丸の破却が取り決められ、大坂城は内堀と本丸のみを残す裸城にされてしまう⁸⁾。秀頼は堀の再建を試みたために講和条件破棄とみなされ、冬の陣から4か月後の1615（慶長20）年、大坂夏の陣で大坂城はついに落城し、豊臣氏は滅亡した⁸⁾。秀吉の城下町大坂も、1614（慶長19）年、1615（元和元）年の大坂冬の陣、夏の陣で焦土と化した¹⁾。

○徳川時代の大坂城、まちづくり

焼け野から復興した経済都市大坂が「天下の台所」として全国的に名を馳せたのは江戸期¹⁾である。全国からの物資が集まり出荷されていく「流通拠点」となり、国際貿易にも結び付いた国内最大の経済都市として栄え、なかでも米は堂島米市場の米相場が全国相場の基準とされた¹⁾。

落城後の大坂城は、初め家康の外孫・松平忠明に与えられた（10万石）（大坂藩）⁸⁾。忠明に課せられた任務は大坂の町の復興であり、城そのものにはあまり手が加えられることはなかった⁸⁾。1619（元和5）年7月、忠明は大和国郡山藩12万石へ移封となり、大坂は幕府直轄領となる⁸⁾。

翌1620（元和6）年から2代将軍徳川秀忠によって、豊臣色を払拭する大坂城再築工事が開始された⁸⁾。大坂城再築工事は主に西国大名を中心に1620（元和6）年からの第一期工事では47大名を動員して西の丸、二の丸北部・東部、三の丸、1624（元和10）年からの第二期工事で58大名を動員して本丸一帯を、1628（寛永5）年からの第三期工

事では 57 大名が動員されて二の丸南部，と実に 3 期足かけ 9 年にわたる普請によって 1629（寛永 6）年に完成した⁸⁾。

幕府直轄の城である徳川大坂城の城主は徳川将軍家の歴代将軍自身であり，譜代大名から選ばれる大坂城代が預かり，近畿地方，および西日本支配の拠点となった⁸⁾。他に大坂城代を補佐する定番 2 名（京橋口定番・玉造口定番）も譜代大名から選ばれ，旗本で編制された幕府の常備軍である大番 2 組（東大番・西大番）に加勢する加番 4 名（山里加番・中小屋加番・青屋口加番・雁木坂加番）が大名から選ばれた⁸⁾。なお，大番と加番は 1 年交代制だった⁸⁾。城代は江戸時代を通じて 70 代の就任をみている⁸⁾。本来の城主である将軍は家光，家茂，慶喜の 3 名のみ大坂城に入城している⁸⁾。このうち在城期間が最も長いのは家茂で，大坂城にて生涯を閉じた唯一人の将軍である⁸⁾。

江戸時代には三度の落雷による損傷と修復を繰り返した⁸⁾。一度目は 1660（万治 3）年 6 月 18 日，城内青屋門近くにあった土蔵造りの焰硝蔵（火薬庫）に落雷して大爆発が起き，貯蔵中の 2 万 1985 貫 600 匁（約 82.4t）の黒色火薬のほかに，鉛弾 43 万 1079 発，火縄 3 万 6640 本が焼失した⁸⁾。爆発の威力はすさまじく，城内では 29 人が死亡，およそ 130 人が負傷した⁸⁾。天守や御殿，櫓，橋など，多数の建造物が損壊。城外でも 3 人が死亡，家屋 1481 戸が倒壊し，多数の家屋の屋根が破損した⁸⁾。また，青屋門の扉が城から約 14km 離れた暗峠まで飛ばされたとの記録（「板倉重矩公常行記」）もある⁸⁾。後に幕府は現存する石造りの焰硝蔵を建造した⁸⁾。二度目は 1665（寛文 5）年正月 2 日で落雷を天守北側の鯨に受けて天守を焼失した⁸⁾。天守は 39 年と短命だったが，本丸の三重櫓 11 基は以降 200 余年にわたり残存した⁸⁾。三度目は 1783（天明 3）年 10 月 11 日で，大手多聞櫓に落雷が直撃し全焼⁸⁾した。幕府の財政難のため再建は 1845（弘化 2）年からの町人御用金による総修復まで待つこととなった⁸⁾。

江戸末期、1867（慶応 3）年 12 月 9 日に発せられた王政復古の大号令の後，二条城から追われた前将軍徳川慶喜が大坂城に移り，居城していたが，1868（慶応 4）年 1 月 3 日に始まった鳥羽・伏見の戦いで旧幕府軍の敗北が濃厚になると，同年 1 月 6 日夜，慶喜は大坂城を脱出し江戸へ退却した⁸⁾。翌 1 月 7 日には徳川慶喜征討大号令が発せられ，大坂城内に群衆が乱入⁸⁾。そして，新政府軍への大坂城の引き渡しが行われた 1 月 9 日，本丸御殿の台所より出火し，本丸御殿・本丸の三重櫓 11 基・桜門・姫門など本丸のすべての門，山里曲輪の東菱櫓・西片菱櫓・山里門・極楽橋，二の丸の四番櫓・五番櫓・七番櫓・太鼓櫓・艮櫓・巽櫓・玉造門など城内の建造物のほとんどを焼失した⁸⁾。

江戸時代になると，西横堀川より西の湿地にもたくさんの堀川が掘られ，市街地がさらに広げられて⁹⁾いった。徳川時代前期における大坂町域の開発では，豪商淀屋が大きな役割を果たしている。淀屋は，江戸初期の大坂の代表的な豪商¹⁰⁾である。淀屋初代の常安は，山城国岡本荘の出身¹⁰⁾で，建設業からスタートしたようである。常安は，豊臣秀吉が明の使節を謁見するため，完成を急いだ伏見城の築城工事に参入し，散在する巨石処分を格安で請負，大穴を掘って巨石を埋めるという奇策で名を上げた¹⁰⁾という。さ

らに秀吉が進めた巨椋池改修，宇治川の付け替え，太閤堤の築堤，伏見港の整備など大がかりな淀川の洪水対策を手がけた¹⁰⁾。1596（慶長元）年の慶長伏見大地震のあと，桂川，宇治川，木津川の合流点の淀津から大坂の十三人町（現・大阪市中央区北浜4丁目）に移り，「淀屋」と称して吉野杉や木曽檜を扱う材木商を開いた¹⁰⁾。1614（慶長19）年の大坂冬の陣，1615（元和元）年の夏の陣では，徳川方に付き，得意の土木技術で家康の茶臼山本陣，秀忠の岡山本陣をつくった¹⁰⁾。大坂城落城後は，戦場の処理を手がけ，鎧や兜，刀剣などの処分を引き受け，莫大な富を手にしたといわれる¹⁰⁾。天下人となった家康は常安を召し出し，冬の陣，夏の陣への功によって苗字帯刀と岡本三郎右衛門と名乗ることを許した¹⁰⁾。そのうえ山城八幡の山林300石を与え，八幡の侍格に取り立てた¹⁰⁾。さらに家康から望みのものはないかと問われ，常安は「諸国から大坂に入る干魚の品質に応じて市価を定める独占権と干魚の運上銀（関税類似のもの）を欲しい。米穀の相場を自分一手で立てたい」と願い出て，いずれも許可された¹⁰⁾という。家康は1616（元和2）年4月に没したので，大坂夏の陣後の1615（元和元）年5月以降もしくは1616年のこととなる。

常安は土佐堀川の河原で，淀屋の蔵に集まってくる米を店頭に出し，私設の米市場を開いた¹⁰⁾。そこに仲買人が集まり，米相場が発展することになった¹⁰⁾。堂島米市の前身の淀屋店先取引である。次いで幕府に中之島の開拓を出願し，常安請地として整備を進め，1619（元和5）年に完成した¹⁰⁾。近世大坂のインフラ整備を進め，大坂が「天下の台所」として発展する基盤を築いた¹⁰⁾。

淀屋二代目の言当（以後代々通称辰五郎，号个庵）は常安と同様商才に富み，覇気も備えていた¹⁰⁾。1616（元和2）年，京橋南詰の淀屋屋敷で青物市場（後の天満青物市場）を設け¹¹⁾た。1622（元和8）年个庵らを代表として開かれた葭島新地には靱三町が形成され，また新地の西部にはのちに雑喉場魚市場が生れていった¹¹⁾。1624（元和10／寛永元）年，靱の干塩魚商人が，荷役に便利のように海部堀川を開削¹²⁾する。海部堀川は阿波堀川の太郎助橋上流から北へ分流し，約100mのところから西折，京町堀川の最下流部に合流する延長約550m，幅員約18～20mの堀川¹²⁾である。上流部の南北区間は特に永代堀，その岸は永代浜とよばれた¹²⁾。永代浜には当時大切な肥料であった干鰯の荷揚げ場や市場を設けたので，おおいに賑わった¹²⁾。淀屋店先の米市のため，門前の土佐堀川に橋を架け，「淀屋がかけた橋」（淀屋橋）が出来た¹⁰⁾。寛永年間(1624～44)に架橋¹⁰⁾されたと伝わる。また西国諸藩の蔵米を取り扱い，財政難に陥った大名に蔵米を担保として「大名貸し」をする金融業や廻漕業を営むなど経営の多角化をはかり，2代で巨万の富を築いた¹³⁾。

井原西鶴が日本永代蔵で描いた豪商は四代目重当（1634（寛永11）-1697（元禄10））のころで，元禄から正徳年間の事件を書き留めた『元正間記』に「大書院、小書院は総体金張り付き，金襴に極彩色の四季の花鳥を描かせ，・・・夏座敷と名付けたものに・・・外来品のビードロ（ガラス）の障子を立て，天井もまたビードロ張りにして，そこに水

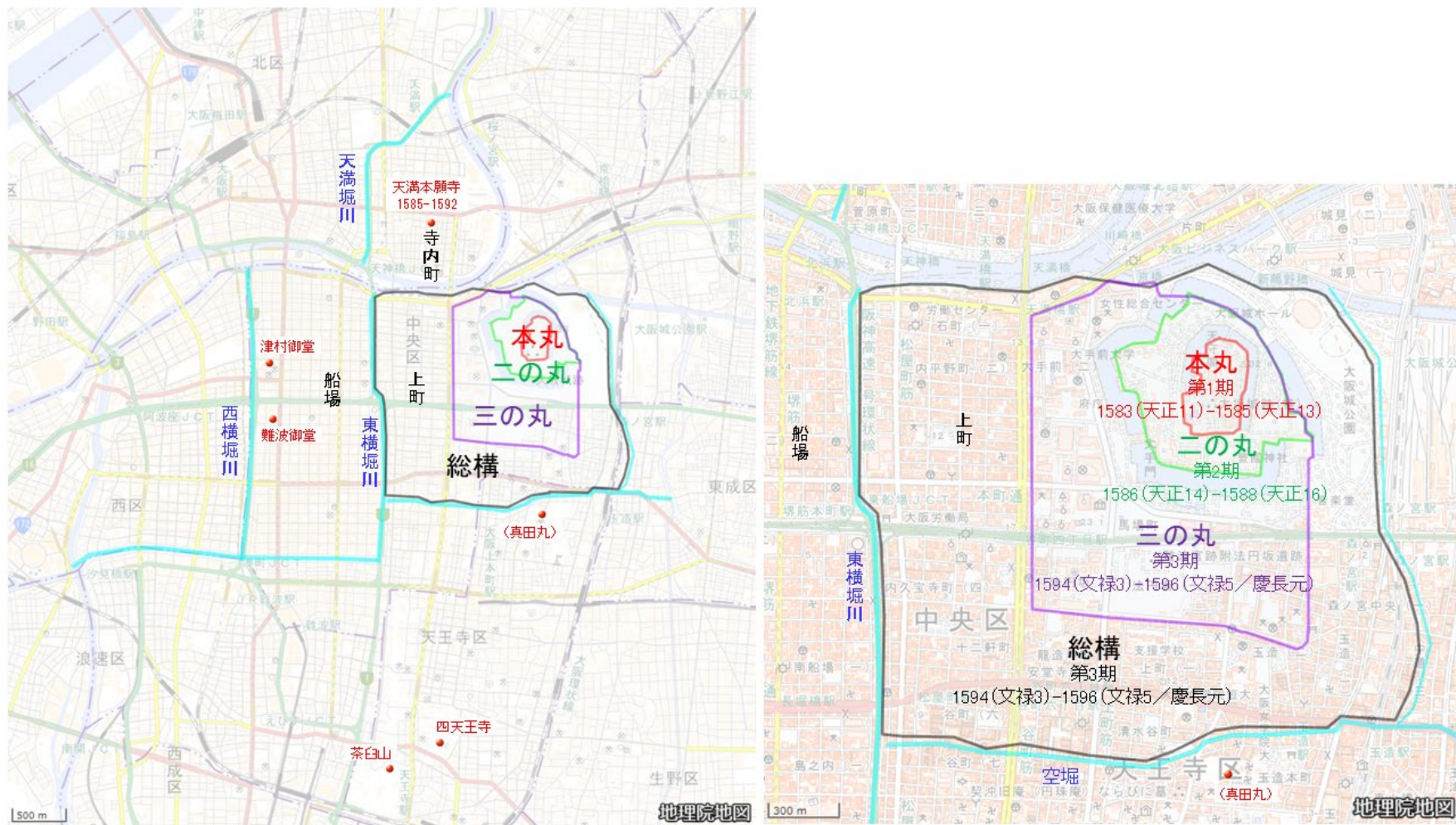


図 1.12-2 豊臣時代大坂城と大坂

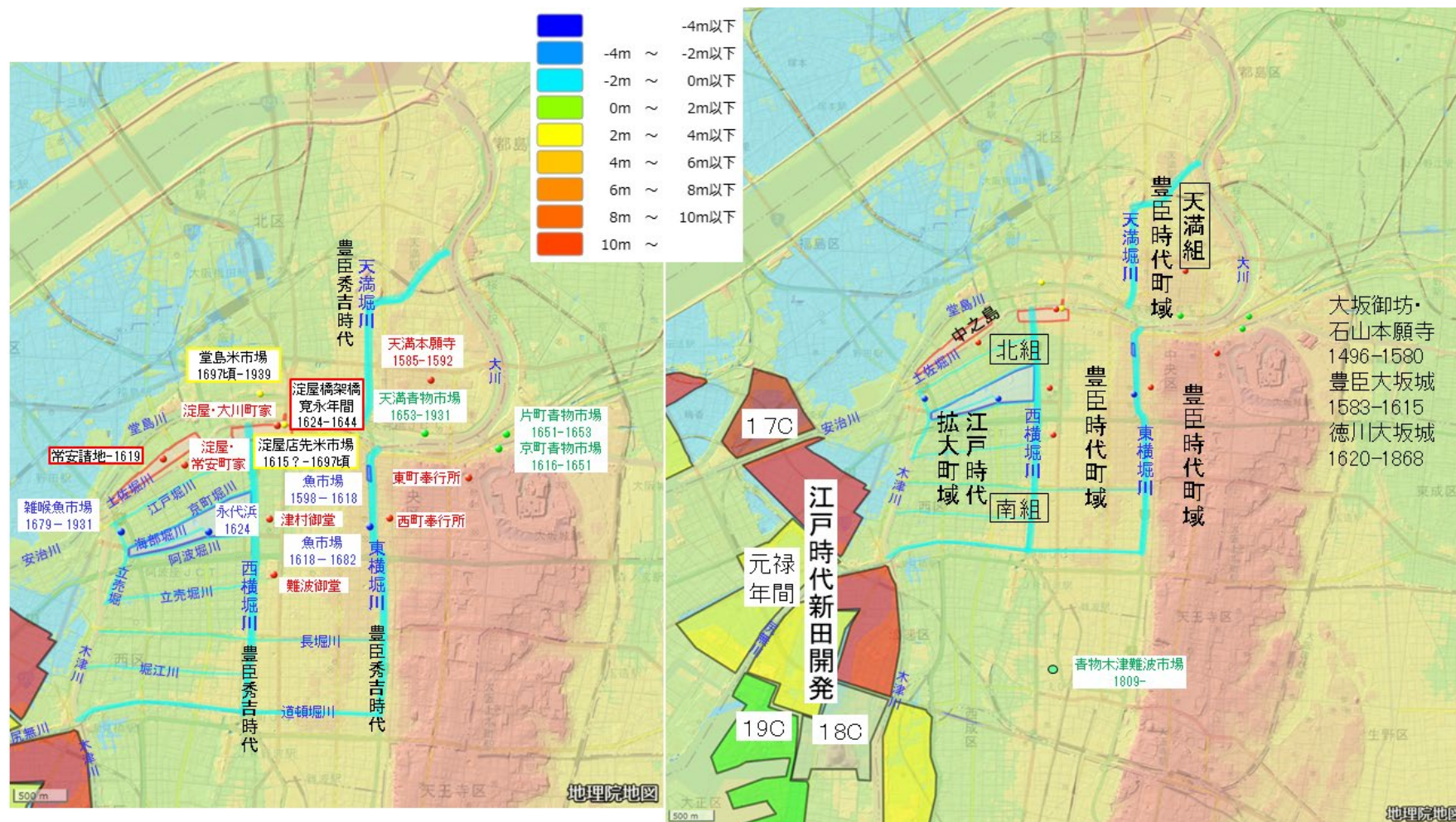


図 1.12-3 豊臣時代，徳川時代の大坂拡大



図 1.12-4 徳川時代大坂城再建 1620 (元和 6) -1629 (寛永 6)

をたたえて金魚を放ち、寝ながらそれを眺められる」とあり、百万石の大名に匹敵する財力を持つまでになっていた¹⁰⁾。

五代目広当（1683（天和3）-1717（享保2））が取り潰しという關所処分になったのは1705（宝永2）年のこと¹⁰⁾である。当時の資産は諸説あるが、金12万両、銀12.5万貫、土地が北浜に2万坪、伏見、和泉、八幡などに400町歩、家屋1万坪、米蔵など730戸、材木2千貫、千石船150、屏風、鉦産物、美術品、薬種、刀剣など¹⁰⁾である。

大名への貸付金は銀1億貫あったとされ、いまの価値に換算すると、100兆円という試算がある¹⁰⁾。広当は財産没収、大坂三郷所払いとなった¹⁰⁾。これで財政難の幕府は一息つき、諸大名は借金が帳消しになった¹⁰⁾。

1. 1 2. 3 航路開拓と河村瑞賢

一菱垣廻船と樽廻船 江戸—大坂航路

米が大坂に集まる舟運路の開発について概観する。もともと大坂は、瀬戸内海の航路とつながっていたが、徳川家康が幕府を開いた江戸との航路として、菱垣廻船が開拓された。菱垣廻船とは、江戸時代に、大坂などの上方と江戸の消費地を結んだ廻船（貨物船）¹⁴⁾である。菱垣とは、両舷に設けられた垣立と呼ばれる舷牆に装飾として木製の菱組格子を組んだ事に由来する¹⁴⁾。1619（元和5）年に和泉国堺の商人が紀州の富田浦の廻船を雇って江戸へ回航させたのが創始で、多種多様な日常の生活物資を運んだ¹⁴⁾。

1624（寛永元）年には大坂北浜の泉屋平右衛門が江戸積船問屋を開業し、1627（寛永4）年に毛馬屋、富田屋、大津屋、顕屋、塩屋の5軒が同じく江戸積船問屋を始めるにいたって、大坂の菱垣廻船問屋が成立し、この廻船問屋によって菱垣廻船が仕立てられた¹⁵⁾。こうして江戸・大坂間の海運が盛んになり¹⁵⁾、1694（元禄7）年に不正や海難事故防止のために江戸に十組荷主仲間、大坂に二十四組荷主仲間がそれぞれ結成され、一切の貨物は仲間専属の菱垣船に船積みすることにし、船積みから陸揚げにいたる一切の船舶事務は大坂に7軒と江戸に3軒あった菱垣廻船問屋に一任することにし、したがって菱垣船は専ら荷主仲間の貨物に限り船積み運送するものと定められた¹⁶⁾。

菱垣廻船において酒樽は下積荷物であったが、海難の際に破棄される上積荷物に対する補償は、問屋が共同で負う義務があった¹⁶⁾。また、腐敗しやすい酒は輸送時間の短縮が重要だったが、多様な荷を乗せる菱垣廻船は出帆するまでに長い日数を必要とした¹⁶⁾。これらに不満を持つ酒問屋は1730（享保15）年に脱退し、酒専用の樽廻船問屋を結成し、専用船による独自の運営をはじめた¹⁶⁾（樽廻船）。

樽廻船の船体構造は菱垣廻船とほぼ同じであるが、菱垣の無い弁才船と呼ばれる和船の一種で、多少深さを増して船倉を広くした¹⁶⁾。単一の商品（清酒）のみを取り扱うこととし、積み込みの合理化を図ることによって輸送時間の短縮を実現した¹⁶⁾。樽廻船の迅速輸送が評価されると、余積として酒以外の荷物も安い運賃で輸送するようになり、

菱垣廻船と競合していった¹⁶⁾。競合を避けるため、1770（明和7）年には酒と米・糠などの7品に限り樽廻船での輸送を認め、それ以外は菱垣廻船でのみ輸送を行うとする積荷協定が結ばれる¹⁶⁾。しかし協定は守られず、また天保の改革の一環である株仲間解散もあり、樽廻船問屋が優勢となった¹⁶⁾。

樽廻船の根拠地は灘五郷に作られた西宮や今津といった湊で、その系統に属して明治以後の海運界に活躍したのは、西宮の辰馬家と八馬家である¹⁶⁾。辰馬は同姓の者が多いが、海運業者として沿革が古く、明治時代に活躍したのは、銘酒「東自慢」の醸造元である辰馬半右衛門であり、大正時代のバブル景気下で成金として財界でも活躍したのが銘酒「白鹿」の醸造元である辰馬本家の辰馬吉左衛門である¹⁶⁾。どちらも酒造業の傍ら、海運業に従事した¹⁶⁾。八馬兼助は以前より酒造用米穀の売買・運送と酒類の運送を業としたる者で最初より純然たる船主であり、明治に入って大和船より西洋形帆船、さらに汽船と巧みに産業革命の波に乗って社外船主の雄となった¹⁶⁾。そのほかに樽廻船系の海運業者として摂州灘酒家興業会社（辰馬汽船、新日本汽船、ナビックスラインを経て現・商船三井）がある¹⁶⁾。

なお、海路の性格上、天候次第では運行が困難になる場合もあった¹⁶⁾。1807（文化4年）7月には、嵐が続いたため酒船の入津が途絶え、江戸市中から酒が無くなったとする記録がある¹⁶⁾。

1889（明治22）年、官設鉄道（現・JR）東海道本線が東京の新橋駅から神戸駅まで全通した¹⁶⁾。それに伴い新橋と大阪駅（後の梅田貨物駅）を結ぶ直通の貨物列車の運転が始まり、高速かつ海況によるリスクなく安定的な輸送ができるようになって、樽廻船は一気に衰退した¹⁶⁾。

一 西廻り海運

西廻海運は、江戸時代前期に成立した、日本海沿岸を西廻りに、酒田から佐渡小木・能登福浦・下関などを経て大阪に至り、さらに紀伊半島を迂回して江戸に至る航路による海上輸送¹⁷⁾をいう。1672（寛文12）年、江戸の商人河村瑞賢の幕命を受けて行った海運の刷新によって確立した¹⁷⁾。

日本海と瀬戸内海との海運は江戸時代以前に始まるが、江戸時代に入ってから1638（寛永15）年に鳥取藩と加賀藩が大阪廻米を行った¹⁷⁾。また、1659（万治2）年には輸送を請け負った正木半左衛門らにより出羽国村山郡の幕領米が酒田港から西廻りで江戸に廻米されている¹⁷⁾。1671（寛文11）年には、正木半左衛門らに替り河村瑞賢が出羽国の幕領米の江戸廻米を命ぜられた¹⁷⁾。瑞賢は、同年開いたばかりの東廻海運ではなく、距離は倍以上になるが安全な西廻りを採ることとした¹⁷⁾。そして、事前に海路の危険、寄港地の便などを踏査し寄港地を定め、航路を確かめ各地に番所を設け、御城米輸送の安全をはかる諸施設を設置するなど、刷新的な方法で輸送にあたった¹⁷⁾。



図 1.12-5 菱垣廻船・樽廻船



図 1.12-6 西廻り廻船

瑞賢は従来の商人請負による江戸廻米を改め、積船を幕府の直雇とし、北国海運で活躍していた北国船ではなく江戸への航路に慣れた塩飽船など東瀬戸内海の船と船頭を選んだ¹⁷⁾。また従来、最上川を下った御城米はいったん酒田の商人の町蔵に保管され日和をみて廻米船に積み込まれる方式であったが、御城米専用の野積の米蔵を建て、輸送も上流船の独占を止め下流船も活用、請負人の負担であった川舟運賃を幕府の負担とし低運賃に改めるなど、経費の削減を図った¹⁷⁾。御城米の輸送体系から商人資本の町蔵、町船などを排しての官営輸送であり、農民の負担増を招いた改革でもある¹⁷⁾。

積載船は、幕府直雇の御城米廻漕専用とし、大阪で徴用された後空船で積出港に向かった¹⁷⁾。廻漕船は御用船であることを示す朱の丸の「官幟」を掲げ、入出港においての優先権と入港税の免除などの優遇策が取られ、沿線の諸侯にも御城米船の保護を命じた¹⁷⁾。また代官に命じて寄港地に立務場を置き、御城米船の保護に当らせるとともに積載量を厳密に検査させた¹⁷⁾。官米の廻漕は利益も少なく、利鞘を稼ぐため超過して荷を積むことも少なくなかったからである¹⁷⁾。そのかわり、寄港地での乗組員用の食料米は余分に買い込ませた¹⁷⁾。江戸への航海日数が少ないほど食料米は余ることとなり、その売買益は乗組員の取り分とした¹⁷⁾。しかし不測の事態により積荷を減ずる必要が生じた場合は必ず食料米から海に投棄するよう命じた¹⁷⁾。トラブルを避け、船を速やかに運航させるため船中での賭博を禁じた¹⁷⁾。

岩礁が多く危険な下関港には水先案内船を備え、鳥羽港口の菅島では、毎夜烽火を挙げ廻漕船の目標とするなど航路の安全確保に努め、積出港の酒田と寄港地および江戸には手代を置き管理にあたらせ、輸送体系の刷新を図った¹⁷⁾。寄港地は、(酒田)⇒佐渡の小木⇒能登の福浦⇒但馬の柴山⇒石見の温泉津⇒長門の下関⇒摂津の大坂⇒紀伊の大島⇒伊勢の方座⇒志摩の畦乗⇒伊豆の下田⇒(江戸)である¹⁷⁾。

この輸送体系は海上輸送の安全を図るとともに、米の輸送を幕府の管理の元に置き、輸送経費の削減にも役立つものであった¹⁷⁾。瑞賢による輸送体系の刷新と整備は、西廻海運の隆盛と大阪市場の発展をもたらし、御城米輸送体系としてその後長く用いられたばかりでなく、これを契機に奥羽諸藩の蔵米輸送もこれに習い、従来琵琶湖を經由していた日本海側からの上方廻米もこの方式を基本として行われるようになった¹⁷⁾。

それまで、津軽および出羽からの輸送は敦賀か小湊で陸上げし、陸路琵琶湖に至り湖上を船で大津に送り、また陸送して京阪に運ぶルートであり、江戸へはさらに大阪からの船便であった¹⁷⁾。当時は、米は重要な戦略物資であり、大量生産、大量輸送、米余りの昨今の常識では考えられぬことではあるが、輸送経路の長さや日数より何より、米一粒の無駄もない輸送が望まれ、海路から陸路そして水路へと積み替え回数が多く、従って米の損失が避けられない琵琶湖を經由する廻漕は敬遠されるようになったのである¹⁷⁾。これら輸送体系の刷新によって、敦賀あるいは小湊から大津を経る米輸送が大打撃を受けたのに対し、大阪の中央市場としての性格が一層強化され、瀬戸内海廻船の日本海への進出が著しくなった¹⁷⁾。



図 1.12-7 東廻り廻船

一河村瑞賢

河村瑞賢は、伊勢国度会郡東宮村生まれの江戸前期の商人¹⁸⁾であり、海運・治水の功労者¹⁸⁾である。近世初頭、江戸の町づくりが始まり、築城から河川の開削、海運ルートの開発などの必要に迫られたとき、それにこたえて登場した¹⁸⁾。その意味では現代のディベロッパーと呼ばれる開発事業家として、すぐれた才能を持っていたといえる¹⁸⁾。その才能と技術は、単なる学問として吸収した机上の空論ではなかった¹⁸⁾。

貧農の家に生まれ、13歳のとき江戸に出て車力となり、また土木工事の人夫として普請場で土石を積んだ重い車を引いた¹⁸⁾。体験に根ざした実務家でありながら、いわゆる職人でもなく、1657（明暦3）年の江戸大火の際には木曾の材木を買い占めて利益をあげる機敏さをみせた¹⁸⁾。品川の崖の下に漂流する盃蘭盆の瓜や茄子を拾って漬け物にし、それを売り歩いて資金を作ったというエピソードの持ち主でもあった¹⁸⁾。その点で実に合理的な金銭感覚と緻密な計画性を持った事業家であったといえる¹⁸⁾。

江戸では、両国橋の建設、浅草寺修築、千川上水工事に参画した¹⁸⁾。1671（寛文11）年、土木家として幕府に召し出され御家人となる。

瑞賢が幕命を受けて行った事業のうち、東廻り・西廻り海運の刷新と淀川河川の改修が2大功績としてあげられる¹⁸⁾。これらについては、特に新井白石の「奥羽海運記」と「畿内治河記」によってよく知られるところである¹⁸⁾。1670（寛文10）年の冬、幕府から奥州信夫郡の幕領米数万石を江戸に廻漕するよう命じられると、現地踏査を行い、阿武隈川河口の荒浜から船を南下させ、安房から三崎（相模）か下田（伊豆）を経て、西南風を待って引き返し、江戸湾に入ることに決めた¹⁸⁾。沿道の諸侯に御城米輸送船の保護を命じ、堅牢で航路に慣れた伊勢、尾張、紀伊などの民間船を雇い、1671（寛文11）年この方策によって廻米を成功させた¹⁸⁾。

この東廻り航路は那珂湊口や銚子口から川船に積み替える従来のルートより江戸廻米の経費が少なくすんだ¹⁸⁾。翌1672（寛文12）年、さらに幕府から出羽国村山郡の幕領米を江戸に廻漕するよう命じられ¹⁸⁾、西廻り航路を開発した。これにより近世海運は大きく発展してゆく基盤が与えられた。

さらに1684（貞享元）年から1687（貞享4）年まで、淀川河口に長さ1600間（2.9km）、幅50間（90m）の新安治川を開き、その土砂で「瑞賢山」と称される防波丘を作り、松樹を植えて航海者の目標とした¹⁸⁾。1685年には大和川修築工事にあたった。その後元禄期（1688～1704）にも淀川水系の工事にあたり、近畿地方の治水工事に大貢献をなした¹⁸⁾。また、越後高田藩の中江用水の開削や郷津湾の築港、鉾山の開発なども指導した¹⁸⁾。江戸で没し、鎌倉の建長寺に葬られた¹⁸⁾。安治川畔の国津橋跡には「贈正河村瑞賢紀功碑」が建つ¹⁸⁾。

一 北前船

北前船とは、近世初期から明治時代にかけて、日本海海運で活躍した北国廻船、またそれに使われた北国船の上方での呼称である。近世の中ごろから用いられるようになった、改良型の弁財船をもいう²³⁾。国語辞典では次の3種類があると解説されている。

① 江戸初期から中期にかけて日本海海運の主力となって活躍した廻船の北国船の上方での呼称²³⁾。初期にすでに千石積以上の大船があり、船首形状がまるく、舷側に垣立のない特異な船型で、順風時以外は櫂で漕ぐという中世的廻船の性格をもつものであったため、多数の乗組を必要とし、江戸中期以降は帆走専用の経済的な弁才船に圧倒されて滅びた²³⁾。

② 江戸時代、弁才船を改良した船。天保期(1830-1844)以後従来の弁才船より船首のそりを大きく塗間の幅を拡大するなど、船体寸法の割に多量の積荷ができる船型に変えたもので、これを上方系の弁才船と区別して称した²³⁾。

③ 江戸時代から明治中期にかけて北海道貿易に活躍した日本海地域の廻船を上方という²³⁾。特定の船型を意味しない²³⁾。また、瀬戸内・九州地方の買積船で北国貿易に従事するものを称する場合もある²³⁾。

江戸時代から明治時代にかけて、西廻航路に就航した廻船の上方での呼称²³⁾(上記国語辞典解説の③)。北前船は、大坂が北海道産品の集散市場として確立する江戸時代中期から隆盛に向かい、順風でなくても帆走可能な弁才船の大型化を図りつつ発達した²³⁾。西南日本において棉、藍、ミカンなどの商品作物の栽培が盛んになり、北海道産魚肥、とくに鯨締粕の需要が増大する幕末から明治時代初頭にかけて最盛期を迎えた²³⁾。最盛期の北前船は大型化してほぼ2000石積みにも及び、買積み船が主流をなし、船主は単に海運業者であるばかりではなく、隔地間の価格差に依拠した海の商人でもあった²³⁾。米、漁場用品、日用雑貨などを西廻各地で仕入れて北海道で売り、かわりに水産製品を買い付けて上方に運び、売りさばいた²³⁾。

松前・日本海・瀬戸内・上方の地域市場を結び、その間の商品価格差でもうける買積形態は、領主的流通を崩しながら全国を結びつけ、近代国民市場の形成を促した²³⁾。明治30年代の鉄道網の形成により衰退し、その歴史的役割を終えた²³⁾。

1年1航海の場合²⁴⁾は次のようなスケジュールであった。下り(対馬海流に対して順流)は、3月下旬頃大阪を出帆、4-5月に航路上の瀬戸内海・日本海で途中商売をしながら北上、5月下旬頃蝦夷が島(北海道)に到着²⁴⁾する。上り(対馬海流に対して逆流)は、7月下旬に頃蝦夷が島を出帆、8-10月に航路上の寄港地で商売をしながら南下、11月上旬頃大阪に到着²⁴⁾する。北陸など各地の北前船の船員は、大阪から徒歩で地元に戻って正月を迎え、春先にまた徒歩で大阪に戻ってきた²⁴⁾。

最速達では以下の港に寄っていた²⁴⁾。各地に見張り役人を置き、途中の要所には毎夜薪を上げて船からの目標とさせた²⁴⁾。北海道では箱館、松前、江差、熊石、上ノ国(以上渡島国)、紗那、泊(以上千島国)、網走(以上北見国)、根室(以上根室国)、厚岸、



図 1.12-8 北前船 最速達寄港地 酒田以北



図 1.12-9 北前船 最速達寄港地 酒田以南

釧路（以上釧路国）、様似、門別（以上日高国）、苫小牧、室蘭（以上胆振国）、小樽、余市、寿都（以上後志国）、久春古丹（以上樺太）²⁴⁾。奥羽では深浦、十三湊、青森、土崎湊²⁴⁾。西海道では長崎（以上肥前国）、津屋崎（以上筑前国）、田野浦（以上豊前国）²⁴⁾。

酒田以南の寄港地は佐渡、能登、但馬、石見、長門、下関、備後、大坂²⁴⁾。大坂以东の寄港地は紀伊、伊勢、駿河、伊豆、江戸²⁴⁾。

1. 1 2. 4 三大市場、干鰯・鯨粕

一堂島米市場

三大市場とは、堂島米市場、天満青物市場、雑喉場魚市場のことである。

堂島米市場は、大坂堂島にあった江戸時代最大の米市場¹⁹⁾である。大坂は江戸初期から蔵屋敷や蔵元が存在し、蔵米を中心とした全国的な米の集散地であった¹⁹⁾。初期の米市場については不明だが、万治・寛文（1658-1673）ごろには、淀屋橋南詰にあった当時の有力な町人蔵元である淀屋の門前に米商人たちが集まり、米売買が行われたという¹⁹⁾。いわゆる淀屋米市がこれであるが、1697（元禄 10）年にいたって、堂島新地の開発にともない、米市場もこの地に移転した¹⁹⁾。正徳（1711-1716）ごろには江戸の三谷三左衛門ほか 2 名が幕府から当地に大坂米座御為替御用会所の設立を許可され、同会所が米取引をとりしきった¹⁹⁾。同会所は 1722（享保 7）年ごろには廃止されたが、以降も江戸商人による米会所が計 3 回にわたって許可された¹⁹⁾。すなわち紀伊国屋源兵衛ほか 2 名による大坂御為替米御用会所（1725（享保 10）-1726（享保 11））、中川清三郎ほか 2 名による堂島永来町御用会所（1727（享保 12）-1728（享保 13））、冬木善太郎ほか 4 名による北浜冬木会所（1730（享保 15））がそれである¹⁹⁾。このように幕府は当初堂島における米取引を江戸商人によって統制しようとしたが、大坂の米商人はこれに強く反発し、たびたび嘆訴を行った¹⁹⁾。この結果、幕府は 1730（享保 15）年 8 月にいたって、ついに大坂商人による堂島米市場の運営を認め、同時に帳合米取引を公認した¹⁹⁾。

幕府は 1722（享保 7）年ごろから明確となった米価の下落に対して、従来禁止していた米の延売買（先物取引）を緩和しつつあったが、堂島における帳合米取引の公認はその意味で重要である¹⁹⁾。こうして堂島米市場においては正米取引すなわち諸蔵屋敷発行の米切手による売買と、完全な先物取引である帳合米取引の両者が行われた¹⁹⁾。

帳合米取引は三季商内と称し 1 年を 3 季に分けて取引されたが、その標準米は建物米とよばれ、筑前、肥後、中国、広島 の 4 蔵米および加賀米があてられた¹⁹⁾。1731（享保 16）年には米仲買株 500 枚が、翌 1732（享保 17）年には米方両替（遣来両替ともいう）株 50 枚が下付され、彼らは堂島における営業独占権を保証された¹⁹⁾。米仲買株はその後増加し、計 1351 枚（一説に 1300 枚）となる¹⁹⁾。

米仲買は浜方と総称され、堂島 15 町に住したが、蔵米の入札を行うほか、正米方、帳合方、積方の 3 種のうち 1 種または 2 種を兼業した¹⁹⁾。積方とは正米の蔵出しおよび

輸送を行うものである。また米仲買のうちより5人の米方年行司が選出された¹⁹⁾。彼らの任期は1年で、堂島船大工町に設置された米方会所に出勤し、浜方に関する公私の取締りのほか、浜方を代表して諸般の折衝などにあたった¹⁹⁾。

幕末期には、全国的な米相場形成や米穀流通のうえに果たす堂島米市場の機能も低下し、とくに帳合米取引が不振となった¹⁹⁾。そこで1863（文久3）年以降にはその仕法を縮小した石建米商が盛んとなり、米市場ではこれら3種の取引が行われることとなった¹⁹⁾。明治以後は大阪堂島米商会所となる¹⁹⁾。

当地の米相場が全国の米相場を平準化する役割をはたし、物価にも大きな影響を与えた¹⁹⁾。1730（享保15）年に米仲買に株が許可され、堂島は幕府官許の米市場として発展、全国米相場の中心となった。一方で、同年、帳合米取引（帳簿上で行う一種の先物取引）が公許されたあと、正米（現物）取引も引き続き行われたが、実際には米切手の売買であり、諸藩領国からの未廻着米を見越した切手の過剰発行がしばしばなされ、空米切手ないし空米取引事件として紛議を起こした¹⁹⁾との評価もある。幕末に至り、米価変動甚だしいため、期限4か月の帳合米取引は1か月の石建米商いに転じたが、1869（明治2）年廃止され、正米取引のみとなった¹⁹⁾。

一天満青物市場

天満青物市場は、かつて大阪府大阪市北区にあった卸売市場²⁰⁾である。現在の天神橋1丁目・天満4丁目・同3丁目の大川沿いにあった²⁰⁾。江戸時代に堂島米市場、雑喉場魚市場とともに大阪三大市場のひとつとされ、青果物（野菜・果物）の取り扱いを独占していたのが天満青物市場である²⁰⁾。

そのルーツは現在の大坂城の位置にあった石山本願寺の門前市にまで遡ることができるという²⁰⁾。大坂の陣後は、1616（元和2）年に京橋南詰に開かれた²⁰⁾。1651（慶安4）年にこの場所が大坂町奉行に収公されることになり、代替地の京橋片原町に移転²⁰⁾、しかし、不便であったため、1653（承応2）年に天満へ移転した²⁰⁾。1685（貞享2）年当時は54軒の間屋を有していた²⁰⁾。

その後、新市の開設を求める運動が何度か起こったが全て退け、1772（明和9）年に株仲間の開設を公認された²⁰⁾。この時の天満の間屋独占は強力で、新市を認めないばかりか、市場内の立ち売りの禁止、直売買の禁止も公認されていた²⁰⁾。しかし、1798（寛政10）年に近郊26ヶ村の市場内の立ち売りが解禁²⁰⁾された。また、青物を供給する農村は、大阪城下の南郊に位置する西成郡吉右衛門肝煎地・西高津村・難波村・木津村・今宮村・勝間村・中在家村・今在家村の畑場八ヶ村と呼ばれた村々が中心だったため、天満青物市場から遠く離れた畑場八ヶ村との対立が絶えず、1809（文化6）年に13品目に限って木津難波市場の開設が認められた²⁰⁾。

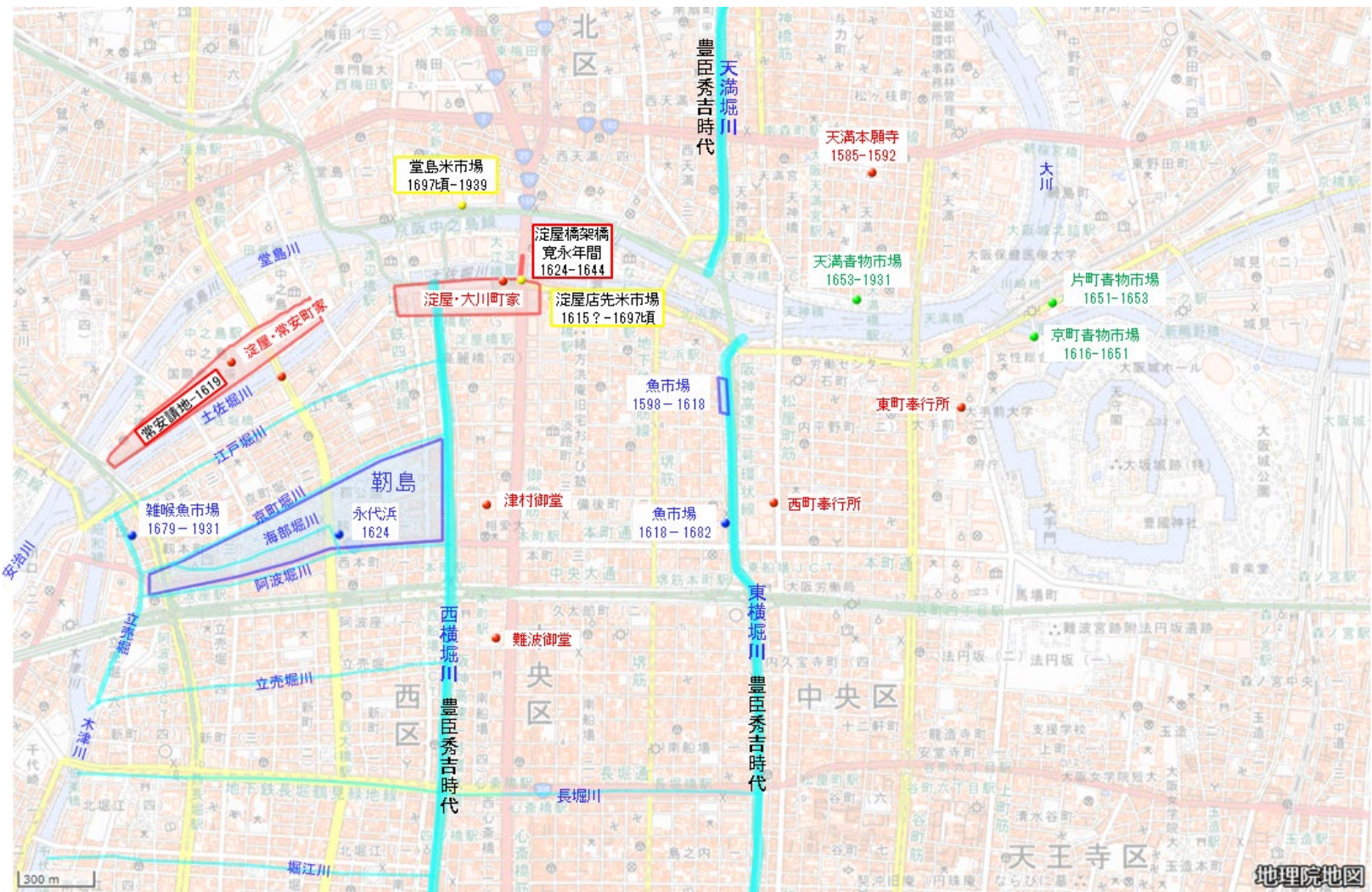


図 1.12-10 大坂靱島と永代浜

それでも、天満青物市場は長らく官許の市場として、明治・大正になっても大阪市随一の青物市場として栄えていたが、1931（昭和6）年に大阪市中央卸売市場が設立され、廃止された²¹⁾。

一 雑喉場魚市場

雑喉場とは、一般的には魚市場をさすが、近世大坂の鮮魚市場の名称として有名である²¹⁾。大坂の魚市場は慶長初年頃（1598～1599）東横堀川西岸の高麗橋1丁目から道修町1丁目一帯にかけて形成され、南部は大坂夏の陣まで、北部は1621（元和7）年頃まで続いた²¹⁾。

この魚市場は生魚と乾塩魚を取り扱ったが、生魚商は1618（）年に上魚屋町に移転し市場をつくった²¹⁾。この生魚商たちは魚船の出入りの便のため1679（延宝7）年に出張所を鷺島につくったが、しだいに雑魚取引がここに集中するようになり、いつしか「雑魚場」「雑喉場」と呼ばれるようになった²¹⁾。上魚屋町の本店も1679（延宝7）年と1682（天和2）年にここに移転²¹⁾、承応年間（1652～1655）に問屋株40軒を免許され、鮮魚の独占市場となり、1772（安永元）年には株数84軒に増加させた²¹⁾。

雑喉とは種々入りまじった小魚のことで、それを売買する所を雑喉場といい、大坂魚市場の固有名詞となった²¹⁾。1495（明応4）年ころ、蓮如の石山本願寺建立のときできたという²¹⁾。のち豊臣秀吉が大坂城築城のとき城に近く、また魚類の運送に不便であるとして、1597（慶長2）年、靱町に移し、さらに1618（元和4）年大坂の復興に伴い上魚屋町（現・東区安土町）に移るとともに、冥加金を上納して、大坂唯一の魚市の特権を得た²¹⁾。さらに漁船の出入りに便利な鷺島に店を設けたのが盛大となり、地名も雑喉場といわれるようになった²¹⁾。当時、問屋は17あったので十七軒会屋ともいわれた²¹⁾。

会屋とは商人が集まって取引したことからできた名で、のち問屋と改まった²¹⁾。もとは近くの野田村・福島村あたりの漁師の捕った雑魚を買って往来人に売ったことから盛大となり、1622（元和8）年、塩魚問屋が津村に移ったので生魚問屋だけの市場となった²¹⁾。堂島の米市場、天満の青物市場とともに大坂の三大市場といわれ、元禄ころ（1690年代）の売上年銀額は1500～2000貫目といわれた²¹⁾。塩魚問屋と異なり、他国・他所の無縁の者でも市に立ち会うことができ、仲買商と素人との別なく買い取る慣習となった²¹⁾。市場商人数は、元禄ころ32人、享保・元文ころ（1730年代）50人余、1772（安永元）年、翌年から冥加銀、年9貫目ずつ上納することで問屋株の結成が許され、84人の生魚市場独占となった²¹⁾。

しかし分かれた塩魚仲間は、新靱町・新天満町・海部堀川町のいわゆる三町問屋として、塩魚・干魚・鰯節などの取扱いから、近世中期には生魚の市立ても行うに至って、雑喉場と三町問屋との間に紛議が起こり、1781（天明元）年大坂町奉行のもとで訴訟となった²¹⁾。大坂町奉行はそれぞれ株仲間固有の従来の取り扱う生魚類と塩魚類の区分を固守するよう決裁した²¹⁾。しかし雑喉場はしだいに衰退し、問屋数も1789（寛政元）

年 70 人と減少し、天保改革によって仲間は一時停止されたが、1847（弘化 4）年再興、1858（安政 5）年 42 戸、1869（明治 2）年 31 戸と衰えた²¹⁾。1931 年（昭和 6）大阪中央卸売市場の成立で廃止された²¹⁾。

一千鰯問屋

千鰯問屋とは、江戸時代の魚肥の問屋兼仲買商²⁵⁾である。農業生産における魚肥の施用は戦国期に始まるが、江戸時代に入って大衆的衣料として普及した木綿の原料としての綿作の発展は、速効性にすぐれた購入肥料としての魚肥の需要を増大させ、大坂、江戸をはじめ各地に魚肥を扱う千鰯問屋が成立した²⁵⁾。

なかでも江戸前期から綿作の特産地を形成した畿内農村への魚肥の供給地として、早くから堺、尼崎に千鰯の入津がみられたが、1624（寛永元）年、大坂の永代浜に千鰯揚場が開かれ、新靱、新天満、海部堀川 3 町を中心とする通称靱島（現在の西区）に千鰯問屋仲買が集住するに及んで、大坂商人の一中心勢力となった²⁵⁾。



図 1.12-12 東国の千鰯

彼らは 1653（承応 2）年、戎講と称する同業組合としての仲間を結成し、四国、九州の網元に前貸金を与え、新漁場を開くなどして畿内農村の需要に応じた²⁵⁾。さらに綿作の他地方への普及、および菜種・藍作、果樹栽培の展開に伴って播磨、丹波、伊賀、近

江、阿波の国々へ販路を拡張した²⁵⁾。当初は、上方の干鰯は多くは紀州などの周辺沿岸部や、九州や北陸など比較的近い地域の産品が多かった²⁶⁾。ところが、18世紀に入り江戸を中心とした関東を始め各地で干鰯が用いられるようになると、需要に生産が追い付かなくなっていった²⁶⁾。更に供給不足による干鰯相場の高騰が農民の不满を呼び、農民と干鰯問屋の対立が国訴（農民闘争の一形態）に発展する事態も生じた²⁶⁾。

そのため、干鰯問屋は紀州など各地の網元と連携して新たな漁場開拓に乗り出すことになった²⁶⁾。その中でも房総を中心とする「東国物」や蝦夷地を中心とする「松前物」が干鰯市場における代表的な存在として浮上することとなった²⁶⁾。房総は近代に至るまで鰯の漁獲地として知られ、かつ広大な農地を持つ関東平野に近かったことから、紀州などの上方漁民が旅網や移住などの形で房総半島や九十九里浜沿岸に進出してきた²⁶⁾。鰯などの近海魚を江戸に供給するとともに長く干鰯の産地として知られてきた（地引網などの漁法も上方から伝えられたと言われている）²⁶⁾。

近世初頭以来、関西漁民の出稼漁によって開拓されたとされる房総地方産の魚肥は、



図 1.12-13 江戸深川干鰯揚場

はじめ上方への輸送の中継基地としての浦賀に 1642（寛永 19）年干鰯問屋が公許されたが、元禄期（1688-1704）を境とした出稼漁の衰退とともに凋落した²⁵⁾。これに代わって関東の地元漁業と結びついて台頭した江戸の干鰯問屋は、深川の 4 カ所（銚子場、永代場、元場、江川場）に干鰯揚場を設け、1739（元文 4）年、株仲間の公認を受け、43 軒が登録されている²⁵⁾。

江戸問屋は当初産地の網元に従属する地位にあったが、後期には仕込金、前貸金によって漁業に対する問屋制支配を確立した²⁵⁾。江戸に集荷された魚肥は主として上方地方に輸送されたが、その産地は九十九里地方から三陸に移り、さらに北海道に及んだ²⁵⁾。とくに幕末には松前物と呼ばれる鯡肥料が干鰯に代わって大量に出回り、大坂干鰯商仲間の中で、1819（文政 2）年、松前最寄組が組織されている²⁵⁾。

蝦夷地では鰯のみではなく鯨（かずのこを含む）やマス類が肥料に加工されて流通した²⁶⁾。更に幕末以後には鰯や鯨を原料にした魚油の大量生産が行われるようになり、油を絞った後の搾りかすが高級肥料の鯨粕として流通するようになった²⁶⁾。

一 鯨粕

もともと日本本土での魚肥流通は干鰯が中心だった²⁷⁾。だが 18 世紀になれば新田開発による耕地拡大が肥料用の刈敷採取用の草原の減少を招き、関東地方での干鰯の需要増大も相まって金肥の価格は高騰した²⁷⁾。もともと大坂の干鰯問屋は房総の九十九里浜や肥前国、伊予国産の干鰯を取り扱い、1724（享保 9）年には取扱量 130 万俵に達していた²⁷⁾。だが前記のように、干鰯の全国的な需要増大にともない 18 世紀半ばには取扱量 12 万俵を切り、畿内では慢性的な肥料不足が価格の高騰をまねき、国訴にまで発展した²⁷⁾。

ここで注目されたのは、蝦夷地産の安価な鯨肥である²⁷⁾。19 世紀になれば大坂の干鰯市場が鯨肥の集積市場として確立し、白子や笹目（干したニシンのえら）、胴鯨（身欠きニシンを取った後に残るハラスや背骨、頭）などの鯨肥のなかで最も肥料効率に優れる鯨粕が生産の中心となる²⁷⁾。18 世紀には鯨肥が中国地方や、近江国で使用され、南部国や津軽、出羽国でも使用が広まる²⁷⁾。

鯨粕の流通が本格化するのは天保年間（1830 年代）である²⁷⁾。幕末の探検家・松浦武四郎は 1846（弘化 3）年、樺太は久春古丹（後の大泊町）で鯨粕の製造現場を見聞している²⁷⁾。運上屋で和人の支配人、番人の指揮の下で 1000 人もの樺太アイヌが集められ、作業に従事していた²⁷⁾。海岸には径 6 尺はある大釜が 116 基も設置され、ニシンの漁期には鯨粕、漁期が済んで 30 日の休息を経たのち、マスの漁期が始まればマスの鯨粕が休みなく生産されていた²⁷⁾。彼の滞在中、800 石か 1200 石～1300 石積みの弁財船 34 隻が荷を運んだといい、1 艘 1000 石と平均しても 3 万 4 千石となり、船頭のホマチ（内密の稼ぎ）も含めれば 5 万石もあるだろう、と記している²⁷⁾。

長州藩や播州では嘉永(1848-1853)頃から鯨粕が定着し、越中砺波では19世紀半ば、小矢部川の水運を生かして流通した²⁷⁾。だが北関東には定着しなかった²⁷⁾。鯨粕がいち早く定着したのは、北前船の寄港地である日本海沿岸、瀬戸内地方である²⁷⁾。寄港地では直に鯨粕が売りさばかれたため、大坂の干鰯問屋を経由する品よりもはるかに安価に流通した²⁷⁾。1879(明治12)年には12万2000石あまりの鯨肥が畿内を中心に北陸から中国四国、さらには東海地方にも販売され、駿河、遠州の茶作、関東東北の米作、関東甲信越の桑作、阿波の藍作の肥料として用いられた²⁷⁾。

鯨粕を稲作の肥料に用いていた富山県の状況を例に挙げる。江戸期における加賀藩、富山藩の農業は稲の単作が主体であり、肥料は自家製か近隣の市街で野菜との交換で入

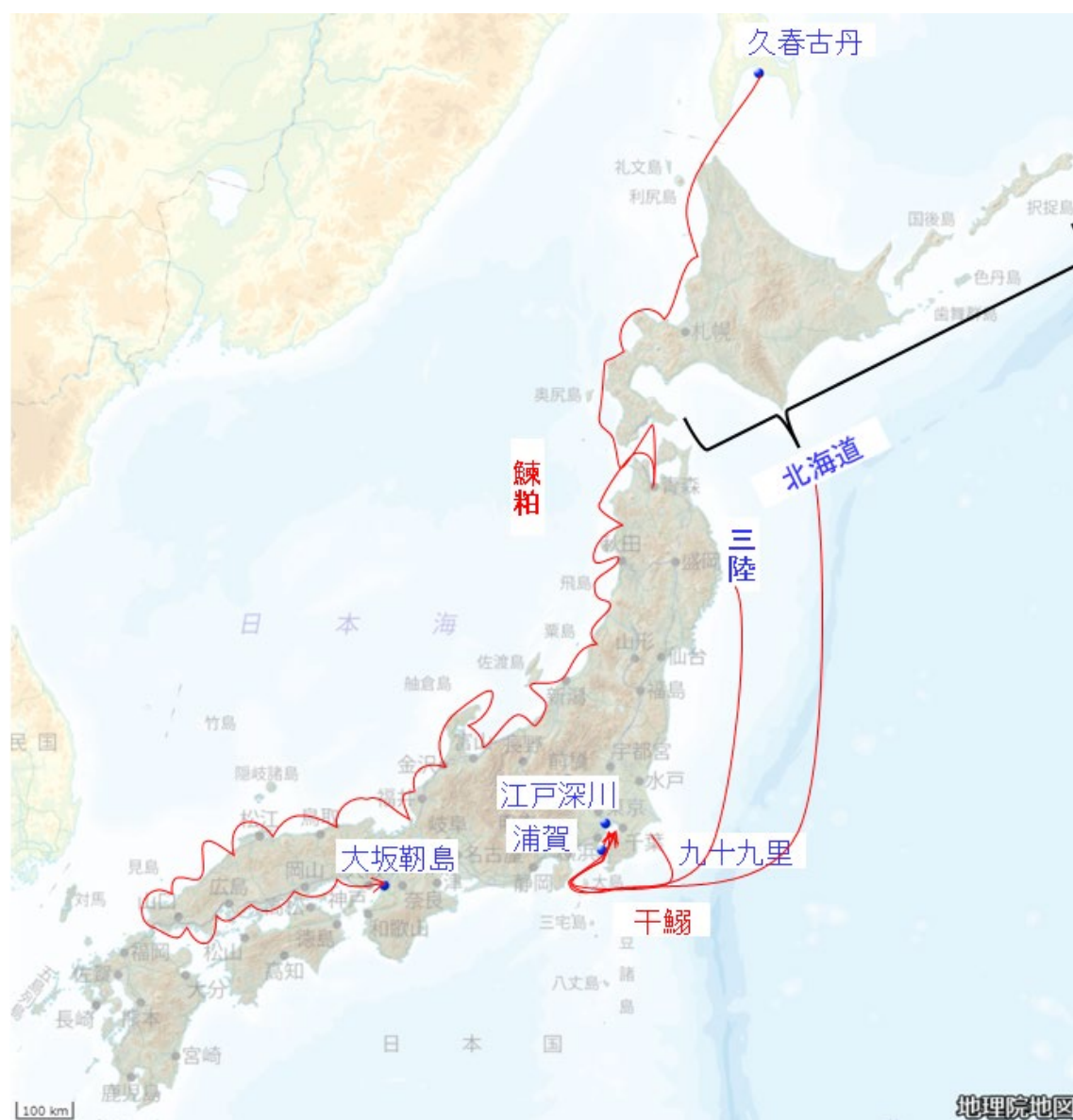


図 1.12-14 鯨粕の流通，東国干鰯供給路拡大

手した下肥、厩土（田の土を厩舎に入れ、家畜の大小便と混合させたもの）、ツボドロ（野菜くずや残飯に台所排水をかけて腐食させたもの）、踏土（晩秋、田の土に枯れ葉や脱穀の際のごみ、屋根材の古茅を切り混ぜ冬の間で発酵させたもの）、刈敷など農民の自宅か周辺の山野で入手できるものが用いられていた²⁷⁾。

だが銭で購入する「金肥」として干鰯と菜種の油粕も早くから普及し、1661（寛文元）年、加賀藩では領内で獲れる「砂鰯」を確保するため、他領への移出を禁じている²⁷⁾。富山藩内でも1743（寛保3）年、「下肥、灰、小糠、油糟、鰯肥」の領外への移出を禁じているが、いずれも自領内での需要増大には対処しきれず、他領からの移入が求められていた²⁷⁾。

加賀藩の農学者・宮永正運は1788（天明8）年に発表した農書『私家農政談』において、「昨今の百姓はものぐさになり、牛馬も飼わず土肥も草肥も作らず、持ち運びに便利な干鰯ばかり使っている」「干鰯は使うごとに土地が痩せ、前年4俵の干鰯を使えば今年は6俵使わなければならない」と嘆いている。同著によれば、地元産の干鰯では2、3割しか賄いきれず、残り8割は越後国や佐渡国、出羽国よりの移入品に頼り、氷見や伏木、放生津で売買される干鰯は20万俵に及ぶ」という²⁷⁾。

増大する魚肥の需要に応じて蝦夷地産の鰯粕が出回るようになる²⁷⁾。加賀藩の積卸し港だった東岩瀬港では1822（文政5）年、佐藤屋三右衛門が蝦夷地へ米を運航した帰路に笹目鰯（ニシンのエラの乾燥品）2000貫目を購入して近隣の豪農へ使用を勧めたが、売り尽くすのに3年かかった²⁷⁾。だが天保年間（1830-1843）には利用も増大し、1834（天保5）年、砺波郡の魚肥利用40万俵の内、蝦夷地の鰯は3、4割を占めていた²⁷⁾。安政年間（1854-1859）、越中国の北前船寄港地である東岩瀬（現富山市）では、鰯粕や干鰯など魚肥料を扱う業者は30軒を数えた²⁷⁾。こうして幕末、明治期には干鰯を抜き、鰯粕が魚肥の中心となる²⁷⁾。

明治10年代までの鰯粕の使用地は北陸4県に大阪周辺、瀬戸内海沿岸、さらに山陰と愛知県だった²⁷⁾。これは北前船の航路と一致している²⁷⁾。1888（明治21）年の北海道鰯の出荷先は兵庫県が24万石、富山県が16万7千石、大阪府が15万8千石だった²⁷⁾。兵庫や大阪は物資の集積地であり、他県へ販売され、畑作物の肥料とされたものも多かったが、富山ではすべて県内の稲作に消費されたのが特徴である²⁷⁾。だが昭和中期以降はニシンの不漁による鰯粕の製造衰退、あるいは化成肥料の普及により、令和の現在では鰯粕はほとんど使用されていない²⁷⁾。

1. 12. 5 新田開発、大和川付替

○新田開発

大阪は淀川の河口に発達したまちで、江戸時代には大阪湾の浅瀬をうめたてて田や畑にする、新田開発がさかんに行われた²²⁾。最初は三軒屋や九条島、四貫島が新田として

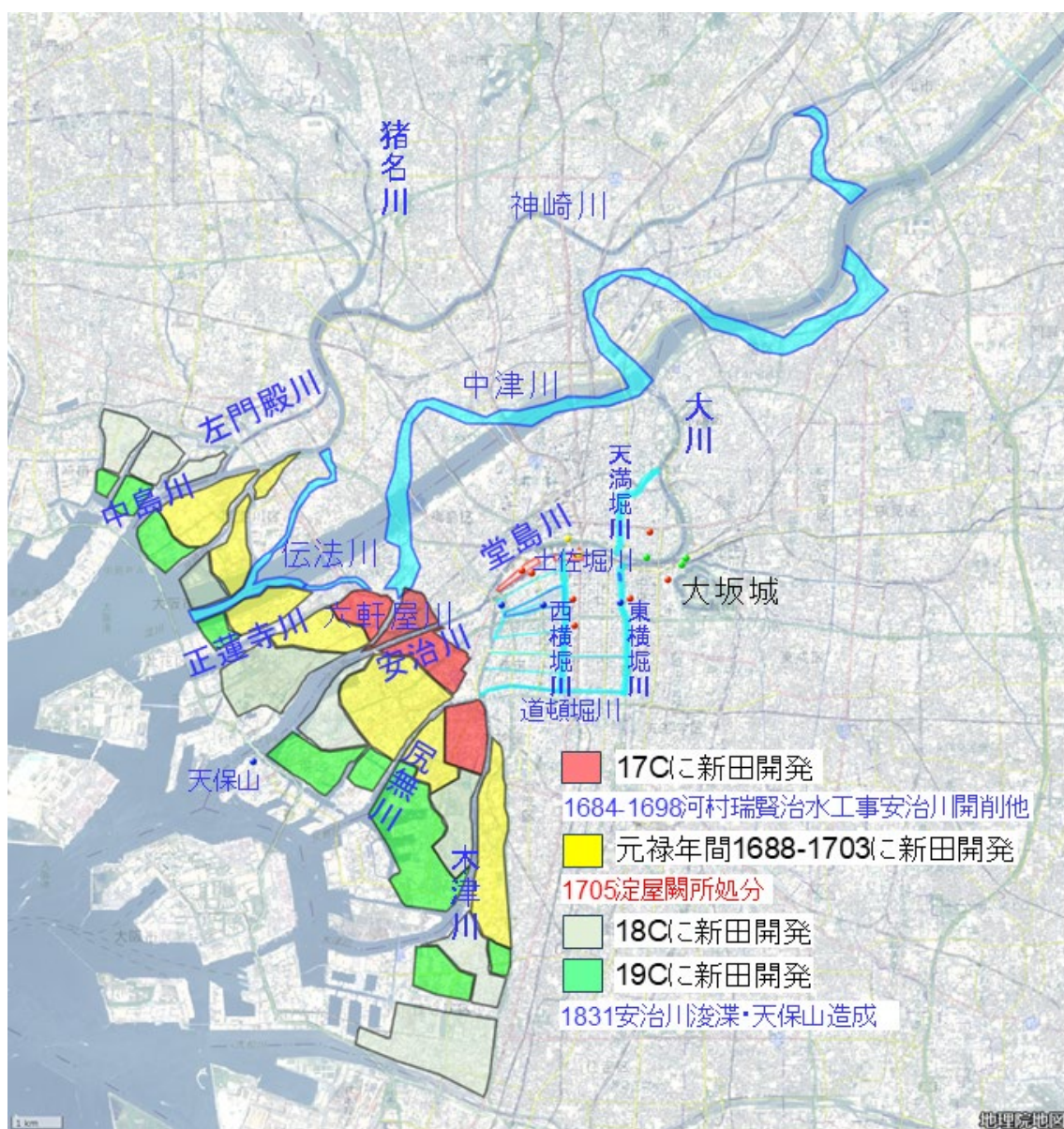


図 1.12-15 江戸時代淀川河口部の大坂新田開発

開発され、もっとも盛んに行われた元禄から宝永の初め（1700 年頃）にかけては、泉尾、津守、市岡、春日出、出来島など、さらにそののちには、千島、恩加島などの新田がつぎつぎに開かれた²²⁾。湾岸の土地はすべて新田として開発されたところで、新田の名前が町の名前として現在までひきつがれているところがたくさんある²²⁾。

○大和川付替と旧大和川新田開発

1704（宝永元）年に大和川の付替が行われた。これは、河内平野を流れていた大和川沿川の治水対策であるとともに、付替え後の大和川や派川の旧川敷、新開池、深野池等の新田開発でもあった²⁸⁾²⁹⁾。

江戸時代、河内平野の大和川沿川では、元和（1615～1624）から元禄（1688～1704）にいたる間に、十数回に及び堤防の決壊などによる大水害が起こっていた²⁸⁾。

河内・讃良・若江・茨田など各郡の代表者たちは、自分たちの土地を洪水から守るため、大和川の流れを柏原の大和川と石川の合流点から西へ向け、住吉・堺方面へ流す案を何度も幕府に嘆願した²⁸⁾。嘆願の理由は、この付け替えによって、15万石以上にもおよぶ村々が水害の被害をまぬがれ、旧河床には新田が開けて作物の増収が期待できるから、というものだった²⁸⁾。

一方、大和川の付け替え予定地にあたる村々では、新しい川によって、先祖伝来の家や田畑がつぶされるため、激しい反対運動が起こった²⁸⁾。

幕府は、1683（天和3）年に5回目の大和川付け替え検分を実施した²⁹⁾。この検分では、洪水が繰り返される大和川流域だけでなく、付け替え予定地でも地形調査などを実施し、付け替えが必要かどうか検討した²⁹⁾。このときには、従来の付け替えルート（現在の大和川のルートにほぼ同じ）よりも北寄りの阿部野へ流すルートも検討している²⁹⁾。しかし、その結論は、付け替えは必要ないというものだった²⁹⁾。淀川と大和川が合流する地点（大坂市街地）よりも下流の水の流れさえよくすれば、大和川の付け替えなど必要ないということになった²⁹⁾。その意見を強く主張していた河村瑞賢が、淀川を中心に川を広げたり掘り下げたりする工事を行い、この際に安治川の開鑿などが行われている（1684（貞享元）-1687（貞享4））²⁹⁾。幕府は、これで洪水の心配はないと考えたようである²⁹⁾。

この工事で下流の水の流れはよくなったようであるが、河内の農村では相変わらず洪水が繰り返されていた²⁹⁾。工事がほぼ終わった1687（貞享4）年の1月頃、再び付け替えを求める嘆願書が幕府に提出された²⁹⁾。この嘆願の中心人物が中甚兵衛だったと考えられ、これ以降甚兵衛が運動の中心となっていくようである²⁹⁾。ところが、幕府は付け替え不要と決めて河村瑞賢に工事を行わせたばかりである²⁹⁾。この訴えに対する答えは厳しいものだったようで、同じ年の3月の嘆願書では付け替えをあきらめて治水工事を求める訴えに変わり、参加する村々も15万石から7万石へと半減している²⁹⁾。これ以降、運動に参加する村は減り続け、訴えの内容も小規模なものになっていく²⁹⁾。

河内の洪水がなくならないためか、瑞賢は二期工事にかかり、1699（元禄12）年に工事が終わる²⁹⁾。ところが、その直後の1700（元禄13）年、1701（元禄14）年にも大きな洪水がおこった²⁹⁾。中甚兵衛の今米村では、まったくお米ができなかったという記録が残っている²⁹⁾。いくら工事をしても、洪水がなくなるどころか、どんどん激しくなっていた²⁹⁾。幕府も本当に付け替え工事をしなくても大丈夫なのかと考え始めたようである²⁹⁾。

万年長十郎は、1683（天和3）年に畿内と丹波・播磨・備中の代官となった²⁹⁾。1683（天和3）年は、5回めの大和川付け替え検分が行われ、付け替え不要という結論が出された年である²⁹⁾。万年は元禄年間（1688～1704）に大坂川口の新田開発を認めている

29). この頃、原則として町人による新田開発は禁止されていたが、新田からの年貢増加による経済的利益を優先していたようである²⁹⁾。万年は経済的で合理的な政策を進めたが、その背後には幕府の財政立て直しを図っていた勘定奉行の荻原重秀の存在も見逃すことができない²⁹⁾。

表 1.12-1 大和川付替、幕府の普請支援制度年表²⁹⁾³¹⁾をもとに作成

年	事項
元和（1615～1624）から元禄（1688～1704）にいたる間に、十数回に及び堤防の決壊などによる大水害が発生。	
1683（天和 3）	万年長十郎、畿内と丹波・播磨・備中の代官となる。 大和川付替え見分（通算 5 回目）に河村瑞賢同行。付替不要という結論に
1684（貞享元）	河村瑞賢が淀川河口を中心とした工事（安治川開削含）に着手 1687 まで
1687（貞享 4）	大和川付替運動が終息し、治水工事を求める運動に変わる。 中甚兵衛が付替運動に関わるようになる。 1687（貞享 4）年 1 月頃の付け替え嘆願書では 15 万石の百姓からの願い→同年 3 月には 7 万石→1689（元禄 2）年には 3 万石→1701（元禄 14）年頃には 42 か村（約 2 万石くらいか）と運動に参加する村が減少。
1698（元禄 11）	河村瑞賢、淀川改修 2 期工事（1699 まで、堀江川開削・新田開発） 万年長十郎堤防奉行となる。長十郎はこの頃からは付替の可能性を検討していたようである
1699（元禄 12）	6 月河村瑞賢江戸で死去
1700（元禄 13） 1701（元禄 14）	河内平野 2 年連続洪水被害。1701（元禄 14）年は、中甚兵衛の今米村でまったく米が収穫できなかったという記録が残る。この様子を検分に来た幕府の役人に、河内の 42 か村が復旧工事の実施を求めたところ、付け替えを検討していることを告げられた。 万年長十郎は、1701 年頃までには付替え実施をほぼ確定していたようだ。
1704（宝永元）	大和川付替（工事は 9 か月）
1705（宝永 2）	旧大和川河床で新田開発始まる
1708（宝永 5）	大和川旧川等新田開発地で検地。同年から年貢が納められる。
1708（宝永 5）	富士山宝永噴火で国役金制度（全国から臨時の復旧・復興税徴収）導入し、被災地（酒匂川流域）の川浚え
1720（享保 5）	享保国役普請制度導入 自普請による復旧・復興が困難な災害に対する「公儀」による 20 万石以下大名に対する復旧支援制度（1732 までに 7 例）
1722（享保 7）-1731（享保 16）	上米の制の間、お手伝い普請停止（国役普請で対応） ※上米：江戸時代、幕府の財政窮乏を救うための政策。1722（享保 7）～1731（享保 16）年に実施。大名から石高 1 万石について百石ずつの米を上納させ、代わりに、諸大名が参勤交代で江戸に在住する期間を半年に短縮した。
1732（享保 17）	享保飢饉（国役普請の事実上の停止 → 以降お手伝い普請に）
1754（宝暦 4）-1755（宝暦 5）	宝暦治水 薩摩藩による木曾三川分離工事（お手伝い普請。工費 10 万両→40 万両。工事中犠牲者 88 人。惣奉行平田鞆負帰国が許された翌日自刃。）→「公儀」を「藩のお手伝い」として行う矛盾露呈
1758（宝暦 8）	宝暦再開国役普請（お手伝い普請と国役普請一体化） ・工事全体は幕府が一元管理・費用も幕府立替（公儀普請） ・総費用の 8 割強を助役大名が負担（お手伝い普請） ・残り 9/10 は国役負担（国役普請）・残り費用を幕府が負担
1824（文政 7）	幕府立替費用の負担回収が滞る等により、万石以上の大名に国役普請願出禁止：事実上の制度停止

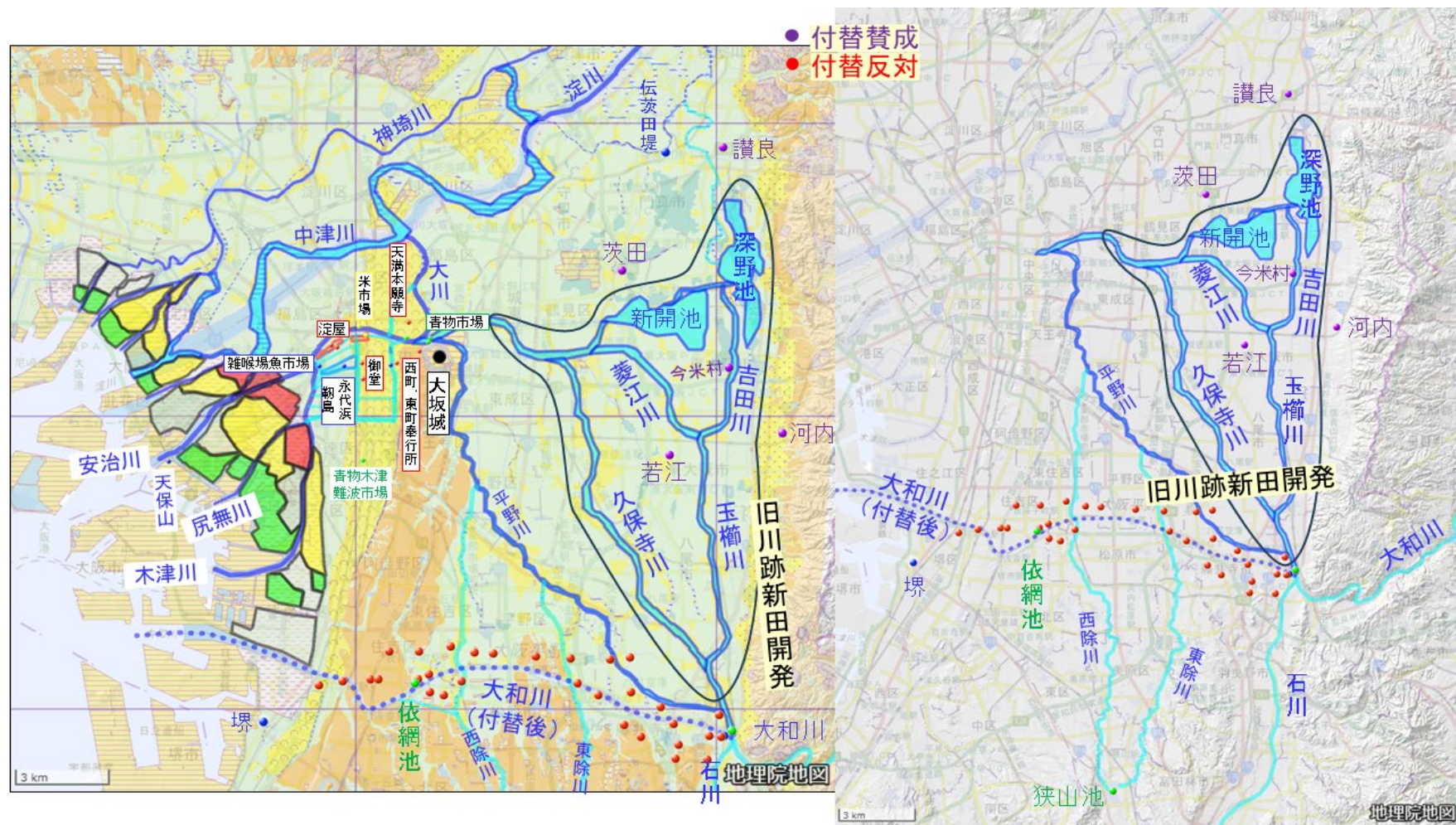


図 1.12-16 1704（宝永元）年大和川付替と旧川・池跡等新田開発

この万年が 1698（元禄 11）年までに、大和川や淀川を管理する堤奉行にも就任していた²⁹⁾。万年は合理的な視点から大和川付け替えを検討し、荻原の指示で付け替え事業に取り組んだのではないかと考えられる²⁹⁾。つまり、付け替え工事を幕府の利益に結びつけることができないかと考えたようである²⁹⁾。

河村瑞賢の二期工事は 1699（元禄 12）年に終わったが、その翌年・翌々年にも河内平野は洪水に見舞われたようである²⁹⁾。1701（元禄 14）年には、中甚兵衛の今米村でまったく米が収穫できなかったという記録が残っている²⁹⁾。この様子を検分に來た幕府の役人に、河内の 42 か村が復旧工事の実施を求めたところ、付け替えを検討していることを告げられたということである²⁹⁾。

流域の人々がすっかりあきらめていた付け替えが実現するかもしれないと喜ぶ様子が目に浮かぶ²⁹⁾。それとは反対に、付け替え予定地の村々では、絶対にないと確信していた付け替えが実施されるかもしれないと驚き、嘆き悲しんだことが記録に残っている²⁹⁾。このあと付け替え反対運動が活発になるが、幕府はまったく相手にしなかった²⁹⁾。

付け替え実施を検討する万年長十郎は、中甚兵衛を何度も呼び出して意見を求めたようである²⁹⁾。新田開発を希望する町人などの意見も聞いていたことであろう²⁹⁾。そして、付け替え工事が幕府に利益をもたらす方法を考え出したのである²⁹⁾。付け替え工事の方針が決まると、あとは実施に向けて急速に進んで行った²⁹⁾。大和川付け替えの中心人物は、中甚兵衛ではなく万年長十郎だったのである²⁹⁾。

河村瑞賢は伊勢国度会郡東宮村で生まれた²⁹⁾。1657（明暦 3）年の江戸大火の際に木曾の山林を買い占めて巨利を得たとされている²⁹⁾。また、東廻り航路、西廻り航路の整備や鉱山開発など多方面で能力を発揮した²⁹⁾。現代風にいえば優秀な実業家であった²⁹⁾。その土木・治水に関する知識を期待され、1683（天和 3）年の幕府の付け替え検分に同行し、その結果、瑞賢の意見が採用されて付け替え不要という結論になった²⁹⁾。

翌 1684（貞享元）年から瑞賢は淀川河口を中心とした工事に着手する²⁹⁾。河口の水の流れがよくなれば、大和川の洪水はなくなると考えていたのである²⁹⁾。この際に安治川の開鑿などを実施している²⁹⁾。1698（元禄 11）年から 1699（元禄 12）年にかけて、瑞賢は二期工事を実施した²⁹⁾。掘江川の開鑿や新田開発などを行っている²⁹⁾。この工事を終えたのが 1699（元禄 12）年の 3 月²⁹⁾。ところが江戸へ帰った瑞賢は、その年の 6 月に亡くなった²⁹⁾。

瑞賢は経済を重視する人物であった²⁹⁾。1683（天和 3）年の検分に同行し、畿内の川を見て回った結論が付け替え不要だったのである²⁹⁾。経済人の瑞賢は、大坂のまちの水はけをよくすること、舟運の便をよくすることなどを重視し、洪水に苦しむ農民をおろそかにしていたことは否めないと思われる²⁹⁾。幕府も瑞賢の意見を取り入れ、付け替え不要という結論を出した²⁹⁾。水の流れさえよくすれば、洪水は防げると考えたのである²⁹⁾。そのために巨費を投じて瑞賢に工事をさせていた²⁹⁾。

強硬な付け替え不要論者であった瑞賢が亡くなったことで、万年長十郎も付け替えが可能かどうか、考えやすくなったことであろう²⁹⁾。そして、幕府は付け替え工事へと急速に方針を変えていったようである²⁹⁾。幕府の考えかたが変わった一つの理由が、河村瑞賢の死だったと考えられる²⁹⁾。

付け替えを求める運動は1687（貞享4）年に終わり、それからは治水工事を求める運動に変わった²⁹⁾。1687（貞享4）年1月頃の付け替え嘆願書では15万石の百姓からの願いと記されていたが、同年の3月には7万石、1689（元禄2）年には3万石、1701（元禄14）年頃には42か村（約2万石くらいか）と運動に参加する村も減少していた²⁹⁾。幕府が付け替え不要という方針を決定したため、河内の農民は付け替えをあきらめて治水工事へと方針転換していた²⁹⁾。そのうえ運動に参加する村もどんどん減っていた²⁹⁾。

これは、洪水が玉櫛川筋に集中するようになり、久宝寺川筋ではあまり起こらなくなっていたことが原因と考えられる²⁹⁾。また、幕府に睨まれてまで、実現性の薄い付け替えや治水工事を訴えても意味がないというあきらめも大きかったと思われる²⁹⁾。

それでも運動を続けている人たちがいたという事実を重視しなければならないと思われる²⁹⁾。運動が全くなくなっていれば、幕府が付け替えを検討することもなかったであろう²⁹⁾。たとえ小さくなくても、付け替えから治水工事になっても、運動が続いていたのである²⁹⁾。

この運動の中心人物が中甚兵衛であった²⁹⁾。甚兵衛が50年以上も付け替え運動の中心人物だったという記述をしばしば見かけるが、1687（貞享4）年以前の史料からわかるのは、運動の中心人物は芝村の曾根三郎右衛門と吉田村の山中治郎兵衛だったということである²⁹⁾。どこにも甚兵衛の名は見えない²⁹⁾。中家に残された付け替え関連史料でもっとも古い史料が1687（貞享4）年の史料なので、この頃から甚兵衛が付け替え運動に関わるようになったと考えて間違いないであろう²⁹⁾。

つまり、甚兵衛はどんどん衰退していく運動の中心人物だったのである²⁹⁾。そして嘆願書に偽の印を押しているなどの事実は、甚兵衛の運動がほかの村々からほとんど支持されていなかったことを示している²⁹⁾。甚兵衛は孤立していた²⁹⁾。それでも運動が続いていた、そこにこそ甚兵衛を評価することができると思う²⁹⁾。事実を曲げて甚兵衛をヒーローのように扱うことは慎まなければならないと思う²⁹⁾。

大和川の付替え後、旧大和川筋は新田開発された²⁸⁾²⁹⁾。新田開発に参加したのは、町人、有力農民、寺院等で、その権利は入札により決められた²⁹⁾。付替え直後に行われた入札結果を記録した「古川筋堤床敷深野池并新開池新田大積帳」によると、旧川床にできる新田は1,028町歩余り、高約1万石で、地代金37,120両余りとなっている²⁹⁾。

幕府が付替え工事で負担した費用は約37,500両であった²⁹⁾。新田開発に伴う入札額とほぼ同じである²⁹⁾。おそらく、付替え工事に着手する前に入札額を積算し、37,000両余りという金額を把握していたのであろう²⁹⁾。それに見合う額だけ工事費を負担する計画を立て、残りは大名手伝いとしたのである²⁹⁾。こうすれば、幕府の実質的な負担は

ない²⁹⁾。新田開発の落札額をあらかじめ算定し、それに合わせて入札させたのが実態であろう²⁹⁾。鴻池新田の新田開発経過などを見ていると、事前に幕府と鴻池との間で契約方法などの話ができていたと考えられる²⁹⁾。幕府は落札予定者と、入札額などを事前に取り決めていたのであろう²⁹⁾。

新大和川によって、274町歩ほどの田畑が潰れた²⁹⁾。しかし、その4倍の新田ができたのである²⁹⁾。そして、新田からは年貢が納められる²⁹⁾。鍬下三年といい、開発から3年間は収穫が十分に見込めないため、年貢は免除された²⁹⁾。旧大和川筋の場合、1705（宝永2）年から新田開発にかかり、1708（宝永5）年に検地が行われ、検地の結果に基づいて年貢高が決められ、1708（宝永5）年から年貢が納められた²⁹⁾。さらに、それまでは度々の洪水で安定した年貢が期待できなかったところが、洪水の減少で流域の村々からの年貢も安定する²⁹⁾。幕府にとって、かなりの増収が見込まれた²⁹⁾。

つまり幕府は付替え工事の費用負担は必要なく、そして年貢の増収が見込まれるということになる²⁹⁾。大和川の付替え工事は、幕府に利益をもたらす事業だったのである²⁹⁾。

幕府は付替え工事実施に伴い、各地の大名に工事に参加するように命令した²⁹⁾（お手伝普請）。最初に手伝いを命令されたのは姫路藩であった²⁹⁾。姫路藩は川下から工事に着手した²⁹⁾。ところが着手して間もなく、姫路藩主の本多忠国が死去したため、工事から撤退することになった²⁹⁾。これで工事は中止になるのではないかという噂が流れたようだが、幕府の対応は素早く、代わりの藩を指名して一ヵ月後には工事を再開している²⁹⁾。この際に川上側半分は幕府の直轄工事とすることを発表している²⁹⁾。当初から半分以上を幕府直轄とする予定だったのか、それとも姫路藩にすべて請け負わせるつもりだったのか、史料からははっきりしないが、残りの区間を三等分して、川上から岸和田藩、三田藩、明石藩が担当することになった²⁹⁾。その後、付帯工事を行うように柏原藩、高取藩も参加して工事が進められた²⁹⁾。

幕府が担当した川上側は川底を掘らずに堤防を築くだけの比較的単純な区間であったが、大名が担当した区間は困難な区間であった²⁹⁾。明石藩が担当した上町台地の掘削部分は、かなり苦労しただろうと想像できる²⁹⁾。総工事費は約71,500両を要したようである²⁹⁾。そのうち幕府が約37,500両を負担し、約34,000両を各藩が負担したようである²⁹⁾。財政難に苦しむ藩も多く、大和川付け替え工事への参加がかなり後まで藩財政を苦しめたようだ²⁹⁾。先に推察したように、幕府の負担額は新田開発入札額と当初から決まっており、残りを各藩に負担させたのである²⁹⁾。各藩は少しでも早く、安価に終わらせようと工事をがんばったようである²⁹⁾。

大和川の付替え工事は大名手伝普請としては大規模なものだった²⁹⁾。これで味を占めた幕府は、これ以降度々大名手伝普請を命じるようになる²⁹⁾。木曾三川の治水工事（宝暦治水）や宝永の富士山噴火の処理などでみられる²⁹⁾。幕府も財政難に困っていたための処置だったようだが、工事を命じられた藩にとっては迷惑な話であった²⁹⁾。

幕府は工事費ができるだけ少なくなるように、工事の方法もよく考えていた²⁹⁾。地面を掘り下げるのは同じ土量の盛土を行うよりも約2倍の人が必要になり、それだけ費用もかかる²⁹⁾。できるだけ掘削箇所を少なくしたかったのである²⁹⁾。また工事で土が余れば、その土を捨てるのにも費用がかかる²⁹⁾。そのため新しい大和川の川底をできるだけ掘らずに、もとの地面をそのまま川底とすることにし、どうしても掘り下げなければならないところだけ掘り下げることにした²⁹⁾。できるだけ無駄がなくなるよう、築堤必要土量と、掘削土量が、ほとんど同じになるようにした²⁹⁾。そのため工事に入る前に綿密な測量を行い、積算してから工事にかかった²⁹⁾。

測量は姫路藩が川下から着手したが、姫路藩撤退のあと幕府が引き継いで測量を行っている²⁹⁾。水平を基準として、基準線からどれだけ下がっているかを測量し、付替え予定地の断面図を作製している²⁹⁾。中家文書にも「地形高下之事」という断面図が残されている²⁹⁾。この図には川底の計画線が記入されており、それが原地形とほぼ一致している²⁹⁾。原地形のほうが高くなっているところ、つまり掘り下げが必要となるところは、瓜破台地と上町台地の部分だけである²⁹⁾。

中家文書には、「川違新川普請大積り」など工事の設計書が2通残されている²⁹⁾。これによると、二つの台地の掘削土と南堤に沿って掘削する落堀川の掘削土の合計と、新川兩岸の堤防に必要な盛土量がほぼ一致している²⁹⁾。掘削土と盛土の量を一致させれば、残土処分などの費用が不要となる²⁹⁾。

このように、効率的で無駄のない工事を実施したようである²⁹⁾。それは早く、安価な工事でもあるということである²⁹⁾。もし工事費が多くなれば各藩の負担をさらに重くするか、幕府がその費用を負担することが必要となる²⁹⁾。それを避けるために、念入りの測量と設計を行っていたのである²⁹⁾。

河村瑞賢が河口を中心とした流域の工事を実施しても洪水がなくならなかったことが、大和川の付替え工事をもう一度考えるきっかけになったことはまちがいない²⁹⁾。また、治水工事の嘆願に変わっていたとはいえ、運動が続いていたことも付替え工事再検討に影響を与えたことであろう²⁹⁾。しかし、付替え工事を実施することになった最大の理由は、大きな費用負担を伴うと考えられていた付替え工事を、幕府に利益をもたらす工事として実施できたことにあると考えて間違いないであろう²⁹⁾。

この方法を考え出したのは、堤奉行の万年長十郎である²⁹⁾。万年は、まず短期間で安価に工事ができる方法について考えたのであろう²⁹⁾。その結果ができるだけ川底を掘らず、掘削土と盛土量を等しくするという工法だったのであろう²⁹⁾。そして、その工事に大名を手伝いとして参加させる²⁹⁾。すべて大名手伝いとするとう不満が出ると考え、幕府も応分の負担はする²⁹⁾。その負担分を新田開発に伴う権利金で補填することにしたのである²⁹⁾。新田開発でどの程度の収入があるか、積算に際しては、町人や中甚兵衛らの意見を参考にしたと考えられる²⁹⁾。

工事費の積算額が7万両余り、新田開発権利金の積算額が3万7千両余り、その差額3万数千両を大名の負担として工事を実施する²⁹⁾。そうすれば、工事費に対する大名の負担額は半分弱となり、大名も不平を言うことはできない²⁹⁾。このように考えて付替え工事に臨んだのであろう²⁹⁾。その後新田から納められる年貢が幕府の利益となる²⁹⁾。

中甚兵衛は万年長十郎に度々呼び出されていたようである²⁹⁾。また記録には残っていないが、町人とりわけ鴻池などは万年と接触していたと考えられる²⁹⁾。

表 1.12-2 大和川付替の費用負担と幕府資金調達²⁹⁾をもとに作成

工事費用		費用負担・幕府資金	
幕府負担 上流 5.7km 分 (姫路藩撤退後発表)	約 37,500 両	新田開発権利金	37,000 両
お手伝い普請各藩負担分 当初：姫路藩 ↓ 姫路藩撤退 (最下流 1.1km 工事済) 後： 2.5km 岸和田藩 2.5km 三田藩 2.5km 明石藩	約 34,000 両	各藩負担 ・工事区間は、幕府担当区間（築堤のみ）に比べて難易度高い（瓜破台地、上町台地区間の掘削含まれる） 財政難に苦しむ藩も多く、大和川付け替え工事への参加がかなり後まで藩財政を苦しめたようである。	
総工費	約 71,500 両		

それまでの経験や新田開発の方法、収穫高等を甚兵衛や町人から情報を集めて積算したのであろう²⁹⁾。その結果、旧大和川流域の農民が待ち望んでいた大和川付替えが実現したが、それは決して農民のための付替えではなく、幕府の利益のための付替えだったのである²⁹⁾。

河内の人に大和川の付替えといえば、中甚兵衛という答えが必ず返ってくる²⁹⁾。中甚兵衛が付替え運動を展開し、周辺村々がその運動に参加し、大きくなった運動を無視することができず、幕府も付替えを決断することになったというのが、これまでの通説であった²⁹⁾。中には甚兵衛が私財を投げ打って付替え工事を実施したという人もいる²⁹⁾。工事を実施したのは幕府であり、甚兵衛が工事を実施できるはずはない²⁹⁾。それだけでなく、これまでの通説も残された史料とは大きくかけ離れているのである²⁹⁾。

史料からは、1704（宝永元）年の大和川付替え工事よりも17年前に付替え運動は終息していたことがわかる²⁹⁾。幕府が付替え不要を強く主張した結果、人々は付替えをあきらめ治水工事を求める運動へと変化していた²⁹⁾。

その運動に参加する人も年々少なくなり、運動がほぼ終息したころ、幕府は付替えを決定した²⁹⁾。その理由は、ここまで見てきたように幕府が付替え工事を、利益をもたらす工事として実施することができたからであった²⁹⁾。それを実践したのは堤奉行の万年長十郎であった²⁹⁾。大和川付替えに最大の貢献をしたのは中甚兵衛ではなく、万年長十郎だったのである²⁹⁾。万年は堤奉行となった1698（元禄11）年頃から付替えの可能

性を検討していたようだ²⁹⁾。志紀郡舟橋村(現在の藤井寺市)に残された「舟橋村絵図」(松永白洲記念館蔵)には、大和川付替え地点に存在した舟橋村新家の位置が克明に描かれている²⁹⁾。1698(元禄11)年に作成された絵図は、付替え検討の資料として作成されたのではないかと考えられる²⁹⁾。その後、付替え工事の方法について検討を進め、1701(元禄14)年までには付替え実施をほぼ確定していたようだ²⁹⁾。経済性を重視した万年の綿密な策略が付け替えへと推し進めたのである²⁹⁾。

付替えの立役者とされてきた中甚兵衛が運動に参加するようになったのは、1687(貞享4)年頃からと考えられる²⁹⁾。その後、運動は終息へと向かい、周辺の村々は次々と離脱、甚兵衛は孤立し、偽の押印をした嘆願書の作成など、運動はあらぬ方向へと向かった²⁹⁾。それでも運動を続けていたことが、幕府が付替えを検討することに結びついたのは間違いなく、その点で甚兵衛は評価されるべきだと思う²⁹⁾。

旧大和川とその沿川は、戦国時代を経て江戸時代に入ると、安定した社会となり農業や商工業が大きく発展した²⁸⁾。大坂を中心とした経済圏ができ、大和川の舟運も大きく栄えていった²⁸⁾。河内側での大和川の舟運は、柏原船の成功にはじまる²⁸⁾。柏原船は、1620(元和6)年・1633(寛永10)年の大洪水で受けた被害から村を立ち直らせようとして、志紀郡の代官、末吉孫左衛門が柏原から京橋までの貨物を運ぶ船を運航させたものであった²⁸⁾。当時40隻ではじめられたのが、4年後には70隻まで増えた²⁸⁾。柏原船の成功に続こうと、京橋から亀の瀬までの大和川や富田林村までの石川などを行き来する剣先船も運航された²⁸⁾。剣先船では、肥料(干しイワシ)やしょうゆ、酒などを大坂から運び、農産物などを奈良から運んでいた²⁸⁾。

1704(宝永元)年に大和川の付替え工事が竣工した以後から、旧川筋などで新田開発が始まった²⁸⁾。新田では、主に綿が栽培された²⁸⁾。綿は平野郷町の繰屋・総屋で加工された他、生産地農家の内職として綿布に加工されていた²⁸⁾。河内国の農村で織られた木綿は、「河内木綿」として知られ、組合組織もでき、江戸末期にはマニュファクチャー(工場制手工業)が展開するほどになった²⁸⁾。生産額は、合縞と木綿21,400余反(1反は成人1人前の衣料に相当する量)、繰綿糸1,700余梱、繰綿240貫(1貫は約3.75kg)にもなっていた²⁸⁾。

明治の殖産興業(＝明治時代前期の近代工業育成政策のこと)政策のひとつであった紡績産業において、1877(明治10)年頃から大阪や奈良にも近代的な紡績工場ができた²⁸⁾。河内では、綿実油や菜種油の伝統から生まれた製油業においても近代的な工場ができた²⁸⁾。また、明治から大正・戦前までの間、大和川流域では交通網が整備され、鉄道が敷設された²⁸⁾。1889(明治22)年に大阪鉄道が、湊町(現JR難波)―柏原間を開き、続いて1890(明治23)年に奈良―王寺、1893(明治26)年に柏原―王寺間が開通して大阪と奈良が鉄道でつながった²⁸⁾。しかし、陸運が便利になることで、大和川での舟運の勢いは衰えていった²⁸⁾。

農作物の栽培種も変わっていった²⁸⁾。明治初期、安価な外国産の綿が輸入されるようになり、国内での綿づくりは一時衰えた²⁸⁾。政府は国内の産業を保護するために品種改良を行うなどで巻き返そうとしたが、短い繊維である国内産の綿が近代紡績には適さなかったこともあり、大日本紡績連合会は綿花の輸入にかかる税をなくそうとして政府や議会に働きかけた²⁸⁾。1896（明治 29）年、「輸入綿花及羊毛海関税免除法案」が衆議院・貴族院を通り成立した²⁸⁾。これにより、国内での綿づくりの衰退は決定的となった²⁸⁾。河内では、綿の代わりにブドウやミカンなどの果樹、菊・ナシ・イモ・野菜類などが栽培されるようになった²⁸⁾。

大和川の付替えによって、新田開発や綿栽培の繁栄などの多大な恩恵がもたらされたが、マイナスに働いたこともあった²⁸⁾。柏原の西方、現在の藤井寺市、松原市、堺市など農地の多くを失った村々では、旧大和川筋に移住する、小作人に身を落とす人々がいた²⁸⁾。中には一家離散し、放浪する人々もあったといわれている²⁸⁾。また、ひとつの村が新しい大和川によって分断され、家や寺社と田畑が川の北と南に分かれてしまうなどといったことも起こった²⁸⁾。

堺湊では、新しい大和川が運んでくるおびただしい土砂によって、6 回におよぶ改築工事が江戸時代に行われたにもかかわらず、港は埋没を余儀なくされた。これによって、中世の自由な湾港都市として栄華を誇った堺の町は、港湾としての役割を果たせなくなっていた²⁸⁾。

旧川筋が耕作地などになり、そのようすが変わったとともに、新たな川筋でも人々の暮らしは変わっていった。旧大和川や平野川を運航していた剣先船の中で、河内国の 23 か村に許可されていた「在郷剣先船」と呼ばれていたものは、付替え前は 16 か村が船を所持していた²⁸⁾。

しかし、今津村・巢本村・赤井村、雁屋村などの村々から計 20 艘の株の返上があり、1711（正徳元）年から 1717（享保 2）年にかけても、茨田郡の中垣内村・北条村、若江郡の上小坂村・植付村などからも株の返上があった²⁸⁾。一方では、新川筋にあたる川辺村の権左衛門に対して、1714（正徳 4）年に船の所持が許可されている²⁸⁾。このように、剣先船の活躍は、旧大和川筋から新大和川筋に移っていったことがうかがえる²⁸⁾。

また、新しい大和川は、西除川と東除川を分断したため、左岸（南側）一体が排水不良地となり、大水の時には左岸の村々に被害をもたらすようになった²⁸⁾。右岸でも、大和川本川の堤防が決壊するなどの水害に見舞われるようになった²⁸⁾。水害時に堤防を補強するため、寺院の墓石や地藏尊を積んでいたところもあった²⁸⁾。

○大坂の新田開発盛衰と全国の新田開発盛衰

図 1.12-17 は、菊池が作成した全国の新田開発の動向を整理³⁰⁾した図に、大坂の淀川河口部・沿岸の新田開発動向、大和川付替え後に行われた旧大和川筋の新田開発時期を加筆したものである。

図作成に当たり、菊池は、全国の新田開発を最も網羅的に収蔵していると目される「旧藩時代の耕地拡張改良事業に関する調査」(農林省),「明治年間灌漑土木資料」(農林省),「明治以前日本土木史」(土木学会編)の3つの資料から³⁰⁾, 1596(慶長元)~1876(明治9)年間の新田開発の指標を整理した。新田開発の指標は、溜池築造、用水路開鑿、干潟干拓に区別した³⁰⁾。

溜池数は築造年代と位置、灌漑区域の明らかなもの529, そのうち199は岡山県(美作の森藩と備前の池田藩)の溜池である³⁰⁾。用水路数は開鑿年代、用水取水口と灌漑区域の明らかなもの820である³⁰⁾。干潟干拓数は干拓年代と位置の明らかなもの855となっている³⁰⁾。

特に、溜池・用水路のみ東日本(中部地方以東)と西日本(近畿地方以西)に二分し、更に用水路のそれぞれを三角州灌漑と中流平野・扇状地灌漑とに区別し、これを機械的に20年ごとに集計して、新田開発の隆盛期・衰微期の位置と期間を示さん³⁰⁾と整理したものである。

図1.12-17の上図は中流平野の新田開発関係用水路数(302/820)について、中図は三角州平野の新田開発関係用水路数(266/820)について、整理期間内のその盛衰を示したものとなる。

菊池は上図から、中流平野の開発についてみれば、東日本が圧倒的に著しいのにかかわらず西日本ははるかに少ない³⁰⁾ことを指摘し、西日本は中流平野の開発がわずかに明暦(1655-1657)~延宝(1673-1680)期(図では1656(明暦2)~1676(延宝4))に最大を示し、その後の不振なることは、すでに近世以前に中流平野の開発が完成に近づいていたことを示している、と考察している。これに反して東日本においては1656(明暦2)~1676(延宝4)年, 1716(享保元)~1736(元文元)年, 1836(天保7)~1856(安政3)年の3回の開発隆盛期を示し、その間に1676(延宝4)~1696(元禄9)年, 1736(元文元)~1816(文化13)年の2回の開発衰微期をはさんでいる³⁰⁾, と指摘している。これについて、東日本の中流平野の開発は2回の開発隆盛期にも開発尽くされず, 70~80年間の衰微期を経て近世末に最大の開発隆盛期を現出する³⁰⁾, と考察している。

中図については、下流平野の開発を見れば、開発隆盛期は東日本と西日本とに異なる特色を示す³⁰⁾点を指摘している。西日本には1656(明暦2)~1676(延宝4)年, 1696(元禄9)~1716(享保元)年, 1796(寛政8)~1836(天保7)年に3度にわたって開発隆盛期が出現するが、早期の開発隆盛期ほど量的に大きく、1656(明暦2)~1676(延宝4)年の開発隆盛期が最大を示している³⁰⁾点を指摘し、西日本の下流平野の開発は近世前半に限界に近付きつつあった³⁰⁾と考察している。これに対して東日本の下流平野の開発隆盛期は、ようやく1716(享保元)~1736(元文元)年に出現して西日本が1656(明暦2)~1676(延宝4)年に開発隆盛期を示すときはいまだ衰微期に沈滞していた³⁰⁾点に着目している。東日本において、最大の開発隆盛期が下流平野に出現したのが

1756（宝暦6）～1796（寛政8）年の衰微期を経てからの1816（文化13）～1856（安政3）年の間であった³⁰⁾点を示し、東日本は近世末期に中流平野にも下流平野にも新田開発が活発であった³⁰⁾ことが西日本との違い・特色であることを指摘している。全国的に見た時の下流平野における第2回目の開発隆盛期（1716（享保元）～1736（元文元）年）は、上方流の土木技術の進歩によってまず西日本に1696（元禄9）→1656（明暦2）？～1716（享保元）→1676（延宝4）年間に出現したが、東日本には約20→40年も遅れて享保元（1716）～元文元（1736）年の間に出現している³⁰⁾、と考察している。また元禄期に出現した多くの経済書が新田開発に対して反対あるいは消極的であった時期は、明暦2（1656）～延宝4（1676）年の最大の開発隆盛期に続く延宝4（1676）～元禄9（1696）年の開発衰微期にあたっている³⁰⁾、と指摘している。

下図の溜池がかり新田については、溜池水源とする新田の開発隆盛期は、1624～1657（寛永～明暦）年と1830～1859（天保～安政）年に出現し、その中間に長期にわたる開発衰微期が見られる³⁰⁾、としている。寛永～明暦年間（1624～1657）の開発隆盛期は河川を水源とした用水路による開発隆盛期（1656～1676）より20～30年も早く出現し、天保～安政間（1830～1859）の開発隆盛期は用水路による開発隆盛期（1816～1856）より20年も遅れて出現している³⁰⁾、と指摘している。溜池水源とする開発隆盛期を地域的に見れば、西日本は寛永～明暦間（1624～1657）に開発隆盛期を示すが、その以降は衰微して溜池築造は少なくなる³⁰⁾、東日本は天保～安政間に開発隆盛期に達するが、その以前の溜池築造はあまりふるわない³⁰⁾、としている。これについて、西日本の溜池築造の隆盛は、河川水源とする用水路による水田化、新田開発に不足する用水の補助を目的としたものであるが、その頃の東日本では低湿三角州の局地的・孤立的な新田開発の用水源として築造されたことに特色がある³⁰⁾、と指摘している。東日本の溜池例・水源の具体例として、利根旧三角州の見沼・十沼、北上川三角州の広淵沼、岩木川三角州の小知行派立の溜池や廻堰など³⁰⁾、あるいは耕地面積の20%余りも溜池が占める印南台地や安城台地のような洪積台地の水田化の用水源であった³⁰⁾、と解説している。東日本の近世末期における溜池築造の隆盛は、ようやく西日本の近世初期に見られた事情のように、河川水源の用水路の水田化を及ぼし得ない場所へ給水するためのもので、東日本の河岸平野の水田化が充実してきたことを示すものである³⁰⁾、と総括している。また、古代の開発にも池溝時代から堤防時代へ展開したように、近世においても新田開発者の政治的、経済的勢力の大小や新田開発地の地形的条件によって古代のそれと同じ過程が認められる³⁰⁾、と指摘する。しかし、地方書・農書は近世の主な灌漑施設を河川水源の用水路とし、中世における主な灌漑施設であった溜池を用水路灌漑の補助的な位置に置いている³⁰⁾、点が古代との違いとしている。

下図の干潟開発の動向については、次のように考察している。干潟干拓を全国的にみれば、その干拓隆盛期は1676（延宝4）～1696（元禄9）と1836（天保7）～1856（安政3）の2回にわたって出現し、その中間に1736（元文元）～1796（寛政8）年の60ヶ

年の干拓衰微期をはさんでいる³⁰⁾。1676（延宝 4）～1696（元禄 9）年の干拓隆盛期は三角州の開発隆盛期の 1656（明暦 2）～1676（延宝 4）年に接続するもので、三角州末端の新田開発とその前縁の干潟干拓が継続する開発隆盛期に含まれていると思われる³⁰⁾、と考察している。東日本が主として河川沿岸の内陸平野や三角州の開発に当たっているとき、西日本は主として干潟干拓に全力を傾倒していたのである³⁰⁾、と東西の新田開発対象の違いを指摘している。

干潟干拓の干拓隆盛期を詳しく見るために、先進地として伊勢湾岸・大阪湾岸と瀬戸内沿岸一帯を一群とし、後進地として九州沿岸を他の群としてみれば、両者の干拓隆盛期と干拓衰微期に著しい変化が現われる³⁰⁾。先進地における干拓隆盛期は 1656（明暦 2）～1696（元禄 9）年に最大出現し、1736（元文元）～1776（安永 5）年と 1816（文化 13）～1856（安政 3）年の 3 回にわたって干拓隆盛期が存在する³⁰⁾（図 1.12-18 参照）。その中間に 2 回の干拓衰微期をはさむ³⁰⁾。

名古屋藩の伊勢湾岸の干潟干拓 86 を数えられるが、第 1 回の隆盛期（1656（明暦 2）～1696（元禄 9）年）に 36、第 2 回の隆盛期（1736（元文元）～1776（安永 5）年）に 26、第 3 回の隆盛期（1816（文化 13）～1856（安政 3）年）に 24 が干拓され、それぞれの干拓隆盛期は名古屋藩の新田政策の変化に対応している³⁰⁾。大阪湾岸に展開する幕府領の干潟干拓は 52、面積約 2,000 町歩、石高 15,000 石に達するが、第 1 回の隆盛期（1656（明暦 2）～1696（元禄 9）年）に 20、第 2 回の隆盛期（1736（元文元）～1776（安永 5）年）に 22、第 3 回の隆盛期（1816（文化 13）～1856（安政 3）年）に 6 が干拓されている³⁰⁾。大阪市立図書館の新田開発に関する解説によれば、17 世紀の新田開発の多くが元禄期²²⁾になされたので、大阪湾干潟干拓の第 1 回隆盛期は元禄年間の 1696 年までと絞り込むことができる。

これに対して後進地たる九州沿岸の干潟干拓は、延宝 4（1676）～元禄 9（1696）年と寛政 8（1796）～安政 3（1856）年の 2 回の干拓隆盛期とその中間に元禄 9（1696）～寛政 8（1796）年までの長期にわたる干拓衰微期をはさむことが特色である³⁰⁾。また、干拓隆盛期は近世末期に最大を示して、近世初期に最大を示す先進地と反対になっている³⁰⁾。熊本藩の干潟干拓地は八代平野に約 60%、菊池川・緑川三角州の前縁や有明海に約 40%といわれる³⁰⁾。八代平野は自然に陸化した三角州と人為的な干拓によって陸化した三角州とは八代平野の景観を特色づける堤防によって区別することができる³⁰⁾。前者の堤防は山麓に近い東部に見られる堤塘であり、後者の堤防は西部の海岸まで分布する掘堤である³⁰⁾。堤塘は加藤氏の藩領時代に自然堤防を利用して河道を固定し、その氾濫を防ぐために藩営築堤した二重堤である³⁰⁾。球磨川の荻原塘・高田塘や日置川塘・大野川塘・氷川塘などである³⁰⁾。横塘は干潟干拓の潮除堤で南北に連なり、道路集落の立地に利用されている³⁰⁾。この横塘地域には干潟を干拓した新地 57 が数えられる³⁰⁾。このうち明治以降の新地 4 を除けば近世の新地 53 である³⁰⁾。近世初期の干拓隆盛期に 16、近世末期の干拓隆盛期に 37 が干拓されて、その中間に 1672～1789（寛文～寛政）

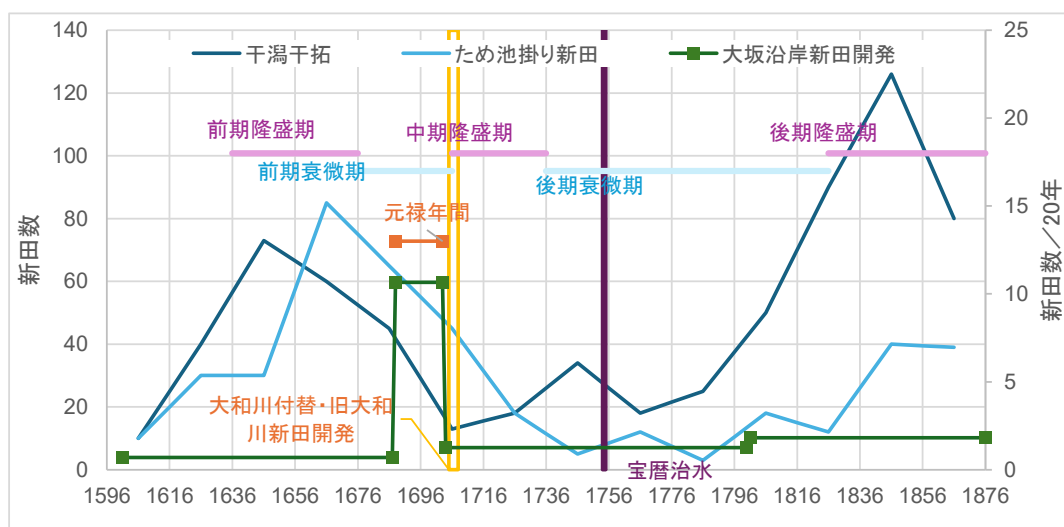
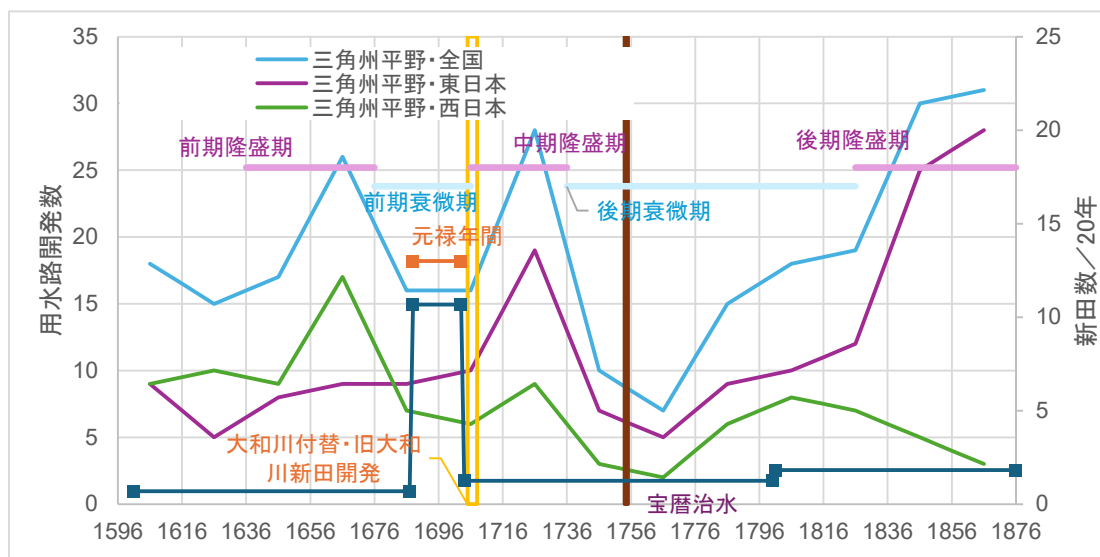
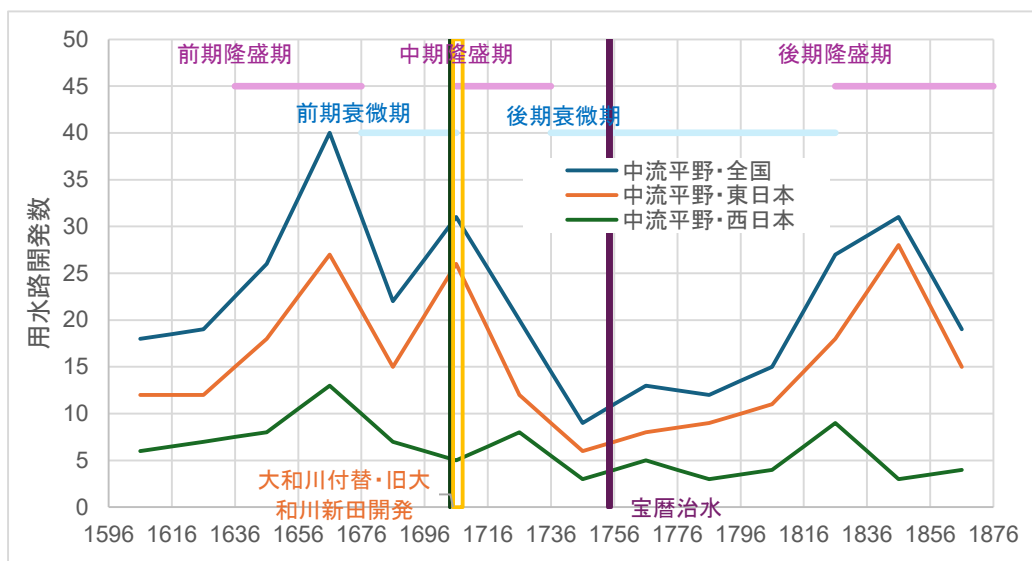


図 1.12-17 全国の新田開発動向と大坂の新田開発 ³⁰⁾に加筆

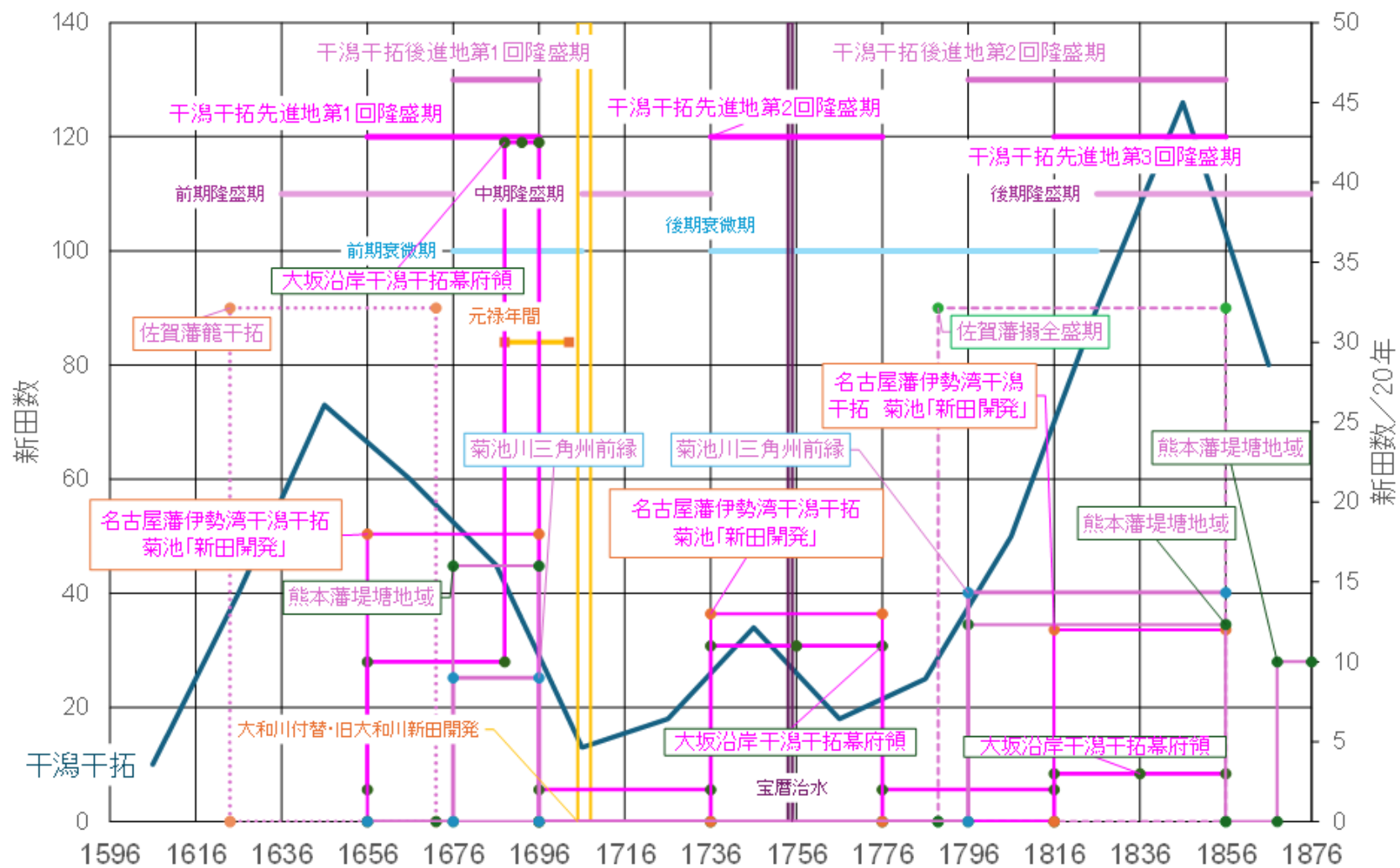


図 1.12-18 干潟干拓の動向，大坂沿岸干潟干拓新田開発 30)22)をもとに作成

年間の約 100 年を超える干拓衰微期がある³⁰⁾。また、菊池川三角州前縁にも、新地 52 を数えられるが、これは近世初期に 9、末期に 43 の干拓が行われている³⁰⁾。

佐賀藩の干潟干拓の干拓隆盛期と干拓衰微期の出現も同じ傾向が見られる³⁰⁾。佐賀平野の溝渠の分布形態は海岸線に平行して三帯に区別される³⁰⁾。内陸から規則的・系統的溝渠地帯、中間に不規則的・無秩序的溝渠地帯、海岸に再び規則的・系統的溝渠地帯が現れている³⁰⁾。それぞれの地帯は、古代の条里制時代、中世の荘園制時代、近世の大名領知制時代の新田開発地帯と一致するものである³⁰⁾。

大名領知制時代の開発になる系統的・規則的溝渠地帯の地名は人名・年号・さまざまの佳名の語尾に「籠」を付す地帯とその外側に「搦」をつける地帯がある³⁰⁾。この籠地帯と搦地帯が佐賀県の干拓地である³⁰⁾。このような地帯配列は佐賀藩領に完全に見られるわけではない³⁰⁾。六角川河畔は籠地帯を欠いて、直に搦地帯となっている³⁰⁾。また鹿島川河畔においては搦地帯を欠いて籠地帯が海岸に現れている³⁰⁾。籠・搦は面積数町歩の小規模な村受干拓地である³⁰⁾。佐賀藩領における籠の数は不明であるが、搦の数は 1,129 以上も数えられる³⁰⁾。この開発方式は筑後川を越えて大托間島・柳河藩領までも及び、小規模な村受干拓の密集地として全国に稀なる地域をなしている³⁰⁾。

籠・搦の開発隆盛期を決定するには籠・搦の完成した時に祀る海神様の石に彫り付けた年号を採集すればよいが容易ではない³⁰⁾。その反対に籠干拓の末期と搦干拓の初期を知って両者の中間に存在する佐賀藩の干拓衰微期を明らかにすることは比較的容易である³⁰⁾。有明海北岸の干潟干拓の起源は古く、鎌倉時代既に干拓していた³⁰⁾。しかし当時の干拓地に籠名を使用していたか明らかではない³⁰⁾。時代が下って、鹿江町威徳寺の旧記によれば、1551（天文 20）年領主竜造寺隆信が小々森・咄分・吉村を連ねる瀬海築堤を行い、干拓地の潮害防止の祈念を七社の天満宮に行ったと言われる³⁰⁾。この堤防は現存しないが、この堤防の内陸の地名には籠がつけられている³⁰⁾。したがって籠の干拓は戦国期までは遡ることができる³⁰⁾。籠の干拓末期も佐賀藩時代の築堤した干拓地保全の築堤年代から推定できる³⁰⁾。

籠も搦も小規模な村受干拓であるからそれらの潮除堤は脆弱である³⁰⁾。したがって佐賀藩は干拓地増加ごとに藩営築堤を行って潮害から干拓地を保護し、同時に堤内の干拓地の年貢を増徴した³⁰⁾。現存する最も内陸になる藩営築堤は、寛永年間に成富茂安の築堤による千栗土居に連なるものである³⁰⁾。六角川～塩田川間の住吉・戸ヵ里にわたる六千間土居と早津江川～六角川間の松土居や牛津川～六角川間の土居である³⁰⁾。これらの土居は寛永～寛文（1624～1672）年の築堤である³⁰⁾。この土居の外側には籠地名はほとんど発見できない³⁰⁾。したがってこれらの藩営築堤は籠干拓の末期に築堤されたものである³⁰⁾。この点から籠干拓は寛文（1661～1672）頃で終わったと推定される³⁰⁾。

搦干拓は通説によれば、1786（天明 6）年佐賀藩の殖産興業を掌る六府方の搦方（後に新地方）の築堤からはじまるとされる³⁰⁾。しかし、搦干拓は天明以前にも遡ると思われる³⁰⁾。それは、搦地名は寛永（1624-1643）～寛文（1661-1672）期の築堤と言われる

六千間土居の内側にも存在する³⁰⁾。また六千間土居の外側にある搦の中に芦刈村の永田搦は元禄(1688~1703)に干拓し、砥川村の正徳搦や南川副村の斉藤搦は正徳(1711~1715)の干拓である³⁰⁾。搦が激増するのは天明(1781~1788)ことに寛政(1789~1800)からである³⁰⁾。しかし、搦干拓は戦国時代から近世初期までの干潟干拓とは限らない³⁰⁾。鹿島町付近に近世末期の干拓地にも籠名を付しているからである³⁰⁾。むしろ籠と搦の本来の意味は干拓地としての干潟地形の相違によるものであろう³⁰⁾。籠の潮除堤には松丸太の土居心を入れ、外側を石垣で保護する³⁰⁾。既に陸化して最大の高潮である八朔潮がようやく侵すほどに生長した干潟の内陸に干拓したものである³⁰⁾。搦はその前縁に連なり、干満に出没し、いまだ陸化せずして浅海である干潟の干拓である³⁰⁾。かくて佐賀藩の第1回の干拓隆盛期は寛永~寛文間(1624~1672)の築堤になる六千間土居・松土居の竣工によって一時期を画し、第2回の干拓隆盛期は六府方の搦方設置による寛政(1789-1800)以降に出現する³⁰⁾。そしてこの中間に寛文~天明間(1661~1781)の120年の長きにわたる干拓衰微期があったことを指摘できる³⁰⁾。

図1.12-18の干潟干拓の図では、新田開発の活発さを表現するため、可能なものは20年間あたりの新田開発数で示した(佐賀藩の籠干拓、搦、旧大和川新田開発は期間のみを示している)。図から、大坂沿岸では、元禄期の1696(元禄9)年までと干潟干拓先進地第2回隆盛期(1736(元文元)~1776(安永5)年)の2回の新田開発ピークがあること、最初のピークは開発密度が高かったことがわかる。また、大和川付替え後の旧川新田開発は最初の沿岸新田開発隆盛期の後に位置している。大和川旧川跡の新田開発は、全国的な新田開発中期隆盛期の端緒を切るもの(お手伝い普請の活用、新田開発権利売却による資金調達等)であったことも推察できる。

菊池は全国的な新田開発の動向について、次のように総括する。・・・以上を総合すれば新田開発地の違いや地域的ずれがあるにもかかわらず、全国的立場からは東日本・西日本の地域において新田開発の隆盛期と衰微期を次のように指摘できよう³⁰⁾。前後3回の開発隆盛期とその中間に挟まる2回の開発衰微期が存在³⁰⁾している。第1回の開発隆盛期は寛永(1624~1643年)末から始まり、正保・慶安・承応・明暦・万治を経て寛文(1661~1672年)に至る50年間で、特に明暦~寛文(1655~1672年)期が中心となる³⁰⁾。これを前期開発隆盛期と名付けるが、あたかも幕藩体制の確立期に位置している³⁰⁾。第2回の開発隆盛期は元禄(1688~1703年)末から始まり、延享(1744~1747年)に終わるが、享保(1716~1735年)を中心とする³⁰⁾。これを中間開発隆盛期と名付ける³⁰⁾。中間開発隆盛期は元禄期に畿内から始まり、享保改革における新田開発令によって全国的に拡大されたものである³⁰⁾。第3回の開発隆盛期は寛政改革(1789年)によって始まり、天保~安政(1830~1859年)を中心として明治にまで延長しているが、これを後期開発隆盛期とする³⁰⁾。後期開発隆盛期は天保改革と関連するものである³⁰⁾。この間の開発衰微期は延宝~元禄(1673~1703年)で、これを前期開発衰微期とする

30). また元文(1736～1740年)から始まり、宝暦(1751～1763年)を最低として天明末(1788年)に終わるを後期開発衰微期とする³⁰⁾.

1. 12. 6 町人文化、東大寺大仏の再建

○町人文化

17世紀の終わり頃から18世紀にかけて、財力をたくわえた町人のあいだで生活を楽しもうという意識が強くなり、学問や文化がさかんになった²²⁾. 町人の生活や気持ちをうつしだした井原西鶴の小説、浮世草子や、近松門左衛門の浄瑠璃がもてはやされた²²⁾. 歌舞伎・浄瑠璃、あるいは落語といった芸能は、最初は京都が盛んでしたが、しだいに大阪に中心が移ってきた²²⁾.

学術・教育文化も「懷徳堂」と「適塾」の開設で大きく飛躍¹⁾した。「雨月物語」を書き万葉集を研究した上田秋成、「万葉代匠記」を書いた契沖、天文学者の間重富、北堀江で酒造業をいとなんでいた博学者の木村兼葭堂など、たくさんの町人学者が生まれ、町人学校もあちこちに生まれた²²⁾. 町人学校としては、中井甕庵の「懷徳堂」、平野郷の惣年寄土橋友直らによって開かれた「含翠堂」など²²⁾がある.

富永仲其は懷徳堂に学び、発想発展の法則的把握や固有の文化類型などを発見し、当時の思想界に大きな影響をあたえ、徹底した合理主義者として知られる山片蟠桃など、多くの町人学者を輩出した¹⁾.

緒方洪庵が開設した「適塾」は幕末維新に活躍した福沢諭吉や大鳥圭介を育てた蘭学・医学の学問所である¹⁾. 適塾は日本の薬種商の中心地であった道修町の近くに開設され、全国から集まった英才達は自由闊達な町人の町大坂で蘭学を学んだ¹⁾.

さまざまな物資が交流する天下の台所大坂に人が集い、文芸、文学、教育、学術の花が咲いた. 江戸期に咲いたこれらの文化は、今も大阪の町に息づいている¹⁾.

○東大寺大仏・大仏殿の再建

重源が再興した東大寺は、鎌倉時代には、伽藍が再興されるに伴って、華嚴教学もおこり、尊勝院を中心として、弁曉、宗性、凝然らが輩出して教学復興の機運が高まった³³⁾. また、別に明恵上人高弁は京都梅尾に高山寺を開いて華嚴・真言の道場とした³³⁾. しかし、南北朝の争乱のとき東大寺は公家(東南院門跡系)と武家(尊勝院系)の2派に分かれて争ったために、寺内も荒廃し、さらに1567(永禄10)年には松永久秀と三好三人衆との争いに巻き込まれて大仏殿が炎上し³³⁾た. 松永久秀の軍勢は大仏殿に陣を構えていた三好勢に夜討ちを仕掛け、その結果大仏殿をはじめとする多くの建造物が焼失し、大仏も原型を留めないほどに溶け崩れ³⁴⁾た. 大仏殿、戒壇堂、浄土堂、唐禅院、四聖坊などが焼失した³⁵⁾.

翌1568(永禄11)年には、山田道安(山辺郡山田城城主)が中心となり、大仏および大仏殿の修理が試みられ³⁴⁾る. 織田信長や徳川家康なども勧進許可を出したが、大仏

は江戸時代になっても木造銅版張りの仮の頭部を乗せた状態で、雨ざらしのままだったといわれて³⁴⁾いる。山田道安により、仮屋も建てられたが、やがて仮屋は大風で倒れ、大仏は100年近く風雨にさらされた³⁵⁾。

その痛ましい姿を見て大仏殿再建の志を抱いたのが公慶上人で、1684（貞享元）年、江戸幕府に大仏殿修造を願って許され、1686（貞享3）年から大仏鑄造に着手、仏頭と蓮弁18枚を補鑄、1692（元禄5）年に開眼供養が行なわれた³⁵⁾。

1684（貞享元）年に始めた公慶上人の勧進は、江戸や上方などの都市部で大仏縁起の講談と宝物の拝観を行う、「出開帳」の方式を用いたキャンペーン³⁴⁾であった。この方法は、大仏の現世利益・靈驗を期待する民衆の信仰心をつかみ、多額の喜捨を集めて大仏修理の費用をまかなうことができた³⁴⁾。その翌年には大仏修復事始の儀式が営まれ、東大寺勧進所として龍松院が建てられている³⁴⁾。

大仏修理の計画が具体化していくにつれ、奈良の町では大仏講という組織が編成され、勧進帳が作成されるなど、大仏復興への気運が地元でも盛り上がった³⁴⁾。そして1686（貞享3）年には大仏の修理が始まり、そのわずか5年後の1691（元禄4）年には大仏の修理は完了し、その翌年には大仏開眼供養が盛大に営まれた³⁴⁾。このとき、奈良は空前の賑わいをみせたといわれている³⁴⁾。

ついで大仏殿の再建にも、公慶上人による勧進が続けられたが、大仏再建よりさらに大きな費用がかかった。1693（元禄6）年、公慶上人が将軍徳川綱吉とその母桂昌院に謁見したことをきっかけとして、東大寺復興は江戸幕府主導の国家的大事業となっていく³⁴⁾。再建工事の期間は1694（元禄7）年から1708（宝永5）年までの14年の年月をかけ、大仏修理、大仏殿再建、さらに他の焼失した建造物に関しても再建が行われた³⁴⁾。公慶上人が1705（宝永2）年に亡くなった後、弟子たちが勧進を引き継いで、東大寺の復興事業が完了したのは、公慶が復興を志してから約70年後のことであった³⁴⁾。

東大寺大仏と大仏殿の1567（永禄10）年の戦禍から、1684（貞享元）年の公慶上人による復興開始までに100年以上の年月を要しているが、その理由の一つとして、豊臣秀吉が奈良の大仏に代えて1595（文禄4）年に創建した方広寺と京都大仏の存在があるので、その経緯等を整理する。

織田信長は、1573（天正元）年9月、東大寺を戦乱に巻き込むことと乱暴狼藉を働く者に対しての厳罰を通達する書状を出している³⁶⁾。信長亡き後に天下人になった豊臣秀吉は、1586（天正14）年に、焼損した東大寺大仏に代わる新たな大仏の造立を発願³⁶⁾した。秀吉は、京都に方広寺大仏（京の大仏）を造立し、東大寺大仏再建は行わなかった³⁶⁾。南都を焼き討ちした平氏政権を倒した源頼朝が、早急に東大寺大仏再建への援助を行ったこととは対照的である³⁶⁾。方広寺大仏は東大寺大仏に代わる大仏として発願されたため、豊臣秀頼の代には、寺号を「東大寺」とする（方広寺を東大寺の継承寺院とする）ことも企図され、朝廷との協議がなされた³⁶⁾。この件は、大坂の陣（1614（慶長19）、1615（慶長20／元和元））に敗れた豊臣氏の滅亡で立ち消えとなった³⁶⁾。

なお、権力者の支持をうけたとはいえ、方広寺の大仏・大仏殿も、順調な道を歩んだわけではない。1595（文禄 4）年の創建後、方広寺の大仏、大仏殿は、1798（寛政 10）年に落雷で焼失する。この時焼失した大仏は 3 代目、大仏殿は 2 代目だった。開眼前の初代大仏は、創建翌年の 1596（文禄 5）年閏 7 月 13 日の慶長伏見地震で倒壊³⁷⁾した。『義演准后日記』によれば旧暦 8 月 18 日に開眼供養の予定だったという³⁷⁾。大仏損壊の原因について、工期短縮のために銅造ではなく、木造としたことが裏目に出たとされる³⁷⁾。なお損壊した大仏とは対照的に、初代大仏殿は地震による損壊を免れた³⁷⁾。

秀吉は、夢のお告げと称して、損壊した大仏に代わり、新たに由緒ある信濃善光寺如来（善光寺式阿弥陀三尊）を移座して本尊に迎え、落慶法要を行うことを計画する³⁷⁾。善光寺如来は武田信玄が上杉氏による戦災からの保護を口実として、寺ごと甲斐国に移転させていたので、当時善光寺如来は甲斐善光寺に安置されていた（一時期武田氏を滅ぼした織田氏によって善光寺如来は外部へ持ち出されるが、本能寺の変で織田氏が衰亡すると、如来を譲り受けた徳川家康によって甲斐へ返還された）³⁷⁾。木食応其の尽力により、1597（慶長 2）年 7 月 18 日に善光寺如来が京に到着し、大仏殿に遷座された³⁷⁾。善光寺如来は、大仏を取り壊した台座の上に宝塔が造られ、そこに安置されたという。同年 5 月 23 日の秀吉による初代大仏の解体の命令は、善光寺如来を安置するため、初代大仏を取り除け、その台座上に空いた空間を作ることが目的であったと考えられている³⁷⁾。なお地震で無傷であった光背はそのまま残されていたという。これ以後大仏殿は「善光寺如来堂」と呼ばれることになり、如来を一目拝もうとする人々が押し寄せるようになった³⁷⁾。相国寺の僧西笑承兌は自身の日記の中で、方広寺の本尊が巨大な大仏から小振りな善光寺如来に替わったことは、天下人が織田信長から豊臣秀吉に替わったことの如くだと評した³⁷⁾。また大仏が慶長伏見地震という不慮の出来事で損壊したことを、信長が本能寺の変という不慮の出来事で落命したことにもなぞらえている³⁷⁾。

秀吉は翌 1598（慶長 3）年病に臥した³⁷⁾。これは善光寺如来の祟りではないかという風説が京都民衆の間で広まったことで、同年 8 月 17 日、善光寺如来は信濃国の善光寺へ戻されることになった³⁷⁾。しかし秀吉は 8 月 18 日に死去した³⁷⁾。秀吉の死は外部に伏せられ、8 月 22 日には本尊の無い大仏殿で、大仏殿の完成を祝う大仏堂供養が行われた³⁷⁾。秀吉が善光寺如来を無理矢理方広寺に移座させたことについて、宗教を軽視した彼の傲慢とされることもあるが、秀吉が甲斐国から善光寺如来を持ち出さなければ、今日まで如来は甲斐国に留め置かれていた可能性もあったので、如来が信濃国に返還されたのは、（本来の思惑は別として）結果的には秀吉の功績とも言える³⁷⁾。

秀吉没後の豊臣政権では、今度は耐震性のある銅製で大仏を再建することが企図され、大仏の鑄造工事が行われていたが、1602（慶長 7）年 12 月 4 日（新暦では 1603 年 1 月 15 日）に、鑄物師の過失により大仏の膝部分の鑄造を行っている際に出火し、大仏殿に引火して大火となる³⁷⁾。これにより先に損壊した初代大仏のみならず初代大仏殿も滅失し、大仏・大仏殿の造立は振り出しに戻った³⁷⁾。通常銅造の大仏と、木造の大仏殿を

造立する場合、まず大仏を完成させた後に、大仏殿を築くものだが、この工事の際は、大仏殿は既にあったので、既設の大仏殿の内部で大仏の鑄造工事を行っていたようである（『義演准后日記』『鹿苑日録』）³⁷⁾。木造建築物の内部で鑄造工事を行うのは危険極まりない行為であり、起こるべくして起きた事故とも言える³⁷⁾。ただし歴史学者の河内将芳は、火災の危険はあるが、風雨の影響を受けることなく大仏の鑄造工事を行うことができる利点もあったので、上記工事手法が採用されたのではないかとしている³⁷⁾。なお『義演准后日記』によれば、この時の未完成の大仏は自重軽減のため、東大寺大仏のように全身純銅造でなく、頭部と腕は木造とした、銅造と木造の混構造で造立される予定であったという³⁷⁾。

1607（慶長 12）年には、豊臣秀頼により、豊臣家家臣の片桐且元を奉行として、再び銅製大仏および大仏殿の再建が企図されるようになった³⁷⁾。通説では、家康が秀頼に方広寺大仏・大仏殿の再建を勧め、それを豊臣方が受け入れて再建工事の運びとなったとされるが、それは豊臣家の財力を蕩尽させるための家康の謀略とされてきた³⁷⁾。しかし歴史学者の河内将芳は、豊臣氏に大仏・大仏殿再建工事費を負担させたのは事実だが、「大仏再建は秀頼と徳川の共同事業で、徳川もかなりの労力を注いだ。幕府は大仏を豊臣一色とは認識せず、東大寺の代わりになるものとして重視したのではないか。」とし、豊臣と徳川の共同事業であったとしている³⁷⁾。

大仏・大仏殿再建工事について、まず大仏の鑄造がなされたと考えられている³⁷⁾。しかしそれについては、後述の大仏殿再建工事と異なり、史料に乏しく詳細は不明である³⁷⁾。2代目大仏は銅造であるとするのが定説であるが、東大寺大仏のように全身純銅造であったのか、もしくは事故で未完成のまま焼失した従前の大仏の計画のように、銅造と木造の混構造であったのかは定かでない³⁷⁾。

2代目大仏殿再建工事で棟梁を務めたのは、家康が派遣した中井正清である³⁷⁾。中井正清は江戸城や駿府城など、各地の城郭建築や、徳川氏関係の重要な建築工事を多く担当しており、当時大工として大変高名な人物であった³⁷⁾。再建された2代目大仏殿の指図（設計図）は中井家に伝来しており、発掘調査の成果等も合わせて、（初代大仏殿と異なり）2代目大仏殿はおおよそその全貌の把握が可能である³⁷⁾。

大仏殿の立柱工事は1610（慶長 15）年8月22日から行われ、1612（慶長 17）年1月29日から大仏殿に屋根瓦を葺く作業が始まった³⁷⁾。1612（慶長 17）年中に2代目大仏殿はほぼ完成し、工事着工から2年足らずという異例の速さで大仏殿の再建が完了した³⁷⁾。方広寺大仏・大仏殿の再建が完了したため、落慶供養の段取りを進めることになった³⁷⁾。段取りは片桐且元が進め、武家間では京都所司代の板倉勝重や、徳川家康との協議がなされた³⁷⁾。しかし落慶供養は武家側だけで決定できるものではなく、朝廷や公家・寺社勢力との協議も必要であった³⁷⁾。

表 1.12-3 東大寺大仏・大仏殿の江戸期再興の道のり

年	奈良大仏（東大寺） 高さ 14.7m	京都大仏（方広寺） 高さ約 19m
1567（永禄 10）	10 月 三好・松永の兵火で東大寺大仏・大仏殿（2 代目）焼失	
1568（永禄 11）	山田道安による大仏修理の試み（大仏を補修し仮屋を建てる）.	
1573（天正元）	9 月織田信長は東大寺を戦乱に巻き込むことと乱暴狼藉を働く者に対しての厳罰を通達する書状発出	
1586（天正 14）		豊臣秀吉が焼損した東大寺大仏に代わる新たな大仏の造立を発願
1591（天正 19）		5 月 大仏殿立柱工事開始.
1592（文禄元）-1593（文禄 2）		文禄の役
1595（文禄 4）		方広寺創建（初代大仏・初代大仏殿造立）.
1596（文禄 5／慶長元）		閏 7 月 慶長伏見地震で初代大仏倒壊
1597（慶長 2）－1598（慶長 3）	慶長の役	1597（慶長 2）善光寺如来を方広寺大仏殿に遷座 1598（慶長 3）善光寺如来を信濃へ返還. 8 月豊臣秀吉没.
1603（慶長 8）		初代大仏殿が、再興大仏鑄造工事中の事故で焼失
秀頼時代		秀頼時代には寺号を「東大寺」とする（方広寺を東大寺の継承寺院とする） ことも企図され、朝廷と協議 → 大坂の陣（1614・1615）で立ち消え
1610（慶長 15）	暴風で仮大仏殿は倒壊. 以降、大仏は露座のまま放置.	8 月 22 日 2 代目大仏殿立柱工事
1612（慶長 17）		2 代目大仏殿完成（2 年足らず異例の速さで再建）. 2 代目大仏再建完了.
1614（慶長 19）・1615（慶長 20/元和元）	大坂の陣→豊臣氏滅亡	
1662（寛文 2）		5 月 寛文近江・若狭地震で方広寺大仏（2 代目）が損壊（異説もある）
1667（寛文 7）		3 代目大仏、木造で再興（江戸幕府の主導で早急に再建）
1684（貞享元）	公慶、大仏修理のための勧進を開始（幕府から勧進許可）	
1686（貞享 3）	大仏修理の開始	
1688（元禄元）	公慶上人が大勧進職になる	
1691（元禄 4）	大仏修理完了	
1692（元禄 5）	大仏開眼供養	
1693（元禄 6）	公慶が将軍徳川綱吉とその母桂昌院に謁見. →東大寺復興は江戸幕府主導の国家的大事業に	
1694（元禄 7）	大仏殿（3 代目）再建開始	
1705（宝永 2）	公慶上人死去	
1709（宝永 6）	3 月大仏殿（3 代目）落慶供養. 中門や廻廊完工はさらに 30 年を要した.	
奈良大仏・大仏殿（3 代目）と京都大仏・大仏殿（2 代目）が双立（約 90 年間）		
1798（寛政 10）		落雷で大仏（3 代目）・大仏殿（2 代目）が焼失

1614（慶長 19）年には梵鐘が完成し、片桐且元は、南禅寺の禅僧文英清韓に命じて銘文を起草させ、梵鐘に銘文を入れた³⁷⁾。『本光国師日記』によれば、家康が「梵鐘の銘写」と「大仏殿の棟札の案」に目を通したのは、8月5日であるという³⁷⁾。鐘銘文については、長々と文を書き連ねてあること、さらに自身の諱（家康）を銘文に書き入れたことを家康は問題視し、棟札については、先例に倣っていないことと、自身の派遣した大工棟梁中井正清の名が棟札に記されていないことを問題視したと『本光国師日記』に記されている（『本光国師日記』には、家康の諱を入れたことを問題視したとあるが、通説で言われるような、諱を「家」と「康」に割いたことに対しての言及は見られない）³⁷⁾。こうして方広寺鐘銘事件発生の運びとなり、大坂の陣へと繋がっていく³⁷⁾。なお歴史学者の河内将芳は、以心崇伝が著した『本光国師日記』に、以下のような通説とは逆の記述があることを指摘している³⁷⁾。以心崇伝が板倉勝重に宛てた書状（8月22日条）には「文言以下の善悪、市（片桐且元）存ぜられざることも、もっともとの御詮」「鐘をば銘をすりつぶしそうらえとの御内証」とあり、鐘銘文は重大な問題だが、片桐且元に責任はなく、梵鐘から問題の銘文をすりつぶせば良いとの家康の内意があったとしている³⁷⁾。

大坂の陣の後も方広寺は残されたが、方広寺境内に組み込まれていた三十三間堂共々、妙法院の管理下に置かれた³⁷⁾。妙法院門主が方広寺住職を兼務するようになったのは1615（元和元）年からで、これは大坂の陣で豊臣氏が江戸幕府に滅ぼされたことを受けての沙汰である³⁷⁾。

時は下って1662（寛文2）年に地震（寛文近江・若狭地震）が方広寺を襲う。5月1日（新暦では6月16日）に寛文近江・若狭地震が発生し、京都全域に大きな被害をもたらしたが、この地震で2代目大仏が損壊したとするのが通説である³⁷⁾。ただし地震発生前から経年劣化などで既に2代目大仏は損壊しており、建て替えのため2代目大仏を解体していた最中に地震に遭遇したとする異説もある（上記説の根拠は浅井了意の『かなめいし』の記述に基づく）³⁷⁾。2代目大仏から3代目大仏への建て替えの経緯については、何があったのかの記録史料が非常に混乱、錯綜しており、不明確な点が多いが、2代目大仏は取り壊され、1667（寛文7）年に木造で3代目大仏が再興された³⁷⁾。大仏殿は引き続き、豊臣秀頼の代に造立された2代目大仏殿を使用していた³⁷⁾。

東大寺は破損した大仏に応急処置として、溶けた大仏の頭部に新たに銅板で仮の頭を作成して付け、仮の大仏殿もなんとか建てていたが、1610（慶長 15）年に暴風で仮大仏殿は倒壊した³⁶⁾。以降、大仏は露座のまま放置されることになったのは既述のとおりである³⁶⁾。

豊臣氏が滅亡し、江戸幕府の全国支配が確立してからも、幕府による東大寺大仏再建の企図は直ぐにはなされなかった³⁶⁾。一方で方広寺の大仏（京の大仏）・大仏殿の修繕工事には積極的に江戸幕府が関与している³⁶⁾。これは朝鮮通信使の旅程に方広寺が組み込まれており、日本側の体面保持・国威発揚の意図があったものとされる（1719（享

保 4) 年の第 9 回朝鮮通信使が、方広寺は秀吉の造立した寺であること、また秀吉の朝鮮出兵における朝鮮の戦死者の耳鼻を埋葬した耳塚が門前にあることを理由に、方広寺訪問を拒絶しトラブルに発展したことを契機として、方広寺は朝鮮通信使の旅程から外された)³⁶⁾。

1662 (寛文 2) 年の寛文近江・若狭地震で方広寺大仏が損壊した際も (地震発生前から、経年劣化などで既に大仏は損壊していたとする説もある)、銅像から木像に改められてしまったが、江戸幕府の主導で早急に再建がなされた³⁶⁾。

平家の南都焼討による東大寺大仏・大仏殿の焼失の際は早急に再建がなされたが、1567 (永禄 10) 年の東大寺大仏・大仏殿の焼失後はその再建が遅々として進まなかった³⁶⁾。その原因について、江戸時代には方広寺に往時の東大寺大仏・大仏殿に匹敵する規模のそれが既に造立されており、僧や民衆の間で東大寺大仏・大仏殿を復興させようとする機運 (世論) が高まりにくかったという点がある³⁶⁾。

しかし 1600 年代後半に、東大寺の僧公慶が立ち上がり、東大寺大仏の修理と大仏殿の復興を行おうと勧進を始めると、多くの人々からの喜捨を受けて、まず大仏の修理から行われることになった³⁶⁾。修理は 1691 (元禄 4) 年に完成し、翌 1692 (元禄 5) 年には大仏開眼供養が行われた³⁶⁾。公慶は続いて大仏殿の再建に着手しようと江戸幕府第 5 代将軍徳川綱吉やその母の桂昌院に謁見し、多額の寄進を受けた³⁶⁾。こうしたこともあって大仏殿は 1709 (宝永 6) 年に遂に完成した³⁶⁾。

現存する 3 代目の東大寺大仏殿は、高さと奥行きは天平時代とほぼ同じだが、間口は天平創建時の 11 間からおよそ 2/3 の 7 間に縮小されている³⁶⁾。3 代目東大寺大仏殿は従前の大仏殿とは外観が大きく異なる点が多い (堂外から大仏の御顔を拝顔できるようにする観相窓の採用、観相窓上部の唐破風の設置など)³⁶⁾。同時代に存在していた方広寺 2 代目大仏殿の設計図は今日現存しているが、それと現存する 3 代目東大寺大仏殿を見比べると、間口 (建物の横幅) が減じられていること以外はほぼ建物の外観が瓜二つであることが分かる³⁶⁾。これは東大寺 2 代目大仏殿の焼失から百数十年が経過し、その技法に倣うことは難しいが、同時代には方広寺 2 代目大仏殿が京都に存在しており、公慶など東大寺大仏殿再建に当たった者達が、その意匠・技法を参考にしたためではないかと考えられている³⁶⁾。またその根拠として以下もある³⁶⁾。東大寺大仏殿内部に設けられている売店の上方の壁に、江戸時代の東大寺大仏殿再建にあたり作成された設計図面である、巨大な『東大寺大仏殿建地割板図』が飾られている³⁶⁾。上記は経年劣化のため図面が読めなくなっていたが、赤外線撮影による調査を行った所、大仏殿の計画が間口 11 間から 7 間に縮小する以前の、当初設計図面であることが判明した³⁶⁾。上記図面は現存の東大寺大仏殿の意匠・構造よりも、より方広寺大仏殿のそれに近似しており、建築史学者の黒田龍二は「(東大寺大仏殿建地割板図は) 方広寺大仏殿を参考に東大寺大仏殿再建のための雛形として描かれたと考えるのが妥当である」としている³⁶⁾。また現在の方広寺本尊の盧舎那仏座像は往時の大仏の 1/10 の大きさの模像とされるが、そ

れの光背の意匠は、現存の東大寺大仏の光背の意匠と極めて近似しているので、大仏の光背の意匠についても、方広寺大仏のそれに倣ったものではないかとする説もある³⁶⁾。

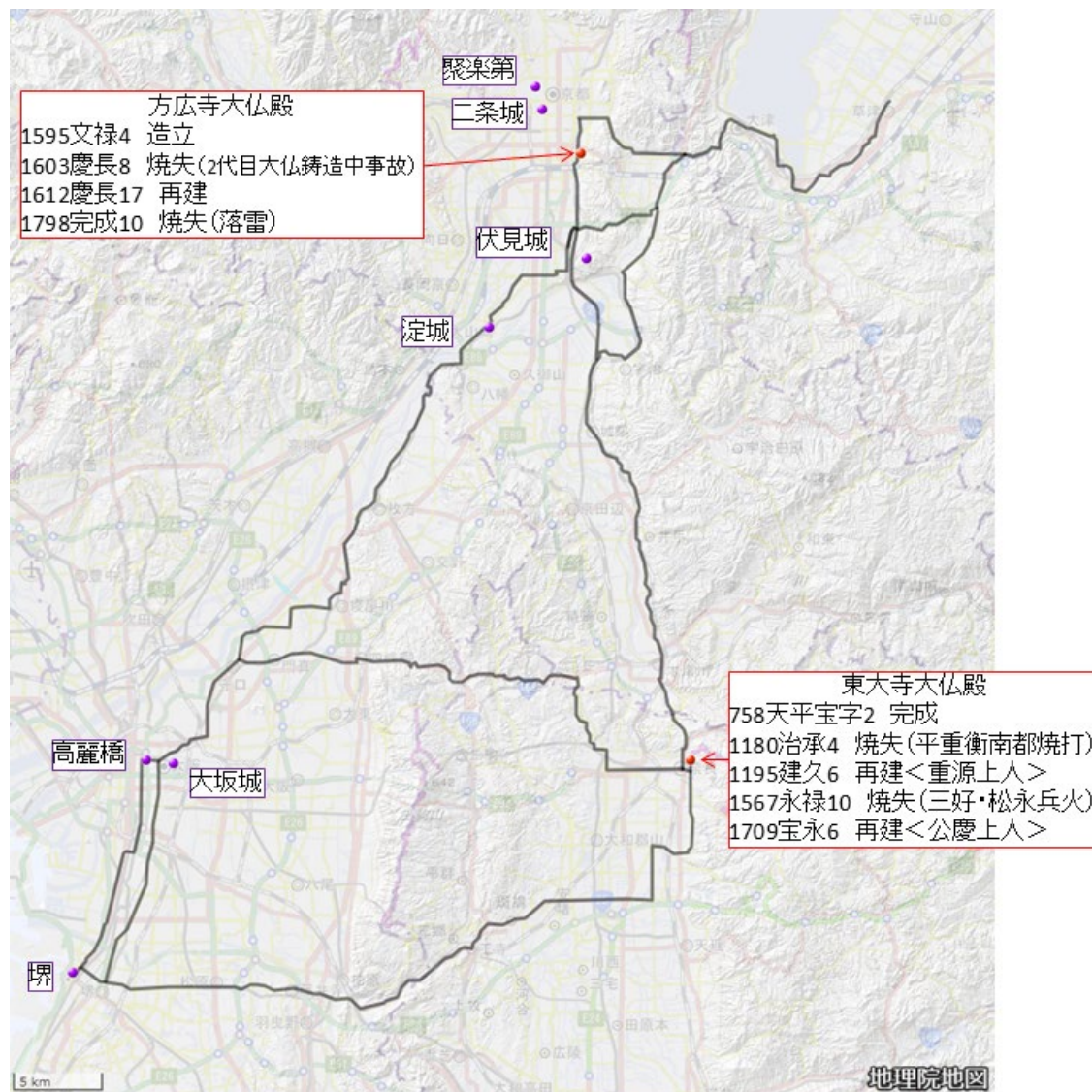


図 1.12-19 京都方広寺大仏殿と奈良東大寺大仏殿

2 代目東大寺大仏殿の焼失後に「1567 永禄 10 年・2 代目東大寺大仏殿焼失→1595 文禄 4 年・初代方広寺大仏殿造立→1603 慶長 8 年・方広寺初代大仏殿焼失→1612 慶長 17 年・2 代目方広寺大仏殿造立→1709 宝永 6 年・3 代目東大寺大仏殿造立」と年数がさほど空くことなく、大仏殿が日本に存在し続けていたことは、大仏殿造立の技法が継承される上で好事となった³⁶⁾。また単に技法が継承されるだけでなく、新たな技法の確立や建築意匠の改良もなされ、3 代目東大寺大仏殿の柱材について、寄木材(鉄輪で固定した集成材)となっているが、この技法は 2 代目方広寺大仏殿で確立されたものとされ、東

大寺大仏殿にも取り入れられたとされる³⁶⁾。豊臣秀吉による方広寺初代大仏殿造営時に、日本各地の柱材に適した巨木を多く伐採してしまったため、森林資源が枯渇したようであり、苦肉の策と言える³⁶⁾。

1709（宝永6）年から1798（寛政10）年までは、奈良（東大寺）と京都（方広寺）に、大仏・大仏殿が双立していた³⁶⁾。江戸期においては方広寺大仏の方が、規模（大仏の高さ、大仏殿の高さ・面積）で上回っていた³⁶⁾。これは先述のように豊臣秀吉が発願したもので、秀吉の造立した初代大仏、豊臣秀頼の造立した2代目大仏、江戸時代再建の3代目大仏と、新旧3代の大仏が知られるが、それらは文献記録（『愚子見記』『都名所図会』等）によれば、6丈3尺（約19メートル）とされ、再建され現存の東大寺大仏の高さ（14.7メートル）を上回り、大仏としては日本一の高さを誇っていた³⁶⁾。『東海道中膝栗毛』では弥次喜多が大仏を見物して威容に驚き「手のひらに畳が八枚敷ける」「鼻の穴から、傘をさした人が出入りできる」とその巨大さが描写される場面があるが、そこで描かれているのは、東大寺大仏ではなく、方広寺大仏である³⁶⁾。なお初版刊行の1802（享和2）年には、後述のように大仏・大仏殿は既に焼失している³⁶⁾。

江戸時代中期の国学者本居宣長（1730・享保15-1801・享和元）は、双方の大仏を実見しており、東大寺大仏・大仏殿について「京のよりはやや（大仏）殿はせまく、（大）仏もすこしちいさく見え給う」「堂（大仏殿）も京のよりはちいさければ、高くみえてかっこうよし[東大寺大仏殿は方広寺大仏殿よりも横幅（間口）が狭いので、視覚効果で高く見えて格好良いの意]」「所のさま(立地・周囲の景色)は、京の大仏よりもはるかに景地よき所也」という感想を、在京日記に残している³⁶⁾。一方、方広寺大仏については「此仏（大仏）のおほき（大き）なることは、今さらいふもさらなれど、いつ見奉りても、めおとろく（目驚く）ばかり也」と記している³⁶⁾。

方広寺の3代目大仏と2代目大仏殿は1798（寛政10）年まで存続していたが、落雷で焼失した³⁶⁾。

参考文献

- 1) 大阪市, 大阪市の歴史, 大阪市：大阪市の歴史－タイムトリップ 20,000 年(飛鳥・奈良時代以降) (…>大阪市の紹介>プロフィール、歴史、市政年表), 2025.6 閲覧
- 2) コトバンク 法華一揆, 法華一揆(ホッケイッキ)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 3) コトバンク 天文法華の乱, 天文法華の乱(テンブンホッケノラン)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 4) Wikipedia 証如, 証如 - Wikipedia, 2025.6 閲覧
- 5) Wikipedia 蓮淳, 蓮淳 - Wikipedia, 2025.6 閲覧
- 6) Wikipedia 顕如, 顕如 - Wikipedia, 2025.6 閲覧

- 7) Wikipedia 石山合戦, [石山合戦 - Wikipedia](#), 2025.6 閲覧
- 8) Wikipedia 大坂城, [大坂城 - Wikipedia](#), 2025.6 閲覧
- 9) 大阪市立図書館, [中世・近世の大坂 - 大阪市立図書館](#), 2025.6 閲覧
- 10) 公益財団法人 関西・大坂 21 世紀協会, [なにわ大坂をつくった 100 人 第 10 話 淀屋常安, ここまで知らなかった! なにわ大坂をつくった 100 人=足跡を訪ねて= | 関西・大坂 21 世紀協会](#), 2025.6 閲覧
- 11) コトバンク 淀屋橋, [淀屋橋\(ヨドヤバシ\)とは? 意味や使い方 - コトバンク](#), 2025.6 閲覧
- 12) 大阪市, [橋梁顕彰碑 永代橋, 大阪市: 永代橋 \(えいだいばし\) \(…>橋>橋梁顕彰碑\)](#), 2025.6 閲覧
- 13) 大阪市, [歴史の散歩道 上町台地北コース, 23 淀屋の屋敷跡, 大阪市: 23. 淀屋 \(よどや\) の屋敷跡 \(…>文化・スポーツ・生涯学習>生涯学習\)](#), 2025.6 閲覧
- 14) Wikipedia 菱垣廻船, [菱垣廻船 - Wikipedia](#), 2025.6 閲覧
- 15) コトバンク 菱垣廻船, [菱垣廻船\(ヒガキカイセン\)とは? 意味や使い方 - コトバンク](#), 2025.6 閲覧
- 16) Wikipedia 樽廻船, [樽廻船 - Wikipedia](#), 2025.6 閲覧
- 17) Wikipedia 西廻り海運, [西廻海運 - Wikipedia](#), 2025.6 閲覧
- 18) コトバンク 川村瑞賢, [河村瑞賢\(かわむらずいけん\)とは? 意味や使い方 - コトバンク](#), 2025.6 閲覧
- 19) コトバンク 堂島米市場, [堂島米市場\(どうじまこめいちば\)とは? 意味や使い方 - コトバンク](#), 2025.6 閲覧
- 20) Wikipedia 天満青物市場, [天満青物市場 - Wikipedia](#), 2025.6 閲覧
- 21) コトバンク 雑喉場, [雑喉場\(ザコバ\)とは? 意味や使い方 - コトバンク](#), 2025.6 閲覧
- 22) 大阪市立図書館, [市史編纂所, 大阪の歴史, 中世・近世の大坂, 中世・近世の大坂 - 大阪市立図書館](#), 2025.6 閲覧
- 23) コトバンク 北前船, [北前船\(キタマエブネ\)とは? 意味や使い方 - コトバンク](#), 2025.6 閲覧
- 24) Wikipedia 北前船, [北前船 - Wikipedia](#), 2025.6 閲覧
- 25) コトバンク 干鰯問屋, [干鰯問屋\(ほしかどんや\)とは? 意味や使い方 - コトバンク](#), 2025.6 閲覧
- 26) Wikipedia 干鰯, [干鰯 - Wikipedia](#), 2025.6 閲覧
- 27) Wikipedia 鯀粕, [鯀粕 - Wikipedia](#), 2025.6 閲覧
- 28) 大和川付替え 300 周年記念事業実行委員会, [大和川付替え 300 周年 | 大和川の付替え](#), 2025.6 閲覧

- 29) 柏原市 【コラム】大和川のつけかえ ほんとうの理由は？, 【コラム】大和川のつけかえ ほんとうの理由は？ | 大阪府柏原市, 2025.6 閲覧
- 30) 菊池利夫, 新田開発, 古今書院, 昭和 52 年 7 月
- 31) 倉地克直, 江戸の災害史 徳川日本の経験に学ぶ, 中公新書 2376, 2016.5
- 32) コトバンク 上米, 上米(ウワマイ)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 33) コトバンク 東大寺, 東大寺(トウダイジ)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.6 閲覧
- 34) 奈良女子大学大学院人間文化研究科 (博士前期課程) 国際社会文化学専攻, 文化史総合演習 成果報告, 東大寺の歴史, 2025.6 閲覧
- 35) 華嚴宗大本山東大寺 東大寺の歴史 江戸再興, 江戸再興 - 東大寺, 2025.6 閲覧
- 36) Wikipedia 東大寺, 東大寺 - Wikipedia, 2025.6 閲覧
- 37) Wikipedia 方広寺, 方広寺 - Wikipedia, 2025.6 閲覧

1. 13 明治以降の大阪

○概要

表 1.13-1 は、大阪の交通インフラを中心とした変遷について表にしたものである。明治以降は、1894（明治 27）日清戦争まで、1938（昭和 13）-1941（昭和 16）の電力国家管理開始・太平洋戦争開始まで、1950（昭和 25）年の新電力体制・1951（昭和 26）サンフランシスコ平和条約以降に区分できそうである。

1. 13. 1 開市・開港～1894（明治 27）日清戦争前

この時代のインフラ関係は、1867（慶応 3）年の川口運上所設置・1868（明治元）年の大阪港開港、1871（明治 4）年の造幣寮（1877（明治 10）年に造幣局に改称）開業、1870（明治 3）造兵廠の設置、1874（明治 7）年着手の淀川河心工事（河川舟運のための整備）、同じく 1874（明治 7）年開業の神戸－大阪間官営鉄道整備（1889（明治 22）年新橋－神戸間全通）、1882（明治 15）年の大坂紡績設立等の近代工場・産業の創業が挙げられる。

○開国、大阪の開市・開港

日本の開国は、アメリカのペリーによって行われた。アメリカの遣日特派大使兼中国・日本分遣艦隊司令官ペリーは、4 隻の軍艦を率いて 1853 年 7 月 8 日（嘉永 6 年 6 月 3 日）浦賀沖に侵入した¹⁾。黒船渡来の報は日本全国を震撼させたが、ペリーは大統領の国書を幕府に受理させて、いったん中国に引き揚げた¹⁾。翌 1854（嘉永 7／安政元）年 2 月（旧暦 1 月）7 隻の軍艦を率いて再度来航し、武力を背景に強硬に開国を迫り、ついに 3 月、日米和親条約（神奈川条約）が結ばれた¹⁾。この条約は、下田・箱館での欠乏品供給、遭難海員・渡来民の保護、最恵国待遇、領事駐在などを規定し、通商条項は含んでいなかった¹⁾。

この条約に基づいて 1856 年 8 月（安政 3 年 7 月）総領事として着任したハリスは、第二次アヘン戦争によるイギリス・フランスの中国侵略、中国の敗北を背景に、幕府と通商条約交渉を行い、1858 年 7 月（安政 5 年 6 月）日米修好通商条約が調印された¹⁾。この条約は、天皇の勅許を待つということでその調印をひきのばしていた幕府が、第 2 次アヘン戦争（アロー戦争）で中国（清朝）を屈服させたイギリス、フランスの大艦隊がそのまま日本に転進して新条約の締結をせまるという情報をハリスからうけて、勅許を待たずにあわてて調印にふみきったもの¹⁾である。ひきつづき幕府は同年中に、オランダ、ロシア、イギリス、フランスとも同様な修好通商条約の締結を余儀なくされた¹⁾。これらのいわゆる安政五ヶ国条約では、外交関係のみならず締結各国との自由な通商貿易も規定され、ここに日本の開国は最終的に確定したのである¹⁾。

これらの条約で日本は、まず首都（江戸）に公使を、開港場に領事を駐在させ、彼ら各国外交代表の職務上の国内旅行権を承認した¹⁾。また神奈川（横浜）、長崎、箱館、つ

表 1.13-1

道路整備・都市計画	梅田・中之島等	上町台地・大阪港	難波・堺・河内
5C 中葉-6C 初頭：難波堀江開削，茨田堤			4 世紀後半～5 世紀後半：百舌鳥・古市古墳群
613：大道(難波大道・竹内街道・横大路)整備 645：乙巳の変		613：大道（難波大道・竹内街道・横大路）整備 645-694：前期難波宮	593：四天王寺建立 613：大道（難波大道・竹内街道・横大路）整備
663：白村江の戦いで大敗			
667：高安城等山城築城，近江京遷都		645-694：前期難波宮	667：高安城築城
672：壬申の乱			
689 淨御原令・701 大宝律令・ 694：藤原京遷都・710：平城京遷都 723：三世一身法,730：比売嶋堀川・次田堀川 開削,直道,大輪田船息 741：国分寺・国分尼寺詔，東大寺総国分寺	744：長柄橋・堀江橋，御津	710-793：後期難波宮 741：国分寺・国分尼寺詔 744：難波宮を皇都と定む	724-734：行基溜池・池溝整備,730：直道,744 中河橋 741：国分寺・国分尼寺詔 752：大仏開眼供養 784：長岡京遷都・794：平安京遷都
784：長岡京遷都・794：平安京遷都	784：長岡京遷都・794：平安京遷都	784：長岡京遷都・794：平安京遷都	
1497：大坂御坊建立→寺内町形成(大坂誕生) 1532：山科本願寺焼失 1533：大坂御坊を石山本願寺に改称(本願寺移 転) 1580：石山本願寺焼失 1583：豊臣秀吉大坂城築城着手．東横堀川・西 横堀川・天満堀川等の掘削と城下町形成	1583：豊臣秀吉大坂城築城着手．東横堀川・西横堀川・ 天満堀川等の掘削と城下町形成	1497：大坂御坊建立→寺内町形成(大坂誕生) 1532：山科本願寺焼失 1533：大坂御坊を石山本願寺に改称(本願寺移転) 1580：石山本願寺焼失 1583：豊臣秀吉大坂城築城着手．東横堀川・西横 堀川・天満堀川等の掘削と城下町形成	室町時代廻船式目で堺湊が「三湊七港」の三湊の 1 つ 15 世紀：遣明船発着港となる 16 世紀：堺で環濠が発展(南蛮貿易で海外貿易発展、 鉄砲生産開始で富蓄積)
1615：大坂夏の陣で大坂城落城 1620-1629：江戸幕府大坂城再建．西堀川の西 側湿地に多数の堀川を掘削し町拡大． 17～19 世紀：淀川派川河口域で干拓・埋立に よる新田開発(隆盛期 1688-1696，1736-1776) 1705-：旧大和川，新開池等で新田開発	1615？-1697 淀屋店先米市場 -1619 常安請地，1624-1644 淀屋橋架橋 1620-1629：江戸幕府大坂城再建．西堀川の西側湿地に 多数の堀川を掘削し町拡大． 1672：河村瑞賢出羽直轄領の御城米の西廻海運による 江戸廻送成功 1684-1687：河村瑞賢安治川開削等 1697：淀屋米市が堂島に移転（堂島米市場） 1705：淀屋闕所処分 1730：徳川吉宗が堂島米市場を公認．	1615：大坂夏の陣で大坂城落城 1620-1629：江戸幕府大坂城再建．西堀川の西側湿 地に多数の堀川を掘削し町拡大． 17～19 世紀：淀川派川河口域で干拓・埋立による 新田開発(隆盛期 1688-1696，1736-1776)． 1704：大和川付替え	1615：大坂夏の陣で豊臣方による焼き討ち →幕府による復興・元和町割り(現在も残る環濠都市) 1704：大和川付替え竣工，旧大和川で新田開発
1869(M2) 東京－京都幹線，東京－横浜間，京 都－神戸間及び琵琶湖畔－敦賀の三支線，計 四路線の鉄道建設政府決定 1872(M5) 新橋－横浜鉄道開通，鉄道略則，鉄 道犯罪罰例	1867(慶応 3)川口運上所(大阪税関)設置 1868(明治元)大阪港開港，川口居留地競売 1869(明治 2)川口電信局開設 1871(明治 4)造幣寮(後造幣局)開業 1873(明治 6)心斎橋(鍊鉄弓形トラス橋) 1874(明治 7)大阪駅，東海道線神戸-大阪間開業．淀川 河身工事(航路の安定化)着手	1867(慶応 3)川口運上所(大阪税関)設置 1868(明治元)大阪港開港，川口居留地競売 1870(明治 3)兵部省に造兵司(後の造兵廠)設置	

1877(M10)西南戦争 1882(明治 15)大阪紡績会社(現・東洋紡)設立 1887(M20)私設鉄道条例 1889(M22)大日本帝国憲法 1890(M23)軌道条例	1877(明治 10)東海道線神戸-京都全通, 造幣寮を造幣局に改称 1880(明治 13)神戸-大津(現・浜大津)間全通 1881(明治 14)大阪鉄工所 1884(明治 17)長浜-金ヶ崎(敦賀)開業, 大阪商船 1885(明治 18)淀川水害(木橋流失) 1888(明治 21)天神橋・天満橋(鋼製トラス橋) 1889(明治 22)新橋-神戸全通(長岡-大津開業)	1882(明治 15)大阪紡績会社(現・東洋紡)設立	1885(明治 18)阪堺鉄道難波駅, 難波-大和川間開業 1888(明治 21)堺まで延伸. 1889(明治 22)天王寺駅, 関西線柏原-湊町間開業
1894(明治 27)日清戦争	1895(明治 28)下関条約		
1895(M28)大阪市水道給水開始. 京都電気軌道開業 1896(M29)旧河川法 1897(M30)第 1 次市域拡張 1899(M32)大阪市新設市街設計(日露戦争で実現せず) 1902(M35)市電創設計画(上記設計を実現. 市電収入を資金) 1904(M37)日露戦争・1905(M38)ポーツマス条約 (1908(M41)ー1912(M45/T 元)京都三大事業) 1913(T2)宇治川電気宇治 P から送電開始 1914(T3)第 1 次世界大戦 1919(T8)大阪市区改正設計(大阪市最初の都市計画) 1921(T10)第 1 次都市計画事業を 7 カ年計画で着手 1922(T11)大同電力大阪送電線供給開始 1923(T12)関東大震災 1924(T13)宇治川電気志津川 P 送電開始, 大同電力北陸送電幹線送電開始 1925(T14)日本電力大阪送電幹線送電開始. 第 2 次市域拡張 全国 1 位世界 6 位の人口に 1926(T15・S 元)ー1937(S12)御堂筋(地下鉄御堂筋線含)整備 1926(T15)十大放射線(道路)と阪神国道が知事施行で計画・事業化→1941(S16)整備完了 1926(T15)ー1934(S9)隅田川復興橋梁(長径間広幅員の永久橋技術向上)	1895(明治 28)鴨川運河伏見インクライン運転開始, 城東線(天王寺-梅田(大阪))全通, 大阪市水道給水開始. 1897(明治 30)淀川改良工事(含淀川放水路), 大阪港第 1 次修築工事着手 1898(明治 31)西成線 大阪ー安治川口開業 1903(明治 36)市電第 1 期(花園橋-築港棧橋)開業 1905(明治 38)阪神(三ノ宮-出入橋)開業 1908(明治 41)市電第 2 期(南北線, 東西線)開業 1909(明治 42)心斎橋(2 連石造アーチ橋) 1910(明治 43)阪急宝塚本線(梅田-宝塚), 京阪本線(天満橋-五条)開業. 大江橋(鋼板桁橋) 1911(明治 44)淀屋橋(鋼板桁橋) 1913(大正 2)宇治川電気宇治 P から送電開始. 本町橋(2 ヒンジアーチ橋) 1920(大正 9)阪急神戸線開業 1921(大正 10)大阪市役所 3 代目庁舎竣工(中之島). 東海道線逢坂山 T・東山 T 開業 1922(大正 11)大同電力大阪送電線供給開始 1924(大正 13)宇治川電気志津川 P から送電開始, 大同電力北陸送電幹線送電開始 1925(大正 14)日本電力大阪送電幹線送電開始 1928(昭和 3)阪急京都線西院まで延伸(京都乗入れ) 1929(昭和 4)三栖閘門完成	1895(明治 28)大阪市水道給水開始 1897(明治 30)-1928(昭和 3)大阪港第 1 次修築工事 1898(明治 31)西成線 大阪ー安治川口開業 1900(明治 33)関西鉄道大阪鉄道合併湊町駅乗入れ 1907(明治 40)関西鉄道国有化 1908(明治 41)市電第 2 期(南北線, 東西線)開業 1913(大正 2)宇治川電気宇治 P から送電開始 1914(大正 3)近鉄奈良線(上本町-奈良)開業 1916(大正 5)市電第 3 期全通 1920(大正 9)第 1 次都市計画事業(24 路線)認可 1922(大正 11)大同電力大阪送電線供給開始 1924(大正 13)宇治川電気志津川 P から送電開始, 大同電力北陸送電幹線送電開始 1925(大正 14)日本電力大阪送電幹線送電開始 1926(大正 15)御堂筋着手 1928(昭和 3)-1949(昭和 24)大阪港第 2 次修築工事	1895(明治 28)城東線(天王寺-梅田(大阪))全通 1897(明治 30)淀川改良工事, 大阪港第 1 次修築工事着手 1898(明治 31)関西鉄道名古屋ー網島間(名阪間)全通 1903(明治 36)第 5 回内国勸業博覧会 1907(明治 40)南海本線(難波-浜寺)複線化・電車運転開始 1913(大正 2)宇治川電気宇治 P から送電開始 1922(大正 11)大同電力大阪送電線供給開始 1923(大正 12)近鉄南大阪線阿倍野橋(天王寺)乗入れ 1924(大正 13)宇治川電気志津川 P から送電開始, 大同電力北陸送電幹線送電開始 1925(大正 14)日本電力大阪送電幹線送電開始

	1930(昭和 5)桜宮橋(鋼アーチ橋) 1933(昭和 8)城東線電車運転開始 1934(昭和 9)天神橋(2 ヒンジアーチ橋)。丹那トンネル開業 1935(昭和 10)天満橋(ゲルバー式鋼桁橋)。大江橋・淀屋橋(鉄筋コンクリートアーチ橋)	1933(昭和 8)地下鉄御堂筋線開業、城東線電車運転開始 1934(昭和 9)室戸台風、—1946(昭和 21)大阪港復興修築工事	1933(昭和 8)城東線電車運転開始
1938(S13)電力管理法	1938(S13)日本発送電株式会社法	1941(S16)・1942(S17)発電設備出資命令	1941(S16)配電統制令・1942(S17)9 配電会社設立
1942(S17)第 1 次都市計画事業ほぼ完成(40 路線、橋梁の新改築 157、既設街路の舗装等)		1934(昭和 9)―1946(昭和 21)室戸台風、大阪港復興修築工事	
1945(S20)終戦	1951(S26)サンフランシスコ平和条約		
1946(S21)大阪復興都市計画事業着手→街路、土地区画整理、公園や港湾、交通(市営地下鉄網拡充と国鉄環状線)の基本計画を次々に策定するものの街路整備は財政難で進まず		1945～(昭和 20 年代): 戦災復興土地区画整理事業、港湾地帯区画整理事業(高潮防災) 1950(昭和 25)9 月ジェーン台風被害→「総合高潮対策事業」に急遽着手、延長 120 キロメートルに及ぶ防潮堤が S34(1959)3 月に完成	
1950(S25)電気事業再編成令	1950(S25)公益事業令		
1949(S24)丸山 P(木曾川)工事再開命令,1950(S25)(洪水調節加え)建設命令,OCN(海外技術顧問団)との調整後 1951(S26)再開工事着工,1954(S29)運転開始 1956(S31)黒四 P(黒部川)着工,1961(S36)発電開始,1963(S38)完成 1960(S35)大阪府十大放射三環状線計画→1960(S35)国民所得倍増計画発表(道路整備重点化)と 1961(S36)第 3 次道路事業 5 カ年計画で道路整備に拍車 1962(S37)阪神高速道路公団発足 1970(S45)大阪万博 1987(S62)7 放射 3 環状軸	1955(S30)天ヶ瀬ダム(宇治川)着工,1964(S39)天ヶ瀬 P 運転開始・ダム竣工 1960(昭和 35)市北部地域を中心に 10 時間にわたる交通マヒ。これを機に市電廃止論議が高まる。大阪府十大放射三環状線計画→1960(S35)国民所得倍増計画発表(道路整備重点化)と 1961(S36)第 3 次道路事業 5 カ年計画で道路整備に拍車 1961(昭和 36)大阪環状線全通、新大阪駅周辺土地区画整理事業 1964(昭和 39)新大阪駅、東海道新幹線開業 1970(昭和 45)大阪万博 1971(昭和 46)淀川大堰着手,1984(昭和 59)竣工 1972(昭和 47)琵琶湖総合開発特別措置法公布,1973(昭和 48)琵琶湖開発事業着手,1992(平成 4)琵琶湖開発総合管理開始	1960(昭和 35)市北部地域を中心に 10 時間にわたる交通マヒ。これを機に市電廃止論議が高まる。大阪府十大放射三環状線計画→1960(S35)国民所得倍増計画発表(道路整備重点化)と 1961(S36)第 3 次道路事業 5 カ年計画で道路整備に拍車 1961(昭和 36)大阪環状線全通 1962(昭和 37)阪神高速公団発足 1968(昭和 43)阪神高速大阪環状線全通	1960(昭和 35)市北部地域を中心に 10 時間にわたる交通マヒ。これを機に市電廃止論議が高まる。大阪府十大放射三環状線計画→1960(S35)国民所得倍増計画発表(道路整備重点化)と 1961(S36)第 3 次道路事業 5 カ年計画で道路整備に拍車 1961(昭和 36)大阪環状線全通

いで新潟、兵庫（神戸）を開港場とし、江戸と大坂を開市場として官吏の干渉なき自由貿易を行うことも認めた¹⁾。各開港場には居留地を設定してそこに外国人が居留すること、開市場に逗留することにも同意した¹⁾。そのうえ、締結各国に領事裁判権を与え、輸出入の関税率の決定は彼我双方の協定によることとされ、各国に対して片務的に最恵国待遇を与えることが規定された¹⁾。とくに、これら不平等の三本柱とされる領事裁判権、協定関税制、片務的最恵国条款によって、来日した外国人はすべて事実上、本来は外交代表のみが享受しうる治外法権に等しい特権を獲得し、日本はいわゆる関税自主権をも奪われ、各国はすべてあらたな条約上の利益には自動的に均霑しうようになるなど、政治上、経済上の対外従属的地位は明確となった¹⁾。しかも条約には、外国貨幣の国内自由流通、内外貨幣の同種同量交換、地金銀・通貨の無税輸出入と自由鑄造など、日本の幣制自主権をも拘束する不平等で変則的な規定も盛りこまれていた¹⁾。

欧米列強はさらに、これら条約上の特権を利用して各開港場の居留地の治安と行政を掌握しつつあたかも列国共同の領土のように自治管理し、この日本のなかの異国のような居留地を幕府に迫って拡大させ、さらには攘夷運動からの自衛を口実として、そこに軍事基地さえも建設した¹⁾。また外国商人たちは、当時の東アジアの国際通貨たるメキシコ・ドル（洋銀）を持ちこんでは国際的には相対的に安かった国内の金貨（小判）と交換して自由に国外に持ちだし、ぼろもうけをした¹⁾。さらに、当初は一律従価 5%とされた輸出関税率、5~35%とされた輸入関税率も、1866 年（慶応 2）、江戸協約（改税約書）を強要して輸出入関税とも一律従価 5%規準の従量税という低税率に改定させ、欧米資本主義の市場拡大の一環として日本市場をさらに深く開放させていった¹⁾。

こうして展開しはじめた対外貿易では、横浜がすぐにその中心となった¹⁾。かくて横浜は通商港として急膨張しはじめ、外商たちが殺到してきたが、しかしその中心はすでに東インド貿易や中国貿易の経験をつんで世界の市況に通じた近代商社、植民地銀行群や大海運会社であった¹⁾。いずれもイギリス系のジャーディン・マセソン会社、東洋銀行、香港上海銀行、P&O 汽船会社などは、その代表的なものである¹⁾。そのため、海運や貿易金融をふくむ商権はすべて欧米列強が独占し、日本人貿易商といえど、外商に国産品を売りこむ売込商、外商が持参した諸商品を買いとる引取商というのがせいぜいで、日本人の手になる直輸出・直輸入などは皆無に近かった¹⁾。このような半植民地的な貿易形態と対応して、貿易構造もまた従属的であった¹⁾。すなわち日本は、手工業的な半製品たる生糸や、茶、水産物などの第 1 次産品を輸出する一方、まず大衆的に需要される綿製品、さらに毛織物、砂糖また武器・艦船などの資本制大工業生産物の輸入が急増し、それらの輸入全体が輸出総額を上まわるようになっていった¹⁾。メキシコ・ドルの流入・金貨流出にともなう幣制の混乱と重なったこの綿製品や砂糖の大量流入のなかで、国内各地の広範な綿業や糖業など商業的農業・農村手工業は打撃をうけて衰退し、物価急騰と経済の混乱、各地民衆の生活破綻にともなう社会不安もまた未曾有となった¹⁾。

開国とともに、これに反発する尊王攘夷運動も、当初はおもに封建的な理念にもとづいた下級武士層のそれが中心であった¹⁾。しかし、まずは条約の違勅調印と反対派弾圧をあえて行った大老井伊直弼や対外屈従の幕閣たちへの襲撃、外国の外交官や外国人への襲撃を主としていた尊王攘夷運動も、かかる国民的な苦難を背景として徐々に反幕・倒幕運動に展開しはじめた¹⁾。他方、開港および通商開始以降の生活混乱とむすびついたこれら政争激化にともなう負担増が、中・下層農民や都市民を中核とした〈世直し〉の百姓一揆や都市打毀を急激に拡大、激化させていった¹⁾。こうして日本の開国は同時に、二百数十年来の江戸幕府の倒壊と明治維新による国家統一という歴史的な大変革の、直接の発端ともなったのである¹⁾。

日本は、第1次アヘン戦争と南京条約（1842）、第2次アヘン戦争（アロー戦争）と天津条約（1858）による中国の開国からやや遅れて開国した¹⁾。しかも、イギリスへの敗戦の結果として賠償金を支払い、香港、九竜を割譲し、領事裁判権、協定関税制、片務的最恵国条款のほか外国人の内地通商権やキリスト教布教権なども外国に握られた中国に比して、日本の対外従属的地位はやや緩和されてはいた¹⁾。とはいえ、1850年代末までの中国と日本の開国は、世界史的にみれば、カリフォルニア（1848）、オーストラリア（1851）における大金鉱脈の発見と両地方への植民ラッシュ（ゴールドラッシュ）とともに、それまではいわば処女地だった太平洋地域が、近代産業資本を主役とする国際通商網のなかに最終的にくみこまれる画期となった¹⁾。すなわち中国と日本の開国は、あたかもこの50年代にこそ進行しつつあった資本主義的世界市場・世界体制の確立の最後の一環としての意義をもち、東アジア諸国もまたそこに半強制的、従属的に編入されることによって苦難にみちた近代史を迎える、歴史的な画期を象徴するものであった¹⁾。

当初の日米修好通商条約等の安政条約では、大阪は、開市はするが開港場ではなかった。これには次のような経緯があった。1858（安政5）年の日米修好通商条約の交渉過程で米国全権のタウンゼント・ハリスは大坂の「開港」を要求したが、幕府全権の岩瀬忠震は経済の中心が大坂で確定してしまい江戸の衰退につながると反対し、大坂は「開市」に留まることとなった²⁾。1868年1月1日（慶応3年12月7日）に大坂の開市と神戸港の開港が実施され、鳥羽・伏見の戦いののち大久保利通が「大坂遷都論」を展開し、1868年4月15日（慶応4年3月23日）から5月28日（閏4月7日）まで明治天皇の大坂行幸（大坂親征）が実施された²⁾。

明治天皇大坂行幸中の1868年5月3日（慶応4年4月11日）に江戸開城が成ると、大久保に対して前島密が「江戸遷都論」を展開し、「大坂遷都論」は立ち消えとなった²⁾。そして、江戸遷都の方針が固まると、経済の大坂偏重や皇都警戒といった大坂を開市に留めておく理由がなくなり、大坂の「開市」が「開港」に改められることとなった²⁾。1868年7月16日（慶応4年5月27日）に各国公使へ大阪開港の方針が伝達され、

1868年8月27日（慶応4年7月10日）に五代友厚が英・米・仏・蘭・普の領事等と協議して「大坂開港規則」の承認を得た²⁾。

1868年9月1日（慶応4年7月15日）に大阪港が開港し、川口外国人居留地の西隣、安治川左岸に位置する富島が開港場となった²⁾。しかし、安治川を河口から約6km遡上する富島まで大型船は入港できず、大坂の外国人貿易商らは続々と神戸へ転出²⁾した。そして、1871（明治4）年を最後に外国船は大阪港に入港しなくなった²⁾。これが大阪港修築につながっていく。

話を開港前に戻す。輸入関税率の定率税率への改定には、開港・開市延期が絡んでいた。1858（安政5）年、江戸幕府は開国を迫る欧米列強と相次いで修好通商条約を結ぶ（安政五カ国条約）³⁾。その中で、横浜・長崎・箱館の3港が開かれることが決められたが、それ以外にも期限付きで両都（江戸・大坂）両港（新潟・兵庫）の開市開港が定められていた³⁾。これらの時期は、新潟を1860年1月、江戸を1862年1月、大坂・兵庫を1863年1月と決められていた³⁾。

しかし、欧米との金銀交換率の差に端を発する激しいインフレーション、攘夷運動などによって、国内問題が山積する³⁾。さらに、朝廷は大坂開市と兵庫開港に猛反発したため、幕府は期日通りの開市開港は無理と見て、諸外国に開市開港延期を申し出る³⁾。アメリカ公使タウンゼント・ハリスは、幕閣とも親しく実情を理解していたこともあり、延期やむを得ずとしたが、英国公使ラザフォード・オールコックは断固反対であった³⁾。このため、幕府は欧州本国政府との直接交渉のため、文久遣欧使節を欧州に派遣することとする³⁾。

しかし、文久元年7月9日と翌10日（1861年8月14日、15日）、オールコックは老中安藤信正、若年寄酒井忠毗に通訳を加えただけの秘密会談を持ち、攘夷運動の深刻さとこれに対する幕府の力の限界を知る³⁾。この会談の後、オールコックは開港開市延期の必要性を理解し、本国政府にその旨を伝えるとともに、自身の休暇帰国を遣欧使節の日程と合わせ、直接本国政府に開港開市延期を訴えることとする³⁾。使節団は最初フランスへ赴くが交渉は不調に終わり（この時点で英国の方針変更は伝えられていなかった）、イギリスへと向かう³⁾。使節団は英外相ラッセルと談判したが、オールコックの支援もあり、文久2年5月9日（1862年6月6日）、開市開港を1863年1月1日より5年遅らせることを定めたロンドン覚書を締結する³⁾。以後はイギリスの取り成しもあり、プロイセン・ロシア・オランダ・ポルトガルとも同様に締結し、同年8月9日（10月2日）には仏外相とパリ覚書を締結する³⁾。

これら協定は、延期を認める代わりに、関税の低減化や生糸などの輸出自由化を日本に約束させ、また大名との直の取引や日本商人の身分限定の解除を認めさせた³⁾。そして、これらが守られない場合は、延期の取り消しが定められた³⁾。アメリカとは公使ロバート・プルインと交渉が続けられ、文久3年12月20日（1864年1月28日）に江戸で延期を認めるロンドン覚書と同様の日米約定が結ばれた³⁾。

大坂と大阪¹⁰⁾

―昔は<大坂>、今は<大阪>¹⁰⁾。いつどのような理由で、坂の字が阪の字に変わったのか―¹⁰⁾。よく耳にする疑問であり、一時は論議のまとなった問題でもある¹⁰⁾。

周知のように、これまでオオサカの初見として、中世以前の文書・記録類（金石文を含む）から提示されたもの、たとえば、小松寺奉加帳・積川神社石灯銘・蓮如消息などに見られるものは、すべて大坂¹⁰⁾。

資料の豊富な近世でも、大坂が圧倒的に多く使用されているようだが、箕面市で発見された安永8年（1779）在銘の道標や、住吉大社・百舌鳥八幡宮などの石灯籠、および文書・記録・書籍・地図などの文献類で、大阪と記されているものも、決して少なくはない¹⁰⁾。従って、現在知られている資料によるかぎり、坂・阪が混用され始めたのは、近世以降ということになる¹⁰⁾。

その理由について、よく引用されるのは、幕末の狂言作者浜松歌国が、「摂陽落穂集」で述べた次の一文¹⁰⁾。

―或人のいわく、大坂と書くに、坂の字を用ゆる事、心得あるべし、坂の字は土扁に反るといふ。土にかへるとあるゆへ忌みきらひ、ㇿコサト扁に書くべきとあり―¹⁰⁾。

要するに分解すれば、「土に反る」（消滅する）となる坂の字を嫌い、同字で縁起のよいコサト扁の阪を書くべきというのである¹⁰⁾。阜（こざと。他の字の扁とするときはㇿ）はもともと「大陸」とか「土山」の義。「大きくなる」「盛んにする」「厚くする」「伸びる」などの意味もある¹⁰⁾。

念のため、諸橋徹次「漢和大辞典」を引いてみると、坂・阪は同字とされ、「字形、阪は説文の形。坂は後出の字」とある¹⁰⁾。説文というのは漢の許慎撰「説文解字」の略¹⁰⁾。いうまでもなく、当時の文字につき、その成立と字形・意義および音声を明らかにした基本的な古典である¹⁰⁾。浜松歌国は、「或人いわく・・・」と他に仮託しているが、博覧強記で知られる彼は、こうしたことを十分承知したうえで、「ㇿ扁に書くべき・・・」と記したに違いない¹⁰⁾。

したがって、音さえ同じであれば、かなり無造作に異字を使用していた江戸時代に、同字の坂と阪を併用することは不思議ではないし、いつ、どのような理由による変化か？などは、改めて問題にするほどのことでもあるまい¹⁰⁾。

もっとも府名については、明治元年5月2日大阪府設置の当初から、大阪と「阪」の字であったことが明らかとなった（伊吹順隆「大坂と大阪の研究」）とされ、明治10年代には、地名を含めて大阪が一般的になった¹⁰⁾。

Q：「大阪」は、昔は「大坂」と書いていたそうですが、いつから、なぜ変わったのですか？¹¹⁾

A：

私は高校を卒業するまで、阪神間のある町で育ちましたが、子どものころ、『大阪』は江戸時代には『大坂』と書いてたんやって」という話を聞いたことがあります¹¹⁾。そして、『土』がつくのは縁起が悪いから変えたんや」という話も聞いたことがあります¹¹⁾。

この話がホンマだとすると、明治になって、「大坂」から「大阪」に変化したということになりますが、どうも、ことはそう単純ではないようです¹¹⁾。

「大坂」という地名が文献に初めて登場するのは、戦国時代、15世紀の終わりごろです¹¹⁾。それ以前は「小坂」「尾坂」などと書かれていたようです¹¹⁾。ちなみにこのころは、「おざか」「おおざか」のように、「さか」を濁音で発音していたそうです。

一方、「坂」の異体字である「阪」を用いた「大阪」が初登場するのは、正確にはいつのことかわかりませんが、江戸時代の後半に書かれたものにとときどき、存在しているようです¹¹⁾。つまり、江戸時代の後半は、「大阪」と「大坂」が併用されていたのです¹¹⁾。ただし、比率からいえば「大坂」の方が圧倒的に多かったようです¹¹⁾。

それが変化するのは明治維新のときです¹¹⁾。明治元（1968）年、といっても正確にいうと元号が明治に変わる前の慶応4年の5月2日、「大阪府」が初めて設置されますが、そのときの公印には「阪」の字が使われていたといえます¹¹⁾。しかし、その後も「大阪」と「大坂」が併

用される時期は続き、最終的に「大阪」に統一されるのは、明治 20 年ごろだとされています¹¹⁾。

山川出版社の『大阪府の歴史』によれば、幕末のころに活躍した狂言作者、浜松歌国の『摂陽落穂集』の中に、「坂」の字は土に反るという意味になるので「阪」と書くべきだ、という意味の一節があるそうです¹¹⁾。「大阪」誕生の理由としてこれを信じてよいのかどうかはわかりませんが、最初に申し上げた「縁起が悪いから」というのはこのことでしょう¹¹⁾。

以上にご説明したとおり、「大坂」から「大阪」への変化は、ある日一斉に起こったのではなく、おそらく 200 年くらいの時間をかけて、ゆっくりと起こったのだと思われます¹¹⁾。その背景には、縁起の問題も含めて、きっといろいろな事情があったことでしょう¹¹⁾。

1868 年 1 月 1 日（慶応 3 年 12 月 7 日）大阪開市の日、天保山に停泊していた各国の軍艦から 21 発の祝砲が発せられ、祝賀ムードを盛り上げた⁴⁾。しかし、その 2 日後には朝廷が王政復古の大号令を発して新政府樹立を宣言、鳥羽・伏見の戦いが勃発して戊辰戦争に発展した⁴⁾。さらに 1868（明治元）年から 1869（明治 2）年にかけて神戸事件、堺事件、英国パークス公使襲撃事件と、相ついで外国人殺傷事件が発生し、開市当初の大阪は騒擾状態で貿易どころではなかった⁴⁾。

神戸事件

鳥羽・伏見の戦いから日も過ぎない慶応 4 年 1 月 11 日（1868 年 2 月 4 日）、神戸（現・神戸市）三宮神社前において備前藩（現・岡山県）兵が隊列を横切ったフランス人水兵らを負傷させたうえ、居留地（現・旧居留地）予定地を検分中の欧米諸国公使らに水平射撃を加えた。明治政府初的外交問題となった⁵⁾。この事件により、一時、外国軍が神戸中心部を占拠するに至るなどの動きにまで発展したが、その際に問題を起こした隊の責任者であった滝善三郎が切腹する事で一応の解決を見た⁵⁾。

堺事件

慶応 4 年 2 月 15 日（1868 年 3 月 8 日）、フランス海軍のコルベット艦デュプレクスは堺港に入り、士官以下数十人の水兵が上陸し、市内を徘徊した⁵⁾。土佐藩軍艦府は警備の藩兵に取締を命じ、帰艦を諭示させたが言葉が通じず、混雑もあって水兵側は土佐の隊旗を倒伏して逃亡しようとした⁵⁾。このため、土佐藩側はこれを咄嗟に発砲し、フランス人 11 人を射殺または海に落として溺死させた⁵⁾。土佐藩側ではフランス人が迷惑不遜行為に及んだための処置であるとした⁵⁾。遺体は 16 日に引き渡しを終えた⁵⁾。

フランス公使レオン・ロッシュは、同じく 2 月 19 日に在阪各国公使と話し合い、下手人斬刑・陳謝・賠償などの 5 箇条からなる抗議書を日本側に提示した⁵⁾。明治政府は事態を憂慮し、イギリス公使ハリー・パークスに調停を求めたが失敗、同月 22 日に明治政府はやむなく賠償金 15 万ドルの支払いと暴行者の処刑など全ての主張を飲んだ⁵⁾。

同月 23 日に大阪裁判所の宣告により堺の妙国寺で土佐藩士 20 人の刑の執行が行われた⁵⁾。立ち会っていたフランス軍艦長デュプレクス＝トゥールは、（フランス人の被害者数と同じ）11 人が切腹したところで外国局判事五代才助に中止を要請し、結果として 9 人が助命された⁵⁾。処刑を免れた橋詰愛平ら 9 人は、土佐の渡川（四万十川）以西の入田へ配流され庄屋宇賀佑之進預けとなり、その後明治新政府の恩赦により帰郷した⁵⁾。自刃した土佐藩士は妙国寺内に厚く葬られ、遭難したフランス人の碑も神戸市立外国人墓地に建てられた⁵⁾。

パークス襲撃事件

慶応4年2月30日(1868年3月23日)、イギリス公使ハリー・パークスの一行は明治天皇に謁見するため宿舎の知恩院を出て御所に向かう途上、2人の男に襲撃された⁵⁾。すぐさま護衛の中井弘蔵と後藤象二郎が反撃し、犯人の一人朱雀操を斬殺した。もう一人の犯人である三枝菊も他の警護兵に重傷を負わされ、逃走しようとした所を捕縛され、襲撃は失敗に終わった⁵⁾。三枝は同年3月4日に斬首された⁵⁾。

護衛として活躍した後藤象二郎にはビクトリア女王からサーベルが進呈された。現在では静嘉堂文庫に所蔵されている⁵⁾。

1868(明治元)年1月17日、三職七科の制が布かれ、総裁に有栖川宮熾仁親王、副総裁に三条実美および岩倉具視、内国事務掛に大久保利通が就いた⁴⁾。大久保は、新政府の大本を方向づける重大な方策を秘めていた⁴⁾。すなわち、これまでの旧弊を一新し、外国と交際を開き、富国強兵の実をあげて陸海軍を振興するには、大阪へ遷都すべきと考えたのである⁴⁾。岩倉具視の賛同を得て、1868(明治元)年1月23日の議定・参与会議に「大阪遷都」の建白書を提出した⁴⁾。建白書は「遷都之地は浪華に如くべからず。暫く行在を被定、治乱の体を一途に居へ、大に為す事有べし。外国交際の道、富国強兵の術、攻守大権を取り海陸軍を起す等の事に於て地形適当なるべし」と述べるが、大阪遷都の理由には、戊辰戦争での主導権確保、政府財政を確立するために大阪の経済力を求めたという説もある⁴⁾。

あわせて天皇の大阪行幸案が浮上した⁴⁾。「徳川慶喜への親征を宣布したあと、海軍等の観閲のために天皇が大阪に行幸して、しばらくこの地にとどまり、天下の耳目を一新する」ことが目的である⁴⁾。また、新政府に協力した大阪の商人らへの配慮もあった⁴⁾。1868(明治元)年1月28日に大阪への親征(行幸)が決定した⁴⁾。再三の延期の後、天皇は3月21日に京都を出発して23日に大阪に到着、西本願寺掛所(本願寺津村別院、通称北御堂)を行在所とした⁴⁾。26日に天保山沖でわが国初の観艦式を挙行し、4月6日には大阪城で諸藩兵士の操練を親閲した⁴⁾。大阪親征は1カ月半の長きにわたった⁴⁾。「大阪遷都」の建白書は公家や諸大名に大きな衝撃を与えた⁴⁾。とりわけ公家たちは猛烈に反対した⁴⁾。

一方、大阪遷都論に対し、のちに明治の郵便事業の基礎を確立した前島密が大久保に「江戸遷都論」を主張した⁴⁾。「目下の最大事である関東・東北の平定のためには江戸遷都がいちばんであり、蝦夷地を開拓すれば江戸は日本の中央に位置する。もし江戸が帝都にならなければ、東海のさびれはてた町になるであろう。江戸への遷都が実現すれば、100万の市民を安堵させ、天皇の治世の偉大さを広く内外に示すことになる」⁴⁾。

前島の建言は大久保の心を動かした⁴⁾。加えて、江藤新平、木戸孝允、岡谷繁実ら、江戸開城後の情勢にかんがみ「江戸遷都」を主張する者が次々にあらわれ、江戸遷都という大きな流れへ収束されていった⁴⁾。なお、天皇の大阪行幸を記念して、時代が下った1929(昭和4)年、大阪市青年連合会が天保山公園内に「明治天皇観艦之所碑」を建立している⁴⁾。

江戸遷都への流れが主軸となり実質的に遷都したものの、明治政府は東京遷都を公式には表明していない⁴⁾。宮中の公家や京都の町衆の強い反対を避けるため、政府は公式な位置づけをわざとしないまま東京に「都を定め」てなし崩し的に東京遷都を実施した⁴⁾。明治維新の正史・文部省維新史料編纂事務局編『維新史第5巻』（1941（昭和16）年）では「遷都」ではなく、たんに「都を定める」ことを意味する「奠都」が使われている⁴⁾。東京奠都は段階を踏んで1869（明治2）年3月28日に実施された⁴⁾。①1868（明治元）年7月17日に江戸を東京と称すると発した詔書のなかで「江戸ハ東國第一ノ大鎮」であり「自今江戸ヲ称シテ東京トセン」とした、②同年9月に天皇東京行幸（～12月）、③翌1869（明治2）年3月28日に再度の東京行幸、その際に政府は「東京城西ノ丸へ御駐簾、依テ、皇城ト称ス」と発令し、新政府の中枢機関であった太政官も東京城内へ移した⁴⁾。明治に改元したのは9月8日（西暦では10月23日）である⁴⁾。改元の詔書に「改慶応四年為明治元年」（慶応4年を改めて明治元年と為す）とあるように、慶応4年（1868）1月1日に遡って適用することになった⁴⁾。

大阪が1868年1月1日（慶応3年12月7日）に開市すると、諸外国からの強い開港要求に抗しきれず、政府は大阪開港に踏みきらざるをえなくなった⁴⁾。横浜の輸入品の3分の1以上は大阪に輸送されている実態に加え、江戸に遷都すれば皇都警戒が不要になるという事情もあった⁴⁾。王政復古後、開国和親へと方針転換した朝廷から東久世通禧らが各国公使と折衝、5月頃には開市を改め開港と決定した⁴⁾。

1868（明治元）年1月17日、政府は外交担当機関として「外国事務科」を設け、事務総督と事務掛を置いた⁴⁾。「外国事務科」は再三にわたって改称され、2月3日「外国事務局」に、閏4月21日※「外国官」となった⁴⁾。同月27日には外国事務局判事の五代才助（友厚）と陸奥陽之助（宗光）が外交と税関業務を司る政府機関である「川口運上所」の事務をとることを命ぜられた⁴⁾。1868（明治元）年5月1日、開港を控えて「川口運上所」が開設された⁴⁾。4日に五代は外国官権判事、陸奥は会計官権判事に任ぜられた⁴⁾。「川口運上所」は7月15日の大阪開港と同時に「大阪運上所」に改称された⁴⁾。この運上所は一時、府知事の監督下におかれたが、1872（明治5）年6月には大阪府の管理から離れ、大蔵省の直轄となった⁴⁾。「大阪運上所」という名称も、翌1873（明治6）年1月4日から「大阪税関」に改称された⁴⁾。政府は1868（明治元）年5月27日、各国公使あてに東久世中将名で大阪開港の方針を伝達し、7月10日、米・プロイセン・英・普・蘭と五代との間で「大阪開港規則」を締結した⁴⁾。7月14日には安治川・木津川・伝法川に密貿易等を取り締る「番所」も設置した⁴⁾。1868（明治元）年7月15日（西暦では9月1日）大阪開港の日を迎えた⁴⁾。しかし、当時の大阪港は安治川河口から約4キロメートル上流の「川口町」を中心とする河川港で、川幅は狭く、たえず河川上流から運ばれてくる泥土が堆積したので、大型の外国船は天保山沖で舳に積替えるなどの不便を強いられた⁴⁾。

開港に備えた大阪港の環境整備として安治川の浚渫、土砂堆積を防ぐための導流堤の整備、波止場の整備のほか、外国商人のための居留地の競売等が実施された⁴⁾。

1868（明治元）年10月28日、新政府は「治河使」を設置し、河川改修や天保山新港の開削等にあたらせた⁴⁾。全権委任された「治河掛」には後藤象二郎（1868（明治元）年5月12日府事管理、7月12日第2代府知事に就任）を兼務させた⁴⁾。同年12月、陸奥宗光が後任として引き継いだ。が、「治河使」の制度は1869（明治2）年7月27日で廃止された⁴⁾。代わって水利事業は民部省土木司があたることになり、天保山に出先機関として土木司出張所を設けて河川改修を行なうことになった⁴⁾。

日本に居留地ができたのは1858（安政5）年の修好通商条約に基づくもので、一般の外国人は、開港地に設けられた居留地にのみ住むことができたことによる⁴⁾。居留地は開市の東京を含めて神奈川（横浜）・長崎・箱館（函館）・神戸・大阪・新潟の7カ所に設けられることになり、神奈川と長崎が開港した翌年1860（明治7）年から順次整備された⁴⁾。1867（慶応3）年4月13日、英・米・仏・蘭と「兵庫港並大阪に於て外国人居留地を定むる取極」12カ条を締結し、正式に大阪の居留地を川口に定めた⁴⁾。

川口居留地は比較的小規模で、当初は26区画7,747坪（2万5,560m²）であった⁴⁾。翌1868（明治元）年7月29日、川口居留地の永代借地権の競売が行なわれた⁴⁾。外国商人の大阪への関心は高く、26区画はすべて即日完売となった⁴⁾。内訳は英13区画、普4、米4、仏2、ベルギー・蘭2、白1であった⁴⁾。価格は神戸に比べ1.34倍（大阪:100坪あたり平均354両、神戸:265両）で、外国商人の大阪での貿易への期待度の高さを示している⁴⁾。この事務を取り仕切ったのは「大阪運上所」の五代であった⁴⁾。居留地の南側には、外国人が日本人と雑居することを認められた雑居地を隣接して設けた⁴⁾。

当時の川口居留地は、造幣局とともに文明開化と近代化の象徴であった⁴⁾。街路は広く、歩道と馬車道に分離され、ユーカリ、ゴムの街路樹や石油ランプの街灯が配置された⁴⁾。建物は西洋風で、まちの景観は異国情緒にあふれていた⁴⁾。ホテル、クリーニング、散髪屋、牛肉店、パン、牛乳、バター、缶詰、メリヤス、洋服等の言葉はすべて川口居留地が発祥地である⁴⁾。また、1869（明治2）年8月20日に運上所内に川口電信局を開設、大阪川口～神戸大手町間が電信で結ばれた⁴⁾。わが国最初の電信局は英技師ブラントンの指導により設計・施工された⁴⁾。翌1870（明治3）年には川口～大阪造幣寮間が電信線で結ばれている⁴⁾。川口居留地は当初こそ順調なすべり出しであったが、次第に大阪在住外国人は神戸へ転居するようになった⁴⁾。1874（明治7）年に99人だった外国人は、1876（明治9）年には44人に激減した⁴⁾。

その要因は、①蔵屋敷の廃止等、維新改革による大阪経済の衰退、②安治川上流の河川港であるため大型の外国船の利用に不便で、外国貿易が不振であったこと、③大阪府（五代）による外国商人への厳しい取り締り、④1874（明治7）年の阪神間の鉄道開業等である⁴⁾。

1886（明治19）年6月には10区画2,667坪（8,800m²）が第2次競売として追加されたが、応札したのは主に宗教関係者だった⁴⁾。川口居留地への交通の便を図るため、1873（明治6）年8月、日本ではじめての旋回式可動橋「安治川橋」（全長82m、幅5m）が架けられた⁴⁾。中央の2径間は西欧から輸入した鉄橋で、この部分を人力で旋回させることによりマストの高い船でも通航することができた⁴⁾。人々はこの旋回する様子を見て「磁石橋」と呼び、大阪名物のひとつとなった⁴⁾。その後、1885（明治18）年の大洪水の際、上流から流れてきた木橋がこの橋で堰き止められ市内に洪水の恐れが生じたため、やむなく工兵隊により爆破撤去された⁴⁾。

図 1.13.1-1 川口運上所（後の大阪税関）、川口居留地

1869（明治2）年の調査によれば、大阪への入港船は和船が5,000隻/月、内600～1,000石船は52隻にすぎず、外国船は年間89隻であった⁴⁾。安治川は淀川の末流のひとつで、上流からの土砂による埋没は避けられなかった⁴⁾。常に維持浚渫が必要とされ、1870（明治3）年の安治川浚渫工事でははじめて蘭製バケットラダー浚渫船2隻を投入した⁴⁾。これは機械施工による土木工事の先駆である⁴⁾。河口・川筋の浚渫費の財源は、この年に政府より西四辻公業権知事（現在の副知事）に認められた、安治川・木津川・尻無川・伝法川の4川入津船舶の徴収権「帆別船税」をあてた⁴⁾。大阪港の改良工事では、安治川左岸の河口から400間（727m）の導流堤を設け、流速を速めて土砂の堆積を防ぐとともに、航路を明示する湊標を設置した⁴⁾。

また、新田に小型船の運航のための運河を開削した⁴⁾。1871（明治4）年には大阪運上所の前に川口波止場（長さ46間（83m）、幅9m）を整備し、1872（明治5）年8月29日、英技師ブランTONの指導により天保山灯台が完成した⁴⁾。しかし、これらの整備は抜本的な改良工事ではなく、外国貿易に従事する西洋型帆船や蒸汽船等の大型船には到底対応できるものではなかった⁴⁾。

維新後の諸改革と外国貿易の不振は、次第に大阪経済を衰退させた⁴⁾。1868（明治元）年5月9日、「丁銀・豆板銀之儀、以後通用停止」が布告され、数百年間上方で通用してきた銀目経済が廃止された⁴⁾。これは金銀相場の変動から利ザヤを稼いでいた大阪の両替屋に決定的な打撃を与えた⁴⁾。銀手形を現金に替えようと取付騒ぎが起こり、約40軒もの両替屋が倒産した⁴⁾。

1871（明治4）年7月14日に「廃藩置県」とともに断行された蔵屋敷廃止も大きな打撃だった⁴⁾。商品集散地という大阪の経済的優位性は失われ、外国商人が神戸に移る引き金のひとつとなった⁴⁾。1872（明治5）年4月14日に「株仲間解散」、1873（明治6）年3月には諸大名の莫大な借金を無効にするとした藩債処分が布告され、大阪の豪商の多くが倒産し、大阪経済の疲弊に追い打ちをかけた⁴⁾。さらに、輸入超過（低関税）と金銀交換率の違いによる金貨の海外流出や悪貨改鋳が2～7倍ものインフレを招いた⁴⁾。一揆や打ち毀しが続出し、世情不安定な状態が続いた⁴⁾。

○近代工業の発展

明治中期にはいと、大阪では紡績業を中心に近代工業が飛躍的に発展した⁴⁾。また、明治初期に官営の大阪造幣局と大阪砲兵工廠が近代工業化の先駆けとなり、明治中葉からの大阪の本格的な工業化につながった⁴⁾。

明治初期の大阪は専ら手工業が中心だった⁴⁾。有名だったのは伝法の清酒と線香、柴島晒や十三の吉行燈・唐向焼等であった⁴⁾。1879（明治12）年頃、住吉郡安立町（現、住之江区）で庖刀・縫針・箕・水車等が、西成郡ではマッチ・ランプ・西洋靴・コップ・製織機械等多種の製品が生産されていた⁴⁾。

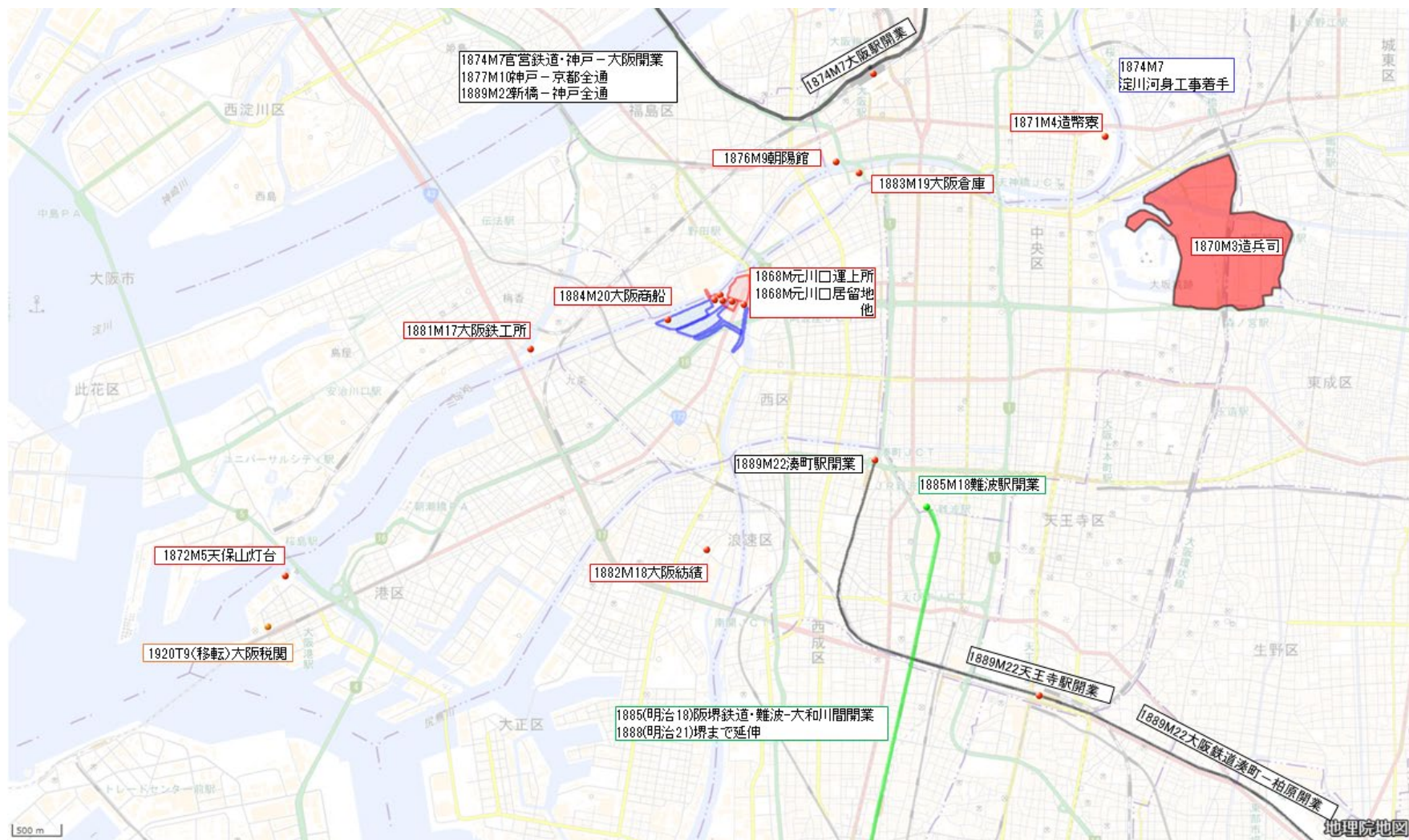


図 1.13.1-2 明治初期・前期 (1868M 元～1894M28) の官営施設, 民間工場の創業, 鉄道整備等

大阪における近代工業化の黎明期、基礎となったのは殖産興業政策の一環として設立された官営工場である⁴⁾。東京に比べ大阪に官営工場は少なかったが、それでも川崎造幣寮（1877（明治10）年造幣局と改称）と造兵廠（1879（明治12）年大阪砲兵工廠と改称）が開設された⁴⁾。また、渋谷紡績（1879（明治12））や五代友厚による製藍所（朝陽館 1876（明治9））等が政府の資金援助を受けて設立された⁴⁾。

明治新政府は国際社会に通用する画一純正な貨幣改鑄を決議し、洋式機械の採用を決めた⁴⁾。造幣寮をどの都市につくるかは議論があり、在日外交団諸国から江戸を要望する声があった⁴⁾。しかし、王政復古に貢献した大阪財界に対する配慮、東京がまだ帝都でなく治安が確立していない、大阪遷都論の形勢が強かったなどの理由で大阪に決定した、といわれている⁴⁾。

江戸が東京と改称され「都」と位置づけられたのは1868（明治元）年の7月17日である⁴⁾。しかし、すでに政府は長崎外商グラバーを介して廃局した香港造幣局の機械・建築材料一式を6万ドルで購入し、翌8月には大阪港に荷揚げするなど、大阪での造幣寮の着工準備は着々と進められており、途中で建設地を変更することは不可能であった⁴⁾。そのため、同年11月造幣寮は予定どおり大阪で建設に着手した⁴⁾。設計・監督はグラバーの紹介で政府直雇いによる英建築技師ウォートルスであった⁴⁾。敷地は大川に面した約56,000坪（約185,000m²）を充てた⁴⁾。1869（明治2）年末、工事中に火災を起こしたものの、1871（明治4）年2月15日に開業した⁴⁾。

当時、造幣寮は西洋式科学技術のメッカだった⁴⁾。あらゆる科学技術がここで研究され、理化学・工学ともにわが国の最高水準にあった⁴⁾。反射炉による銅の溶解や硫酸・炭酸ソーダ・炭酸ガス・建築耐火煉瓦・コークス等も自家製造したほか、コークス製造過程で生じる石炭ガスを利用して寮の内外にガス灯を設置した⁴⁾。のちに民間に払い下げられた硫酸製造所や瓦斯製造所等は大阪の化学工業発達の礎になるなど、造幣寮は関連諸産業の先駆者だった⁴⁾。

造兵廠は造幣寮と並んで大規模の官営施設である⁴⁾。1870（明治3）年2月、兵部省に造兵司（のちの造兵廠）が置かれ、翌3月に大阪城中三ノ丸米倉の跡地が造兵司の立地場所に定められた⁴⁾。造兵司が大阪に設置されたのは兵部大輔大村益次郎の強い信念からであった⁴⁾。国防上多くの海岸砲が必要で、兵器の国内自給体制の確立が急務だった⁴⁾。旧幕府が経営していた長崎製鉄所から機械と工人を移し、火砲・車台・弾丸・火具等を製造した⁴⁾。また、大阪紡績株式会社の紡績用歯車等、民需品の受注生産にも応じた⁴⁾。

1877（明治10）年2月、西南戦争が勃発すると造兵司のおかれた大阪は兵站基地とされ、軍需ブームに沸いた⁴⁾。藤田伝三郎、松本重太郎らは軍靴等の軍需品を新政府に納めることで巨富を得、財界に確固たる地位を築いた⁴⁾。大阪に近代産業（紡績、マッチ、メリヤス、石鹼、電気、ガス、セメント等）が勃興したのは明治中葉からである⁴⁾。新田開発による広い農地が工業用地に転用され、商業都市から商工業都市へと変貌を遂げた

4). 新しい実業家も相ついであらわれた 4). 「不相変」を家訓とし元来保守的で新しい事業になかなか手を染めなかった旧来の大阪商人に対し、新産業の担い手はむしろ薩長等の士族や大阪以外の出身者が中心であった 4). 五代友厚は旧薩摩藩士、土居通夫は旧宇和島藩士、藤田伝三郎は長州、広瀬幸平は近江生まれである 4).

五代友厚は 1869 (明治 2) 年 7 月に横浜転勤を命ぜられた 4). このとき外国事務局一同が五代の大阪留任を政府に嘆願したのを機に下野した 4). 五代ははじめに金銀分析所をつくった 4). 諸藩の貨幣を買い集めて政府公定純度の地金に吹きかえて造幣寮に納め、莫大な利益を得た 4). その利益を元手に紡績業、鉱山業、製藍業 (朝陽館) へ手を広げた 4). 1876 (明治 11) 年 6 月に鴻池善右衛門、広瀬幸平、熊谷辰太郎 (第一国立銀行) らの協力のもとに、「大阪株式取引所」 (現、大阪取引所) を創立、同年 9 月には中野梧一、藤田伝三郎、広瀬幸平らの協力を得て、「大阪商法会議所」 (現、大阪商工会議所) を創立し、初代会頭に選ばれた 4). 1880 (明治 13) 年に渋沢栄一らとともに「東京馬車鉄道」を、1881 (明治 14) 年には藤田伝三郎、中野梧一と「関西貿易社」、「大阪製銅株式会社」を、さらに 1884 (明治 17) 年には「阪堺鉄道株式会社」と「神戸栈橋株式会社」を設立するのに寄与した 4). また、1880 (明治 13) 年 11 月には大阪市立大学の前身「大阪商業講習所」を創立、実業家を養成した 4). 数々の偉大な業績を残した五代は「東の渋沢栄一、西の五代友厚」と称され、明治期大阪経済界を代表する企業家・指導者として広く知られた 4). 1885 (明治 18) 年 9 月、49 歳の若さで他界した 4).

第一国立銀行頭取の渋沢栄一は外国綿糸が大量に輸入されていることに驚き、紡績業を興すことを思い立った 4). 1882 (明治 15) 年、藤田伝三郎らとともに西成郡三軒家村 (現、大正区) に「大阪紡績会社」を創立して翌年開業した 4). 資本金 25 万円、1 万 500 錘のミュール紡織機を備え、動力に蒸気機関を用いた 4). この会社は 1914 (大正 3) 年、三重紡績株式会社と合併して東洋紡績株式会社となった 4). 大阪紡績会社を先陣に、相ついで紡績会社が設立された 4). 大阪の紡績業は飛躍的な発展を遂げ、1891 (明治 24) 年には大阪の紡績業の全国シェアは 50% 近くまで伸長し、「東洋のマンチェスター」と呼ばれるにいたった 4). 一方で大阪の紡績会社は乱立気味で、国内消費だけでは供給過剰となり、おもに清など海外への輸出を増やす必要に迫られた 4). また、綿糸には太糸と細糸があり、太糸を紡ぐには日本綿や中国綿でよいが、高級な細糸を紡ぐにはインド綿や米国綿を輸入しなければならない 4). 紡績業界は輸出競争力を上げるため綿花輸入税、綿糸輸出税の廃止を強く国に要請、1894 (明治 27) 年 5 月「綿糸輸出関税免除法」が公布され、ますます紡績業が盛んになった 4).

重工業部門における大阪初の民間工場は株式会社大阪鉄工所 (現、日立造船株式会社) であった 4). 1881 (明治 14) 年、西成郡六軒屋新田松ヶ鼻 (現、此花区) 3,000 坪の敷地に工場を建設、従業員約 200 人を擁した 4). 1881 (明治 14) 年に大阪市内に 17 カ所を数えた民間工場は、1887 (明治 20) 年には 95 カ所に増加した 4). 業種は綿糸紡績・製紙・印刷・セメント・硝子・硫酸・造船・鉄鋼等多種に及んだ 4).

海運会社の創設も相ついだ⁴⁾。瀬戸内海は海上交通が盛んで、西南戦争以降ますます活況を呈したが、多くは中小船主であるため過当競争が絶えなかった⁴⁾。競争から共同へ転じるために設立されたのが「有限会社大阪商船」である⁴⁾。住友家総理人である広瀬幸平が幹旋して1884（明治17）年5月1日、瀬戸内海の船主55人が93隻の船を現物出資し、広瀬が初代頭取に就任した⁴⁾。あわせて系列の荷役会社として、船内荷役と荷捌き業者33人が「富島組」を創立し、船内荷役業者（ステベドア）の先駆となった⁴⁾。この組織は1954（昭和29）年9月に商船港運株式会社に継承されている⁴⁾。

大阪商船は1890（明治23）年7月に大阪～釜山線、1893（明治26）年に大阪～仁川線を開設し、その後も台湾航路、揚子江航路（上海～漢口、漢口～宜昌線）等へと次々に航路を開いた⁴⁾。しかし、同社の運営は「元来利害関係を異にせる船主の結合によりて設立されたものなる故、開業当初、重役対株主の紛擾は絶えず勃発」し、順風満帆ではなかった⁴⁾。

一方、土佐で海運業を興す決意をした岩崎弥太郎は1870（明治3）年、東京～大阪～高知間の貨物輸送会社として「九十九商会」（のちの三菱商会）を設立した⁴⁾。のちには外国航路にも乗り出し、独占状態にあった欧米の海運会社との熾烈な競争を経て、ついに1875（明治8）年日本～上海定期航路を制した⁴⁾。その後三菱商会は国有会社の「日本国郵便蒸気船会社」と合併し「郵便汽船三菱会社」を設立した⁴⁾。1885（明治18）年10月1日「郵便汽船三菱会社」が競争相手の共同運輸会社と合併して誕生したのが「日本郵船株式会社」である⁴⁾。同社は、英・豪・伊の3社による「ボンベイ・日本海運同盟」が支配する日本～インド間航路に食い込んだ⁴⁾。2年間に及ぶ激しい競争を制したもので、急増するインドからの綿花輸入に対応した⁴⁾。同様に欧州航路でも船隊拡充を進め、1902（明治35）年に欧州極東往航同盟への正式加入を果たした⁴⁾。

大阪の倉庫会社の嚆矢といわれる「大阪倉庫株式会社」が創設されたのもこのころである⁴⁾。1883（明治16）年5月10日に鴻池善次郎（1887（明治20）年に第11代善右衛門を襲名）が北区中之島で創設、のちに三井家に売却された⁴⁾。

○鉄道

大阪地域の鉄道に関しては、1874（明治7）年に神戸～大阪間の官営鉄道と大阪駅が開業した。1869（明治2）年11月、東京と京都を結ぶ幹線と、東京・横浜間、京都・神戸間及び琵琶湖畔から敦賀までの三支線、計四路線の鉄道を建設するという政府決定がなされた⁶⁾。これが、我が国における鉄道建設計画の最初である⁶⁾。新政府は、政治制度の全国的統一、軍事力の強化及び近代諸産業の育成等いわゆる富国強兵、殖産興業政策を推進するため、その媒介となる近代的輸送機構の確立を急務とし、この意味で鉄道は陸運における重要な輸送手段としての役割を担わされたのであったが、その建設に当たっては資金の調達及び技術の導入等解決すべき問題が山積していた⁶⁾。このため、イギリスに資金及び資材の調達並びに技術者の雇用等を一任することで鉄道建設に着手

せざるを得ない状態であったが、計画の主体性はあくまで日本政府の手にとどめていたことは特に注目される⁶⁾。この敷設工事は、沿線住民の反対や、当時の陸上交通の主力であった馬子及び車曳きの妨害並びに郡部の抵抗等、幾多の困難に遭いながらも、イギリスの鉄道開業に遅れること47年、アメリカの鉄道に遅れること42年後の1872（明治5）年9月に完成し、同月12日、我が国最初の鉄道が新橋－横浜間に開通した⁶⁾。この開通に合わせて、運送条件及び鉄道敷地内の秩序保持のための規則等鉄道営業に関する基本法規として、鉄道略則（1872（明治5）年2月公布）と鉄道犯罪罰例（同年5月公布）が制定された⁶⁾。しかし、その後、西南戦争等の国内の混乱による財政上の問題から次の京都・神戸間の開通（1877（明治10）年2月）をもって鉄道建設は停滞し、政府決定から20年後の1899（明治22）年7月、東海道線（新橋－神戸）の全線開通により、ようやく予定線の全部が完成するに至った⁶⁾。

この間、我が国最初の私設鉄道で上野－青森間の鉄道敷設を目的とする日本鉄道会社が1881（明治14）年に設立された。当時、政府は、維新以来の国事多端から極度の財政ひっ迫状態に陥り、鉄道建設資金に事欠くありさまで、民間資本による鉄道建設に積極的となっていたところ、たまたま、家禄に代わった秩禄公債をより有利な投資に転換しようと望んでいた旧大名華族等を中心に日本鉄道会社創立の計画がたてられた⁶⁾。そこで、政府は、進んでこの計画を支持し、土地の収用、工事の代行及び一定の利益配当の保証等につき、極めて手厚い保護と援助を与えることを約して、この会社を設立させた⁶⁾。もっとも、これらの保護や援助の代償として、日本鉄道会社は、官吏や軍人に対する運賃半額割引、非常事変に際しての政府の自由使用、50年経過後の政府の買上権の留保等の義務を負わされた⁶⁾。

建設は、はかどり1883（明治16）年7月には上野・熊谷間の工事が完成し、営業が開始されたが、翌年度の決算において、この区間の営業益金が建設費の1割以上に上ることが報告され、鉄道投資の有利性が認識されたことに伴い、その後の建設工事は順調に進み、1891（明治24）年9月には、上野－青森間の全通をみるに至った⁶⁾。

この日本鉄道会社の順調な発展に刺激されて、明治20年代（1887～1896年）には私設鉄道ブームが訪れ、1892（明治25）年までには、全国各地に50社近い私設鉄道が発足した⁶⁾。政府は、幹線に当たる山陽、九州及び北海道炭礦の各社に対し補助金を交付して、その育成に努めた⁶⁾。そして、1890（明治23）年度には、官設鉄道の延長キロ886kmに対し、私設鉄道の延長キロは1,366kmにも達し、私設鉄道は、官設鉄道の延長キロを超えるまでに成長した⁶⁾。

また、都市交通機関として公共道路上に軌道を敷設する軌道業のはじまりとして、1882（明治15）年6月に新橋－日本橋間に東京馬車鉄道が開業した⁶⁾。その後、1890（明治23）年以降人車軌道が加わり、1895（明治28）年には、電気動力を用いた軌道として京都電気軌道が開業した⁶⁾。蒸気鉄道の場合は、イギリスでの実用化から約半世紀たって、ようやく我が国に導入されたのに対し、この電気軌道の場合は欧米とほとんど

ど同時に日本に採用されたのであった⁶⁾。軌道業は、日露戦争後の電気事業の進歩につれて著しい発展をみるに至り、明治末（1911 年）には、電気 41、蒸気 6、ガソリン 1、馬力 41、人力 13、計 102 事業者が営業を行うこととなった⁶⁾。

この間、このような私設鉄軌道の隆盛に合わせて我が国最初の私設鉄道規制法として、一般の鉄道に適用される私設鉄道条例（1887（明治 20）年 5 月公布）及び馬車鉄道等の軌道に適用される軌道条例（1890（明治 23）年 8 月公布）が制定された⁶⁾。

このような鉄道の発展は、旅客貨物の大量、迅速かつ安価な輸送を可能とすることによって従前の原始的な交通事情を一変させ、日本経済近代化の基礎を築いた⁶⁾。特に地租負担や新商品経済の侵入に耐えられないで土地を離れた農民や没落士族階級の移動を可能とし、反面で近代産業が必要とする労働者の雇用を容易とした点は、この期の鉄道の役割として重要なものであった⁶⁾。

一方、鉄道は、経済発展の根幹であるから、その敷設は、経済の好不況に左右されることなく国自らが計画的にしかも責任をもって推進すべとの観点から 1892（明治 25）年 6 月に鉄道敷設法が公布された⁶⁾。同法の主要な内容は、「政府ハ帝国ニ必要ナル鉄道ヲ完成スル為漸次予定線ノ線路ヲ調査シ及敷設ス」という目的に立って、①国民経済上又は軍事上必要な幹線として 33 路線を建設予定線とすること。②敷設の財源として 6,000 万円を限度に漸次公債を募集すること。③工事の着工順序等は鉄道会議の諮詢を要すること、3 点であった⁶⁾。この鉄道敷設法の公布により、鉄道建設の具体的計画及びその建設主体が明確となり、以後、鉄道事業は著しい発展を遂げることとなり、1893（明治 26）年度には官私合わせて約 3,219km であった鉄道路線は、1906（明治 39）年度には 8,047km に達した⁶⁾。この間、創設期の鉄道略則、鉄道犯罪罰例等に代わって、1900（明治 33）年 3 月には、鉄道営業全般について規定する基本的な法律である鉄道営業法が公布され、運賃制度の面でも客貨の誘致と増収を目的として、1899（明治 32）年に遠距離通減制が採用されることとなり、鉄道法令・制度の整備が図られた⁶⁾。

明治前期の大阪地域の私鉄としては、1885（明治 18）年に阪堺鉄道（現南海鉄道）の難波駅、難波一大和川間が開業した。阪堺鉄道は、南海電気鉄道の前身となる鉄道事業者⁷⁾であり、現在の南海本線難波駅-堺駅間を開業させた⁷⁾。日本鉄道と東京馬車鉄道に次ぎ、日本で 3 番目の民営鉄道事業者（私鉄）であるということにて特筆される⁷⁾。日本鉄道は政府の介入が強い半官半民会社、東京馬車鉄道は名前の通り市街交通としての馬車鉄道を運営していた会社であったことから、文献によっては阪堺鉄道を（純民間資本による）日本最初の私鉄としているものも見られる⁷⁾。

関西における商業都市として栄えた大阪と堺の間を結ぶ鉄道計画は明治初期から考えられていた⁷⁾。それが具体化することになったのは、両都市における有力者や、明治初期の財界人である藤田伝三郎・松本重太郎・田中市兵衛・外山脩造などが集まった 1882（明治 15）年頃のことである⁷⁾。同年 5 月に大阪堺鉄道として大阪府に出願し工部省へ

進達された⁷⁾。しかし翌年2月に敷設区間が大阪府内に留まること、普通の鉄道と異なる理由により大阪府にて詮議することとして返戻されてしまった⁷⁾。

そこで松本は豆を使った調査により、街道を通る通行人や荷車の量から採算が取れると判断し再度1884（明治17）年2月「大阪堺間鉄道布設願」を提出し、6月16日に会社設立（大阪堺間鉄道）が許可され、官有地の無償貸渡しと民有地の取得については大阪府に委託すること、また所有地の税は免除することが認められた⁷⁾。また同年11月22日に社名を阪堺鉄道に改めた⁷⁾。

この前年である1883（明治16）年、1880（明治13）年に開業した釜石鉱山鉄道が製鉄所の不振によりわずか3年で廃線に追い込まれていた⁷⁾。藤田はこの資材払い下げを受け、敷設費用を落とそうと画策し、会社設立とほぼ同時期に政府から認可を受けた⁷⁾。そして線路や2両の蒸気機関車を大阪まで運び込み、敷設にかかることになった⁷⁾。

1885（明治18）年12月27日開業式を挙行し、同年12月29日、難波駅を起点にし、天下茶屋、住吉を経て大和川北岸（大和川駅）に至る区間の営業を開始した⁷⁾。大和川橋脚を架ける工事には時間・費用を要すると見られたため、このような暫定開業となったといわれている⁷⁾。その後、1887（明治20）年5月に堺市街へ入るための延伸工事を開始し、10月には洪水によって中断を余儀なくされるが、1888（明治21）年3月に竣工した⁷⁾。そして同年5月15日に堺の吾妻橋駅まで延伸運転が開始され、大和川仮駅は廃止された⁷⁾。

阪堺鉄道の営業成績は概ね良好で、輸送量が増えたことから1892（明治25）年12月29日には難波-住吉間を複線化した⁷⁾。

阪堺鉄道の成績が好調である中、同社の首脳陣である松本らは次なる目標として、堺から和歌山に至る路線の敷設を目論み、紀泉鉄道として出願を行った⁷⁾。このとき、競合する紀阪鉄道の出願も出されていたが、調整によって両者は合体することになり、南陽鉄道となった⁷⁾。その後、南海道に因んで出願事業者名を南海鉄道と改称し、認可後の1895（明治28）年8月25日に会社を設立した⁷⁾。

それに先立ち、1889（明治22）年には阪堺と紀泉の間で阪和間直通のための協議が行われ、阪堺鉄道は軌間を838mmから1067mmに改めると共に、将来的に両者が合併することも決められた⁷⁾。

阪堺鉄道は難波-住吉間の改軌工事に着手し、住吉-堺間の改軌と堺以南の建設は南海鉄道が行うことになって、1897（明治30）年12月15日に改軌を完成させた⁷⁾。それに先立ち、南海鉄道では堺から佐野を経て尾崎までの区間が開業しており、この時より難波-尾崎間の直通運転が開始された⁷⁾。そして1898（明治31）年10月1日、和歌山への延伸に先立って阪堺鉄道は南海鉄道に鉄道事業を譲渡する形で統合された⁷⁾。南海鉄道はその後、1944（昭和19）年に関西急行鉄道との合併で近畿日本鉄道となるものの、1947（昭和22）年に高野山電気鉄道が改称した南海電気鉄道に旧：南海鉄道の路線を譲渡する形で分社化が行われ、現在に至っている⁷⁾。

阪堺鉄道に続いて 1889（明治 22）年に開業したのは大阪鉄道（初代）による湊町－天王寺－柏原間（現 JR 関西本線）である。初代の大阪鉄道は、1888（明治 21）年から 1900（明治 33）年まで存在した日本の鉄道事業者（私鉄）⁸⁾である。

現在の JR 西日本の 4 つの路線の各一部区間、関西本線（大和路線）の JR 難波（当時は湊町）-奈良間、大阪環状線の天王寺-玉造-大阪間、和歌山線の王寺-高田間、桜井線の高田-桜井間を建設・運営していた⁸⁾。

1900（明治 33）年に関西鉄道に合併され、湊町-奈良間は同鉄道の名阪間の本線の一部となった⁸⁾。関西鉄道は、1888（明治 21）年、官設鉄道の経路から外れた東海道沿いの滋賀、三重県下の都市を東海道線に結ぶ目的で、四日市で設立された⁹⁾私鉄会社である。柏原で接続していた 2 代目大阪鉄道は当時、河南鉄道と称していた⁸⁾。直接の資本関係などはない⁸⁾。

大阪鉄道は、大阪から奈良・伊勢・和歌山に至る路線を計画したが、関西鉄道との調整の結果、湊町-奈良間を本線として建設をはじめた⁸⁾。免許申請にあたって条件づけられた官設鉄道大阪駅に接続する路線は、当初は湊町から延長し市街を縦断する経路（現在の Osaka Metro 四つ橋線とほぼ同じルート）を検討した⁸⁾。しかし結果として天王寺から玉造経由の、後に城東線、現在の大阪環状線の東半分にあたる路線を建設、1895（明治 28）年全通した⁸⁾。1900（明治 33）年、株主に関西鉄道と共通の者が多かったためもあり、合併に至った⁸⁾。

関西鉄道は、1895（明治 28）年、当初の目標であった名古屋駅と草津駅を結ぶ鉄道が完成した後は大阪進出を目指して、大阪の複数の鉄道会社と合併交渉を開始した⁹⁾。その後、路線を西へ奈良まで延長し、片町－四条畷を開業していた浪速鉄道および四条畷から木津方面の路線免許を持つ（未開業の）城河鉄道を合併して現在の片町線経由で名阪間を開通、1898（明治 31）年に大阪片町にターミナルを入手した⁹⁾。しかし、敷地の拡張が困難なため網島（廃止）に起点を移設した⁹⁾。さらに大阪鉄道（初代）を合併し、湊町（現：JR 難波駅）にターミナルを再度移転させた⁹⁾。これで JR 難波駅から天王寺駅、奈良駅を経由する現在の関西本線の路線が完成した⁹⁾。

参考文献

- 1) コトバンク 開国, 開国(カイコク)とは？ 意味や使い方 - コトバンク, 2025.7 閲覧
- 2) Wikipedia 大阪港, 大阪港 - Wikipedia, 2025.7 閲覧
- 3) Wikipedia , 両都両港開市開港延期問題 - Wikipedia, 2025.7 閲覧
- 4) 大阪港開港 150 年記念誌等刊行委員会, 大阪港 150 年史 ―物流そして都市の交流拠点―, 大阪港湾局発行, 企画編集株式会社アニマトゥール弘報企画, 令和 3 年 7 月

- 5) Wikipedia 幕末の外国人襲撃・殺害事件, 幕末の外国人襲撃・殺害事件 - Wikipedia, 2025.7 閲覧
- 6) 国土交通省, 日本鉄道史, 鉄道：鉄道ヒストリー - 国土交通省, 2025.7 閲覧
- 7) Wikipedia 阪堺鉄道, 阪堺鉄道 - Wikipedia, 2025.7 閲覧
- 8) Wikipedia 大阪鉄道 (初代), 大阪鉄道 (初代) - Wikipedia, 2025.7 閲覧
- 9) Wikipedia 関西鉄道, 関西鉄道 - Wikipedia, 2025.7 閲覧
- 10) コラム みおつくし 大坂と大阪, 大阪の歴史, 第 6 号, p56, 大阪市史編纂所, 1982.3
- 11) 大修館書店 漢字文化資料館, 漢字 Q&A Q0267, 「大阪」は昔は「大坂」と書いていたそうですが、いつから、なぜ変わったのですか？ | 漢字文化資料館, 2025.7 閲覧